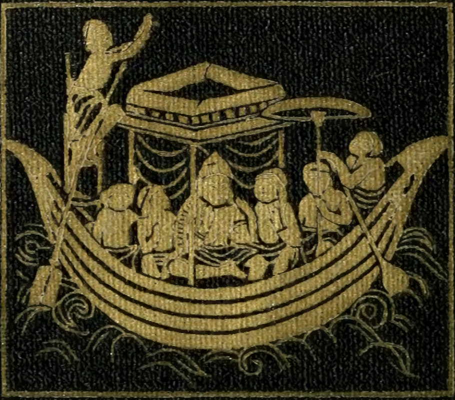

宗典部

第十九巻

BL 1411 T8J3 1929 v.43

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 43

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第十九卷

大乘義章第一 目次

卷第一……一
卷第二……一〇四
卷第三……二〇〇
卷第三末……二五七
卷第四……三二五
卷第五本……四一三
卷第五末……四五八
卷第六……五〇一

大乘義章第一

宗典部
第十九卷

【一】初に教聚を明す、中に三門ある中、初に衆經の教迹義、中に三、先づ異說を叙す。中今は劉虬の所說を明す。

【一化】佛一代の教化指導をいふ。

【五時といふは等】初に漸教を明す中、初に五時を說く。

【提謂等】提謂と波利の二商主のもの名。北天の人ともウトカラの人ともいふ。佛、之に對して初めて人天教を說き、髮爪を與へて造塔せしむといふ、但し髮天勸請以前のことに屬す。

【因緣】十二因緣のこと。

大乘義章　卷第一

草書は人を惑し、之を傳失すること甚し。傳ふる者、必ず眞に愼みて草書すること勿れ。

遠法師撰す

義に五聚有り。一には教聚。二には義聚。三には染聚。四には淨聚。五には雜聚。

教聚の中に、別して三門有り。一に衆經の教迹の義。二に三藏の義。三に十二部經の義。

衆經の教迹の義に三門分別あり。一に異說を叙す。二に是非を辨ず。三に正義を顯す。

(一)異說と云ふは、異說一に非ず。晉の武都山の隱士劉虬の說に言はく、如來一化の所說は、頓漸を出づること無し。『華嚴』等の經は、是れ其頓教なり。餘を名けて漸と爲す。漸の中に、共れ五時七階有り。五時と言ふは、一には、佛、初成道に、提謂等の爲に五戒、十善、人天の教門を說く。二には、佛成道し已りて十二年の中に、三乘の差別の教門を宣說す。聲聞を求むる者には、爲に四諦を說き、緣覺を求むる者には、爲に因緣を說き、大乘を求むる者には、爲に六度を說き、及び戒律を制して、未だ空理を說かず。三には、佛成道し已りて三十年の中に、『大品』『空宗』『般若』『維摩』『思益』を宣說す。三乘同じく觀じて、未だ一乘の破三歸一を說かず。又未だ衆生に佛性有りと宣說せず。四には、佛成道し已りて四十年の後、八年の中に於て『法華經』を說く。一乘の破三歸一を辨明して、未だ衆生に同じく佛性有りと說かず。但如來の前過恆沙、未來倍數を彰して佛の常を明さず。是

【六度】施度、戒度、忍辱度、精進度、禪定度、智慧度即ち六波羅蜜のこと、菩薩の修する行なり。

【空宗】有に執するものを教化對治せんため、一切皆空ハ教を說くもの成實宗、三論宗等これなり。

【破三歸一】法華經に於て佛がそれ以前に說きし三乘の法を一佛乘の爲の方便なりとし、歸するところは唯一佛乘あるのみと說くをいふ。天台にいふ會三歸一に同じ。

【佛性】一切衆生悉く覺悟の性を具するをいふ。

【不了教】不了義教のこと、眞實義を隱して明了ならしめず、方便もて假に說きたる教法のこと、了義教に對す。

れ不了教なり。五には、佛、滅度に臨み一日一夜に大涅槃を說いて、諸の衆生に悉く佛性有りて、法身常住なりと明す。是れ其了義なり。此は是れ五時なり。七階と言ふは、一に第二時の中に三乘の別をば通じて七と說く。（此は是れ一說なり）又誕公云はく、佛教に二有り。一には頓、二には漸なり。頓教は前に同じ。但漸の中に就いて彼五時を定と爲すべからず。但昔の說は悉く是れ不了なり、雙林の一唱は是れ其了教なりと知るのみと。（此は是れ二說）又菩提流支は、如來の一音は萬機に報ずるを以て大小並べ陳ぶ。彼頓漸を以て別つべからずと宣說せり。（此は是れ三說）

(二)次に其非を辨ず。劉虬が云ふ所の、佛教は、「頓漸の二門を出づること無し」と。是言盡さず。佛、所說の『四阿含經』『五部戒律』の如きは當に知るべし、是れ頓漸の所攝に非ざることを。然る所以は、彼說は小に被るをもて、頓と言ふことを得ず。說始終に通ずるも、終時の所說、大に入ると爲さざれば、漸と言ふことを得ず。又設し、餘時を衆生の爲にする所とせば、小を聞きて證を取る、竟に大に入らず。云何が漸と言はん。是故に、頓漸は教を攝すること盡さず。（此は是れ一の非）又復五時七階の言も、亦是れ謬浪たり。若し初時は、提謂等の爲に人天の法を說いて、出道を論ぜずと言はば、何の依據する所かある。人天の教門は如來の一化なり。諸の衆生に隨つて宜き有れば便ち說く。豈初時に局らんや。又『提謂經』に「諸の衆生、吾我本淨なり」と說く。吾我本淨とは是れ衆生空なり。又「諸法皆本無に歸す」と說く。諸法本無とは即ち是れ法空なり。又復提謂は衆の爲に五逆等の罪を懺悔し、

【又誕公等】下誕法師の所説を擧ぐ。【雙林の一唱】佛滅度に臨んで跋提河畔沙羅雙樹の間に於て涅槃經を説けるをいふ。【又菩提流支等】下三に菩提流支の所説を擧ぐ、流支は北印度の人魏の永平初年東夏に來り、永寧寺にありて譯經に從事す、所出經論三十九部一百廿七卷【二】第二に是非を辨ず。中初に劉虬の所説を非す。中に先づ一に頓漸二門を非す。【又復五時等】下二に五時七階を非す。【衆生空】生空、或は人空ともいふ、衆生の空無なるをいふ。【法空】事物の空無なるをいふ。【四大】地水火風の四大、一切の色法を構成する四種

四大、五陰の本淨を悟解す。陰と大と本淨なれば、亦是れ法空なり。二空は即ち是れ出世の直道なり。云何が名けて人天の教門と爲さん。又説法の時、提謂、波利、法を聞いて、不起法忍を獲得せり。時に四天王は柔順忍を得、三百の賈人は信忍を成ずることを得、三百の龍王は信忍の根を得、阿須輪等は菩提心を發し、山神、樹神、水火神等は、皆十善を得て菩薩の道を作し、二百の賈人は須陀洹を得たり。不起法忍とは、是れ七地已上の無生忍なり。柔順忍とは、四地已上の所得の忍なり。信忍といふは、初、二、三地に在り。信忍の根は、應當に彼解行の終心に在るべし。菩提心とは、解行の初なり。得十善作菩薩と言ふは、當に彼種性已上に在るべく、亦彼賢首已去に在るべし。須陀洹とは小乘の初果なり。此皆、出世の正道を成就す。云何が名けて人天の教門と爲す。又『普曜經』に明さく「佛、彼提謂、波利二人の與に記を授く。當に佛と作るを得べし、號して密成と曰はん」と。明に知んぬ、所説、人天の教に非ざることを。又、提謂等法を聞いて已去、鹿苑に向はず。憍陳如等、未だ斯會に豫らず。云何が此を以て後の與に漸と作さん。是れ大いに解し難し。第二階に如來彼十二年の中に於て、唯三乘差別の教門を説くと云ふ。何の文證に依れる。經の中には、但「聲聞を求むる者には、爲に四諦を説き、緣覺を求むる者には、爲に因緣を説き、大乘を求むる者には、爲に六度を説く」と云ふ。何んが曾て説いて、十二年の中に在りと言はん。又若し衆生、餘時の中に於て是法を聞かんと樂ひ、或は此時に在つて餘法を聞かんと樂はば、佛、豈説かざらんや。判ずるに斯理無し。然るに實に教を別てば如

來の一化は、宜き有れば便ち說く。定んで十二年に在りと言ふことを得ず。云何が知ることを得ん。『四阿含』『五部戒律』の如きは是れ小乘の法なり。戒經の說に言はく、「釋迦如來、十二年の中に於て、無事の僧の爲に略して戒經を說き、是より已後、廣く分別して說けり」と。『增一阿含』も亦此說に同じ。明に知んぬ、戒律は始終通制なることを。又『長阿含』の『遊行經』は、佛、涅槃の時、方に始めて宣說せり。明に知んぬ、經法は始終通じて說き、止十二年の中に在らざることを。又佛、彼五年の中に於て、十萬の偈の摩訶般若を說いて、諸法の空を明せり。七年の中に、諸の菩薩の爲に『般周經』を說いて、亦色心一切の法空を說けり。云何が十二年の中に、未だ空理を明さずと言はんや。斯を以て準驗するに、人の言、定んで謬れり。第三階に云はく、三十年の中に、『大品』『空宗』『般若』『維摩』『思益』を宣說せり。未だ曾て三を破して以て一に歸せず。又未だ衆生に佛性有りと宣說せず。言義未了なり。是故に、彼法華の與に漸と爲ると。然るに『般若經』に、「佛、成道し已りて五年に、便ち說く」と。云何が、定めて三十年に在りと言はん。又『大品經』、往生品の中に、「諸の比丘等『般若』に檀度を讃歎することを說くを聞いて、遂に三衣を脫し、以用て布施す」と。龍樹釋して言はく、佛、三衣を著へざれば罪を得と制す。何が故に尸波羅蜜を重んぜずして、戒を犯して施を行ずる。此れ十二年の前に在つては、佛、未だ戒を制せざるを以て、是故に犯さず。是證文を以てせば、局りて三十年の中に『維摩』、『思益』在るに非ず。三十年とは、何の文證に依るや。故に知んぬ。但是れ妄情に時分を

の成分。

【五陰】五蘊、五衆ともいふ。陰とは善法を陰蓋するの意、色受想行識の五なり。

【不起法忍】無生法忍のこと。見惑を斷じて空理を生ずるをいふ。

【柔順忍】寂靜の理に隨順し實相の理に乖離せざる位。

【信忍】如來の慈悲を信じて往生を疑はざる心。

【阿須輪】阿修羅のこと。

【解行の終心】解行とは解行地のこと、解によりて行を修し、未だ眞如を證せざる地、前三賢の位をいひ、其の最後心を終心といふ。

【種性已上】十住以上。

【賢首】十信滿をいふ。

【經】法華經序品

【五部戒律】佛滅後百年にして付法

藏の第五祖優婆毱多の下に律藏に於て曇無德部律、薩婆多部律、彌沙塞部律、迦葉遺部律、婆麤富羅部律の五派に分れたるものをいふ。
【戒經】 ここに四分律をさす。
【彼五年】 成道して五年の意。
【般周經】 般舟經のこと。
【三衣】 僧の著るべき三種の衣服、鬱多羅僧、僧伽梨、安陀會これなり。
【師子の中】 涅槃經師子吼菩薩品。
【阿耨菩提】 阿耨多羅三藐三菩提のこと。
【摩訶衍】 マハーヤーナ(Mahāyāna) 大乘のこと。
【經】 北本涅槃經二十七師子吼菩薩品。

安置き、且く爾することを。若し『般若』は、「三同觀を說くをもて、『法華』より淺しと言はば、『涅槃經』の中に亦言はく、「此經に聲聞を出すが故に、聲聞藏と名け、辟支佛を出すが故に緣覺藏と名け、菩薩を出すが故に、菩薩藏と名く」と。又師子の中に十二緣を說く、「下智觀の故に聲聞菩提、中智觀の故に緣覺菩提、上智の故に菩薩菩提、上上智觀は阿耨菩提」と。彼經亦三乘同觀を說く。應に『法華』より淺なるべし。又『勝鬘』の中に、「摩訶衍より一切の聲聞、緣覺、世及び出世間の一切の善法を出生す」と。彼經も、亦應に『法華』より淺なるべし。彼既に是れ深なり。『大品』の同觀、何ぞ獨り淺と爲さん。若し『般若』は三乘を破せざれば、『法華』より淺しと言はば『大品經』の中に、「舍利弗、問はく、若し都て退かず、空復異らずんば、何が故に三乘の差別有ることを得て、唯一乘ならざる。須菩提答ふらく、二無く三無し。若し聞いて怖れざれば菩提を得」と。此れ『法華』の無二無三と共言何の別ありて、是れ破三歸一に非ずと言はん。又龍樹の云はく、當に知るべし、『般若』は『華嚴經』『法華經』等の無量の經中に於て、最も以て大と爲すと。云何が淺しと言はん。若し『般若』は佛性を說かざれば『涅槃』より淺しと言はば、經に說かく、「佛性を亦般若波羅蜜と名く」「亦第一義空と名く」と。說く所の般若及び空は、卽ち是れ佛性なり。云何が說いて佛性を明さずと言はん。又『大品』の中に、眞如實際法性を宣說す。龍樹釋して言はく、「法は涅槃に名く。戲論の法にあらず。性は本分に名く。猶黃石には金性、白石には銀性あるが如し。一切衆生に涅槃の性有り」と。此れ佛性と何

【經】法華經第五涌出品。

【經】北本涅槃二十七師子吼菩薩品【法華の中】第六常不輕菩薩品。

【經】法華經第五如來壽量品。

の差別有りてか、說かずと言はん。佛性既に齊し。淺深の言、宜く暫くも施すべき無し。又『維摩經』は、不思議解脫を以て宗と爲す。斯れ乃ち、十解脫中の初の解脫門なり。當に知るべし、此は是れ頓教法輪なりと。云何が是れ不了義經と言はん。『思益』も亦爾なり。第四階に云はく、四十年の後に『法華』を宣說し、三を破し一に歸す。未だ佛性を明さず。又如來の前の過恒沙未來の倍數を說く。猶是れ無常なり。是故に彼涅槃の與に漸と爲ると。經の中に實に「佛、成道し已り四十年を過ぎて『法華經』を說く」と說く。然れば大品と、前後定め難し。何が故に是の如くなる。龍樹菩薩、『大品經』を釋して云はく「須菩提、『法華』を說くを聞く。擧手低頭皆佛道を成ずと。是故に今、退、不退の義を問ふ」と。此文を以て證するに、前後不定なり。若し『法華』の破三歸一は、『大品』より深しと言はば、此れ前に破するが如し。若し『法華』は未だ佛性を說かざるをもて、『涅槃』より淺しと言はば、是義然らず。經に「性は即ち是れ一乘なり」と說くが如き、『法華經』の中に一乘を辨明す。豈性に非ずと爲さんや。又『法華』の中に、「不輕菩薩、若し四衆を見れば、高聲に唱へて言はく、汝當に作佛すべし。我汝を輕んぜず」と。衆生に佛性有りと知るを以ての故に、稱して皆作すと言ふ。但皆作すと言ふは、即ち性有ることを顯す。若し如來の前過恒沙、未來倍數は、未だ常を明さずと言はば、是義然らず。當に知るべし、彼は踊出菩薩所見の應を說くことを。前過恒沙、未來倍數は、眞身を論ぜず。若し眞身を論ずれば、畢竟じて盡くること無し。云何が、是れ應にして眞に非ずと知るを得る。經に、「我成

【涅槃の中】北本如來性品。第四
【法華の中】勸持品。

佛してより已來、法を說きて踊出の菩薩を敎化す」と言ひ、復「我常に靈鷲山及び餘の住處に在り。天人の所見なり」と言ふ。明かに知んぬ、是れ應なることを。此應、何が故に未來倍數なる。其所化の踊出菩薩、未來世に於て倍數劫を過ぎ、皆悉く作佛して佛化を假らず。如來、爾時、應を息め眞に歸するを以ての故に、倍數と言ふ。理、實に佛化畢竟じて盡くること無し。問うて曰はく「若し前恒沙を過ぐるは、是れ應にして眞に非ずと言はば、何が故に論の中に、說きて報佛と爲すや。」釋して言はく、化に約して實を顯す。故に爾化してより來の多時をもて、眞の久しきを明す。彼既に應と說く。未來の倍數、何んが報なることを得ん。此疑眞に不了なり。」又『涅槃』の中に、『涅槃經』に大利益有ることを嘆じ、『法華』の中の、八千の聲聞記莂を授かるを得て、大果實を成ずるが如くんば、得益既に齊し。明す所寧んぞ異らん。龍樹の如きは實に云はく、『法華經』を最も甚深と爲す。聲聞作佛することを得と說くを以ての故に。是故に餘經は皆阿難に附し、唯『法華經』のみ獨り菩薩に附すと。斯文に準驗するに淺と言ふことを得ず。第五階に云はく、如來終に垂んとして『大涅槃』を說いて、獨り究竟了義の唱と爲すと。然るに實に『涅槃』は、終に垂んとする時の所說なるも、未だ必ずしも終に垂んとするときのもののみ、偏に是れ了義ならず。雙林の前に宣說せる『勝鬘』『楞伽』『法鼓』『如來藏』『鴦掘摩羅』『寶女經』等の如き、皆是れ圓滿究竟の了義なり。何んが獨り『涅槃』のみ、偏に是れ了義ならん。佛、初年に『寶女經』及び『尼揵子』を說き、二年に『廣博嚴淨』を宣說し、五年に『摩

【誕公等】以下、誕公所立を非す。

【菩提流支の等】以下、菩提流支の所立を非す。

【三】以下、第三に正義を顯す。中に二。初に聖教分別。

訶般若』を宣說し、七年に『般周三昧』を宣說し、九年に『鴦掘摩羅』及び『法鼓經』を宣說し、十年に『如來藏經』を宣說せるが如き、是の如き經は、皆是れ圓滿究竟の了義なり。何んが獨り『涅槃』のみ、偏に是れ了義ならん。誕公言ふ所の頓漸の言、義は前に破するに同じ。然れども佛の一化は、諸の衆生に隨つて、應に大に入るべき者には、即便ち爲に說くに宣說する所に隨ふ。門別異ると雖も、究竟せざること無し。何んが獨り『涅槃』のみ偏に是れ了義ならん。菩提流支の、佛の一音は萬機に報ずるを以て、判ずるに漸頓無しと言ふは、是れ亦然らず。如來復一音もて萬に報ずと雖も、諸の衆生に隨つて漸頓無きに非ず。自ら衆生有りて淺に藉りて遠に階らば佛爲に漸說す。或は衆生有りて一越して大を解せば佛爲に頓說す。寧んぞ頓漸無からんや。非を辨ずること是の如し。

〔三〕次に正義を顯す。中に於て兩門有り。一には聖教を分ち、二には宗別を定む。聖教衆しと雖も、要は唯二有るのみ。一には是れ世間、二には是れ出世なり。三有の善法を名けて世間と爲し、三乘の出道を出世間と名く。出世間の中に就きて復二種有り。一には聲聞藏、二には菩薩藏なり。聲聞の爲に說くを聲聞藏と名け、菩薩の爲に說くを菩薩藏と名く。故に『地持』に云はく、「十二部經は、唯方廣のみ是れ菩薩藏なり。餘の十一部は是れ聲聞藏なり」と。彼文に復言はく、「佛、聲聞、菩薩に出苦の道を行ぜしめんが爲に、修多羅を說けり。經を結集する者、集めて二藏と爲せり。聲聞の所行を聲聞藏と爲し、菩薩の所行を菩薩藏と爲す」と。龍樹も亦云はく、「迦葉、阿難、王舍城に於て三藏を結集せるを聲聞藏

【四】第二大段に三藏の義を明す中

と爲し、文珠、阿難、鐵圍山に於て摩訶衍を集めしを菩薩藏と爲す」と。聲教の明證、義顯然たり。此二を亦は、大乘、小乘、半、滿教と名く。聲聞藏の法は、狹劣なれば小と名け、未だ窮まらざれば半と名く。菩薩藏の法は、寬廣なれば大と名け、圓極なれば滿と名く。教別此の如し。宗を定むと言ふは、諸經の部別なるをもて宗別亦異なり。宗趣衆しと雖も、要は唯二種のみ。一には是れ所說、二には是れ所表なり。所說と言ふは、謂はゆる行德なり。所表と言ふは、同じく表法と爲す。但法は彰し難し。德に寄せて以て顯す。法を顯すの德門、別して無量なり。故に諸經の宗趣をして各異らしむ。彼『發菩提心經』の如きは發心を以て宗と爲し、『溫室經』等は施を以て宗と爲し、『淸淨毘尼』『優婆塞戒』是の如き等の經は戒を以て宗と爲し、『華嚴』『法華』『無量義』等は三昧を宗と爲し、『般若經』等は慧を以て宗と爲し、『維摩經』等は解脫を宗と爲し、『金光明』等は法身を宗と爲し、『方等』『如門』是の如き經等は陀羅尼を宗と爲し、『勝鬘經』等は一乘を宗と爲し、『涅槃經』等は佛の圓寂妙果を以て宗と爲す。是の如き等の經に明す所、各異れり。然れども其所說は、皆是れ大乘緣起行德究竟の了義なり。階漸の言は、應に輒く論ずべからず。教迹の義、之を略して爾云ふ。

三藏の義に七門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。開合の廣略三。制立四。大小の有無五。三藏の次第六。寬狹を料簡す七。

(四)第一に名を釋す。三藏と言ふは、謂はく、修多羅、毘尼、毘曇なり。修多羅とは中國の

七門分別あり、先づ名を釋す。初に修多羅に就いて。

【修多羅】スートラ(Sūtra)

【毘尼】ヰナヤ(Vinaya)

【毘曇】アビダルマ(Abhidharma)

【喩經】法華經第三、譬喩品。

言なり。此方の釋する者、翻譯一に非ず。或は法本と名け、或は復翻じて直說語言と爲し、或は契經と名け、或は翻じて綖と名く。人家翻じて經本と爲す所以は、蓋し『仁王』、『百論』に依るが故に爾り。『仁王』の中の如き、「佛、大王に告げたまはく、經本は偈、經、乃至論議、一切皆如なり」と。彼經の中に修多羅を名けて經本と爲すを以ての故に、人即ち此を執して、用て翻名と爲す。又『百論』の中に、其經本を名けて修妬路と爲し、或は經本と云ふ。人復此を執して、定んで翻名と爲す。蓋し乃ち義に隨つて、以て經體に名く。正しき翻名に非ず。『何者か本の義なる。』『本の義に四有り。一に理教相對すれば、教を理の本と爲す。故に名けて本と爲す。二に教の中に就いて經論相對すれば、經を論の本と爲す。故に名けて本と爲す。三に經の中に就いて自ら本末有り。本に自ら三義あり。一には總、別の本と爲す。二には初は後の本と爲す。三には略は廣の本と爲す。』『是義云何。』『修多羅の中に義に別して三有り。一に總修多羅は、十二を統攝す、皆一の修多羅を成ぜずといふこと莫し。故に『涅槃』に云はく、「始め如是より終り奉行に至る、是の如き一切を修多羅と名く」と。二に別修多羅は、前の總の中に就いて十一を開分し、餘の收めざる者は、還復修多羅の中に攝在す。之を名けて別と爲す。三に略修多羅は、十二部の中、初には略して一切を標擧し、通じ名けて修多羅と爲し、後には廣く解釋し、說いて十二と爲す。色と言ふが如きは、即ち是れ根本略修多羅部なり。謂はく十一種の青黃等の色は、是れ其廣釋の修多羅部なり。喩經の中の「譬へば長者、一の大宅有らん」の如きは、即ち是れ喩說

【祇夜】ゲーヤ、(Geya)重頌と譯す前出の長行を重ねて韻文としたるもの。

【迦旃延】カートヤーヤニー(Katyāyanī)有部宗の派祖、發智論の著者

【訶梨跋摩】ハリヷルマン(Harivarman)師子鎧と譯す、成實論の著者

【伽陀】ガーター(Gatha)頌と譯す、唱歌するやうに作られたる韻文。

の略修多羅なり。其宅朽つる等は、是れ其廣釋の譬喩なり。經に是の如き一切を攝せり。別修多羅は彼祇夜重誦の偈に望め、及び譬喩論議の經に望めて、初を後の本と爲す。故に名けて本と爲す。餘に望めては本に非ず。略修多羅は廣の十二に望めて、略を廣の本と爲す。之を目けて本と爲す。四に論の中に就いて、自ら本末あり。二種有り。一には略を廣の本と爲す。迦旃延所作の論は『毘婆沙廣論』の與に本と爲すが如し。二には廣を略の本と爲す。『毘婆沙』は『阿毘曇』及び『雜心論』の與に、以て本と爲す等なり。本の義是の如し。』彼『仁王』の中に云ふ所の本とは、經に就いて以て說き、總を別の本と爲す。故に名けて本と爲す。初を後の本と爲し、略を廣の本と爲せば、亦名けて本と爲す。彼『百論』の中には、論に就いて以て說き、略を廣の本と爲す。故に名けて本と爲す。此等は乃ち是れ義に隨つて傍翻す。正しき翻名には非ず。人復翻じて直說と爲す所以は『成實論』に依るが故に此釋を爲す。彼文に說いて言はく「修多羅とは直說の語言なり」と。人卽ち此を執して以て翻名と爲す。蓋し乃ち是れ其辨釋の辭にして、正しき翻名には非ず。訶梨跋摩、論を作りて十二部經を解釋す。彼、祇夜、伽陀、偈、經に對するが故に、指序す。修多羅とは直說語言なりと言ふは、說いて熱とは是れ火なりと言ふが如似く、豈是れ翻名ならんや。何が故に偏に祇夜、伽陀に對する。此二種は一向に別なるを以ての故に。人復翻じて契經と名くる所以は、彼『增一阿含』の序に依るが故に、便ち此釋を作す。彼に言はく、「契經

【律】四分律第一

は是れ第一藏、毘尼は第二、毘曇は第三」と。明に知んぬ、契經は是れ修多羅なることを。又『雜心』の業品の文に依るに、彼文に說いて言はく「斷律儀とは契經品の如し」と。乃ち其指す所は是れ修多羅品なり。人即ち此を執して、以て翻名と爲すも斯れ乃ち義に隨つて以て其經に名く。是れ翻名に非ず。其れ聖教は當人の情に稱ひ法相に契合するを以て、義に從つて目を立て、之を名けて契と爲す。此れ既に方言なり。何んが私情を用て種種に圖度せん。故し正しくは相翻じて、之を名けて綖と爲す。何を以てか知ることを得る。今、此には且く三門を以て之を釋す。一には方言に准定し、二には義解を以てし、三には文證を以てす。方言に准ずとは外國の人、正しく世人衣を縫ふの綖を名けて修多羅と爲す。那ぞ異翻することを得ん。義解と言ふは、諸法星羅し、法界に散周す。次第に理を顯し、世に在りて墜せず失せざる所以は、良に聖教貫穿するを以ての故に由り。法を貫くの能は、綖の花を貫くが如し。故に名けて綖と爲す。文證と言ふは、律の中に說くが如し。種種の花を散じて案上に置くが如し、風吹けば則ち落つ。何を以ての故に。綖の貫くこと無きが故に。是の如き種種の名、種種の性、種種の家、出家あつて、佛法をして疾く滅して久住ならざらしむ。何を以ての故に。經教を以て、法を攝取せざるが故にと。聖教を目けて、之を以て綖と爲す。佛法は花の如し。所被の衆生の三業は案の如し。過非を造るは風の如し。過に由つて法を滅するは、花の零落するが如し。若し言教の彼法を記持すること無くんば、法則ち隱滅す。良に以れば言教の記持して世に在り、人過を造ると雖も、

【毘尼といふは等】以下、二に毘尼に就いて。
【木叉】波羅提木叉(Prātimokṣa)のこと別解脫と譯す。
【尸羅】シーラ(Śīla)戒と譯す。
【尼彌留陀】ギニルッダ(Vinirudha)滅と譯す。
【涅槃】北本涅槃三十一師子吼菩薩品。

法常に滅せず。此能有るを以ての故に、綖の如しと說く。又『雜心』に言はく、「修多羅とは、名けて結鬘と曰ふ。能く諸法を貫く」と。法を貫くは、猶是れ綖の義のごとし。毘尼と言ふは、名別して四有り。一には毘尼と曰ひ、二には木叉と名け、三には尸羅と曰ひ、四には名けて律と爲す。毘尼と言ふは是れ外國の語、此には翻じて滅と名く。外國に、滅を說くに凡そ三種有り。一には涅槃、二には尼彌留陀、謂はく、四諦の中の滅諦の名なり。三には毘尼と曰ふ。此三何の別かある。若し通じて之を論ずれば、體一にして名異る。其れ猶眼と目との如し。外國の言は一法に十名あり。此三は是れ十が中の數なり。若し別して之を分たば、差異無きに非ず。異相如何。涅槃、彌留は當體に稱を立つ。是二、何んが異る。義釋するに三有り。第一の義に云はく、所滅不同なり。『涅槃』に釋するが如し。「諸經に火滅するを名けて滅度と爲す」と。此れ即ち是れ其彌留陀滅なり。「諸の覺觀を離るるを稱して涅槃と曰ふ」と。第二の釋に云はく、通局異る有り。涅槃の滅は偏に滿處に據り、尼彌留陀の滅は義因果に通ず。是故に滅諦に、滅皆收むること有り。第三の釋に云はく、通別を以て分つ。事別に隨つて滅するを說いて涅槃と爲し、通相の三滅を尼留陀と名くと。品異に約對するを名けて事別と爲し、盡止妙出の四義寬通するを名けて通相と爲す。此二異なりと雖も、當體は是れ滅なり。若し毘尼を論ずれば、體は是れ滅に非ず。有爲の行德能く滅する所有り。故に名けて滅と爲す。又能く寂滅の果を證得す。故に說いて滅と爲す。何が故に戒行をば名けて毘尼と曰ふ。其に兩義有り。一には戒行、能く業非

【五分法身】戒身、定身、慧身、解脫身、解脫知見身、この五類の因に依りて得る所の二乘の各の身をいふ。【注】佛遺教經。

【三業】身口意の三業。

【優婆羅叉】ウパラクシャ(Uparakṣā)

を滅す。故に稱して滅と爲す。二には能く彼、究竟の滅果を得。故に說いて滅と名く。何が故に律教をば毘尼と名くることを得る。亦、兩義有り。一には能く毘尼の行を詮す。其所詮に從ふ。故に毘尼と號す。二には能く毘尼の行徳を生ず。其所生に從ふが故に毘尼と稱す。木叉と言ふは、此には解脫と名く。解脫に二有り。一には無爲、二には有爲なり。無爲解脫を直に木叉と名く、有爲解脫を毘木叉と名く。是故に「相續解脫經」に言はく、「涅槃の解脫を名けて木叉と爲し、五分法身の有爲解脫を毘木叉と名く」と。何が故に、戒行を名けて解脫と爲す。其に兩義有り。一には戒行能く業非を遠る。故に解脫と名く。二には能く彼解脫の果を得。故に解脫と名く。是を以て經に言はく「戒は是れ、正しく解脫に順ずるの本なり。故に、波羅提木叉と名く」と。何が故に、律教を名けて解脫と爲す。釋に兩義有り。一には能く解脫の行徳を詮す。故に解脫と名く。二には能く解脫の行徳を生ず。故に解脫と名く。尸羅と言ふは、此には清凉と名く。亦名けて戒と爲す。三業の炎非、行人を焚燒す。事等くして熱の如きを、戒能く防息す。故に清凉と名く。清凉の名は、正しく彼を翻ず。能く防禁するを以ての故に、名けて戒と爲す。何が故に律教をば、之を名けて戒と爲す。亦、兩義有り。一には戒行を詮す。故に說いて戒と爲す。二には能く戒を生ず。故に說いて戒と爲す。言ふ所の律とは、是れ外國には優婆羅叉と名く。此には翻じて律と名く。解釋に二有り。一には教に就いて論じ、二には行に就いて辨ず。若し當に教に就かば、詮量を律と名く。若し當に行に就かば、調伏を律と名く。毘尼の教

【阿毘曇とは等】以下、阿毘曇に就いて明す。
【優婆提舍】ウパデーサ(Upadesa)論議と譯す。
【摩德勒伽】マートリカー(Matrika)本母又は行母と譯す。
【摩夷】摩多羅迦と同じ、梵の摩德勒伽に同じ。
【五】第二門に體性を辨ず。

は、此律行を詮す。故に稱して律と爲す。又律行を生ず。故に復律と名く。阿毘曇とは、名別に四有り。一には優婆提舍と名く。二には阿毘曇と名く。三には摩德勒伽と名け、亦は摩多羅迦と云ふ。此れ正しく一名なるも、之を傳ふるに音異るなり。四には摩夷と名く。優婆提舍とは、此には正しく論と名く。諸法を論ずるが故に。阿毘曇とは、此方の正翻には無比法と名く。阿とは謂はく無なり。毘とは謂はく比なり。曇摩を法と名く。解釋に二有り。一には教に就いて論じ、二には行に據つて辨ず。教に就いて言はば、三藏の中、毘曇を最も分別中勝と爲す。故に無比と曰ふ。行に就いて言はば、毘曇には慧を詮す。慧行最も勝るるが故に無比と曰ふ。毘曇の教は此勝行を詮す。故に無比と名く。又能く彼無比の慧を生ず。故に無比と曰ふ。摩德勒伽とは、此方の正翻には行境界と名け、行儀を辨彰す。起行の所依なるをもて、行境界と名く。摩夷と言ふは、此には行母と名く、行法を辨詮して能く行を生ずるが故に、名けて行母と爲す。前の境界と、其義相似たり。此三の中に、各苞含有り。蘊積すれば藏と名く。三藏の名義、之を略して麤爾り。

(五)第二門の中に體性と言ふは、三藏、皆教法を用て體と爲す。何者か是れ教なる。音聲、字句、法と相應す、是れ其教なり。聲は是れ聲入。三聚の中には、色法の所收なり。名字句等は、諸論同からず。『毘曇』の如きに依れば、是れ其法入なり。三聚の法の中には、色に非ず、心に非ず、相應にあらず、名、字、句等を攝す。三種に何の別かある。長短、屈曲、高下の法をば、之を說いて字と爲す。字を攝して法を表するをば、說いて以て名と爲

す。名字を拘攣し、共に相屬著して、以て文頌を成ず。之を說いて句と爲す。直說の音聲は、法を表するに便ち足れり。何んが字等を用ふる。若し直に音聲、字法と和合して、相應せざれば、言語を成ぜず。風鈴等の音聲と別無し。要ず字と合して方に言語を成ず。字と合して言語を成ずることを得と雖も、若し當に名法と相應せざれば、此を以て前の法を表呼することを得ざるべし。良に彼名法と相應するを以ての故に、法を表すと曰ふ。法を表することを得と雖も、若し當に句法と相應せざれば、名字分散して文頌を成ぜざるべし。良に彼句法と相應するを以ての故に、字等を攝して、文頌偈句の差別を成ずることを得。『成實』の不相應品の如きに依れば、廣く前の義を非す。彼論、には聲の外に別に非色、非心の字等有ることを說かざるは、得たりとすべし。彼に說く字等は、是れ其聲性なりと。卽ち彼聲の上の表召の業をば、說いて字等と爲す。理は相離れず。聲は恆に是れ實なり。字等は恆に假なり。其れ猶色と色業との別のごとし。當體は是れ色なり。色の上の相續動作は是れ業なり。性は恆に實、業は恆に是れ假なり。此を以て彼に類して、相在ること知るべし。其韻數の多少を勞しく說かざれ。此三に何の別かある。卽ち聲の上に就いて、音韻屈曲するをば、之を說いて字と爲し、法を召くを名と曰ひ、衆多の名字を、說いて以て句と爲す。大乘法中の所立の字等の相は字を成ずるに同じ、故に『地持論』に云はく、「字とは、謂ゆる惡、阿等の音なり」と。聲の外に、別に非色、非心の字等有りと說かず。又『大智論』の句義品に云はく、「天竺の語法は、衆字語を成じ、衆語句を成ず」と。字、句、

【大智論】大智度論四十四。

【八】以下、第三門に廣略を開合するを明す。

語等は增減を異と爲す。即ち聲を語と爲し、字等と語とは、增減を異と爲す。寧んぞ聲に異ることを得ん。三藏の體性、略して辨ずること是の如し。

(六)第三門の中に、廣略不定なり。或は說いて一と爲す。謂ゆる、一切の三藏の法をば、通じて內論と名く。或は分ちて二と爲す。謂はく、經と論となり。一切の本は敎なれば、通じて說いて經と爲し、隨順して釋する者をば、斯を名けて論と爲す。若し人に隨つて別たば、亦分つて二と爲す。謂はく、聲聞藏及び菩薩藏なり。或は分つて三と爲す。三に三門有り。一には三藏に分別す。謂はく、修多羅、毘尼、毘曇なり。二には三乘に分別す。謂ゆる、一切の三乘の法なり。三には大小漸頓に隨つて分別す。謂ゆる、局敎、漸敎、頓敎なり。一切の小法を名けて局敎と爲す。大、小從り入るを名けて、漸敎と爲す。大、小從りせざるを、名けて頓敎と爲す。或は分ちて四と爲す。四に兩門有り。一には修多羅、毘尼、毘曇及以び雜藏に分ちて四種と爲す。三學別論を、即ち以て三と爲す。三學の雜說を、名けて雜藏と爲す。二には人に隨つて四を分つ。謂ゆる、三乘と凡夫との法なり。或は分つて五と爲す。謂ゆる、修多羅、毘尼、毘曇、雜藏及與び菩薩藏なり。前の四は小乘、後の一は大乘なり。或は分ちて六と爲す。大乘の三藏、小乘亦三なり。或は分ちて八と爲す。小乘の中に、修多羅、毘尼、毘曇、及與び雜藏有り。大乘亦爾なり。或は分つて十二なり。謂はく、十二部なり。『地持』に說くが如し。「大乘の中には、唯一の方廣、小乘は十一」と。大小通じて論ず。故に十二有り。大小隱顯、備に十二部經の中に釋するが如し。

【四七】次に第四門に差別を明す。

或は分つて十八とす。小乘に九有り。大乘亦爾なり。小乘の九とは、十二部の中、彼授記、無問、自說、及以び方廣を除く。大乘の九とは、十二部の中に、彼因緣、譬喩、論議を除く。大小各九なり。故に十八有り。有無の所以は、廣くは十二部經の中に釋するが如し。或は復分ちて、二十四部と爲す。大乘は十二、小乘亦爾なり。或は復分ちて八萬四千と爲す。別に隨つて廣く論ぜば、數別して窮り難し。開合の義、略して辨ずること是の如し。

(七)第四門の中の差別に三有り。一には教の本末に隨ひ、二には法に約して異を辨じ、三には行に就いて以て分つ。本末と言ふは、經、律は是れ本、論は是れ其末なり。但本の中に就いて、經、律に兩分す。末の中に亦二あり。謂ゆる、毘曇、摩德勒伽なり。汎く法相を釋するを阿毘曇と名け、行儀を辨宜するを摩德勒伽と名け、亦摩夷と云ふ。行を生ずるを以ての故に。本末是の如し。中に於て、義に隨つて分別するに三有り。一には化教の所說を修多羅と名け、行教の所說を名けて、毘尼と曰ふ。汎く理事、因果の是非を宣ぶるは、是れ化教なり。行儀を辨彰するは、是れ行教なり。彼末の中に就いて、修多羅を釋するを阿毘曇と名け、毘尼を解する者を摩德勒伽と名け、亦摩夷と名く。第二に彼化行の兩教に就いて、集善の義邊を修多羅と名く。化、行の兩教を、離惡の義邊にては、名けて毘尼と曰ふ。此二の中の所有の化教を釋するを、阿毘曇と名く。此二の中の所有の行教を釋するを、摩德勒伽と名く。第三に、直に集善の行教を取りて修多羅と爲し、離惡の行教を名けて毘尼と曰ふ。此二の中に於て、汎爾に止作の義を分別して、物の解を生ぜん爲にするを

【毘婆沙】第一

毘婆沙

名けて毘曇と曰ふ。其修相を辨じ、行心を起さんが爲にするを摩德勒伽と名く。此一門竟る
法に約すと言ふは、彼『相續解脱經』に説くが如し。三藏は皆是れ如來の本教なり。中に於て、法に隨つて分つて三種と爲す。若し法を聞いて三寶に歸依し、諸行を修習すと言はば、是の如きの義を修多羅と名く。一切の戒行の輕重、持犯の得失を分別する、是の如きの義を名けて毘尼と曰ふ。一切の情理の虚實、諦緣の差別、因緣の法相、五明處等の無量の義門を分別するを、阿毘曇と名く。此二門竟る
行に就くと言ふは、行に別して三有り。謂はく、戒、定、慧なり。定を詮するの教を修多羅と名け、戒を詮するの教を名けて毘尼と曰ひ、慧を詮するの教を阿毘曇と名く。三藏の中に、皆三學を明す。何が故に、是の如く別ちて三行に屬する。『毘婆沙』の中、釋に兩義有り。一には義を以て分つ。彼一切聖教の中に隨つて定の義を詮する、斯れ皆之を攝して修多羅と爲す。戒の義を詮するを以て毘尼と爲す。慧の義を詮するを、總じて毘曇と爲す。第二に隱顯互に相助成す。修多羅の中に、戒慧を明すと雖も、定行を助成す。毘尼藏の中に、定慧を明すと雖も、戒行を助成す。毘曇藏の中に、戒定を明すと雖も、慧行を助成す。隱顯相從ふを以ての故に、此判を爲す。相を分つこと然りと雖も、義難盡し。何が故に是の如くなる、修多羅は宜に法相を彰して、心をして正住せしむるを以て、定を生ずるの義強し。故に定を詮すと名く。阿毘曇は廣く法義を開き、心をして照知せしめ、智を生ずるの義強し。故に慧を詮すと名く。毘尼に戒を詮する義の在ること知るべし。

【八】以下、第五門に三藏の大小乘に有無の義を明す
【四阿含】雜阿含、長阿含、中阿含、增一阿含。
【大智論】大智度論第百。
【法華】法華經第五安樂行品。

〔八〕第五門の中に、其大小有無の義を明す。通じて論ずることを爲さば、大小皆具す。小乘の三とは、四阿含等は是れ修多羅、五部の戒律は是れ其毘尼、『毘婆沙』等は是れ阿毘曇なり。大乘の三とは『華嚴』等の經は是れ修多羅『清淨毘尼』等は是れ其毘尼、『大智論』等は是れ阿毘曇なり。若し別して之を論ぜば、小乘には三を具し、大乘には具せず。何を以て知ることを得る。『大智論』に龍樹釋して云ふが如し、『迦葉、阿難、王舍城に於て、三藏を結集して聲聞藏と爲し、文殊、阿難、鐵圍山に於て、摩訶衍を集めて菩薩藏と爲す』と。又『法華』に云はく『三藏の學者に親近することを得ざれ』と。小乘を習ふを名けて三藏の學と爲す。斯文に準驗して、定んで知る、小乘は備に三藏を明し、大乘は論ぜずと云ふことを。何が故に是の如くなる。此れ如來の本教に就くが故に爾なり。如來所化の小乘の衆生は、鈍根にして悟り難し。經律を說くを聞いて廣く解すること能はず。是故に、如來重ねて毘曇を以て分別開示するに、方に能く悟入す。故に三藏有り。如來所化の大乘の衆生は、利根にして悟り易し。經律を說くを聞いて即ち能く深く解して、如來重ねて毘曇を以て、分別解釋することを假らず。是故に具せず。具せざるを以ての故に、三藏を說かず。其れ猶大乘九部の經の中に『論義經』無きがごとき、此と相似たり。義を以て細く推するに、如來の本教も、亦具に有ることを得、但部別無し。所以に論ぜず。若し末代に通じては、並に具すること疑はず。衆生、大乘を聽受すること有りと雖も、悟入すること能はず。是故に、菩薩之が爲に論を作りて、佛經を解釋せり。故に大乘阿毘曇有り。大小

【九】以下、第六門に三藏說法の次第を明す。中に四門、初に起說の次第を明す。
【仙人鹿苑】ミリガダーワ(Mṛgadāva)鹿野苑のことで婆羅捺國にある宥苑。
【須提那】スディナ(Sudinna)求得と譯す。聚落主の名。
【第二に等】次に結集の次第を明す
【第三に等】次に化益の次第を明す
【第四に等】次に行修の次第を明す

有無、略して辨ずること是の如し。

(九)第六に、次第は略して四門有り。一に起說の次第は、佛、初成道の第六七日に仙人鹿苑にて、陳如等の爲に四諦の法を轉ず。是故に先に修多羅藏を明す。若し大乘に依らば、第二七日に、華嚴修多羅を宣說す。『僧祇律』に依らば、五年已後に廣く戒律を制す。若し『四分』に依らば、十二年後に、須提那に因りて廣く戒律を制す。故に、次に第二の毘尼藏を明す。如來、後に毘舍離國に於て、跋耆諸比丘等の本末の因緣に因つて、遂に比丘の爲に五怖畏を說く。謂ゆる、殺生乃至飲酒なり。故に、次に第三に毘曇藏を明す。第二に其結集の次第を明す。經論不同なり。『智度論』の中に、佛滅後に、摩訶迦葉、先づ阿難をして修多羅を誦せしめ、次に優婆離、毘尼を誦出し、後に阿難をして毘曇を誦出せしむるを明す。『阿育王傳』の次第は復異れり。彼文の中には、先に阿難をして修多羅を誦せしめ、第二に迦葉自ら毘曇を誦し、後に優婆離、毘尼を誦出すと。『五分律』の中の次第、復別なり。先に優婆離、毘尼を誦出し、次に阿難をして修多羅を誦せしめ、復阿難をして毘曇を誦出せしむと。本事一應に一なるべきも、傳ふる者同じからず。故に此異り有り。第三に、其化益の次第を明す。『毘婆沙』に云はく、「初入の者の爲には修多羅を說く。其敎化して、信を生ぜしむるを以ての故に。已入の者の爲には毘尼を宣說す。其をして受持し、修行を起さしめんが故に。已受持の者には爲に毘曇を說く。其をして行に依つて、正智を生ぜしめんが故に。第四に、其行修の次第を明す。先に毘尼を明して、其をして戒を學せしむ。次

【一〇】以下、第七門に三藏各の寛狹を明す。

に修多羅。其をして定を習せしむ。後に毘曇を明して、智慧を修せしむ。戒、定、智慧の義の次第するが故に。

第七門の中に、寛狹の義とは、三藏相望して寛狹を辨ぜず。今は三の中の修多羅藏を以て、十二の中の修多羅部に對し、其寛狹を辨ず。十二部の中の修多羅部に、義別して三有り。一には總修多羅、二には別修多羅、三には略修多羅なり。備には前に解するが如し。此三種の中、總修多羅は一向に是れ寛し。十二を統苞し、三藏を該括す。略修多羅は、其義次に寛し。十二部經及び三藏の中に、皆通じて之有り。別修多羅は、三藏の中の修多羅藏に望めて、互に寛狹有り。三藏の中の修多羅藏は、具に十二を攝す。是故に寛と言ふ。毘尼、阿毘曇藏を攝せず。故に名けて狹と爲す。十二部の中の修多羅部は、其餘の十一部を攝せず。故に之を名けて狹と爲す。三藏を該通す。是故に寛と名く。具足せずと雖も、全く三藏を攝す。三藏の中に通じて皆有るが故に。良に以れば是非の差別分ち難し。今四句を以て相對して之を辨ず。一には是れ其修多羅藏、亦名けて修多羅部と爲すことを得。謂はく、初藏の中の修多羅部なり。二には是れ其修多羅藏にして、而も修多羅部と名くることを得ず。謂はく、初藏の中の餘の十一部なり。三には是れ修多羅藏に非ずして、而も名けて修多羅部と爲すことを得。謂はく、彼毘尼、阿毘曇の中の修多羅部なり。四には是れ修多羅藏に非ず。而も復是れ修多羅部にも非ず。謂はく、彼毘尼、阿毘曇の中の餘の十一部なり。三藏の義、略して辨ずること是の如し。

【二】以下、十二部經を明す中に五門ある中、先づ十二部經の翻名解釋門。

【和伽羅那】ギヤーカラナ（Vyakarana）

【憂陀那經】ウダーナ（Udana）

【尼陀那經】ニダーナ（Nidana）

【阿波陀那經】アヴァダーナ（Avadana）

【伊帝越多伽經】イティヴリッタカ（Itivrttaka）

【闍陀伽經】ヂヤータカ（Jataka）闍陀伽とも書く。

【毘佛畧經】ヴァイプルヤ（Vaipulya）

十二部經の義に五門分別あり。名を翻じて解釋す一。體相二。時に約して分別す三。通別四。惣別五。

（一）第一に名を釋す。言ふ所の經とは、喩に就いて法に名く。聖人の言說、能く諸法を貫く。經の緯を持するが如し。故に名けて經と爲す。經は義に隨つて別なり。故に十二有り。十二の名は、謂はく、修多羅、祇夜、伽陀、乃至末後に優婆提舍なり。修多羅とは、是れ外國の語なり。此に翻じて綖と名く。聖人の言說、能く諸法を貫くこと、綖の花を貫くが如し。故に名けて綖と爲す。前の經の義と大況相似たり。第二に祇夜とは、此に翻じて、名けて重誦偈と爲す。偈を以て、重ねて修多羅の中の所說の法義を誦す。故に祇夜と名く。第三に名けて和伽羅那と爲す。此に授記と名く。因を行じ、果を得。之を目けて記と爲す。聖說いて人に示すが故に、稱して授と爲す。第四に伽陀とは、此に翻じて、名けて不重頌偈と爲す。直に偈の言を以て諸法を顯示す。故に伽陀と名く。第五に名けて憂陀那經と爲す。此に翻じて、名けて無問自說と爲す。諸請に由らずして、自ら宣唱す。故に無問自說經と名く。第六に名けて尼陀那經と爲す。此に翻じて、名けて因緣經と爲す。現の事、緣を籍りて所說有るを、因緣經と名く。第七に名けて阿波陀那經と爲す。此に譬喩と名く。「百喩」等の喩を立て法を顯すが如きを譬喩經と名く。第八に名けて伊帝越多伽經と爲す。此に、本事と名く。他人の往古の事を宣說す。故に本事と云ふ。第九に名けて、闍陀伽經と爲す。此に本生と名く。已が往報を陳ぶるを、稱して本生と曰ふ。第十に名けて、毘佛

【阿浮陀達摩】アドブタダルマ（Adbhutadharma）

【三】以下、第二に十二部經の體相を明す。

略經と爲す。此に方廣と名く。理、正しきを方と曰ひ、義、備るを廣と名く。教、旨に從ふ。因つて方廣經と名く。若し小乘に依らば、語正しきを方と稱し、言多きを廣と曰ふ。第十一に阿浮陀達摩と名く。此に飜じて、名けて未曾有經と爲す。青牛の行鉢、白狗の聽法、諸天の身量、大地動等、曠古の希奇を未曾有と名く。此希事を說くを、未曾有經と名く。第十二に優婆提舍と名く。此に論議と名く。問答して理を辨ずるを、論議經と名く。名義是の如し。

（三）第二門の中、廣略不定なり。體に據らば唯一なり。皆是れ音聲言教ならずといふこと莫し。言教の體は、三藏の中に具に廣く分別するが如し。相に就いて二に分つ。謂ゆる長行及び偈誦なり。名を制するに三有り。彼、修多羅、祇夜、伽陀は、體に就いて名を制し、彼教體に名けて、修多羅、祇夜、伽陀と爲す。方廣の一部は、理に從つて名を立つ。理は是れ方廣、之に從つて名く。餘の八部は事に隨つて名を立つ。彼、授記、無問の事等に隨つて、以て名を制するなり。名を定むるに四有り。制と定と、何の別あつて兩門を分つや。制とは、謂ゆる、立名の所依、定とは、謂ゆる、其名相を定むるなり。之を定むること云何。十二部の中、初の修多羅は、喩に從つて名と爲す。理の言說、能く法を貫くを以ての故に、之を說いて綖と爲す。祇夜、伽陀は當相を名と爲す。論議、授記、無問自說、此三部は體事合す。論は是れ體なり。義は是れ事なり。授は是れ體なり。記は是れ事なり。自說は體なり。無問は事なり。名の中に此を含む。是故に說いて、體事合して目くと爲す。

【涅槃】北本涅槃經十八梵行品。

【一三】以下、第三門に約時分別。

餘の六部は、事に隨つて稱を受く。大小隱顯、離して十二と爲す。大乘の中、唯一の方廣と、小乘の十一を合して十二有り。故に『地持』に云はく「十二部經は、唯方廣部のみ是れ菩薩藏なり。餘の十一部は是れ聲聞藏なり」と。『涅槃』に亦言はく「十二部經は、唯方廣部のみ菩薩の所持なり。餘の十一部は、二乘の所持なり」と。理應に齊しく具すべし。何が故に是の如くなる。蓋し乃ち是れ其隱顯門なり。大乘の中に十二有りと雖も、同じく其方廣の理を顯さんが爲の故に、所詮に從つて同じく方廣と名く。小乘の中に亦十二を具す。但小乘の中の方廣經のみは、直に語の廣を以て名けて方廣と爲す。廣理を顯すに非ず。隱に餘の中に入る。故に十二有り。又復大小有無互に彰し、離して十八と爲す。小乘に九有り。大乘亦然り。小乘の九とは、十二部の中より、授記、無問自說、及與び、方廣を除去す。小乘の中には、行因作佛の義を明さず。故に授記無し。法淺くして請ひ易し。故に無問自說經無し。未だ廣理を顯さず。故に方廣無し。大乘の九とは、因緣、譬喩、論議を除去す。大乘の衆生は、利根にして悟り易し。因緣、譬喩、論議を作さずして、方に始めて悟解す。故に此三無く、但餘の九有るのみ。若し大小具の義に就いて之を論ぜば、各十二を具す。合說すれば、通じて二十四部有り。廣すれば則ち無量なり。體相、是の如し。

(一三)第三門の中に、時に約して分つとは、十二部の本生、本事は、唯過去を說く。授記の一門は、唯未來を說く。方廣の一部は、所說の理三世に屬せず。理は平等なるが故に。若し

【二四】以下、第四門に通別を明す。

【陰界等】陰は五陰、界は十八界、諸入は十二入。

詮に從つて別たば、三世に通ずることを得。自餘の八部は、所說一向に三世に通ず。

【二四】第四門の中に、通別と言ふは、十二部の中の修多羅とは、義別して三有り。一に總の修多羅は十二を統苞す。二に通の修多羅は、通じて十二部の中に遍在す。十二部の中に於て、初には略一切を標擧し、通じ名けて修多羅と爲す。三に別の修多羅は、前の總の中に就いて十一に開分し、餘の收めざる者は、還つて復修多羅の中に攝在す。之を名けて別と爲す。別の修多羅は、餘の十一に望めて通有り、別有り。今先づ彼別の修多羅、祇夜、伽陀の三部に就いて相望し、並に餘部に對して共通別を辨ず。此三相望するに、一向に是れ別にして、相通ずるの理無し。餘の九部の義に望むれば、通別有り。通じて之を論ぜば、餘部の中の長行、直說、斯皆是れ共修多羅の攝なり。若し別して之を分たば、唯直說の陰、界、諸入、十二因緣、四諦等の法を取りて修多羅と爲す。餘の九部の中の長行、直說は、悉く皆、餘の九部の中に攝入す。祇夜も亦然り。通じて之を論ぜば、餘の九部の中に重誦の偈有り、一切皆是れ祇夜の所攝なり。若し別して之を分たば、唯重ねて別の修多羅の、所說の法を頌する者を取りて、以て祇夜と爲す。餘の九部の中の重頌偈なる者は、悉く皆、餘の九部の中に攝入す。伽陀も亦爾り。唯重頌せざるを、以て異なりと爲すのみ。次に授記、本事、本生に就いて三部相望し、及び餘の六に對して共通別を明す。此三相望するに、一向に是れ別なり。其時異に、自他別なるを以ての故に。若し餘の六に望むれば、義に通別有り。通じて之を論ぜば、授記の中に餘の六部を具す。若し別して之を分たば、授記の

中に、因緣、譬喩等の事有りと雖も、悉く授記を成じて其餘の義無し。向に通の時を言ひ、授記の中に餘の六部を具すと。云何が具する事を得る。現の事、緣に籍りて人に授記を與ふるは、即ち是れ因緣なり。喩を以て彼未來の所得を況ふるは、即ち是れ譬喩なり。彼無問自說は、即ち是れ自ら陳ぶるなり。彼未來所證の理を顯すは、即ち是れ方廣なり。彼未來所有の神變を說くを未曾有と名く。未來の三事を問答辨宣するは、即ち是れ論議なり。具足すること是の如し。授記を餘に望めて、通別すること既に然り。本生を餘に望めて、通別すること亦然り。通じて之を論ぜば、本生の中に、餘の六部を具す。具する相云何。前の授記に類して、義の在ること知るべし。唯時別なるのみ。若し別して之を分たば、本生の中に餘の義有りと雖も、悉く本生を成じて、其餘の義無し。本事を餘に望むるも、通別齊く然り。唯自他以て別と爲る有るのみ。次に無問及與び論義に就いて二部相對し、及び餘の四に望めて、其通別を辨ず。無問、論議の二部相對するに、一向に是れ別にして、相通ずるの理無し。何が故に是の如くなる。論義經とは、問に因りて答を起す。無問經とは、問起に由らず。是故に通ぜざるなり、餘の四部に望めて、義に通別有り。通じて論ずることを爲せば、無問の中に、因緣、譬喩、方廣、及び未曾有有ることを得。論議の中に亦此四を具す。若し別して之を分たば、無問の中に設ひ餘の義有れども、攝して無問と爲して其餘の義無し。論議の中の別、亦同じく爾り。次に方廣及び未曾有に就きて、二部相對し、幷に因緣、譬喩の二部に望めて、其通別を辨ず。方廣、未有の二部を相望するに、

【一五】以下、第五門に總別を明す。

一向に是れ別なり。事理異るが故に、餘の二部に望むれば、義に通有り別有り。通じて之を論ずれば、方廣、未有の二部の中に、皆因緣、譬喩の義有り。現の事緣に籍りて方廣を說き、或は未有を說くは、即ち是れ因緣なり。喩を借りて彼方廣の理、未曾有の事を況ふるは、即ち是れ喩經なり。若し別して之を分たば、方廣の中に、因緣、譬喩の義有りと雖も、攝して方廣に屬す。未曾有の中の因緣、譬喩は、未曾有に屬す。斯自り以外の有らゆる因緣、譬喩、言說の一切の陰、界、入等の諸法の相を顯示する者をば、判じて、因緣、譬喩經に屬せしむ。次に因緣、譬喩の二部に就いて、相對して以て通別の義を辨ず。此二相望するに、義に通別有り。通じて之を論ずれば、因緣の中に於て亦譬喩有り。故に『涅槃』の中に因緣の義を解す。「小惡を輕しとして以て殃無しと爲すこと莫れ。水の渧微なりと雖も、漸く大器に盈つ」と。水大器に盈るは、即ち是れ譬喩もて因緣經を成ずるなり。譬喩の中に亦因緣有り。現在の事相の因緣に因りて喩況を興すが如きは、是れ譬喩の中の因緣經なり。若し別して之を分たば、因緣の中に設ひ譬喩有るも、攝して因緣に屬せしむ。譬喩の中に設ひ因緣有るも、判じて譬喩に屬せしむ。佛の制戒の如きは、比丘過を犯すの因緣に因りて、說を起すの義強し。假令喩を立つるとも、判じて因緣に屬せしむ。『百喩經』等は、衆生をして喩に因りて法を知らしめんが爲に、縱ひ現の事に因りて譬喩を說くも、喩の法を顯すこと强ければ、判じて喩經に屬せしむ。通別是の如し。

【一五】第五門の中に總別と言ふは、小乘法の中の初の修多羅は、亦總亦別なり。十二を統攝し

【涅槃】北本涅槃如來性品。

て、皆是れ一の修多羅にあらざること莫し。是故に總と名く。中に就いて義に隨つて十一を開分し、餘の收まらざる所は、還つて復修多羅の中に攝在す。是故に別と名く。餘の十一は一向に是れ別なり。大乘法の中の修多羅部を餘の十一に望めては、義、前の釋に同じ。方廣を餘に望めては、亦は總、亦は別なり。十二を統攝して一の方廣と爲す。是故に總と名く。中に於て餘の十一を開出し、餘の收まらざる所は、還つて復方廣部の中に攝在す。是故に別と名く。餘の十一部は一向に是れ別なり。問うて曰はく、『若し修多羅の中に餘の別を統攝せしめ、修多羅をして餘の別部に具して十二と爲さしむれば、『涅槃』の中に四相を開分するに就かば、何んが總別をば合して五相と爲さざる。是の如き類難の法門一に非ず。』釋して言はく、『齊類するも、亦傷くること無きことを得。但、經論の中に、法を彰すこと不同なり。一類すべからず。『云何が不同なる。不同に六有り。一に唯總門は、一乘、一實諦等を說くが如き、三乘を統攝して以て一乘と爲し、二諦を統收して一實諦と爲す。故に名けて總と爲す。是の如き一切なり。二に唯別門は、陰、界、入、十二因緣、四眞諦等の如し。三に總別通門は、六度等の如し。『大品』に說くが如くんば、六波羅蜜一一に主と爲り、皆餘の五を收む。故に通じて總と名く。相を分つこと各異る。故に皆別と名く。總別の義、彼此齊く有り。是故に、名けて總別通門と爲す。大乘の行德は、多く皆同じく爾り。四に總別異門は、經の中に說くが如し。『衆生の佛性、六法に即せず。六法に異らず』と。六法と言ふは、五陰及び我なり。我は唯是れ總、五陰は唯別なり。又三諦の如きは、

一實は唯總、二諦は唯別なり。總別通ぜざるが故に異相と名く。是の如き一切なり。五に亦總亦別、及び一向別門は、彼十力、五眼、六通、三聚戒等の如し。十力の中に於て、是處非處は、亦總亦別なり。餘の九は唯別なり。五眼の中の佛眼の一種は、亦總亦別なり。餘の四は唯別なり。佛に至るの時、四眼を統收して皆佛眼と名く。之を名けて總と爲す。餘の四を分出して、唯實を見るを取りて佛眼と爲す者をば、之を名けて別と爲す。六通の中の神通の一種は、亦總亦別にして、餘の五は唯別なり。三聚戒の中の律儀戒は、亦總亦別、餘の二は唯別なり。是等の門の中に、竝に斯義有り。是故に名けて亦總亦別、及び一向別と爲す。是の如き一切なり。六に非總別門は、詮を廢し對を亡じ、以て道理を論ず。理は總別に非ず。體は假集に非ず。是故に總に非ず。更に所成無し。是を以て別に非ず。上に說く所の涅槃の四相の如きは、乃ち是れ第二の一向別門なり。今此に論ずる所の十二部は、乃ち是れ第五の亦總亦別、及び一向別門なり。法門不同なれば此差異有り。寧んぞ一類すべけんや。問うて曰はく、『若し十一部の中に修多羅部をして、亦總亦別ならしめば、三藏の中の修多羅藏も、是の如くなるを得るや不や。』釋して言はく、『亦得。一切の聖教は、統攝すれば皆是れ一修多羅なり。中に就いて十二部經を開出せば、修多羅部は亦總亦別なり。還即ち此總の修多羅に就いて、分つて三藏と爲す。是故に修多羅藏は、亦總亦別、餘の二は唯別なりと說くことを得。十二部經、之を辨ずること麁爾り。

【一六】第二大段に義法聚中初に佛性の義を明す、中に五門あり、今先づ釋名門。

【如來藏性】一切衆生の性に本來如來の功德を陰藏するをいふ。

【經】北本涅槃二十七師子吼菩薩品。

【大智論】大智度論三十二。

【眞識心】第八識のこと、起信、攝論の眞識は不生滅を取りて眞識とす。

【内外】内とは有情、外とは非情なり。

儀法聚の中、此卷に六門有り。佛性の義。假名の義。入不二門の義。二諦の義。二無我の義。如法性實際の義。

佛性の義に五門分別す。名を釋す一。體を辨ず二。有無と内外と三世と當現の義を料簡す三。因の義を明す四。性の所以に就く。

（一六）第一に名を釋す。佛とは是れ中國の言、此には釋して覺と名く。妄を返して眞に契ひ、實を悟るを覺と名く。佛を擧げて性を樹つ。故に佛を明す。言ふ所の性とは、釋に四義有り。一には種子因本の義。言ふ所の種とは、衆生の自實如來藏性より大覺を出生し、佛の與に本と爲る。之を稱して種と爲す。種は猶し因の如し。故に經に說いて言はく、「云何が性と名くる。性とは謂ゆる、阿耨菩提中道の種子なり」と。『大智論』の中に亦云はく、「性とは本分の種に名く。黃石の中の所有は金性、白石は銀性なるが如く、一切衆生に涅槃の性有り」と。斯文顯たり。二に體の義を性と名く。體を說くに四有り。一に佛因の自體を名けて佛性と爲す。謂はく、眞識心なり。二に佛果の自體を名けて佛性と爲す。謂はゆる法身なり。第三に通じて、佛因佛果に就いて、同一覺性なるを名けて、佛性と爲す。其れ猶世間の麥因、麥果、同じく一麥性なるがごとし。是の如き一切なり。當に知るべし、是性は因果に異らず、因果恆に別なれども、性體殊らざることを。此前の三義は、是れ能知の性なり。局りて衆生に就いて、非情に通せず。第四は通じて說かば、諸法の自體なり。故に名けて性と爲す。此性は、唯是れ諸佛の窮むる所なり。佛に就いて以て諸法の體性を明す。故に佛性と云ふ。此後の一義は、是れ所知の性なり。其内外に通ず。斯等は、皆是れ體の義を性と名くるなり。三に不改を性と名く。不改に四有り。一に因の體不

【經】北本涅槃七如來性品。

【經】涅槃經三十六迦葉菩薩品。

【經】楞伽經。

改なり。之を說いて性と爲す。是れ因常にして果と爲らざるを說いて、不改と爲すと謂ふには非ず。此れ因の時に就いて、緣に隨つて返つて非因と爲すべからず。故に不改と稱す。故に經に說いて言はく「若し衆生を殺して佛性を喪滅せば、是の處有ること無し」と。又復說いて言はく「因不改とは、果を得るの時、因の名改まると雖も、因の體は亡せず。因の體は卽ち是れ如來藏性なり。顯れて法身と爲れども、體は變易無し。有爲の果を得て、因謝するが如きには非ず」と。體に就いて以て論ず。故に不改と名く。二には果の體不改なるを說いて、名けて性と爲す。一得常然にして、壞すべからざるが故に。第三には、通じて因果の自體不改なるに就いて性と名く。麥は因果麥にして、性改まらざるが如し。不改を以ての故に、麥を種ゑて麥を得、餘の物を得ず。是の如き一切なり。佛性も亦爾り。佛因佛果、性不改なるが故に衆生究竟して、必ず當に佛と爲りて、餘法を作さざるべし。經に佛性を說く。旨要は斯に在り。第四に、通じて諸法の體實にして改まらざるを說いて性と名く。復緣じて內外染淨を別つと雖も、性は實に平等湛然として、一味なるが故に不改と曰ふ。此は是れ第三の不改を性と名くるなり。四に性別を性と名く。性別に四有り。一には因の性、果に別異なるを明す。二には果の性、因に別異なるを明す。第三には通じて、因果の體性、非情に別異なるに就く。故に經に說いて言はく「非佛性、一切の草木石等の爲に佛性を說く」と。四に一切諸法の理實は、情相虛妄の法に別なるに就いて、之を名けて性と爲す。故に經に說いて言はく「如來藏とは非我衆生なり。命に非ず、人に非ず」

【經】勝鬘經。

【一七】以下、第二門に佛性の體狀を辨ず。

【經】北本涅槃經二十二。

【性となす義等】一佛性を明す。

と。又復經に言はく、「佛性は陰、界、入の中に住すと雖も、而も實には陰、界、入に同じからず。」此界別なるを以ての故に。名けて性と爲す。佛性の名義、麁判ずること是の如し。門別(一七)第二に、次に性の體狀を辨ず。然るに佛性とは、蓋し乃ち法界門の中の一門なり。門別異なりと雖も、妙旨虛融して、義在らずといふこと無し。在らずといふこと無きが故に、緣として性に非ざること無し。緣として性に非ざること無きが故に、以て定論し難し。是を以て經の中に、或は生死を說いて、以て佛性と爲し、或は涅槃を說いて、以て佛性と爲し、或は說いて因と爲し、或は說いて果と爲す。或は復說いて非因非果と爲し、或は說いて空と爲し、或は說いて有と爲す。或は復說いて非空非有と爲し、或は說いて一と爲す。或は復說いて異と爲し、或は說いて不一不異と爲し、或は說いて有と爲し、或は說いて無と爲す。或は復說いて非有非無と爲し、或は說いて內と爲し、或は說いて外と爲す。或は復說いて非內非外と爲し、或は說いて當と爲す。或は說いて現と爲す。或は復說いて非當非現と爲し、或は色心を說いて以て佛性と爲す。或は復言はく、非と。或は一切の善惡無記を說いて、以て佛性と爲す。或は復言はく、非と。是の如き一切、佛性に非ざること無し。復異論すと雖も、皆一性の門の中に入らずといふこと莫し。性の義既に然り。執して是非を定めば、旨を失はずといふこと無し。經に摸象の喩を說く。失此に在り。斯等の諸法、云何が性と名くる。性と爲すの義、備に初門の如し。良に諸法性にあらずといふことと無きを以ての故に、題を詮し辨を異にして、廣略定め難し。或は立てて一と爲し、乃

【或は分ちて等】以下、二佛性を明す。
【涅槃經二十七】北本涅槃經二十七。
【二莊嚴】福智二莊嚴。
【經】北本涅槃經三十六。
【經】北本涅槃經二十七。
【經】北本涅槃經二十七。

至樂多なり。言ふ所の一とは、復緣じて染淨の殊を別つと雖も、性旨一味にして、湛然たること虛空の如し。故に一と云ふなり。或は分ちて二と爲す。二に四門有り。一に緣に約して二を分つ。緣に染淨有り。染は謂はく生死、淨は謂はく涅槃なり。生死、涅槃、體皆是れ性なるが故に『涅槃』の中に、獅子菩薩佛性を問ふ。如來讚じて言はく、「獅子菩薩二莊嚴を具して、能く一二を問ふ。佛二嚴を具して能く一二を答ふ。一には謂はく涅槃、二には謂はく生死なり。二に體用に二を分つ。緣を廢して性を論ずれば、性常に一味なり。是れ其體なり。緣に隨つて性を辨ずれば、性に淨穢有り。是れ其用なり。三に能所に二を分つ。一には能知の性、二には所知の性なり。能知の性とは謂はく、眞識心なり。此眞心覺知の性なるを以ての故に、無明と合すれば便ち妄知を起し、無明を遠離すれば便ち正智と爲す。世人の報心覺知の性有るを以ての故に、昏氣と合すれば夢知を起さしめ、昏氣を遠離すれば正智を起さしむるが如し。若し眞心覺知の性無ければ、終に妄知無く、亦正知無し。草木等の智性無きが故に、夢の知有ること無く、亦悟の知無きが如し。此能知の性は、局りて衆生に在りて非情に通ぜず。故に經に說いて言はく、「非佛性の爲に佛性を說く」と。非佛性とは、謂ゆる、一切の墻壁瓦石等なり。又經に說いて言はく、「凡そ心有る者は、悉く是れ佛性有り」と。此等は皆是れ能知の性なり。所知の性とは、謂はく、如法性、實際、實相、法界、法性、第一義空、一實諦等なり。經の中に說くが如し。「第一義空を名けて佛性と爲す」と。或は言はく、「中道を名けて佛性と爲す」と。是の如き等の

【馬鳴の論】起信論。
【華嚴經】三十六性起品。
【涅槃】二十六高貴德王菩薩品。

言は、當に知るべし皆是れ所知の性なり。此所知の性は、內外に該通す。故に經に說いて言はく、「佛性は空の如く、一切處に遍す」と。四に果に對して二を分つ。一には法佛性、二には報佛性なり。法佛性とは、本有の法體と彼法佛とは、體に增減無く、唯隱顯、淨穢有るを異と爲す。鑛中の金と出鑛の時と、體に多少無きが如し。亦凍水と消融の時と、體に增減無きが如し。報佛性とは、本無の法體なり、唯第八眞識の心の中に於て、其方便可生の義有り。鑛中の金に器具に造作すべきの義有るも、器具已に現の中に有ること非ざるが如し。樹子の中に未だ樹體有らず、唯方便可生の義有るが如し。若し生の性無くんば、無量百千の方便を於てすと雖も、佛生ずべからず。燋種の中には、樹生ずべからざるが如し。『勝鬘』に說くが如し「如來藏の中に、過恒沙の一切佛法を具す」と。『如來藏經』に說かく、「衆生の中に、如來の一切種の德を具足す」と。馬鳴の論に說かく、「本より以來、一切性功德の法を具足す」と。『華嚴經』に說かく、「一切衆生の心、微塵の中に、無師智、無礙智、廣大智等を具す」と。當に知るべし皆是れ法佛の性なり。『涅槃』に說くが如し、「衆生の身中に未だ德體有らず。樹子の中に未だ樹體有らず、箜篌の中に未だ聲體有らざるが如し」と。是の如き等の言は、當に知るべし皆是れ報佛の性なり。問うて曰はく、「一向に法佛の性は、本有の法體と言ふ。其相云何。」『妄想心の如きは、未だ緣に對して現に煩惱を起さずと雖も、體は是れ一切の過恒沙等の諸の煩惱の性なり。眞心も是の如し。未だ緣に從つて現に諸德を成ぜずと雖も、體は是れ一切の三昧、智慧、神通、解脫、陀羅尼等の一切の

【或は分ちて等】以下、三佛性を明す。
【涅槃】三十五迦葉菩薩品。
【經】勝鬘經。

德の性なり。是諸德の性は、同體緣集して、不離、不卽、不異、不脫なり。一相是の如し。或は分ちて三と爲す。三に四門有り。一には緣に約して三を分つ。「涅槃」に說くが如し、「一には不善の五陰、二には善の五陰、三には佛果の五陰なり」と。不善の五陰とは、佛性、外凡の五陰を集成す。陰卽ち是れ性なり。凍るも是れ水なるが如し。故に經に說いて言はく、「生死の二法は是れ如來藏なり」と。善の陰と言ふは、佛性、三乘の聖人の無漏の五陰を集成す。陰は卽ち是れ性なり。果の陰と言ふは、佛性、佛果の五陰を集成す。陰は卽ち是れ性なり。湯は是れ水、鐶釧は是れ金なるが如し。緣に約し實に就いて以て三種を分つ。一には染性、二には淨性、三には非染淨の性なり。性、生死に在るを名けて染性と爲す。性、涅槃に在るを名けて淨性と爲す。此二は緣に約し實に就いて性を論ず。性の外に緣無く、緣動に隨つて以て變ぜざるべきが故に、古今一味なり。是故に名けて非染淨性と爲す。三に體、相、及び用、以て三種を分つ。馬鳴の說くが如し。一には體大。謂はく眞如性。二には相大。謂はく眞如の中に過恒沙の性功德の法を具す。三には用大。謂はく眞心の中に、備に法界の染淨の用を起す。此三は後の八識章の中に、具に廣く分別するが如し。四に果に對して三を論ず。一には法佛性、二には報佛性、三には應佛性なり。法報兩性の義は前に釋するが如し。應佛性とは、應佛に二有り。一に法應は、現化法門の力を得るを以ての故に、普門皆現ず。二に報應は、本大悲大願力を以ての故に、物に隨つて異に示す。法應が家の性は本有の法體なり。如來藏の中の現像起法門、是れ其體なり。報應が

【或は說いて等】次に四佛性を明す
【涅槃】北本涅槃經三十五。
【闡提】イッチャンティカ(Icchantika) 斷善根と譯す。本來解脫の因を缺きて成佛する能はざるものの謂

家の性は本無の法體なり。唯方便可生の義有り。或は說いて四と爲す。『涅槃』に說くが如し。「一には闡提の人に有り、善根の人に無し。二には善根の人に有り、闡提の人に無し。三には二人倶に有り。四には二人倶に無し」と。是義云何。佛性に四有り。一には不善の陰、二には善の五陰、三には佛果の陰、四には理性なり。四の中、前の三は、用に隨つて以て分つ。後の一は實に就く。不善の陰とは、凡夫の五陰は眞妄の所集なり。唯眞生ぜず、單り妄成ぜず、眞妄和合して方に陰の生ずる有り。陰を攝し妄に從ふは、唯妄心の作なり。夢中の身は昏夢心の作なるが如く、波は風の作なるが如し。陰を攝して眞に從ふは、皆眞心の作なり。夢中の身は皆報心の作なるが如く、波は水の作なるが如し。眞に從ふの義邊を說いて佛性と爲す。『勝鬘經』の「生死の二法は是れ如來藏なり」と、其義相似たり。善の五陰とは地上の身なり。通じて之を論ずれば、地前にも亦有り。此陰は、眞心と緣治と合して成ず。陰を攝して緣に從ふは緣治の所造なり。莊嚴の具は模樣の所作なるが如し。陰を攝して眞に從ふは眞心の所爲なり。莊嚴の具は眞金の所作なるが如し。眞作の義邊を說いて佛性と爲す。佛果の陰とは、是れ佛果の德なり。前の善の陰と大況相似たり。滿、不滿の異あるのみ。理性と言ふは、緣を廢して實を談ず。實の處に緣無し。緣無きを以ての故に、眞體一味、非因、非果なり。『涅槃』の中の非因非果と其理一なり。四の中の初の一は、闡提の人には有り、善根の人には無し。第二の善陰は善根の人に有り、闡提の人に無し。第三の果陰は二人倶に無し。第四の理性は二人倶に有り。通じて之を論ずれば、三

【經の中に等】重ねて四佛性を明す
【經】北本涅槃經二十七。
【經】十地經。
【經】北本涅槃經二十七。
【經】北本涅槃經二十七。
【又經に等】次に五佛性を說く。
【涅槃】北本涅槃經二十七。

人倶に有り。佛にも亦有るが故に。四種是の如し。經の中に、或は復性を說きて四と爲す。一には是れ因性、二には是れ果性、三には是れ因果性、四には非因果性なり。因性と言ふは、謂ゆる、生死十二因緣、能く菩提の與に因緣と作る。故に名けて佛性と爲す。是を以て經に言はく「譬へば胡荽能く熱病の與に因緣と作る。故に名けて熱病と爲すが如し。因緣も亦爾り」と。問うて曰はく「因緣は是れ虛妄の法なり。云何が能く菩提の與に因と作る。」「然るに彼生死十二因緣の起ること、妄情は眞如に託して立つに由る。」故に經に說いて言はく「十二因緣は皆眞實第一義心に依る」と。妄に就いて之を論ずれば是れ虛構なりと雖も、眞緣に據つて攝すれば斯れ實ならざること無し。緣を窮めて實を悟らば、便ち大覺を成ず。是故に因緣能く佛因と爲る。故に經に說いて言はく「因とは謂ゆる十二緣なり」と。果性と言ふは、謂はく、大涅槃如來藏性なり。體淨なりと雖も、緣に從つて染と說く。染の時を因と爲す。復對治に隨つて染を息むるを淨と爲す。淨相始て顯る、之を說いて果と爲す。果德寂滅なるを名けて涅槃と爲す。故に經に說いて言はく「果とは謂ゆる、大涅槃なり」と。是因果とは、謂ゆる、十二緣を觀察し、智の未だ滿たざるを因と爲し、滿足するを果と爲すなり。此は是れ方便有作の行德なり。故に經に說いて言はく「是因是果は、十二緣所生の法の如し」と。非因果とは、如實法性は皆染淨に通じて、而も因果に非ざるなり。故に經に說いて言はく「非因非果を名けて、佛性と爲す」と。緣を廢して實を談ずれば、體に就いて指すなり。又經の中に說くが如くんば、性を五と爲す。「涅槃」

に說くが如くんば、一には因性、二には因因性、三には果性、四には果果性、五には非因果性なり。因性と言ふは、謂はく、十二緣能く涅槃の與に因と爲るが故に。問うて曰はく、「因緣は是れ生死の法なり。云何が能く涅槃の與に因と作る。」釋して言はく、「因緣は眞妄集成す。緣を攝して妄に從ふは、妄心の所爲なり。虛誑無法にして佛性と名けず、緣を攝して實に從ふは、皆眞心の作なり。故に『地經』に言はく「十二因緣は、皆眞心の作なり」と。眞作に由るが故に、之を窮むれば實を得るをもて、便ち涅槃と名く。故に因と爲すことを得。因の故に性と名く。義前に釋するが如し。「因因と言ふは、謂はく、菩薩の道なり。道の起るは、必ず十二緣に由つて生ず。因に從つて因を起す。故に因因と曰ふ。然るに此は通じて證教の兩行を說いて、以て因因と爲す。獨り教行のみには非ず。果性と言ふは、謂はく大菩提なり。果果と言ふは、謂はく、大涅槃なり。前に果と言へるは、方便と菩提、有作の果なり。此果果とは性淨涅槃、無作の果なり。通じて之を論ずれば、性淨、方便、俱に是れ菩提、並に是れ涅槃なり。兩門を別たんが爲に、名を異にして互に說く。此之二果は復同時なりと雖も、義に隨つて之を分たば、菩提を以て、彼涅槃を顯すを得るをもて、菩提は能顯の義なるをもて、說いて因と爲し、涅槃は所顯の義なるをもて、說いて果と爲す。然るに彼菩提は、返つて前の因に望めて、已に果の名を受く。涅槃は是れ彼果が家の果なり。故に果果と云ふ。云何が因の中の因緣の理を單に說いて因と爲し、所生の行德を名けて因因と爲し、乃至果の中の方便菩提を單に名けて果と爲し、性淨の

【又經の中等】次に六佛性を明す。
【彼迦葉品】北本涅槃經三十五迦葉菩薩品。
【須陀斯陀】須陀洹と斯陀含のこと。
【那含】阿那含のこと。
【彼如來性品】北本涅槃經十如來性品。
【種性解行】總じて地前三賢の菩薩をいふ。

體を名けて果果と爲すや。彼因の中には始終の方便、理に依りて行を起すを以て、是故に理本を直に名けて因と爲し、行を因因と爲す。果は終極に據りて、德を攝し、體に歸するをもて、德を名けて果と爲し、體を果果と名く。然るに彼果の中には、方便菩提を說いて、名けて果性と爲し、淨涅槃を別して果果と爲す。何が故に因の中には、證教兩行を通じて因因と爲すや。果を以て因に類するに、因中の教行を、總に名けて因と爲し、證を因因と爲すべし。但し彼因の中の位分參差して、後を別つ。凡時の生死をば、本に就いて因と說き、聖道の中の證教殊りと雖も、同じく前に依りて起るを但因因と名く。果は先後無し。故に同時に就いて、體德を二に分つ。義の左右に隨つて、隱顯して言ふのみ。非因果とは、釋前に異らず。又經の中に准ずるに、乳酪等の喩、性を分つて六と爲す。喩相如何。一には雜血乳、二には出血乳、三には是れ酪、四には生蘇、五には熟蘇、六には醍醐なり。此を以て性に況するに差別に六有り。四門に分別す。第一は彼迦葉品の中に依る。凡夫の佛性は雜血乳の如し、須陀、斯陀の小煩惱を斷ずる所有の佛性は、出血乳の如く、那含の人の佛性は酪の如く、羅漢の佛性は生蘇の如似く、緣覺、菩薩の性は熟蘇の如く、佛は醍醐の如し。第二は彼如來性品の說に依る。凡夫の佛性は雜血乳の如く、聲聞の佛性は出血乳の如く、緣覺は酪の如く、菩薩の佛性は生、熟蘇の如く、七地已還は生蘇の如似く、八地已上は熟蘇の如似く、佛は醍醐の如し。第三に通じて說かば、凡夫、二乘、乃至大乘善趣の人の所有の佛性は、雜血乳の如く、種性、解行は出血乳の如く、初地は酪の如

く、二地已上乃至七地は生蘇の如似く、八地已上は熟蘇の如似く、佛は醍醐の如し。第四門の中、凡夫、二乘、地前の菩薩の所有の佛性は、雜血乳の如く、初地の佛性は出血乳の如く、二地已上の佛性は酪の如く、八地已上の性は生蘇の如く、後身、佛性は猶熟蘇の如く、佛は醍醐の如し。此後の兩門は、義有りて文無し。或は復義に隨ひ、性を分つて七と爲す。經の中に說くが如し。「衆生の佛性は六法に卽せず、六法に異らず」と。六法に卽せず。之を以て一と爲す。六法に異らず。卽ち以て六と爲す。前に通じて七と說く。六法と言ふは、謂ゆる、五陰及以び我なり。何者か是れ我なる。五陰の和合、假名の集用を說いて、名けて我と爲す。眞性緣起して此六を集成す。六は卽ち是れ性なり。故に異らずと云ふ。性體平等にして、妙に名相を出づるを、稱して卽せずと曰ふ。又經に說くが如し。「涅槃河の中に七衆生有りて、性水を離れず。性は人に隨つて分つをもて、亦七種を分つ。七衆生とは、一には是れ常に沒す。二には是れ暫く出でて還沒す。三には出で已りて卽ち住す。四には住し已りて方を觀ず。五には方を觀じ已りて行く。六には行き已つて後住す。七には水陸倶に行く」と。然るに此所說の差別に五有り。一は常に沒するの人は、一闡提の常に三塗に沒するに喩ふ。暫く出でて還沒するは、彼外凡乃至小乘の煗頂の人に喩ふ。善業を作すと雖も、堅固ならざるを以て還三惡に墮す。故に還沒と名く。亦彼求有の凡夫乃至念處を取りて、以て還沒と爲す。煗頂已上は聖性成就す。百千世を逕ても必ず解脫を得て、住人と爲ることを成ず。出で已りて卽ち住するは、彼忍心、世第一法に喩ふ。此

【後身】最後身の意。
【或は復義に等】次に七佛性を明す
【經】涅槃經三十二師子吼菩薩品。
【經】北本涅槃經三十六迦葉菩薩品
【三塗】火塗、血塗、刀塗、順次に地獄、畜生、餓鬼の三惡趣に同じ。
【煗頂】煗位、頂位とは內凡の初位、ここに四諦を觀じて十

六行相を修し、頂位とは四諦を觀じて十六行相を修するは前位に異ならざるも、此位に入らば、斷善根の人となることなし、共に四善根の一なり。

【念處】四念處觀或は四念住觀といふ身、受、心、法これにして、五停心觀の後に修する法。

【忍心世第一法】忍位は四善根中第三位、この位に四諦の理を信認決定す。世第一法とは有漏世間法中の最勝、一刹那の心を以て欲界苦諦下の一行相を觀じて直に見道の位に入るなり。

【五停心】小乘三賢の第一、不淨、慈悲、因緣、界分別、數息の五種觀法を修して五種の過失を停心するなり。

人畢竟じて永く三途を出づ。故に說いて住と爲す。亦燸頂と倶に住と名くべし。方を觀るは、須陀洹の人四諦を觀察するに喩ふ。行くを斯陀に喩へ、住するを那含に喩へ、水陸倶に行くをば、阿羅漢、緣覺、菩薩、乃至如來に喩ふ。是一門竟る 第二に、常に沒するをば、外の凡夫常に三有に沒するに喩ふ。暫く出でて還沒するをば、五停心、總別念處に喩ふ。聖性未だ成ぜず、還つて復退するが故に。住をば燸等に喩ふ。聖性成就して必ず涅槃を得。故に名けて住と爲す。餘は皆前の如し。此二門竟る 第三に常に沒するをば、外の凡夫に喩ふ。暫く出でて還沒するをば、五停心、總別念處に喩ふ。住するをば四賢忍心に喩ふ。方を觀ずるをば、四沙門果に喩ふ。觀じ已りて行くをば、緣覺の四諦を觀じ已りて因緣に趣入するに喩ふ。行き已りて住するをば、菩薩に喩ふ。煩惱を捨離するが故に名けて行と爲す。衆生を化せんが爲に三有を捨てず。之に因りて住と爲す。水陸倶に行くをば如來に喩ふ。此三門竟る 第四に、常に沒するをば、外の凡夫に喩ふ。暫く出でて還沒するをば、五停心、總別念處に喩ふ。住をば燸等、乃至大乘の解行の人に喩ふ。方を觀ずと言ふは初地に喩ふ。觀じ已りて行くをば、二地上乃至七地に喩ふ。行き已りて住するをば、八地上乃至十地に喩ふ。水陸倶に行くをば如來に喩ふ。此四門竟る 第五に、常に沒するをば、一切の凡夫、二乘に喩ふ。常に凡夫二乘地に住するが故なり。暫く出でて還沒するをば、彼大乘善趣の人に喩ふ。未だ決定せずして退失有るべきが故に、還沒すと名く。住をば彼種性、解行に喩ふ。方を觀ずる已後は前の第四に同じ。此等の差別は義に隨つて左右す。性に依らずといふこ

【總別念處】總相念處とは四念處を總じて觀じ、別相念處とはそを一一に觀ずるをいふ。

【四沙門果】預流果、一來果、不還果、羅漢果、沙門の行を修せしものの得果なり。

【又人に隨つて等】次に八佛性を明す

【又寶性論等】次に十佛性を明す。

【般若】プラジュニャー(Prajñā)智慧のこと。

【三昧】サマーディ(Samādhi)靜慮と譯す。

と莫し。性は此等に隨ふ。故に七種有り。又人に隨つて、別して性を分つて八と爲す。當體を一と爲し、前に通じて八と爲すなり。『寶性論』の如きは、性を說いて十と爲す。一には體性、二には因性、三には果性、四には業性、五には相應性、六には行性、七に時差別性、八には遍處性、九には不變性、十に無差別性なり。彼論の偈に言はく、「體及び因、果、業、相應及與び行、時差別、遍處、不變、無差別なり」と。初に體性とは、論に釋するに三有り。一には如來藏、染時の體なり。二には法身、淨時の體なり。卽ち前の藏の體顯るるを法身と名く。此二は唯衆生に就いて、以て三を說く。眞如の體旨は染淨內外の諸法に通じて、體融じて一味なるが故に說いて如と爲す。義に隨つて體を辨ずれば、名乃ち無量なり。且く隱と顯と理實とに隨つて三を論ず。此三は乃ち是れ諸法の體なり。故に體性と名く。因性と言ふは、性、緣起に從つて行德を集成す。行德未だ圓かならざれば、之を說いて因と爲す。因行衆しと雖も、且く四種を論ず。一には信心、二には是れ般若、三には是れ三昧、四には是れ大悲なり。故に彼論に言はく、「信心と般若、三昧、大悲等とは、以て四障を治し四果を得るが故に、且く四と說くのみ」と。四障と言ふは、彼に說くが如し。「一に闡提謗法、二に外道著我、三に聲聞畏苦、四に緣覺捨心、諸の衆生を捨つるなり」と。此障を對治するが故に四因と說く。大乘を信ずるが故に謗法を斷除す。般若は實に照して著我を遠離す。三昧の空定は畏苦を除滅す。大悲は物に隨つて捨心を對治す。四果を得とは、謂はく、如來の淨、樂、我、常を得るなり。此能有るを以ての故に四因を說

【經】北本涅槃經三十二師子吼菩薩品等。
【般若波羅蜜】プラジュニャーパーラミター(Prajñā-pāramitā)智度と翻ず。菩薩が一切諸法を照了して通達無礙なるをいふ。
【首楞嚴定】シューラガマ、サマーディ(Śūraṅgama-Samādhi)勇健定と譯す、分別して諸三昧の行相の多少、深淺を知ること、大將の諸兵の力を知るが如きをいふ。
【意生身】初地、已上の菩薩の身、衆生濟度の爲に意の如く受生しうる身に名く。

く。因に就き性を辨ず。故に因性と名く。是を以て經に言はく、「佛性とは大信心と名け、般若波羅蜜と名け、首楞嚴定と名け、大慈悲と名く」と。斯文顯なり。果性と言ふは、佛性の體は緣起して德を成ず。德の滿るを果と名く。果德樂しと雖も、且く四種を論ず。一には淨、二には我、三には樂、四には常なり。故に彼論に云はく、「淨、我、樂、常等の彼岸功德の果は、四倒に翻じ、四障を除滅し、四因に對するを以ての故に、果を說いて四と爲す」と。四倒に翻ずとは、聲聞は佛の無常、無樂、無我、不淨を計ること、凡夫の法に同じきが故に、如來の淨、我、樂、常を說く。四障を除くとは、一には緣相。謂はく、無明地、彼を對除するが故に、果を說いて淨と爲す。二には因相。謂はく無漏業なり。此業有るを以て、能く變易を招いて、自在を得ず。彼を對治するが故に佛の眞我を說く。三には生相。謂はく意生身は、是れ苦法なるが故に眞樂を得ず。彼を對治するが故に、果を說いて樂と爲す。四には壞相。謂はく、變易、死は眞常を得ず。彼を對除するが故に果を說いて常と爲す。四因に對すとは、信は謗法を治して其淨果を得、慧は妄我を除きて佛の眞我を得、定は畏苦を除いて佛の眞樂を得、大悲心を以て有を捨てざるが故に、佛の眞常を得。然るに此四果は、體相各二有り。淨の中の二とは、一には是れ因相、本來無染なり。二には是れ勝相、染を離れて淸淨、此れ方便淨なり。我の中の二とは、一には外道の虛妄の著我を離る。二には聲聞の倒見の無我を離る。樂の中に二有り。一には諸苦を離る。二には煩惱を除く。常の中の二とは、一には有爲の斷邊を離れ、二には無爲の常邊

【經】勝鬘經。

を離る。斯等の差別は同じく皆是れ果なり。果に就いて性を辨ず。故に果性と言ふ。業性と言ふは、業性に二有り。一に苦を厭ふ。二に涅槃を求む。故に彼論に言はく、「苦を厭ひ、涅槃を求め、願を欲す等の諸業は性に依りて起作す。故に名けて業と爲す」と。業は即ち是れ性なり。故に業性と名く。是を以て經に言はく「若し如來藏無くんば、種種苦を厭ひ涅槃を求むることを樂ふを得ず」と。然に上の因性は善趣に在り。今此業は、種性以前、大乘善趣の欣厭の心なり。相應性とは因及び果を明す。性に即して起り性と相應すること、莊嚴具と金と相應するが如くなるを相應性と名く。因相應の中の義に、別して三有り。一に大乘を信ずるを、法身の因と爲す。二に定慧を佛智の因と爲す。三に悲心は、彼如來の大悲の與に因と爲す。此等は皆悉く性と相應す。果相應の中に亦三種有り。一に五通。二に知漏盡。三に漏盡無垢。此三果、性を離れざるを果相應と名く。相應の義に就いて、以て性を辨ず。故に相應性と名く。行性と言ふは、行に別して三有り。一に妄見の凡夫、顚倒の見を起す。二に實見の聖人、妄相の心を離る。三に如來、戲論の習無し。三行殊りと雖も性體は二ならず。其れ猶種穀牙莖等の異あれども、穀性別無きがごとし。行に就いて性を辨ず。故に行性と云ふ。故に彼論に言はく、「實を見ざる者を說いて凡夫と言ふ。聖人及び佛は、能く衆生の如來藏中の眞如は無差別なりと見る」と。時差別とは、三種の時有り。一に不淨の時は、位凡夫に在り。二に淨の時は、謂ゆる、菩薩なり。三に善淨の時を、名けて如來と爲す。故に彼論に言はく「不淨有り、淨有り、及以び善淨等」と。是

【經】北本涅槃經二十七師子吼菩薩品。
【又人に隨って等】次に三十三佛性を明す。

の如く次第に衆生と菩薩と佛とを說く。時差別に就いて、以て性を分つが故に差別性と名く。遍處と言ふは、處別に三有り。一に凡夫、二に菩薩、三に如來なり。三處殊りと雖も、性有らずといふこと無し。器異りと雖も、空在らざること無きが如し。故に遍處と名く。遍處の義に就いて、以て性を辨ずるが故に遍處性と名く。故に彼論に言はく「空の一切に遍くして、空にして無分別なるが如く、自性無垢心も亦遍くして無分別なり」と。不變性とは、前の三時に就いて性の不變を明す。一には凡夫の時の性體不變なり。不變に三有り。一に邪念の風、吹變すること能はず。二に業結の水、潰變すること能はず。三に病死の火、燒變すること能はず。二には菩薩の時の性體不變なり。不變に二有り。一に生不變、二に滅不變なり。故に彼論に言はく「菩薩の佛性は不生不滅なり」と。三には佛の時に就いて體性不變なり。不變に四有り。一に生、生ずること能はず。二に老、老すること能はず。三に病、病すること能はず。四に死、死すること能はず。是を以て如來は、常恆に清涼體眞不變なり。不變の義に就いて以て性を辨ず。故に不變性と名く。無差別とは、其樂義を明すに體無差別なり。故に彼論に言はく「法身及び如來の眞諦と涅槃とは、功德相離れざること、光の日を離れざるが如し」と。當に知るべし、此等は門に隨つて異に辨ずるも、而も體別ならざることを。故に經に說いて言はく「佛即ち涅槃、涅槃即ち是れ第一義空、第一義空即ち是れ實諦、實諦即ち佛性なり」と。是の如き等なり。無差別の義に就いて以て性を辨ずるが故に、無差別性と名く。又人に隨つて別つ。或時は性を分ちて三十三と爲

【涅槃】三十四迦葉菩薩品。

【經】北本涅槃經三十六。

す。何者か是なる。『涅槃』に說くが如くんば、如來の佛性に義別して七有り。一に常、二に樂、三に我、四に淨、五に眞、六に實、七に名けて善と爲す。後身の佛性に義別して六有り。一に常、二に淨、三に眞、四に實、五に善、六に少見なり。我は是れ佛の義、佛の究竟自在に同じきことを得ざるが故に我を說かず。樂は涅槃の義なり。分相涅槃は唯佛果に在り。永安なることを得ず。故に樂を說かざるも、理實には通じて有り。九地の佛性に義別して六有り。一に常、二に淨、三に眞、四に實、五に善、六に可見なり。六七八地の佛性に五有り。一に眞、二に實、三に淨、四に善、五に可見なり。然るに向の九地は聞見の窮り、十地は眼に見、如來は究竟す。故に說いて常と爲す。八地已還は未だ彼に同じきことを得ず。略して常の義を隱すも、理實には之有り。初歡喜より乃至五地の佛性に五有り。一に眞、二に實、三に淨、四に可見、五に善不善なり。其未だ般若の空を得ざるを以て、但能く麤惑を除いて、微障未だ遣らざれば、善不善と名く。地前の佛性は、略して分別すること無し。此は則ち初地乃至如來に、二種の五種、兩種の六種、一種の七種、都合其二十九種有り。彼凡夫、聲聞、緣覺、大力の菩薩の四人の佛性に通ずれば、則ち三十三種の佛性有り。緣に隨つて廣く性を分たば、乃ち無量なり。故に經に說いて言はく、「佛性は一法に名けず、百法に名けず、千法に名けず」と。當に知るべし、一切の善不善は、斯を佛性と名くるを。

【一八】佛性を明す
第三門中に四の差別ある中、今初に有無を明す。
【經】北本涅槃經三十五迦葉菩薩品

第三門の中に差別して四有り。一に有無を明す。二に内外を明す。三に世論に就く。四に當見を辨ず。

（一八）有無と言ふは、義に兩門有り。一には緣に約して以て論ず。二には體に就いて分別す。緣に約すと言ふは、經に說いて四有り。一には闡提の人に有り、善根の人に無し。二には善根の人に有り、闡提の人に無し。三には二人俱に有り。四には二人俱に無し。義上に辨ずるが如し。今重ねて之を論ずれば、闡提に有りとは、不善の性有るなり。佛性緣起して不善と爲す。故に不善の法は即ち是れ佛性なり。此不善の性は、闡提には則ち有り、善人には無し。善根の人に有り、闡提に無しとは、謂はく、善の性なり。佛性緣起して三乘の無漏有り。之を名けて善と爲す。善は即ち是れ性なり。故に善性と名く。此性、聖に有り、闡提に無し。二人有りとは、同じく理性有るなり。二人無しとは、同じく果性無きなり。體性に就いて有無を辨ずとは、佛性の體亦有と說くことを得、亦無と說くことを得、亦說いて非有非無と爲すことを得るなり。言ふ所の有とは、如來藏の中より法界恆沙の佛法を緣起す。之を說いて有と爲す。言ふ所の無とは解に兩義有り。一に離相を無と名く。淨醍醐の體は是れ有なりと雖も、而も青、黃、赤、白等の相無きが如し。亦一切衆生の心識の體は是れ有なりと雖も、大小長短等の相有ること無きが如し。佛性も亦爾り。體は是れ有なりと雖も、而も一相、無相の義無し。後の八識章の中に具に辨ずるが如し。二に無性を無と名く。如來藏の中、恆沙の佛法は同一體性なり。互に相緣集して、一法の別して自性を守ること有ること無し。諸法を說いて、之を以て常と爲すが如きは、諸法を離れて外に

【經】地持經六菩提品。

【內外といふ等】二に內外を明す。

別に一の常性の得べきこと有る無し。諸法齊く爾り。故に說いて無と爲す。有無是の如し。非有無とは、非は、謂はく、有無の兩法並に說いて、有無に非ずと爲すも、亦有無の二法を除捨して、有無に非ずと爲すに非ず。亦有無合して一法と爲して、有無に非ずと爲すに非ず。亦有無二法の中に、別して一法を立てて、有無に非ずと爲すに非ず。當に知るべし、彼無法を說いて有と爲さば、有は則ち有に非ず。還つて即ち此有法を說いて無と爲さば、無は則ち無に非ず。是故に名けて非有非無と爲すことを。故に經に說いて言はく、「有無方便、非有非無に入る」と。相を遣り之を論ずれば妙にして四句を絕す。何をか四と爲す。一に非有、二に非無、三に非有非無、第四に是れ有に非ず無に非ざるに非ず。緣起の諸法皆自性無し。性無きを以ての故に無を說いて有と爲す。無を有と爲すが故に有は即ち有に非ず。無は性無きが故に有を說いて無と爲す。有を無と爲すが故に無は即ち無に非ず。還つて即ち彼有無の法を說いて非有非無と爲す。非有非無も亦自性無し。故に經に說いて言はく「乃至性を離るるが如し」と。還つて即ち此非有非無を說いて有無と爲すが故に、有無の法亦不可得なり。是即ち佛性は理、形名を絕し、心言も及ばず、取る無く、捨つる無く、正智の知る所なり。聖慧巧に悟る、妙其中に在り。此一門內外と言ふは、義別して兩門有り。一には相に隨つて以て分つ。二には情理相對す。相に隨ふと言ふは、衆生を內と爲し、山河、大地、非情の物等は之を以て外と爲す。若し當に彼因果の性、局りて衆生に在るを說かば、是を內と言ふことを得。若し理性を說かば、性は內外に通ず、復

【經】勝鬘經十三

【斷等】生死の法は煩惱繫縛の法なるが故に斷ずべく、是れ有爲なるが故に脱すべく、變轉不定の故に異なり、而も生死は斷等なるも、藏體は之に異り、而も能く妄の本たれば、有爲法の依持建立たるなり。

【又經】北本涅槃經二十八如來性品。

【經】北本涅槃經三十五。

【世に就く等】下三に世論に就いて明す。

【經】北本涅槃經三十六。

彼內外の相を約して辨ずと雖も、而も體は平等にして、內に非ず外に非ず。情理と言ふは、卽ち彼妄想の陰、界、入等は、性を說くを以ての故に內に在りと言ふことを得。而も眞に平等にして、妙に情妄を出づ。之を名けて外と爲す。故に經に說いて言はく、「陰と、界と、異との、外の有爲法の依たり持たり建立たる者、是れ如來藏なり」と。又經に復言はく、「性は陰、界、入の中に住在すと雖も、而も實に陰、界、入に同じからず」と。不同を以ての故に、之を名けて外と爲す。情取に同じからざれば、亦說いて非內非外と說くことを得。故に經に言うて言はく、「衆生の佛性は、內に非ず外に非ず」と。此二門竟る。世に就くと言ふは、其性體を論ずるに、古今常湛なり。猶し虛空の若し。三世の攝に非ず。故に經に說いて言はく、「佛性は是れ三世の攝に非ず」と。緣に隨つて性を辨ずるに、是三世なる有り、三世に非ざる有り。相狀如何。今先に佛に就いて、其性相を辨ずれば、如來の佛性は、因に據りて以て望めば、未來と說くことを得。因に對して果を辨ずれば、現在と爲すことを得。對を捨てて之を論ずれば三世の攝に非ず。良に以れば如來の體は眞性を窮め、法の本如を悟り、先に染有りて後に息して淨と爲すに非ずして、德、法性に同じきを以ての故に三世に非ず。又復所得常に不生滅なり。故に三世に非ず。故に『涅槃經』迦葉品に云はく、「如來の佛性は、是れ過去、現在、未來に非ず」と。後身の佛性は、前に據りて以て望めば名けて未來と爲す。佛に就いて返つて望めば名けて過去と爲す。前に形れ後に對すれば、說いて現在と爲す。所得の處に隨つて、分に生滅を離れ、如理に契合す。亦說いて三世の相に

【經】北本涅槃經三十四。

【當現といふは等】四に當現を辨ず。

【一九】以下、第四門に性に就いて因を辨ず。

非ずと爲すことを得。若し三世に非ざれば、何が故に經に言ふや。「後身の佛性は、現在、未來なり。小分、見るが故に名けて現在と爲す。具に見るれば、當に在るも名けて未來と爲す」と。此亦、非三世の言に違せず。蓋し乃ち果に對して之を說いて現と爲し、因に對して果を名けて、說いて未來と爲す。對を捨てて之を論ずれば、則ち三世に非ず。九地の菩薩より下初地に至りて共行を論ずれば、實に十地と同じ。然れども經の中に、九地以還は佛性を聞見するも、未だ眼に見ずと說く。故に一向に是れ其三世の所攝なり。種性、解行所有の佛性は、實を窮れば言の如し。分顯の處は平等にして相を離る。亦三世に非ず。但今は地前皆凡なるを判ぜんが爲に、佛性一向に三世の所攝なり。下闡提に至るも、佛性は同じく爾り。隨相流轉を三世の攝と名くるも、體は生滅に非ず。此三門竟る。當現と言ふは、若し凡に就いて說かば、因性は現に在り、果性は當に在り。若し佛に就いて論ずれば、果性は現に在り、因性は過去なり。其理性を語れば、皆當現に通じ、體當現に非ず。

（一九）第四門の中に、性に就いて因を辨ず。中に於て兩門有り。一には緣正分別、二には生了分別なり。緣生と言ふは、親にして果を感ずるを名けて正因と爲し、疎にして助發するを名けて緣因と爲す。佛性を果に望めては是れ何の因の攝なる。經に說かく「正因は其れ法佛性、還りて法佛に望めて以て正因と爲す。礦中の金は、礦を出づる金の與に正因と爲すが如し。其報佛性は、還りて報佛に望めて以て正因と爲す。彼樹子の腐せず、壞せず、可生の義有りて樹の與に因と作るが如し」と。緣正是の如し。若し菩提總じて一果と爲すに

【涅槃】北本涅槃經三十六。

【涅槃】北本涅槃經二十九。

就かば、佛性の本體は果を起す義强し、故に正因と說く。諸度等の行、方便助發するを說いて緣因と爲す。若し果德を分ちて、性淨と方便との二種に差別すれば、是れ則ち緣正、差互に不定なり。若し性淨の菩提涅槃に望むれば、是れ則ち佛性は同體にして相起するを以て正因と爲し、諸度等の行をば名けて緣因と爲す。若し方便の菩提涅槃に望むれば、諸度等の行は、同類にして果を生ずるを名けて正因と爲し、佛性の理を資くる、之を說いて緣と爲す。緣正の義、麤況すること是の如し。此一門生了と言ふは、方便の果に望むれば報佛の性は是れ其生因なり。眞心の體の上に、本より已來可生の義有り。彼果を生ずるが故に『涅槃』に云はく「佛性は無と雖も兎角に同じからず。兎角は無畢方便を以てすと雖も、生ずることを得べからず。佛性は生ずべし。生ずべきを以ての故に、名けて生因と爲す」と。問うて曰はく「何が故に、兎角の無は無にして生ずべからず、佛性の無は無にして生ずべき。」釋して言はく「兎角は四無の中に於て、是れ畢竟無なり。故に生ずべからず。性淨の果に望むれば、法佛の性は但是れ了因にして、是れ生因に非ず。」云何が是れ生因に非ずと知ることを得る。『涅槃』に說くが如し。「涅槃因とは、謂ゆる、佛性なり。佛性の性は涅槃を生ぜず。故に生因に非ず」と。是義、云何。性淨の因果は體、一にして別無く、時に隨つて異を分つ。染に在るを因と爲し、出纏を果と爲す。因に據りて以て望むれば、因の外に更に果體の生ずべき無く、果に據りて以て望むれば、果の外に更に因の體能く生ずる無し。故に生因に非ず。但是れ了因なり。是義、云何。諸佛の性は、是れ眞

【涅槃】北本涅槃經三十五。

識心の體有にして、本より已來、顯了して果を成ずべきの義有り。故に了因と名く。瓶中の燈に可了の義有り。瓶を破すれば則ち見ゆるが如し。是の如き可了の義有るを以ての故に、『涅槃』に說いて云はく、「佛性は有なりと雖も虛空に同じからず。虛空は無量方便を以てすと雖も、見ること得べからず。佛性は見るべし。見るべきは猶是れ可了の義あり。可了を以ての故に名けて了因と爲す。」問うて曰はく『何が故に、虛空の有は有にして見る可らず、佛性の有は有にして見るべきや』釋して言はく、「虛空は無を說いて有と爲すが故に有にして見る可らず。佛性の有は有を說いて有と爲すが故に有にして見るべし。因の義も是の如し。若し果德に就かば總じて以て一と爲す。是を則ち、佛性を說いて生因と爲すと同一體性なり。今辨の相起る義を說いて生と爲す。有爲の因果互に異體の相には同じからず。因を辨じ果の起るを謝すをば說いて生と爲す。諸度等の行、方便顯了するを說いて了因と爲す。是を以て經に、「佛性は乳の如し」と說き、方便の行は、喩ふるに酵煖を以てす。乳能く酪を生ずるを名けて生因と爲す。酵煖等は緣にして、酪を顯了する故に了因と名く。若し果德に就いて其性淨と方便との差別を分たば、是れ則ち生了の二相不定なり。若し性淨の菩提涅槃に望むれば、諸度等の行は是れ其了因なり。故に彼『金剛般若論』に言はく、「檀等の波羅蜜は、實に於て了因と爲す」と。斯文顯なり。佛性を彼性淨の果に望むれば但是れ正因なり。生に非ず、了に非ず。生に非ず了に非ずと言ふは、佛の體隱るる時を因と名く。因に就いて以て望むるに、因の外に更に果體の生ずべき無し。顯るる時を果と

【經】二十九等。北本涅槃經
【經】二十八。北本涅槃經
【經】二十八。北本涅槃經
【經】二十八。北本涅槃經

名く。果に據つて以て望むれば、果の外に更に因體の能く生ずる無し。故に生因に非ず。是を以て經に言はく、「佛性の性は涅槃を生ぜず」「涅槃の法は因より生ずるにあらず」と。更に復說いて言はく、「生因の所起を名けて無常と爲し、了因の所起をば之を名けて常と爲す。涅槃は但因の所得なり。因より生ぜざるが故に名けて常と爲す」と。了因に非ずと言ふは、佛性は體に據らば、是れ方便顯了の行に非ず。故に涅槃に望めて了因と名けず。若し佛性は、緣に隨つて轉變し、前に籍りて後を起し、涅槃を滿足すと言はば、亦生と名くることを得。異體に非ず、合掌の有に非ざる、之を名けて生と爲す。又復佛性の諸地の中に在つて緣に從つて顯了し、涅槃を滿足するを亦了と名くることを得。但異相に非ず涅槃を顯了するが故に、了に非ずと言ふ。若し涅槃と言はば、方便の菩提教道の行にして、亦は生、亦は了なり。生因と言ふは、諸度を修するに籍りて彼報果を起す。故に名けて生と爲す。是を以て經に言はく、「復生因有り。謂はく、六波羅蜜阿耨菩提なり」と。了因と言ふは、前の諸地の中に成ずる所の方便教道の行德と、體と相應す。德體成ずと雖も、後に望むれば、猶闇障の爲に覆はれて顯了なるを得ざるがごとし。大菩提を成ずる中に修する所の方便の諸行有りて闇障を遣除して前の諸德を了し大菩提を成ず。故に了因と名く。是を以て經に言はく、「復了因有り。謂はく、八正道阿耨菩提なり」と。佛性を彼方便の果に望むれば、亦は生、亦は了なり。生因と言ふは、卽ち性、彼方便の果德を起す。眞金より莊嚴の具を起すが如し。故に生因と名く。是を以て經に言はく、「復生因有り。謂はく、首

【經】北本涅槃經二十七。

【經】北本涅槃經二十八。

【三】以下、第五門に經論に佛性を說く所以を明す。

【涅槃經】北本二十八。

楞嚴定阿耨菩提」と。首楞嚴定は、猶是れ佛性のごとし。故に經に說いて言はく、「佛性を名けて首楞嚴と爲す」と。了因と言ふは、佛性、彼方便の行の爲に顯れて、體則ち明了なり。明了の性、資けて果德を成ず。故に了因と名く。是を以て經に言はく、「復了因有り。謂ゆる佛性阿耨菩提」と。因の差別を辨ずること、之を略して爾り。

〔三〕第五門の中に、經論に性を說く所以を辨明す。經に多く空を說くに、諸法の性を破して諸法の空を說く。今此に、何が故に佛性を宣說する。然るに彼、淸淨法界門の中に、一切の義を備ふ。諸法緣起して互に相集成す。空に就いて法を論ずれば、法として空ならずといふこと無く、性に據りて法を辨ずれば、法として性に非ざること無し。空と性とは、各是れ一門なり。門別に旣に殊れば所爲亦異る。空を說くことは、執有の衆生を破せんが爲なり。性を說く所爲は、經論不同なり。『涅槃經』に云はく、「衆生をして、放逸ならざらしめんが爲の故に、佛性を宣說す」と。若し性を說かざれば、總じて心に自ら輕んじて己大菩提を成ずること能はずと謂うて、心、道に趣くこと無く、多く放逸を起す。故に衆生悉く佛性有りて、定んで必ず當に成ずべしと說き、放逸を捨てて隨順趣向せしむ。『寶性論』の中に所爲に五有り。一には衆生、己が自身に於て怯弱の心を生じて、己に性無しと謂うて、自ら絕ちて求めざるが爲の故に。佛性は衆生に同じく有り、當に必ず果を得べし。礦石の中に其金性有り、消融して必ず得。木に火性有り、之を攢れば必ず生ず。乳に酪性有り、緣を具して便ち出づるが如しと說いて、其勇猛求佛の心を增す。此之一義

【經】法華經七。

【經】勝鬘經。

【三】義法聚中第二大段に假名の義を明す中、三門の分別あり、先づ釋名し

は、涅槃と同じ。二には餘の衆生を輕慢せんが爲の故に佛性を宣說す。彼當に作佛すべし。云何が輕んずべき。是を以て經の中に「不輕菩薩若し四衆を見ては、高聲に唱へて言はく、汝當に作佛すべし。我汝を輕んぜず」と。衆生に佛性有りと知るを以ての故に。三には妄りに我を執する衆生の爲の故に佛性を宣說す。情取に同じからざればなり。故に經に說いて言はく「如來藏とは我、衆生に非ず、命に非ず、人に非ず」と。四には虛妄の法を執著するが爲の故に佛性を宣說す。所取に同じからざればなり。五には眞如佛性を誹謗して、是れ則ち斷滅すと謂ふが爲の故に、佛性を說く。是れ眞、是れ實、常、樂、我、常なりと。亦斷滅を怖畏し、實を樂ふ衆生の爲めにすべきが故に佛性を說く。佛性の義、略して辨ずること是の如し。

假名の義に三門の分別あり。名を釋す一。假法の有無二。相を辨ず三。

(三一)第一に名を釋す。假名と言ふは、釋に四義有り。一には諸法に名無し。假に施名の與の故に假名と曰ふ。貧賤の人を假に富貴と稱するが如く、是の如き等なり。二には他を假りて名を得。故に假名と號す。諸陰を假りて衆生の名を得、棟梁等を假りて屋宅の名を得るが如し。是の如く一切なり。又復大小長短等の事、他を假りて名を得。大は小を假るが故に其大の名を得。小も亦是の如し。長は短を假るが故に其長の名を得。短も亦是の如し。是の如き等の一切なるが故に假名と曰ふ。三には假法の名を稱して假名と曰ふ。世俗の諸法

【三】次に第二門に假法の有無を辨ず。

は各定性に非ず。他を假りて名有るをば、假法と爲す。假の稱を樹つるが故に假名と曰ふ。四には諸法は假名にして有り。故に假名と曰ふ。是義云何。名を廢して法を論ずれば、法は幻化の如し。有に非ず、無に非ず、亦非有に非ず、亦非無に非ず。一の定相の以て自ら別つべき無し。名を以て法を呼べば、法は名に隨つて轉じて、方に種種の諸法の差別の假名有るが故に有なり。是故に諸法を說いて假名と爲す。一の色法同體にして、具に苦、無常等の一切の諸義有るが如し。義に隨つて分別すれば、苦、無常等の諸法の外に、別に一の色の自性有ること無し。假に色の名を施して彼法を呼集すれば、彼法は名に隨つて一の色を集成して、色相方に立つ。是故に色法は名を假りて有り。還つて即ち此色の無常等を說いて、之を以て苦と爲す。義に隨つて分別すれば、色の無常等の諸法の外に、別に一の苦の自性有ること無し。假に苦の名を施して彼法を呼集すれば、彼法は名に隨つて、一の苦を集成す。是故に苦法は名を假りて而も有り。乃至色、苦、無常、空、無我等を宣說して有無に非ずと爲し、義に隨つて分別すれば、色等の法の外に、別に一の非有、非無の自性の得べきこと有ること無し。假に非有、非無の名字を施して、彼法を呼集すれば彼諸法の義、此名字に隨つて、非有、非無の法を集成す。亦假名の色法有ること既に然り。諸法同じく爾り。假名に之有るが故に假名と號す。名義是の如し。

〔三〕第二に、次に假法の有無を辨ず。中に於て兩門有り。一には總じて解釋し、二には別して分別す。總じて之を論ずれば、假法は不定なり。云何が不定なる。名を尋ねて法を取ら

ば、集用本に異る。假法無きに非ず。有體と言ふことを得。實に據りて以て分たば、假は自實無し。無體と言ふことを得。問うて曰はく、假法若し有體ならば、何が故に經に但名、但用、但假の施設と言ひて、假の體を說かざる。釋して言はく、經に但假の施設と說くは即ち是れ假の體なり。假の體は實に非ず。是故に說いて但假の施設と言ふ。總相是の如し。次に別して之を論ぜば、假法に三有り。一には體、二には用、三には名字なり。中に於て義別すれば四種有り。一には名の用を攝して、體に從つて無と說く。別に隨つて以て求むれば、直假の體は空にして所有無きのみに非ず。名の用も亦無なり。彼衆生の如きは、陰に隨つて別して求むれば、生體は得叵らず。既に生體無くば、知んぬ、復何に就いてか名を施し、用を起さんやを。設ひ所作有るも、但是れ陰の用なり。是の如き一切なり。是故に實に就かば、體用及び名は一切皆無なり。第二に名を分ちて、體、用に異にす。實に就いて以て求むれば但體用無し。假名無きに非ず。何が故に是の如くなる。別に隨つて以て分たば、假の體立たず。故に假の體無し。用は必ず體に依る。體無きを以ての故に、用も亦有ならず。故に假の用無し。名は相に依つて生ず。體に依つて發さず。故に名有ることを得。貧賤の人、復其富貴の體用無しと雖も、亦假に名けて、說きて富貴と爲すことを得るが如し。是の如き一切なり。三には名用を分つて、假の體に異にす。實に就いて以て論ずれば、但假の體無し。名用無きに非ず。何が故に是の如くなる。體は自實に據つて、別に隨つて假を求むれば、假に自實無し。是を以て體無し。用は、謂はく集用なり。

【三三】以下、第三に相を辨ず。初に一假。
【或は分つて等】次に二假。
【大】地水火風の四大のこと。

諸法和合して、相假して用を成ず。故に假の用有り。一縷を以て獨り象を制せず。衆多相假して便ち制する能有るが如し。是の如き一切は既に假用有り。用に依りて名を立つ。名亦無に非ず。四には體用を攝して、以て共名に從ふ。直に名有るのみに非ず、亦體用有り。和合の想に依りて名字を起す。故に假名有り。此假名を用て別法を統攝せば皆一の總を成ず。故に假の體有り。體に依りて用を施す。故に假用有り。是故に三種倶に皆有り。有無是の如し。

(三三)第三に相を辨ず。開合不定なれども、總じては唯一の假なり。一切法、因緣集起して相假成ずるを以ての故に。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には生法の分別、二には因和、法和に就いて分別す。生法と言ふは、假に二種有り。一に衆生假名、二に法假名なり。衆生假名は、內に從つて稱を立つ。名は法を盡さず。云何が盡さざる。假は內外に通ず。內は是れ衆生、外は衆生に非ず。經の中に直に衆生假名と言つて、外法を論ぜず。所以に盡さず。亦衆生は內外因に通ずべし。內外の法の中、總じて相集起す、斯を衆生と名く。衆生虛集するを、衆生假と名く。相狀如何。分別するに三有り。一に內外分別とは、內の五陰を攬りて以て衆生を成ず。之を名けて內と爲す。外の四大を攬りて草木等を成ず。之を以て外と爲す。二に麤細分別とは、內の中に陰を攬りて以て假人を成ず。之を名けて細と爲す。人軍衆を成ず。之を以て麤と爲す。細に從つて稱を立つ。是故に偏に衆生假名と言ふ。外の中に、大を攬つて草木等を成ず。之を以て細と爲す。草木の叢林等の事を集成

【六根】眼、耳、鼻、舌、身、意の六根。
【六塵】色、聲、香、味、觸、法の六境のこと。
【經】北本涅槃經二十三。高貴德王菩薩品。
【坻羅婆夷】燕雀亦一番二名なり。

する之を以て麤と爲す。三に染淨分別とは、染は謂はく凡夫、淨は謂はく賢聖なり。生死法の中、五陰人を成ず。之を以て凡と爲す。涅槃法の中、五陰人を成ず。之を以て聖と爲す。法假名とは、通に就いて目と爲す。法は物事の有なり、諸法の通名なり。法體虛假を法假名と名く。相狀如何。分別するに三有り。一に内外分別は、内は、謂はく、六根、外は、謂はく六塵なり。二に麤細分別とは、因和を麤と爲し法和を細と爲す。此は後に釋するが如し。三に染淨分別とは、染は、謂はく生死、淨は、謂はく涅槃なり。生死、涅槃は經說不定なり。或は生死は假名、涅槃は假に非ずと宣說する有り。生死は眞ならず、虛假にして有なるが故に名けて假と爲す。假の稱を樹つ。故に假名と曰ふ。涅槃は、體は眞にして是れ假名に非ず。假に非ざるを以ての故に、涅槃の號は是れ假名に非ず。良に生死は是れ假名なるを以ての故に。『維摩經』に說かく「生死を出離するを、假名を超ゆと名く」と。或は涅槃は假名、生死は假に非ずと宣說する有り。涅槃は名無し。假に名を施すことを爲す。故に假名と曰ふ。是を以て經に言はく「涅槃は名無し。强ひて名を立つることを爲す。坻羅婆夷は實に油を食はざれども、假に油を食ふと言ふが如し」と。生死の法體は、是れ有爲の法、是れ假立に非ず。故に假名に非ず。或は生死涅槃は、二倶に假名なりと宣說する有り。生死涅槃は、皆定性に非ず。因緣假集す。故に說いて假と爲す。假の稱を樹つ。故に假名と曰ふ。亦生死涅槃の法は、名を假りて有るべし。故に假名と曰ふ。故に『地持』に言はく「色は假名、乃至涅槃一切は假名なり」と。或は生死涅槃は、倶に假名に非ずと

【或は分つて等】次に三假を分つ。

宣說する有り。名を廢して法を求むれば、法名を離るるが故に。故に『地持』に言はく、「一切の諸法は名の自性を離る」と。問うて曰はく、『前に生死涅槃の二は倶に假名と說く。今言うて皆非するは、何の所以か有る。』釋して言はく、『名を將て、以て諸法を呼ばば、法名に隨つて轉ず。故に皆假名なり。名を廢して法を求むれば、法皆言を離る。是故に一切皆假名に非ず。今第三に就く。故に生死涅槃の法を說いて法假名と爲す。』此一門竟る　次に因和法和に就いて分別す。因和と言ふは是れ因和合の假、法和と言ふは是れ法和合の假なり。是二云何。事の分齊に於て、別を攬つて總を成じ、細を以て麤を成ずるを、因和合假と名く。別を攬りて總を成ずるは、陰の人を成ずるが如し。細を以て麤を成ずるは、細色の麤色を成ずる等の如し。法の分齊に於て、無常、苦、空、無我等の義、同體相成ずるを法和假と名く。『成實論』の中に、因和合を名けて生空と爲し、法和合空を說いて法空と名く。大乘法の中に亦此義有り。淺深を異と爲す。二假是の如し　或は分つて三と爲す。『大品經』三假品に說くが如し「一に受假、二に法假、三に名假なり」と。中に於て、略して三門を以て分別す。一には共名を釋し、二には體相を辨じ、三には觀入の次第なり。先に共名を釋すとは、受假と言ふは、總じて多法を含す。故に名けて受と爲す。受は多法を假りて聚集して成ず。故に受假と曰ふ。法假と言ふは、自體を法と名く。法體虛集す。故に法假と云ふ。名假と言ふは、法を顯すを名と曰ふ。法に依り想に依りて、假つて以て施設す。故に名假と曰ふ。此一門竟る　次に共相を辨す。受と法との二門は、相對して分別す。龍樹の說くが

【論】大智度論四十一。

【論】大智度論四十一。

如くんば、假法は是れ受、實法は是れ法なりと。總の相は、然りと雖も義猶解し難し。中に於て、略して兩義を以て分別す。第一には直に因和合の中に就いて、義に隨つて分別す。一切の受法は細を攬つて麤を成じ、別を攬して總を成ずるを、皆名けて受と爲し、別に隨つて細分するを、皆名けて法と爲す。人の衆を成ずるが如き、衆を名けて受と爲し、人の一一は即ち是れ法、陰を攬りて人を成ず。人は復是れ受、陰は復是れ法なり。是の如き一切なり。受、法異りと雖も、同じく緣に籍りて成ず。假集の義は一なり。故に通じて假と名く。二に因和、法和に就いて分別す。一切の因和、別を攬つて總を成ず。斯れを受假と名く。一切の法和、苦、無常等の諸の法相成ずるは皆是れ法假なり。受と法とは是の如し。名假と言ふは、論に釋するに二有り。一には通に就いて以て釋す。前の受及び法の二種の名字を、通じて名假と爲す。故に論に說いて言はく「其名字を用て前の二法を取る。是れ其名假なり」と。第二に唯受假の名を取りて、以て名假と爲す。法假の名を判じて法假に屬す。故に論に釋して言はく「多名の邊に於て、更に名生すること有るを說いて名假と爲す。五陰の名の邊に、衆生の名生すること有り。根、莖、枝、葉、花、菓の名の邊に、樹の名生ずること有り。衆樹の名の邊に、林の名生ずること有るが如し。是の如き一切を說いて、名けて假と爲す」と。體相是の如し。此二門竟る。次に觀入の破遣の次第を辨ず。論の中に說くが如くんば、先に名假を破す。良に名字は法に依り想に依つて、以て施設するを以て、浮虛にして破し易きが故に先に之を破す。次に受假を破す。受は法に依りて成じ、

【經】維摩經。

【或は分つて等】次に四假を明す。中に五門の分別あり。先づ釋名。

虛集にして分ち易し。故に次に受を破す。後に法假を破す。法は是れ根本なり、微細にして覺り難く、分析すべきこと難し。故に後に之を破す。法を破すること云何。汎く解するに八有り。一に情を責めて破す。癡盲は我に貪著す。三界は虛妄なり、但妄心の作なりと說くが如し。是の如きの一切なり。二に智を推して破す。智者は有無を得ず、法の無性を明すと說くが如し。是の如きの一切なり。三に因を推して破す。陰因を推して衆生の性を破し、共往因を推して現の常性を破するが如し。是の如きの一切なり。四に果を推して破す。當果を推して現の無因を破するが如し。是の如きの一切なり。五に對を推して破す。我有れば則ち我所有り、若し我有ること無ければ、則ち我所無しと說くが如し。又經に說くが如し。「縛有れば解有り、縛無ければ解無し」と。是の如きの一切は、對を推して破すと名く。六に理を推して破す。諸の法性自ら虛し等と說くが如し。七に名を推して破す。乳の時酪の名を得ざれば、酪の性無きことを明すと說くが如し。是の如きの一切なり。八に實を推して破す。人夜闇きに繩を見て蛇と爲すに、但是れ繩と言ひ、如來藏を見て以て生死と爲すに、但是れ藏、本生死無しと言ふが如し。是の如きの一切なり。斯八種を以て諸法を破壞するを、法假を破すと名く。法假を破し已りて法の實相に到る。法の實相とは、即ち是れ法空なり。三假是の如し。或は分つて四と爲す。始め因生より、乃至相續なり。中に於て、略して五門を以て分別す。一に其名を釋し、二に其相を辨じ、三に時頻を約して假の差別を彰し、四に寬狹を辨じ、五に三假に對して相收攝す。第一に名を釋す。名字

【第二門等】二に共體相を辨ず。

【四緣】因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣。

是れ何ん。一には因生假、亦緣生と名く。二には因成假。亦緣成と名く。三には相待假。又相形と名く。四には相續假なり。因生と言ふは、因より果を生ず。別の體相起るが故に因生と曰ふ。生因を假りて起るを因生假と名く。生緣に託して集まるを緣生假と名く。因成と言ふは、法に總別有り。別を總の因と爲し、總を別の果と爲す。彼別因を攬りて總を成ず。果は因を假りて成ずるをもて因成假と名く。又別緣を攬りて總果を成ず。是故に亦緣成假と名く。相待假とは、長短、大小、高下等の事相形して分別し、相待して各別なるを相待假と名く。相續假とは、有爲の遷流、前に籍りて後を生ず。前後兩邊、之を謂うて相と爲し、攝待するを續と爲す。言ふ所の假とは、前後の兩邊互に以て相望し相假つて、續を成ずるを相續假と名く。亦相續して以て一法を成じ、一假續成すべきを相續假と名く。名義此の如し。是一門竟る　第二門の中に、共體相を辨ず。初假の中の名に就いて二有り。一に因相と名け、二に緣生と名く。此二の中に就いて四門の分別有り。一には法に隨つて異に論ず。正因の果を生ずるを、因生假と名く。善惡の業の苦樂等を起すが如し。緣因の報を得るを緣生假と名く。煩惱より苦樂等を生ずるが如し。二には緣を攝して因に從ふ。一切の諸法、異の體相起るを皆因生と名け、親疎を簡ばず。故に『地持』の中に、「十因より一切の法を生ず」と宣說す。一切の法、十因より生ずるを以ての故に皆因生と名く。三には因を攝して緣に從ふ。一切の諸法、異の體相起るを皆緣生と名く。親疎を簡ばずして四緣より一切の法を生ずと說く。一切の法、四緣より生ずるを以ての故に、皆緣生と名く。

四には因緣共して諸法を顯す。一切の諸法、別の體相起るを皆因生と號す。亦緣生と名く。是故に、經の中に、十二因緣を通じて因緣と名く。因緣通ずるが故に、所生の法を齊く因生と號し、同じく緣生と名く。問うて曰はく「向に正因の法を起すを名けて因生と曰ひ、緣因の法を起すを說いて、緣生と爲すと說く。因と緣と既に殊る。何んが二を分たずして、乃ち合して一と爲す。」釋して言はく「別立の理なり。亦傷くること無し。但此二の別體、法を起す。其義相似たるを以ての故に、合して一と爲す。又向に因生、緣生に亦共の義有りと說くが如し。故に一と爲す。第二假の中、名に亦二有り。一に因成と名け、二に緣成と曰ふ。此二の中に就いて義を辨ずるに同じからず、亦四門有り。一には法に隨つて異論す。彼別を攬つて總を成ずる法の中に就いて、同類の法、細を以て麤を成ずるを、名けて因成と曰ふ。細色を以て麤色を成ずる等の如し。異類相成を名けて緣生と曰ふ。五陰を以て衆生を成ずるが如し。同類親しきが故に、說いて因成と作す。異類は疎なるが故に、說いて緣成と爲す。二には緣を攝して因に從ふ。一切諸法の、但別を攬つて總を成ずる者、斯を因成と名く。彼別體疎遠の法に對するが故に、說いて因と爲す。三には因を攝して緣に從ふ。一切の諸法の別を攬りて成ずる者を、斯を緣成と名く。彼過去の親しき生の因に對するが故に。四には因成と緣成と共に諸法を顯す。一切の諸法の別を攬つて成ずる者を齊く因成と名け、同じく緣成と號す。」問うて曰はく「向に同類相成を因成假と名け、異類相成を緣成假と名くと說く。因緣既に殊れり。何んが別分せずして、乃ち合して一と爲す。」

と。釋して言はく、『別立の理なり。亦傷くること無し。但此二は別を攬りて總を成ず。其義相似たるを以ての故に、合して一と爲す。又向に因成、緣成、亦共して諸法を顯すの義有りと說くが如し。故に說いて一と爲す。』第三假の中の諸法は一に非ず。其中の長短、大小、高下、彼此、往來、貴賤、好惡。是の如きの一切は皆是れ相待なり。一丈の物も五尺に對せざれば、長相を生ぜず、長の名起らず。五尺に對するに由りて、長相始めて分ち、長の名起ることを得るが如し。相待假と名くるは、是の如き一切なり。第四假の中、法亦一に非ず。但諸法をして前よりして後を起さしめ、次第に相接するを皆相續と名く。問うて曰はく『此續、前に在りと爲すや。後に在りと爲すや。』『旣に相續と云ふ。寧ぞ偏に在る容けんや。』又問ふ『此續、云何が假と名くる。』『釋に兩義有り。一には兩邊に據りて、迭に相假藉して、續の義を成ずることを得。故に說いて假と爲す。』相狀云何。前念の法の如きは後念を假る。故に前に續を成ずることを得。後念の法は前念を假る。故に後に續を成ずることを得。相假つて續を成ずるを相續假と名く。此は是れ一義なり。第二の義とは、兩邊異りと雖も一法を續成す。一法は彼前後の兩邊を假りて、相續して成ず。故に名けて假と爲す。問うて曰はく『若し爾らば、彼前後緣成と何の別ある。』釋して云はく、『一體は義分の異に隨つて、別を攬り總を成ずるの義邊を分取し、說いて緣成と爲し、前後相續の義邊を分取し、說いて相續と爲す。又更に分別せば、亦小異有り。異相如何。緣成は則ち寬し、相續は則ち狹し。緣成の中の如きは、十二時を攬り合して一日を成ず。十

【第三門の意】三に時類に約就して假の差別を彰す。

二時の中に寅、申を卯、酉に相對して相生ずるに、時隔絕して相接續せずと雖も、而も和合して、共に一日と成すことを得。故に說いて寬と爲す。相續假の中、復十二の時分、一日を積成すと宣說すと雖も、中に於て寅、申、卯、酉相對するに、時の中隔絕するをもて說いて相續して日を成すことを得ず。唯相隣る者を說いて續と爲すことを得。故に名けて狹と爲す。猶相捉の如し。此二門竟る。第三門の中に時類に約就して假の差別を彰す。因生假の中、差別に四有り。一に同類同時の因生といは、天上の日、水中の日を生ずるが如き、面の像を生じ、聲の響を發するが如き、香樹に孤遊香を生ずるが如き、是の如き一切の色聲香等は、當分に相生ず。故に同類と名く。一時に相起るをもて、稱して同時と曰ふ。二に同類異時の因生といふは、麥は麥を生じ、穀は穀を生ずる等の如し。三に異類同時の因生といふは、眼色より眼識を生ずるが如き、鐘の聲を生じ、燈の燄を發するが如き、是の如き一切なり。四に異類異時の因生といふは、過去世の業と煩惱と、今の苦樂を生ずるが如し。斯れ乃ち緣生を同じく因生と名くるなり。緣成假の中に亦四種有り。一に同類同時の緣成といふは、細色を以て麤色を成じ、衆多の小聲、大聲を成ずるが如し。是の如きの一切なり。二に同類異時の緣成といふは、十二時合して一日を成ずるが如し。是の如きの一切は、時を以て時を成ず。故に同類と名く。前後合して成ずるをもて、稱して異時と曰ふ。三に異類同時の緣成といふは、大衆の中に五陰人を成ずるといふが如し。此小乘に有り。聞ける、四大諸根を成ずる等なり。四に異類異時といふは、異時和合の緣成なり。『成實』

【第四門の第】以下、四に寬狹を辨ず。

の中の五陰人を成ずといふが如きは、陰と人と別なれば、名けて異類と爲す。色心並べるが故に、稱して同時と曰ふ。四心前後の故に異時と云ふ。若し餘論に依らば、五陰人を成ずるは一向に同時なり。斯れ乃ち因成を通じて緣成と名くるなり。相待假の中に亦四種有り。一に同類同時の相待といふは、現在世に人人相形し、天天相比するが如し。是の如きの一切なり。二に同類異時の相待といふは、今の人を以て、劫初の人に比するが如し。是の如きの一切なり。三に異類同時の相待といふは、現在世に色心相形し、空有相待するが如し。是の如きの一切なり。四に異類異時の相待といふは、過因に對して今の果を宣說するが如し。是の如きの一切なり。相續假の中に亦四種有り。一に同類同時の相續といふは、現在世に同類の色物互に相接續すること、繩を以て相接するが如し。是の如きの一切なり。二に異類同時の相續といふは、現在世に異類の色物迭に相接續すること、梨を以て杜に接ぐが如し、是の如きの一切なり。三に同類異時の相續といふは、前の色より後の色を生ずるが如し。是の如きの一切なり。四に異類異時の相續といふは、過因より續して今の果を生ずるが如し。是の如きの一切なり。時類の同異、之を略して爾云ふ。此三門竟る。第四門の中に其寬狹を辨ず。中に於て二有り。一には有無に就いて其寬狹を辨じ、二には常無常に就いて其寬狹を辨ず。有無に就くとは、四假の中、相待と緣成と、及び相續とは有無に通ず。因生の一種は局りて有に在り。問うて曰はく、『相待して有無に通ずる義の在ることを知るべし。緣成假の中、云何が有無に通ずる。』『此は經に說くが如くんば、大涅槃の中に

【二斷等】煩惱障斷と智障斷。二智とは煩惱障斷離垢清淨一切煩惱不相續智と智障斷一切所知無障礙智。

【涅槃】北本涅槃經三十八憍陳如品

【經】北本涅槃經二十八。

は、總じて一切の智斷の功德を攝す。智斷の功德は涅槃を緣成す。智は是れ其有、斷は是れ其無なり。是故に緣成は有無に通ずることを得。』又『地持』に說く、「二斷、二智、以て菩提を成ず」と。此れ亦緣成、有無に通ずることを得。問うて曰はく、『相續云何が有無に通ずる。』釋して言はく、『相生、相續の義は局りて有に在り。接對の續は義有無に通ず。涅槃の法、生死を接續するが如し。常無常に就いて、寛狹を辨ずとは、四假皆常と無常とに通ず。』云何が皆通ずる。因生假の中、句別して四有り。一には無常還つて無常を生ず。謂はく、世間の中に、無常の因從り無常の果を生ず。二には無常、常を生ず。謂はく、世間の無常の善、彼出世の菩提の常果を生ず。故に『涅槃』の中に、佛、闍提に答ふらく、「汝が法の中には、其常性從り無常の果を生ず。我佛法の中には、無常の因より常の果を生ず。覺に何の過か有らん。」と。此れ則ち無、常常を生ずるなり。三には常還つて常を生ず。謂はく、佛性より菩提を出生す。故に經に說いて言はく、「復生因有り。謂はく、首楞嚴、阿耨菩提」と。首楞嚴定は、即ち是れ佛性なり。四には常、無常を生ず。謂はく、眞識に依りて妄識を發生し、常身に依りて化の生滅を起す。緣成假の中、句別して三有り。一には無常還つて無常を成ず。謂はく、世間の中には、五陰を攬りて人を成じ人業を成ずる等なり。二には常還つて常を成ず。謂はく、出世の中には、常住の五陰、佛菩薩を成ず。三には常無常和合して緣成ず。謂はく八識合して衆生を成ずるを以てなり。前の七は無常、後の一は是常なり。相待假の中、句に亦三有り。一には無常還つて無常を待す。謂はく、

【次に三假に等】以下、互に三假に對して相收攝するを明す。

世間の中の長短相形し、大小相比す。二には常還つて常に待す。謂はく、佛、菩薩、上下相形す。是の如きの一切なり。三には無常、常に待す。謂はく、生死を待して涅槃を宣說す。是の如きの一切なり。相續假の中、句別して四有り。一には無常還つて無常を續す。謂はく、世間の中の有爲の相續なり。二には常、無常を續す。謂はく、彼出世の常住の果德、生死を接對す。三には無常、常を續す。「成實」に說くが如くんば、滅定より後の心識を起す。四には常還つて常に續す。謂はく、常因を以て常果を續成す。故に『地持』に云はく、「種性菩薩、六入殊勝なる、展轉相續して無始法爾なり」と。問うて曰はく、「常法は則ち遷變無し。云何が續と說く。」釋して言はく、「常法は遷變無きが故に、一法の起盡に就いて續と說かず。但後起、前德に接するを說く。故に名けて續と爲す。二地の中の常德起る時は、初地に接するが如し。是の如きの一切なり。又一法の隨緣轉變に就いて、亦續と說くことを得。『地持』に說くが如し。「六入相續す」と。即ち其事なり。寛狹是の如し。

此四門次に三假に對して、共に相收攝す。三假と言ふは、上に說く所の、受と法と名との寛る如し。接相は云何。釋して言はく、法の中、通じて四假を具す。一の色法、前より後を起すが如きは、是れ因生假なり。過因の所起も、亦是れ因生なり。細を以て麤を成ずるは、是れ緣成假なり。苦、無常等の諸法相成するも、亦是れ緣成なり。大小相形し、麤細相比するは、是れ相待假なり。前後相接するは、是れ相續假なり。受假の中、亦四假を具す。衆生と說くが如き、之を以て受と爲す。衆生は各過因より生ず。是れ因生假なり。陰を

攬りて成ずるは、是れ緣成假なり。尊卑相形し、貴賤相比するは、是れ相待果なり。起盡相接するは、是れ相續假なり。是の如きの一切なり。四の中の緣成は、是れ其正義なり。餘の三は、是れ傍なり。何が故に是の如くなる。夫れ受と言ふは、緣成假の中、多法を接受す。故に名けて受と爲す。是故に受の義、正しくは緣成に當る。餘は受の義に非ず。故に說いて傍と爲す。名假の中に、亦四假を具す。『成實』の如きに依らば、名は是れ聲の性、四大より擊發して生ず。是れ因生假なり。餘論に依らば、名は是れ非色非心の法、想より生ずるをもて因生假と名く。故に『地持』に云はく、「地等の假名を建立施設す。是を地想と名く」と。故に知んぬ、名字は想より生ずることを。『成實』の如きに依らば、名は是れ假聲、彼實聲を攬りて、和合して成ず。是れ緣成假なり。餘論の如きに依れば、名は是れ非色非心の法なり。然るに此有爲は、一念の頃に生、住、滅を具す。生住等の四相合成するを以て、緣成假と名く。多少相形し、善惡相比するは、是れ相待假なり。前後相接ぐは、是れ相續假なり。若し『成實』に依らば、此四種の中、緣成相續は、是れ其正義なり。餘の二は、是れ傍なり。何が故に是の如くなる。彼には、名字は是れ其假聲、彼實聲を攬りて、前後相續すと說く。是故に正しく緣成と相續とに當る。餘は正しく成ずるにあらず。故に說いて傍と爲す。若し餘論に依らば、因生と緣成と及與び相續とは、是れ其正義なり。相待は是れ傍なり。何が故に是の如くなる。彼には、名字は是れ、非色非心、想に依りて生ず。又生住等の四相合成し、前後續成すと說く。故に因生と緣成と相續とを說い

【二四】義法聚の第三大段に入不二門を明す中、三門分別あり、先づ初に釋名。

て、以て正義と爲す。相待は是れ親しく名を成ずるに非ざるが故に、之を說いて傍と爲す。問うて曰はく、『成實』に亦說かく、「名字は四大に依りて生ず」と。何が故に彼宗に、因生を說いて以て正義と爲さざる。釋して言はく、「以有り。彼『成實』の中に、「四大和合して聲を生ず」と宣說す。是れ聲と和合して方に名を成ずることを得。疎く一重を挾む。是の故に因生を正義と名けず。『地持』等の中は、名字は親しく想に依りて生ず」と宣說す。故に因生を說いて以て正義と爲す。斯を類譬せされ。問うて曰はく、「何が故に法假の中には四假皆正にして、名と受との二の中には正有り、傍有る。」釋して言はく、「法は通ずるをもて、四俱に是れ正なり。名と受とは局るが故に、正有り、傍有り。法に隨つて異に論ぜば、假は乃ち無量なり。假名の義、略して辨ずること麤爾り。

入不二門の義に三門分別（名を釋す一。相を辨ず二。說に約して異を分つ三。）

〔二四〕第一に名を釋す。入不二門とは、『維摩』に說くが如し。不二と言ふは、無異の謂なり。卽ち是經の中に、一實の義なり。一實の理は、妙寂にして相を離れ、如如平等にして彼此を亡ず。故に不二と云ふ。問うて曰はく、「諸法は一、二、三、乃至衆多有り。彼に翻じて理を說く。理應に不一、不二、不三、乃至不多なるべし。何の義を以ての故に、偏に不二と言ふや。」釋して言はく、「不一乃至不多は、經に說く處有り。故に『涅槃』に云はく、「一法の相を除く。算數すべからず」と。『華嚴』に亦云はく、「衆多の法の中に、一法の相無し。

一法の中に於て、亦多相無し二と一と。但本性は凡く一の不二門に就いて道理を乖じ、皆は倚して論ぜず。良に二は彼此通じて言ふを以て、是故に偏に對して不二を說く。又復、二は數法の始なり。今此に理體の無別を明さんが爲の故に、偏に二に對して不二を說く。不二と說くと雖も、不一、不三、乃至不多、悉く其中に入る。此義云何。若し一相を立つれば、一を以て多に對す。即ち是れ其二なり。彼二に離對す。故に不二と爲す。若し多相を立つれば、多を以て一に對す。遞つて亦是れ二なり。彼二に離對す。故に不二と爲す。又多相を立つれば、多法の中に於て亦此相待するに、各各是れ二なり。彼二に離對す。故に不二と爲す。此義を以ての故に、多を滅して悉く不二に入る。多を既に爾り、有を遣り、淨を遣り、縛を遣り、有を遣り、無を遣るも、類して亦爾なり。若し有相を立つれば、有を以て無に對す。即ち是れ其二なり。彼二に離對して、名けて不二と爲す。若し無相を立つれば、無を以て有に對す。遞つて亦是れ二なり。彼二に離對して、名けて不二と爲す。轉じて若し實に定めて非有無相を立つべくんば、非有無を以て有に對し、無に對す。即ち亦是れ二なり。彼二に離對して、名けて不二と爲す。乃至不二の相を建立せば、不二を二に對す。遞つて亦是れ二なり。彼二に離對すれば名けて不二と爲す。是故に不二は相有れば皆遣り、理有れば悉く收む。故に偏に之を名く、理體を說と爲す。又心の境と爲し、名けて義と爲す。此不二の義は、佛性、空藏等の中に通じて、門別不同なり。故に名けて門と爲す。又聖通の人、趣入する所と爲す。故に門と稱す。

【二五】次に不二門の相を辨ず。

之を名けて入と爲す。名義是の如し。

（二五）第二に相を辨ず。此不二門は、是れ法界の中の一門の義なり。門別して一なりと雖も、而も妙旨虚融の義在らずといふこと無し。在らざること無きが故に、一切の諸法、悉く是れ不二なり。諸法皆是なり。豈局る所有らんや。但『維摩』の中には、且く三十三人の辨ずる所を約して、以て其異を彰す。辨ずる所異りと雖も、要接すれば唯二なり。一に遣相門は、二相雙遣るを名けて不二と爲す。留むる所有るに非ず。二に融通門は、二法同體なるを名けて不二と爲す。遣る所有るに非ず。遣相門の中に、曲には復三有り。一には妄情所取の法の中に就いて、相對して二を分ち、彼二を翻除するを名けて不二と爲す。『維摩』に説くが如し。「我我所は二なり。我有るに因るが故に、便ち我所有り。若し我有ること無くんば、則ち我所無し。是を不二と爲す」と。是の如き等なり。二には情實相對して以て其二を分ち、此二に翻對して、名けて不二と爲す。是義云何。情に據りて、實に望むれば、情の外に實有り。實を將りて情に對す。之を説いて二と爲す。實に據りて情を望むれば、情本有ならず。情既に有ならざれば、實亦對を亡ず。故に不二と云ふ。『維摩』に説くが如し。「實、不實は二なり。其實見する者尚實を見ず。何に況んや非實をや」と。是の如き等なり。三には唯實に就いて離相平等なるを、名けて不二と爲す。是義云何。實に就いて實を論ずれば、由來異無し。異既に有ならざれば、一も亦對を亡ず。故に不二と曰ふ。維摩默して顯すは義應に此に當るべし。遣相是の如し。融相門の中、義別に亦三あり。

【經】北本涅槃經三十八。

【經】維摩經。

【經】北本涅槃經八如來性品。

一には妄情所起の法の中に就いて、義別して二を分ち、二法同體なるを名けて不二と爲す。經の中に說くが如し。無常卽ち苦、苦卽ち無常なり。是苦と無常と同體にして別無きを、名けて不二と爲す」と。是の如きの一切なり。二には眞妄兩別、之を名けて二と爲す。相依りて離れざるを名けて不二と爲す。『維摩』に說くが如し。「明と無明とは二なり。無明の性卽ち是れ明なるを、名けて不二と爲す」と。是の如きの一切なり。三には眞の中に就いて、總別して二を分ち、二法同體なるを名けて不二と爲す。此門の中に於て、曲に分たば四有り。一には直に眞體に就いて、義に隨つて二を分つ。如來藏の中に、過無量恆沙の佛法を具す。彼法同體なるを、名けて不二と爲す。又經に說くが如し。「空は卽ち無相、無相は卽ち無願なるを、名けて不二と爲す」と。是の如き等なり。二には眞の中に就いて、體用二を分つ。眞心に依り生死、涅槃を緣起し集成するが如し。用は體を離れず、體用虛融なるを名けて不二と爲す。經の中に說くが如し。「佛性と如來と、無二無別なり」と。是の如き等なり。三には眞體所起の法の中に就いて、相別二を分つ。經の中に說くが如し。「佛性の性、不善と倶なるを名けて無明と爲す。無明と善法と倶なる、之を名けて明と爲す」と。是の如き等の輩、彼二同じく一佛性の體に依るを、名けて不二と爲す。故に『涅槃』に云はく、「明と無明と、二相を生ず。智者は其性無二なりと了達す。無二の相は、卽ち是れ實性なり」と。是の如き等なり。又經に說くが如し、「一實諦の中に開して二諦を分つに、二卽ち一實なり」と。亦此門に當る。四には眞性所起の法の中に就いて、相別二を

【三六】第三門に說に約して異を分つ

分つ。佛性に依り、一切の行德を緣起し集成するが如し。德の別なるを二と名く。彼德の中に於て、門別の相卽するを名けて不二と爲す。『維摩』に說くが如し。佛法衆は二なり、佛は卽ち是れ法、法は卽ち是れ衆なるを名けて不二と爲す」と。是の如き等なり。不二衆しと雖も、要は此を出でず。其入と言ふは、義別して四有り。一には信に就いて入を明す。此不二に於て信順して違せず。故に名けて入と爲す。二には解に就いて入を說く。此不二に於て解觀相應する之を名けて入と爲す。三には行に就いて入を論ず。定に依りて照見し、明了現前して、二相の、以て中に住すべきを見ざるを入不二と名く。二相を見ざるは卽ち是れ止なり。明了不二なるは是れ其觀なり。四には證に就いて入を辨ず。亡情、實に契ふ。之を名けて證と爲す。證を得る時に於て、如の外に心有りて能く證するを見ず。既に心有ること無し。寧ぞ復心外に如の證すべき有らんや。能證するを見ざれば、妄想行ぜず。所證を見ざれば、虛僞起らず。如し心を離れざれば、妄想行ぜず。心如を離れざれば、如と心と異ならず。是れ卽ち眞に入不二門と名く。入不二の義、之を辨ずること略爾り。

（三六）次に第三門に、說に約して異を分つ。『維摩』の中の如き、義別して三階有り。一には維摩問ひ、諸の菩薩等、言を以て相を遣りて入不二を明す。二には諸の菩薩問ひ、文殊師利、言を以て言を遣りて其不二を明す。三には文殊問ひ、彼維摩詰、默を以て言を遣りて不二を顯す。此三は皆是れ化益方便の分齊相を息めて入を敎ふるの階降なり。若し自覺相應の境界を論ずれば言をもて彰すべからず。默を以て顯し叵し。何が故に是の如くな

【二七】義聚第三段に二諦門、中に二あり、先づ釋名。

【涅槃】北本、十三聖行品。

る。實に據りて以て求むれば、法の外に、本音聲、文字無し。何の言か能く彰さん。法の外に亦形相の得べき無し。誰か默を以て顯さん。言能く彰す無ければ、證處、語を亡す。默の能く顯すに非ざれば、證處、相を絶す。詮相悉く無きは他の測ること莫き所なり。是故に名けて、自覺境界と爲す。覺處、他無し。自も亦對を亡ず。問うて曰はく、『維摩』は玄の極を闡く。亦默の外に猶自覺相應の境界有らしめば、何が故に論ぜざる。釋して言はく、「化の爲に言默を極む。言默の外に、復陳ぶべからず。陳ぶべからざるの處は、從來未だ辨ぜず。豈獨り今のみならんや。」「不二の義、之を辨ずること略爾り。

二諦の義に兩門の分別あり。名を釋す一。體を辨ず二。

(二七)第一に名を釋す。二諦と言ふは、一には是れ世諦、二には第一義諦なり。然るに世諦とは亦俗諦と名け、亦等諦と名く。世を名けて時と爲す。事相の諸法は、生滅時に在り。時に就いて法を辨ず。故に世諦と云ふ。若し爾らば、無爲は非生滅の法なるをもて、應に世諦に非ざるべし。釋して言はく、有の名は諸法を盡さず。何ぞ等諦の中に、有爲、無爲の法を該攝せん。有爲は是れ世、無爲は世に非ず。有に從つて稱を立つ。故に世諦と云ふ。前の衆生假名と相似す。亦世と云ふは是れ共世人なり。一切の事法は世人の所知なり。故に世諦と名く。故に『涅槃』に云はく、「世人の所知を、名けて世諦と爲す」と。問うて曰はく、「世法は聖人も亦知る。何が故に、偏に世人の所知を、名けて世諦と爲すと言ふや。」

釋して言はく、「聖人此法を知ると雖も、世に隨つての故に知る。是故に、猶世人の所知と名く。又復聖人、彼世人所知の法の中に就いて其虛假を知る。虛假は是れ其世法の實なり。故に世諦と名く。若し爾らば、聖人も亦凡夫の生死の法の中に就いて、其苦集を知る。知る所の苦集を、應に凡諦と名くべし。然るに彼苦集は是れ凡法なりと雖も、聖人の知るが故に、聖諦と名くることを得。世諦も彼に似たり。「何に緣つてか偏に世間の人に就いて、說いて世諦と爲す。」釋して言はく、「互に從ふ。」皆傷くる無きことを得。但經論の中には、苦集は聖に非ざれば知らざることを明さんが爲の故に、聖諦と名く。又知りて聖と成るをもて、亦聖諦と名く。世法は虛假なり。是れ聖知ると雖も、理、精の上に非ず。故に第一に非ず。第一に非ざるが故に、判じて世の中に入るるなり。俗諦と言ふは、俗は、謂はく世俗なり。世俗の所知なり。故に俗諦と名く。等諦と言ふは、等とは、謂はく、齊等、統攝の義なり。世法一に非ず。別論すべからず。等しく諸法を擧ぐるが故に等諦と言ふ。第一義とは、亦眞諦と名く。第一は是れ其顯勝の目なり。所以に義と名く。眞には、是れ其絕妄の稱なり。世と第一とは、審實にして謬らず。故に通じて諦と名く。眞は即ち實なるべし。世法は虛誑なり。云何が諦と名くる。虛誑と言ふは、眞に對して義を辨ずるなり。然るに世法に於て、事は實に無にあらず。故に諦と稱することを得。又復世諦は、實に是れ虛誑なり。故に世諦と名く。然るに彼世諦、若し第一に對せば、應に第二と名くべし。若し眞諦に對せば、應に妄諦と名くべし。第一義を若し世諦に對すれば、應に出世と名く

【二八】以下、二諦の差別を明す。中に二、初に宗別を分つ。

べし。若し俗諦に對すれば、應に非俗と名くべし。若し等諦に對すれば、非等と名くべし。立名は、一一返對すべからず。是故に、事法を目く世諦、俗諦、等諦と名け、理法を目く第一義諦、乃至眞諦と名く。諦とは、猶是れ、眞諦の義なり。何が故に二種並に諦と稱する事を得て、並に說いて眞諦と爲すことを得ざるや。釋して言はく、今此には、諦門に義を辨ず。故に通じて諦と名く。眞俗を分たんが爲にして、是故に世諦は眞と名くることを得ず。若し當に彼眞實門の中に就いて以て諸法を論ずれば、是れ即ち理事、共に名けて眞と爲す。故に『地持』の中に、事と實との二性を、同じく眞實と名く。今諦門に據りて、二俱に諦と名く。二諦の名義、之を略して爾云ふ。

(二八)第二門の中に差別二有り。一に宗別を分ち、二に宗に約して諦を辨ず。宗を分つと言ふは、宗に別して四有り。一には立性宗。亦因緣と名く。二には破性宗。亦假名と名く。三には破相宗。亦不眞と名く。四には顯實宗。亦眞宗と名く。此四は乃ち是れ、義に望めて法に名くるなり。經論に名無し。經論の中に此名無しと雖も、實に此義有り。四の中、前の二は是れ其小乘にして、後の二は大乘なり。大小の中に各淺深を分つ。故に四有り。立性と言ふは、小乘の中の淺なり。諸法は各體性有りと宣說す。性有りと說くと雖も皆緣より生じ、外道の自然性を立つるに同じからず。此宗は彼『阿毘曇』に當る。破性と言ふは、小乘の中の深なり。諸法は虛假にして性無しと宣說す。前の宗の、法の自性を立つるに同じからず。法は無性なりと雖も、假性無きにあらず。此宗は彼『成實論』に當る。破相

宗とは、大乘の中の淺なり。前の宗の中の虛假の相も亦所有無しと明す。人遠く陽炎を觀て水と爲すも、近く觀れば本無し。但に性無きのみならず、水相も亦無きが如し。諸法は此に像る。無相を說くと雖も、未だ法の實を顯さず。顯實宗とは、大乘の中の深なり。諸法は妄想の故に有り。妄想は體無く、起ること必ず眞に託すと宣說す。眞とは、謂ゆる、如來藏性、恆沙の佛法なり。同體の緣集り、不離、不脫、不斷、不異なり。此之眞性緣起して、生死、涅槃を集成す。眞の所集なるが故に、眞實ならずといふこと無し。此實性を辨ずるが故に眞宗と曰ふ。此四宗中の別は乃ち無量なり。且く斯義に據りて、以て宗を別くるのみ。前の兩宗は、經は同じく論は別なり。後の二宗は、經論殊らず。義に隨つて之を分つ。前の二宗の中に經は同じと言ふは佛の本教に據る。同じく顯れて『四阿含』の中に在り、別部黨無し。論は別なりと言ふは小乘の衆生は情見未だ融せず、彼此を執定し、言、諍論を成ず。故に『毘曇』『成實』の別有り。後の二宗の中、經は同じと言ふは佛の本教に據る。隨つて何の經に就いても、義を以て之を分つ。部帙を別たず。故に經は同じと曰ふ。論は同じと言ふは、大乘の人は情異執無く、言に諍競無し。故に異論無し。人有り、一向に四宗無しと言ふ。是れ應ぜざる所なり。四が中の前の二は、分たずして自ら異なり。言論を待たず。後の兩宗は、經の中、處處に且く斯義有り。何んが疑を致すを須ひん。『勝鬘經』の中に如來藏を明すが如き、其に二種有り。一には空藏。即ち是れ眞ならず。二には不空藏。即ち是れ顯實なり。又『鴦掘摩羅經』の中の如き、彼は文殊の眞法を知らず、妄に法

【第二に等】次に宗に約して諦相を明す。中について四、先づ宗に約して法を立つ。

空を取ると訶す。取る所の妄空は即ち是れ不眞なり。其知らざる所の眞實法とは、即ち是れ顯實なり。又『涅槃』の中に一切空を見るとは、即ち是れ不眞なり。不空を見ざるは、不空の實は即ち是れ眞宗なり。經說一に非ず。何んが無と言ふことを得ん。又人四を立て、部黨に別配して言はく、『阿毘曇』は是れ因緣宗、『成實論』は是れ假名宗、『大品』『法華』、是の如き等の經は是れ不眞宗なり。『華嚴』『涅槃』『維摩』『勝鬘』是の如き等の經は是れ其眞宗なりと。前の二は爾るべし。後の二は然らず。是等の諸經は乃ち門別にして、淺深異らざるべし。若し破相を論ずれば、之を遣ること畢竟す。若し其實を論ずれば、皆法界緣起の法門を明す。其行德を語すれば、皆是れ眞性緣起の所成なり。但所成の行門不同なるに就く。故に此異有り。『華嚴』『法華』は三昧を宗と爲し、諸部の『般若』は智慧を宗と爲し、『涅槃經』は佛果の德、涅槃を以て宗と爲し、『維摩經』は不思議解脫を以て宗と爲し、『勝鬘經』は一乘を宗と爲す。是の如き諸經は、宗の歸すること各異に、門別に殊りと雖も皆は一に歸する等なり。中に於て輒く淺深を定むることを得る勿れ。衆經の宗別、之を分つこと麁爾り。第二に宗に約して諦相を辨ずるは、門別四有り。一には宗に約して法を分つ。二には深を以て淺を攝し、義に隨つて具に論ず。三には法を歷て分別す。四には即理を辨ず。宗に約して分つとは、初の宗の中に事理相對し、事を世諦と爲し、理を眞諦と爲す。陰、界、入等の彼此隔礙は是れ其事なり。苦、無常等の十六聖諦通相の法は、是れ其理なり。第二宗の中には、因緣假有をば、以て世諦と爲し、無性の空をば以て眞諦と爲す。第三宗

【乾闥婆城】今の蜃氣樓のこと。

【第二門の等】次に深を以て淺を攝し、義に隨って具に論ず。

此の中には、一切の諸法の妄相の有をば以て世諦と爲し、無相の空をば以て眞諦と爲す。此と前の宗の假名無性と、何の差別か有る。前の宗の中には、因緣の相を觀じて法の自性を破す。此宗の中には、諸法の性を觀じて因緣の相を破す。法性と言ふは、妄想の諸法、無を以て性と爲す。故に法性を觀じて緣相を取らず。前の宗は性を破して、法の假有にして、土木城の定性無しと雖も、假城無きにあらざるが如しと觀ず。此宗は相を破して、法は乾闥婆城は城無きを城と爲し、城即ち城に非ざるが如しと觀ず。城の喩既に然り。幻化等は譬類するに亦齊く爾り。第四宗の中、義別して二有り。一には依持の義、二には緣起の義なり。若し依持に就いて以て二を明さば、妄想の法をば以て能依と爲し、眞を所依と爲す。能依の妄をば說いて世諦と爲し、所依の眞をば判じて眞諦と爲す。然るに彼破性、破相宗の中には、有を世諦と爲し、無を眞諦と爲す。今此宗の中には、妄は有、理は無を以て世諦と爲し、相は寂、體は有を眞諦と爲す。若し緣起に就いて以て二を明さば、淸淨法界、如來藏の體緣起して生死涅槃を造作す。眞性の自體を說いて眞諦と爲し、緣起の用を判じて世諦と爲す。此一門竟る。第二門の中に、深を以て淺を攝し、義に隨つて具に論ず。初の宗の中に、義に隨つて具に論ずるに、凡そ七種有り。一に情理分別、二に假實分別、三に理事分別、四に縛解分別、五に有爲無爲分別、六に空有分別、七に行教分別なり。情理と言ふは、妄情所立の我、衆生等をば、以て世諦と爲し、無我の理をば、說いて眞諦と爲す。問うて曰はく『我等は情、取有爲なり、法に於て本無し。何を說いて諦と爲すや』

【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八正道分これなり。

釋して言はく、『凡夫は陰を取りて我と爲し、情取に隨つて名けて我人と爲すをば、說いて世諦と爲す。全く法無きに非ず。其眞諦とは、聖人は、陰は我我所に非ずと知る。聖の解に從つて說いて無我と爲すを名けて眞諦と爲す。亦無法に非ず。假實と言ふは、人天、男女、舍宅、軍衆、是の如き一切有名無實なるを名けて世諦と爲し、陰、界、入等の事相の諸法、有名無實なるを說いて眞諦と爲す。故に『雜心』に云はく、「若し法分別する時、名を捨すれば則ち等と說き、分別すれば所捨無し。是を第一義と名く」と。『理事と言ふは、陰、界、入等の事相差別を說いて世諦と爲し、十六聖行通相の理をば以て眞諦と爲す。十六聖行は、後の四諦の中に具に廣く分別す。縛解と言ふは、苦、集は縛の法なり。說いて世諦と爲す。滅、道は解の法なり。名けて眞諦と爲す。有爲、無爲と言ふは、苦、集及び道の三諦は有爲なり、判じて世諦と爲す。滅諦は無爲寂止にして勝法なり。說いて眞諦と爲す。空有と言ふは、十六行は、中空と無我との理の中に勝る。故に說いて眞諦と爲し、餘を世諦と名く。行敎と言ふは、三藏の言敎をば以て世諦と爲し、三十七品をば說いて眞諦と爲す。故に『雜心』に云はく、「經、律、阿毘曇、是を俗正法と名く。三十七覺品、是を第一義と名く」と。初の宗の中に此七種を具す。七種有りと雖も、事、理の二諦は正しく是れ宗歸なり。第二の宗の中に世諦に二有り。一には有、二には無なり。有の中、義に隨つて分つて三種と爲す。一に事相世諦とは、謂はく、陰、界等は事の分齊に於て、眞實にして虛ならず。故に稱して諦と爲す。此初の宗の世諦の事に同じ。二に法相世諦とは、謂

はく、一切の法、苦、無常等は、法の實相なり。故に稱して諦と爲す。此一門は、是れ初の宗の中の眞諦の法なり。三に理相世諦とは、謂はく、法は虚假、因縁集用す。世法實に爾り。名けて世諦と爲す。此一門は前の宗に同じからず。言ふ所の無とは、五陰の中に彼凡夫横に我人を計する無く。世諦の法の中に實に此我無し。故に世諦と名く。此空無我は、毘曇宗の中には、一向に說いて第一義諦と爲す。『成實論』の中には、義に兩兼有り。若し五陰事法の中に就いて此無我を辨ずれば世諦に攝入す。性空第一義中に就いて彼妄情所立の我人無きが如きは、即ち是れ眞諦なり。今は初の義に就いて、說いて世諦と爲す。眞諦の中の義別して二有り。一には因和合の中の無性の空、法和合の中の無性の空をば以て眞諦と爲す。二には性空第一義の中に就いて彼凡夫所立の我人無きをば、以て眞諦と爲す。第三宗の中の世諦に亦二あり。一には有、二には無なり。有の中、義に隨つて分つて四種と爲す。一に事相は、謂はく、陰、界等なり。此れ初の宗の世諦の事に同じ。二に法相は、苦、無常等なり。此れ初の宗の眞諦の法に同じ。三に假名集用の相は、此門は前の第二宗の中の理相世諦に同じ。四に妄想、謂ゆる、世法道理は、悉く是れ妄想の有なり。陽炎の水の如し。此一門は前宗に同じからず。謂ふ所の無とは、義に隨つて二有り。一には陰上に彼凡夫横計の我人無きをば、以て世諦と爲す。無相第一義の中に就いて、彼凡夫横計の我人無きが若きは、即ち是れ眞諦なり。今五陰因縁法の中に就いて、彼我人無きをば、判じて世諦に入る。然るに此世諦は、前の初宗の眞諦の法に同じ。二に五陰の假名の法の

中に就いて、彼妄情の所取の自性無し。世諦の法の中に、實に此性無し。故に世諦と云ふ。故に『地持』に云はく、「非有性とは世諦の無性なり」と。此無性は、第二宗の中に說いて眞諦と爲す。今は大乘破相宗の中に入る。義に兩兼有り。五陰、因緣法の中に就いて、彼凡夫所取の自性無きが若きは、判じて世諦に屬す。無相第一義の中に就いて彼性無きが若きは、即ち是れ眞諦なり。今は初の義に就いて、說いて世諦と爲す。眞諦の中に、義別して三有り。一には畢竟妄想空寂をば、以て眞諦と爲す。二には此空の中に彼凡夫橫計の我人無きをば、以て眞諦と爲す。三には此空の中に彼凡夫所立の自性無きをば、以て眞諦と爲す。第四宗の中、世諦に二有り。一は有、二は無なり。有の義の不同差別に六有り。一に事相の有は、謂はく、陰、界等なり。此れ初の宗の世諦の事に同じ。二に法相の有は、苦、無常等なり。此は初宗の眞諦の法に同じ。三に假名の有。此門は、前の第二宗の中の世諦の理に同じ。四に妄相の有、此門は、前の第三宗の中の世諦の理に同じ。五に妄想の有、心外に畢竟して法無しと辨明すれば、但是れ惑心妄想の所見なり。六に眞實の有は、謂はく、如來藏緣起して、生死、涅槃を集成す。此後の兩門は、前宗に同じからず。上來の六種は、世諦の有なり。言ふ所の無とは、義に隨つて四有り。一に陰の上に彼我人無し。此は初の宗の眞諦の理に同じ。二に假名因緣の法の中の無性の無は、第二宗の眞諦の理に同じ。三に妄相の無は、第三宗の眞諦の理に同じ。故に彼六地因緣觀の中の、逆に因緣空寂の義を觀ずるを世諦觀と名く。四に妄想の無は、前の宗に同じからず。此四種は、世諦

【經】 勝鬘經。

【第三門に等】次に法を歷て辨ず。

の無なり。眞諦の中に義別して二有り。一には有、二には無なり。有とは、謂ゆる、如來藏性恆沙の佛法なり。無の中に五有り。一には眞實如來藏の中、恆沙の佛法は同體緣集して、一法の別に自性を守る有ること無し。之を名けて無と爲す。二には此眞の中に、彼凡夫横計の我人無し。故に經に說いて言はく「如來藏とは、我衆生に非ず、命に非ず、人に非ず」と。三には此眞の中に、彼凡夫所立の自性無し。四には此眞の中に、彼二乘の因緣の相を取ること無し。五には此眞の中に、彼妄相の空如來藏無し。此五は通じて如來藏體第一義の中に就いて、義に隨つて分別す。同じく是れ眞諦なり。此二門竟る 第三門の中に、法を歷て辨ずとは、諸法衆しと雖も有無を出でず。有の中に義に隨つて差別して六有り。無の中に五有り。有の中の六とは、一に陰、界等の事相の有、二に苦、無常等の法相の有、三に因緣假名の有、四に諸法妄相の有、五に妄想の有、六に眞實の有なり。此六の中、初の事有とは、四宗の中には同じく世諦と爲す。第二の法相は、初の宗の中には用て眞諦と爲し、後の三宗の中には說いて世諦と爲す。第三の假名は、初の宗に未だ說かず。後の三宗の中には、說いて世諦と爲す。第四の妄想は、初二の宗の中には未だ此義を說かず。後の二宗の中には、說いて世諦と爲す。第五の妄想は、前の三宗の中には未だ此義を說かず。第四宗の中には、說いて世諦と爲す。第六の眞有は、前の三宗の中には未だ此義を說かず。第四宗の中には、分つて二諦と爲す。體を眞諦と爲し、用を世諦と爲す。無の中の五とは、一には陰の上に彼凡夫横計の無無し、二には假名因緣法の中の無性の無、三には離妄相の

【第四門の中等】
次に即離を明す。

無、四には離妄想の無、五には眞實寂滅の無なり。此五の中に第一の無は、初宗の中には說いて眞諦と爲し、後の三宗の中には義に兩兼有り。世に就いて辨ずれば、判じて世諦に屬し、眞に就いて辨ずれば、判じて眞諦に屬す。第二の無は、初の宗には未だ說かず。第三二の宗の中には、說いて眞諦と爲す。後の二宗の中には、義に兩兼有り。世に就いて辨ずれば、判じて世諦に屬し、眞に就いて辨ずれば、判じて眞諦と爲す。第三の無とは、前の二宗の中には未だ此義を說かず。第三宗の中には、說いて眞諦と爲し、第四宗の中には、義に兩兼有り。世諦に就いて辨ずれば、說いて世諦と爲し、眞諦に就いて辨ずれば、眞諦に攝入す。第四の無とは、前の三宗の中には、一向に未だ說かず。第四宗の中には、義に兩兼有り。世諦に就いて辨ずれば、判じて世諦と爲し、眞諦に就いて辨ずれば、說いて眞諦と爲す。第五の無とは、前の三宗の中には、未だ說かざる所、第四の宗の中には、一向に之を說いて眞諦と爲す。第四門の中に即離を明すとは、初の宗に就いて二諦相望するに、即離不定なり。三句に分別す。一には世諦、第一義に即す。陰、界、十二入等と說くが如き、事相の差別をば以て世諦と爲し、即ち此法の中の所有の諦理をば、說いて眞諦と爲す。二には世諦、眞諦に即せず。謂はく、非數滅、虛空無爲なり。三には眞諦、彼世諦に望めて、即せず離せず。謂はく、空、無我なり。即ち陰の上に就いて空、無我を明すを、名けて不離と爲す。然るに彼は但橫計の我人無く、陰法を空ぜず、故に不即と名く。第二の宗の中に說く所は、二諦形對して不定なり。前宗の中の陰の上の人無きに對すれば、性空は

【經】　勝鬘經。

世諦に卽すと說くことを得。今性空は陰の無性に卽すと說くは、前の宗の陰の上の人無きに同じからず。若し後の宗に對すれば、不卽と言ふことを得。後の宗の中に、卽ち妄想虛誑の法を指して、之を以て空と爲す。故に名けて卽と爲す。今此宗の中には、但假名因緣法の中に就いて定性無しと說く。假名因緣の相を空ぜず。故に不卽と曰ふ。第三宗の中に說く所の二諦は、一向に相卽す。彼は諸法は妄相虛誑と說く。體は是れ無法なり。其れ猶幻化のごとし。幻化の有を彼世諦に喩へ、幻化の無を彼眞諦に喩ふ。然るに彼幻有は別の體性無く、無を說いて有と爲す。無を有と爲すが故に世諦、眞に卽す。幻化の無も亦別體無く、有を指して無と爲す。有を無と爲すが故に、眞諦は世に卽す。世諦の眞に卽するは、色卽空なり。眞諦の世に卽するは、空卽色なり。色、空に卽するが故に、有は非有に卽し、空は色に卽するが故に、無は非無に卽す。故に「地持」に云はく、「有の方便より非有、非無に入る」と。第四宗の中に、兩種の二諦有り。一は依持、二は緣起なり。備には前に辨ずるが如し。若し依持に就いて二諦相望すれば卽せず離せず。眞に依りて妄を起し、妄に卽して眞を辨じ、不離と說くことを得。眞妄性別は不卽と云ふことを得。故に經に說いて言はく、「斷、脫し異し外の有爲法の依持建立たるをば、如來藏と名く」と。若し緣起に就いて、二諦相望すれば、相卽と言ふことを得。體に卽して用を起す。用體に卽するが故に。二諦の義、厥趣是の如し。

【二九】義衆中第四段に二無我を明す中、四門の分別あり。先に釋名。

二無我の義に四門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。宗に約して異を分つ三。人に就いて辨定す四。

(二九)二無我とは、一に人無我、二に法無我なり。人無我とは、經の中に亦衆生無我と名け、亦生空と名け、亦人無我と名け、亦人空と名け、亦我空と名く。衆法成生す。故に衆生と曰ふ。生は但假有にして其自性無し。是故に名けて衆生無我と爲す。衆生の性相は一切皆無なり。之を說いて空と爲す。用を宰するを人と爲す。無我と空とは、義前の釋に同じ。性實を我と名く。陰中に我無し。故に我空と曰ふ。法無我とは、亦法空と名く。自體を法と名け、法に性實無きを法無我と名く。諸法の性相一切皆無を、名けて法空と爲す。此れ即ち二種、倶に名けて空と爲し、齊く無我と號す。若し別して之を分たば、空と無我とは隱顯互に彰す。若し『毘曇』に依らば、「陰は是れ我に非ず、名けて無我と爲す。陰は我所に非ず、之を說いて空と爲す」と。成實法の中には、衆生空とは、之を名けて空と爲し、法體空とは、名けて無我と爲す。故に彼論の中に、生空を觀ずる者を、名けて空の行と爲し、法空を觀ずる者を、無我の行と名く。問うて曰はく、「何が故に衆生空をば說いて空行と爲し、無我と名けざる。「釋して言はく、『衆生の著我の中に十六種有り。謂ゆる我人、衆生、壽命、養育、知見、是の如きの一切なり。若し空の行を說かば、通じて十六の我人等の空を攝す。故に空行と名く。若し無我と言はば、餘の空を攝せず。是が爲に論せず。若し『維摩』に依らば、衆生空をば名けて無我と爲し、法體空をば、之を名けて空と爲す。故に彼經に言はく、「衆生は是れ道場にして無我を知る。故に一切の法は、是れ道場にして法空を知

【第二門に等】次に二空相對して異を辨ずることを明す。各空に四門ある中、先づ生空の四門中、初に惑情を辨ず。初に惑情を總じて一となすを明す。

【或は分つて等】次に二分。

【或は分つて等】次に四分を明す。

【優樓佉】ウルーカ（Ulūka）勝論派の祖。

【僧佉人】サーンクヤー（Sāṅkhya）數論派の人。

【先尼】セニカ（Senika）勝軍論師のこと。

【犢子道人】小乘二十部中の犢子部

る」と。故に空と無我とは眼目の異なり。左右に之を名く。皆傷る無きことを得。名義是の如し。」

第二門の中に、生法の二空相對して異を辨ず。各四門有り。一に惑情を辨じ、二に情に對して理を彰し、三に法の實を顯し、四に實に對して用を彰す。先に生空に就いて四門に分別す。惑情と言ふは我を計する心なり。我を計する心は開合不定なり。或は總じて一と爲す。謂はく、五見の中の我見心なり。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一に總別二を分つ。總は衆生に就いて我人有りと計するを、名けて總計と爲し、別は諸陰を計して以て我人と爲すを、名けて別計と爲す。二に即離二を分つ。陰に就いて我を計し、之を名けて即と爲し、常我有りて一切處に遍すと計し、之を名けて離と爲す。又向前の即陰の計の中に就いて、復即離有り。色を指して我と爲し、之を名けて即と爲す。餘を我所と爲し、之を名けて離と爲す。是の如きの一切なり。或は分つて四と爲す。一に即陰は、優樓佉所計の我の如し。陰を指して我と爲し、陰滅すれば我亡ず。二に離陰は、僧佉人所計の我の如し。陰を離れて我有り、陰滅すれども我存す。若し陰を離れて我を計すと說かば、何が故に經に、「衆生我を計する、終に陰を離れず」と言ふや。彼傍陰を起すが故に不離と說く。然れども陰を指して、以て我と爲さざるが故に、說いて離と爲す。三に亦は即亦は離は先尼の常我は陰を離ると計するが如きは猶虛空の一切處に遍するが如し。陰滅すれども我存す。我は陰に即すと作さば、陰滅すれば我も亡ず。四に不即不離は、彼犢子道人の所

のこと、もと外道なりしを後佛に歸依せしを以て犢子外道ともいふ。

【經】北本涅槃經三十二。

【然るに等】以下佛經にいふ我に就いて。

計の如し。五陰和合して更に我生有り。陰に就いて我を辨ず。故に不離と云ふ。而るに我は陰に非ず。故に不卽と曰ふ。然るに今の世人、有體假名の我を建立す。大況此に似たり。彼亦其佛經の言を取つての故に此計を爲す。經の中に說が如し。「衆生の佛性は六法に卽せず、六法に異せず」と。六法と言ふは、謂ゆる、五陰及與び我なり。彼此言に依る。故に我有りと說く。然るに佛法の中の所說の我は、諸陰和合し假名集用す。故に名けて我と爲す。彼は定實を立つ。所以に是れ患なり。或は陰に隨つて別して之を說いて、五人の計の不同と爲す。或は色陰を我と爲すと宣說する有り。或は受、或は想、或は行、或は識なり。或は十六と說く。『大品』に說くが如し。「一に我、二に衆生、三に壽者、四に命者、五に生者、六に養育、七に衆數、八に人、九に作者、十に使作者、十一に起者、十二に使起者、十三に受者、十四に使受者、十五に知者、十六に見者なり」と。此義は後の十六我の中に、具に廣く分別するが如し。又陰別所立の不同に隨つて、分つて二十と爲す。一色の中の如きも、人の計すること同じからず。差別に四有り。有人計して云はく、「色に卽して是れ我なり」と。此は是れ一なり。或は有るが計して云はく、「色は是れ我に非ず。色は是れ我所なり」と。此は是れ二なり。何を說いて我と爲して、色は是れ其我所と云ふや。彼乃ち其受等の四陰を指して、之を以て我と爲す。未だ我所起の處を分別すべからず。起處を分別することは、後の六十五種我の中に在り。今此に且く總相して言ふべきのみ。或は有るが計して云はく、「色は是れ、其我の窟宅なり。我は其中に居す」と。此は是れ三なり。或

【次に惑情に等】以下、第二に惑情に對して道理を辨ず。

は有るが計して云はく、「我は是れ、其色の窟宅なり。色其中に住す」と。此は是れ四なり。四の中の初の一は、是れ其我見なり。餘の三は、是れ其我所見なり。色の如き既に然り。受想行識、類して亦齊く爾り。五陰各四有り。四五便ち二十種の計有り。此二十の中、五は是れ我見、十五は是れ其我所見なり。若し其に所趣の處を分別せば、便ち六十五種の計我有り。一の色の如き、其十三有り。色に即して是れ我、之を以て一と爲す。色は是れ我所、離分して四と爲す。有人、彼受陰を計して我と爲し、色陰は是れ彼受我の所有なりとす。人の物を有するが如し。是の如き差別、乃至有人は識を計して我と爲し、色を說いて以て識我の所有と爲す。是の如く、色は彼受想行識の我の與に以て所と爲すと說く。故に便ち四種を分ち、前に通じて五と爲す。或は有るが說かく、「色は彼受想行識の我の與に以て窟宅と爲る。」と。復分つて四と爲し、前に通じて九と爲す。或は有るが宣說すらく、「受想行識の四陰の我を色の窟宅と爲す」と。復分つて四と爲し、前に通じて十三なり。此十三の中、初の一は我見、後の十二は是れ我所見なり。色の十三の如く、乃至行識も類して亦同じく然り。五陰の上に各十三有り。通合して其六十五種有り。六十五の中、五は是れ我見、陰に即して計す。六十は我所、陰に異して計す。綺互相望す。以て陰に異すと爲す。全く陰の外には非ず。多人別計して六十五有り。是一人に非ず。惑情是の如し。此一門竟る

次に惑情に對して、以て道理を辨ず。聖慧觀察して但是れ陰、別の我人無しと知る。故に『地持』に云はく、「聲聞、緣覺は陰を見て陰を離る。我は見るべからず。諸行緣起し、生滅和

【次に等】以下、第三に法の實を顯す。

【言ふ所の等】次に第四に實に對して用を顯す。

【次に法空等】次に法空の四門を明す、先にその惑情を辨ず。

【次に等】次に法空の理を辨ず。

【次に等】次に其實を辨ず。

【次に等】四に法空の用を明す。

【經】華嚴二十六

【經】勝鬘經。

合す」と。陰は陰を離れて我人の性無しとは、即ち是れ理なり。此二門竟る 次に其實を辨ず。陰の生滅を見るは、即ち是れ實なり。故に『維摩』に言はく、「既に我想を除き、當に法相を起すべし。應に是念を作すべし。但衆生此身を合成するを以て、起は唯法の起、滅は唯法の滅なり」と。生滅は是れ其法の實相なり。故に實と云ふ。此三門竟る 言ふ所の用とは、前の五陰の假名集用に依りて、便ち人天、男女等の別有り。此假用は有なれども患に非ず。是故に聖人常に世俗に隨つて、我人、衆生、壽命有りと說く。上來の四門は、其生空を辨ず。次に法空を明す。中に於て四門あり。先に其情を辨ず。前の生空の分齊の中に於て、所立の法實及以び假用は、相を執して定を取る。彼法空に望めて悉く惑情と名く。此同じく是れ法著我なるを以ての故に。此一門竟る 次に其理を辨ず。菩薩正しく觀じて、前の所取は畢竟じて無法なりと知る。但性無きのみならず、相も亦有ならず。無法は即ち是れ、情を遣るの理なり。此二門竟る 次に其實を辨ず。既に情相を空ずれば、妄想の心息む。便ち眞實如來藏性、自體法界、祕密法門を見る。是れ其實なり。此三門竟る 次に其用を辨ず。前の眞實如來藏の體に依りて、生死、涅槃を緣起集成す。是れ其用なり。經の中に說くが如し。「十二因緣、皆一心の作なり」と。又云はく、「三界は皆一心の作なり」と。復言はく、「法界五道に輪轉するを、名けて衆生と曰ふ」と。此は是れ眞實に生死を起すなり。又經の中の如し。「如來藏性法身を顯成す」と。是の如き等の義は、涅槃を起す。無我の體相、纔況すること是の如し。

【第三門の等】以下、第三に宗に約して異を分つことを明す。中に二、初に宗別を定む。【次に等】次に宗に約して異を辨ず。初に立性宗。

【第二宗の等】次に破性宗。

【第三宗の中等】次に破相宗。

【第五の大等】何れも四大、五陰等の外に衆生を觀るをいふ。

第三門の中、宗に約して異を分つ。中に於て二有り。一に宗別を定め、二に宗に約して異を辨ず。宗別と言ふは、宗別に四有り。一に立性宗、二に破性宗、三に破相宗、四に顯實宗なり。此四は、前の二諦章の中に、具に廣く分別するが如し。此一門竟る。次に宗に約して異を辨ず。初の宗の中に但生空を明して法空を說かず。生空を說くと雖も、但陰の上の彼凡夫橫計の我人無きを之を目けて空と爲す。未だ衆生の因緣虛假無性の空を說かず。第二宗の中に、具に二空を明す。五陰及び生は、別を攬りて總を成す。是れ因和合なり。因和合の中に、空にして定性無きを衆生空と名く。前の宗の、陰の上に人無きを衆生空と名くるに同じからず。苦、空、無常等諸法を集成するを法和合と名く。法和合の中、空にして定性無し。是れ其法空なり。問うて曰はく、『五陰の因和の無性を、云何が衆生空と名くることを得る。』釋して言はく、『五陰は是れ我所の法なり。內に從つて名を作す。故に生空と曰ふ。又復一切の總、別に因りて起るを通じて衆生と名く。彼生は無性なり。故に生空と名く。』「第三宗の中に亦二空を具す。前の宗に異るなり。生空と言ふは、前の宗は、直ちに因和合の中、虛假無性なるに就いて衆生空と名け、假生を空ぜず。今此宗の中には、假生も亦無なり。故に生空と名く。空中事無きに人を見るが如似きは、當に知るべし、彼人は人無きを人と爲す。人は卽ち人に非ず、陰の離分破壞するを以て方に無人と爲すを待たざるを。是の如きの一切なり。故に「維摩」に云はく、「菩薩生を觀ずるに、第五の大、第六の陰等の如し」と。法空と言ふは前の宗の中、但諸法は苦、無常等の和合無性を說く。

【第四の宗の中等】次に顯實宗。中に二門の別あり、先づ依持門。

【若し眞實等】次に緣起門。

【第四門の等】以下、第四に人に就いて二無我を辨定す。

故に法空と名く。空にして假名の諸法無しと說かず。此宗の所說は、假法も亦空なり。故に法空と云ふ。空中の花の花無きを花と爲し、花は卽ち花に非ざるが如き、彼苦、無常等の離分破壞するを以て方に無花と爲すを待たず。諸法は是の如し。故に『維摩』に云はく、「燋穀の牙、須陀洹の身見等の如し」と。但に性無きのみならず、相も亦有に非ず。第四の宗中、亦二空を具す。前と復異り。中に於て且く兩門を以て分別す。一に依持門、二に緣起門なり。若し依持を論ずれば妄想の法空なるを衆生空と名け、所依の眞寂なるを名けて法空と爲す。良に妄想は衆生の所起なるを以ての故に、妄想空を衆生空と名く。所依の眞實は是れ法の自體なり。法體寂なるが故に名けて法空と爲す。若し眞實緣起門に就かば、眞如の體寂を說いて名けて法空と爲し、緣用寂滅を衆生空と名く。眞體寂とは、眞實法界、恒沙の佛法、同一體性互に相集成して、別の自性無し。故に體寂と曰ふ。諸法を說いて、之を以て常と爲すが如し。義に隨つて分別するに、諸法の外に別して常の體無し。我、樂、淨等の一切の諸門、類して亦同じく爾り。一法として別して自性を守ること有ること無し。是故に、諸法は一切皆寂なり。此法體寂なるを法空と名く。緣用寂とは彼如來藏緣起して、生死、涅槃、一切の諸法を集成す。用相寂滅なるを衆生空と名く。良に作用緣集は人に在るを以て、是故に用寂を衆生空と名く。宗別是の如し。

第四門の中に、人に就いて辨定す。人とは、謂はく、聲聞、緣覺、菩薩なり。菩薩の人は、具に二空を解す。聲聞緣覺は、經論不同なり。『毘曇』、『地持』、『十地論』等は、聲聞

の人但生空を得と說く。緣覺も亦爾り。『成實論』の中には、聲聞等二空を得る有り、利鈍を簡ばずと說く。『大智論』の中には、利根の者は具に二空を解す。先尼等の如き、鈍根の者は、單に生空を解すと說く。是義云何。釋して言はく、此等は各所以有り。中に於て、略して三門を以て之を釋す。一に如來の所說不同を明し、二に聲聞の根に利鈍有りて、所解各異ることを明し、三に正しく共言を會す。所說不同とは如來、彼立性宗の中に於て唯生空を說き、後の三宗の中に具に二空を說く。上に辨ずる所の如し。根の利鈍とは、聲聞の人の中、根の三品有り。謂はく、下、中、上なり。此三品の人、彼初の宗の立性の教を聞いて、但生空を解す。此教の中には、未だ曾て法體空を宣說せざるを以ての故に。第二の宗の破性の教を聞いて、鈍者は但能く生空を悟解し、中上の二人は通じて二空を解す。第三宗を聞いて、中下の二人は但生空を解し、利人は俱に解す。第四の宗を聞いて、三品の人同じく生空を解し、法空を解せず。彼但衆生所起の情相の中に於て、空を悟解するを以ての故に。次に共言を會す。『阿毘曇』は彼初宗に據る。是故に一切の聲聞、但生空を解すと宣說す。『成實』は彼第二宗の中、中上の人能く二空を解すといふことを執り、分に過ぎて說いて言はく、「一切の聲聞利鈍を問ふこと莫く、同じく二空を解す」と。『成實』に此過分の失有り。『大智論』の中には、第三宗に據りて、「彼鈍者は但生空を解し、利は法空を解す」と說く。此は乃ち中下を同じく鈍根と名く。『十地』『地持』は第四の宗に據る。是故に、「聲聞の人は但生空を解す」と宣說す。妄想の法の中にして空を得。故に亦、彼初の

【三〇】義聚中第五段に如法性實際を明す中、四門の分別あり、先づ釋名

【第二門の中等】次第二に如等の體相を辨ずる中、分つて三、初に通じて二諦に就いて明す。中に又二、先づ通じて諸法の空有二義に就いて三門を分つ。

【論】大智度論三十二。

宗に從つて言を爲すべし。無我の義、略して判ずること是の如し。

如法性實際の義に三門の分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。大小の有無三。

(三〇)第一に名を釋す。如と法性と實際なり。義は『大品經』に出づ。此三は乃ち是れ、理の別目なり。故に龍樹の言はく、「如法性等は實相の異名なり」と。言ふ所の如とは、是れ共同の義なり。法相異なりと雖も、理實に同等なり。故に名けて如と爲す。法性と言ふは、自體を法と名く。法の體性なり。故に法性と云ふ。實際と言ふは、理體虛ならず。之を目けて實と爲す。實の畔齊なり。故に稱して際と爲す。名義是の如し。

第二門の中に其體相を辨ず。中に於て三有り。一には通じて二諦に就いて、以て三門を別つ。二には唯眞諦に就いて、以て三門を別つ。三には觀入に就いて、以て三門を別つ。

初の門の中に就いて、論釋二有り。一には通じて諸法の空有二義に就いて、以て三門を分つ。二には通じて諸法の九義差別に就いて、以て三門を分つ。空有に就いて以て三を別つと言ふは、世諦を有と爲し、眞諦を空と爲す。如法性等は皆此二に通ず。相狀如何。論の中に說くが如し。「如に二種有り。一に各各の相如、謂はく、地は堅相、水は濕相等なり」と。問うて曰はく、『此等は事相各異なり。云何が如と名くる。』『良に諸法皆自相有るを以て、自相齊く通じ、彼此相似たり。故に名けて如と爲す。又地の中に就いて多種の地有り。同じく皆是れ堅し。堅の義相似す。故に名けて如と爲す。水等も亦爾り。亦所說の地等の

【次に九義等】二に通じて九義差別に就いて三門を分つ。

諸法は其體實の如く、狂人顛倒の所見の如くならざるべし。故に名けて如と爲す。二に眞實相は、論に自ら釋して言ふが如し。「彼相の中に於て實を求むるに得叵し」と。即ち是れ空の義なり。此空の義は諸法同等なり。故に名けて如と爲す。法性と言ふは、論の釋に二有り。一に事法相とは、謂はく、地は堅性、水は濕性等なり。故に論に說いて言はく、「無著の心を用て諸法各各の自性を分別するを事法性と名く」と。二に實法性とは、諸法實相を實法性と名く。此二法性は「地持」と同じ。實際と言ふは、論に言はく、「法性は即ち是れ其實なり。如も亦是れ實なり」と。後に據つて言を爲さば、證處を際と名く。此は空有に就いて以て三門を別つ。次に九義に就いて、以て三門を別つ。先に九義を辨じ、然る後に之に就いて以て三門を別つ。何となれば、九義は論の中に說くが如し。一に各各の體なり。謂はく、一切の法は各自體有り。彼眼根の如きは、四大所造の淨色を體と爲す。是の如きの一切なり。二に各各の相なり。相は謂はく、相狀なり。一切の諸法に各相狀有り。故に名けて相と爲す。三に各各の力。力は謂はく、力用なり。一切の諸法、各力用有り。四に各各の因なり、謂はく、一切の法に各所因有り。五に各各の緣なり。謂はく、一切の法、各所緣有り。因と緣と何の別かある。蓋し乃ち親疎以て二門を別つ。親く生ずるを因と曰ひ、疎に發するを緣と名く。六に各各の果なり。謂はく、一切の法、各自ら果有り。七に各各の性なり。性は謂はく、三性一切の諸法、善、惡、無記の三性を出づること無し。故に名けて性と爲す。此れ體性に非ず。若し體相を言はば、前の體の中に攝す。八

【次に等】次に眞諦のみに就いて三門を分別す、中に四先づ生死涅槃の法をかつて三門を分別す。

に諸法各限礙有り。謂はく、一切の法、各分齊有り。陰の如きは唯五にして多と爲すことを得ず。是の如きの一切なり。又色法の如きは唯十入及び一の少分有りて、餘有ることを得ず。是の如きの一切を名けて限礙と爲す。九に開通の義は、謂はく、一切の法、義相開通す。色の義は十入及び一少分に通じ、心は六識に通ずるが如似し。是の如きの一切なり。九義是の如し。如法性等、皆此九に通ず。言ふ所の如とは、論釋に三有り。一に下如とは、謂はく、前の九義、各各差別なり。既に差別と言ふ。云何が如と名くる。一切の法同じく此九有るを以ての故に、名けて如と爲す。二に中如とは、謂はく、前の九義、皆是れ無常生滅の法なり。三に上如とは、謂はく、前の九義、皆非有、非無、非生、非滅、究竟清淨なり。法性と言ふは、論に自ら釋して言はく、「九法の中の性を名けて法性と爲す」と。中に於て三有り。謂はく、下、中、上なり。義は前に釋するが如し。言ふ所の異とは、向前には直に相似を取りて如と爲す。今は此れ共法の體性を明す。故に法性と云ふ。實際と言ふは、論に自ら釋して言はく、「九が中の證果を名けて實際と爲す」と。前の所說の如及び法性に於て、窮めて證するを果と名く。一義是の如し。又論に復言はく、「此九法の中に、有相を如と名け、空を法相と名く。中に於て果を得るを、名けて實際と爲す」と。此一門竟る

次に眞諦に就いて、以て三門を分つ。中に於て四有り。一に生死涅槃の法を遣りて、以て三門を別つ。二に三世の差別の相を遣りて、以て三門を分つ。三に空理總別の義に就いて、以て三門を分つ。四に實性有無の義に就いて、以て三門を分つ。遣生死涅槃相

【論】大智度論三十二。

【遣三世等】次に三世差別の法を遣りて三門を分別す

と言ふは、論の中に說くが如し。「生死涅槃皆空なりと觀察する、之を名けて如と爲す」と。問うて曰はく、「經に生死は是れ其無常、無樂、無我、不淨なり。涅槃は是れ其常、樂、我、淨なりと說く。云何が空と言ふや。」論に言はく、「顛倒の心を破せんが爲の故に、生死は苦、無常等なりと宣說す。人をして無常等に著せしむることを欲せず。實相の中には、無常、苦等不可得なるを以ての故に。又人の顛倒の心を破せんが爲の故に、涅槃は常、樂、我、淨なりと宣說す。人をして常、樂等に著せしむることを欲せず。亦實の中には常、樂、淨等不可得なるを以ての故に。良に諸法皆不可得なるを以ての故に、名けて如と爲す。法性と言ふは、彼如の中に入りて、所觀の染淨の法相を捨離して、生死涅槃の得べきを見ず。此不可得法性は自ら爾なり。故に法性と言ふ。故に論に說いて言はく、「譬へば小兒の水中の月を見て、謂つて實有と爲し、水に入りて之を求む。之を求めて得ざれば、便ち愁憂を生ず。智者は之水中に月無く、法性自爾なりと謂ふが如し」と。法性は是の如し。故に法性と云ふ。實際と言ふは、如と法相とは、是れ其理實なり。此理實は聖の所入處なるが故に、名けて際と爲す。遣三世差別相と言ふは、論の中に說くが如し。「三世の法を觀ずるに、不生不滅寂靜平等なり。之を名けて如と爲す」と。斯れ乃ち三世空同なるをもて如と曰ふ。法性と言ふは、論の中に說くが如し。「法を涅槃に名く、戲論の法ならず。性は本分の種に名く、黃石の中の金性、白石の中の銀性の如し。一切の法の中に涅槃の性有り」と。故に法性と名く。實際と言ふは、向に說く所の如し。法性を實と名く。如も亦是れ實

【空理の等】次に空理の總別に就いて三門を分つ。

【實性の有無等】次に實際の有無に就いて三門を分つ

【經】勝鬘經。

【次に觀入に就いて等】第三に觀入に就いて三門の分別を明す。中に二、一に先づ觀入を息染に就いて分別す。

なり。後に據りて言を爲さば、入處を際と名く。空理の總別に就いて分つと言ふは、詮に隨つて空を辨ずるに、空に差別有り。之を說いて如と爲す。故に論に說かく、「空に差品有るを名けて如と爲す」と。問うて曰はく、『差品云何が如と名くる。』『諸法の中に同じく空の義有るを以ての故に、名けて如と爲す。』「法性と言ふは、詮を廢して理を論ずるに、理は是れ一味なり。一味の理は是れ法の體性なり。故に法性と云ふ。是を以て論に言はく、「總じて一空と爲すを名けて法性と爲す」と。實際と言ふは、論に自ら釋して言はく、「如及び法性は之を名けて實と爲し、證處を際と名く」と。實性の有無に就いて分つとは、經の中に說くが如し。「如來藏の中に、過恒沙一切の佛法を具し、不離、不脫、不斷、不異なり」と。是諸佛の法は、同一體性互に相集成す。一法として別に自性を守る有ること無し。一性無しと雖も、而も性ならざること無し。一性有ること無きは、即ち是れ如の義なり。而も性ならざること無きは、即ち是れ法性なり。實際と言ふは、彼如、法性は、即ち是れ其實なり。證處を際と名く。此二門竟る　次に觀入に就いて、以て三門を別つ。中に於て二有り。一には觀入を息染に就いて分別す。二には觀入を捨淨に就いて分別す。息染と言ふは、論の中に說くが如し。何者か是れ如なる、諸法の實相は、常住不動なり。無明諸の煩惱有るを以ての故に、轉變して邪曲なり。後妄染を息れば、實相を得て本の如くにして異ならず。故に名けて如と爲す。法性と言ふは、論に言はく、「實相の體は清淨なりと雖も、煩惱と合するを名けて不淨と爲す。煩惱を息除せば本清淨を得」と。淨は是れ一切の諸

【捨淨と等】次に觀入を捨淨に就いて分別す。

【第三に等】以下第三に大小乘に如等の有無を明す。

法の體性なり。故に法性と云ふ。實際と言ふは、如と法性とは是れ其理實なり。菩薩は、此れ廣大無邊にして微妙最勝なりと知りて、更に餘に求めず。其中に安住す。住處を際と名く。捨淨と言ふは、論の中に說くが如し。「菩薩は、實相の法の中には常無く、樂無く、我無く、淨無しと觀察して、凡夫の常、樂、我、淨を捨離す」と。亦是觀を捨つれば、實相本の如し。故に名けて如と爲す。論に自ら喩を爲す。「水の性は冷なれども、火に從つて熱に變ず。是火滅し已れば水冷なること本の如くなるが如し。故に名けて如と爲す。諸法も是の如し。實相平等なるは、水の性冷なるが如し。觀に隨つて轉變するは、水の熱に變ずるが如し。觀心息滅して實相本の如くなるは、火滅し已れば水冷なること本の如くなるが如し。故に名けて如と爲す」と。斯文に準驗するに、妄想の緣智は決定して滅盡す。法性と言ふは、實相常住にして不變不動なり。法性自爾なり。故に法性と云ふ。實際と言ふは、若し證を得る時は、彼の如と法性とは、卽ち是れ實際なり。體相是の如し。

第三に、次に大小の有無を明す。大乘には具に有り。廣く上に辨ずるが如し。小乘にも亦具す。云何が知ることを得る。龍樹の說くが如し。『雜阿含』の中に、「十二緣とは是れ如、法相、法住、法位、有佛、無佛、性相、常住なり」と說く。是れ如の義なり。又復彼『雜阿含』の中に說くが如し。「舍利弗善く法性に達す」と。卽ち是れ法性の義を宣說す、實際と言ふは、龍樹釋して言はく、「小乘の法の中には、其說處無し。說處無しと雖も、理實に之有り」と。云何が有なることを知る。論に言はく、「涅槃は卽ち是れ實際なり」と。小

乘の法の中に涅槃を說くが故に、卽ち是れ實際の義を宣說す。但涅槃法に種種の名有り。或は名けて止と爲し、或は名けて妙と爲し、或は名けて離と爲し、或は名けて出と爲し、或は實際と名く。是故に涅槃卽ち是れ實際なり。問うて曰はく『「小乘の法の中に此三義を具すと知ると雖も、相別如何。』龍樹釋して言はく、「聲聞法の中には、法の生滅を觀ずる、之を名けて如と爲し、諸觀を滅離して法の實相を得るを、名けて法相と爲す。彼涅槃を名けて實相と爲す。卽ち此法性は、聖の所證なれば、名けて實際と爲す」と。』如、法性、實際の義、略して辨ずること是の如し。

大乘義章　卷第一

【一】義法聚の中第六段に三解脱門を明す中、八門の分別あり、第一に釋名。

大乘義章 卷第二

遠法師撰す

義法聚の中此卷に七門有り。三解脱門の義、亦三空義と名く。三有爲の義、三無爲の義、四空の義、四優檀那の義、四悉檀の義、四眞實の義。三解脱門の義に八門分別あり。名を釋す一、性を辨ず二、分別三、其名を制定す四、其數を制立す五、次第の義六、地に就いて分別す七、重空の義八。

(一)第一に、名を釋す。三解脱門とは、謂はく、空と無相と及び無願となり。言ふ所の空とは、理に就いて名を彰す。理寂を空と名く。無相と言ふは、釋するに兩義有り。一には理に就いて名を彰す。理、衆相を絶するが故に無相と名く。二には涅槃の法相に就いて解釋す。涅槃の法は、十相を捨離するが故に無相と曰ふ。無願と言ふは、經の中に或は復名けて無作と爲し、亦無起と名く。釋するに三義有り。一には理に就いて名を彰す。理の中には、貪求願樂有ること無きが故に無願と名く。理の中には主の作用集起無し。是故に亦無作無起と名く。二には生死の法相に就いて以て釋す。生死の法は、願求すべからざるが故に無願と名く。三には行に就いて以て論ず。生死の中に於て、願求を生ぜざるが故に無願と名け、願求を作さざるが故に、無作と名け、願求を起さざるが故に、無起と曰ふ。此三をば經論に解脱門と名く。亦三治と名け、亦三空と名く。義は或は復說いて三三昧門と爲す。三脫、三昧は經論に同く說く。三治の一門は『地論』に說くが如し。三空と言ふは、『仁

【二】以下、第二に性を辨ず。

【四念處】身受心法の四。

王』に說くが如し。三脫と言ふは、果に對して名くるなり。涅槃の果德は、縛を絕するを脫と名く。空無相等は脫の與に門と爲る。解脫門と名く。故に龍樹の言はく、「此三法を行ずれば能く涅槃解脫の果を得」と。故に解脫門と名く。對治門とは、障に對して名くるなり。『地論』に說くが如し。三障對治するが故に三治と名く。三空と言ふは、理に就いて名を彰す。理如一味なれども、詮に隨つて以て別つが故に、三種有り。三三昧とは、行に就いて名くるなり。前の三は是數、後の三は胡語なり。三昧と言ふは、此には正定と言ふ。心を以て法に合して邪亂を離るるが故に、三昧と曰ふ。此等は差別するが故に、名けて門と爲す。亦は可通人の趣入するを門と名く。名義是の如し。

（二）第二に、性を辨ず。三脫三治及び三空は、此法を以て體と爲す。三三昧とは、行を以て體と爲す。但し行の中に就いて、慧を用て主と爲す。若し眷屬を論ずれば、是は五陰の性なり。心王は是識なり。想數を想と爲し、受數を受と爲し、餘數を行と爲す。隨生の無作は、卽ち色陰なり。問うて曰はく、『此三は慧を用て主と爲す。何が故に經の中に、說いて三昧と爲す。』釋して言はく、『一切の諸の心心法は、更相に名を受く、四念處の如し。體實には是れ慧なれども、而かも名けて念と爲す。此も亦是の如し。又龍樹の言はく、「此三の智慧は、若し定に住せずんば、則ち是れ狂慧なり。多く邪疑に墮して能く爲す所無し。定に住するを以ての故に、能く煩惱を破す。故に所依に從つて、說いて三昧と爲す。又三昧とは名けて正定と爲す。一切の禪定、若し此三無ければ退轉して定ならず。三昧と名

【三】次に三に分別。中に三あり、初に三法相對して三門を分つ。

【次に二法等】二に二法に就いて三門を分つ。中にまた三、初に生死涅槃の二法相對して分つ。

【涅槃】北本涅槃經二十七、師子吼菩薩品。

【一には等】次に生死を以て第一義諦に對して分つ。

【二には等】次に涅槃を以て第一義に對して分つ。

【次に一法に等】次三に一法に就いて三門を分別す。中に三、先づ唯生死に就く。又四に分つ。中一には唯外境に就いてす。

けず。此三に由るが故に、正定不退なり。能に就いて目と爲すが故に三昧と名く。體性是の如し。

(三)第三に、分別。法の不同に隨つて、乃ち三階有り。一には三法相對して三門を分別す。二には兩法相對して以て三門を別つ。三には一法に歷就して以て三門を別つ。三法と言ふは、一には是れ生死、二には是れ涅槃、三には第一義空なり。彼生死に就いて無願門を說く。生死は過多し。願ふべからざるが故に。彼涅槃に就いて無相門を說く。涅槃は寂靜にして十相を離るるが故に。第一義に就いて空門を宣說す。次に二法に就いて、以て三門を別つ。中に於て乃ち三種の差別有り。一に生死涅槃の二法相對して、以て三門を說く。生死虛無、之を名けて空と爲す。故に『涅槃』に云はく、「空とは、謂ゆる、一切の生死なり」と。涅槃の法は十相を離るるが故に、說いて無相と爲し、生死取捨の願心を遠離するが故に、無願と名く。故に『維摩』に云はく、「是菩提を願はず、貪著無きが故に。亦は生死の體虛なるを、空と名くべし」と。相は則ち鄙惡にして願樂すべからず。名けて無願と爲す。無相は前に同じ。二には生死を以て第一義に對して、以て三門を說く。第一義に就いて空、無相を說き、彼生死に就いて無願を宣說す。彼第一義の體寂なるを空と名け、妙に諸相を離るるが故に無相と曰ふ。生死は樂ひ叵し。稱して無願と曰ふ。三には涅槃を以て第一義に對して、以て三門を說く。第一義に就いて其空門を說き、彼涅槃に就いて無相及以無願を宣說す。涅槃無相無願の義は前の釋に異らず。次に一法に就いて、以て三門を別つ。

【二には等】二には唯心に就いてす。【三には等】次に三には境二心一を以てす。

【四には等】次に四に心二境一を以てす。

【次に等】以下、第二に唯涅槃に就いて分つ。

中に於て、乃ち三種の差別有り。一には唯生死に就く。二には唯涅槃に就く。三には唯理に就く。生死に就く中、復四種有り。一には唯外境に就いて、以て三門を說く。外境の中に體相用有り。體空を空と名く。相空の義を名けて無相と爲す。用空の義を說いて無作と爲す。用として貪すべき無し。亦無願と云ふ。二には唯心に就いて、以て三門を別つ。內心に、三有り。謂はく、心と想と見となり。妄想の體、之を名けて心と爲す。心に依つて相を起し、之に隨つて分別するを、說いて以て想と爲す。想に依つて執取して、定性を建立す。之を說いて見と爲す。心體空なるが故に、之を名けて空と爲す。彼想空なるが故に、說いて無想と爲す。彼見空なるが故に、說いて無願と爲す。三には境の二、心の一を以て三門を說く。經に生死を說く。要は唯、三種なり。一には名、二には相、三には妄想なり。外境は無體なり。但し是は名のみ有り。故に說いて名と爲す。事相の差別を說いて以て相と爲す。其內心に就いて、說いて妄想と爲す。彼名の體空なるを、說いて空門と爲す。事相無なるが故に說いて無相と爲す。妄想の心寂なるを說いて無願と爲す。四には心の二、境の一を以て三門を說く。「地論」に說くが如し。障に三種有り。一には分別妄想の心、二には是れ相なり。謂はく、妄想に依つて外の境界を起す。三には是れ願なり。前の諸相に依つて、取捨の心を起す。彼妄想空なるを名けて空門と曰ふ。彼相空とは無相門と名く。取捨の願空なるを、說いて無願と爲す。上來の四門を合して第一と爲す。唯生死に就いて、以て三門を說くなり。次に涅槃に就いて、以て三門を說く。涅槃の中に體相用有

【次に等】以下、第三に唯理に就く

【四】以下、第四に三解脫について名を制す。

り。性淨涅槃は之を以て體と爲す。方便涅槃は、之を以て相と爲す。應作涅槃は、之を以て用と爲す。彼體寂をば名けて空門と曰ふ。相寂の義を名けて無相と爲す。作用寂をば名けて無作と爲す。次に理法に就いて、以て三門を說く。『成實』に說くが如し。理體寂なるが故に、之を名けて空と爲す。是空理の中には、諸相無し。故に說いて無相と爲す。願求の心無きを說いて無願と爲す。又『大智論』も亦此說に同じ。故に彼論に言はく、「摩訶衍の中、三脫は是れ一なり」と。行の因緣を以ての故に、三門と說く。諸法の空を觀ずるを、說いて空門と爲す。此空の中に於て相を取らず。是時の空門を轉じて無相と名く。無相の中に於て更に所作無し。是時の無相を轉じて無作と名く。同體なるを以ての故に、若し人空に入らば、終に相を起さず。亦所作無し。乃至彼無所作門の中に入らば、亦空の義を知り、相を取らず。但人別の觀入の不同に隨ふが故に、三門を立つ。

(四)第四門の中に、且く生死涅槃の空理に就いて其名を制定す。餘類知るべし。名を制すと言ふは、名の所依を立つるなり。名を定むと言ふは、其名相を定むるなり。先に三脫に就いて、其名を制定す。三解脫門は、正しく生死涅槃の空理を用て、之を以て體と爲す。空解脫門の制名、定名は、悉く皆體に就く。無相門は、制名は體に就く。涅槃の法を說いて、彼解脫の與に以て門と爲すが故に、若し其名を定むれば、乃ち是れ體の上に、相を遣るを目と爲す。無願門とは制名は、體に就いて生死の法を說いて、彼解脫の與に以て門と爲すが故に。若し其名を定むれば、乃ち是れ體の上に、厭に從つて稱を受く。次に三治に

【五】次に第五に其數を制定す。中に五義あり、初に法の不同に隨ふ。

就いて其名を制定せば、義は三脫に同じ。正しく生死と涅槃及び空を說いて對治と爲すが故に。次に三空に就いて、其名を制定せば、然るに三空とは理を以て宗と爲す。中に於て、空門は制名　悉く皆體に就く。無相門とは、制名は詮に就く。無相涅槃は是れ空の詮なるが故に、若し其名を定むれば、乃ち是詮の中、相を遣るを目と爲す。無願門とは、制定は詮に就く。生死の法は是れ空の詮なるが故に、若し其名を定むれば、乃ち是詮の中に厭に從つて稱を受く。次に三三昧に就いて其名を制定せば、然るに三三昧は行心を體と爲す。生死涅槃第一義空は是れ其境界なり。無願と言ふは、制名は體に就く。彼三昧の心は生死の中に於て、願樂を生ぜざるを名けて無願と曰ふ。若し其名を定むれば、乃ち是體の上に患を遣るを目と爲す。諸有を願求するは是れ其患なるが故に、彼願求無きを說いて遣患と爲す。無相と言ふは、制名は境に就く。無相涅槃は是れ三昧の境なり。境に就いて稱を立つるが故に無相と曰ふ。若し其名を定むれば、乃ち是れ境の上に相を遣るを目と爲す。空門と言ふは、制名定名同じく皆境に就く。空理は是れ其三昧の境なるが故に。此等の立名は左右不同なり。各一義に隨ふ。

(五)第五門の中に、其數を制定す。凡そ五義有り。一には法の不同に隨ふ。「地持」に說くが如し。法に二種有り。一には有、二には無なり。有爲、無爲、之を名けて有と爲す。我我所、無き之を名けて無と爲す。生死の法を有爲の有と名け、涅槃の法を無爲の有と名く。第一義空は之を名けて無と爲す。此三法なり。有爲の有に於て不願不隨なれば無願門を立

【二には等】次に根の不同に隨つて三門を分つ。
【三には等】次に欲の不同に隨つて分つ。
【四には等】次に行の不同に隨ふ。
【涅槃】北本三十一。
【五には等】次に患の不同に對す。

て、無爲の有に於て願樂攝受すれば無相門を立つ。此二の中に於て願に非ず、不願に非ず。有に於て有見ならず。是見を以ての故に、空門を建立す。空を見るを以ての故に涅槃を願はざるを稱して非願と曰ふ。生死を厭はざるを非不願と名く。前の二有を捨するを不有見と名く。二には根の不同に隨つて三門を建立す。根に三種有り。謂はく利鈍中なり。鈍根の者の爲に無願門を說く。怖畏せしむるが故に。中根の者の爲に無相門を說く。趣求せしむるが故に。利根の者の爲に空門を宣說す。實を證せしむるが故に。三には欲の不同に隨ふ。『大智論』に說くが如し。欲に三種有り。(一に遠離を樂ふには爲に無願を說き、二に寂靜を樂ふには爲に無相を說き、三に實を樂ふには爲に空門を說く。四には行の不同に隨ふ。涅槃に說くが如し。行に三種あり。謂はく、定慧捨なり。定行を起さんが爲に空門を宣說す。心をして住せしむるが故に。慧行を起さんが爲に無願門を說く。其をして生死を觀察して、斷ぜしむるが故に。捨行を起さんが爲に無相門を說く。心をして依らしむるが故に。五には患の不同に對す。『大智論』に說くが如し。患に二種あり。一には見、二には愛なり。見行の者の爲には空門を宣說し、其をして見を捨せしむ。愛行の者の爲には無願門を說く。生死を厭うて、願求せざらしむるが故に。見愛等き者には爲に無相を說く。涅槃の色聲香味觸の相を遠離せしむることを宣說して、彼愛行を治し、生住滅を離る。彼見行を治し、男女の相を離る。義に兩乘有り。三門の患を治する差別一に非ず。且く斯を論ずるのみ。

【六】次に第六に三脫の次第を明す

（六）第六門の中に、其次第を明す。次第に三有り。一には修入の次第。先に無願を說いて生死を厭はしめ、次に無相を說いて涅槃を求めしめ、後に空門を說いて、其をして契證せしむ。二には終成本末の次第に據る。空は是れ德本なれば菩薩先に觀ず。故に先に空を明す。空を見るに由るが故に生死を見、以て貪求すべからざるが故に。次に第二に無願を宣說す。空義を證し生死を見ざるに由りて、便ち涅槃無相と相應するが故に。次に第三に無相を宣說す。三には所空の體相用等に約して其次第を明す。先に空門を說いて諸法の體を空じ、次に無相を說いて諸法の相を空じ、後に無作を說いて諸法の用を空ず。次第是の如し。

【七】次に第七に地に就いて分別す

（七）第七門の中に、地に就いて分別す。小乘の法の中には、之を說くこと不定なり。有人、宣說すらく、「三脫三昧は唯四禪と未來と中間と及び三無色に在り、無漏なるを以ての故に」と。復有說者の言はく、「三解脫は一向無漏なり。備には向に辨ずるが如し」三三昧とは漏無漏に通ず。無漏の三昧は三解脫の如し。有漏の之は十一地に在り。謂ゆる、欲界と根本と四禪と未來と中間、及び四空處となり。大乘法の中の三脫三昧は無漏に通ず。有漏の者は、備には向に說けるが如し。十一地に在り。無漏の者は十地に依る。謂ゆる、八禪と未來と中間となり。若し復通論せば、亦欲界に依る。大乘に宣說すらく、「欲界地の中に禪定有り」と。故に地を攝すること是の如し。

【八】以下、重空三昧を辨ずる中五あり、初に名を列し相を辨ず。

（八）第八門の中の義別に五有り。名を列し相を辨ず一。漏無漏の分別二。人に就いての分別三。界に就いての分別四。地に就いての分別五。

初門の中に就いて、先に其名を列す。名字は是れ何ん。謂はく、空は空三昧、無相は無相、無願は無願なり。初に就いて名を彰す。重空三昧と名く。亦は名けて重無相重無願と爲すことを得。相狀は如何。『毘曇』の如きに依らば彼四諦十六聖行を分つて以て三門と爲す。苦の下の二行の空と無我とを、判じて空門と爲す。次に十行有り。說いて無願と爲す。苦の下に二有り。謂はく、苦と無常となり。集の下に四有り。因と集と有と緣となり。道の下に四有り。道と如と跡と乘となり。此十種を說いて無願門と爲す。滅の下の四行、盡と止と妙と出とを無相門と爲す。重空と言ふは、羅漢先づ無學の等智を以て空門を觀察するを、直に空定と名く。然して後、彼有漏の等智を以て、前の空智も亦空無我なりと觀ずるを、空空三昧と名く。此は智の上の空にして、我人無きを觀ず。智體を空せず。重無願とは、亦先に彼無學の等智を以て苦等を觀察するを、直に無願と名く。後に此智も亦是れ無常なり、願求すべからずと觀じて、彼聖道を擊するを、無願無願と名く。問うて曰はく、「何が故に苦を以て擊せざる。」「聖道に違するが故なり。」道は是れ苦に非ず。若し觀じて苦と爲さば、即ち顚倒と爲らん。「何が故に因集有緣を以て彼聖道を擊せざる。」論に言はく、「因等は聖道に相順ずれば、名けて擊と爲さず」と。「何が故に道如跡乘を以て、彼聖道を擊せざる。」釋して言はく、『若し道如等の觀を作さば、是れ聖道を樂ふこと、何が名けて擊と爲さん。』重無相とは先に無學等見の智を以て、彼滅の下の盡止妙出を觀ずるを、直に無相と名く。後に此智盡滅の處の非數無爲も、亦是れ寂止なりと觀じて、彼聖道を擊

するを、無相無相と名く。何者か智盡の非數無爲なる。云何が擊するや。滅を觀ずるの智、起るべきか、起らざるべきか。是れ其智盡の非數無爲なり。彼智を擊せんと欲して、先に煩惱不起の處の數滅無爲は、是れ其寂止なりと觀ず。是れ寂止なるが故に、願ずべく、樂ずべし。此寂止のみ願樂すべきを以ての故に、所滅の煩惱は是れ厭惡すべし。後には此智の不起の處の非數無爲も、亦是れ寂止なりと觀ず。願ずべく、樂ずべきこと數滅と同じ。智盡の處は彼數滅に同じく願樂すべきを以ての故に、所滅の智と彼煩惱とは、同じく厭惡すべし。之を擊すること是の如し。問うて曰はく、『何が故に、妙出を以て彼聖道を擊せずして、偏に止行を用ふる。』釋して曰はく、『非數は妙出に非ざるが故に。』何が故に、滅行を以て之を擊せざる。此れ無常の滅に濫同するを以ての故なり。若し『成實』に依らば、諸法の性空を名けて空門と爲す。此空の中に於て、相として取るべき無きを無相門と名く。空の中に其悕求願樂する無きを無願門と名く。聖人の智を以て五陰の空を觀ずるを空三昧と名く。復此智も亦是れ空なりと觀ずるが故に、名けて空空と爲す。陰の空を觀ずる中に、相として取るべき無きを無相三昧と名く。復此智も亦空無相なりと觀ずるを、無相無相と名く。陰の空を觀ずる中に、悕求の願無きを無願三昧と名く。復此智も亦空無願なりと觀ずるを、無願無願と名く。大乘法の中には、三門多種あり。備には上に辨ずるが如し。中に於て細論せば、或は『毘曇』に同じく、或は『成實』に似たり。若し生死涅槃の空理を說いて以て三門と爲さば、相は『毘曇』に同じく、若し空理に就いて義に三門を分たば、則ち『成

【論】　雜心論。

【次に等】　以下、重空三昧の二に有漏無漏に就いて分別す。

【次に等】　以下、三に人に就いて論ず。

【次に等】　以下、四に界に就いて論ず。

【三天下】　四天下中北倶盧洲を除く。

【次に等】　以下、五に地に就いて分別す。

實』に同じく、淺深を異と爲すのみ。重空の觀は多くは『成實』に同じ。何が故に、此重空三昧を修する。論に言はく、「人杖を以て尸を燒く、死尸既に盡きぬれば杖も亦焚くべきが如く、智も亦是の如し」と。前に用て結を斷じ、結患既に亡ずれば、智も亦捨すべし。故に之を修すべし。此一門竟る。次に、有漏無漏に就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、重空三昧は一向に有漏なり。其所觀、諦理に非ざるを以ての故に。『成實』は無漏なり。故に彼論に言はく、「重空無相無願三昧は重空の名勝れたり。云何が有漏ならん」と。大乘は無漏なり。『成實』の說に同じ。此二門竟る。次に、人に就いて論ず。毘曇法の中、重空三昧は唯是れ利根の阿羅漢のみ得して、是れ餘人には非ず。彼學人は煩惱有るを以ての故に、一向に得せず。鈍根の羅漢は、所得の三昧自在ならず。故に亦得すること能はず。成實法の中には、一切の羅漢及び諸の學人、皆悉く之を得。故に『成實』に言はく、「學人も亦得。一切諸法の滅を證するを以ての故に」と。大乘の人の中には種性已上一切皆得。若し復通論せば、十信も亦得。此三門竟る。次に界に就いて論ず。界は、謂はく三界なり。『毘曇』の如きに依らば、重空三昧は唯欲界に起す。上二界に非ず。欲界の中に就いて、三天下の人は能く此觀を起す。說に由りて起す。故に『成實』には文理無く、遍く通ずべし。大乘法の中には、菩薩自在なり。三界の中に於て、身に隨つて何れの處にも皆修起することを得。此四門竟る。次に、地に就いて論ず。『毘曇』の如きに依らば、重空三昧は是れ有漏なるが故に、始め欲界より乃ち非想に至る、一切地の心は皆修起することを得。欲界は唯未來禪の中の所有の無漏を緣

【七依定】色界の四禪と無色界の空識無邊處、無所有處との七をいふ。非想非非想處は不了定多く慧少ければ依を說かず。

【九】義聚第六段に三有爲の義を明す、中に兩門の分別あり。先づ釋名

ずるを、重空觀と爲す。非想は唯、無所有處所有の無漏を緣ず。相近きを以ての故に。成實法の中には是れ無漏なるが故に、唯初禪より無所有に至るに、七依定の中に依りて修起することを得。大乘の所辨は、一切地の心に皆修起することを得。重空三昧は之を辨ずること麤爾り。

三有爲の義に兩門分別あり。名を釋す一　相を辨ず二

(九)三有爲とは、謂ゆる、色と心と非色非心との三聚の法なり。質礙を色と名け、慮智を心と曰ふ。不相應行は、前の二に違返し、非色心と名く。此三種を、同じく有爲と名く。爲は是れ集起造作の義なり。法は爲作を有するが故に、有爲と名く。是義云何。釋するに六種有り。一には因を將て、果に對して以て釋す。一切の因緣は皆能く果を集め、能く所爲を有す、故に有爲と名く。二には果に據りて因に對して以て釋す。有爲の果報は皆爲因の生なり。此因の爲を有するが故に、有爲と名く。三には法外の生住滅等に就いて法に對して以て釋す。色等の法の邊に、皆同時別體の四相有り。此四相を用て色等の法を相す。生相に由るが故に、色等の法生ず。乃至第四の滅相有るに由り、色等の法滅す。此四相は、能く所爲を有するが故に、有爲と名く。四には色等に就いて、彼法外の四相に對して以て釋す。色等の諸法は、皆生等の四相の所爲を有するが故に有爲と名く。五には法體前後の四相に就いて、有爲を解釋す。前後の四相遷變するを爲と曰ふ。色等の諸の法體は、此爲を有す

【二〇】次に第二に三有爲の體相を辨ずる中、光色法を辨ず。中に兩門分別あり、一に體相を辨ず。

るが故に有爲と名く。六には同時同體の四相に就いて、有爲を解釋す。色等の諸の法性は、幻化の如し。幻有を生と稱し、幻無を滅と名け、幻立を住と云ひ、處變を異と曰ふ。此四の同體互に相緣集す。之を稱して爲と曰ふ。色等の諸の法體は、此爲を有するが故に有爲と名く。名義是の如し。

二〇第二門の中に、其體相を辨ず。先に色法を辨じ、次に心法を顯し、後に非色非心の法を明す。色法の中に就いて兩門分別す。一には體相を辨じ、二には假實を明す。色の體相は論釋不同なり。『毘曇』に宣說すらく、「十一種の色を色法聚と爲す」と。何者か十一なる。五根を五と爲し、五塵を十と爲し、無作の色に通じて十一と爲すなり。淸淨の四大所造の眼耳鼻舌及び身は、是れ其五根なり。外の四大の爲に造られたる色聲香味觸等は、是れ其五塵なり。身口業の中の善惡の無作は、是れ無作の色なり。『大智論』等も亦此說に同じ。『成實』に宣說すらく、「十四種の色を色法聚と爲す」と。何者か十四なる。五根を五と爲し、五塵を十と爲し、加ふるに四大を以てす。前に通じて十四なり。五根は上の如し。言ふ所の異とは、毘曇法の中には、五根の體は是れ實法の色なり。四大の爲に造せらる。大と別體なり。人の畫を造する畫と、人と別なるが如し。成實法の中には、五根の體は是れ假名の色、四大の所成なり。根の外に大無し。陰、人を成す、人の外に陰無きが如し。根も亦是の如し。五塵は上の如し。言ふ所の異とは、毘曇法の中には、大の所造の塵、四大と異なり。成實法の中には、色香味觸能く四大を成じ、大の爲に造せられず。唯一の聲塵

【次に等】二に假實を辨ず。

【次に心法等】第二に心法の體相を辨ず。中に五門分別あり、一に心と數との體の一異を明す。

のみ、四大より生ず。斯異有るなり。四塵所成の地水火風は、是れ四大なり。問うて曰はく、「『毘曇』には無作の色を說く。成實法の中には何が故に論ぜざる。」宗別不同なれば所說各異なり。毘曇法の中には、無作の業は是れ色法と說くが故に、色の中に之を說く。『成實』には、說いて非色心と爲すが故に、色の中に論ぜず。」又問はく、「『成實』には別に四大を說く。毘曇法の中には何が故に立てざる。」亦是れ宗別にして所說各異なり。」異の相如何。」「『毘曇』に宣說すらく、『堅濕煖動の四種は實の觸なり』と。」以て四大と爲す。此の四大は觸塵の中に收むるが故に別に說かず。『成實』に辨ずる所の地水火風は、四塵を攬りて成じて、能く五根を成ず。根は因塵の果なり。根塵は攝せず。故に別に論ずべし。此一門竟る。

次に假實を辨ず。毘曇法の中には、十一種の色、皆是れ實法なり。『毘曇』は多く性相の中に求むるを以ての故に假色無し。成實法の中には、五塵は是れ實なり。根と大とは是れ假なり。塵を攬りて大を成ず。大は根を成ずるが故に。若し理に對して論ぜば、一切皆假なり。同じく是れ因緣假名の法なるが故に。次に心法を辨ず。中に於て、略して五門を以て分別す。一には心と數との體の一異を明し、二には開合して相を辨じ、三には寬狹を明し、四には通局を辨じ、五には相應の不同なり。一異と言ふは、成實法の中には、心と數との法は一體の義分なり。心の外に別に諸數有りと說かず。識陰を說いて、之を以て心と爲すが如し。餘は則ち數と名く。受を說いて心と爲せば、餘は還つて數と名く。是の如きの一切なり。毘曇法の中には、心と數と別なり。六識は是れ心、餘の想受等を說いて心

【論】起信論。

【次に開合を等】以下、三に開合を辨じて、廣く心心所を明す。先づ毘曇にいふ四十七心所法を擧ぐ。

【根塵識】六根と六境と六識となり

數と爲す。大乘法の中には、末に據れば是れ別なり。本を窮むれば是れ一なり。是義云何。大乘法の中には、識を說くに三有り。一には眞識、心と數と一なり。二には妄識の中の麤細に六重あり。始め無明より終り續識に至る。此六重の中、前の四重は心と數と一なり。後の兩重は心と數と別なり。前の四重は心と數と一なるを以ての故に、論の中に說いて不相應染と爲し、後の二は別なるが故に、論の中に說いて心相應染と爲す。馬鳴釋して言はく、「心は念と異るが故に相應と曰ふ」と。是義は後の八識章の中に、具に廣く分別するが如し。三には事識、一向同時に具に諸數有り。『毘曇』と同じ。心數の一異之を辨ずること麤爾り。此一門竟る。次に開合を辨ず。心法の開合廣略は不定なり。或は總じて一と爲す。謂はく、一の心聚なり。或は分つて二と爲す。謂はく、心と數となり。六識は是れ心、想等は是れ數なり。或は分つて四と爲す。謂はく受想行識なり。心王を識と名け、想數を想と名け、受數を受と名け、餘數を行と名く。或は分つて六と爲す。謂ゆる六識なり。又『毘曇』に依らば、說いて四十七の心數法と爲す。心王を一と爲し、數法の中に四十六有り。何者か是なる。通地に十有り。彼心王に通じて、合して十一と爲す。通地の十とは、彼論に說くが如し。想と欲と觸と慧と念と思と解脫と憶と定と及び受と、是を通地と說く。境に於て相を取るを想と名け、緣に於て受を欲するを欲と稱し、根塵識をして和合せしむるを觸と名け、緣に於て決定するを慧と名け、記識して忘れざるを念と名け、善惡等に於て思願造作するを思と名け、緣に於て相を作し、彼相狀の限量を受くるを解脫と名く。若し解脫無ければ、

常に一緣を守りて捨離すること能はず。緣に於て發悟するを憶と名け、常に緣じて亂れざるを定と稱し、違順中を受くるを受と名く。此十、遍く一切の心と俱なれば、通大地と名く。善地に十有り。前に通じて、合して二十一と爲すなり。何者か是なる。彼論に說くが如し。諸根と有慚愧と信と猗と不放逸と不害と精進と捨と一切善心と俱なり。諸根と言ふは、謂ゆる、無貪無瞋と善根なり。何の義を以ての故に無癡を說かざる。無癡は是れ慧なり。通地の中の慧數と體同じきが故に、此を論ぜず。他の衆生及び衆具等に於て、貪著を離るる心を無貪と名け、衆生數と及び非衆生とに於て、瞋恚を懷かざる心を無瞋と名け、惡に於て、自ら厭ふを慚と名け、過に於て他に羞づるを愧と稱し、三寶等に於て、淨心をして疑はざるを信と名け、身心に惡を離るるを猗と稱す。善方便を起して、惡を離れて作らざるを不放逸と名け、他を逼迫せざるを名けて不害と爲し、惡を斷じ、善を集め、勤めて方便して修するを精進と名け、內心平等なる、之を名けて捨と爲す。此十、遍く一切の善中に在れば、善大地と名く。不善地の中の心法に二有り。謂はく、無慚と愧となり。前に通じて、合して二十三と爲すなり。大煩惱の中に、具に說けば十有り、別は唯五有り。前に通じて、合して二十八と爲すなり。何者か是れ十なる。彼論に說くが如し。邪解と不正憶と不順智と失念と不信と懈怠と亂と無明と掉と放逸と、是れ煩惱大地なり。顚倒の解脫を邪解と名け、邪に境界を受くるを不正憶と名け、顚倒決定を不順智と名け、邪に記し妄に受くるを失念と名け、三寶等に於て邪疑不淨なるを不信と名け、惡を斷じ善を修せ

ず。方便を勸めざるを懈怠と名け、境界に牽かれて、散じて諸緣に隨ふを名けて亂と爲す。法に於て了せざるを無明と名け、躁動息まざるを名けて掉と爲し、善方便を離るるを放逸と名く。此十は遍く諸の煩惱の中に在れば、大煩惱地と名く。問うて曰はく、「睡も亦、諸の煩惱に遍ず。何が故に大煩惱地と名けざる。」論に自ら釋して言はく、「睡は正受に順じて、能く速に定を發す」と。是故に說かず。別して唯五とは、謂ゆる、不信と懈怠と無明と掉と及び放逸となり。此之五種は體、餘數に別す。故に今之を取りて四十七と爲す。餘の五は、別ならざるが故に、之を說かず。云何が別ならざる。邪解と言ふは、通地の中の解脫の數と同なり。不正憶とは、通地の中の憶の數と體同なり。不順智とは、通地の中の慧の數と體同なり。失念と言ふは通地の中の念の數と體同なり。亂と通地の定の數とは體同なり。問うて曰はく、『邪解不正憶等と通地の中の心數法と同ならば、何ぞ勞しく復說いて煩惱地と爲す。』『此れ惑を生ずる功力等きを以ての故に。』問うて曰はく、『通の中の受想觸欲は、何が故に說いて煩惱地と爲さざる。』『等しからざるを以ての故に大地顯れず。故に之を說かず。』『云何が等しからざる。』『想は見を生ずるに強く、受と及び觸と欲とは、受を生ずる中に強きが故に不等と曰ふ。』又問はく、『何が故に、思數を說いて煩惱地と爲さざる。』『思は是れ一切衆行の主なるが故に、偏に說いて煩惱地と爲さず。又思は亦是れ愛を生ずる中に強きが故に、之を說かず。』問うて曰はく、『若し受想觸等は惑を生ずること齊からざるが故に、說いて煩惱地と爲さずと言はば、慧は見を生ずるに強し。何が故に、說いて

煩惱地と爲すや。』釋して言はく、『見の中に更に慧を論ぜず。是故に慧を說いて强と爲すべからず。慧强からざるが故に、之を說いて地と爲す。』小煩惱地の差別に十有り。前に通じて、合して三十八と爲すなり。何者か是なる。彼論に說くが如し。忿と恨と誑と慳と嫉と惱と諂と覆と憍と害と、是を小地と說く。論に釋して言ふが如し。益と不益と應作と不作と非作と返作とに於て、瞋相續して生ずるを名けて忿と爲す。樂事は他を益す。苦は他を益せず。益の事の作すべきを、而も故に作さず。他を益せざる事は、理として作すべからざるを、而も復故らに作す。瞋氣續いて生ずるを、說いて忿と爲す。可欲と不可欲と應作と不作と非作と返作とに於て、忿相續して生ずるを、名けて恨と爲す。樂事は他欲し、苦は他欲せず。可欲の作すべきを、而も故に作さず。不可欲の事は理として作すべからざるを、而も復故に作す。忿の殘結を、說いて恨と爲すなり。詐つて承事を現ずるを誑と名け、財法を悋惜するを慳と稱し、他の名利伎能功德を忌むを嫉と名け、怨會と愛離とを思惟して心に契するを惱と名け、自性を覆藏して曲げて時の宜きに順ずるを諂と稱す。自ら過惡を陰すを覆と名け、他を謗して自擧するを高と名け、他を逼迫せんと欲するを害と名く。此十種は唯意地に在り。五識に通ぜず。局りて修斷に在り。見諦に通ぜず。別に起つて俱ならざるが故に、小地と名く。餘の心數の中に、更に五數有り。前に通じて、合して四十三と爲すなり。謂ゆる、覺と觀と睡と眠と及び悔となり。麤思を覺と名け、細思を觀と稱す。一切の煩惱の境界に睡著するを睡と名け、身心昏昧にして境界を略緣するを眠と

【成實法の等】次に成實にいふ三十七の心所を擧ぐ。

名け、追悔を悔と名く。十使の中に復四數有り。前に通じて合して四十七と爲すなり。謂はく、貪と瞋と慢と疑となり。愛染を貪と名け、忿怒を瞋と曰ひ、他を淩するを慢と稱し、猶預を疑と曰ふ。五見は是れ慧なり。通地の中の慧數と同じきが故に、廢して論ぜず。疑使は、彼大煩惱の中の無明數と同なり。是を以て說かず。此無明使の體は、彼大煩惱の中の無明數と同なりと雖も、義に左右有り。大煩惱の中の無明數は、遍く一切の使と纏と垢との中に通ず。無明使は局りて使門に在り。纏と垢とに通ぜず。又大地の中の無明數は、唯是れ相應して不共に通ぜず。通じて一切の煩惱と倶なるが故に。無明使は通じて相應と及び不共とを攝す。中に於て、若し緣有れども而も了せざること、一切の諸使と倶ならざる者は、是れ其不共なり。若し別緣に非ずして、而も諸餘の九使と倶なれば、是れ其相應なり。『毘曇』是の如し。成實法の中には心數不定なり。末を攝して本に從はば、三十七有り。末に隨つて別して論ずれば、則ち無量有り。云何が本に從つて三十七有るや。彼論に說くが如し。通數に十有り。思と觸と念と欲と喜と信と懃と覺と觀と憶となり。前の四、後の一は『毘曇』と同なり。餘の五に別異なり。言ふ所の思とは、思品に說くが如し。愛分の願求を思と名く。『毘曇』の愛を煩惱と爲し、思を通數と爲すに同じからず。觸とは論に、「三和を觸と名く」と言ふ。彼心識は根に依り塵に觸るるを以ての故に、名けて觸と爲す。心の外に別に觸數有りと說かず。理實には觸の義遍く四心に通ず。今行心に就いて、說いて觸と爲すなり。念とは論に、「作發を念と名く」と言ふ。作意して後を起すを、名けて作

發と爲す。欲とは論に「心に所須有るを欲と名く」と言ふ。喜とは論に、「心樂を喜と名く」と言ふ。欲の中に增上なるを、說いて喜と爲すなり。『毘曇』には此無し。信とは論に、「必定を信と名く」と言ふ。此れ三性に通ず。『毘曇』には、唯善なり。不善の中の者をば卽ち不信と名く。懃とは論に、「心行の發動を、之を名けて懃と爲す」と言ふ。此れ三性に通ず。善法の中に入つては、返つて精進と名く。『毘曇』には唯善なり。覺觀と言ふは、論に釋するに多種あり。一には定に隨つて以て說く。麤思を覺と名け、細思を觀と名く。二には慧に隨つて以て說く。未知の事の中に比知するを覺と名け、現知をば觀と稱す。三には亂心に就いて以て說く。散心の數起るを覺と名け、散心の微少なるを觀と稱す。憶とは論に、「先に更る所を知るを憶と名く」と言ふ。此十種は處、三界に遍く、體、三性に通ずるを以ての故に、通數と名く。善數に十有り、前に通じて二十所なり。謂はく、定と慧と無貪と瞋と癡と慚と愧と猗と捨と及び不放逸となり。定とは、義釋に通有り、別有り。通じて之を論ずれば、遍く三性に在り。淨定は是れ善、垢定は不善、報定は無記なり。別しては唯善に在り。論主、別に就いて說いて善數と爲す。慧とは義釋に亦通別有り。通じて之を論ずれば、亦三性に在り。正智は是れ善、邪智は是れ不善、汎く世事を知るは是れ共無記なり。別して之を論ずれば、無漏の是慧なるを說いて慧數と爲す。有漏の善の慧なる、之を說いて以て無癡の善根と爲す。顚倒の慧を說いて邪見と爲し、餘の不善の慧と及び無記の慧とを說いて覺觀と爲す。論主は別に就いて、無漏の慧を說いて慧數と爲すなり。無貪

と無瞋と慚と愧と猗と捨と及び不放逸とは、『毘曇』と同なり。無癡の善とは、毘曇法の中には、體は是れ慧數なり。更に分別せず。『成實』は、有漏の善慧を分取して、無癡と爲すが故に、所以に別說す。何の義を以ての故に、解脫を說かざる。彼宗の中には、慧を說いて脫と爲し、更に別法無し。是を以て論ぜず。不善の中の數は十四有り。前に通じて、合して三十四と爲すなり。何者か十四なる。十使の煩惱を相從して六と爲す。五見の心を合して邪見と爲す。即ち以て一と爲すなり。貪と瞋と癡と慢と及び疑使とを、復以て五と爲す。前に通じて六なり。十纏の中の別數に五有り。謂はく、無慚と愧と掉と悔と及び覆となり。前に通じて十一なり。何の義を以ての故に、慳纏を說かざる。是れ貪の分なるが故なり。何の義を以ての故に忿嫉を說かざる。是れ瞋の分なるが故なり。何の義を以ての故に睡眠を說かざる。無明の分なるが故なり。問うて云はく、『覆纏は是れ貪の分なるべし。何が故に別論する。』釋して言はく、『覆とは偏に貪に屬せず。或は衆生有りて、打縛割截等の事を怖畏して己が過を覆藏し、或は財利の爲にす。是義不定なり。所以に別說す。六垢の中に諂及び誑有り。前に通じて十三なり。何が故に惱恨害等を說かざる。是れ瞋の分なるが故なり。何んが高を說かざる。慢の分なるを以ての故なり。問うて曰はく、『諂誑は是れ貪の分なるべし。何が故に別論する。』『諂は義不定なり。或は貪の故に諂ひ、或は畏の故に諂ふ。誑も亦不定なり。或は貪の故に誑ひ、或は瞋の故に誑ひ、或は畏の故に誑ふ。偏に在らざるを以ての所以に別論す。』其放逸を加へ、前に通じて十四なり。不善是の如し。

【羅波那】ラバナ（Ravana）

【單致利】ニドラートタンドリ(Nidra-tandri) 睡眠病と譯す。

無記に三有り。謂はく、識と想と受となり。彼宗の中、行前の三心は唯無記なるが故に、此を以て前に通じて三十七と爲す。要に據らば是の如し。別に隨つて以て論ぜば、心法無量なり。一の貪心の如き、別に隨はば衆多なり。謂ゆる、惡欲と多欲と無厭と慳と著と現相と撃切と以利求利と羅波那等なり。是の如く一に非ず。他を害して利を求むるを惡欲と名け、廣く多利を求むるを多欲と稱す。更に多利無きを無厭と名け、所有の一切を他と共にせざるを慳と名け、纒愛して捨せざるを著と名け、利を貪するを以ての故に、欲得の相を現ずるを現相と名け、彼を讃し、此を毀りて其利を取るを撃切と名け、餘の所得を說いて、以て此利を招ずるを以利求利と名け、心に其利を貪し、口に人の意を悅ばするを羅波那と名く。瞋の中別に隨はば、亦無量有り。謂ゆる、瞋と恨と惱と嫉と忿と恚と憹と害と狼戾と專執と不忍と暴急と不悅と不調と、是の如きは一に非ず。無明は別に隨はば亦衆多有り。謂ゆる、闇と鈍と瞢と騃と迷と妄と愚と拙と睡と眠と單致利等なり。緣じて了せざるを闇と名け、悟解速ならざるを鈍と稱す。損じて覺せざるを瞢と名け、心に分別無きを騃と曰ひ、此に翻じて彼を謂ふを迷と名く。得て還つて失するを妄と稱し、是非を辨ぜざるを愚と曰ひ、所作功ならざるを拙と名け、心重くして眠らんと欲するを睡と名け、心を攝して覺を離るるを眠と名け、睡を憙むの病を單致利と名く。此等の別に隨ふが故に無量有り。此等の別、『數論』の中に一一に具に論ぜずと雖も義は實に之有り。大乘法の中には心法も亦多し。而るに經論の中に定數を辨ぜざるは、以て輙く言ひ難し。開合是の如し。

【次に等】三に寛狹を辨ずるに、約して三性について說く。初に毘曇の三性を擧ぐ。【穢汙無記】有覆無記のこと。又白淨無記とは無覆無記のこと。

是二門。次に寛狹を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、約して四義に就いて、以て寛狹を辨ず。一には善、二には惡、三には穢汙無記、四には白淨無記なり。戒定慧等は、之を名けて善と爲し、殺盜婬等は、之を說いて惡と爲し、欲界地の中の身と邊との兩見と、及び上二界の一切の煩惱とを穢汙と名け、亦は陰沒と名く。報生と威儀と工巧と變化とを名けて白淨と曰ふ。彼四十七の心法の中に就いて、心王と及び十の通大地と、覺觀と及び眠とは、統て四十四に通ず。最も以て寛と爲す。『毘曇』の如きに依らば、悔は善、惡、白淨無記に通じて、穢汙に通ぜず。次に以て狹と爲す。何の義を以ての故に、穢汙に通ぜざる。彼論に、「悔は唯欲界に在り」と說く。是れ欲界なるが故に、上界の一切の穢汙の中には無し。又欲界の中に事を緣じて起り、理を緣じて生ぜず。彼事の中には得失知るべきを以て、是を以て悔を生じ、理は幽にして覺し難きが故に、悔を生ぜず。良に悔心は理を緣ぜざるを以ての故に、欲界の身見邊見の中に無し。是故に悔數は、一向に穢汙無記に通ぜず。『毘婆沙』の說は、悔は唯二に有り。謂はく、善不善なり。無記に通ぜず。捷利なるを以ての故に、大煩惱の中の不信と懈怠と無明と掉と放逸と、小煩惱の中の諂と誑と及び高と、餘數の中の睡と、十使の中の貪と慢と及び疑と、此十二は、唯不善と穢汙と無記とに在り。次に以て狹と爲す。中に於て、不信と懈怠と無明と睡と掉と放逸と、此六種、若し欲界の身邊二見と、及び上二界の煩惱と倶なれば、是れ其穢汙なり。餘は是れ不善なり。諂と誑と及び高と貪と慢と、及び疑と、此六種は、欲界に在る者、斯を不善と名け、上二界に在るは、

【成實法の等】次に成實論の三性を說く。

【次に通局を等】次に三界に約して通局を辨ず。初に毘曇の說。

【若し等】次に成實の說。

齊く是れ穢汙なり。小煩惱の中の、忿と恨と慳と嫉と惱と覆と及び害と、不善地の中の無慚と無愧と、十使の中の瞋と、此十種は唯不善に在り。最も以て狹と爲す。成實法の中には、唯善惡無記の三性を說き、彼論の中に於て、十種の通數は統て三性に通ず。若し復通じて論ぜば、定慧の兩數も亦三性に通ず。無貪と瞋と癡と慚と愧と猗と捨と及び不放逸とは、一向に是れ善なり。識と想と及び受とは三向に無記なり。餘は皆不善なり。寬狹是の如し。此三門竟る。次に通局を辨ず。中に於て、約して三界に就いて以て說く。『毘曇』の如きに依らば無慚と無愧と瞋と忿と恨と害と惱と嫉と慳と覆と及び眠數と、此十一は、唯欲界に在り。覺と觀と諂と誑とは、上は初禪を極め、高は三禪を極め、餘は三界に通ず。若し『成實』に依らば前の三十七の心法の中に就いて、諂と誑とは局つて欲色に在り。欲界は知るべし。色界は云何。『梵天王の如し。諸の梵衆に語りて言はく、我汝をして老死の邊を盡くさしむ。即ち是れ其誑なり。手を以て黑齒を牽いて屏處に之を求むるは、即ち是れ其諂なり。餘は三界に通ず。問うて曰はく、『覺觀は二禪に之を滅す。云何が通ずることを得ん。』『彼論の如きに依らば、麤重の覺觀は二禪の中に滅し、細は三界に通ず。故に彼論に言はく、「覺觀の心は遍く三界に通ず。是れ心の麤細の相なるを以ての故に。三界の心に皆麤細有り。麤をば皆覺と名け、細をば皆觀と名く」と。「末を攝し、本に從つて分別すること是の如し。若し別に隨つて論ぜば、惡欲と多欲と現相と擊切と以利求利と慳著と羅被那と忿と恨と惱と害と睡と眠と單致利等は、並に欲界に在り。諂と誑と嫉と姤とは欲色界に通ず。彼梵王

【瞿曇】ガウタマ(Gautama)佛陀のこと。
【次に等】五に心法相應の不同法を辨ずる中、初に毘曇の說を舉ぐ。

の如し。諸の梵衆に語らく、「汝但此に住すべし。汝等瞿曇の所に至るべからず」と。佛の己に勝れたるを懼る。即ち是れ嫉妬なり。餘は三界に通ず。此四門竟る。次に心法相應の不同を辨ず。毘曇法の中には、同時に相應す。同時の中には多少不定なり。若し善の心法の共欲界及び初禪に在らば、二十三法同時に相應す。十の通大地と十の善大地と覺と觀と心王との中間禪に在り。二十二法は同時に相應す。唯一の覺を除く。餘は皆上の如し。二禪已上は二十一法同時に相應す。覺を除いて觀を去る。餘は皆上の如し。煩惱法の中には、分つて六分と爲す。瞋と忿と惱と害と恨と覆と慳と嫉とを合して一分と爲す。此八は一向に是れ不善なるが故に、二十二法同時に相應す。十の通大地を、即ち以て十と爲す。大煩惱の中の不信と懈怠と無明と掉と放逸と、前に通じて十五なり。無慚と無愧と、前に通じて十七なり。覺と觀と睡と并に及び心王と、前に通じて合して二十一法と爲す。彼瞋忿等は何に隨つても現起するを、即ち以て一と爲す。前に通じて合して二十二と爲すなり。貪と疑と慢と高とを、第二分と爲す。此分の中に就いて、欲界に在るは是れ不善なるが故に、亦二十二法有りて相應す。十の通大地と五の煩惱地と無慚と無愧と覺と觀と睡と心とを二十一と爲す。貪疑慢等は何に隨つても現起するを、即ち以て一と爲す。前に通じて合して二十二と爲すなり。若し初禪に在らば、是れ無記なるが故に無慚愧を除く。餘の二十の心法有りて相應す。中間には覺を除いて餘の十九有り。二禪已上は更に觀數を除いて餘の十八有り。不共無明を第三分と爲す。欲界に在らば、是れ不善なるが故に、二十一法同時に相

應す。十の通大地を即ち以て十と爲す。十の大煩惱の中に、一の無明を除いて餘の四種有り。不信と懈怠と掉と及び放逸となり。前に通じて十四なり。二の無明同時に並ぶこと無し。故に彼無明を除き、無慚と愧と覺と觀と睡と心とを加ふ。前に通じて二十なり。不共無明を即ち以て一と爲す。前に通じて合して二十一と爲すなり。初禪の中に在らば、無慚愧を除いて、餘の十九有り。中間には覺を除いて、餘の十八有り。二禪已上には、更に一の觀を除いて、餘の十七有り。邪見と戒取と及與見取とを第四分と爲す。欲界に在らば是れ不善なり。故に二十一法同時に相應す。十の通地の中に一の慧數を除いて、餘の九種有り。邪見と二取とは體是れ慧數なり。二の慧同時に起ること有ること無し。故に彼慧數を除く。大煩惱の中には、其不信と懈怠と無明と掉と及び放逸と有り。前に通じて十四なり。無慚と無愧と覺と觀と睡と心とを、前に通じて二十なり。邪見等の中に隨つて現起するを、即ち以て一と爲し、前に通じて合して二十一と爲すなり。初禪に在らば、無慚愧を除いて餘の十九有り。中間には、覺を除いて餘の十八有り。二禪已上には更に一の觀を除いて、餘の十七有り。身と邊との兩見を、第五分と爲す。此二種、若し欲界及び初禪の中に在らば、十九法有りて同時に相應す。十の通大地の中に、其慧數を除いて餘の九種有り。身邊兩見は、體も亦是れ慧なり。兩の慧並せず。是を以て之を除く。大煩惱の五を前に通じて十四なり。覺と觀と睡と心と、前に通じて十八なり。身邊兩見何れに隨つても現起するを、即ち以て一と爲す。前に通じて十九なり。此二見、是れ無記なるを以ての故に無慚愧を除

【成實法の等】次に成實の說を擧ぐ

く。中間には覺を除いて餘の十八有り。二禪已上には、更に一の覺を除いて餘の十七有り。諂誑二纒を第六分と爲す。欲界に在らば、是れ不善なるが故に、二十二法同時に相應す。十の通大地と五の煩惱地と無慚と無愧と覺と觀と睡と心と、前に通じて合して二十一法と爲す。此諂と誑とは何れに隨つても現起するを、即ち以て一と爲す。前に通じて、合して二十二と爲すなり。初禪の中に在らば、無慚愧を除いて、餘の二十有り。中間には、覺を除いて餘の十九有り。二禪已上には諂誑有ること無ければ、之を論ずべからず。煩惱是の如し。白淨無記を總じて一分と爲す。若し欲界及び初禪に在らば、十三法有り、同時に相應す。十の通大地と覺と觀と心王となり。中間には、覺を除いて餘の十二有り。二禪已上には、更に一の觀を除いて餘の十一有り。問うて曰はく、『其餘の諸の心心法は、何が故に說かざる。』釋して言はく、『以有り。無慚と無愧と彼一切の不善法と俱なり。餘の一切の不善法に說くが如し。不信と懈怠と相應無明と睡と掉と放逸とは、遍く一切の諸の煩惱と俱なり。餘の一切の諸の煩惱に說くが如し。』十の通大地の覺と觀と睡と悔とは、遍く一切の三性の法の中に通ず。餘の一切の三性の法に說くが如し。是を以て論ぜず。毘曇是の如し。成實法の中には、前後に相應す。彼違順中容の三種を了別するより、識復三種の想を生ず。了順の識より釋相を生じ、了違の識より不釋相を生じ、了中の識より中容の相を生ず。當分に相生ずるが故に相應と曰ふ。彼三想より、三種の受を生ず。釋相は樂を生じ、不釋は苦を生じ、中容は捨を生ず。彼三受より、行心を發生す。行の中に三有り。

【大乘法の等】以下、大乘法の中の相應を明す。

【次に等】以下、三有爲の體相を明す中第三に非色非心の法を辨ず。中に五門分別あり、一に釋名辨相。

一には善、二には惡、三には是れ無記なり。若し善心を生ずるには、苦受は厭を生じて生死を厭離す。樂受は欣を生じて善法を欣樂し、捨は信進念定慧等を生ず。若し不善を生ずるには、苦受は瞋及び瞋の流類の忿恨惱等の一切の煩惱を生ず。樂受は貪及び貪の流類の一切の煩惱を生じ、捨は餘の結及び彼流類の一切の煩惱を生ず。若し無記を生ずるには、苦受の心の後には苦の對治を求む。寒に煖を求め、熱に涼を求むる等の如し。樂受の心の後には諸の樂具を求む。種殖等の如し。捨受の心の後には餘の漫散の無記の行心を生ず。此等は前後に當分に相應す。故に相應と曰ふ。大乘法の中には、義に兩兼有り。同時に相望むれば同時に相應し、異時に相望むれば前後に相應す。同時相應は、麤は『毘曇』に同じく、細は不同なり。『毘曇』は別體なり。此は同體なるが故に、異時相應は『成實』と同なり。問うて曰はく、『前に同時相應と言ふ。』云何が復異時相應を得る。釋して言はく、『心法の體同時なりと雖も、義に隨つて隱顯あらば、先後差別の義無きに非ず。故に前後相應を宣說することを得。』心法是の如し。次に非色非心の法を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、十四不相應行を宣說し、以て非色非心の法と爲すなり。中に於て、略して五門を以て分別す。一には名を釋し相を辨じ、二には三性の分別、三には有漏無漏に就いての分別、四には界に就いての分別、五には捨の不同を明す。初門の中に就いて、先に其名を釋す。名字は是れ何ん。一には無想定、二には無想報、三には滅盡定、四には衆生種類、五には命根、六には凡夫性、七には味、八には名、九には句、十には生、十一には住、十二には異、十三

には滅、十四には得なり。此十四は體、質礙に非ず。故に非色と名く。又、情慮に非ず。稱して非心と曰ふ。想等の諸の心數法の心と相應するに同じからざるを不相應と名く。有爲の集起は、之を稱して行と爲す。名字是の如し。次に、其相を辨ず。無想定とは、「諸の外道等、無想報を謂つて以て涅槃と爲す。彼報を求めんが爲に、無想定を修して滅心想を學し、「第四禪に依りて諸の心法を滅す。心想滅し已りて一の有爲の非色心の法を得し、心處を領補するを無想定と名く。成實法の中には此義を存せず。故に彼論に言はく、「凡夫は心心法を滅すること能はず」と。但心は寂靜微細にして覺し難し。故に無想と云ふ。全く無しと謂ふには非ず。今「毘曇」に依りて無想を宣說す。無想報とは、前の定の因に依りて、四禪の中の廣果天處に生ず。初生には心有り、中間には心無し。五百劫を逕、是心滅する時、一の有爲の非色心の法を得し、心處を領補するを無想報と名く。命終らんと欲する時心想還つて生ず。彼因の時、前後には心有り、中間には心無きを以て、是故に報を得るに還つて因と同じく、前後には心有りて、中間には心無し。報盡きんと欲する時、心想還つて生ず。心想生ずるが故に、未來世の受生の中陰を見て、便ち涅槃を謗ず。是の如きの念を作す。「我本謂ふ、實に涅槃有りと。勲苦して之を求む。今未來を見るに、還つて生處有り。定んで知る、一切涅槃有ること無し」と。是謗を以ての故に、死して地獄に入る。是過を以ての故に、佛の諸の弟子には、都て求むる者無し。此無想報は、「成實論」の中に、說いて心法と爲す。但麤想無きのみ。滅盡定とは、謂はく、諸の聖人心の勞慮

を患ひて、暫く心識を滅して一の有爲の非色心の法を得し、心處を領補するを滅盡定と名く。若し『成實』に依らば、是れ無爲法なり、不想應に非ず。此義廣く釋すること滅盡定の如し。衆生種類とは、一の有爲の非色心の法有りて、能く衆生をして類類相似せしむ。是故に名けて衆生種類と爲す。成實法の中には、此義を存せず。命根と言ふは、衆生身の中に一の非色非心の命法有りて、能く色心を持して斷絕せざるを、名けて命根と爲す。若し『成實』に依らば、過去の業を說いて以て命根と爲し、非色非心の命法を立てず。凡夫性とは、有爲の法の中に一の非色非心の法有りて、未だ斷せざる已來の凡の諸の衆生を、悉く令して凡ならしむ。此凡性は、『成實』に立てず。言ふ所の味とは、是れ字法なり。有爲法の中には、一の非色非心の字法有り。聲と相應して方に語言を成ず。之を說いて字と爲す。此字法を以て、聲を攝して語を成じ、人をして愛味せしむ。故に名けて味と爲す。若し『雜心』の子注の中の釋に依らば、外國に字を導ふに共味の音有り。故に說いて味と爲す。言ふ所の名とは、有爲の法の中に一の非色非心の名法有りて、能く彼字を攝して諸法を表詮す。之を說いて名と爲す。言ふ所の句とは、有爲の法の中に一の非色非心の句法有りて、拘攣して味と名く。共に相屬著して以て文誦を成ず。之を謂つて句と爲す。此名味等は、成實法の中には唯是れ聲の性なり。色法の所收、法入の所攝なり。『毘曇』に同じからず。相狀は如何。卽ち彼音聲の相續の中の屈曲高下長短の義、能く語言詮表の義を成ずるを說いて、味等と爲す。是れ聲の性なりと雖も、聲は恒に是れ實なり。味等は是れ假なり。聲

は是れ聲入、味等は法入なり。此に、云何が別ある。當體を味と爲し、法に對して詮を成ず。之を說いて名と爲す。若し當に一字にして詮表の義、成ずべくんば字は卽ち是れ名なり。若し一にして名を成ぜざれば、字方に成ず。是れ卽ち一字は唯是れ其味にして、是れ名に非ず。多字和合して、方に是れ其名なり。若し彼多字共にして一法に名けば、名は卽ち是れ句なり。若し當に一字卽ち名を成ずべくんば、多名聚集して方に乃ち句を成ず。『成實』是の如し。言ふ所の生住異滅の法とは是れ諸法始起の生、經停の住、衰變の異、盡壞の滅に非ず。蓋し乃ち一切有爲の法の邊に別に非色非心の相法有りて、能く諸法を生じ乃至能く滅す。此四相は、體は同時なりと雖も、用に先後在り。生相の用の時、能く諸法を生ず。乃至第四の滅相の用の時には、能く諸法を滅す。所相の法は初に生じ、次に住し、終に異り、後に滅す。是毘曇家には苦集の理なり。能相の生等は是れ事にして理に非ず。何が故に是の如くなる。有爲の法の無常を理と爲す。前後の四相の遷流し運變するは、是れ無常の義なり。故に說いて理と爲す。同時の四相は、體は先後無常の義に非ず。故に名けて事と爲す。若し『成實』に依らば、但諸法の初生次住終異後滅を說き、法の外に別に非色非心の四相有りと說かず。『地持』も亦爾なり。言ふ所の得とは、有爲の法の邊に、一の非色非心の得法有りて、能く諸法を得す。故に名けて得と爲す。此は是れ十四不相應行なり。『毘婆沙』の中、更に二種有り。一には聖人性。一の非色非心の聖法有りて、能く一切出世の人をして、皆聖と爲すことを得しむ。二には不得。一の非色非心の法有りて、所斷

【次に等】二に三性に就いて分別す

【次に等】三に有漏無漏の義に就いて分別す。

【次に等】四に三界に就いて通局を辨ず。

【次に等】五に其捨を明す。

の法をして行人に屬せざらしむ。故に不得と名く。若し此二に通ずれば、便ち十六不相應行有り。此一門竟る。次に、善惡無記の三性に就いて、其相を分別す。『雜心』に說くが如し。十四行の中に、二は善、五は三、餘は悉く無記なり。二善と言ふは、謂はく、無想定と及び滅盡定となり。五三と言ふは、四相と及び得とは皆三性に通ず。若し善の中に在らば、即ち善と名け、不善の中に在らば、即ち不善と名く。無記も亦然なり。問うて曰はく、『此五は三性の中に在り。即ち彼法に隨つて名けて善惡無記法と爲すといふは、此五種も亦色心二種の法の中に在り。何んが法に隨つて說いて色心と爲さずして、非色非心の法と名くるや。』釋して言はく、『三聚は三性に通ず。故に所在に隨つて、即ち善惡無記の法と名く。三聚相望して相通ずることを得ず。是故に色心の法の中に在りと雖も、而も非色心なり。餘の七種は一向に無記なり。』此二門竟る。次に、有漏無漏の義に就いて、其相を分別す。『毘曇』の如きに依らば、此十四の中に四相と及び得とは漏無漏に通ず。有漏の邊に在るを即ち有漏と名け、無漏の邊に在るを即ち無漏と名く。餘は皆有漏なり。若し『成實』に依らば、滅盡定とは亦是れ無漏なり。此三門竟る。次に三界に就いて、其通局を辨ず。彼無想定と及び無想報とは、唯色界に在り。滅盡定は唯無色非想地の中に在り。若し『成實』に依らば、滅盡無爲は三界に屬せず。名味句は欲と色界とに在り。無色に通ぜず。自餘の八法は並に三界に通ず。此四門竟る。次に其捨を明す。無想定とは二種の捨有り。一には退時の捨、二には上に生ずる時の捨なり。滅盡定とは唯退の時に捨す。上に生ずべき無きが故に生捨無し。無想報

と衆生種類と命根と、此等は皆悉く世に隨つて斷ずるが故に、命終の時に捨す。凡夫性は二種の捨有り。一には凡夫上に生ずる時に捨し、二には聖人見道の時に捨す。凡夫の人は捨して還つて得す。下の凡性を捨して、上の凡を得す。故に聖人は一たび捨して、復更に得せず。斯異り有るなり。問うて曰はく、『凡性に二の對治有り。一には斷治、二には捨治なり。此二何んが別なる。』釋して言はく、『彼凡夫性の上の煩惱の繫縛を斷ずるは、是れ斷對治なり。彼凡性を捨するは是れ捨對治なり。』問うて曰はく、『此二何んが先に在る。』釋して言はく、『不定なり。』差別に三有り。一には一向に先づ斷じ、後に捨す。謂はく、諸の凡夫は上地に趣く時、先に自地の所有の煩惱を斷じ、然して後上生す。煩惱を斷ずる時自地の中の凡夫性の上の所有の繫縛、一切皆斷ず。繫縛を斷ずと雖も、凡性猶後に在り。上に生ずる時凡性方に捨す。是故に名けて先斷後捨と爲す。二には一向に先に捨し、後に斷ず。謂はく、次第の人乃至超越の斯陀含の人、見道に入る時、彼凡性を捨す。故に先捨と曰ふ。復之を捨し、己に屬せざらしむと雖も、而も彼凡性猶成じて過去未來に在りて、彼三界修惑の爲に繫縛せらる。後修道を起して彼惑を斷ずる時、彼凡性の上の繫縛方に斷ず。故に後斷と名く。三には先斷後捨及び先捨後斷なり。謂ゆる、超越の阿那含の人先に凡に在る時、或は欲界の所有の煩惱を斷じ、或は初禪より無所有に至るを斷じ、後に聖道に入る。見道に入る時彼三界の一切の凡性を捨し、次に修道を起し、彼三界の修道の煩惱を斷ず。彼凡の時煩惱を斷ずる處に望めば、先斷後捨にして、彼凡の時の未だ結を斷ぜざ

る所に望めば、先捨後斷なり。名味句等は義に於て不定なり。若し體性を論ぜば、念念の中に捨す。刹那に斷ずるが故に。若し一向に行ぜざるを捨と名くるを論ぜば、無色に生ずる時を方に名けて捨と爲す。無色は一向に名字に依りて言說を起さざるが故に。問うて曰はく、「初禪より已に語言を滅す。何が故に、無色は方に不行と名くる。」釋して言はく、「初禪に語言を滅するは、定體の中に語言を滅す。而も初禪地は威儀心の中に猶語言を發す。是故に一向に不行と名けず。」問うて曰はく、「初禪は威儀心の中に猶語言を發す。捨と名けざるべし。二禪已上は復語を發せず。何んが捨と名けざる。」釋して言はく、「彼處には猶初禪の威儀の心を借りて言說を起す。故に捨と名くることを得ず。」問うて曰はく、「有漏は上に生ずれば下を捨す。何の處にか下地の心有りて、之を借りて說を起すことを得る。」釋して言はく、「借とは二禪已上の威儀の心と初禪と同なり。是故に借と名く。彼より來れるを名けて借と爲すには非ざるなり。」四相と及び得とは漏無漏に通ず。有漏に三有り。一には善、二には惡、三には無記なり。善に二の捨有り。一には退捨、退して下地の諸の煩惱を起す時、彼上善を捨す。二には生捨、上地に生ずる時下善を捨す。故に不善の者は唯一の斷捨なり。無記に二有り。一には穢汙、謂はく、欲界の中の身邊二見及び上二界の一切の煩惱と、此と相應する四相と及び得とは唯一の斷捨なり。二には白淨、謂ゆる、報生と威儀と工巧と及與び變化と、此諸法の中の四相と及び得と、之を捨すること不定なり。報と俱なるは唯命終の捨なり。報の無記は世に隨つて斷ずるを以ての故に。若し威儀、工巧

【二】義聚第八段に三無爲を明す中、十門の分別あり、第一に釋名。

と倶なれば之を捨すること不定なり。不善修の者は念念の中に捨す。刹那に斷ずるが故に。善修習の者は三世の得あり。故に上に生ずる時捨す。有漏は上に生ずる時捨す。有漏是其本を失するが故に上に生ずる時捨す。變化と倶なるは禪を退する時捨す。の如し。無漏と倶なるは三種の捨有り。一には退捨、謂はく、無漏を得て後に還つて退失す。二には轉根捨、謂はく、鈍根を轉じて利根と爲す時、彼鈍者を捨す。三には得果捨、聖果を得る時因の無漏を捨す。若し究竟じて涅槃に入る時に通ずれば、捨に四種有り。『毘曇』是の如し。成實法の中には、唯善惡無作の業及び假名の人を說いて、非色心不相應行と爲す。自餘の有爲は皆是れ色心二法の所攝なり。三有爲の義之を略して爾云ふ。

三無爲の義に十門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。之を得するの分齊三。多少の不同四。三性の分別五。漏無漏の分別六。有無の分別七。常無常の分別八。四無に約對して共に相收攝す九。四諦に約對して共に相收攝す十。

（一）第一に、名を釋す。三無爲とは、一には虛空無爲、二には數滅無爲、三には非數滅無爲なり。虛空と言ふは、當體に目を立つ。虛と空とは無の別稱なり。虛にして形質無く、空にして礙有ること無し。故に虛空と曰ふ。數滅と言ふは、義釋に四有り。一には慧數を以て障を斷じ、滅を得るを名けて數滅と爲す。故に經に說いて智緣滅と爲すなり。『毘婆沙』の中も、亦此說に同じ。故に彼文に言はく「數とは是れ慧なり。滅は是れ慧の果なり。慧數に依りて滅を得。故に名けて數滅と爲す」と。問うて曰はく『念と共にして能く煩惱を

【二】第二に其體相を辨ず。先づ虚空無爲。

斷ず。獨慧は堪へず。何の義を以ての故に、偏に慧滅と言ふや。」『若し『成實』に依らば、獨慧は能く滅す。毘曇、大乘は慧數を主と爲すが故に、偏に之を言ふ。此義は餘の施戒等の滅を簡ぶ。二には無礙解脱の數滅するを以て、名けて數滅と爲す。餘の伏滅を簡ぶ。三には四諦及び修道等の種數別滅するに約して、名けて數滅と爲す。『毘婆沙』に說くが如し。故に彼文に言はく、「苦忍智等の所得の滅は、餘の集等に別すれば名けて數滅と爲す」と。四には煩惱品別にして滅するを以て、名けて數滅と爲す。欲界の結九品別に滅するが如し。是の如きの一切なり。數滅も是の如し。非數滅とは、前に翻じて知るべし。此等は何が故に名けて無爲と曰ふ。義釋に二有り。一には法外の四相に對して以て釋す。色心等の法は、彼法外の四相の爲に爲され、虚空等の三は、彼に同じからず。故に名けて無爲と曰ふ。二には法體の四相に對して以て釋す。色心等の法は一切皆有り。初生、次住、終異、後滅は前後に集起す。之を稱して爲と曰ふ。虚空等の三は彼爲無きが故に名けて無爲と曰ふ。名義是の如し。

（二）第二門の中には、其體相を辨ず。虚空無爲は論釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、虚空に二有り。一には有爲、二には無爲なり。色像を除去するを方に虚空と爲す。是れ其有爲なり。本來常空なるは、是れ其無爲なり。有爲の虚空は彼此通ぜず。眼の所行と爲す。無爲の虚空は、體是れ法入なり。無礙周遍して意の所行爲り。二が中に但無爲の虚空を取つて、以て三が中の虚空無爲と爲す。有爲の空とは、是れ六大の中の空大の所攝なり。何

【次に等】次に數滅無爲を明す中に五門分別あり、一に對に約して分別す更に對を約して三種に分ち、今煩惱を明す

んが六大なる。謂ゆる、地水火風空識なり。成實、大乘は、並に皆彼有爲の虛空を破し、但一種の無爲の虛空を說く。但此虛空に體有り、相有り。體は則ち周遍し、相は則ち色に隨つて彼此別異有り。故に『地論』に言はく、「彼色に因るが故に、種種差別有り。色像に約せば、彼此別異なりと雖も見るべからず。故に經に說いて、不可見相と爲す」と。問うて曰はく、「世人皆虛空を見る。云何が說いて不可見と爲すや。」釋して言はく、「世人但空中の光明の色を見て、想心中に於て異物無しと知りて、虛空の解を作し、便ち空を見ると謂ひ、而も實には見ず。若し空可見ならば、卽ち是れ色法なり。色は則ち無常なり。『涅槃』に廣く破して、空の見叵きことを明せり。（虛空是の如し）次に數滅を辨ず。中に於て、曲くは五門の分別有り。一には對に約して分別し、二には有漏無漏に約して分別し、三には治に約して分別し、四には時に約して分別し、五には位に約して分別す。約對と言ふは、對に三種有り。煩惱と業と苦となり。煩惱に二有り。一は是れ染汙五住の性結、二は不染汙事の中の無知なり。染汙の盡くる處に是有り、非有り。永滅は則ち是、伏滅は則ち非なり。不染の盡くる處に是有り、非有り。其無礙解脫の爲に滅せらるる者は、是れ其數滅なり。聵を通ずるを障るが如し。無礙解脫の爲に滅せられざる者は、則ち非數滅なり。五明を習ひて滅せらるる闇等の如し。問うて曰はく、「五明所滅の闇は、當に一向に定んで數滅に非ざるべしとや爲ん。亦是なる有らん。」「大小同じからず。小乘法の中には、定んで數滅に非ず。大乘法の中には義に兩兼有り。直爾に五明を習學して滅する者は、是れ數滅に非ず、無明

【次に等】次に其業を明す。

地に斷じて彼をして滅せしむる者は、是れ其數滅なり。何が故に是の如くなる。大乘に宣說すらく、事の中の無知は無明地に依りて、無漏の慧を以て無明地を斷じ、彼無知をして永く更に起らざらしむ。故に是れ數滅なり。小乘は爾らず。故に數滅に非ず。又大乘の中には、無明地に隨つて無礙解脫の二道滅するが故に、是れ其數滅なり。小乘は爾らず。故に非數滅なり。煩惱の盡くる處には之を辯ずる、麤爾り。次に其業を論ず。『毘曇』の如きに依らば、唯煩惱相應の業思有り。彼煩惱と相應す。斷の者は是れ其數滅なり。自餘の一切の不善の身口及び善無記は是有り、非有り。其緣縛を斷ずれば、名けて數滅と爲す。其體を絕せざるが故に非數滅なり。問うて曰はく、『人有りて煩惱を斷ずるが故に、彼身口の惡業をして起らざらしむ。是れ數滅なるべし。何が故に、非と言ふ。』釋して言はく、『毘曇』は性相の中に求む。彼れ親しく斷ずるに非ざるが故に、非數滅なり。問うて曰はく、『若し此れ親しく斷ずるに非ざるが故に數滅に非ずんば、見道に入る時諸見を斷絕す。見に隨つて起る所の貪瞋癡等は一切皆斷ず。應に數滅に非ざるべし。』釋して言はく、『類せず。解に三義有り。一には見と貪と等し。同じく是れ心法なり。同じく是れ煩惱なり。相生の義親しきが故に、根本より判じて數滅と爲す。身口の二業を彼に望めて爾らざるが故に、數滅に非ず。二には見と貪と等しと。同じく是れ煩惱にして互に相緣縛す。相縛の義親しきが故に、根本より判じて數滅と爲す。身口は爾らず。故に數滅に非ず。三には見と貪と等しと。同じく是れ煩惱にして互に相增長す。相助くる義强きが故に、根本より判じて數

【次に等】三に苦報を明す。

滅と爲す。身口は爾らず。故に數滅に非ず。』云何が相助くる。見に由つて、貪瞋等の結を起し、貪瞋等に由つて、見をして牢強ならしむるが故に、相助と曰ふ。是義云何。見所起の貪は諸見に貪著して、愛樂して捨てず。見所起の瞋は諸見を防護して、毀を聞けば則ち忿る。見所起の癡は見の過を覺せず、堅く住して捨てず。見所起の慢は見を持して自ら高くし、背て捨離せず。是の如きの義を以て見をして牢強ならしめ、聖諦に違返す。諦に違するを以ての故に、見諦に之を滅す。故に數滅と爲す。身口は爾らず。故に數滅に非ず。問うて曰はく、『若し染汙の思の外の一切の業盡くれば數滅に非ずと言はば、何が故に論に「十七の學思黑白の業を斷ず」と言ふや。』釋して言はく、『彼に學思斷と云ふは正しく煩惱相應の業思を斷ずるが故に是れ數滅なり。自餘の一切は但業の上の所有の縁縛を斷ず。業の體を斷ぜざるが故に、數滅に非ず。』何んが是れ其十七の學思なる。』『四業章』に具に廣く分別するが如し。』問うて曰はく、『論には「身口の二業皆修道斷なり」と說く。云何が、今非數滅と言ふや。』『此れ前に釋するが如し。但し業の上の所有の縁縛を斷じ、業の體を斷ぜず。』『毘曇』是の如し。『成實』と大乘とは、結を伏して業を止む。皆數滅に非ず。結業を滅盡するは、悉く是れ數滅なり。彼宗に義を辨ずるに務めて通ずるに在り。故に諸業是の如し。次に苦報を辨す。『毘婆沙』に依らば、一切の報盡くるに、是れ數滅なる有り、數滅に非ざる有り。潤生の惑を斷じ、幷せて報上の縁縛の義を斷ずるを、名けて數滅と爲す。因を斷ずるに依るが故に、報をして起らざらしむ。幷に餘の一切の縁差うて受けざる

は、悉く非數滅なり。有人、宣說すらく「羅漢の現報盡滅の處は、是れ其數滅の無餘涅槃なり」と。是義然らず。云何が然らざる。羅漢の現報、酬因の勢、極まる所以に滅盡し、道に由りて滅せず。云何が、此を說いて以て、數滅の無餘涅槃と爲す。又彼現報起り已つて滅するは、是れ四相の中の無常の滅なり。種類續せざるは、是れ非數滅なり。是中に何を用ひて、以て涅槃と爲さん。問うて曰はく「若し此れ涅槃に非ずんば、更に復何を用ひて、以て究竟の無餘涅槃と爲さん。」釋して言はく「彼宗は二種の涅槃の體性是れ一なり。其體の時別に隨つて二の名字を得。體一と言ふは、煩惱業思の數滅無の處、是れ其涅槃なり。時別に隨つて二名を得と言ふは、彼れ涅槃に向つて身智未だ盡さず。後に望むるに猶餘の身智の在る有り、後に約して前に別なるを名けて有餘と爲す。身智盡き竟つて、後に更に餘の身智の在る無きに望めて、彼前の涅槃を轉じて無餘と名く。報盡きて更に涅槃を得と謂ふに非ず。有人復言はく「報盡の處は是れ涅槃に非ず。無學の聖人彼報の上の緣縛の義を斷ずるは、是れ其報盡の無餘涅槃なり」と、此義然らず。緣縛を斷ずる者は乃ち是れ煩惱を斷除するに攝せらる。何ぞ報盡を開かん。「是義云何。煩惱を斷ずる時、具に二縛を斷ず。一には相應縛を斷ず。煩惱を斷ずるが故に、後同時に諸の心法を縛せず。二には緣縛を斷ず。煩惱を斷ずるが故に、復緣の中外の境界を縛せず。緣縛に二有り。一には苦集諦の理を緣縛するを見道の中に斷ず。二には陰界入の事を緣縛するは修道の中に斷ず。羅漢の報身は是れ陰界入の事相の所攝なり。修道の中には但報上の緣縛の義を斷じ、

報體を斷ぜず。云何が、此を將ゐて以て、報盡の無餘涅槃と爲さん。又復聖人緣縛を斷ずる時、身報未だ盡きず。是人後時に或は十年を經、或は百歲を經て、酬因極まり竟つて報身方に盡く。云何が前の緣縛の無き所を將て、以て後時の身盡涅槃と爲さん。是れ大いに解し難し。又復煩惱は直に自己の報身を緣縛するのみに非ず。亦他身及び外の境界山河等を縛す。若し自己の報身を緣縛するを斷ずるは、是れ其無餘涅槃の攝ならば、他身の縛を斷ずるは、應に是れ他人の無餘涅槃なるべし。而るに彼は他の無餘涅槃に非ず。此れも亦彼に同じ。何ぞ偏に自報を緣縛する盡滅の處を將て、獨り無餘と爲すことを得ん。是の如きの義を以て定んで知る、毘曇は因を斷じて報盡くるは皆數滅に非ず。問うて曰はく、『報盡くるは數滅に非ずんば、何が故に論に、「一切の果報は皆修道の斷」と言ふや。』『此は報上の緣縛の義と、及び潤生の惑とを斷じ、報體を斷ぜず。『毘曇』是の如し。成實法の中には、一切の果報は但無漏をして因を斷じ報を盡さしむ。皆是れ數滅なり。云何が知ることを得る。『成實』の說の如く、見道斷は謂はく、示相慢と及び彼所起の諸餘の法となり。修斷の法とは、不示相慢と及び彼所起の諸餘の法となり。示相我慢は是れ見諦の惑なり。我相を取立して自ら高擧するを示相慢と名く。三塗の業果は、是れ彼所起の諸餘の法なり。不示相慢は是れ修道の惑なり。推求すること能はず。不示相と名く。闇昧の心の中我を恃みて物を陵ぐ。名けて我慢と爲す。人天の業果は是れ彼所起の諸餘の法なり。此等は皆見修の所斷と爲す。故に彼斷處は是れ其數滅なり。是れ數滅なるが故に、彼宗の中に於て因

【次に等】第二に有漏無漏に約して分別す。

盡くるを名けて有餘涅槃と爲し、果亡ずるを名けて無餘涅槃と爲す。此義後の涅槃章の中に具に廣く辨釋するが如し。問うて曰はく、「羅漢の現報の盡くる處は、是れ數滅なりや不や。」釋して言はく、「不定なり。邊際智を以て報を促して盡すは、是れ其數滅、餘の死は則ち非なり。」『成實』是の如し。大乘法の中には、義『成實』に同じ。因を除いて報盡くるは、悉く是れ數滅なり。又大乘に說く煩惱業苦は皆是れ妄想なり。斷滅すべきが故に、對に約すること是の如し。此一門竟る　次に有漏無漏に約して分別す。『毘曇』の如きに依らば、有漏の盡くる處に是有り、非有り。其無礙解脫の爲に滅せらるるは、是れ其數滅なり。無礙解脫の爲に滅せられざるは、是れ數滅に非ず。無漏の盡くる處は定んで非數滅なり。故に彼論に言はく、「一切の聖道非數滅の處は、何の義を以ての故に道果の攝に非ざる」と。論に自ら釋して言はく、「餘事の爲の故に、諸の煩惱を斷じ、非數の爲にせず。故に道果に非ず」と。何者か餘事なる。謂ゆる數滅なり。成實法の中には、有漏の盡くる處に是有り、非有り。無漏智の爲に斷滅せらるる者は、是れ其數滅、餘は非數滅なり。無漏の盡くる處に是有り、非有り。道力の滅するは、是れ其數滅、餘は非數滅なり。無漏の盡くる處は是れ數滅なるを以ての故に、『成實』に宣說すらく、「空心を斷滅するを滅諦と爲すなり」と。又彼に宣說すらく、「空心に二の滅あり。一には滅定の暫滅、二には無餘の永滅有り」と。故に知んぬ、無漏に亦數滅有り。大乘の所說は義『成實』に同じ。故に『楞伽』に云はく、「妄想の爾炎慧彼滅するは我涅槃なり」と。亦云はく、「三十七品の所行を斷除して、方に

【次に等】三に治に約して論ず。

【纏】煩惱のこと

【自分因】新譯にいふ同類因なり。

稱して畢竟涅槃と爲すことを得」と。此二門竟る次に治に約して論ず。治に二種有り。一には有漏の等智、二には無漏の聖智なり。『毘曇』の如きに依らば、等智の所斷に是有り、非有り。若し八禪に依つて舉上斷下し、及び修道の時の所斷の纏は、是れ其數滅なり。增上忍の時に能く見惑をして永く更に生ぜざらしむるは、是れ非數滅なり。是の如きの一切なり。後に當に廣く辨ずべし。無漏の所斷に亦是と非と有り。所斷の一切の煩惱業思は、是れ其數滅なり。不退の人は修道の中に在りて無礙道の時に、所斷の惑をして永く更に生ぜざらしむるは、是れ非數滅なり。退轉の人は、修道の中に在りて後に至つて根を轉じて不動に到る時に、先の所斷の修道の煩惱をして永く更に生ぜざらしむるも亦非數滅なり。是の如きの一切なり。此義彼『毘婆沙』に說くが如し。問うて曰はく「無漏轉根の時の所斷の一切の根を障る無知は是れ數滅なりや不や。」釋して言はく「是に非ず。」問うて曰はく、「毘曇」に宣說すらく、「學人の轉根の時には、一無礙一解脫道を用ふ」と。結未だ盡きざるを以て盡きんことを求め、利を求むること猛なり。利を求むること猛なるが故に、無學の轉根は九無礙、九解脫道を用ふ。其結盡き利を求むるを以て、世貫なるが故に、此等は既に無礙解脫を用て障の無知を斷ず。何が故に、所斷を數滅と名けざる。」釋して言はく「數滅は相違の法を滅す。相違に非ざる者は捨すと雖も滅せず。彼退轉の時に捨する所の無知は、是れ無漏法なり。後の所得の利根の無漏と與に同類相生ず。是れ自分因の相資するの功、利の中に在り。是が爲に滅せず。又復鈍慧の境を照すの功と、障を治するの能とは、利の

中に兼て有り。全く別異に非ざるが故に非數滅なり。證果の時に、向の無漏を捨するを數滅と名けざるが如し。此も亦之の如し。問うて曰はく『人の說かく「微細の無明は根の中に在り。之を說いて以て障根の無知と爲す」と。此無知を斷ずるを應に數滅と名くべし。何が故に非なるや。』釋して言はく『若し微細の無明有り、根の中に在りて障と爲すと說かば、轉根の時に應に無明を捨して無漏を捨せざるべし。轉根の時は唯無漏を捨し、更に無明の捨すべき有りと言はず。明に知んぬ、此中に別の無明無きことを。但鈍の無漏の利知に同じからざるを名けて無知と曰ふ。鈍は利を妨ぐるを以て、之を說いて障と爲す。體は是れ無漏なり。是故に之を離るるを數滅と名けず。非數滅なるが故に、『毘婆沙』に云はく、「非數滅は多なり。漏無漏を滅す。數滅は是れ狹なり。唯有漏を滅す」と。問うて曰はく『轉根既に非數滅なり。何んが無礙解脫道を用ふるや。』釋して言はく『轉の時には、必ず諦の理を觀ず。始觀の心は鈍の得と俱なり。彼諦境に於て未だ深明を得ず、未だ決了を得ざるを、說いて無礙と爲す。終の時方に境に於て決了を得るを、說いて解脫と爲す。斷結と同じ。故に斷結に約して說いて無礙と爲し、說いて解脫と爲す。而して其所無は是れ數滅に非ず。『毘曇』是の如し。成實法の中には、有漏の智斷は皆數滅に非ず。有漏は唯伏なり。斷ずる能はざるが故に、無漏の智斷を方に斷滅と名く。大乘法の中には、須らく分別有るべし。若し世俗八禪の等智を說いて以て有漏と爲さば、彼は但結を伏す。是れ數滅に非ず。無漏は永斷す。方に是れ數滅なり。故に『地持』に云はく、「若し世俗を以て 諸の煩

【次に等】四に時に約して論ず。先づ毘曇の說。

惱を滅すれば、彼究竟に非ず、解脫の果に非ず」と。『涅槃』に亦云はく、先に定を以て動かし、後に智を以て拔く。若し涅槃を得て世間を捨せず、空を證すれども有に隨ふをば名けて、有漏も亦能く永滅すと爲す。實慧に依つて起るが故に能く永滅す。彼何の所滅ぞ。著有の見と、迷空の闇とは、空觀之を滅す。著空の執と迷有の無明とは、有智能く滅す。治に約すること是の如し。此三門竟る　次に時に約して論ず。時は謂はく、三世なり。此三時に約して以て數滅を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、煩惱業思に共に二種有り。一には是れ正體、二には成就得なり。治に二種有り。一には無礙道、二には解脫道なり。無礙は能斷、解脫は得滅なり。亦は證滅と名く。先に共斷を論ずれば、義は則ち不定なり。若し前の因を斷じて後を生ぜざらしむれば、之を名けて斷と爲す。唯、過去を斷ず。道の邊に惑無きが故に、現を斷ぜず。當惑未だ起らざれば、未だ後を生ずること能はざるが故に當を斷ぜず。若し惑の果を遮して其れをして起らざらしむれば、之を名けて斷と爲す。唯未來を斷ず。現には惑の得有るが故に、現を斷ぜず。過去は已に起るが故に、過を斷ぜず。若し因果を隔る、之を名けて斷と爲さば、通じて過未を斷ず。正しく後の果を遮して、其をして生ぜざらしむれば、未來を斷ずと名く。後生ぜざるが故に、過去の煩惱の因の義、生成せざれば、過去を斷ずと名く。現在の道の邊に於て、惑の後に生ずること無し。亦前を起さざるが故に現を斷ぜず。若し現の得を斷じて後を生ぜざらしむる、之を名けて斷と爲さば、則ち現在を斷じ、及び未來を遮す。唯得の能を斷じ、得の體を斷ぜず。若し現の得を斷じ

て其所得の過未の煩悩をして來つて已に屬せざる、之を名けて斷と爲さば、通じて三世を斷ず。斷義、是の如し。若し得滅を論ぜば、解脱に在り。義も亦不定なり。約に對して以て論ぜば、唯過未の煩悩の因果を滅して現在を滅せず。現には惑の得の以て息滅すべき無きが故に、現を滅せず。若し滅の體に望むれば、唯現の滅を得して、過未を得せず。是義云何。過因後果の正滅は今に在り。隨つて之を得す。故に現の滅を得す。現所滅の惑は、過去には未だ滅せざるが故に、過を得せず。當を始めて滅するに非ず。故に當を得せず。若し無惑の果を遮して、其をして起らざらしむる、之を名けて滅と爲さば、唯、現未を滅して過去を滅せず。是義云何。解脱は現の時に煩悩生ぜざれば、現在を滅すと名く。其所滅の惑後に續生せざれば、未來を滅すと名く。過去の煩悩、之を起すこと已に竟れり。道の所對に非ざるが故に、過を滅せず。涅槃中の斷善と相似せり。故に彼文に言はく「滅に二種有り。一には現在滅、二には未來を障ふることとなり」と。此二滅を具するを、善根を斷ずと名く。斷惑も亦爾なり。若し諸惑をして因の義を生ぜざらしむる、之を名けて滅と爲さば、通じて三世を滅す。是義如何。現前を對治して過去の惑をして、後を生ずること能はざらしむるを、過因を滅すと名く。現に起らざるが故に、後の惑起らず、惑の後を生ずること無ければ、現因を滅すと名く。後の惑起らず、惑の後を生ずること無ければ、來因を滅すと名く。『涅槃』の中に三世の因を斷ずるを斷善根と名くると、其義相似せり。通じて滅するを以ての故に、『毘婆沙』に云はく「數滅は是れ多なり。通じて三世を滅す。非數

【成實法の等】次に成實の說。

【大乘法の等】次に大乘の所說。

滅は少なり。唯未來を滅す」と。問うて曰はく、『毘曇』に、解脫には惑無ければ、滅を得すと名くとは、無礙道の時にも亦煩惱無し。『何の義を以ての故に得滅と名けざる。』釋して言はく、『以有り。無礙道の時、其自品の未だ惑を斷ぜざる所に於ては、是れ未起の無なり。故に滅を得せず。惑行ぜずと雖も、其得在るが故に、其自品の所斷の煩惱に於ては、是れ不行の無にして、斷無を得するに非ず。故に滅を得せず。若し不退の人、無礙道の時に所斷の惑をして永く更に生ぜざらしむれば、是れ非數滅なり。滅諦に收むるに非ざるが故に、滅を得せず。』問うて曰はく、『無礙は所斷の惑をして永く更に生ぜざらしむ。彼惑家の得は、何が故に滅せざる。』『無礙の力微にして滅すること能はざるが故に。』問うて曰はく、『無礙に所斷の惑をして後に更に生ぜざらしむるは非數滅なりといはば、後更に生ぜざれば便ち所得無し。何の義を以ての故に、能得は滅せざる。』釋して言はく、『未來の所得は滅すと雖も、過因仍ち在りて後の細惑を生ず。彼因に隨ふを得るが故に、在りて滅せず。』煩惱の斷滅其義既に然なり。業思同じく爾り。『毘曇』是の如し。成實法の中には、但煩惱業苦の體を斷じ、得を斷ずと說かず。設し得すと言はば、彼行人に名け、彼法を成就するを名けて得と爲すなり。煩惱を斷滅すること『毘曇』と同じ。業を斷ずることも亦爾なり。生死の苦報は或は現在を滅して、後をして續せざらしむ。謂はく「邊際智は強く抑へて滅せしめ、或は未來を滅す。現因を斷ずるに由りて、後をして生ぜざらしむ」と。大乘法の中には、麤起の結業は斷滅前に同じ。若し同體の自性の無明を論ずれば、唯現在を斷じ、

【次に位に等】五に位に就いて論ず

【習種】十行のこと。

【九無礙】九無間道のこと、一品の惑を斷ずるに就ハて加行、無間、勝進、解脱の四道あり、その無間道とは先の加行道に於ける加行の功により、無間に煩惱を斷ずる刹那の無漏の一心なり、修惑に九品ある故九無間道となる、九解脱道とは斷ずべき惑を解脱して生ずるところの無漏道にして九道あること前に同じ。

後をして續せざらしむ。更に餘義無し。相狀は如何。同體の智は眞に順ずる力を以ての故に、能く卽體の自性の無明をして、更に後を生ぜざらしむ。之を名けて斷と爲す。此性の無明は滅すること解脱に在り。之を得する方法は上の義と同じ。此四門竟る　次に位に就いて論ず。位別に五有り。一には外凡の位。小乘法の中には念處已前なり。二には内凡の位。小乘法の中には煖頂已上、大乘法の中には習種已上なり。三には見道の位。四には修道の位。五には無學道なり。『毘曇』の如きに依らば、義別に三有り。一には斷處、二には得處、三には成處なり。若し斷處を論ずれば、唯外凡と見道と修道とに在り。外凡位の中には、世俗禪に依り、六行、結を斷ず。見諦位の中には、見諦の惑を斷じ、修道位の中には、修道の惑を斷じ、内凡位の中には、諦を觀ずることを學すと雖も、但、現起を伏して永斷すること能はず。是に爲て論ぜず。無學は惑盡きて、斷除すべき無し。是を以て論ぜず。問うて曰はく、「無學は九無礙、九解脱道を修して、已が所有の障根無知を斷ず。云何が斷ぜざる。」『障根の盡くる處は非數滅なるが故に、所以に說かず。若し得處を論ぜば、外凡と見と修と無學とに在り。外凡と見と修とは斷ずるに隨つて得す。無學の位は彼因中の一切の所斷に於て、一時に頓に得して、合して果の體と爲す。内凡の一位は全く所得無し。若し成處を論ぜば、五位皆成ず。外凡の所斷は内凡も亦成ず。見修無學之を成ずることを知るべし。成實法の中には、義別に二有り。一には斷得處、二には成就處なり。斷得處とは、内凡見修二道に在り。内凡位の中には、煖等の四心漸く煩惱を斷ず。故に數滅を得す。

【賢首】十信滿ずるなり。

【海印】三昧の名。佛が華嚴經を說きたまふに當りて入りし三昧、即ち煩惱の止滅せる佛定心中に三世諸法の炳然としてあらはるゝをいふ。

【八相成佛】佛菩薩が度衆生のために出世して、降兜率、託生、降生、出家、降魔、成道、說法、涅槃の八相を示し、成道の相を現じたまふをいふ。

【次に非數等】三に非數滅の體相を明す。中に五門分

聞思の二惠は但能く伏除して、未だ永く盡すこと能はず。是故に所得は眞の數滅に非ず。故に彼論に言はく「煗等より來は、漸く煩惱を斷じて滅を見て乃ち盡くす」と。明に知んぬ、聞思は未だ永く滅すること能はず。見修二位の斷得知るべし。彼宗の中の世俗の八禪は結を斷ずること無し。故に外凡は一向に斷無く、得無し。無學には斷無し。義の在ること知るべし。若し成就を論ずれば、內凡見修及與無學は皆悉く成就す。外凡は成ぜず。大乘法の中には、善趣已前を悉く外凡と名く。彼外凡善趣位の中に於て、隨分の中に麤を斷ず。五位も亦其滅を得す。故に『華嚴經』に說かく、「賢首の中に海印等の塵數三昧を得し、八相成物す」と明す。其中に斷有り滅有り。內凡見修は斷有り滅有り。無學は滅を得して斷ずべき無し。數滅是の如し 次に非數を辨ず。中に於て曲に五門の分別有り。一には煩惱業苦に約して分別し、二には有漏無漏に約して分別し、三には內外に約して分別し、四には五趣に約して分別し、五には三世に約して分別す。初に煩惱業苦に約して分別すといふは煩惱の中に、其無礙解脫の對治を除いて餘の緣力の故に生ぜざらしむるは、是れ非數滅なり。業は則ち不定なり。毘曇法の中には、染汙の業思は煩惱と同じ、自餘の一切は皆非數滅なり。『成實』大乘は一切の諸業等皆煩惱に同じ。苦報の中には『毘曇』の如きに依らば、皆非數滅なり。『成實』大乘は煩惱と同じ。此一門竟る 次に有漏無漏に約して分別せば、有漏法の中に、其無礙解脫の對治を除いて餘の緣力の故に生ぜざらしむるは、是れ非數滅なり。無漏は不定なり。『毘曇』の如きに依らば、一切の無漏の起るべきが、起らざるは皆非數滅

別あり、先づ煩惱業苦に約して分別す。
【次に有漏等】二に有漏無漏に約して分別す。
【次に等】三に內外に約して分別す
【次に五趣等】四に五趣に約して分別す。

なり。成實法の中には、若し道力を以て無漏をして滅せしむるは、是れ共數滅なり。滅定に入るが如し。餘の緣力の故に生ぜざらしむるは、是れ非數滅なり。大乘法の中には、緣觀の無漏は實を證すれば除捨す。是れ共數滅なり。餘は非數滅なり。此二門竟る 次に內外に約して分別を爲さば、非數無爲は通じて內外の一切の諸法を滅す。外の草木等の應に起るべきが、起らざるは是れ外法の滅なり。衆生の內法の起るべきが、起らざるは是れ內法の滅なり。此三門竟る 次に五趣に約して分別を爲さば、『毘婆沙』に說かく、「一切の凡夫は五趣の中に於て、所有の五識非數滅を得す」と。是義云何。身の所在に隨つて、餘の一切處の五塵の境界、所生の五識、永く不生なるが故に、此處の五塵の餘處の衆生も、亦緣ずることを得ず。故に彼五識も亦非數滅なり。問うて曰はく、「意識は何が故に論ぜざる。」「一切處の所有の境界に於て、彼此の意識互に相緣ずることを得す。不生の法に非ず。是に爲つて說かざるなり。」惡道の分に於て、已斷離の者は非數滅を得す。何の行か能く斷ずる。論に言はく、「或は布施、持戒、聞思修、不淨觀、安般念等有り。或は煖等を修慧修學して、能く惡道を斷じて非數滅を得する有り。中に於て得滅の前却不定なり。若し自在の者は前の善根を修して、卽ち惡道を斷じて非數滅を得す。利根不退なるを自在者と名く。若し鈍根の者は忍心に至る時、方に始て得滅す。」問うて曰はく、「所斷の三惡道の分は當に一時に非數滅を得すべしとや爲ん。次第に得すとや爲ん。」『有人宣說すらく、「一時に之を得す」と。』評者は不定なり。若し施戒聞思等の善を修すれば能斷の處を得し、所未斷の處をば則ち之

【次に時に等】五に時に約して分別す。

【三】以下、第三に三無爲を得するの分齊に就いて。初に煩惱に約していふ中に二、一には得の分齊を辨ず。先づ見惑に就いて。

を得せず。若し達分無漏の善根を修して悪道を斷ずれば、三悪道に於て、一時に頓に非數滅を得するなり。人天の二道は、能く永斷すること有りて、更に受けざるは非數滅を得す。其中の前却は後門に更に論ず。趣に約すること是の如し。此四門竟る　次に時に約して論ずれば時は謂はく三世なり。非數無爲は但未來一切の諸法を滅し、過現の一切の法を滅せざるなり。未來法の中に其二種有り。一には生法、現に未だ起らずと雖も、當來に必ず生ず。二には不生の法、縁差易奪して畢竟不生なり。當生の法は今未生なりと雖も、後に當に起るべし。畢竟滅に非ず。是故に非數滅と名くることを得ず。不生の法の畢竟起らざるは是れ非數滅なり。過去の法の當時滅壞するは、是れ四相中の無常の滅なれば、非數滅に非ず。滅謝し已竟るも亦非數に非ず。何が故に是の如くなる。起し已りて謝往するは、是れ過去の有なり。性成じて過に在るは無爲に非ざるが故に、非數滅に非ず。現在の法は、起り已つて未だ滅せざれば、無爲に非ざるが故に非數滅に非ず。是故に非數は過現を滅せず。體相是の如し。

（三）次に第三門に得の分齊を明す。虛空は外の無なり。所得の法に非ざれば今廢して論ぜず。數非數滅は多く內に約して說く。是人の所得なり。今、偏に之を辨ず。中に於て曲くするに二有り。一には煩惱に約して得の分齊を明し、二には報に約して說く。煩惱の中に就いて、初には先づ正しく得の分齊を辨じて、却つて二滅の得の先後を論ず。分齊は如何。『毘婆沙』に依らば、三界の見惑は增上忍の時、非數滅を得す。增上忍より次第に無間に見諦

【次に等】次に修惑に就いて。

道に入るを以て、所有の見惑重ねて起ること無し。故に實を以て細に論ぜば、上上利根の出觀せざる者は、煗心已去非數滅を得す。出觀せずして聖道に趣入するに由る。重ねて起らざるが故に、論の中に多く極鈍の者に就いて說く。故に上忍は非數滅を得すと言ふ。忍の中合して三十二重有り。最後の一重を名けて增上と曰ふ。苦忍乃至道比緣心は其數滅を得す。無礙に正斷を說いて能得と爲し、解脫道の後を說いて正得と爲す。問うて曰はく、『無礙は何の義を以ての故に、正得すること能はざる。』『惑得在るが故に。』問うて曰はく、『見惑は增上忍の時に已に非數滅なり。更に何の在る有りて復數滅を須ふべき。』釋して言はく『非數は但當惑を滅して、重ねて起らざらしむ。前の因を滅せざるが故に、數滅を須ふ。又非數滅は但惑體を滅して、後をして生ぜざらしむれども、其得を滅せざるが故に、數滅を須ふ。』問うて曰はく、『非數已に惑體を滅す。何の所得を得してか更に滅するを須ふる。』『前の惑因を得し、後を生ずること未だ滅せず。煩惱の果なるが故に。』問うて曰はく、『向に解脫道の後正しく數滅を得すと言ふ。何者か是れ後なる。』『論の中に說くが如し。解脫を首と爲して已後の、一切の無礙解脫の無漏心の邊に、皆得生すること有りて前の無爲を得するを、名けて後と爲すなり。故に『毘婆沙』に說かく、「無礙道は當に數滅を得すべし。解脫の後の一切無漏を指して以て當と爲すのみ」と。見惑是の如し。次に修惑を論ずれば、欲界の修惑は麤細に九品あり。始め上上より乃ち下下に至る。對治の道に九方便、九無礙道、九解脫道有り。始め下下より乃ち上上に至る。先に初品に就いて得の分齊を明す。餘

【次に等】二に二滅の得の先後を辨ず。

は類して知るべし。『毘婆沙』に說かく、聖人中に於て不退の法有り。觀を起さざる者は方便道の時、非數滅を得す。出觀せざるに由りて所斷の煩惱永く起らざるが故に。無礙道の時、正しく其得を斷じて當に數滅を得すべし。解脫道の後、正しく數滅を得す。若し不退の人にして觀を起す者は、無礙道に至りて非數滅を得す。數滅は前の如し。若し退法の人は其起觀及び不起觀に隨つて、方便道より無礙道に至るまでは一切非數滅を得すること有ること無し。退法の人重起の義有るを以て、是に爲つて得せず。數滅は上の如し」と。初品既に然り。餘品は乃ち非想の煩惱に至つて斷得す。例して爾り。問うて曰はく、「退人所斷の煩惱は何の時の中に於て非數滅を得する。」『毘婆沙』に云はく、「信解脫の人は轉じて見到と爲し、時解脫の人は轉じて不動と爲す。爾時之を得す。聖人は身欲界に在りて結を斷じ、滅を得すること是の如し。身は色界及び無色界に在りて上の煩惱を斷ずるは、退人を問ふこと莫し。不出觀の者は方便道の時非數滅を得す。若し出觀の者は無礙道の時非數滅を得す。良に諸天は退轉無きを以ての故に、數滅は前に似たり。無礙正斷して解脫道の後に其數滅を得す」と。分齊是の如し。次に先後を辨ず。『毘婆沙』の中、四句に之を辨ず。或は煩惱有り。先に非數を得し、後に數滅を得す。上に辨ずる所の如し。見諦の煩惱增上忍の時、非數滅を得し、苦忍已去方に數滅を得す。又修惑の中には、不退法の人の出觀せざる者をば、方便道の時に非數滅を得し、無礙道の後に方に數滅を得す。此は是れ初句なり。或は煩惱有り。先に數滅を得し、後に非數を得す。上に辨ずる所の如し。

【次に等】二に報に約して得の分齊を明す。先づ三塗の報。

有る退法の人の所斷の修惑は、無礙解脫に數滅を得し已つて後、轉根の時方に非數を得す。此れ第二句なり。或は煩惱有り。數滅と非數滅と一時に得す。上に辨ずる所の如し。不退法の人の出觀有る者は、無礙道の時非數滅を得し、當に數滅を得すべし。理實に細に求むれば、先に非數を得し、後に數滅を得す。此前の兩句を說いて一門と爲す。又論に說くが如し。彼欲界の九品の惑の中に於て上上品を斷ずるに、此惑と相應する染汙の五識、所緣の境に於て復更に緣ぜざれば、非數滅を得す。道を以て治するが故に亦數滅を得す。此も亦一時なり。餘品同じく爾り。乃至下下品を斷除する時、此惑と相應する染汙の五識、所緣の境に於て復更に緣ぜざれば非數滅を得し、亦數滅を得す。此時に欲界の一切の善法、及び不隱沒無記の法は、緣縛を離るるが故に亦數滅を得す。初禪地の上上惑を斷ずる時、彼惑と相應する染汙の三識、所緣の境に於て復更に緣ぜざれば非數滅を得し、道の爲に治せらるれば亦數滅を得す。乃至下下の惑を斷除する時此惑と相應する染汙の三識、所緣の境に於て復更に緣ぜざれば非數滅を得し、亦數滅を得す。此時に初禪の一切の善法及び不隱沒の無記の法は、緣縛を離るるが故に、亦數滅を得す。二禪已上は五識身無し。是に爲つて說かず。此等は皆數非數滅一時にして得すと名く。是れ第三句なり。或は煩惱有り。數非數滅の二は、俱に得せず。常の行は是なり。此は第四句なり。煩惱に約對する分齊、是の如し。此一門竟る。次に報に約して論ぜば、五道の報も亦數滅、非數滅の義有り。成實、大乘は因を斷じ、果を離るるを名けて數滅と爲し、餘緣受けざるを非數滅と名く。毘曇法の中

には、因を斷じ果を離るるは皆非數滅なり。潤生の惑を斷じ、及び繫縛を離るるを名けて數滅と爲す。分齊は如何。三塗の報は『成實』の如きに依らば、煖心已上、畢竟じて受けず。非數滅を得す。故に彼文に言はく、「世の上正見とは百千世に往來すれども、終に惡道に墮せず」と。彼は煖等を名けて上正見と爲す。『毘婆沙』に依らば、若し利根得自在の者を言はば、煖心已去非數滅を得す。若し鈍根の者は、忍心已上非數滅を得す。『涅槃經』に云はく、「三惡道の報は忍法に住する時、非數緣滅す」と。鈍に從つて言ふのみ。此處は定んで滅す。故に多く之を言ふ。問うて曰はく、「未來の三惡道の報は、當に一時に非數滅を得べしと爲んや。當に前後なるべしと爲んや。」「此れ前に解するが如し。若し施戒聞思等の善を修して惡道を排滅すれば、滅は則ち先後なり。若し理觀を修して、而して斷滅すれば、滅は則ち一時なり。忍心の時に於て、理觀を修習して堅住不退なれば、一切の惡道に重受の義無し。故に未來無窮の惡道をして頓に非數滅ならしむ。」問うて曰はく、「見惑は忍心の中に於て非數滅を得す。三惡道の報も亦忍中に於て非數滅を得す。同一時と爲んや、先後在りと爲んや。」釋して言はく、「先後なり。」是義云何。忍の中、彼上下の四諦に於て、各十六行合して三十二重の觀行有り。初重の觀の時、三惡道の報、頓に非數滅す。重受無きが故に。最後の一重增上忍の時、見斷の煩惱頓に非數滅す。重起無きが故に。問うて曰はく、「三塗は是れ見惑の果なり。何の義を以ての故に、果は先に在りて滅し、惑は後に在りて滅する。」釋して言はく、「見惑に共に二種有り。一には受生の煩惱三塗を潤生す。

【次に等】五道の中、次に人天に就いて。

二には障道の煩惱染汙の心起つて聖道を妨礙す。受生は過麤なれば、初め忍に入る時已に能く起らず。故に惡道をして悉く非數滅ならしむ。障道惑の中、細なる者は離れ難し。未だ上忍に至らず。暫く起らしむべし。是故に非數滅を得と名けず。增上忍の後、次第に無間に聖道に趣入すれば、重起の義無し。爾時、方に非數滅を得するなり。數滅は云何。『毘婆沙』に依らば、苦忍已去共數滅を得す。此數滅は彼潤生の煩惱の得を斷じて、報をして不生ならしむるを、名けて數滅と爲す。又報の上の緣縛の義を斷ずるも亦數滅と名く。若し潤生の煩惱の得を斷ずるを數滅と名くれば、四法忍心の無礙に正斷し、四法智の後に共數滅を得す。若し緣縛を斷ずるを數滅と名くれば、苦集諦の下の十一遍使は一切有漏の法を緣縛す。三塗の苦報は之が爲に緣縛せらる。苦法智、集法忍は正しく彼得を斷ず。彼遍使をして、來つて己に屬せざらしむ。未來無窮の三惡道の報は、悉く緣縛を脫す。苦集二種の法智已後正しく數滅を得す。惡道是の如し。次に人天を論ず。『毘婆沙』に依らば、得聖の後欲界の人天各七生の分は、應に之れ須陀、斯陀の所受なるべし。是を除いて已後の一切の人天の未來の生死は、增上忍の後に重受の義無く、悉く非數滅す。無色界の一切の生處の各一生の分は、應に是れ那含の未來の所受なるべし。一生の分を除いて未來一切の色無色の生は、增上忍の後に重受の義無く、增上忍の時悉く非數滅す。欲界の人天の各七生の分は、何れの處にか滅を得する。欲界の結を斷ずるに、九方便、九無礙道、九解脫道有り。須陀洹より斯陀に向ふ時、利鈍を問ふこと莫く、出觀せずし

て斯陀を得すること有る者は、彼最初の方便道の時に於て、前六生の分は非數滅を得す。出觀せずして斯陀果を得するを以て、此六生に於て重受無きが故に、縱ひ退する者有るとも、果を退して死せざれば亦受義無し。若し出觀して斯陀を得すること有る者は、未だ得せざる已前は身を受くること有るべし。是故に乃ち六方便に至る來た、一向に未だ非數緣滅を得せず、第六品の無礙道に至る時、前六生の非數緣滅を得す。此無礙の後定んで斯陀を得て重受無し。故に斯陀含より那含果に向ふに、利鈍を問ふこと莫く、出觀せずして那含を得すること有る者は、彼第七の方便道の時に於て、欲界の人天第七生の分は非數滅を得す。出觀せずして那含果を得するを以て、欲界の生死永く受けざるが故に、縱使果を退するとも死せざるをもつて、亦之を受けず。若し出觀して那含を得すること有る者は、未だ得せざる已前は身を受けしむべし。要ず第九無礙道に至る時、方に非數を得す。非數是の如し。數滅は云何。若し潤惑を斷ずるを名けて數滅と爲さば、欲界の未來無窮の生死は、九無礙道に分分に正斷して、九解脫道に其數滅を得し、止七生のみならず。若し緣縛を斷ずるを名けて數滅と爲さば、第九品の無礙道の時に至つて、正しく緣縛を斷じ、第九品の解脫の後に至つて、欲界の未來一切の生死は、其數滅を得す。唯七生のみならず。問うて曰はく、「何が故に、第九の無礙、獨り緣縛を斷ずる。」「前の八は斷ずと雖も、未だ出離を得ず。是が爲に說かざるなり。此處には出離するが故に。」論に之を說く。欲界是の如し。「聖人の身は欲界地の中に在りて初禪の結を斷ず。初禪の受身何れの處にか滅を得する。」

初禪の結を斷ずるに、亦九品の方便、無礙及び解脫道有り。若し不退の人は出觀せずして初禪の結を盡くすを以て、彼最初の方便道の時に於て、彼初禪の二種の生處の各一生の非數緣滅を得す。何者か是れ其初禪二處なる。梵衆、一處、梵輔、大梵、共して一處と爲す。聖人此に於て重生の義無し。是故に各一生の分を宣說す。二生已後は增上忍の時、已に非數滅す。是故に論ぜず。出觀せずして彼結を斷じ盡すを以て、更に退轉せずして彼生を受くるが故に。若し數出觀して彼結を盡す者は、出觀するを以ての故に、未だ盡さざるの間は欲身を捨して彼天に生ずべし。是故に乃ち九方便に至る來、彼生の非數緣滅を得せず。彼第九無礙道に至る時、方に彼生の非數緣滅を得す。此無礙の後、欲身を捨して彼天に生ずること無きが故に。若し是れ退人は、其出觀及び不出觀に隨つて彼結を斷じ盡し、乃ち第九無礙解脫に至るまで、彼生の非數緣滅を得せず。退法の人は結を斷じ盡すと雖も、或は退起して彼天に生ずべきを以ての故に。非數是の如し。數滅は云何。若し潤惑を斷ずるを名けて數滅と爲さば、彼九無礙、一一能く初禪地の中の、無窮の生死を斷ず。止一二のみに非ず。九解脫の後其數滅を得す。止二處の二生を滅するに非ず。若し緣縛を斷ずるを名けて數滅と爲さば、彼第九無礙道に至る時、正しく緣縛を斷じ、彼第九の解脫より已後、初禪の中の無窮の生死に於て、盡く數滅を得す。止一二に非ず。前の八の無礙は緣縛を斷ずと雖も、之を斷ずること未だ盡きず、未だ出離を得ず。所以に說かざるなり。九品の結共じて、初禪の一切の生を縛するを以ての故に、身欲界に在りて

初禪地に望めて滅を得すること既に然なり。二禪地より望めて無所有に至るに類して皆同じく爾なり。問うて曰はく、「退人は上所斷に於て、皆是れ非數滅を得せずんば、何の時にか得するや。」謂はく、『信解脫は轉じて見到と爲る。爾時之を得す。若し轉根せざれば、非想の煩惱を斷ずるに至る時に得す。』問うて曰はく、「聖人の身、欲地に在りて欲の過を斷除す。縱ひ退有る者なりとも、所斷の處七生の分に於て非數滅を得す。何の義を以ての故に退法の人は上の結を斷ずる時、彼生の分に於て非數滅を得せざるや。」釋して言はく、『欲結斷離の處に斯陀、那含の二果を制立す。果退暫く爾れども、終に生を經ざるが故に彼生に於て非數滅を得す。初禪の結を斷ずるより無所有に至るまで別に果を得すること無ければ、退して生を經ることを得、永く受けざるに非ず。是に爲つて非數緣滅を得せず。』問うて曰はく、「聖人の身、欲界に在りて上生の分を斷ずる、其義是の如し。身初禪より無所有に至るまでに在りて、上生の分を斷じて滅を得すること如何。」釋して言はく、『聖人上天に生在しては退轉の義無し。彼上地に於て、所斷の處に隨つて、所有の生分は退人及び不退人を問ふこと莫し。一切皆非數緣滅を得す。』問うて曰はく、「聖人の身、下地に在りて非想の結を斷じて滅を得すること云何。」釋して言はく、『聖人非想の結を斷ずるも、亦九品の方便、無礙及び解脫道有り。退人及び不退の者を問ふこと莫し。觀を起さずして彼結を斷じ盡すこと有らば、其最初の方便道の時に於て、彼一生の分は非數滅を得し、幷に得退の人は、初禪地より無所有に至るまでに於て、未だ曾て得せざる所の非數緣滅も亦悉

【一四】三無爲を明す中、第四門に其多少不同を明す。先に其多少に就いて辨ず。

く之を得す。出觀せずして無學の果を得するを以て、一切處の生更に受けず。故に若し出觀して結を斷じ盡すこと有らば、出觀するを以ての故に、未だ盡さざるの間は身を受けしめず。是故に乃ち九方便に至る來、彼生の非數緣滅を得せず。彼第九の無礙道に至る時、方に彼生の非數緣滅を得し、并に得退の人は、初禪地より無所有に至るまでに於て、未だ曾て得せざる所の非數緣滅も、亦悉く之を得す。此無礙の後、定んで羅漢を得す。一切處の生は重受せざるが故に。非數是の如し。』數滅は云何。若し潤惑を斷ずるを名けて數滅と爲さば、彼九無礙に、分分に能く非想地の中の、一切の生の分を斷ず。止生のみに非ず。九解脫の後に、分分に彼非想地の中の一切生分の數滅無爲を得す。止其一のみに非ず。若し緣縛を斷ずるを名けて數滅と爲さば、第九品の無礙道に至る時、方に非想地の一切生の上の所有の緣縛を斷じ、第九の解脫に、非想地の一切生の分の數滅無爲を得す。止一生のみに非ず。報に約すること是の如し。是中にも亦應に二無爲の得の先後を辨ずべし。上に准じて知るべし。分齊是の如し。』

〔一四〕次に第四門の三無爲の多少不同を明す。先に多少を論ず。虛空最も多なり。一切の法を無にするをもて、今此には且く數、非數滅に就いて、以て多少を辨ず。其義不定なり。一種の義有り。數滅は是れ多なり。非數滅は少なり。數滅は通じて三世の法を滅す、故に名けて多と爲す。義は上に辨ずるが如し。過去の惑を滅すれば、因と爲すこと能はず。未來の惑を滅すれば、果と爲すこと能はず。現在の惑を滅すれば、因果を得せず。非數無爲は

【次に等】二に不同を辨ず。

【毘婆闍婆提】ヰバージヤ、ヷーディン（Vibhajya-Vādin）分別說部のこと。

唯未來不生の法を滅するが故に名けて少と爲す。一種の義有り。非數滅は多にして、數滅は是れ少なり。非數は通じて漏無漏の法を滅するが故に名けて多と爲す。數滅は唯有漏の法を滅す。之を稱して少と爲す。斯を以て驗して求むれば、無漏の轉根は定んで非數滅なり。良に二滅互に多少有るを以て、是故に應に四句を作りて分別すべし。『毘婆沙』に說くが如し。第一句とは法有り。唯數滅の爲に滅せられて、彼非數滅の爲に滅せられず。謂はく、過現在の有漏の法と、及び未來世の可生の有漏となり。第二句とは法有り。唯非數滅の爲に滅せられ、彼數滅の爲に滅せられず。謂はく、未來世の無漏の法の不生なる者是なり。第三句とは法有り。雙に二滅の爲に滅せらる。謂はく、未來世の有漏の法の不生なる者是なり。第四句とは法有り。二滅の爲に滅せられず。謂はく、過現在の無漏の法と、及び未來世の可生の無漏となり。多少是の如し。此一門竟る 次に不同を辨ず。『毘婆沙』に依らば、數非數の二種の滅を以て、無常の滅に對して其異を辨ず。異に十種有り。其一義には約して有爲無爲に就いて異を辨ず。數、非數滅は是れ無爲の法なり。無常の滅は法に即して辨ずれば、是れ有爲の法なり。毘婆闍婆提の說くが如きに依らば、無常の滅も亦是れ無爲なり。彼法の後無なる處を說いて滅と爲すが故に、無爲と曰ふ。評者は許さず。第二に解脫を得するに約して異を辨ず。若し法滅し已りて解脫の得を得するは、是れ其數滅なり。若し法滅し已りて解脫の得を得せざるは、是れ非數滅なり。若し法散壞して亦解脫の得を得せざるは、是れ無常の滅なり。第三に約して縛脫に就いて異を辨ず。若し是れ解脫にして

不繫の相なるは、是れ共數滅なり。是れ解脫にして、不繫の相に非ざる有り。是れ非數滅なり。未來の染過永く更に生ぜざれば、通じて解脫と名く。解脫にも非ず、不繫の相にも非ざる有り。是れ無常の滅なり。此言不盡なり。理實には無常は脫非脫に通ず。無漏の無常、是れ共解脫なり。有漏の無常は是れ非解脫なり。繫と不繫と類して亦同じく爾なり。

第四門の中、時に約して異を分つ。三世法の中に滅を得する者は、是れ共數滅なり。未來の法の中に滅を得する者は、是れ非數滅なり。現起の法の中に滅を得する者は、是れ無常の滅なり。第五に、約して三性に就いて異を辨ず。數滅は是れ善なり。彼得も亦善なり。非數は無記なり。得も亦無記なり。無常の滅は共三性に通ず。得も亦是の如し。善法に就いて說かば、即ち名けて善と爲す。惡法に就いて說かば、即ち不善と名く。無記も亦爾なり。第六に、繫不繫に約して異を辨ず。數滅は不繫なり。無爲法なるが故に。彼得は是れ繫と及與び不繫となり。有爲法なるが故に。彼八禪の等智の所滅を得する、之を名けて繫と爲し、無漏の滅を得するを、名けて不繫と爲す。非數は不繫なり。非數は無爲法なるが故に。得は唯是れ繫なり。有漏法なるが故に。無常の滅は繫不繫に通ず。得も亦之の如し。有漏に就いて說かば、之を名けて繫と爲し、無漏に就いて說かば、名けて不繫と爲す。第七に、約して學等に就いて異を分つ。數滅は非學、亦非無學なり。數滅は心に非ず。是故に學に非ず、亦無學に非ず。彼得は是れ學、亦是れ無學なり。亦名けて非學非無學と爲すことを得。得は心に非ずと雖も、法に從つて之を說く。因に在るの得は、因に從つて學と

說き、果に在るの得は、果に從つて無學と說くことを得。彼等智の數滅無爲を得するを、名けて非學非無學と爲すなり。非數緣滅は學無學に非ず。得も亦是の如し。無常の滅は、是れ學無學及與び非學非無學なり。得も亦是の如し。學因に就いて說かば、之を名けて學と爲し、無學に就いて說かば、名けて無學と爲し、有漏に就いて說かば、名けて非學非無學と爲すなり。第八に、約して三斷に就いて分別す。數滅は不斷なり。無爲法なるが故に。彼得は不定なり。或は修道斷なり、或は是れ不斷なり。有漏等智の數滅が家の得は、是れ修道斷なり。其緣縛を斷ずる、無漏聖智の數滅が家の得は、是れ其不斷なり。非數緣滅は體是れ不斷なり。無爲法なるが故に。彼得は一向に是れ修道斷なり。無常の滅は備に三種を具す。見惑の壞滅は是れ其見斷なり。修惑の壞滅は是れ其修斷なり。無漏の壞滅は是れ其不斷なり。得も亦三種あり。前に准じて知るべし。第九に、約して道と果とに就いて分別す。數滅無爲は是れ其道果なり。乃至等智の數滅無爲は道の爲に印證せらる。通じて道果と爲す。彼得は或は道、或は是れ道果なり。或は復道に非ず、亦道果に非ず。無漏の因中の數滅が家の得は、之を名けて道と爲し、果中の得を名けて道果と爲す。有漏等智の數滅が家の得は道に非ず、果に非ず。非數緣滅は是れ道果に非ず。彼得は道に非ず、亦道果に非ず。無記法なるが故に。無常の滅は或は是れ道にして、或は道果に非ず。謂ゆる向中の無常の滅なり。彼聖道の與に共有因と爲るが故に、通じて道と名く。或は是れ道にして、亦是れ道果なる有り。果の中無常なり。或は道に非ず、亦道果に非ざる有り。有漏の無常

なり。彼得も亦爾なり。第十門の中には、諦に約して異を辨ず。數滅無爲は是れ其滅諦なり。等智の滅處は道の爲に印證せらる。通じて亦滅と名く。彼得は是れ其苦集及び道の三諦の所攝なり。有漏の等智の數滅が家の得は、是れ苦集諦なり。聖滅が家の得は、是れ其道諦なり。非數無爲は是れ滅諦に非ず。得は苦集諦なり。無常の滅は是れ苦集道の三諦の所攝なり。得も亦是の如し。多少不同共義是の如し。

【一五】三無爲を三性に約して分別す

(一五)第五に、約して三性に就いて分別す。性は、謂はく、善惡無記の法なり。義別に五有り。一には體に就いて分別す。數滅は唯善、餘の二は無記なり。二には人に對して分別す。順益を善と名け、違損を惡と稱し、損益に非ざる者を說いて無記と爲す。若し是義に從はば數滅は唯善なり。順益するを以ての故に。虛空無爲は一向無記なり。損益に非ざるが故に。非數無爲は、義三性に合す。三塗の苦報の非數滅は順益の義有り。義說して善と爲す。未來樂果の非數滅は違損義に有り。義說して惡と爲す。餘は損益に非ず。義說して無記なり。三には理に對して分別す。理に順ずるを善と名け、理に違するを惡と名く。違順に非ざる者は說いて無記と爲す。若し是義に從はば、數滅は唯善なり。其れ相を離れ理に順じて成ずるを以ての故に。餘の一は無記なり。違順に非ざるが故に。四には因に對して分別す。善因の得するをば、之を名けて善と爲し、不善因の得するをば名けて不善と爲す。違順二種の因の爲に得せざるを名けて無記と爲す。若し是義に從はば、數滅無爲は一向に是れ善なり。善因得するが故に。虛空無爲は一向無記なり。善惡二因の爲に得せざるが故に。非數

【二六】第六段に三無爲を漏無漏に就いて分別す。

無爲は義三性に通ず。戒施等の故に。惡をして起らざらしむ。之を名けて善と爲す。邪見等の故に、善をして生ぜざらしむ。之を名けて惡と爲し、餘を無記と名く。五には果に對して分別す。能く樂報を生ずる、之を名けて善と爲し、苦を生ずるを惡と名け、餘を無記と名く。若し是義に從はば、三無爲の法は俱に是れ無記なり。生因と作りて得果を記せざるが故に。

(二六)第六に、有漏無漏を分別す。釋するに四義有り。一には體、是れ漏なるが故に、名けて有漏と爲し、餘を無漏と名く。若し是義に從はば、三無爲の法は悉く是れ無漏なり。體は漏に非ざるが故に。二には漏を斷じて得るが故に、名けて無漏と爲し、餘を有漏と名く。若し是義に從はば、一切の數滅は是れ其無漏、餘は皆有漏なり。三には無漏智の爲に證得せらるるが故に、名けて無漏と爲し、餘は皆有漏なり。若し是義に從はば、虚空、非數は一向に有漏なり。數滅は不定なり。無漏智に爲つて障を斷じて得る者は、一向無漏なり。世俗智に爲つて障を斷じて得る中に是有り、非有り。直爾の等智は障を斷じて得る者、是れ其有漏なり。等智斷じ竟つて、無漏智の爲に重ねて印證せらるる者は、判じて無漏に屬す。四には無漏智の爲に障を斷じて得る者を、名けて無漏と爲し、餘を有漏と名く。此に據つて以て論ぜば、毘曇法の中に、數滅無爲に是有り、非有り。聖智の斷得は是れ其無漏なり。等智の斷得は是れ其有漏なり。非數滅の中に是有り、非有り。無漏智を用て煩惱を斷ずるが故に、餘の業苦の應に起るべきを起らざらしむ。是れ其無漏なり。餘の非數滅は

【一七】以下、第七段に三無爲の有無を明す。

是れ其有漏なり。虛空無爲は一向に有漏なり。成實、大乘は、數滅無爲は一向無漏なり。餘の二無爲は一向に有漏なり。有漏無漏は具に辨ずること是の如し。

（一七）第七門の中に、有無を分別す。諸論不同なり。毘曇法の中には、三無爲法は一向に是れ有なり。何が故に是の如くなる。彼宗の中には無は心を生ぜず。三無爲法は心の所緣と爲りて能く心を生ずるが故に、明かに知んぬ、是れ有なりと。問うて曰はく、『若し有ならば、何が故に經の中に說いて無爲と爲す。』『此に無と言ふは他の有爲を無にす。無爲を無にするに非ず。無に非ざるを以ての故に。涅槃を謗ずる者を名けて邪見と爲し、大罪報を得。『成實』の所說は三種の無爲並に是れ無法なり。人の手無きが如し。是中、更に復何の有すべき所かあらん。又復經の中に說いて無爲と作す。明かに知んぬ。是れ無なることを。問うて曰はく、『若し無ならば、云何が心を生ずる。』釋して言はく、『彼宗は無法を緣じて心を生ずることを得。故に是無を妨げず。人の夢中に見る所の境界、悉く是れ無法なるが如し。故に知んぬ、無を緣じて亦心を生ずることを得。』又問はく、『若し無ならば、涅槃を謗ずる者、何が故に罪を得る。』釋して言はく、『煩惱は其れ實に盡滅す。謗して不盡と言ふは滅の義に違す。是故に罪を得。有を謗ずるに由つての所以に罪を得るに非ず。有無の兩競備に『成實』『涅槃』の中に說くが如し。大乘法の中には義說不定なり。事に就いて以て論ずれば、是れ無と言ふことを得。故に經に說いて言はく、『虛空無なるが故に不生不滅なり』と。餘の二、類して然なり。是れ無なるを以ての故に經に無爲と名く。理に望めて辨

【一八】以下、第八段に常無常を以て三無爲を分別す。

ぜば、此三は乃ち是れ待對の法なり。別體有ること無し。是れ有と言ふことを得。故に『地持』に言はく、「有爲無爲は之を名けて有と爲し、我我所無きは之を名けて無と爲す」又、『地經』に說かく、「虛空界集り、無爲界集り、涅槃界集る」若し無法ならしむれば、何の所集を知る。良に大乘は定有に非ざるを以ての故に、有の定執を破す。故に『涅槃』に言はく、我諸の弟子我意を解せず。唱へて言はく、「如來は三無爲一向定有と說きたまふ」と。定無に非ざるが故に、無の定執を破す。故に『涅槃』に言はく、「我諸の弟子我意を解せず。唱へて言はく、「如來は三無爲一向定無と說きたまふ」と。斯を以て準驗するに、有無の義以て偏に定め難し。有無是の如し。

(一八)第八に、常無常を以て分別す。小乘法の中には、三無爲は一向定常と說く。大乘法の中に義別して五有り。一とは相に隨つて分別す。三無爲の法は倶に皆是れ常なり。不生滅の故に。二には本に望めて以て釋す。虛空は本有なれば、一向に是れ常なり。餘の二種は事を滅して方に有なれば、義無常と說く。是終盡を名けて無常と爲すに非ず。三には終に望めて以て論ずれば、數滅は是れ常なり。餘の二は無常なり。數滅無爲は理を證して而も成ず。一び得て永く寂なるが故に、名けて常と爲す。餘の二は情有なり。理を得れば則ち捨なるが故に無常と曰ふ。故に『大集』に云はく、「虛空は情有なり。心を離るれば則ち無なり。是故に無常なり」と。虛空既に然なり。非數同じく爾り。問うて曰はく、「理を得て若し虛空を捨すれば、諸佛菩薩は何を所依と爲す。」釋して言はく、『空を捨して眞如に依る。

眞如を離れて外に更に所依無し。故に『華嚴』に云はく、「普賢菩薩は如如に依つて佛國に依らず」と。虚空も亦是れ佛國の所攝なり。「四には法を攝して情に從はば、三倶に無常なり。妄心に從つて起盡有るを以ての故に。問うて曰はく、『經に說かく、「虚空無爲は不生不滅なり」と。今云何ぞ、心に從つて起盡すと言ふや。』釋して言はく、『以有り。心に隨つて現ずる時生滅せず。故に名けて無爲と曰ふ。無爲を以ての故に不生不滅なり。理を以て之を論ずれば、心外に空無し。但是心有なり。故に空は心に隨つて起盡ありと說くことを得。故に馬鳴の言はく、「一切の色法は本來是れ心なり。心外に色無く、亦虚空無し」と。心外既に無なり。寧ぞ心に依らざらんや。心に依るを以ての故に、心に隨つて起盡あり。虚空既に爾り。數非數滅の理も亦同じく然り。』云何が起有る。人の夢中に虚空界を見、諸法の滅を見、煩惱の盡くるを見るが如く、悉く是れ心起なり。無爲も同じく爾なり。皆妄心の起なり。故に『地經』の中に說かく、「虚空界集り、無爲界集り、涅槃界集る」と。云何が盡有る。人の夢中に見る所の空等は、寤る時悉く捨するが如し。無爲も同じく爾なり。妄息みぬれば皆捨す。問うて曰はく、「一向に言ふ、虚空と非數とは情有の法なるが故に、理を得れば則ち捨するを、名けて無常と爲す。數滅無爲は理を證して而も成ず。一び得て永く寂なり。之を名けて常と爲す。今云何が數滅無爲も亦心に隨つて盡くと言はん。」「釋に兩義有り。一には妄を簡びて眞に異にす。數滅の中に妄有り、眞有り。緣治の斷得は之を名けて妄と爲し、實を證して妄を捨するを、說いて以て眞と爲す。前に常と言ふは、是

れ眞の數滅なり。此に盡と言ふは、是れ妄の數滅なり。故に『地經』に言はく「一人の夢中に身河に隨するを見て、大いに方便を施し、此河を出んと欲して忽然として便ち寤つて、即ち一切に勇猛の掾事を離るるが如し」と。夢中に河に隨するは煩惱に在るに喩へ、夢中に河を出づるは涅槃を得るに喩へ、寤るをば實證に喩ふ。夢中の出沒は寤る時悉く捨す。明かに知んぬ、妄滅は實を得て皆捨することを。二には情實相望めて、義に隨つて分別す。情に據つて實に望むれば、情の外に實有り。實は得て情を捨するを、以て數滅と爲す。是故に數滅は一び得て永く常なり。實を證して返つて望むれば、由來情無し。知んぬ、何の所斷をか今の數滅と爲さんを。故に常に非ずと說く。故に『地論』に言はく「自性常寂とは、先に染有りて後時に離るるに非ざるなり」と。「第五に法を攝して實に就いて分別す。中に於て二有り。一には實性に就く。三無爲の法は常無常に非ず。實に據れば本無なり。知んぬ。復何を說いてか常無常と爲さん。二には實用に就く。三無爲の法は、亦常無常なり。用は心に隨つて現ずるを、名けて無常と爲す。時として現ぜずといふこと無し。故に說いて常と爲す。是義如何。『地經』に說くが如し。菩薩は、十身を以て空と作し、空もて十身と作し、或は自身の一毛孔の中に於て虛空界を現じ、或は復現ぜず。是故に虛空無常と言ふことを得。菩薩は常に虛空三昧に住して、一切の法をして悉く空界と爲さしめ、時として暫く廢すること無し。故に常と言ふことを得。龍樹の說くが如し。菩薩或は滅盡三昧に入つて、三世の法をして悉く皆滅盡せしめ、或時は彼不滅三昧に入つて、三世の

【一九】以下、第九段に約して四無に對して共に相收攝す。先づ四無を明す。

【攝相等】次に攝相中兩門ある中初に四無に就いて三を辨ず。一に已有に就いて明す。

法をして皆悉く不滅ならしむ。夢の所見の如し。故に非數無常と言ふことを得。滅三昧に入つて、時として滅せずといふこと無し。是故に非數は是れ常と言ふことを得。菩薩有時には煩惱を斷ずることを現じ、有時には現行す。是故に數滅無常と言ふことを得。菩薩彼寂靜三昧に住して、畢竟じて永く諸の煩惱等を寂す。是故に數滅は是れ常なりと言ふことを得。常無常の義具に辨ずること是の如し。

(一九)第九門の中、約して四無に對して共に相收攝す。四無と言ふは『涅槃』に說くが如し。一には已有の無、二には未有の無、三には互無、四には畢竟無なり。起し已つて謝往し、現に今法無きを已有の無と名け、當法の未だ起らざるを未有の無と名く。牛の中に馬無く、馬の中に牛無し。是の如きの一切を名けて互無と爲す。龜に毛無く、兎に角無きが如き等、是の如きの一切を、畢竟無と名く。四無是の如し。攝相云何。中に於て略して兩門を以て分別す。一には四に就いて三を辨じ、二には三に就いて四を辨ず。初門の中に就いて、先に已有に就いて三無爲を辨ず。宗別不同なり。『毘曇』の如きに依らば、已有の無は、三無爲に非ず。何が故に是の如くなる。過去の法は當時滅壞す。是れ四相の中の無常の滅なり。故に無爲に非ず。謝往し已竟つて往成して過に在るは、是れ過去の有、復無爲に非ず。彼過去の法は現に集用無し。是れ共有爲虛空の所攝なり。故に無爲に非ず。問うて曰はく、『毘曇』に說かく、「現得有りて、過去世の煩惱染業を得す。現得を斷ずるが故に、過去世の煩惱と業とをして行人に屬せざらしむ」と。此數滅は是れ、已有の無なり。云何が說い

て、已有の無は無爲に攝せずと言ふ。』釋して言はく、『彼宗復現得を斷ずるが故に、過去世の煩惱染業をして行人に屬せざらしむと宣說すと雖も、而も過去世の煩惱と業とは體常に在る有り。故に無爲に非ず。』問うて曰はく、『「毘曇」に說かく、「現得を斷ず」と。是の如きの現得斷滅せられ已るを名けて數滅と爲す。此數滅は是れ已有の無なり。今云何が、已有の無は三無爲に非ずと言ふや。』釋して言はく、『彼現得を斷ずと說くは、但現得をして後を生ずること能はざらしむ。得の體を斷ぜざるが故に、彼得の體斷ぜられ已つて過去を謝滅すと雖も、而かも數滅に非ず。成實法の中には、過去の法、當時滅壞するは、是れ無常の滅なり。『毘曇』と同なり。謝滅し已竟つて今望むるに全く無なり。此無の處は是れ虛空の攝なり。彼宗は過去未來の二世は無と宣說するが故に。』問うて曰はく、『已無何が故に、非數滅の攝と名けざる。』釋して云はく、『非數は但未來未起の法を滅するが故に。』『此に云何が知る。』『毘曇の非數は但未起を滅す。『成實』には非せず。明かに知んぬ、共に用なることを。』問うて曰はく、『何が故に、已有の無を數滅と名けざる。』『一切の聖道は但未來を遮し、已起の法は斷ずべからざるが故に。』問うて曰はく、『現に解す、過去の因を斷じ、未來の果を遮するを名けて斷滅と爲すと。今云何が、但未來を遮して過去を斷ぜずと言ふ。』『此れ上の釋の如し。過因已に滅して現に斷ずべき無く、但未來を遮して起らざらしむる時、彼過因をして牽の義成ぜざらしむるを過因を斷ずと名く。理實は現に過因の斷ずべき無し。大乘法の中には、『成實』と同じ。』問うて曰はく、『大乘は同體の惑を斷ず。同體の惑

【次に未有等】二に未有に就いて明す。

【次に等】三に互無に就いて明す。

は智と倶に現じ、斷ぜられて謝往す。即ち是れ數滅なり。是の如きの數滅は是れ已有の無なり。何んが說いて、『成實』と同じく已有の無は皆數滅に非ずと言ふ。』釋して言はく、『大乘は同體を斷ずとは、但此れ惑の生後の義を斷ず。惑體を斷ぜざるが故に此自體の無明の盡くる處も亦數滅に非ず。』問うて曰はく、『何が故に、惑體を斷ぜざる。』『惑體無常にして自然に滅壞す。斷を假らざるが故に。』是已有竟る 次に未有に就いて三無爲を辨ず。宗別不同なり。毘曇法の中分別に三有り。一には未來當起の法、現今未だ起らず。復未起なりと雖も性有にして當に在り。此未來の有は無爲の攝に非ず。二には未來應起の法、現在に有るを以て、見修二道彼をして永滅せしむ。是れ數滅の攝なり。三には未來應起の法、餘の緣力の故に、其をして起らざらしむ。是れ非數滅なり。成實法の中未有の無は三無爲に攝す。一には當に起るべくして未だ起らざらしむ。即ち此れ無法、是れ虛空の攝なり。二には當に起るべきに、道力を以ての故に、其をして起らざらしむ。是れ數滅の攝なり。三には當に起るべきに餘の緣力の故に其をして起らざらしむ。是れ非數滅なり。大乘法の中には未有の無は相『成實』に同じ。此未有竟る 次に互無に就いて三無爲を辨ず。宗別不同なり。毘曇法の中には、有爲の上に互に他法無し。其說く處に從はば有爲の所攝なり。三無爲の上に互に他法無し。亦說く處に從はば三無爲の攝なり。成實法の中には、有爲の上に互に他法無し。是れ虛空の攝なり。彼有爲には無を攝せざるを以ての故に、三無爲の上に互に他法無し。義は則ち不定なり。若し虛空の中に互に他法無ければ、是れ虛空の攝なり。數

滅の上に互に他法無き義に兩兼有り。一には所滅の諸煩惱等に望めて以て互無を說く。是れ數滅の攝なり。正しく彼無を數滅と爲すが故に。二には餘法に望めて以て互無を辨ず。是れ虛空の攝なり。彼法を無くして數滅と爲さざるが故に。非數滅の上に互に他法無き義に亦兩兼あり。一には所滅に望めて以て互無を辨ず。非數滅の攝なり。正しく彼法を無くして非數滅と爲すが故に。二には餘法に望めて以て互無を辨ず。是れ虛空の攝なり。彼法を無くして非數滅と爲さざるが故に。問うて曰はく、「何が故に、有の上に他を無くするは有爲の攝に非ず、空の中に他を無くするは卽ち虛空の攝なる」。釋して言はく、「有の上に互無を辨ずるは、有に附いて無を說く。彼無を用て以て有と爲さず。故に有法に攝せず。空の中に他を無くするは、正しく此無を說いて虛空と爲す。故に虛空の所攝なり。」問うて曰はく「何が故に、空の中に他を無くするは虛空に攝せしめ、餘の無爲の中に互に他法無き、或は是れ數滅非數滅の攝、或は虛空の攝なる。」釋して言はく、「虛空は是れ其寬なるが故に空の中に他無きは全く虛空の攝なり。餘の無爲の中、其所滅を除いて互に他法無きも、亦虛空の攝なり。餘の二は狹なるが故に、唯所滅に望めて以て互無を說く。是れ其數滅非數滅の攝なり。大乘法の中、若し有爲、虛空無爲、非數無爲に就いて以て互無を辨ずれば、『成實』と同じ。若し數滅に就いて、以て互無を辨ずれば、麤『成實』に同じく、實を窮むれば別異なり。言ふ所の異とは、大乘法の中に說く、一切の法は但是れ心の有なり。夢の所見の如し。心生ずれば法生じ、心滅すれば法滅す」と。涅槃を得る時、妄心息むが

【次に等】四に畢竟無に就いて明す

故に、心の所見に隨つて一切法滅す。故に數滅の中に互に他法無し、皆是れ數滅なり。』問うて曰はく『若し涅槃を得る時諸法皆滅せしむれば、便ち衆生無し。佛、何の所化かあらん。』釋して言はく『凡に據つて以て諸佛に望むれば、佛、生を化すと謂ふ。佛に就いて佛を論ずれば、佛の生に異ること無く、生の佛に異ること無し。佛の生に異ること無くんば則ち能化無し。生の佛に異ること無くんば、亦所化無し。故に經に說いて言はく「平等法界なり。佛、生を度せず。衆生分別して佛、生を度すと說く」と。』『此互無竟る』次に畢竟に就いて三無爲を辨ず。宗別不同なり。若し『毘曇』に依らば、龜に毛無き等は、事に就いて無を說く。即ち彼事に攝す。彼宗は無を緣じては心を生ぜざるが故に、三無爲の中に、畢竟じて其生住異滅色心等の法無きは、還つて即ち是れ彼三無爲の攝なり。問うて曰はく『彼三無爲の中に就いて生住等無きは、應に是れ互無なるべし。今云何が、是れ畢竟無と言ふ。』釋して言はく『義有り。若し其餘の有爲法の中の生住滅等に望めて以て其無を說かば、是れ互無の攝なり。若し虛空、數、非數滅の體は生等無しと說かば、是れ畢竟無なり。兎に牛羊等の角無きが如きは、是れ其互無なり。兎に自ら角無きは、是れ畢竟無なり。若し諦理に就いて畢竟じて我人等無しと宣說すれば、諦理の所攝なり。『成實』の所說は龜に毛無き等の事の上に事無きは、是れ虛空の攝なり。三無爲法の自體、畢竟じて生住等無きは、還つて即ち是れ彼三無爲の攝なり。一切法の中畢竟じて性無きは、第一義の攝なり。第一義の中に畢竟じて一切の諸相無きは、當に知るべし、亦是れ第一義の攝なり。大乘法の中

【次に等】次に三無に就いて四無を辨ず。

には、若し世事、虚空、非數に就いて畢竟無を説かば、『成實』と同じ。若し數滅に就いて畢竟無を説かば、亦數滅の攝なり。中に於て分別せば、麁は小乘に同じく、細は則ち不同なり。不同とは云何。小乘は、未だ一切の法、畢竟寂滅して、以て涅槃を成ずと見ることと能はず。故に『涅槃』の中に但自體の生住滅等無し。畢竟じて一切の相無きこと能はず。大乘法の中には、一切の法、畢竟寂滅して以て涅槃を成ずと見るが故に、涅槃の中に畢竟じて一切の世相無し。故に『涅槃』に云はく、「世相と涅槃と終に相對せず」と。涅槃を得る時、涅槃の外に世法有ること無し。涅槃に對するが故に數滅是の如し。一切法の中に畢竟じて性無し。畢竟じて相無きは第一義の攝なり。上來此に至るまで、四無に歷就して三無爲を辨ず。此一門竟る 次に三無に就いて以て四無を辨ず。先に虚空に就いて以て四無を辨ず。宗別不同なり。毘曇法の中、虚空無爲は二無の所攝なり。一には互無、二には畢竟無なり。空の中に餘の色心等の事無きは、是れ共互無なり。空の體、畢竟じて生住滅無きは、是れ畢竟無なり。已有と未有と、此二無は虚空に攝せず。備に前に釋するが如し。『成實』大乘は所説の虚空に皆四無を具す。義上に辨ずるが如し。次に數滅に就いて以て四無を辨ず。數滅の中に、具に三無を攝す。謂ゆる、未有と互無と畢竟となり。當來世の中に染法起らざるは、是れ未有の無なり。餘の世事無きは、是れ共互無なり。是數滅の法自體、畢竟じて生住滅無きは、是れ畢竟無なり。已起の法は滅すること能はずと謂ふ。故に已有の無は數滅に收めず。非數無爲も亦三無を具す。數滅と同じ。但餘緣を藉りて見修二道の對治に

【三〇】以下、第十段に三無爲を四諦に約して辨ず。

依らず、以て異と爲すのみ。

（三〇）第十に、約して四諦に就いて分別す。苦集滅道は是れ其四諦なり。若し『毘曇』に依らば、數滅無爲は體性不定なり。或は滅諦の攝或は復攝せず。差別に四有り。一には聖人の聖智もて結を斷ずる所得の數滅は、一向滅諦なり。二には聖人の等智もて結を斷ずるは彼無漏と同じく、治修なるが故に、所得の數滅も亦是れ滅諦なり。三には凡夫の等智もて結を斷ずるは其數滅を得て後聖道に入る。重ねて聖智の爲に印證せらるるが故に、亦是れ滅諦なり。云何が印證する。人有つて、先に外の凡夫に在る時、世俗の智を用て欲界の結を斷ず。或は六品を盡くし、或は九品を盡して後見道に入り、第十六の道比智に至る時、無漏の得生じて、彼凡の時の所得の無爲を得するを、名けて印證と爲す。若し凡に在る時六品を斷ずる者は、道比智に至つて第一の須陀洹果を證せず。超えて第二の斯陀含果を證す。先に凡に在る時九品を斷ずる者は、道比智に至つて須陀及び斯陀果を證せず。超えて第三阿那含果を證す。何が故に、唯欲界の結の或は六、或は九を斷ずるを、聖智の所印と說いて、餘品を說かざる。欲界の結、六品、九品を斷ずるは、應に果を證すべき處なるが故に聖印と爲す。餘は果處に非ず。是を以て印せず。問うて曰はく、『聖智緣ずるが爲の故に印するや、當に緣せざるべしとや爲ん。』釋して言はく、『緣ぜず。』云何が知ることを得る。道比智心は上界の道を緣じて、而も欲界の煩惱無なる處を印す。故に知んぬ、緣ぜざるを。此第三竟んぬ。四には凡の時等智もて結を斷ずるは、數滅を得と雖も、聖道に入らず。聖

【三】義聚中第九段に四空の義を明すに兩門分別あり第一に辨相。

智の爲に印證せられざるが故に、是れ滅諦に非ず。數滅無爲の體性是の如し。若し境界と作さば、苦集道の三諦の與に境と爲る。涅槃を謗する者、涅槃有りと聞いて則ち苦惱を生ず。故に苦の境と爲す。邪見等緣ずるが故に集の境と爲す。聖智緣ずるが故に能く道の境と爲す。虛空と非數とは體四諦に非ず。若し境緣と作さば、唯苦集二諦の與に境と爲る。滅道の境に非ず。滅は緣智に非ざるが故に、滅の境に非ず。道諦は無記の無爲を緣ぜざるが故に、道の境に非ず。『成實』大乘は數滅無爲一向に是れ其滅諦の正體なり。若し境界と作さば『毘曇』と同じ。虛空と非數とは體四諦に非ず。能く苦集滅道諦の與に境と爲る。有を樂ふの者は、無を緣じて惱を致す。故に苦の境と爲る。緣じて諸見、貪瞋癡等を起す。故に集の境と爲る。之の無性を緣じて、破して以て實に入る。故に道の境と爲る。三無爲の義、之を辨ずること麁爾り。

四空の義に兩門分別あり。相を辨ず一。相を攝す二。

（一）四空の義は『大品經』に出づ。言ふ所の空とは、理の別目なり。衆相を絕するが故に、名けて空と爲す。空は義に隨つて別なり。以て具に陳べ難し。今一門に據つて且く四種の四名を論ず。是れ何ん。一には法相空、二には無法空、三には自法空、四には他法空なり。四が中の前の二は法の有無を遣り、後の兩種は情を破し、理を顯して、初の二門を成ず。法相空とは、法の有相を破す。一切の世諦の有爲無爲を通じて法相と名く。此法相は

【龍樹の等】大智度論四十六。

無法を法と爲し、法は非法に卽するが故に、名けて空と爲す。其れ猶世間の陽炎の水は、水無きを水と爲し、水、水無きに卽するがごとし。諸法此に像る。故に龍樹の言はく、「一切の法中に自相得べからざるを法相空と名く」と。問うて曰はく、『世諦の無爲空は、應に是れ第二の無法相空なるべし。今云何が、是れ法相空と言ふ。』釋して言はく、『世諦の無爲は彼理無に對すれば、亦是れ其有なり。是故に此空を法相空と名く。故に『地持』に云はく、「有爲無爲、之を名けて有と爲し、我我所無きを名けて無有と爲す」と。『問うて曰はく、『無爲應に名けて無と爲すべし。云何が有と稱する。』『此事の無相は彼此有るを以ての故に、名けて有と爲す。無法空とは、法の無相を破す。諸法理空を名けて無法と爲し、無法の體狀を無法相と名く。此無法相は有を破するが故に、立つるに別の自性無し。故に名けて空と爲す。是を以て經に言はく、「無爲法相は不可得なるが故に、無法相空と名く」と。』問うて曰はく、『如來、常に無生無住無滅を以て無爲法と說く。今云何が無法相空と言ふ。』『龍樹釋して言はく、「生を對破するが故に無生を宣說し、住を對破するが故に無住を宣說し、滅を對破するが故に無滅を宣說す。此等皆生住滅の邊に從つて、其名字を得。別の自性無きが故に、名けて空と爲す」と。又說かく、「因緣非無の法は、之を以て無と爲す。良に非無を以て無と爲すを以ての故に、無は卽ち非無なり。故に名けて空と爲す」と。』自法空とは、前の二空法性自寂にして、知慧に由りて强て觀じて空ならしめざるを明すを自法空と名く。中に於て明す所に其二種有り。一には世間性、謂はく、地は堅性、水は濕性

【三】第二に攝相して十八空との相攝を明す。

等なり。二には聚人性、謂はく、如法性、實際法等なり。此二法の性、同じく皆是れ空なるを、自法空と名く。世間性空は猶し是れ向前の法相空の如く、聚人性空は、猶し是れ向前の無法相の空のごとし、既に是れ前の空なり。何ぞ勞はしく重ねて說く。良に世人前の二空は觀に由るが故に空なり。法自空なるに非ずと謂ふを以て、彼見を破せんが爲の故に復之を說く。他法空とは、或は衆生有りて、如、法性、實際の外に更に餘法有りと謂ふ。之を名けて他と爲す。今彼を破せんが爲に、如等の外に更に他法無しと明すを、他法空と名く。　此一門竟る

(三)次に攝相を辨ず。彼十八空は、此四空の中の何の相の所攝なる。經論に文無し。義に准じて相攝せば麤亦知るべし。相狀は如何。法相空の中に十一空を攝す。謂ゆる、內空、外空、內外空、大空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、諸法空、有法空なり。此十一は齊く世法を空ずるを以て、是故に法相空の中に攝入す。問うて曰はく、「第六の無爲空とは、應に是れ第二の無法相空なるべし。何が故に、法相空の中に攝入する。」釋して言はく、「此空は但世諦無爲の法を空ず。是れ理無にあらず。是故に法相空の中に攝入す。」無法相空に別して三空を攝す。謂ゆる、空空、第一義空及び無法空なり。此三種齊く理無を空ずるを以て、是故に無法空の中に攝入す。自法空の中に唯性空を攝す。彼性空は、其諸法の體性自空にして觀力に由らざることを明す。故に性空と名く。此義彼自法空と同じ。是故に自法空の中に攝入す。此前の十五は相を分つて、別して攝し、餘の三は共して攝す。彼

【論】大智度論四十六。

法相空、無法相空は、共して二空を攝す。謂ゆる、相空、無法有法空なり。相空の中に其自相及び同相空を明す。自相空とは、色等の空を明し、判じて第一法相空の中に屬す。同相空の中に共二種有り。一には世諦の苦無常等の同相空寂なることを明す。是空は法相空の中に攝入す。二には眞諦の同相理空を明す。是空は無法相空に攝入す。彼無法有法空の中に就いて、有法空は是れ法相空なり。無法空は第二の無法相空に攝入す。彼法相空及び他法空は、共して一種の不可得空を攝す。若し有法の自相得し叵しと說かば、判じて第一の法相空の中に屬す。若し眞如、法性等の外の邪見所立の微塵世性は、皆不可得なりと說かば、第四の他法空の中に攝入す。攝相是の如し。問うて曰はく、『此四と十八空と體性殊らずんば、十八空を說くに其義廣く足れり。何ぞ勞く更に此四空を說く。』『論に自ら釋して言はく、「聖人法を說くに凡そ四種有り。一には先略後廣、義を解せんと欲するが爲にし、二には先廣後略、受持し易からしめんが爲にし、三には先略後略、利根の者の爲にし、四には先廣後廣、鈍根の者の爲にす。」此れ一義に就いて以て利鈍を分つ。利根の人は少言にして能く解するが故に略說を爲し、鈍根の人は多言にして方に悟するが故に廣說を爲す。若し多義に對せば、利根の者の爲には先後俱に廣なり。彼能く受くるが故に。鈍根の者の爲には先後俱に略なり。受くるに堪へざるが故に。彼『大品經』は受持し易きが爲の故に、先に廣く十八空を說き竟りて、後四空を說く。自餘の廣略此に類して知るべし。四空の義之を辨ずること畢爾り。

【二三】義楽第十段に四優檀那の義を明すに三門分別あり先づ釋名。優檀那ムドラー（Mudra）印と翻ず。

【大智論】二十二

【二四】以下、第二に開合廣略。

四優檀那の義に三門分別あり。名を釋す一。開合廣略二。別に隨つて廣く釋す三。

(二三)第一名を釋す。四優檀那は『地持論』に出づ。名とは謂ゆる、一切行無常、一切行苦、諸法無我、涅槃寂滅なり。有爲の集起は之を目して行と爲し、行流して恒に非ざるを稱して無常と曰ひ、逼惱を苦と名く。行は前の釋に同じ。自體を法と名く。法は性實無きが故に、無我と曰ふ。何が故に、前の二をば一切行と云ひ、後門の中には諸法と說く。苦、無常は、止、有爲に在るを以て、是故に行と云ひ、無我は一切の法に通ずるが故に、諸法と說くなり。涅槃は無爲なり。恬泊なるを滅と名く。優檀那とは、是れ中國の語なり。此を名けて印と爲す。故に『大智論』に、法の無常と無我と涅槃とを明して三法印と名く。『成實』も亦爾り。法相指定して易からざるの義を印と名くるなり。名義是の如し。

(二四)第二門の中に、廣略不定なり。或は諸法を總じて、之を以て一と爲す。謂はく、一法界なり。一切の善惡無記、生死涅槃を統攝して、悉く其中に入る。故に論に說いて言はく、「法界大總相觀に入る」と。或は分つて二と爲す。謂はく、生死涅槃なり。此を以て統收するに、法として攝せざること無し。法に依つて人を辨ずれば、人も亦凡と聖とを出づること無し。凡聖の外に更に第三の非聖非凡無し。或は復法を分つて、之を以て三と爲す。謂はく、三自性なり。一には緣起、二には妄想、三には名けて成と爲す。前の二は生死、後は、謂はく涅槃なり。彼生死の中に、心境を出づること無し。境は自性無く、緣に從つて

【八自在】常樂我淨の四德の中、我德は自然を義とす。この自在に八義あるを八大自在我といふ、「涅槃經」二十二に詳し。

集生ず。故に緣起と名く。內心は眞ならず。說いて妄想と爲す。涅槃の法は體虛敗に非ず。自性成實なり。故に稱して成と爲す。或は分つて四と爲す。謂はく、此四門なり。苦無常等の四が中に、前の三は是れ生死の法、後の一は涅槃なり。無常と苦と生死に隔るべし。無我の理通ず。云何が之を說いて生死と爲す。然るに我と無我とは、法に隨つて不定なり。經の中に、或は生死は有我、涅槃は無我と說き、或は涅槃を以て有我と爲す。生死を無我と說き、或は復二俱に有我と宣說す。或は俱に無と說く。若し其情に就かば、生死は有我、涅槃は無我なり。生死の中に凡情は妄に計するが故に有我と說き、涅槃の中には聖智取を離るるが故に無我と說く。故に『地持』に云はく、「世間の生處皆著我に由る。若し著我を離るれば、則ち生處無し」と。若し其法に據れば、生死は無我、涅槃は有我なり。生死は虛無、又不自在なるが故に無我と說き、涅槃は眞實にして八自在を具するが故に有我と說く。是を以て經に言はく、「生死の法の無常と苦無我不淨と涅槃の法は常樂我淨なり」と。若し空理に據らば、二俱に無我なり。皆是れ緣起無性の法なるが故に。若し其實を論ずれば、二俱に有我なり。經の中に說くが如し。「二十五有に我有りや不や。佛の言はく、我有り。我とは、謂ゆる、如來藏の義なり。如來藏とは、謂ゆる佛性なり」と。此は是れ生死有我の義なり。今は一門に據る。故に無我を說いて生死と爲すなり。亦四が中に、初の二は生死、後の一は涅槃、無我は則ち通ずべし。蓋し是れ生死涅槃の理なり。『維摩經』迦旃延の中の如きは、法を分つて五と爲す。謂ゆる、無常、苦、空、無我、涅槃寂滅なり。前の無

我に就いて空門を分出す。卽ち是れ五なり。空と無我とは何の差別有りて兩門と爲す。此は前に說くが如く、經論不同なり。『阿毘曇』の中には、陰に我體無きを名けて無我と爲す。陰は我所に非ず。之を說いて空と爲す。『成實論』の中には、衆生空は之を名けて空と爲し、法空の義を說いて無我と爲す。『維摩』の中に、衆生空を名けて無我と爲し、法體空をば之を說いて空と爲すが如し。今は後の門に依つて、分つて兩種と爲す。故に五有るなり。若し『楞伽』に依らば、亦分つて五と爲す。謂ゆる五法なり。一には名、二には相、三には妄想、四には正智、五には如如なり。五が中、前の三は是れ生死の法、後の二は涅槃なり。亦前の三は是れ生死の法、次の一は涅槃、後の一は是れ其生死涅槃法の實性なるべし。此五義は、後五法三性章の中に具に廣く分別するが如し。又『維摩』の方便品の中の如き、法を分つて六と爲す。謂ゆる、生死無常、苦、空、無我、不淨、佛身常住なり。前に通じて六なり。佛身常住は、卽ち是れ涅槃不遷の義なり。又經の中に法を分つて八と爲すが如し。生死に四有り。謂はく、苦、無常、無我、不淨なり。涅槃に四有り。常、樂、我、淨なり。或は分つて十と爲す。生死に五有り。苦、空、無常、無我、不淨なり。涅槃に五有り。常、樂、我、淨及び有なり。或は十六を分つ。涅槃に八有り。一に常、二に樂、三に我、四に淨、五に眞、六に實、七に善、八に有なり。生死にも亦八あり。前に翻じて知るべし。若し廣く分別せんと欲せば、乃至無量なり。今は一門に據つて且く四を論ぜしのみ。

【一五】以下、第三門に先の別の四門に隨つて廣く辨ず先づ無常に就いて三分別あり、一にて釋名。

（一五）第三門の中には、上の四門に依つて次第に廣く辨ず。先に無常を釋す。無常に三有り。一には分段の無常、二には念の無常、亦は少時と名く。三には自性不成の無常なり。中に於て、略して三門を以て分別す。一には共名を釋し、二には共相を辨じ、三には通局有無の義を料簡す。分段と言ふは、六道の因果、三世分異するを名けて分段と爲す。分段恒に非ず。故に無常と曰ふ。念無常とは、念は、謂はく、心念なり。心道峻速なり。此念の頃を借りて法の時分を顯す。故に稱して念と爲す。經の中に說くが如し。一彈指の頃、臂を屈申する頃、瞬息の頃、是の如きの言は共色相に寄つて法の時分を顯す。或は一念、一刹那等と說き、心に寄せて以て顯す。良に有爲の生滅覺し難きを以ての故に、色心に寄せて共時分を顯す。念の義是の如し。有爲の念念遷流して、恒に非ざるを念無常と名く。言ふ所の自性不成實とは、向前の二種は前後遷變して共常相を破し、此性無常は共常相を破す。前の分段及與び念法幻化虛立して、體性自實無しと明すを性不成と名く。不成を以ての故に、共常性無し。故に無常と曰ふ。名義是の如し。體相云何。分段の無常は體相知んぬべし。念無常とは有爲の法、一念の頃、具に四相有り。初生、次住、終異、後滅、前後遷變す。故に無常と曰ふ。然るに此四相、經論不同なり。『毘曇』の中に明すが如き、有爲の法は共性羸劣にして自ら生じ、自ら住し、自ら異し、自ら滅すること能はず。要ず、同時の八相の法共に相推變するに賴つて、方に初生乃至終滅を得す。八相と言ふは、一念の色の如きは同時に即ち生住異滅の四大相の法と、及び四隨相と有り。此四隨相を亦小相と

【彼經】涅槃經二十一c

名く。彼大生の邊に一の小生有り。彼大住の邊に一の小住有り。彼大異の邊に一の小異有り。彼大滅の邊に一の小滅有り。故に八有るなり。然るに此八相、能に就いて名と爲す。能く他を生ずるを以ての故に、名けて生と爲す。乃至他を滅するが故に、稱して滅と爲す。法起る之を名けて生と爲し、乃至法謝するを說いて、名けて滅と爲すと謂ふには非ず。若し體性を論ずれば、三聚法の中、非色非心は不相應の攝なり。其行數を論ずれば、一一の中皆初生、次住、終異、後滅の義有り。然るに此八種は體性同時にして、用は卽ち不定なり。相狀の用は剋して必ず同時なり。法を遷するの用は、用に先後在り。大生の用の時には、能く八法を生ず。謂ゆる、能く所相の法體及び餘の七相を生ず。合して八と爲すなり。此八有爲は可生の義有り。是故に大生能く之を生ずるに堪へたり。無爲の法は可生の義無し。是故に大生 生ずること能はざるなり。卽ち此大生も亦是れ有爲にして可生の義有り。是故に彼小生の爲に之を生ぜらる。小生は唯能く大生を生じて餘法を生ぜず。是の如く次第に乃至大滅の起用の時は、能く八法を滅す。謂ゆる、能く所相法體と及び餘の七相を滅す。通じて八有るなり。此八の有爲は可滅の義有れば、大滅能く滅す。卽ち是れ大滅は亦是れ有爲にして可滅の義有り。是故に還つて小滅の爲に滅せらる。色の如き旣に然なり。一切の有爲、類するに皆是の如し。滅同じく相の爲に遷して、方に初生乃至終滅有り。『毘曇』是の如し。『涅槃經』の中も亦此說に同じ。故に彼經に言はく、「有爲の法は生性有るが故に、生能く之を生ず。虛空の法は生性無きが故に、生も生ずること能はず」と。又

【彼經】涅槃經二十八。

【經】華嚴經四十三。

彼經に言はく、「生能く法を生ず。自ら生ずること能はず。自ら生ぜざるが故に、生に由つて生生ず。生を生じて自ら生ぜず。復生に賴るが故に生ず」と。『成實論』の不相應品に廣く此義を非するが如し。彼論に宣說すらく、「法の起を生と名け、法の停を住と曰ひ、法の遷を異と稱し、法の謝するを滅と名く」と。法の外に別に諸相有りて、共に相推遷するを說かず。『地持』の中も亦此義に同じ。故に彼文の中に、廣く法の外に別に相を立つるを破す。各是れ聖教にして是非を定め難し。念無常の義麤況すること是の如し。言ふ所の自性不成實とは、法同時の同體の四相共に相破壞することを明す。法の自性無きが故に無常と曰ふ。是義云何。世法は虛幻にして一の定性無し。無性を以ての故に相は有、體は無なり。相有を生と名け、體無を滅と稱す。相有を生と名くるは、始起初出の生に同じからず。體無を滅と名くるは、終謝灰盡の滅に同じからず。此生と滅と、當に知るべし。即ち是れ十二緣の中の逆順の觀なり。經の中に說くが如し。「無明生ずるが故に、乃至老死と是れ此生相なり。無明滅するが故に、乃至老死と是れ此滅相なり」と。此生と滅と幻炎像立するの義を說いて住と爲す。生の後の遷停の住に同じからず。彼生滅等は復同體なりと雖も、性相卒に異なり。故に名けて異と爲す。又凡夫所取の實有に異なれば、亦名けて異と爲す。住の後の衰變の異に同じからず。四相是の如し。同一の體性は義に隨つて互に分つ。同體を以ての故に、住異滅を說いて之を以て生と爲す。住異滅の外に別の生性無し。生性無きが故に、生性成ぜず。還つて即ち此生住異滅の法を說いて、之を以て住

と爲す。生等の外に別の住性無きが故に、住性成ぜず。乃至彼生住異の法を説いて以て滅と爲すが故に、生等の外に別の滅性無し。滅無性の故に、滅性成ぜず。進退推求するに、畢竟じて一性の得べきこと有ること無し。故に自性不成實と曰ふなり。故に『維摩』に言はく、「不生不滅は是れ無常の義なり」と。良に斯に在るのみ。後經の所説は、生に卽し、滅に卽して無生無滅なり。是故に名けて不生不滅と爲す。彼一相の空中に就いて、無生滅と説くと謂ふには非ず。又『地持』に云はく、「眞實無言説の事を知らざれば、生有り、滅有り。無言の性を觀ずれば、一切無常なり」と。此文も亦性の無常の義を顯す。問うて曰はく、『無常に麁有り、細有り。生滅は是れ麁、不生不滅は是れ其細ならば、苦の中にも亦應に麁有り、細有るべし。逼惱は是れ其麁苦、無逼無惱は是れ細苦なりと言ふことを得るや不や。』釋して言はく、『亦逼惱は麁苦なるを得るの義在り。知んぬべし。然るに此逼惱は性の不壞を守りて、性無常に非ず。無常に非ざるが故に、性苦に非ざるが故に、義説して樂と爲す。實を以て之を觀れば、逼に逼の性無く、惱に惱の性無し。自性無安を方に微細自性の壞苦と名け、亦微細虛集の行苦と名く。體相是の如し。』「通局は如何。三の中前の二は大小通じて論ず。自性無常は大に有りて、小には無し。何が故に、是の如くなる。小乘の衆生は未だ法空を解せず。諸法の自性を破壞すること能はざるが故に、之を説かず。若し無常の義別三門なれども、小乘の中には但前の二有りて、第三を無からしめば、苦の中亦三なれども、小乘の中には亦應に二有りて、三苦を具せざるべし。釋して言はく、法門は

【經】　涅槃經十三

【次に等】　二に苦の義を辨ず。

各別不同なり。何ぞ一類すべけんや。無我の中義別に二有れども、小乘の衆生は但生空のみを解するが如し。豈亦三苦を類同することを得て、小乘も齊く二無我を得べけんや。義に斯理無し。不同を知ると雖も、何の所以か有る。若し總じて分別して言ふことを得ば、苦は緣に對して生ず。其相麤なるが故に、小乘の衆生は具に能く解知す。故に小乘の中には具に三苦を明す。然るに無常とは法體を遷滅す。法體の義微細にして識り難ければ、小乘の衆生は精く究むること能はず。故に小乘の中には第三の自性無常を明さず。若し別して之を論ずれば、三苦の義具に論ずるに三有り。一には緣に對して分別し、第二には緣に約し、體に就いて分別し、三には三種の無常に約して分別す。此義後の一切苦の中に具に廣く分別するが如し。初の兩門は相麤にして知り易ければ、小乘能く解す。後の一門は無常と同じ。小乘の衆生は但前の二をのみ解す。自體虛集微細の行苦は小乘解せざるが故に、小乘の中には自體虛集の行苦を明さず。是を以て經に言はく、「所說の苦諦は中智の所知なり。是苦を分別するに無量種有り。諸の聲聞、緣覺の所解に非ず。我彼經に於て竟に之を說かず」と。旨謂此に在り。無常の義麤況すること是の如し。（此一門竟る。）次に苦の義を辨ず。

苦義に三有り。謂ゆる、苦苦、壞苦、行苦なり。此三苦を辨ずるに、略して四門有り。一には緣に對して分別し、第二には緣に約し、體に就いて分別し、三には三種の無常に約して分別し、四には諸過相顯す。對緣と言ふは、緣に內外を別つ。內は謂はく、自心、外は、謂ゆる刀杖等の緣なり。外の中に復、二あり。一には違、二には順なり。違とは、謂ゆる

刀杖等の事の一切の苦具なり。順とは、謂ゆる己が身命財、親戚、類苦なり。緣別是の如し。彼違緣に從つて苦を生ずる者を名けて苦苦と爲す。刀杖等の緣能く內惱を生ず。其所生に從つて、說いて名けて苦と爲す。苦に從つて苦を生ず。故に苦苦と云ふ。彼順緣に從つて、離壞して惱を生ずるを名けて壞苦と爲す。內心境に涉るを說いて、名けて行と爲す。行を緣じて厭を生じ、行を厭じて苦を生ず。故に行苦と云ふ。第二に緣に約し、體に就いて別つとは、心性是れ苦なり。彼苦の上に加するに事惱を以てするに依つて、苦の上に苦を加ふ。故に苦苦と云ふ。斯に就て以て論ぜば、向前の三苦は此門の中に至り、通じて苦苦と名く。謂はく、性苦の上に前の苦苦、壞苦、行苦を加へて、通じて事惱と名く。有爲の法は念念に生滅して無常敗壞す。故に壞苦と名く。卽ち此有爲遷流を行と名く。行性不安の故に行苦と云ふ。三種の無常に約して別すと言ふは、彼三世分段の無常に就いて、苦苦を宣說す。心性は是れ苦なり。此苦の上に於て、彼三世分段の麤惱を加ふるを、名けて苦苦と爲す。又三世分段の麤苦を以て、法の性苦を顯すも、亦苦苦と名く、念の無常に就いて、壞苦を宣說す。卽ち是れ向前の第二門の中の行壞の兩苦なり。此門の中に至つて、同じく壞苦と爲す。彼自性不成の無常に就いて、行苦を宣說す。同體の四相共に相集起す。之を目けて行と爲す。虛集の行體は自性無し。行性無安の故に、行苦と名く。言ふ所の諸過互に相顯すとは、過に三種有り。謂はく、苦と無常と及與び無我となり。苦を以て苦を顯すを、名けて苦苦と爲す。此は事苦を以て、有爲の法は性是れ苦なりと顯すなり。無

【次に等】次に無我を明す。

【論】地持論。

【次に等】四に涅槃を辨ず。

【論】地持論。

【經】維摩經。

【二六】義聚第十一段に四悉檀を明す中に四門分別あり、一に釋名辨相。悉檀シッダーンタ(Siddhānta)は吉法義宗等と翻ず。宗要といふ意。

常の故に苦なるを、名けて壞苦と爲し、無我の故に苦なるを、名けて行苦と爲す。法は無我にして因緣虛集するを以ての故に行と云ふなり。苦の義是の如し。此兩門竟る。次に無我を辨ず。論の中に說くが如く、無我に二有り。一には人無我、二には法無我なり。此義前の無我章の中に、具に廣く分別するが如し。此三門竟る。次に涅槃を辨ず。論の中に說くが如く、涅槃に二有り。一には有餘、二には無餘なり。此義備に涅槃章に說くが如し。涅槃の義とは、直生死の因果を斷絕するに非ず。對治なる無處を涅槃の義と爲す。蓋し經に說くが如く、法本より然らず。今亦滅無し。是れ寂滅の義なり。此は是れ涅槃實相の義なり。四優檀那厥趣是の如し。

四悉檀の義に四門分別あり。名を釋し、相を辨ず一。其相を定別す二。通局の義三。相攝の義四。

（二六）四悉檀の義は『大智論』に出づ。悉檀と言ふは、是れ中國の語なり。此方の義に翻ずるに其名一ならず。『楞伽』の中の子注に釋して言ふが如く、或は名けて宗と爲し、或は名けて成と爲し、或は理と云ふなり。言ふ所の宗とは、釋するに兩義有り。一には法に對して宗を辨ず。法門無量なれども、宗要斯に在り。故に說いて宗と爲す。二には敎に對して宗を辨ず。敎別して衆しと雖も、宗歸して世界等の四を顯す。故に名けて宗と爲す。故に彼論に云はく、「四種の悉檀、總じて一切十二部經、八萬四千無量の法藏を攝す。皆是れ眞實にして、相違背すること無し」と。斯文に准驗するに、敎に望めて宗を說く。義乖返すること

【二七】第二に定んで共相を分つ。

と無し。故に稱して成と爲す。諸法の理趣なり。故に名けて理と爲す。宗別の不同は且く四種に分つ。一には世界悉檀、二には各各爲人悉檀、三には對治悉檀、四には第一義悉檀なり。世界と言ふは、論に釋して言ふが如く、法有り。因緣に從つて有り。別の自性無し。譬へば轅軸輻輞等の事、和合して車と爲るが如し。五陰の諸法和合して人と爲る。是の如く一切世界の故に有るを、世界悉檀の法と爲すなり。云何が名けて各各爲人と爲す。論に釋して言ふが如し。佛、人心の差別不同を觀じて、爲に法を說き、一事の中に於て、或は聽し、或は聽さず。佛、彼斷見の衆生の、後世の善惡業果を信ぜず、斷滅の見に墮するが爲に、便ち雜業、雜受の果報を說き、我を計する者の爲に、便ち業無く、報を受くる者無しと說くが如し。是の如き等の事を名けて各各爲人悉檀と爲す。云何が名けて對治悉檀と爲す。論に釋して言ふが如し。佛、衆生の心病の宜しき所に隨つて、爲に對治を說く。或は不淨を說き、或は慈悲を說き、或は因緣、分別、界、入、安波念等を說く。是の如きの一切を名けて對治と爲す。第一義とは、論に釋して言ふが如し。諸法實相は語言の道を過ぐ。心行處滅し、遍く所依無く、諸法を樂はず、初中後無く、不盡不壞なるを第一義と名く。四種悉檀の名相麤爾なり。

(二七)第二門の中、定んで共相を別つ。然るに彼四の中、世及び第一は當法に分別し、對治、爲人は化に隨つて異を辨ず。但法の中に就いて、性有り、相有り。故に二種を分つ。世及び第一は生死涅槃なり。因緣法相を名けて世界と爲し、如實法性を說いて第一と爲す。此

【二八】第三に共通局を明す。

別は知るべし。對治、爲人の別相は識り難し。是を以て釋する者種種不同なり。今義を以て相を分つ、亦知るべし。然るに彼一切二諦の諸法は人の爲にして、斯れ皆病を治せざること無し。但一切爲人の法の中に就いて、當に共門別なるべし。物の宜しき所に隨つて、病に應じて授與し、物の心患を治するを即ち對治と名く。即ち彼一切の對治門の中に、異門相望め、互に返じて同じからず。其爲人差別の故に爾なることを彰すを、即ち各各爲人悉檀と名く。諸陰に我人等無しと說いて、我の患を對治するが如し。或時には假名の我を宣說して、無の患を對治す。此は即ち是れ其對治の所攝なり。何が故に、二門互に返じて同じからざる。其爲人の不同を以ての故に爾なり。即ち是れ各各爲人の說なり。又經に說くが如し。「不淨觀門は貪欲の患を治す」と。三十三天の果報常樂我淨を宣說して、物をして願求せしめ、諸惡を捨離し、不善の患を治す。此は即ち是れ其對治の所攝なり。何が故に、二門互に返じて同じからざる。良に爲人の不同を以ての故に爾なり。即ち各各爲人悉檀と名く。是の如きの諸門此に類して知るべし。異釋するを得ること勿れ。

(二八)第三門の中、共通局を辨ず。世界悉檀は、其爲人及與び對治に通じて第一義諦に通ぜず。即ち世界差別法門を說いて、以て對治及び爲人と爲すが故に、世界悉檀は彼二の中に通ず。世界を第一義と爲すと說かず。是故に世諦は第一に通ぜず。處別なるを說いて、不通と爲すと謂ふには非ず。淺深異るが故に、不通と名くるのみ。第一義とは、分に彼各各爲人及び對治の中に通ずることを得、世界に通ぜず。良に第一義諦を宣說して物の心患を治する

【二九】次に第四に其相攝を明す。

を以て、是故に第一は對治に通ず。即ち第一に就いて、其爲人各各不同を彰す。或は說いて有と爲し、或は說いて無と爲し、或は復說いて非有非無と爲す。或は說いて我と爲し、或は無我と說き、或は復我無我に非ずと宣說す。是の如きの種種爲人差別なり。是故に第一は彼各各爲人悉檀に通ず。深淺別なるが故に、世界に通ぜず。對治爲人の二種相望するに、一向に相通ず。別の法無きが故に。

(二九)第四門の中、其相攝を辨ず。彼四の中に就いて、末を攝して本に從はば、要は唯二諦なり。謂ゆる世界、第一義なり。對治、爲人は判じて何の中に屬する。若し總じて之を分たば、對治爲人は判じて世諦に屬す。第一義に非ず。故に彼論に云はく、「前の三悉檀に通ぜざる所の者は、第一義に至つて一切皆通ず」と。明に知んぬ、第一は前の三種に非ず。義は隱滯無きが故に、名けて通と爲す。又彼論に言はく、「第一義を除いて諸餘の悉檀は、皆破壞すべし」と。明に知んぬ、餘の三は第一義に非ざることを。實を以て通じて論ずれば、二諦の中皆具に彼對治、爲人有り。具有の相備に上に辨ずるを以て、理實に旣に通ず。何が故に、論の中に第一義を說くに前の三に同じからざる。世界の中に彼對治、爲人の義を彰すこと顯なるを以ての故に、第一の中に隱して說かず。又彼論に第一義を說いて、前の三に異なることは、彼世界及び世界の中の對治、爲人に異る。第一義の中の對治、爲人に異りと謂ふには非ず。亦彼第一義の中の所有の對治、爲人の義に就くべし。化に約して異を辨

【三〇】義聚第十二段に四眞實の義を明す中、二門分別あり、先づ第一に釋名。

【體相は等】第二に其體相を明す。

すれば、世界に攝入す。實に據つて之を論ずれば、第一義に就いて明す所の對治、各各爲人は、即ち是れ第一にして世界に非ざるなり。悉檀の義略して綱網を擧ぐ。

四眞實の義に二門分別あり。名を釋す一。體相二。

（三〇）眞實義とは、法、情妄を絶す。名けて眞實と爲す。實深の所以に、之を目けて義と爲す。實義虛融して理在らずといふこと無し。法に隨つて異を辨ず。以て定算し難し。今一に隨つて宜しく二を彰し、四を論ずべし。言ふ所の二とは、一には實法性、二には事法性なり。言ふ所の四とは、一には世間所知、二には學人所知、三には煩惱障淨智所行處法、四には智障淨智所行處の法なり。此二と四とは、並に是れ義門なり、情に隨つて施設す。物の爲にせざること無し。今文相に依らば、前の二種は法に據つて以て分ち、後の四種は情に隨つて以て別つ。前の二の中に就いて、實法性とは、是れ眞諦なり。事法性とは、是れ世諦なり。眞諦の理は是れ法の體性なれば、實法性と名く。世諦差別之を目けて事と爲す。諸法自體なれば、事法性と名く。名義是の如し。

體相は云何。諸法の分齊差別に四有り。一には事、二には法、三には理、四には實なり。事とは、謂ゆる、地、水、火、風、色、香、味等なり。法とは、謂ゆる苦、無常等の法の緣數なり。理とは、謂ゆる、諸法相空なり。實とは、謂ゆる、非有非無の如實の法性なり。此四の同體、義に隨つて異に分つ。今此四に就いて、攝して二種と爲す。中に於て、

義に隨つて之を分つこと不定なり。若し凡聖の所知に據つて以て別たば、四の中の初の一は是れ事法性、餘の三をば實と爲す。初の一門は是れ凡の所知なるを以ての故に、說いて事と爲し、後の三は聖知の攝なるを以て實と爲す。若し有相無相に就いて分別せば、前の二は有相、說いて事性と爲し、後の二は無相、說いて實性と爲す。若し本末に就いて以て二を分たば、前の三を事と爲し、後の一を實と爲す。具に辨ずること是の如し。案ずるに『地持』の如きは、初に就いて分つなり。二相是の如し。四種は云何。即ち前の二種に就いて分別せば、離して四と爲すなり。前の事性に就いて、分つて二種と爲す。謂はく、世の所知及び學の所知なり。前の實性に就いて、亦分つて二と爲す。謂はく、煩惱淨所行處の法、及び智障淨所行處の法なり。事に精麤有り。故に兩門を別つ。理に淺深有り。是を以て二を分つ。亦事を分つて以て前の三と爲すべく、實を第四と爲す。世の所知とは、地、水、火、風、色、香、味等の一切種の事なり。世俗を通じて知るを世の所知と名く。學の所知とは、五明處等の事の中に微細なるは學に藉つて以て通ずれば、學の所知と名く。此前の兩門は事相不虛なるを說いて眞實と爲す。是れ事に就いて理實を彰すに非ざるなり。煩惱障淨所行法とは、謂はく、四眞諦なり。此義博深にして、世と學とは知らず。要ず煩惱を離れたる清淨の智は、方に能く照見す。智を擧げて法を別つ。是故に名けて煩惱淨智所行處と爲すなり。智障淨智所行法とは、謂はく、法無我なり。此理淵深にして餘智達せず。唯佛菩薩の無明を離れたる慧方に能く證見す。智を擧げて法を別つ。是故に名け

て智障淨智所行處法と爲す。此四義、廣く論に釋するが如し。且く共門に依つて、略して名を擧げて況す。

大乘義章 卷第二

大乘義章　卷第三

遠法師撰す

義法聚の中此卷八門有り。四諦の義、四緣の義、五果の義、六因の義、四空の義、五法三自性の義、六種相門の義、八識の義

四諦の義に九門分別あり。一に名を釋す、二に開合の辨相、三に染淨因果の分別、四に理事の分別、五に十六聖行の分別、六に有作無作有量無量の相對分別、七に同異の分別、八に虛實の分別、九に十諦の分別。

第一に名を釋す。苦集滅道を四聖諦と名く。逼惱を苦と名け、聚積を集と稱し、寂怕を滅と名け、能通を道と曰ふ。何が故に聖と名けて復諦と云ふ。『涅槃』に云ふが如し。「聖とは、謂ゆる、諸佛菩薩一切の聖人なり。聖に就いて諦を辨ず。故に聖諦と云ふ」と。何が故に、聖に就いて諦を辨ずる。良に、諦實は唯聖の所知にして、凡の能覺に非ざるを以て、聖の所知の者を方に諦と名く。故に聖に就いて之を辨ず。言ふ所の諦とは、世人一向に實を以て之を釋す。此れ一向に非ず。『涅槃』の中の如し。諦實兩別なるが故に、彼經に言はく、「苦有り、諦有り」と、實有り。直に苦の事を論ず。之を名けて苦と爲す。彼苦の中の因緣に就いて、有無法相謬らず。故に稱して諦と爲す。其本性を窮むるに有に非ず、無に非ず。之を說いて實と爲す。通相に之を釋すれば、實の故に諦と名く。實相は如何。今兩門を以て分別して之を釋す。一には法の深淺に隨つて實の不同を彰し、二には教の

【一】義法聚第十三段に四諦の義を明す中、九門分別あり、先づ釋名。

【彼經】涅槃經十三。

【實相は等】以下實相を明す中、初に隨法の實相、これに五あり、一に法相實。

【經】　遺教經。

【假實と等】　二に虚假實に就いて。

【空實と等】　三に空無實に就いて。

宗別に隨つて、實に異り有ることを明す。隨法と言ふは、法の淺深の義に五重を別つ。一には法相實、二には虚假實、三には空無實、四には自體實、亦は性實と名く。五には緣用實なり。法相實とは、苦集滅道の當相實に爾り。故に稱して實と爲す。彼苦諦の如し。凡夫は樂と爲し、聖は實に苦と觀る。故に名けて實と爲す。乃至道諦は、凡夫迷謬して妄に非道と謂ひ、聖慧之を觀じて實に是道なりと知る。故に稱して實と爲す。是を以て經に云はく、「苦とは實に苦なり。樂ならしむべからず。集は眞に是れ因なり。更に異の因無し。苦若し滅すれば、卽ち是れ因滅す。苦を滅するの道は、實に是れ眞道なり」と。是の如き等の法は、返つて情妄に對す。故に說いて實と爲す。假實と言ふは、苦集滅道は實に是れ因緣虚假の法なり。故に名けて實と爲す。中に於て分別するに、乃ち四種有り。一には因和合の假、別を攬りて總を成ず。二には法和合の假、苦、無常等の諸法相成ず。三には妄相虚假、虚空花の如く、有に非ざるを有と爲す。四には妄想虚假、苦集滅道の妄想假集して、夢の所見の如し。此四種同じく假實と名く。良に執は定んで眞實に非ざるを以ての故に、因緣虚假を名けて實と爲すなり。此に據つて返つて前門に望むれば、論ずる所は乃ち是れ諦相にして、是れ諦實に非ず。空實と言ふは、苦集滅道、理を以て之を窮むるに、實に是れ空寂にして本所有無し。故に名けて實と爲す。中に於て分別するに、乃ち五種有り。一には陰の上の無人の空、二には因和合の中の無性の空、三には法和合の中の無性の空、四には妄相虚無の空、五には妄想虚無の空なり。此五種、同じく空實と名く。斯に據つて

【體實と等】體實等に就いて。四に
【經】勝鬘經。

返つて前門に望むれば、說く所の因緣假有は、是れ其諦相にして、是れ諦實に非ず。體實と言ふは、苦集滅道、其本性を窮むるに、實に是れ眞實如來藏性なり。是を以て經に言はく「聖諦處に於て如來藏を說く」と。又『涅槃』の中に宣說すらく、「苦の實乃至道の實は、卽ち是れ佛性、常樂我淨なり」と。諦實此の如し。故に稱して實と爲す。中に於て分別するに、其二種有り。一には如實空、二には如實不空なり。如實空の中に二種の空有り。一には無相空。謂はく、有相に非ず、無相に非ず、非有相に非ず、非無相に非ず、有無倶相に非ず、一相に非ず、異相に非ず、非一相に非ず、非異相に非ず、一異倶相に非ず、自相に非ず、他相に非ず、非自相に非ず、非他相に非ず、自他倶相に非ず。是の如きの一切妄心の分別皆相應せず。二には無性空。恆沙の佛法、同一の體性、互に相緣集して、一法として別に自性を守ること有ること無し。故に名けて空と爲す。諸法に就いて之を說いて有と爲すが如し。諸法の外に別に一の有性として得べきもの有ること無し。還つて卽ち此有等の諸法を說いて、之を以て無と爲す。是諸法の外に別に一の無性として得べきもの有ること無し。還つて卽ち此有無等の法を說いて非有非無と爲す。有無等の外に別に一の非有非無の自性として得べきもの有ること無し。此を以て類知するに、一切の諸法畢竟じて無性なり。故に名けて空と爲す。空の義是の如し。不空と言ふは、如來藏の中に、本より已來二種の相を具す。一には如實心。謂ゆる、眞實阿梨耶識神智の性之なり。阿梨耶神智の性を以ての故に、無明と合して便ち妄智を起し、無明を遠離して便ち正智と爲す。二には

【緣用實等】五に緣用實に就いて。

【隨敎と等】第二に隨敎の實相。

如實法。彼自性清淨心の中に於て、備に一切の恆沙の佛法を具す。妄心の中に備に一切の諸の虛妄の法を具するが如し。眞心の中に諸法を具するを以ての故に、妄想と合して能く妄心に熏じて種種の行を起し、妄想を遠離して便ち法界廣大の行德を成ず。此空不空は同じく是れ諦實なり。斯に據つて返つて前門の中に望むれば、遣相して空を明すは、乃ち是れ諦相にして、諦實に非ざるなり。緣用實とは、苦集等の相究竟じて之を窮むれば、實に是れ法界緣起の集用不染にして、而かも染して苦集の用を起し、不淨にして、而かも淨にして滅道の用を起す。滅道に二有り。一には妄に隨つて集起す。對治の滅道なり。二には妄を捨して眞を顯す。眞實の滅道なり。諦實此の如し。故に名けて實と爲す。上來の五種、分に隨つて皆實なり。故に稱して諦と爲す。隨敎と言ふは、敎別既に殊れば實を明すこと亦異なり。毘曇法の中には、實を說くに二有り。一には有實。苦集滅道の法相實に爾なり。二には空實。陰の上に人無く、未だ法體を空ぜず。成實法の中に、實を說くに亦二あり。一には有實。苦集滅道は實に是れ因緣の名用假有なり。二には空實。實に定相無く、未だ因緣を空ぜず。宜しく苦中の法相實に爾りと明すべし。之を名けて實と爲す。未だ虛假空寂等の義を說かず。成實法の中に苦等を辨明するは、實に是れ名用虛假の法なり。定性有ること無し。故に曰ひて實と爲す。斯に據つて返つて前宗の明す所に望むれば、定相を建立するは眞實に非ざるなり。若し大乘破相敎の中に就いて、實を辨ずるに亦二あり。一には有實。苦集滅道は實に是れ妄相虛假の有なり。二には空實。實に因緣假名の相

【經】勝鬘經。

【二】次に第二門に開合辨相。初に苦諦を明す。先づ一苦。【或は等】次に二苦。【或は等】次に三苦。

無く、但性無きのみならず、相も亦得難し。斯に據つて返つて前の成實の中に望むれば、未だ幻化因緣の法を空ぜず。故に名けて實と爲さざるなり。若し大乘顯實敎の中に就いて實を辨ずれば、亦二有り。一には空、二には有なり。中に於て分別するに、略して二門有り。一には依持門、妄想所取の苦集滅道は、情に於て有と爲し、理に於て實に無きを、名けて空實と爲す。妄情所依の如來藏性の相は見叵しと雖も、而かも實に是れ有なるを名けて有實と爲す。故に經に說いて不空藏と爲すなり。二には緣起門、如來藏性の體一味の如くなるを名けて空實と爲し、苦集滅道の用を緣起するを名けて有實と爲す。經の中に說くが如し。「自性淸淨不染にして、而かも染す。十二因緣皆一心の作、生死の二法は是れ如來藏、法界輪轉す。名けて法身衆生と曰ふ」と。是の如き等の言は是れ共眞實緣起の苦集なり。如來藏性は法身を顯成す。菩提涅槃諸地行德は、卽ち是れ眞實緣起の滅道なり。諦實此の如し。之を稱して實と爲す。宗別既に然なり。宗に隨つて皆實なるが故に、稱して諦と爲す。四諦の名義略して釋すること爾云ふ。

（二）第二門の中、開合して相を辨ず。何者か是れ苦なる。苦の體相は開合不定なり。或は總じて一と爲す。謂はく、諸苦を攝して一の苦諦と爲す。或は分つて二と爲す。謂ゆる、分段、變易の生死なり。六道の報を名けて分段と爲し、二乘聖人微細の生滅を說いて變易と爲す。或は分つて三と爲す。謂ゆる、苦苦、壞苦、行苦なり。此三苦を辨ずるに略して五門有り。一には緣に對して分別し、二には緣に約し、體に就いて分別し、三には三種の

無常に約して分別し、四には諸過相顯し、五には三受に對して以て通局を辨ず。對縁と言ふは、縁に内外を別つ。内は、謂はく自心、外は、謂ゆる刀杖等の縁なり。外の中に復二あり。一には逆、二には順なり。逆とは、謂ゆる刀杖等の事の一切の苦具なり。順とは、謂ゆる己が身命財、親戚の類なり。縁別此の如し。彼逆縁に從つて、逼して惱を生ずるを、名けて苦苦と爲す。刀杖等の縁能く內惱を生ずる、之を說いて苦と爲す。苦より苦を生ず。故に苦苦と曰ふ。彼順縁に從つて、離壞して惱を生ずるを名けて壞苦と爲す。內心境に涉るを說いて、名けて行と爲す。行を縁じて厭を生じ、行を厭じて惱を生ず。故に行苦と名く。第二に縁に對し、體に就いて辨ずとは、心性是れ苦なり。彼苦の上に依りて、加するに事惱を以てす。苦の上に苦を加ふ。故に苦苦と云ふ。斯に就いて以て論ずれば、向前の三苦は此門の中に至り、通じて苦苦と名く。謂はく、性苦の上に、前の苦苦、壞苦、行苦を加ふ。斯を事惱と名く。有爲の法、前後に生滅し、無常にして敗壞するを、名けて壞苦と爲す。卽ち此有爲遷流を行と名く。遷流して不安なり。故に行苦と名く。三種の無常に約して辨ずと言ふは、彼分段無常の分齊に於て、苦苦を宣說す。有爲法の性苦の上に於て、彼三世分段の麁苦を加ふ。苦の上に苦を加ふるが故に、苦苦と名く。又三世分段の麁苦を以て、有爲法の體性是れ苦なることを顯す。亦苦苦と名く。念無常に就いて、壞苦を宣說す。彼念の無常、遷流滅壞するが故に、壞苦と名く。是れ卽ち向前の第二門の中の、行壞の兩苦なり。此門の中に至りて、同じく壞苦と名く。彼自性不成の無常に就いて、行苦を

【又經中等】次に八苦、經とは南本涅槃經十一。

宣說す。同體の四相互に相集起す。故に名けて行と爲す。此門の中同體の四相共に破壞して、行性成ぜざるを以て、行性安きこと無し。故に行苦と名く。諸過を以て互に相顯すと言ふは、過に三種有り。謂はく、苦、無常、及與び無我なり。苦を以て苦を顯すを、名けて苦苦と爲す。謂はく、事惱を以て有爲の法の體性の苦なるを顯すなり。無常の故に苦なるを、名けて壞苦と爲し、無我の故に苦なるを、名けて行苦と爲す。法は無我にして因緣虛集なるを以ての故に、稱して行と爲す。有爲の行なるが故に、體性は是れ苦なり。三受に對して通局を辨ずと言ふは、受の別に三有り。謂はく、苦、樂、捨なり。緣に逆して惱を生ずるを、名けて苦受と爲し、緣に順じて適を生ずるを、名けて樂受と爲す。中容の境界所生の受心は、前の苦樂を捨す。故に捨受と名く。三受是の如し。之に對すること云何。經の中に說くが如く、苦受の中に、即ち三苦を具す。心性は是れ苦なり。性苦の上に於て、彼對緣所生の事惱を加するを、即ち苦苦と名く。前後生滅し、無常敗壞するを名けて壞苦と爲す。即ち此前後に遷流集起するを、名けて行苦と曰ふ。亦有爲の自性虛集すべきを、名けて行苦と爲す。樂捨の二受は各二苦を具す。謂ゆる行、壞なり。行、壞の相は前釋に異らず。三苦是の如し。又經中の如く、分つて八苦と爲す。謂ゆる生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五盛陰苦なり。此八苦を辨ずるに、略して三門有り。一には共名を釋し、二には共相を辨じ、三には三苦に對して共に相收攝す。先に共名を釋すとは、生苦と言ふは、報分始めて起る、之を謂つて生と爲す。生の時苦有り。

時に就いて稱を立つ。故に生苦と名く。衰變を老と名く。老の時苦有り。時に就いて目と爲すを、名けて老苦と爲す。四大增損は之を謂つて病と爲す。病の時苦有り。時に就いて名を彰すを、稱して病苦と曰ふ。陰壞を死と名く。死の時苦有り。時に就いて目を立つるを、名けて死苦と爲す。亦此等を當體の名と爲すべし。卽ち生老病死を指して苦と爲す。故に生老病死苦と云ふなり。愛別離とは、念ずる所の分張するを愛別離と名く。愛別は惱を生ず。緣に就いて稱を立てて愛別離と名く。怨憎會とは、惡む所の彊集するを怨憎會と名く。怨會して惱を生ず。緣に就いて稱を立てて怨憎會と名く。求不得とは、悕ふ所の稱はざるを求不得と名く。彼に因つて惱を生ず。緣に就いて稱を立つ。是故に名けて求不得苦と爲す。五盛陰とは、五陰熾盛を五盛陰と名く。陰盛は是れ苦なり。體に就いて稱を立つ。是故に名けて五盛陰苦と爲す。亦盛とは盛受の義なり。五陰の中に前の七苦を盛る。是故に名けて五盛陰苦と爲す。若し正しくは應に五陰盛苦と言ふべし。名義是の如し。次に其相を辨ず。何者か生苦なる。『五王經』に說くが如く、始め識支より乃ち出胎に至る、之を名けて生と爲す。『涅槃經』に云はく、「生は始終に通ず」と。始終不同なり。經に分つて五と爲す。一には初出、謂ゆる、識支なり。報の始を初と名け、初めて起るを出と名く。二には至終、謂はく、名色支なり。色心具足す。前に對して終を說く。三には增長、謂はく、前の名色なり。增して六入と爲る。四には出胎。五には種類、謂はく、出胎の後乃ち老死に至る。中に於て、運運刹那に新に起る、之を名けて生と爲す。何者か老

苦なる。『涅槃』の中の如く、釋に兩義有り。一には終身老、謂ゆる、髮白く、形枯れ、色變ずる、是時を老と名く。二には念念老、始め識支より乃ち老死に至つて、運運遷變する、之を名けて老と爲す。念念の中に就いて、經に分つて二と爲す。一には增長、謂はく、識支より乃ち盛年に至つて、念念遷變す。二には滅壞、年衰已後念念に老すなり。何者か病苦なる。『涅槃』の中の如く、釋に兩義有り。一には身病、謂ゆる、四大の增損、不調及び餘客病なり。二には心病、謂ゆる、歡喜、憂愁、恐怖、愚癡等なり。何者か死苦なる。『涅槃』の中の如く、死を說くに三有り。一には放逸死、謂はく、大乘方等經典を謗ず。二には破戒死、謂はく、三世の諸佛の禁戒を犯す。三には壞命死、謂ゆる、身盡くるなり。此壞命の中、經に分つて二と爲す。一には命盡死、二には外緣死なり。命盡死の中、經に說くに三有り。一には命盡きて福盡きず。正報滅すと雖も、依報猶存す。二には福盡きて命盡きず。依報亡ずと雖も、正報猶在り。此れ亦通じて命盡死と名くるなり。三には福命倶に盡き、依正倶に滅す。外緣死の中、經に說くに三有り。一には自害、二には他害、三には倶害なり。何者か是れ其愛別離苦なる。所別に二有り。一には內、二には外なり。內とは自身、外とは、謂ゆる、親戚、眷屬及び餘の資生なり。何者か是れ其怨憎會苦なる。怨憎に二有り。一には內、二には外なり。內とは、謂ゆる、三惡道の報、外とは、謂ゆる、刀杖等の緣なり。何者か是れ其求不得苦なる。所求に二有り。一には因、二には果なり。因の中に二有り。一には惡法、離れんを求むるに得ず。二には善法、欲せんを求むるに得

ず。果の中に亦二あり。一には苦事、離れんを求むるに得ず。二には樂事、欲せんを求むるに得ず。苦に復二有り。一には內、二には外なり。三塗の苦報を離れんことを求めて得ず。是を名けて內と爲す。刀杖等の苦を離れんことを求めて得ず。是を名けて外と爲す。樂事にも亦二あり。一には內、二には外なり。人天の樂果を欲せんと求むるに得ず。是を名けて內と爲す。資生眷屬を欲せんと求むるに得ず。是を名けて外と爲す。何者か是れ其五盛陰苦なる。『涅槃』に說くが如し。通じて前の七を攝して、以て第八の五盛陰苦と爲す。八苦の體相辯ずること是の如し。次に三苦に對して共に相收攝す。

八の中前の七は、別して三苦に配す。後の一は是れ總なり。三苦を總攝す。前の七の中に就いて通有り、別有り。卽壞卽苦、卽行卽苦なるは、義前の七に通ずること言論を待たず。緣じて惱を致す。義に隱顯有り。生老病死は苦苦の所收なり。若し老の時を緣として壯色を失し、病に强力を失し、死に壽命を失して惱を致す者は、壞苦の所攝なり。愛別離とは、壞苦の所收なり。怨憎會の中、義に兩兼有り。三塗の苦報、刀杖等の、緣じて强く聚集するは、苦苦の所收なり。涉求、行じて、强ひて現前するは、行苦の所攝なり。求不得の中、義に三苦を具す。惡に於て、苦に於て、離れんを求むるに得ざるは、苦苦の所收なり。善に於て、樂に於て、合せんと求むるに得ざるは、壞苦の所攝なり。涉求の行心を離れんと求むるに得ず。卽ち是れ行苦なり。五盛陰の中、一切斯に具す。八苦是の如し。『地持』の中の如く、別に隨つて、分つて百一十苦と爲す。若し廣く之を分てば、苦は乃ち無

【次に等】二に集諦を明す。

【經】　勝鬘經。

【次に等】次に滅諦を明す。

量なり。苦諦是の如し。次に集諦を辨ず。開合一に非ず。總ずれば唯一の集なり。或は分つて二と爲す。二に三門有り。一には性に就いて二を分つ。唯善と惡となり。無記は報無し。是を以て論ぜず。二には正を縁じて二を分つ。唯業煩惱なり。業を正集と爲す。故に煩惱は縁集なり。三には麤細に二を分つ。謂ゆる、分段、變易の因なり。或は分つて三と爲す。謂ゆる、三界の生死の因なり。斯に據つて統攝すれば、一切の分段、變易の因は悉く其中に在り。或は分つて四と爲す。分段變易に各縁正有り。合して四と爲すなり。分段の因の中、有漏業は因、四住を縁と爲し、變易の因の中、無漏業は因、無明を縁と爲す。問うて曰はく、『無漏は云何が因と爲る。』『縁照じて無漏能く三乘の生滅の法身を生ず。故に因と說くのみ。』或は分段を五と爲す。謂ゆる、五道生死の因なり。或は分つて六と爲す。謂ゆる、六道生死の因なり。又分段の中の三有の因、變易の中の三乘の因も亦六を分つことを得。或は分つて十と爲す。五道の因の中に、各縁正有り。故に十有るなり。或は十二を分つ。六道の因の中に、各縁正有り。卽ち十二と爲す。又分段の中の三有の因に、各縁正有り。變易の中の三乘の因にも亦縁正有り。此を以て通じて論ぜば、亦十二有り。故に經に說いて言はく、「又取を縁とし、有漏の業を因として三有を生ずるが如く、無漏業を因とし、無明を縁と爲して、阿羅漢及び辟支佛、大力菩薩、三種意生身を生ず」等と。若し廣く分別せば、集も亦無量なり。集諦是の如し。次に滅諦を辨ず。開合一に非ず。總じては唯一の滅なり。或は分つて二と爲す。二に四門有り。一には、所滅の因果に

【經】涅槃經三十一。
【次に等】四に道諦を明す。

約して二を分つ。生死の因盡く、是れ有餘滅なり。生死の果喪す、是れ無餘滅なり。二には、所滅の分段變易の二種に約して二を分つ。分段の死盡くるは、是れ有餘滅なり。變易の死盡くるは、是れ無餘滅なり。三には大小に二を分つ。二乘の所得は、是れ其小滅なり。佛菩薩の所得は是れ其大滅なり。四には性淨方便、分つて二種と爲す。無始の法性本隱れ、今顯るるは是れ性淨滅なり。障を斷じて得るは是れ方便滅なり。或は分つて三と爲す。三に三門有り。一には所滅の假實空心に約して、之を以て三と爲す。因和合の中、定性を取立するは、是れ迷假の心なり。法和合の中、定性を取立するは、是れ迷實の心なり。無漏の慧は是れ其空心なり。此三心を滅するを、三滅と爲すなり。假實の兩心は、成實法の中には、聞慧に伏滅し、煗等已去は、理を見て永く滅す。大乘法の中には、善趣に伏滅し、種性已上に漸次に永く滅す。若し空心を論ずれば、成實法の中には、滅定は暫滅、無餘涅槃は畢竟永滅す。大乘法の中には、種性已上分に隨つて漸滅し、眞德漸く顯れ、佛に至つて乃ち盡く。二には所滅の煩惱業苦に約して三分別す。三には人に就いて分別す。謂はく、三乘の人所得の滅なり。或は分つて四と爲す。分段の中の因果の盡くる處に、分つて二種と爲し、變易の中の因果の盡くる處に、亦二種を分つ。故に合して四なり。又復經の中に宣說す、「涅槃は十想を遠離す。亦十を分つことを得」と。此義後の涅槃章の中に具に廣く分別するが如し。義に隨つて異論すれば、數別窮り難し。滅諦是の如し。次に道諦を辨ず。開合一に非ず。總ずれば唯一の道なり。或は分つて二と爲す。二に四門有り。

【三】以下、第三に染淨因果を分別

一には因果を二に分つ。因の所行は是れ其因道なり。果中の所成は是れ其果道なり。二には對治に約して二を分つ。謂ゆる、分段變易の對治を二道と爲すなり。三には大小を二に分つ。二乘の所行を以て小道と爲し、大乘の所行を以て大道と爲す。四には眞妄を二に分つ。緣修の對治は、是れ其妄道なり。眞實の行德は是れ其眞道なり。或は分つて三と爲す。三に五門有り。一には聞思修、分つて三種と爲す。此義後の三慧章の中に具に廣く分別するが如し。二には戒定慧、分つて三種と爲す。戒定は通じて具し、慧をば道體と爲す。三には證助不住、開いて三種を分つ。四には位に約して三を分つ。謂ゆる、見修及び無學道なり。五には人に隨つて三を分つ。謂はく、三乘の人の所行の道なり。或は分つて四と爲す。四に三門有り。一には行に就いて四を分つ。謂はく、聞思修證なり。二には位に約して四を分つ。謂はく、方便道、見道、修道及び無學道なり。三には人に隨つて四を分つ。謂はく、聲聞、緣覺、菩薩及與び佛道なり。或は分つて五と爲す。謂はく、聞、思、修、報生の識智及與び證智なり。聲聞乘の中、見修無學は之を分つて三と爲し、緣覺、大乘各別つて二と爲す。合して五有るなり。或は分つて六と爲す。謂はく、三乘の中に各因果を分つ。或は分つて七と爲す。謂はく、七覺支なり。或は分つて八と爲す。謂はく、八正道なり。或は分つて九と爲す。謂はく、三乘の中に各見修及び無學道有り。或は復分つて三十七道と爲す。廣くは則ち無量なり。道諦是の如し。

(三)第三門の中に、其染淨の因果差別を分つ。四が中、前の二は是れ其染法、後の二は淨法

す。

【四】以下、第四に理事分別す。

なり。染を擧げて厭はしめ、淨を彰して欣ばしむ。前の染の中に就いて、先は果、後は因なり。淨の中も亦爾り。先果後因、故に四別有り。諸法の起るは先因後果なり。何が故に、諦の中には先果後因なる。觀門に二有り。一には順、二には逆なり。因を尋ねて果に趣くは是れ其順觀、果に從つて因を尋ぬるは是れ其逆觀なり。今は逆觀に依る。故に先に果を明し、後に因を彰すなり。良に果は美惡を兼ぬること顯著なるを以て、欣厭の義强し。是を以て先に明す。因相微隱にして欣厭の義微なり。是を以て後に說く。

(四)第四門の中に、理事分別す。宗別不同なれば說く所も亦異なり。毘曇の如きに依らば、六道の果別は是れ其事苦なり。即ち此事の上に、苦、無常、空、無我等の四義寛通すること有るを、說いて理苦と爲す。又復一切の有漏の諸法內外を問ふこと莫し。但前より後を生ずるは、近遠、麤細の別を簡ばず。悉く是れ果の義なり。此果の上に於て、苦、無常、空、無我等の四種の道を具す。義盡く是れ理苦なり。六道の因果は是れ其事集なり。即ち此事の上の因集有緣の四義齊く通ずるを、說いて理集と爲す。又復一切有漏の諸法內外を問ふこと莫し。但前より後を生ずるは、近遠麤細の殊を簡ばず。悉く是れ因の義なり。此因の中に於て、因集有緣の四義寛通するは盡く是れ理集なり。理の苦集は諸法に通ずるを以ての故に、聖人一道有ること無し。有漏の中に具に二有り。苦智を具する處には集智無く、集智を具する處には苦智無し。過の麤細に隨つて盡亡の處に、品別無爲は是れ其事滅なり。即ち此事上の盡止妙出の四義齊く通ずるを、說いて理滅と爲す。戒定慧等の三

【五】以下、第五に十六聖行分別す。

十七品の道行の差別は、是れ共事道なり。即ち此事の上に道如跡乘の四義齊く通ずるを、說いて理道と爲す。若し『成實』に依らば、生死の因果に麤細を問ふこと莫し。一切皆是れ事苦、事集なり。無漏の因果は、是れ事の滅道なり。即ち此事の上の緣用虛假、無性の空は、是れ共理なり。緣用虛假は是れ世諦の理なり。無性の空は、是れ眞諦の理なり。大乘法の中には、分段、變易の二種の因果は、是れ事の苦集なり。此二の盡くる處は數滅無爲なり。及び彼對治は、是れ事の滅道なり。即ち此事の中の平等實性、緣起の相、是れ共理なり。平等實性は、是れ眞諦の理なり。緣起の相は、是れ世諦の理なり。理の淺深備に初門の如し。

【五】第五に、十六聖行を分別す。四諦の中に各四行有り。故に十六有り。苦の中の四とは、謂はく、苦と無常と空と無我となり。逼惱を苦と名け、苦法遷流するを說いて無常と爲す。苦は我所に非ず。故に名けて空と爲す。苦は我體に非ず。名けて無我と爲す。問うて曰はく、『苦の中唯此四行有りや。更に餘義有りや。』『義別衆多なり。』『華嚴』に說くが如し。謂ゆる、果報、擔累、危脆、怨毒、惱害、障礙、繫縛、陰蓋、遮難、難苦事等なり。是の如く一に非ず。今一門に據つて且く此四を論ず。』問うて曰はく、『何が故に、偏に此四を說く。』釋して言はく、『苦の中義別衆多なり。既に且く論ずと言ふ。寧ぞ具に責むべけんや。』問うて曰はく、『無常は苦集道に通じ、空と無我とは遍く四諦に通ず。何の義を以ての故に、偏に苦の中に攝する。』釋して言はく、『法門に通有り、別有り。若し通門に就かば、無常空

等は、義は餘諦に通じ、今、別門に就かば、無常、空等は、身邊兩見は對治の法なるが故に、苦の中に攝入す。是義云何。身邊兩見は苦に迷うて生ず。無常は邊を治し、空と無我とは身見を對治す。是故に對に隨つて苦の中に攝入す。何が故に、身邊、偏に苦に迷うて生ずる。報法は麤現じて相狀顯著なり。人多く此を取つて以て神主と爲す。隨つて斷常を計す。是故に身邊偏に苦を緣じて生ず。此義、具に釋すること十使章の如し。問うて曰はく、『苦の中に具に四行有り。何の義を以ての故に、偏に苦諦と名け、無常、無我等の諦と名けざる。』釋して言はく、『皆得て並に彰すべからず。且く苦を說くのみ。設ひ餘名を立つるとも、一難に會歸す。又義に隨つて釋せば所以無きに非ず。義釋に三有り。一には苦は麤にして覺り易く、人皆同じく識る。易に就いて以て名く。二には苦は過麤重にして厭を生ずる義强し。故に偏に之に名く。三には苦の義唯別にして餘諦に通ぜず。故に偏に苦に名く。餘の無常等は是の如きの義無し。故に經論の中に多く之を說かず。』集の中の四とは、謂はく、因集有緣なり。能生を因と曰ひ、聚果を集と名く。能く來果を有するが故に稱して有と爲し、此を緣として報を得るが故に、說いて緣と爲す。問うて曰はく、『集が中唯此四のみ有りや、更に餘義有りや。』釋して言はく、『集の中の義別無量なり。謂ゆる、生造、作起、滅出、由籍、方便、至到、趣向、次第、開道なり。是の如く一に非ず。今は一門に據つて且く此四を論ず。』問うて曰はく、『因果は正しく相對の法なり。前の苦諦の中に其果を說かず。今の集諦の中に、何が故に、因を說くや。』釋して言はく、『苦集、各多義有

り。名くるに皆盡くさず。隱顯互に彰す。何ぞ其に責むべけんや。又復果の義は麤顯にして識り易く、言論を假らず。故に果を說かず。因は細にして覺し難し。故に須らく之を說くべし。又復苦の中、若し果行を立つれば、人天の樂を顯すことを得るに由無し。果は是れ苦、無常、空、無我等なり。可厭の法と爲す。故に果を說かず。苦に對して因を說く。因は即ち厭ふべし。故に其因を說く。又苦諦の中に、苦、無常を說いて愛行を對治し、空無我を說いて見行を對治す。若し其果を說かば、此治能無し。故に果を說かず。對治等に約して因の厭ふべきを說く。是を以て之を論ず。』問うて曰はく、『集の中に其に四義有り。何が故に、名の中に偏に集諦を彰して因等を說かざる。』釋して言はく、『皆得て並に存すべからず。且く集の名を以てす。』又復集の義、果義を攝す。顯なるが故に偏に名くるなり。滅の中の四とは、謂はく、盡止妙出、亦滅止離盡と名く。有過を滅するが故に、盡滅と云ふ。惱患を寂止するが故に、名けて止と爲す。麤礙を捨遠する、之を稱して妙と爲す。纏縛を出離するを出と名け、離と名く。問うて曰はく、『滅の中に唯此四のみ有りや、更に餘義有りや。』釋して言はく、『滅の中義別衆多なり。謂ゆる、無爲、寂靜、安隱、解脫、不動、不燃、不熾、休息、無惱、淸淨、快樂、無礙、無相なり。是の如く一に非ず。今は一門に據つて且く此四を論ず。』問うて曰はく、『四が中に、何の義を以ての故に偏に滅諦と名くる。』釋して言はく、『皆得て並に立つべからず。且く滅を彰すのみ。又復滅とは、除遣の義彰なり。相顯にして識り易きが故に、偏に之に名け、餘の止妙等は世俗の止妙出等に同じ

【六】以下、第六に有作無作、有量無量を相對分別す。

きが故に名けざるなり。道の中の四とは、謂はく、道如迹乘なり。亦道正迹乘と名く。能通を道と名け、如法の正行を如と名け、正と名く。之を尋ねて果に趣向するが故に、稱して迹と爲し、之に依つて達到するが故に、說いて乘と爲す。又復運通をも亦名けて乘と爲す。問うて曰はく『道の中に唯此四のみ有りや、更に餘義有りや。』釋して言はく『道の中義亦一に非ず。謂ゆる、無漏、無礙、無障、安隱、解脫、出離、清淨、對治、方便、能度、至到なり。是の如く一に非ず。今は一門に據つて且く此四を論ず。』問うて曰はく、『四が中、何の義を以ての故に、偏に道の名を彰す。』釋して言はく『皆得て並に立つべからず。且く道を論ずるのみ。又復道とは通到の義彰なり。相顯にして識り易きが故に、偏に道と名く。』『十六聖行之を辨ずること略爾り。』

(六)第六門の中、有作無作、有量無量を相對分別す。小乘の衆生の所觀の四諦は名けて有作と爲し、亦有量と名く。大乘の所觀を名けて無作と爲し、亦無量と名く。有作無作は行に約して分別し、有量無量は當法に分別す。云何が、行に就いて作無作を分つ。小の所觀に據らば、後に望めて猶無量の諦觀の皆以て修作すべき有り。後に對して前に別つ。故に有作と名く。大の所觀に據らば、後に望めて更に餘觀の作すべき無し。故に無作と名く。總相是の如し。然るに彼小の中、義に隨つて分別するに、有作無作の義有り。因の中の所觀を名けて有作と爲し、果の中の所觀を名けて無作と爲す。大乘も亦爾り。因の中の所觀を名けて有作と爲し、果の中の所觀を名けて無作と爲す。量無量とは、分別するに三有り。

【經】涅槃經十三聖行品。

【七】以下、第七に其四諦の體の同異を明す。

一には寬狹に就いて量無量を明す。小乘所觀の苦集二諦は、止分段の因果と與に在り。所觀の滅道は、唯是れ分段の因果を對治す。法に局限有り。故に有量と名く。大乘の所觀の苦集は、統て分段、變易の二種の因果に通ず。苦は分段、變易の報に通じ、集は分段、變易の因に通ず。滅は分段、變易の因果を盡し、道に分段、變易の對治を攝す。法に局限無きを、名けて無量と爲す。二には深淺に就いて量無量を明す。小乘法の中、「毘曇」の如きに依らば、但苦とは、眞實是れ苦なり、樂ならしむべからず、乃至道とは、眞實是れ道なりと明して、未だ餘義を說かず。成實法の中には、唯苦等の名用虛假、無性の空を明して、未だ法本を窮めず。故に有量と名く。大乘法の中、若し說相に據らば、其苦等の幻化の有は畢竟空寂を明す。實を窮めて之を論ずれば、苦等の體性は、即ち是れ眞實如來藏性の緣起法界なり。深を窮むるを以ての故に、名けて無量と爲す。三には麤細に就いて量無量を明す。小乘の中、總相の麤觀を名けて有量と爲し、大乘法の中、別相の細觀を說いて無量と爲す。是を以て經に言はく、「所說の苦諦は中智の所知なり。是苦を分別するに、無量の種有り。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。我彼經に於て竟に之を說かず」と。集滅道等類して亦同じく然り。此は是れ麤細の量無量なり。

(七)第七門の中に、其四諦の體の同異を明す。中に於て四諦義の差別に二有り。一には諦相、二には諦實なり。今先に相に就いて其同異を辨ず。中に於て滅道に其二種有り。一には緣修の對治の滅道、謂はく、三乘の人、除結の無爲緣修の治なり。二には體證眞實の滅道、

謂はく、佛菩薩體證の無爲圓通の實德なり。今先に彼對治の滅道を以て、苦集に望めて其同異を辨ず。中に於て滅諦は是れ無爲法、餘の三諦に望むれば一向別體なり。苦集道諦は同異不定なり。若し『毘曇』に依らば、苦集に二有り。一には麁、二には細なり。過の業煩惱は今の苦果を得、現の業煩惱は當來の報を得。是れ其麁なり。此れ乃ち是れ其事苦、事集なり。有爲の法は念念に生滅す。此有爲に就いて、義に苦集を分つ。之を說いて細と爲し、以て理の苦集と爲すなり。麁に就いて以て論ず。若し事に就いて論ずれば、苦集及び道は、一向に別體なり。若し細に據つて辨ずれば、苦集同體なり。道諦は不同なり。相狀は如何。一念の有爲、前に從つて集起するを、義說して苦と爲す。即ち此有爲、能く後を生ずるを、義說して集と爲す。其れ猶世人の父に望めて子と爲し、子に望めて父と爲すがごとし。是故に苦集は一向に同體なり。道は是れ無漏にして、前の二に同じからず。若し『成實』に依らば、唯結業を說いて、之を以て集と爲す。所受の生死を名けて苦諦と爲す。微細の生滅は悉く是れ苦に攝す。一種に事相の苦集なり。然るに彼所說の集道は別體なり。苦は集道に望むれば、義別に三有り。一には苦諦と集と同體なり。謂はく、報心に依つて集因を造作す。集の體は是苦なり。故に同體と云ふ。彼宗の中には、報心は體是れ苦なりと宣說するを以ての故に。二には苦諦と道と同體なり。謂はく、報心に依つて、聖道を修起す。道諦は是れ苦なり。故に同體と云ふ。問うて曰はく、「『毘曇』何んが是の如くならざる。」釋して言はく、「『毘曇』には、其報心は常に續かずと明すが故に、集道起る時

は、其報心無し。是故に苦諦は、集道二諦と同體ならず。』彼『成實』の中には、報常に續くと說き、集道起る時は、恆に此報有り。是故に苦諦は集道二諦と同體なることを得。三には不同なり。謂はく、餘の一切無記心の中の苦報の心と、集道二諦とは同じからざるなり。大乘の中には、所說不定なり。先に分段に就いて其同異を辨ず。中に於て苦集に略して二種有り。一には三世因果の不同に就いて、以て苦集を分つ。若し斯義に據らば、苦集は道に望めて辨ずる所の同異は『成實』と同じ。第二には彼微細の生滅に就いて、義に苦集を分つ。若し斯義に據らば、苦集の二諦、一向に同體なるは『毘曇』と同じ。即ち此苦集を道諦に望むることは『毘曇』と同じからず。云何が不同なる。分別するに二有り。一には苦集と道と同體なり。謂はく、報心に依つて聖道を起す。報心は、即ち是れ苦集の所攝なり。是を以て苦集と道と同體なり。良に大乘は、亦報心常に相續すと說くを以ての故に。二には苦集と諦と道と別體なり。謂はく、餘の一切有漏の法の中の苦集諦なり。分段是の如し。次に變易に就いて、其同異を辨ず。中に於て不定なり。若し凡の時に就いて、相に隨つて麤く分たば、單に集諦有り。義に隨つて通じて論ぜば、苦集同體の理有ることを得。無明住地は、是れ其集諦なり。即ち此無明生滅の義を、即ち說いて苦と爲す。是故に苦集同一體なり。若し聖の時に據らば、三諦同體なり。一念の無漏當分は結を治す。即ち是れ道諦なり。即ち此道は前の無漏變易の業より生ず。即ち名けて苦と爲す。復能く後を生ず。即ち名けて集と爲す。是故に三諦は同一體性なり。對治の滅道は、苦集に望めて

【八】以下、第八に其虛實を辨ず。

異なること是の如し。次に眞實滅道の二諦に就いて、其同異を辨ず。此二相望むるに、一向同體にして萬德圓寂なり。即ち說いて滅と爲す。即ち說いて道と爲す。更に別體無し。是故に滅道同體なりと宣說す。彼苦集對治の滅道に望めて一向に別體なり。眞妄異るが故に。諦相是の如し。次に諦實に就いて、其同異を辨ず。實に據つて以て論ずれば、四諦同體なり。苦集二諦は別體無し。故に滅道の性を用ひて之を以て體と爲す。故に「涅槃」の中に說かく「彼苦集二諦の實は即ち是れ佛性、即ち是れ涅槃、即ち是れ如來常樂我淨一切佛法なり」と。「寶性論」の中にも亦說かく「法身、如來、聖諦及與び涅槃の四法別無し」と。滅道二諦に別體無きが故に、還つて即ち彼苦集の實性を說いて、之を以て體と爲す。是を以て經の中に說かく「十二緣を以て佛性と爲す。十二緣を見るを名けて見佛、見法、見僧と爲す」と。又說かく「五陰を以て佛性一苦滅等と爲す」と。良に染淨、別體無きを以ての故に。經の中に說いて言はく「凡夫未だ成佛せざれば、菩提を煩惱と爲す。衆生成佛の時、煩惱を菩提と爲す」と。義此に在り。其れ猶迷人の取る所の南は、彼悟時の解する所の北と二性有ること無きがごとし。同異の義其相此に像たり。

(八)第八門の中に、其虛實を辨ず。虛實の狀以て一定し難し。中に於て略して三門を以て分別す。一には諦相の優劣に就いて分別す。苦集は是れ虛、滅道は是れ實なり。苦集は迷より生ず。所以に是れ虛なり。滅道は解より起る。所以に是れ實なり。苦集既に虛ならば、云何が諦と稱する。實に是れ虛誑顚倒の法なり。是故に諦と云ふ。滅道二諦の、實に同に

【九】以下、第十に十諦分別す。

非ざるなり。二には法を攝して情に從はば、四俱に是れ虛なり。皆是れ妄想分別の法なるが故に。故に『維摩』に云はく「苦を見、集を斷じ、滅を證し、道を修するは、是れ卽ち戲論なり」と。『地經』にも亦說かく「五地の中四諦を分別するを、取染淨分別慢と名くるなり」と。三には情を廢して法を論ずれば、四俱に是れ實なり。經の中設ひ情計を遣除すとも其法を破せず。是を以て經に言はく「但其病を除いて、而も法を除かず」と。法云何が實なる。實に五重有り。初門の中に具に廣く分別するが如し。究竟じて之を窮むれば、唯二種有り。一には體實、諦の本性を窮むれば、唯如來藏眞實法界なり。亦眞如と名け、亦實際と名け、亦法性と名け、亦一實と名け、亦佛性と名く。二には用實、謂はく、淸淨心不染にして而も染、生死を緣起するの苦集の二門は不淨にして而も淨、涅槃を緣起するの滅道の二門は實相なること是の如し。

【九】第九門の中に、十諦分別す。十諦と言ふは、『地經』に說くが如く、始め世諦より乃ち第十の菩薩地成如來智諦に至る。然るに彼四諦は法界恆沙の佛法を統含す。義に隨つて別して論ずれば、重纍計り難し。且く一數の十門に從つて之を觀ず。此十、一一に皆四諦に通ず。彼四が中に就いて、直に苦集滅道の法相を知るを名けて世諦と爲し、其空寂無人無法を知るを第一義と名け、其苦等の有二無二、一實の相を知るを名けて相諦と爲し、其緣起法界門の別を知るを差別諦と名く。彼別の中に就いて、說同じからざるに隨つて、集成各異るを說成諦と名け、彼四諦に迷うて苦果の事起るを名けて事諦と爲し、之に迷うて

【一〇】義法聚第十四段に四緣義を明す中、四門分別あり、先づ釋名。

【一一】以下、第二に四緣の相を辨ず。初に因緣。

集を造り、能く後苦を生ずるを説いて生諦と爲し、彼四諦を解して、能く染果を滅するを盡無生諦と名け、苦等を解達するを入道諦と名く。其體實緣起の法門を窮むれば、便ち大乘如實の行德を成ず。行に因果を分つ。是故に名けて菩薩地成如來智諦と爲す。然るに此四諦の統攝淵廓以て究窮め難し。且く詮況に隨つて網緒を略示す。

四緣の義に四門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。法に就いての分別三。大小の同異四。

〔一〇〕第一に名を釋す。言ふ所の緣とは由籍の義なり。緣別不同なるが故に分つて四と爲す。一には因緣、二には次第緣、三には緣緣、四には增上緣なり。因緣と言ふは、親く生ずるの義、之を目けて因と爲し、因を用ひて緣と爲す。故に因緣と曰ふ。次第緣とは、前の心法に籍つて次第に後を生ず。所生の心、前に次いで後起る。故に名けて次と爲す。後生ずるを以ての故に、之を説いて第と爲す。前心、後次第して緣と爲すを、次第緣と名く。緣緣と言ふは、六塵境界を心の所緣と爲すが故に、名けて緣と爲し、彼所緣、心の與に緣と作るに由るが故に、緣緣と名く。亦踈助す、之を名けて緣と爲すべし。緣を以ての故に、緣緣と名く。增上緣とは、法を起す功強し。故に增上と曰ふ。此增上を以て法の緣と爲すが故に、增上緣と名く。中に於て亦非增上の者有り。勝に從つて名を受くるが故に、增上と曰ふ。此一門竟んぬ。

〔一一〕次に其相を辨ず。四緣の義、諸論不同なり。『成實論』の中に三因を宣説す。以て因緣

【尼乾】ニルグランタ(Nirgranta)六師外道の一。

と爲す。一には生因、謂ゆる、一切の善惡等の業、能く一切の苦樂等の報を生ず。故に生因と名く。二には依因、謂ゆる、色心互に相依立す。故に依因と曰ふ。其れ猶尼乾の立拒擧瓶相假して立つがごとし。彼も亦是の如し。三には習因、人善を習うて善法を增長し、惡を習うて惡法を增長するが如し。是の如きの一切なり。後起前に增す、故に名けて習と爲し、習を用ひて因と作すを、名けて習因と爲す。此三因を用て以て因緣と爲す。心法續起するを次第緣と爲し、六塵識を生ずるを以て緣緣と爲し、六根識を生ずるを增上緣と爲す。故に『成實論』に云はく「緣緣と言ふは、謂ゆる、色等なり。增上緣とは、謂ゆる眼等なり」と。若し『毘曇』に依らば、彼六因に就いて、離合して四と爲す。何等をか六と爲す。一には所作因、二には共有因、三には自分因、四には遍因、五には相應因、六には報因なり。所作因とは、諸法の起る時、其自體を除いて萬法障へず、其をして生を得しむるを、所作因と名く。空の色を生ずるが如し。是の如き等なり。共有因とは、諸法の起る時、同時同性共有の法、展轉して因と爲るを、共有因と名く。自分因とは、同類の法、前に籍つて後を生ずるを、自分因と名く。遍因と言ふは、苦集諦の下に疑、見、無明、一切の染汚法を增上するが故に、名けて遍因と爲す。中に於て差別に乃ち十一有り。苦の下に七有り。謂ゆる、五見、疑及び無明なり。集の下に四有り。邪見、見取、疑及び無明なり。相應因とは止心法に在り。心起る時の如く同時に卽ち諸の心數法有りて心と相應す。是の相應の法展轉して、相助けて能く所作有るを相應因と名く。前の有因と共に體を相扶す。

【所作の等】次に次第縁、先づ總相。【中に於て等】次に別して論ず。中に三門あり、一に諸心を定別す。

此を相應因と云ふ。相扶に用有り。報因と言ふは、一切有漏の善、不善の法、能く一切の苦樂等の報を生ずるを、名けて報因と爲す。此義、廣く釋すること六因章の如し。中に於て自分、遍因、報因、相應、共有、此五因を合して因縁と爲す。所作因の中、離して三縁と爲す。彼所作、寛通するを以ての故に爾り。所作の中に就いて、心法生後の義を分取して、次第縁と爲す。總相是の如し。中に於て、別して論ぜば、乃ち三門有り。一には諸心を定別し、二には生死に就いて、諸心を辨定し、三には諸心相生の次第を明す。定別と言ふは、心別に十有り。一には方便善心、謂ゆる、一切の聞思修等の相應の心なり。二には生得善心、謂はく、過去より修習して、成ずる所の信、進、念等の相應の善心なり。三には不善心、謂はく、欲界の中に、身見を除いて、餘の煩惱業相應の心なり。四には穢汚無記、亦隱沒と名く。謂はく、欲界の中の身邊兩見、及び上二界の一切の煩惱相應の心なり。五には報生心、謂はく、三界の中の報無記の心なり。六には威儀心、謂はく、行、住、坐、臥、見、聞等の心なり。七には工巧心、謂ゆる、一切の生を營む心なり。八には變化心、謂はく、諸禪に依つて化を起す心なり。九には學心、謂はく、三乘人の無漏の因心なり。十には無學心、謂はく、三乘の人の無漏の果心なり。此十心の中、欲界に八有り。學無學を除く。『成實』法の中には、欲界地の中に電光定有り。無漏を發すことを得。若し是義に從はば、欲界も亦學、無學心有り。『毘曇』には立てず。色界に八有り。不善心及び工巧心を除く。一切の上地には、不善及び工巧心有ること無し。故に成實法の中には、上界に

【次に等】二に生死に就いて諸心を辨定す。

【五種の心】生得善、不善、穢汚、報生、威儀。

欲界の不善を起すことを得。『毘曇』には立てず。無色界の中、下三空處に但六心有り。不善心、威儀、工巧、及び變化心を除く、餘の六種有り。成實法の中には、無色にも亦欲界の不善を起す。大乘には、無色界の中に形色有るが故に、亦威儀、變化等の心有りと宣說す。『毘曇』には立てず。非想地の中に但方便、生得、穢汚、報生の四心有り。彼に無漏無ければ、學、無學を除く、餘は上に說くが如し。心別是の如し。次に生死に就いて、諸心を辨定す。此十心の中、二心は生を得。謂ゆる、不善及び穢汚心なり。一切の受生は煩惱に依る。故に五心は死を得。謂はく、生得善、不善穢汚、報生、威儀なり。此五心の中に命終することを得るなり。不善の命終は唯欲界に在り。威儀の命終は欲色界に通じ、生得、穢汚は遍く三界に通じ、報心は不定なり。『毘婆沙』の中に、二種の說有り。一家の宣說すらく「三禪已還、捨受法無し」と。若し是義に從はば、三禪已還に報心にして命終の者有ること無し。命終必ず捨受心在るが故に。一家の宣說すらく「三禪已還、亦報捨有り」と。若し是義に從はば、報心、命終は遍く三界に通ず。中下に於て、死して上に向つて生ずる者は、必ず生得、報生、威儀の三心の中に在つて死す。若は下地の不善穢汚、上生せざること有るが故に。若し色界に死して、下に向つて生ずる者は、必ず生得、穢汚、報生、威儀心に在つて死す。一切の上地には不善無きが故に。若し無色に死して、下に向つて生ずる者は、必ず生得、穢汚、報生の三心の中に在つて死す。彼に不善、威儀心無きが故に。若し欲界に死して、欲界に生ずる者は、五種の心の中に皆命終を得。若し色界に死

【次に等】三に諸心相生の次第を辨ず。

【先に方便等】諸心相生の次第を明す中、一に方便心

して、當に地に生ずる者は、四心に命終す。不善心を除く。三禪已還報心の有無の義は、上に判ずるが如し。今且く有を論ず。若し無色に死して、當に地に生ずる者は、必ず生得、穢汚、報生の三心に在つて命終す。彼に不善、威儀心無きが故に。問ふ『何が故に、方便善心、學無學心、工巧、變化心に命終することを得ざる。』『命終の時は、心微劣なるを以ての故に、此强心の中に在つて死することを得ず。』生死是の如し。次に諸心相生の次第を辨ず。中に於て唯隣次相生に就いて、以て次第を明す。次第に七有り。一には同處の法の相生次第、謂はく、同地の法互に相因起す。二には上法に於ての修起の次第、欲の善に依つて初禪等を起すが如し。三には下法に於て過を防ぐ次第、上地の方便善心及び穢汚心に依つて下地の中の生得善等を起すが如し。四には下法に於ての退轉の次第、上善に依つて退して、下結を生ずるが如し。五には上に於て、下に於ての遊觀の次第、九地の中の漏無漏の善、互に相因起するが如し。六には上に於て、下に於ての受生の次第、彼生得、報心等に死し、染汚に生ずる等の如し。七には下に於て、上に於ての體用の次第、淨禪より變化心を起し、化心次第して淨禪を起す等の如し。今此義に就いて、以て諸心の相生の次第を明す。先に方便を論ぜば、欲界地の中の方便善心は、自地の中に於て能く一切を生ず。欲界の中の四禪の化心を除く。上に於て能く方便善心、學無學心を生ず。修起の次第は、欲界地の聞思慧等より、初禪地の方便善心を起す。遊觀の次第は、欲界の中の聞思慧等より、初二禪の方便善心、學無學心を起す。次第正受は、初禪地の方便善心、學無學心を起

す。超越して正受は、二禪地の方便善心、學無學心を起す。聲聞の超越禪は一を過ぎず。故に餘の一切地の相望するに例して然なり。若し菩薩を論ずれば、一切地に於て、所有の心に隨つて、皆悉く能く起す。何が故に、上地の生得を生ぜざる。一切の生得は、皆身に報に隨ふ。身下地に在らば、則ち上地生得の善無きが故に。何が故に、上地の不善を生ぜざる。一切の上地に、不善無きが故に。何が故に、上地の隱沒を生ぜざる。上地の隱沒は、自地に愛著す。要ず先に彼方便善を起し竟つて、然して後に愛を生じて自らの所得を愛す。是故に下地方便より、上地の穢汚の心を經起せず。何が故に、上地の報心を生ぜざる。身、下地に在つて、上の報無きが故に。何が故に、上地の穢汚を生ぜざる。身、欲界に在らば、初禪に眼耳等の識を起すと雖も、彼所生の識は、必ず上地の眼耳等の根に依る。上地の根は、必ず上地の淨禪に依つて、而して生ず。下地の善心に依つて生ぜざるが故に。何が故に、上地の工巧を生ぜざる。一切の上地には工巧無きが故に。何が故に、上地の化心を生ぜざる。上地の化心は、是れ其上地の淨禪の果なるが故に。欲界是の如し。色界地の中の方便善心は、自地の中に於て能く一切を生ず。自地の中の上禪化心を除く。上地の中に於て方便善、學無學心を生じ、下の欲界に於て方便善心、生得善心、不善、穢汚及び變化心を生ず。遊觀の次第は、方便善、生得善心を生ず。欲界の生得は是れ捷疾なるが故に、上の方便より次第に之を生ず。餘の一切地の生得善心は、皆是の如くならず。退轉の次第は、不善心及び穢汚心を生じ、起用の次第は、下の化心を生ず。何が故に、欲

【次に等】次に生得を辨ず。

界地の中の報生、威儀、工巧の心を生ぜざる。彼は微劣なるが故に、上善より次第に、之を生ぜず。同界の中に、下地に望めて五心を生ずることを得。遊觀の次第は、下の方便、學無學心を生じ、退轉の次第は、下の穢汚を生じ、起用の次第は、下の化心を生ず。色界是の如し。無色界の中の方便善心は、自地の中に於て能く一切を生ず。上に望めて不定なり。空處、識處は能く上地の方便善心、學無學心を生ず。無所有處は、上に望めて唯方便善心を生ず。非想地の中には無漏無きが故に、學心及び無學心を生ぜず。非想は上に望めて更に所生無く、下地に望めて四心を生ずることを得。遊觀の次第は、下の方便、學無學心を生じ、退轉の次第は、下の隱沒四空定心を生ず。化を起さざるが故に、化心を生ぜず。方便是の如し。次に生得を辨ず。欲界地の中の生得の善心は、自地の中に於て能く一切を生ず。變化心を除く。上地の中に於て唯穢汚を生ず。謂はく、欲界の中の生得に命終し、上の一切地の、染汚生なるが故に。何が故に、上地の方便、學無學心を生ぜざる。方便に非ざるが故に。何が故に、上地の生得、報生、威儀を生ぜざる。界地、斷ずるが故に。何が故に、上地の化心を生ぜざる。變化心は上禪の果なるを以ての故に。色界の生得は、自地の中に於て方便善、生得、穢汚、報生、威儀を生ず。變化心、學無學心を除く。上地の中に於て唯穢汚を生じ、下地の中に於て不善及び穢汚心を生ずることを得。無色の生得は、自地の中に於て方便善、生得善心、穢汚報生を生じ、上地の中に於て穢汚を生ずることを得。下地の中に於て不善及び穢汚心を生ずることを得。次に不善を明す。得不善心

【次に等】次に報心を辨ず。

は、欲界の中に於て能く一切を生ず。變化心を除く。上に於て生ぜず。次に穢汚を明す。欲界の穢汚と不善と同じ。色界の穢汚は、自地の中に於て方便善、生得、穢汚、報生、威儀を生ず。變化心、學無學心を除く。上に於て生ぜず。下の欲界に於て方便善、生得、不善及び穢汚心を生ず。下善に依つて自地の退を防ぐが爲の故に。欲界の方便善心生得善心を起す。上に於て命終し、下の染に受生するが故に、欲界の不善穢汚を起す。同界を下に望めて方便善及び穢汚心を生ず。問うて曰はく、「何が故に、色界の穢汚は欲界の生得善心を生ずることを得、同界の下地は生得を起さざる。」釋して言はく、『欲界生得善心は強利捷疾にして、能く上退を防ぐ。是故に之を起す。上界の生得は軟鈍にして利ならず。上を防ぐこと能はず。所以に起さず。無色の穢汚は自地の中に於て方便善、生得、穢汚及報生心を生じ、上に於て生ぜず。下の欲界に於て、不善心及び穢汚心を生ず。謂はく、彼に命終して欲界に生ずるが故に、下色界に於て方便善及び穢汚心を生ず。上退を防ぐが爲に、下の方便を起す。上に死し、下に生ずるが故に、染心を起す。同界を下に望めて色界に望むるが如し。有人說いて言はく、「同界を下に望めて、但生得及び穢汚心を起す」と。論に此言無し。人の謬語なり。次に報心を辨ず、欲界の報心は自地の中に於て、方便善及び變化心を除き、餘の一切を生ず。微劣なるを以ての故に、方便を生ぜず。淨禪に非ざるが故に、化心を生せず。上地の中に於て但穢汚を生ず。謂はく、彼に命終して上地に生ずるが故に。色界の報心は、自地の中に於て能く生得、穢汚、報生及び威儀心を起す。上地の中に於て

【次に等】次に威儀。

【次に等】次に工巧を辨ず。

【次に等】次に化心を辨ず。

【次に等】次に學心を明す。

但穢汚を生ず。下に於て能く不善穢汚を生ず。謂はく、彼に命終し、下地に生ずるが故に。無色の報心は、自地の中に於て能く生得、穢汚、報生を起す。上に於て染を生じ、下に於て但不善穢汚を生ず。問うて曰はく、『不善尙能く次第に方便善を生ず。報心云何が是の如くなること能はざる。』論に自ら釋して言はく、『報心は羸劣なるが故に、善を生ぜず。不善と善とは、境界異らず。過を見るを以ての故に、不善心の後に能く善心を生ず。又復不善は是れ强盛の心なるが故に、能く善を生ず。』問うて曰はく、『若し報心は羸劣にして善を生ぜずと言はば、方便善心は、何が故に、彼を生ずる。』論に自ら釋して言はく、『善心息む時、勤方便を捨す。故に羸劣の報心を生ずることを得。』次に威儀を辨ず。欲界の威儀は、欲界の報に同じく、色界の威儀は、色界の報に同じ。次に工巧を辨ず。欲界の中の報威儀と同じ。問うて曰はく、『威儀及び工巧心は、何が故に、方便善心を生ぜざる。』論に言はく、『此二は自ら所作を樂ふ。是故に方便善心を生ぜず。』何が故に、學無學心を起さざる。方便に非ざるが故に。何が故に、變化の心を起さざる。淨禪に非ざるが故に。次に化心を辨ず。欲界の化心は、自地の中に於て、唯化心を生じ、上地の中に於て、唯方便を生ず。謂はく、化心より根本禪に入る。色界の化心は、自地の中に於て唯化心及び方便善を生ず。同類相起るが故に、化心を生ず。用より本に歸す。故に方便を生じ、上に於て唯方便善心を生ず。謂はく、二禪の化還つて二禪に入る。乃至四禪類して亦同じく然り。下に於て生ぜず。次に學心を辨ず。色界の學心は、自地の中に於て方便善、學無學心を生じ、上に於

【次に等】次に無學を辨ず。

【所作の中等】次に緣緣と增上緣とに就いて。

て、唯方便善心と及與び學心を生ず。何の義を以ての故に、無學を生ぜざる。上地の無學は、必ず上地の淨禪に依つて起るが故に、下の欲界に於て方便善、生得善心を生ず。同界下に望めて、方便善と及與び學心を生ず。何の義を以ての故に、生得を起さざる。彼、『雜心子注』に釋して言ふが如し。欲界の生得は、強にして捷利なるが故に、學心より次第に之を生ず。上界の生得は、弱にして利ならざるが故に、學心の後に之を生ずることを得ず。何の義を以ての故に、無學を生ぜざる。下地の無學は、必ず下地の淨禪に依つて生ずるが故に、無色の學心は色界と同じ。欲界に望むるを除く。欲界を去ること絶遠にして彼を生ぜざるが故に。次に無學を辨ず。色界の無學は、自地の中に於て方便善及び無學心を生ず。何の義を以ての故に、學心を生ぜざる。無學を得る時は、學心を捨するが故に、無學を退する時は煩惱心に退す。學心に退するに非ざるが故に、無學心は學心を生ぜず。上地の中に於て方便善及び無學心を生ず。謂はく、阿羅漢諸地に遊戲し、或は無漏より有漏心を起し、或は有漏より無漏を起す。故に下の欲界に於て方便善及び生得善を生ず。亦欲界の生得強利なるを以ての故に、之を生ずることを得。同界の下地は方便善及び無學心を生ず。上界の生得は強利ならざるが故に、所以に生ぜず。無色の無學は、自地の中に於て、亦方便及び無學心を生ず。上に於て、下に於て、類して又同じく然り。次第是の如し。所作の中に就いて、六塵生識の義を分取して、以て緣緣と爲し、六根生識の義及び餘の一切萬法不障なるを分取して、增上緣と爲す。體相是の如し。此に二門竟んぬ。

【一二】以下、第三に諸法に就いて其縁を辨ず。

（一二）次に諸法に就いて、其縁を辨定す。若し心法を生ずるは、具に四縁を籍る。心法は必ず相應、共有有り。是の如き等の事は、即ち是れ因縁なり。心は前に籍つて生ず。是れ次第縁なり。心は塵に籍つて生ず。是れ其縁縁なり。心は根に依つて起る。是れ増上縁なり。若し『毘曇』に依らば、無想正受、滅盡正受は三縁より生ず。彼宗に宣説すらく、「無想滅盡は是れ有爲の法なり。同時、共有、生、住滅等、互に相扶助す。是れ其因縁なり。前心に籍つて起る、是れ次第縁なり。萬法障へざる、是れ増上縁なり。心法に非ざるを以ての故に、縁縁無し。自餘の一切の非心の法は、悉く二縁の生なり。謂ゆる、因縁及び増上縁なり。有ゆる自分、共有の法等は是れ其因縁なり。萬法障へざるは是れ増上縁なり。前心に籍つて開導して生ぜざるが故に、次第縁無く、非心の法は境を縁ずる能はざるが故に、縁縁無し。故に『雜心』に云はく、「心及び諸の心法は、是れ四縁より生ず。二正受は三よりす。謂はく、餘は二を説く」と。若し『地持』に依らば、唯心心法は四縁より生じ、自餘の一切の非心の法は、但二縁より生ず。皆次第縁縁の義無し。故に彼論に云はく、「次第、縁縁は是れ心心數法なり。前に籍つて開導するが故に、次第有り。彼六塵の縁を籍つて、縁に攝受して生ずるが故に、縁縁有り」と。『大智論』の中も亦此釋に同じ。故に彼文に言はく、「心心數法、相續無間なるを次第縁と名け、心心數法、塵を縁じて生ずるが故に、名けて縁縁と爲す」と。斯文を準驗するに、次第、縁縁は局りて心法を生じて、非心を生ぜず。有人釋して言はく、「非心の法も亦縁縁を籍る」と。經論に文無し。直是れ人語なり。

【一三】以下、第四に大小に約して其同異を辨ず。

【一四】義聚第十五段に五果を明す中、十門分別あり、第一に列名辨相。

此言謬浪たり。輙く受くべきこと無し。此三門竟んぬ。

〔一三〕次に大小に約して、其同異を辨ず。同異の相『大智論』に說くが如し。言ふ所の同とは、四緣の名義『毘曇』と同じ。言ふ所の異とは、小乘法の中には、相に隨つて言を執す。菩薩は了知して猶幻化の如く、水中の月の如し。但定性無し。幻相無くんばあらざるが故に、彼文に言はく「水中の月は眼に見るべしと雖も、手に捉るべからざるが如し」と。聖人の破は、可捉の月を破して可見を破せず。四緣も亦爾り。相は、有體は無にして、定取すべからず。故に二乘に異なり。四緣の名義略して辨ずること是の如し。

五果の義に十門分別あり。名を列して相を辨ず一。六因に對する分別二。十因に對する分別三。四緣に對する分別四。漏無漏に對する分別五。三性の分別六。三世の分別七。諸地の分別八。學等の分別九。斷法の分別十。

〔一四〕第一門の中、名を列して相を辨ず。五果の義は『地持論』『毘曇論』の中に出す。亦廣く分別す。酬因を果と曰ふ。果別の不同は一門に五を說く。五名は是れ何ん。一には是れ報果、二には是れ依果、三には士夫果、『毘曇論』の中には功用果と名く。四には增上果、五には解脫果なり。報果と言ふは、善惡等の業、苦樂の報を得るを報果と名く。依果と言ふは、善に依つて善を生じ、惡に從つて惡を生ず。是の如く一切同類の法は、後、前に依つて生ずるが故に、依果と名く。士夫果とは、『地持』に說くが如し。卜占、印算、宰官、理務、是の如きの一切なり。各果生ずること有るを士夫果と名く。士夫は是れ人なり。士夫の

【二五】以下、第二に六因に對して五果を分別す。

所作を士夫果と名く。功用果とは、『毘曇』に說くが如し。功力の所得を功用果と名く。兩言異なりと雖も、其義殊らず。增上果とは『地持』に說くが如し。二十二根を名けて增上と爲す。各果生ずること有るを增上果と名く。眼より識を生ずるが如し。是の如きの一切なり。若し『毘曇』に依らば、一法生ずる時、過去、現在の一切の萬法此に於て障へざるを皆增上と名け、生法を彼に望めて增上果と名く。此れ則ち通ず。唯二十二根に止在せず。解脫果とは、『毘曇』の如きに依らば、無漏の聖道及與び等智の、諸の煩惱を滅するを解脫果と名く。若し『地持』に依らば、無漏の聖道、永く煩惱を斷ずるを解脫果と名く。世俗等智の諸の煩惱を滅するは、彼究竟せざれば、解脫果に非ず。此一門竟る。

(二五)次に六因に對して五果を分別す。六因と言ふは、謂はく、所作因、自分因、相應因、共有因、遍因、報因なり。所作因とは、一法生ずる時、萬法障へざるを所作因と名け、自分因とは、一切有爲の同類の相起るを自分因と名け、相應因とは、諸の心心の法同じく一時に在りて、相應して緣に造り、互に相依藉して作用有るを相應因と名け、共有因とは、有爲法の中の同時の法を名けて共有と爲し、共有の法は相依して立つを共有因と名く。前の相應因は、止心法に在り。相依して用有るは此れ共有因なり。三聚に統通して相因つて體立す。斯異り有るなり。遍因と言ふは、苦、集諦の下の見、疑、無明の遍く能く一切の有漏を增長するを名けて遍因と爲す。報因と言ふは、善惡等の業能く苦樂を生ずるが故に、報因と名く。此義廣く釋すること六因章の如し。問うて曰はく、『何れの因か能く何れの果を

【一六】次に十因に對して五果を明す

【一七】次に四緣に對して五果を分別す。

【一八】次に有漏無漏の因に對して五果を明す。

得る。」答へて曰はく、『所作は增上果及び解脫果を得。別して對すれば是の如し。通じては即ち亦功用果を得るなり。以て三緣を說いて所作を爲す。故に義は下に釋するが如し。自分、遍因は能く依果を得、相應、共有は功用果を得、報因の一種は能く報果を得。此二門竟る。

(一六)次に十因に對して、以て五果を明す。此義、後の十因章の中に、具に廣く分別するが如し。此三門竟る。

(一七)次に四緣に對して五果を分別す。四緣と言ふは、向に說く所の如し。六因の中、自分、遍因、相應、共有、及與び報因、此五種を說いて因緣と爲す。所作因とは、說いて三緣と爲す。謂はく、次第緣、緣緣、增上緣なり。四緣の中に就いて、因緣の一種は、能く三果を得。謂ゆる、報果、依果及び功用果なり。中に於て、報因は能く報果を得、自分、遍因は能く依果を得、相應、共有は功用果を得、餘の三緣は能く三果を得、次第緣は功用果を得、緣緣の一種は增上果を得、增上緣は增上果及び解脫果を得。此四門竟る。

(一八)次に有漏無漏の因に對して、以て五果を明す。有漏に三有り。一には善、二には惡、三には無記なり。善に二種有り。一には斷結の善、謂ゆる、世俗の無礙の道なり。二には不斷結、謂ゆる、欲界の一切の善法及び八禪の中の解脫、勝進の一切の善法なり。斷結の善とは、得果の多少、論說不同なり。若し『毘曇』に依らば、能く五果を得。此善法を以て能く善報を得るが故に、報果有り。同類相起るが故に、依果有り。同時の中に、相應、共有互に相扶成して功用果有り。不障の萬法に增上果有り。斷結を以ての故に、解脫果有り。

【一九】次に三性に就いて五果を分別す。

若し『地持』に依らば、但四果を得、解脫果を除く。世俗の斷結は解脫に非ず。故に不斷結の者も能く四果を得、解脫果を除く。善法是の如し。不善法の者も亦四果を得。無記法の者は能く三果を得。解脫果及與び報果を除く。餘の三種有り。有漏是の如し。無漏法の中に、其二種有り。一には斷結の無漏、謂ゆる、見修無礙の道なり。二には不斷結、謂ゆる、一切の解脫、勝進の無漏の善法なり。斷結の無漏は能く四果を得。彼報果を除く。無漏法は報を得ざるを以ての故に、不斷結は能く三果を得。解脫果及與び報果を除く。此五門竟る。

（一九）次に三性に就いて五果を分別す。若し善業を論ずれば、還つて善法を用て、以て四果と爲す。其報果を除く。善は報に非ざるが故に、不善法を用て、以て二果と爲す。謂ゆる、功用果及び增上果なり。前の善心に從つて後の不善を生じ、次第緣起するを功用果と名く。前の善心を用て、以て意根と爲して不善の識を生じ、增上緣起するを增上果と名く。不善の法は、是れ報に非ざるを以ての故に其報果無く、是れ同類相生の法に非ざるが故に其依果無く、解脫に非ざるが故に、解脫果無し。無記法を用て、以て三果と爲す。其依果を除く。同類に非ざるが故に、解脫果に非ず。無記法は解脫に非ざるを以ての故に。不善業とは、還つて不善を用て、以て三果と爲す。其報果及び解脫果を除く。彼善法を用て、以て二果と爲す。謂はく、功用果、增上果なり。前の不善より後の善法を生じ、次第緣起するを功用果と名く。前の不善心は以て意根と爲し、後の善心を生じて、以て意識と爲し、增上緣發するを增上果と名く。善は、報に非ざるが故に其報果無く、同類に非ざるが故に其

【二〇】次に三世に就いて其相を分別す。

依果無く、不善の法は、結を斷ぜざるが故に解脱果無し。無記法を用て、以て四果と爲す。解脱果を除く。問うて曰はく、『不善を無記法に望むるに、是れ同類に非ず。何の因緣の故に、依果有ることを得る。』論に自ら釋して言はく、『欲界地の中の身、邊二見は、是れ無記なりと雖も、彼欲界不善煩惱に望めて、染汚の類同じ。同類を以ての故に、彼不善より此無記を起すを依果と名くることを得。』又苦集の下の見、疑、無明は、是れ其遍因なり。此遍因は一切の染汚の法を增長す。欲界地の中の身邊兩見は、此因に依つて生ず。故に依果と名く。無記の業は、還つて無記を用て、以て三果と爲す。謂ゆる、依果、功用の果、及び增上果なり。無記の業は、報因に非ざるが故に其報果無く、無記は是れ解脱の法に非ざるが故に解脱果無し。彼善法を用て、以て二果と爲す。謂はく、功用果及び增上果なり。前の無記より次いで後の善を生じ、次第緣起するを功用果と名く。無記の心は、以て意根と爲し、後の善心を生じて、以て意識と爲して增上緣發するを增上果と名く。善は報に非ざるが故に其報果無く、同類に非ざるが故に其依果無く、無記の法は結を斷ぜざるが故に解脱果無し。不善法を用て、以て三果と爲す。其報果及び解脱果を除く。問うて曰はく、『何が故に、依果有ることを得る。』『此義は前の不善の業を、無記法に望めて依果を生ずると、義同じ。功用、增上は前に類して知るべし。』此六門竟る。

〔二〇〕次に三世に就いて其相を分別す。過去の業を、三世の法に望めて四果有ることを得。解脱果を除く。解脱の法は、世に墮せざるを以ての故に、現在の法を、現在の法に望めて二

【三三】次に諸地に就いて五果を分別す。

果有ることを得。謂はく、功用果及び增上果なり。前後に非ざるが故に、共報果及以び依果無く、解脫果無し。義は前の釋に同じ。問うて曰はく、『現在を、還つて現在に望めて前後無きが故に、後報果及び依果無くんば、過を過去に望めて、云何が有ることを得る。』釋して言はく、『過去を還つて過去に望めては、時の中、寬長なるが故に、之有ることを得、現在を現に望めては、時の中、短促なり。所以に有らざるなり。』現を未來に望めては、還つて四果有り。解脫果を除く。未來の業を未來法に望めて、三果有ることを得。謂ゆる、報果、功用、增上なり。共依果及び解脫果無し。解脫果無きの義在ること知るべし。何の義を以ての故に共依果無き。未來は未だ起らず。前後無きが故に。若し爾らば、何が故に、報果有ることを得る。釋して言はく、報因、果を生ずるを以て、異類相起ること有るは、法當に在りと雖も、因果相分るるが故に、之れ有りと說く。若し依果を論ずれば、同類相起り、同類分れ難し。要ず已に起る處に依果を說くことを得るは、未來世の中の因と果と同じく、皆未だ起らず、前後を別ち難し。故に依果無し。若し爾らば、何が故に、功用果及び增上果有る。功用、增上は前後を待たずして、而も有ることを得るが故に。此七門竟る。

（三三）次に諸地に就いて五果を分別す。地は、謂はく、九地なり。法は欲界より乃ち非想に至る。得果は云何。『雜心』に說くが如し。自地は自地の四、或は他地の二を以てす。若し正思惟地には亦解脫果有り。初に自地。自地の四と言ふは、自地の業を自地の法に望めて、四果有ることを得。解脫果を除く。言ふ所の、或は他地の二を以てすとは、若し有漏の業

【三】次に學等に就いて五果を分別す。

を、還つて他地の有漏の法に望むれば、二果有ることを得。謂はく、功用果及び增上果なり。自地の心の後に他地の心を起し、次第緣起して功用果有り。自地の心は、以て意根と爲し、他地の識を生じ、增上緣發して增上果有り。若し無漏の業を、他地の中の無漏の法に望むれば、依果有ることを得。多少不定なり。故に說いて或と爲す。問うて曰はく、『何が故に、有漏の法を他地の中に望めて依果を說かざる。無漏相望めて依果を說くや。』釋して言はく、『有漏の繫地別なるが故に、異地相望するに類別に名異なり。故に依果に非ず。無漏は是れ繫地の法に非ざるが故に、異地相望して依果を說くことを得。若し正思惟地も亦解脫果有りとは、謂はく、八禪地は無礙の道なり。當に知るべし。又其解脫果有ることを。

此八門竟る。

〔三〕次に學等に就いて五果を分別す。法に三種有り。一には學法、二には無學法、三には非學非無學法なり。學業を學に望めて三果有ることを得。謂ゆる、依果、功用果、增上果なり。同類相起るが故に、依果を說く。相應、共有及び次第緣は、功用果有り。前を意根と爲し、後を意識と爲す。增上緣起して增上果有り。無學法を以て亦三果と爲す。前と相似す。彼非學非無學の法を用て、以て三果と爲す。謂はく、解脫果、功用果及び增上果なり。無爲解脫は是れ學心、無學心に非ざるが故に、解脫果有り。學心の後より有漏心を起して、次第緣起するを功用果と名く。彼學心を用て、以て意根と爲し、有漏心を生じて、以て意識と爲し、增上緣起するを增上果と名く。無學業とは、無學の法を用て、以て三果と爲す。

【二三】次に斷法に就いて五果を分つ

謂ゆる、依果、功用果、增上果なり。彼學法を用て、以て一果と爲す。謂はく、增上果なり。謂はく、無學の後退して學心を起す。無學を彼不障礙に望むるが故に、上果有り。問うて曰はく、『何が故に、共依果無き。』『上法を下に望むるに、依因に非ざるが故に。』又問ふ、『何が故に、功用果無き。』『是れ相應、共有の法に非ざるが故に。又次第相生の法に非ざるが故に。』問うて曰はく、『向に無學心の後退して學心を起すと言ふ。云何が、說いて是れ次第に非ずと言ふや。』釋して言はく、『復無學の後退して學心を起すと雖も、無學心の中に終に退する理無し。要ず有漏に在りて方に退する義有るが故に、次第に非ず。次第に非ざるが故に、功用果無し。彼非學非無學法を用て、以て二果と爲す。謂はく、功用果及び增上果なり。無學心の後、世俗心を起し、次第緣起して功用果有り。無學の意根、世俗心を生じて、以て意識と爲し、增上緣起するを增上果と名く。若し彼非學非無學業還つて非學非無學法を用て、以て五果と爲さば、彼學法及び無學法を用て、亦二果有り。謂はく、功用果及び增上果なり。』此九門竟る。

(二三)次に斷法に就いて五果を分別す。法に三種有り。一には是れ見斷、謂はく、見諦の惑なり。二には是れ修斷、謂はく、修道の惑と及與び一切の有漏の業果となり。修道の煩惱は、正しく共體を斷ず。自餘の業果は、但繫縛を斷じて、共體を斷ぜず。三には是れ無斷、謂はく、無漏法の業なり。見斷の業は見斷の法を用て、以て三果と爲す。彼報果及び解脫果を除く。修斷の法を用て、以て四果と爲す。解脫果を除く。無斷の法を用て、以て一果と

【二四】義聚第十六段に六因の義を明す中、五門分別あり。初に辨相。

【所作因とは等】一に所作因を明す

爲す。謂はく、增上果なり。彼等智斷結無爲に望めて、障ふること能はざるが故に增上果有り。修斷の業は修斷の法を用て、以て四果と爲す。解脫果を除く。見斷の法を用て、以て二果と爲す。謂はく、功用果なり。次第して起るが故に、及び增上果なり。增上緣と爲りて彼法を起すが故に、無斷の法を用て、以て三果と爲す。謂はく、解脫果、功用果、增上果なり。世俗禪に依つて煩惱を滅するが故に、解脫果を得、世俗禪に依つて無漏を起すが故に、功用果及び增上果を得。無斷の業は無斷の法を用て、以て四果と爲す。其報果を除く。見斷の法を用て、以て一果と爲す。謂はく、增上果なり。此果寬通するが故に、之を有することを得。修斷の法を用て、以て二果と爲す。謂はく、功用果及び增上果なり。無漏心の後、有漏心を起して次第緣生するが故に、功用果有り。無漏の意根は有漏の識を生じ、增上緣發するが故に、增上果有り。五果の義略して辨ずること是の如し。

六因の義に五門分別あり。相を辨ずる一。時に就いての分別二。果に對しての分別三。歷法の分別四。大小の同異五。

(二四)初に共相を辨ず。六因の義は『毘曇論』に出づ。『大智論』の中にも亦廣く分別す。一には所作因、二には共有因、三には自分因、四には遍因、五には相應因、六には報因なり。故に彼偈に言はく、「所作、共、自分、一切相應報、是六種の因より、轉た有爲の法を生ず」と。所作因とは、諸法起る時、其自體を除いて萬法を障へず、其をして生ずることを得しむるを所作因と名く。空に色を生ずるが如く、地に草木を生ずるが如き等なり。故に彼偈

【共有因とは】二に共有因を明す。

【自分因とは等】三に自分因を明す

に言はく、「相似、不相似は、各共自性を除く、一切是れ作因なり。生ずる時障へざるが故に」と。共有因とは、諸法起る時、同時同性、共有の法展轉して因と爲すを共有因と名く。心心法集起するの時、同時に卽ち諸の心數法、生住滅等有るが如きを、說いて共有と爲す。若し是れ禪定無漏の心、同時に卽ち定道の無作有るを、彼心法に望むれば、亦是れ共有なり。是の如き色法及び非色心不相應法集起するの時、同時に卽ち生住滅等有るを共有と爲すなり。自分因とは、同類の法、前に籍つて後を生ずるを自分因と名く。中に於て、略して四義を以て分別す。一には三性の分別、謂ゆる、善惡無記性なり。善法は唯善法の與に因と爲り、不善無記の與に因と爲らず。不善無記を彼善法に望むれば、亦因の義無く、不善は還つて不善の與に因と爲る。若し無記に望むれば、義は須らく分別すべし。無記に二有り。一には穢汚、二には白淨なり。欲界地の中の身邊二見、及び上界の一切の煩惱を、名けて穢汚と爲す。報生、威儀、工巧、變化は煩惱に非ざるが故に、名けて白淨と爲す。不善は彼穢汚無記の與に、互に因と爲ることを得。同じく是れ染汚煩惱の法なるが故に。若し白淨に望むれば、則ち因の義無し。無記法の中、迭互に相望むれば、穢汚は還つて穢汚の與に因と爲り、白淨は還つて白淨の與に因と爲る。穢汚、白淨の二種を相望むれば、則ち因の義無し。二には品數の分別。品とは、謂ゆる、上中下品なり。善の中に二有り。一には生得、過去に久習して生ずれば、便ち之を得。二には方便、現在修起す。若し生得を論ずれば、上中下品展轉して因と爲る。彼は先に成じて、增習に非ざ

【遍因とは等】四に遍因を明す。

るを以ての故に。若し方便を論ずれば、下は勝の因と爲る。勝は下の因に非ず。同品相望すれば、亦因の義有り。不善法の中、上中下品展轉して因と爲る。彼性成じて、始習に非ざるを以ての故に。又上地より退して下に生ずる時、下地の煩惱の上中下品、一時に頓に得ず。何に隨つても先に起るを則ち因と爲すなり。無記法の中、穢汚無記は不善と同じ。白淨の中の四種相望むれば、生得は唯報生、威儀、工巧、變化の四種の與に因と爲り、威儀は唯威儀、工巧、變化の與に因と爲り、工巧は唯工巧、變化の二種の與に因と爲り、變化は唯變化の與に因と爲る。三には時に就いて分別す。時は、謂はく、三世なり。過去世の中の善惡等の法、前に之を起す者は、後の與に因と爲る。及び現在、未來の與に因と爲る。現在世の中の善惡等の法、前に之を起す者は、後の與に因と爲る。及び未來に望めて自分因と爲る。未來の法は、還つて未來に望めては自分因無し。未起の法は先後無きを以ての故に。四には處に就いて分別す。處は、謂はく、九地なり。始め欲界より乃ち非想に至る。若し有漏の法は當地を因と爲す。異地相望すれば、則ち因の義無し。有漏法は異地相望して因果斷ずるを以ての故に。若し無漏法は異地相望して、展轉して因と爲る。無漏法は地に繫せざるを以ての故に。復異地なりと雖も、展轉して因と爲る。下は勝の因と爲り、勝は下の因に非ず。遍因と言ふは、苦、集諦の下の疑、見、無明能く一切の染汚の法を生ずるが故に、名けて遍因と爲す。總相是の如し。中に於て、略して四句を以て分別す。一には其相を定別す。遍因の不同に十一種有り。苦の下に七有り。謂ゆる、五見、疑と及

び無明となり。集の下に四有り。邪見と見取と疑と及び無明となり。是れ十一なり。然るに苦諦の下に具に十使有り。五利と五鈍となり。集の下に七有り。謂はく、貪と瞋と慢と邪見と見取と疑と及び無明となり。何が故に、但苦の下の七使と、集の四使とを說いて遍因と爲すや。此十一は、迷理の惑なるを以て、通じて一切有漏の法に迷うて、能く一切の染汚の法を增すが故に、說いて遍因と爲す。貪瞋及び慢は、事煩惱を緣ずるなり。是れ通じて一切の有漏、苦集の理に迷ふに非ず。一切の染汚を增長すること能はず。是義を以ての故に、遍因と名けず。滅、道諦の下の諸使の煩惱は、何が故に、名けて遍因と爲さざる。然るに滅、道の下の諸使の煩惱は、滅、道に迷うて一切の煩惱を迷縛すること能はず。一切の染汚を增長すること能はず。是義を以ての故に、遍因と名けず。十一遍使は一切の五行煩惱を迷縛す。一切の煩惱は苦、集諦の攝なり。是義を以ての故に、唯苦、集に就いて、說いて遍因と爲す。修道の四使も、亦是れ事中の縛事の煩惱にして、一切の染汚を增長することと能はざれば、遍因と名けず。二には遍使、遍因相對して異を辨ず。異に三種有り。一には寬狹の不同。十一遍使は、唯是れ苦集二諦の下の見、疑、無明なり。其餘の心心數法、生住滅等に通ぜず。是を名けて狹と爲す。遍因は通じて苦、集諦の下の見、疑、無明及び餘の一切の心心數法、生住滅等を攝す。是を名けて寬と爲す。二には長短の不同。十一遍使は、三世に統通す。之を名けて長と爲す。遍因は唯過去、現在に在りて、未來に通ぜず。是を名けて短と爲す。三には所生所使の法に就いて通局の不同なり。十一遍使は、

【相應因とは等】五に相應因を明す

【報因と等】六に報恩を明す。

【二五】第二に時に就いて分別す。

遍く一切の有漏の法を使す。是故に通と名く。遍因は唯染汚の法を生ず。自餘の善法白淨無記は、彼所生に非ず。染の中に就いて、其生ずる者に從つて、之に望めて因と說く。從つて生ぜざる者は、則ち彼因に非ず。是故に局と名く。遍使、遍因差別是の如し。三には時に就いて分別す。時は、謂はく、三世なり。此三世の中、前は後の因と爲る。後は前の因に非ず。過去世の如し。前起の煩惱を後に望めて因と說く。及び現在、未來に望めて因と爲す。現在世の中、前は後因と爲し、未來世に望むれば、亦因と說くことを得。未來は還つて未來の法に望むれば、則ち因の義無し。未來は未起にして前後無きが故に。四には處に就いて分別す、處は、謂はく、欲界乃至非想なり。此地地の中、當地に因と說く。他地に望めず。彼染汚の法は繫地別なるが故に。故に彼偈に言はく、「苦集は自地に於て、見、疑及び無明なり。是れ一切遍因なり」と。相應因とは、止心法に在り。心起る時の如し。即ち一切の諸の心數法有りて、心と相應す。是相應の法、展轉相助して爲作する所有るを、相應因と名く。中に於て、心王を數に望めて因と說く。心心相望すれば、則ち因の義無し。一時の中に二心無きに由るが故に。數を心王に望むれば、亦因と說くことを得。但數の中に就いて、異數相望して展轉して因と爲る。同一の數相望して因と說くに非ず。報因と言ふは、一切の三界の有漏の善法及與び不善なり。能く一切の苦樂等の報を生ず。故に報因と名く。因相是の如し。

（二五）第二門の中に、時に就いて分別す。時は、謂はく、三世なり。六因の中の所作は最も寬

【三六】次に第三に果に對して分別す

し。故に三世及び非三世に通ず。有爲の法の中の所作因は三世に通ず。無爲の法の中の所作因は三世の攝に非ず。自分、遍因は、唯過現に在りて、未來に通ぜず。未來は未起にして、前後無きが故に。相應、共有及以び報因は、其三世に通ず。故に彼論に言はく、「作因は一切法なり。二因は二世を說き、餘の三は三世を說く」と。若し未來は前後無きが故に、自分及び遍因を說かざらしむれば、是れ則ち未來は前後無きが故に、應に報因無かるべし。』釋して言はく、報因は異類にして果を牽く。因の義を彰すこと顯なるが故に、因と說くことを得。自分、遍因は同類相起る。因相微隱なるが故に、說かざるなり。

〔三六〕第三門の中に、果に對して分別す。果別に五有り。一には增上果、二には依果、三には報果、四には功用果、五には解脫果なり。增上果とは、彼眼識の如く、其眼根の增上緣の爲に生ずるが故に、眼根に望めて增上果と爲す。乃至意識を意に望むるも亦然なり。依果と言ふは、前より後を生じ、同類相起るを名けて依果と爲す。報果と言ふは、善惡等の業、苦樂の報を得るを名けて報果と爲す。功用果とは、謂はく、現在世に成辨する所有るを功用果と名く。『地持』に此を名けて士夫果と爲す。解脫果とは、『雜心』の中には世諦の淨智及び無漏道に諸の煩惱を斷じて、得る所の無爲を解脫果と名くと爲す。『地持』の中には、世俗智の諸の煩惱を滅するは、彼究竟に非ざれば、解脫果に非ずと明す。唯無漏斷結の處を取つて解脫と爲すなり。此五果の中、所作因は增上果を得、自分、遍因は同類相生じて彼依果を得、其報因は彼報果を得、相應、共有は功用果を得、所作因の中の對治道は解

【二七】次に第四に法に歴して分別す

脫果を得。

〔二七〕第四門の中に、法に歴して分別す。法に七種あり。一には報法、二には不善、三には穢汚無記、四には威儀等の白淨無記、五には一切有漏の善法、六には初念無漏の道を除いて、自餘の一切の無漏の善法、七には初念無漏の法なり。此七種は攝して四階と爲す。初の一門を卽ち一階と爲す。次に兩門有り、第二階と爲す。次に三門有り、第三階と爲す。末後の一門を第四階と爲す。初階の中、要ず分つて二と爲す。一には心法、二には非心法なり。彼心法とは、五因より生ず。其遍因を除く。彼報法は煩惱に非ざるを以ての故に。非心法は四因より生ず。其遍因を除く。之義は前の釋に類同す。相應因を除く。心法に非ざるが故に。第二階の中、亦心法及び非心法有り。彼心法は五因より生ず。其報因を除く。報法に非ざるが故に。非心法は四因より生ず。彼報因を除く。報法に非ざるが故に。相應因を除く。心法に非ざるが故に。第三階の中、亦心法及び非心法有り。彼心法は四因より生ず。其報因を除く。報法に非ざるが故に。亦遍因を除く。煩惱に非ざるが故に。非心法は、三因より生ず。彼報因を除く。及び遍因を除く。義は前の釋に同じ。相應因を除く。心法に非ざるが故に。第四階の中、亦心法及び非心法有り。彼心法は、三因より生ず。其報因を除く。報に非ざるを以ての故に。亦遍因を除く。煩惱に非ざるが故に。自分因を除く。初の無漏には自分無きを以ての故に。非心法は二因より生ず。謂はく、所作因及び共有因なり。一法として一因より生ずること有ること無し。

【二八】次に第五に共同異を辨ず。

【二九】此四空の義は第二卷に出す所の文と全く同じ。故に重複の煩を避けて今復此に再び之を譯さず。

【三〇】義聚第十七段に五法三自性の義を明す中、三門分別あり、初に五法を辨ず。先づ名義。

(二八)第五門の中、共同異を辨ず。同異の義『大智論』に說くが如し。言ふ所の同とは、彼の中に六因の義を說くが如し。相は『毘曇』に同じ。更に差別無し。言ふ所の異とは、小乘法の中には、相に隨つて定を執す。此等の幻化緣起を知らず。菩薩は幻の如く、化の如く、水中の月、明鏡の中の像等の如く、畢竟じて一法として別に自性を守ること有ること無く、定性無しと雖も、因緣無きにあらずと了知す。此れ即ち是れ共同異の相なり。六因の義略して辨ずること是の如し。

(二九)四空の義に兩門分別あり。相を辨ず一。相を攝す二。

五法三自性の義に三門分別あり。一に五法を明す。二に三性を明す。三に相對分別す。

(三〇)先に五法を辨ず。五法の義は『楞伽經』に出づ。自體を法と名く。一切の諸法は各體性有り。故に自體と云ふ。法相同じからず、離分して五と爲す。一には名、二には相、三には妄想、後に翻ぜし經の中には、名けて分別と爲す。四には正智、五には如如なり。後に翻ぜし經の中には、名けて眞如と爲す。名は少異なりと雖も其義大いに同じ。此五の中、前の三は生死、後の二は涅槃なり。名とは、謂ゆる、妄想施設の諸法の名字なり。諸法流滅の言教を宣說するが故に、稱して名と爲す。是を以て經に言はく、「名は、謂はく、瓶等なり」と。又復世間假名の法は、實を窮むれば體無し。但是れ名有るが故に、名と曰ふな

【體相は等】次に體相を辨ず。

り。言ふ所の相とは、彼世間假名の法の中に就いて、事相差別す。謂ゆる、色、聲、香、味、觸等は形色不同なり。故に名けて相と爲す。是を以て經に言はく、「眼色、耳聲是の如きの一切の處所、形相、色像等の現ずるを、名けて相と爲すなり」と。妄想と言ふは、卽ち前の立名取相の心、虛構不眞なるを、名けて妄想と爲す。故に經に說いて言はく、「名に隨つて相を取り、諸法を了別するを妄想と名くるなり」と。正智と言ふは、法の緣起は自性有ること無しと了し、妄分別を離れ、如に契つて眞に照すを、名けて正智と爲す。如如と言ふは、是れ前の正智所契の理なり。諸法の體同じきが故に、名けて如と爲す。一如の中に就いて、體は法界恆沙の佛法を備ふ。法に隨つて如を辨ず。如の義一に非ず。彼此皆如なり。故に如如と曰ふ。如は虛妄に非ず。故に復經の中には亦眞如と名く。然るに此如の理は、皆染淨に通じ、窮契すれば佛に在り。是故に通攝して、以て涅槃と爲す。實に對して之を論ずれば、五の中、前の三は是れ生死の法、次の一は涅槃、後の一は是れ理なり。名義是の如し。體相は云何。生死法の中の義に七重を別つ。一には根本迷實の妄想、二には妄想に依つて、便ち一切の境界の相生ずること有り。昏夢に因つて、便ち一切の夢境界の起ること有るが如し。三には是相に依つて、復心想を起し、取りて實有と爲す。之が爲に名を施す。四には是心に依つて、便ち名生ずること有り。五には名に依り已つて、復心想を起す。名に隨つて相を取るを、名けて覺觀と爲す。六には覺觀に依つて言說を起す。七には言說に依つて、復心想を起す。言に隨つて法を取る。此七が中の第一、第三、

【經】勝鬘經。

第五、第七に就いて、說いて妄想と爲す。第二重は之を說いて相と爲し、第四、第六は說いて以て名と爲す。然るに此名相及與び妄想、若し情に隨つて取れば、悉く是れ狂惑顚倒の所見、畢竟無法なり。若し其本を窮むれば、皆是れ法界如來藏性なり。顚倒に隨つて轉じて此三事と爲す。故に經に說いて言はく、「自性淸淨は不染にして染す」と。義此に在り。前の三是の如し。後の二は云何。然るに第八眞識の中に就いて、義に隨つて二を分つ。一には體、二には用なり。其體を論ずるなり。即ち是れ法界恆沙の佛法、同一體性にして互に相集成して、一に一切を備へ、一切一法を成ず。良に法界互に相成ずるを以ての故に、一門として別に自性を守ること有ること無し。諸法を說いて、之を以て有と爲すが如し。義に從つて別分するに、諸法の外に別の法の自性の得べきもの有ること無く、得べからざる有り。有法は是れ如なり。還つて即ち彼有等の諸法を說いて、之を以て空と爲す。義に隨つて別分するに、諸法の外に別の空體の自性の得べきもの無く、空不可得なり。空性も亦如なり。乃至一切諸法は非有無と爲すと宣說す。義に隨つて分別するに、有無等の外に、別の一の非有非無の自性の得べきもの有ること無し。是故に亦如なり。諸門類して爾り。畢竟じて一法、一義として、別に自性を守ること有ること無し。皆無性なるが故に、說いて如如と爲す。其用を論ずれば、恆沙の佛法、心事を集成す。此心事、染に在りて、則ち惑と妄想と應じて生死を緣集するを、說いて前の三と爲す。名相妄想淨に在りて染を息むれば、自體に契窮し、便ち法界差別の行德を成ず。此淨用に就いて、說いて正

【三一】第二に三性を明す。

【三二】第三に五法を以て三自性に對して共同異を辨ず

智と爲す。五法是の如し。此一門竟る。

(三一)次に三性を明す。三種の自性も亦『楞伽』に出づ。自性と言ふは、諸法の自體なり。故に自性と爲す。此れ猶是れ共法の異名なり。然るに性の體不同なれば、離分して三と爲す。一には妄想、二には緣起、後に翻ぜし經の中には、名けて因緣と爲す、三には成と爲す。後に翻ぜし經の中には、第一義と名く。三の中、前の二は是れ生死の法、後の一は涅槃なり。妄想と言ふは、謂ゆる、凡夫迷實の心、諸法の相を起し、相を執して名を施し、名に依つて相を取る。所取不實なり。故に妄想と曰ふ。故に經に說いて言はく、「虛妄分別の名字及び相を妄想と名くるなり」と。心法一に非ず。何の義を以ての故に、但妄想と云つて、妄受及び餘心法と說かざる。然るに心法の中、想は正しく是れ取相の義なり。執取の中に强きが故に、偏に之を說く。理實には、一切の心心數法皆是れ妄なり。因緣と言ふは、前の妄想の中の能取の心、及び所取の法、其體實を窮むれば、皆自性に非ず、因緣の有なり。故に因緣と曰ふ。法は緣より起る。故に復經の中に、說いて緣起と爲す。言ふ所の成とは、諸佛如來の離妄眞智及び智の所證なり。諸法の如理の體は虛敗に非ず、自性成實なり。故に名けて成と爲す。前の二種に對して此法勝出す。故に復經の中に、第一義と名く。此二門竟る。

(三二)次に五法を以て、三自性に對して共同異を辨ず。此五及び三は、離合を異と爲す。體性は同なり。故に經に說いて言はく、「彼三自性を五の中に攝入す。即ち五法を攝して三自

性と爲す」と。相狀は如何。彼五法の中の名相妄想を三性の中に入れて、攝して妄想と爲す。因緣自性と正智如如合して成性と爲す。故に經に說いて言はく、「名相妄想は自性二相、正智如如を則ち成相と爲す」と。之に對して且く然り。義猶解し難し。經文に准依するに、五の中、前の三は通じて妄想因緣の自性と爲し、別して分別せず。云何が、前の三通じて、名けて妄想因緣と爲すことを得る。妄想なれば、還つて妄想を自性と爲す。義知り易きに在り。是を以て經に言はく、「名に從つて虛妄分別を生ず」と。是れ妄想の性なり。分別は猶是れ妄想の義なり。彼名及び相は、名を尋ねて相に及ぶ。名を尋ねて之を取るは、妄想に非ずと雖も、其根本を窮むれば、妄想の所起なり。末を攝して本に從ふ。是故に通じて妄想自性と名く。故に經に說いて言はく、「彼名及び相は、是れ妄想の性なり」と。云何が、前の三、通じて、名けて、因緣自性と爲すことを得る。名相妄想は、是れ情事なりと雖も、其體實を窮むれば、悉く是れ幻化因緣の法なり。故に因緣と曰ふ。通相是の如し。若し別して之を分たば、亦宣說することを得。五が中の名相は、即ち是れ三が中の因緣自性なり。彼名相は妄想因緣より生ずるを以ての故に、因緣と名くるなり。五が中の妄想は、即ち是れ三が中の妄想自性なり。五法三性略して辨ずること是の如し。

六種相門の義。

【三三】義聚第十八　段に六種相を明す

（三三）六種相とは、『華嚴經』十地品に出づるなり。諸法の體狀は、之を謂ひて相と爲し、門別を門と名く。此門の辨ずる所は餘門に異るなり。故に門別と曰ふ。經の中に不二法門、有諍解脫門等と說くが如し。若し行心に對すれば、能く通じて趣入す。故に門と曰ふなり。門別不同なり。故に六種有り。謂ゆる、總、別、同、異、成、壞なり、此六は乃ち是れ諸法の體義なり。體義虛通して、旨在らずといふこと無し。義は遍在なりと雖も、事は隔てて之無し。是を以て論に言はく、「一切の十句皆六相有り。事を除く。事は、謂はく、陰、界、入等なり」と。陰、界、入等彼此相望すれば、事別隔礙にして、斯六を具せず。所以に之を除く。若し事相を攝して、以て體義に從はば、陰、界、入等一一の中に、皆無量の六相門を具するなり。今且らく一の色陰の中に就いて、其六相を辨ず。餘は類して知るべし。一の色陰の如く、同體に具に恆沙の佛法有り。謂はく、苦、無常、不淨、虛假、空、無我等の一切の佛法なり。是等の諸法は、義は別にして、體は同なり。互に相緣集して、彼同體の一切の佛法を攝して、以て一の色を成ず。色を名けて總と爲す。此總の中に就いて、無量の恆沙佛法を開出す。色は彼法に隨つて、則ち無量有り。謂ゆる、苦の色、無常の色、不淨の色、名用の色、空無我の色乃至眞實緣起の色、是の如く無量の差別の色、之を名けて別と爲す。彼別の中に就いて、苦無常等の諸法の上に、皆色の義有り。之を名けて同と爲す。色の義は同なりと雖も然も彼色の苦は色の無常に異るなり。異は是の如く一切なり。各各不同なる、是を名けて異と爲す。彼異の中に就いて、義門殊なりと雖も、其

體別ならず。體別ならざるが故に、諸義衆しと雖も、相離るることを得ず。相離れざるが故に、之に隨つて色を辨じて、攝して一と爲すことを得。是故に成と名く。成は猶略のごとし、體別ならずと雖も義門恆に異るなり。義門異るが故に、一の色、之に隨つて多色と爲すことを得。之を目けて壞と爲す。壞は猶廣のごとし。實に據つて之を論ずれば、前の四門を說いて義を辨ずるに、應に足るべし。同異に約して前の二門を成ずるが爲の故に、六有るなり。色の義是の如し。今更に彼色無常の中に就いて、以て六相を辨ず。餘は類して知るべし。諸の義を總攝して、以て無常と爲す。是を名けて總と爲す。此總の中に就いて、無量恆沙の佛法を開出す。無常は彼に隨つて則ち無量有り。謂はく、色の無常、苦の無常、不淨の無常、空の無常、無我の無常乃至眞實緣起の無常、是の如き等の無量差別有り。是を名けて別と爲す。彼別の中の色の苦等の上に就いて、皆無常有り。是を名けて同と爲す。無常は同なりと雖も、而も色の苦等各各不同なり。是を名けて異と爲す。此異の中に就いて、義門殊なりと雖も、體性は別ならず。性別ならざるが故に、義門衆しと雖も、相離るることを得ず。相離れざるが故に、諸の義門に隨つて辨ずる所の無常は、攝して一と爲すことを得。是を名けて成と爲す。體は別ならずと雖も義門は恆に異るなり。義門異るが故に、無常は之に隨つて衆多と爲すことを得。是を名けて壞と爲す。是の如く色の中の無量の諸義、及び餘の一切の陰、界、入等は、此に准じて知るべし。六相の義は旣に諸法に通ず。法に依つて行を成ずれば、行も亦齊しく有り。是故に初地第四願の中に、一

切の菩薩の所行を宣說するに、皆總別同異等有るなり。行に隨つて說く所は廣し、『地論』の如し。此六は乃ち是れ大乘の淵綱圓通の妙門なり。若し能善く斯趣を會すれば、一異等の執、逍然として迹無し。六相の義略して辨ずること是の如し。

大乘義章　卷第三

【一】義聚第二十一段に八識義を明す中、十門分別あり。初に釋名。

【彼經】楞伽經第二。

【阿陀那等】以下、阿陀那の名義を明す。阿陀那とは梵語にアーダーナ（Ādāna）

大乘義章　卷第三末

八識の義に十門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。根塵の有無三。大小の有無四。眞妄の依持五。眞妄の動習六。迷悟の修捨七。迷悟の分齊八。修捨の分齊九。邪執を對治す十。

（一）第一に名を釋す。八識の義は『楞伽經』に出づ。故に彼經の中に、「大慧、佛に白さく、世尊、八種の識を立てざるや。佛、言はく、建立す」と。言ふ所の識とは、乃ち是れ神知の別名なり。義に隨つて識を分別するに、乃ち無量なり。今一門に據つて、且く八種を論ず。八名とは、是れ何ぞや。一には眼識、二には耳識、三には鼻識、四には舌識、五には身識、六には意識、七には阿陀那識、八には阿梨耶識なり。八の中、前の六は根に隨つて名を受け、後の二種は體に就いて稱を立つ。根は、謂はく、眼、耳、鼻、舌、身、意なり。斯に從つて識を別つ。故に六種有り。體は眞僞を含む。故に復二を分つ。前の六が中に就いて、色に對するを眼と名け、乃至第六に、法に對するを意と名く。此に依つて心を生じて、能く了別有るが故に、眼識乃至意識と名く。阿陀那とは、此方の正翻には、名けて無解と爲す。體は是れ無明癡闇の心なるが故に、義に隨つて傍に翻ずるに、差別に八有り。一には無明識、體は是れ根本無明地の故に。二には業識と名く。無明の心に依つて、不覺にして妄念忽然として動するが故に。三には轉識と名く。前の業識に依つて、心相漸く麤なり。

【阿梨耶等】以下、阿梨耶の名義を明す。阿梨耶とは梵にアーラヤ(Ālaya)

【經】楞伽經第四

【經】勝鬘經。

【論】起信論。

外相分別の取を轉起するが故に。四には現識と名く。所起の妄境の自心に應現すること、明鏡の中に色相を現ずるが如くなる故に。五には智識と名く。前の現識所現の境の中に於て、染淨違順の法を分別するが故に。此れ乃ち昏妄分別を智と名く。是れ解脫を明して智と爲すには非ざるなり。六には相續識と名く。妄境心を牽き、心は境界に隨つて、攀緣して斷ぜず、復能く善惡の業果を住持して、斷絕せざるが故に。七には妄識と名く。總じて前の六種は眞實に非ざるが故に。八には執識と名く。我を執取するが故に。又一切虛妄の相を執するが故に。阿梨耶とは、此方の正翻に、名けて無沒と爲す。生死に在りと雖も、失沒せざるが故に。義に隨つて傍に翻ずるに名別に八有り。一には藏識と名く。如來の藏を此識と爲すが故に。是を以て經に言はく、「如來の藏を名けて藏識と爲す」と。此識の中に法界恆沙の佛法を涵含するを以ての故に、名けて藏と爲す。又空義の爲に覆藏せらるるが故に、亦名けて藏と爲す。二には聖識と名く。大聖の所用を出生するが故に。三には第一義識と名く。殊勝を以ての故に。故に『楞伽經』に之を說いて、以て第一義心と爲す。四には淨識と名け、亦無垢識と名く。體不染の故に。故に經に說いて、自性淨心と爲す。五には眞識と名く。體妄に非ざるが故に。六には眞如識と名く。論に自ら釋して言はく、「心の體性に所破無きが故に、之を名けて眞と爲す」と。所立無きが故に、說いて以て如と爲す。七には家識と名け、又宅識と名く。是れ虛妄の法の所依處なるが故に。八には本識と名く。虛妄心の與に根本と爲るが故に。名別是の如し。八の中前の六は了別する所有れ

【二】第二に八識の體相を辨ず、先づ體相一といふを明す。

【或は等】以下、體相二分を明す、中に三門あり、第一に通別して二となすを明す、中に亦二。先づ第一の義。

ば名けて識と爲すべし。後の二種は、云何が識と名くる。釋するに兩義有り。一義に釋して云はく、「後の二は了別の因に非ずと雖も、而も是れ了體なり。故に名けて識と爲す」と。第二義とは、八識並に了別の義有り。故に通じて識と名く。云何が了別する。了別に三有り。一には事相の了別、謂はく、前の六識なり。二には妄相の了別、謂はく、第七識なり。三には眞實自體の了別、謂はく、第八識なり。了別既に通ず。是故に八種倶に名けて識と爲す。名義是の如し。

(二)第二門の中に、其體相を辨ず。中に於て廣略開合不定なり。或は說いて一と爲す。彼色心は、色に非ず、心に非ず、三聚法の中の一切の識を、總じて名けて心と爲すが如し。或は分つて二と爲す。二に三門有り。一には通別して二と爲し、二には眞妄を二と爲し、三には體相を二に分つ。通別と言ふは曲く兩門有り。其一義とは、前の六は事識なり。說いて以て別と爲す。七八を通と爲す。前の六は事に隨つて境を取ること各異なり。前後間起す。故に名けて別と爲す。七八は常に有なるが故に說いて通と爲す。問うて曰はく、「前の六、何が故に、間起する。前の六は心境別體にして了し難し。作念して方に知る。作念各異なり。故に六別に起つて一體なることを得ず。又前の六識は、生ずること四緣に藉る。因緣と次第と緣緣と增上となり。所依の六根を增上緣と爲し、所緣の六塵を說いて緣緣と爲し、前に生ずる心法を開導して後を起すを次第緣と名け、自分相應共有の法等を以て因緣と爲す。一時に六種を具足すること、有ること無く、次第緣の義は是を六識と並べ

生ずることを得ずと爲す。』問うて曰はく、『若し次第緣別なるが故に、六識をして前後に生ぜしむと言はば、『毘曇』の說く所の無記は、心邊に十二の數有り。十の通大地及與び覺觀なり。善心起る時、二十二數あり。十二は前に同じ。十善地を加ふ。無記心に從ふ時は、十二の同數前に同類の次第緣と爲る有るをもつて、頓に起らしむべし。十善大地は、前に同數の次第緣と爲ること無し。何んが並び生ずることを得る。不善品に望めて難しと爲すも亦爾なり。五煩惱地と睡と無慚愧と十使の隨一、何に由りてか並び生ずる。』釋して言はく、『前に生ずる心心數法、總相を緣と爲して、開導して後を生ず。別の相對に非ざるが故に。後に起る所の諸の心心法、若は多、若は少、皆同じく並び生ず。』問うて曰はく、『心法は別の相對に非ず。總じて前の緣に藉つて、後に多の心法一時に生ずとならば、六識の心、何が故に、爾らざる。前の一識に藉つて次第緣と爲り、後の多識一時に並び生ぜしむることと、何んが得ずと爲すや。』釋して言はく、『心と數法とに類せず。從來相扶けて、共に一緣を造り、共に一事を辨ず。故に並び生ずることを得。六識相望めて境を取ること各別に成辨するに、異有るが故に並び生ぜず。想受等の一一の數法、並び起ることを得ざるが如し。六識心王何んが並ぶことを得べきや。』問うて曰はく、『『楞伽』に宣說す。六塵一時に倶に現じて、六識並べ用ふること、云何が間起する。』釋して言はく、『彼說は是れ妄識の中に六識を集用す。事識の收に非ず。事識は並せざること、經論大いに同じ。』問うて曰はく、『何が故に、妄中の六識は一時に頓起し、事識は爾らざるや。』釋して言はく、『妄の中には、

【第二の義等】次に第二の義。

【次に等】第二に眞妄に就いて二とす。

境は心に從つて現ず。心の外に法無し。心現ずるを以ての故に、一時に並び生ず。事識の中には心境別體なり。別體了し難し。故に識並せず。妄の中の六識は、並用すること既に然り。眞の中の六識を、並用すること亦爾り。』問うて曰はく、『事の中には、取性の無明、始終常に有りて、遍く六識に通ず。何の義を以ての故に、名けて通と爲さざる。』釋して言はく、『彼乃ち事別の法の中に、各定性を立つ。取を一と爲すにあらず。故に通と名けず。』問うて曰はく、『眞妄二種の識の中に起る所の六識は、根に依ること同じからず。境を取ること各別なり。何の義を以ての故に、說いて別と爲さざる。』釋して言はく、『彼六は相似すとも別異にして、體を推すに唯是れ一心の所爲なり。心外に別無く、用を攝して體に從ふ。故に說いて通と爲す。一の義是の如し。第二の義とは、事妄及び眞の三重の識の中の所有の六識を、悉く名けて別と爲す。三重の識の中の所有る通の義を、皆名けて通と爲す。事の中の通とは、取性の無明なり。妄の中の通とは、妄執の我相及び無明地なり。義は後に解するが如し。眞の中の通とは、眞如の心體なり。亦後に釋するが如し。通別是の如し。』此一門竟る。次に眞妄に就いて、開合して二と爲す。前の六及び七を同じく妄識と名け、第八を眞と名く。妄の中の前の六は、因緣虛假の法に迷うて、妄に定性を取るが故に、名けて妄と爲す。第七妄識は、心外に法無く、妄に有の相を取るが故に、名けて妄と爲す。第八眞識は、體一味にして、妙に情妄を出づるが如し、故に說いて眞と爲す。又復緣に隨つて、種種に異變すれども、體に失壞無きが故に、名けて眞と爲す。一味の藥の、異味を

【次に等】第三に體相に就いて二を分つ。

【心眞如の等】以下、心眞如の義別に二あり、一に如實空、二に如實不空を明す。
【論】起信論。

【心生滅の等】下心生滅に亦二門ある中、一に不覺、二に不覺を辯ず。

流出して、而も體異無きが如し。又恆沙の眞法を以て集成し、内に自體の恆法を照すが故に、名けて眞と爲す。眞妄共の如し。此二門、次に體相に就いて、分つて以て二と爲す。『起信論』に說くが如し。一には心眞如門、是れ心の體性なり。二には心生滅門、是れ其心の相なり。眞に就いて眞を論ずれば、論體常寂にして平等一味なるを、心眞如と名く。又論に釋するが如し。此心の中に於て、法の壞すべき無きが故に、名けて眞と爲し、法の存すべき無きが故に、說いて如と爲す。妄に據つて眞を攝すれば、眞と妄と合して、緣集起盡くるを、心生滅と名く。心眞如の中、義別に二有り。一には如實空、論に自ら釋して言はく、「本より已來、一切の染法と相應せず。一切の法の差別の相を離る。謂はく、有相に非ず、無相に非ず。非有相に非ず、非無相に非ず。有無俱相に非ず。一相に非ず、異相に非ず。非一相に非ず、非異相に非ず。一異俱相に非ず。亦自相に非ず、亦他相に非ず。非自相に非ず、非他相に非ず。自他俱相に非ず。是の如く一切妄心の分別は、皆相應せざるが故に、名けて空と爲す。有相に非ずと言ふは、有の句を出でたり。無相に非ずと言ふは、無の句を出づ。非有に非ず、非無に非ずと言ふは、非有の無の句を出づ。有無俱に非ずとは、亦有亦無の句を出づ。餘も亦是の如し。二には如實不空、論に自ら釋して言はく、「妄想を離れて常恆不變なり。具に過恆沙の淨法滿足す。復空ならずと雖も、相の取るべき無く、離念の境界と唯證相應す」と。眞如是の如し。心生滅の中に亦兩門有り。一には本覺、生滅の中の眞なり。二には不覺、生滅の中の妄なり。本覺と言ふは、論に自ら釋して言は

【或は分つて等】次に三分別。中に三門先づ事妄及び眞離分して三とす亦中を六に分ち一に其相を分定す。

く、「無明不覺の心に對するを以ての故に、之を說いて覺と爲す。後際始覺の心に對するを以ての故に、說いて本覺と爲す」と。相狀は如何。論に自ら釋して言はく、「心體念を離れて虛空界に等しければ、所として遍ぜざること無し。即ち是れ如來の法身の體なるが故に、名けて本覺と爲す」問うて曰はく、『凡の時未だ智解有らず。何の義を以ての故に、之を說いて覺と爲す。』「論に自ら釋して言はく、『本より已來、大智慧光明の義有るが故に。遍く一切法界を照す義なるが故に。』之を名けて覺と爲す。」是義云何。眞心は是れ共智慧、三昧、神通、解脫一切の德性離染なる、即ち是れ一切德の故に。故に論に說いて言はく、「本より已來、一切性功德の法を具足す」と。彼心の中の智慧の性を說いて、以て智慧光明の義と爲す。又此心の中に過恒沙一切の佛法を具すること、妄心の中に一切の諸の虛妄の法を具足するが如し。心彼法に於て、同體照明由來障ふること無きを照一切境界の義と名く。此義有るを以ての故に、說いて覺と爲す。『華嚴經』の中も亦此說に同じ。故に彼文に言はく、「一切衆生の心微塵の中に、如來智、無師智、無礙智、廣大智等有り」と。不覺と言ふは、謂はく、無明地眞如を迷覆して、無量の諸の虛妄の法を出生す。故に不覺と曰ふ。不覺にして有爲一切の生死を緣集するを、心生滅と名く。體相是の如し。或は分つて三と爲す。三に三門有り。一には事妄及び眞、離分して三と爲す。二には眞妄、離合して說いて以て三と爲す。三には眞妄和合本末、三と爲す。事妄及び眞離分して三とすとは、中に於て曲く六門の分別有り。一には共相を分定し、二には共名を辨定し、三には

【次に等】二に其名義を定む。

義に隨つて分別し、四には相起、相攝の義を明し、五には有修、無修の義を明し、六には有盡、無盡の義を明す。初に其相を分つ。根、塵、識等一切の諸法、本を廢して末を談ずれば、悉く是れ實有なり。本を廢するを以ての故に、妄と云ふことを得ず、眞と言ふことを得ず。此分の中に於て、了別の心を名けて事識と爲す。末を攝して本に從ひ、事を會して虛に入り、一切諸法は唯是れ妄想なり。自心の所現なり。夢中の事は皆睡心の現ずるが如し。此分の中に於て、能起の心及び妄分別を說いて妄識と爲す。是故に經の中に說かく、「一切の法は、悉く是れ妄想なり」と。更に一重の攝末從本、會虛入實を作す。一切の諸法は、皆是れ佛性と眞心の所作なり。夢中の事の如く、皆報心の作なり。此分の中に於て、能起の心、諸相を變爲するを、說いて眞識と爲す。一切の法眞の所作なるを以ての故に、『涅槃』に宣說すらく、「一切の諸法は悉く是れ佛性なり」と。三識是の如し。本より末を起すも亦三を分つことを得。末を廢して本を談ずれば、心性本淨し。無盡の法界を緣起し集成するは、是れ其眞識なり。本に依つて末を起し、實を認めて虛と爲し、有に非ざるを有と見るは、是れ其妄識なり。本に依つて末を起し、虛を認めて實と爲し、實に非ざるを實なりと見るは、是れ其事識なり。相を分つこと是の如し。此一門竟る。次に第二門に、其名義を定む。事識と言ふは、『楞伽經』の中に、名けて轉識と爲す。『起信論』の中には、名けて意識と爲し、或は復說いて分別意識と爲す。或は離識と名け、復名けて分別事識と爲す。轉識と言ふは、六塵に隨つて轉ず、妄識外境を轉起するが故に、轉識と爲すに同じ

【阿鼻獄】阿鼻地獄のこと、アヴィーチ(Avīci)無間と譯す、八熱地獄の最下。

【次に等】以下、第三に義に從つて分別す。先づ事の四重分別。

からず。意識と言ふは、『起信論』の中に、第八の眞識は、之を名けて心と爲し、第七を意と名く。前六の事識は、彼意より生ずるが故に、意識と名け、意識は六塵の境界を分別するが故に、復名けて分別意識と爲す。根塵に約對して分を離れ、六別なるが故に、離識と名け、六塵の事相の境界を分別するが故に、復名けて分別事識と爲す。問うて曰はく、『此識は妄の中の最極なり。何の義を以ての故に、妄識と名けざる。』『通じて亦妄と名く。但分別と爲し、之を說いて事と爲すは、諸の凡夫二乘人等、倒惑轉た深きを以て、虛を認めて實と爲すが故に、妄と名けず。此分の中に於て、根塵及び識、若は因、若は果、一切皆實なり。皆實なるを以ての故に、『經』に四諦と名く。故に『遺敎』に云はく、「苦とは實苦なり、乃至道とは、眞實に是れ道なり」と。眞實なるを以ての故に、二乘之を見れば、聖果を得と名け、闡提之を謗すれば、便ち邪見を成じ、善根を斷滅して阿鼻獄に墮す。事實に此の如し。故に妄と名けず。妄識と言ふは、名義前の如し。何が故に、此識を偏に名けて妄と爲す。良に此識は實を會して虛に入るを以て、事を推すに事無く、唯心の妄見なり。故に說いて妄と爲す。又此妄心は親しく眞に迷うて起り、眞に迷うて妄取す。故に名けて妄と爲す。眞識と言ふは、名義上の如し。良に此識は虛を會して實に入るを以て、實の處に妄無し。故に說いて眞と爲す。此二門竟る。次に第三門に、義に從つて分別するに、事と妄と及び眞と、各四重有り。事の中の四とは、一には是れ用相、謂はく、六識心なり。六塵事相の境界を了別す。事の分齊に於て、六識は正しく是れ神知の體なり。是故に此六も亦體相

【四】妄の中の等】次に妄の中の四相。

と名く。二には是れ我相、我に二種有り。一には法著我、謂はく、取性の心、根、塵、識に於て、妄に定性を立つ。此性は我なり。『起信論』の中に、執取の相と名く。又亦名けて執相應染と爲す。二には人著我、陰、界、入に於て、我我所を計す。『起信論』の中に、此を名けて以て計名字相と爲す。我、人、衆生等の名に隨逐して、妄に建立すること有り。我相是の如し。三には闇相、諸法は虛假無性なりと知らず。又陰、界、入等は我我所に非ずと知ること能はず。四には理相、前の三重を明す。有に非ず、無に非ず。因緣假有を稱して非無と曰ひ、假法は無性なり。故に非有と曰ふ。又前の三重、我我所に非ざるを、名けて非有と爲す。而して識等有り。故に非無と曰ふ。非有は眞諦、非無は世諦なり。四の中の初重は、事中の事なり。中の二は是れ其事中の妄なり。後の一は是れ其事中の眞なり。有無に非ざるを以て、道理の心なるが故に。妄の中の四とは、一には是れ用相、謂はく、六識心なり。妄心變異して根塵識と爲る。夢の所爲の如し。此分の中に於て、妄に六識を起す。自心所起の六根に於て、自心所作の六塵を了別す。故に名けて用と爲す。二には我相、我に二種有り。一には法著我、無明變じて阿陀那識を起し、彼妄心所作の法を執して、之を以て有と爲す。二には人著我、彼妄心所起の法の中に於て、我我所を計す。人夢中の身を見て我と爲し、外を我所と爲すが如し。三には闇相、謂はく、無明地なり。覺知せず。心眞如を了せず。又妄心の所起は虛誑無法なりと知ること能はず。四には理相、即ち前の三重なり。曰はく、有に非ず、無に非ず。妄相に體無きを、說いて非有と爲し、妄情集起

【眞の中の等】次に眞中の四相。

【涅槃】北本涅槃經第十如來性品。

【涅槃】第三十二

するを、稱して非無と曰ふ。又心所起の根塵識等は、心外に法無きを、名けて非有と爲す。妄心虛現す。故に非無と曰ふ。非有は眞諦、非無は世諦なり。四の中の初重は妄中の事、中間の兩重は妄中の妄、末後の一重は妄中の眞なり。有無に非ず、道理の心なるを以ての故に。眞の中の四とは、一には是れ用相、謂はく、六識の心なり。眞心變異して根塵識と爲る。夢の所現の皆報心の作なるが如し。所作の六識は、眞心所作の六根に依つて、眞心所作の六塵を了別す。故に名けて用と爲す。問うて曰はく、『此六と前の妄中の六識と、何んが別なる。』釋して言はく、『六識眞妄共に起る。六を攝して妄に從はば、皆妄心の爲なり。繩上の蛇は皆妄心の造なるが如し。六を攝して眞に從はば、皆眞心の作なり。繩上の蛇は皆之れ繩の作なるが如し。前の義を分取して、妄の六識と爲し、後の義を分取して、眞の六識と爲す。二には我相、此分の中に於て、我に二種有り。相狀は如何。一には、法實我、如來藏性は是れ眞、是れ實性にして變異せざるを、之を稱して我と爲す。又此眞心を妄の所依と爲す。妄の與に體と爲るが故に、說いて我と爲す。故に『涅槃』に云はく、「我とは即ち是れ如來の藏なり。藏は是れ佛性なり。一切衆生皆佛性有り」と。即ち是れ我の義なり。二には假名集用の我、佛性は我人を緣起し集成す。報心に依つて、集起して身を夢みるが如し。故に經に說いて言はく、「即ち此法界五道に輪轉するを、名けて衆生と曰ふ」と。此れ即ち『涅槃』六法の中の我なり。五陰及び我は、是れ共六あるなり。五陰離分して即ち五法と爲る。五陰和合して假人を集成するを第六の法と爲す。故に『涅槃』に云は

【次に等】以下、第四に相起相攝の義を明す。

く、「凡夫の我より乃ち佛の我に至るまで我の性改まらざるを、名けて佛性と爲す」と。良に衆生は眞妄の所集なるを以て、亦繩蛇の如し。之を攝して妄に從はば、悉く是れ妄の爲なり。之を攝して眞に從はば、皆是れ眞の作なり。今眞の作に就いて、判じて此門と爲す。我相是の如し。三には無分別相、眞心は是れ神知の性なりと雖も、而も攀緣取捨の法に非ず。故に分別無し。又癡の爲に覆はれて、未だ佛智の照明顯了に同じからず。故に分別無し。故に妄と爲つて無明地に薰生し、妄に隨つて流轉す。四には理相、即ち前の三重は、體有無に非ず。如實空の義は、一切の相を離る。一切の性を離るるを、名けて非有と爲す。如實不空は過恆沙の淸淨法門を具す。故に非無と曰ふ。又能く緣起して一切の法を生ずるを、名けて非無と爲す。而して體常に寂なるを、稱して非有と曰ふ。此四重の中、初重は眞の用、中の二は眞、後の一は眞の性なり。眞如の理なるが故に、相を辨ずること是の如し。此三門竟る。次に相起相攝の義を明す。相起と言ふは、彼眞の中の集用の六識に依つて、妄の六識を起す。眞を離れて妄法獨り起らざるが故に。妄の六識に依つて事の六識を起す。妄を執して實と爲すを、名けて事と爲すが故に。人の夢中の如し。謂はく、根塵識は、悉く是れ實事なり。眞我に依つて妄我を起し、眞、妄に熏じて我執を起すを以ての故に。又闇性の我は妄執より起る。『涅槃』に說くが如し。妄我に依つて事我を起す。情計轉た深し。謂はく、根塵等定性有るが故に。又妄心所起の陰等に依つて、顚倒して我我所有りと計するが故に。眞の中の無分別の義に依つて、妄識の中の無明住地を起す。

若し彼眞心、佛智の照明顯了に同ずれば、無明の闇惑は、得生の義無し。故に「楞伽」に云はく、「如來の藏、彼無始惡習の爲に熏ぜらるるを、名けて識藏、無明地に生ずと爲す」と。『起信論』の中も亦此說に同じ。故に彼文に言はく、「眞如熏習して無明地を生ず」と。妄の中の無明住地に依つて、事識の中の迷性の無明を起す。闇性同じきが故に。又眞の中の非有無の理に依つて、妄識の中の非有無の義を起す。本末同じきが故に。其妄識の性の非有無に由つて、所起の事識還つて有無に非ず。理相同じきが故に。起相是の如し。相攝と言ふは、彼事中所有の六識を攝する、即ち是れ妄の中の集用の六識なり。根塵も亦爾り。妄心變異して彼事と爲すが故に。妄の六識を攝するは、即ち是れ眞の中の集用の六識なり。眞心變異して彼妄と爲すが故に。彼事の中の所起の我相を攝するは、即ち是れ妄我なり。妄法の中に於て、執して事と爲すが故に。彼妄我を攝するは、即ち是れ眞我なり。眞心變異して彼我と爲すが故に。故に眞我を得れば、妄の存すべき無し。彼事中の迷性の無明を攝するは、即ち是れ妄の中の無明闇相なり。無明住地、彼闇を起すが故に。彼妄中の無明地の體を攝するは、即ち是れ眞の中の無分別の義なり。眞心は是れ彼無明の性なるが故に。故に『維摩』に云はく、「明と無明と二なり。無明の實性は即ち是れ明なり。明も亦取り叵し。一切の數を離れて、心虛空の如し」と。數を離れて空の如くなるは、即ち是れ眞心無分別の義なり。又事中の非有無の義を攝するは、即ち是れ妄中の非有非無なり。妄心は事を變ず。事は則ち妄なるが故に。又妄の中の非有非無を攝するは、即ち是れ眞の中の非有無の

【經】舊華嚴經二十六、十地品。

【次に等】以下、第五に有修無修の義を明す。

【彼論】起信論。

義なり。眞心變異して彼妄法と爲る。眞の外に別の妄相の法無きが故に。故に經に宣說すらく、「一切の虛妄は唯一心の作なり」と。謂ゆる、唯一眞心の所作なり。攝相是の如し。此四門竟る。次に有修無修の義を明す。事、妄及び眞の三種の心の中に、並に皆修有り。三種の中、皆六識有るを以て、六識分の中に、近く聞法思量修を友とするが故に。事妄の二種『起信論』に說くが如し。故に彼文に言はく、「妄心熏習の義に二種有り。一には分別意識熏習、謂はく、凡夫二乘は生死を厭離して、力の堪ふる所に隨つて無上道を求む。二には意熏習、謂はく、諸の菩薩發心勇猛にして、速かに涅槃に趣く」と。前は是れ其事識中の修、後は則ち是れ其妄識中の修なり。彼妄識を說いて、之を以て意生の六識と爲すが故に。人の言はく、「妄識は熏習を受けず。一向に修無し」其言謬れり。彼論に宣說すらく、「眞如は妄に熏ず」と。云何が說いて、妄、熏を受けずと言はん。彼に說かく、「妄心は眞如に熏習す」と。何んが、妄識に修無く、眞識に修有りと宣說することを得ん。『攝論』に廣く辨ず。修相は如何。彼に說かく、「眞心と妄と和合するを阿梨耶と名く」と。亦本識と名け、亦藏識と名く。本緣の爲に熏ぜられて六識を變生す。六が中の意識、聞思修を起し、本識に熏じて聞思修の善法の種子を成ず。本熏の無明、其をして漸く薄からしむ。無明薄きが故に、阿陀那執我を起すことも亦薄し。執我薄きが故に、生起の六識起惑も亦薄し。是の如く展轉して有過斯に盡き、有德皆備はる。眞修是の如し。問うて曰はく、『事妄の二熏心の中の所有の我相、闇相、理相、別に修有りや不や。』釋して言はく、『別無し。但し彼我相は是れ

【次に等】以下、第六門に盡無盡の義を辨ず。

修の所破なり。我を破離するが故に。所有の闇相は是れ修の所滅なり。癡闇を滅するが故に。所有の理相は是れ修の所觀なり。亦是れ所證なり。非有無を觀じて取著を破するが故に非有無を證し、定慧を成ずるが故に。問うて曰はく、『眞が中の我等は云何。』釋して言はく、『眞が中の所有の假我は是れ修の所轉なり。『涅槃』に說くが如し。不善の五陰を轉じて善の五陰と爲し、善の五陰を轉じて果の五陰と爲す。我も亦之の如し。法實の我は是れ修の所依なり。一切の染淨之に依つて起るが故に、亦是れ所息なり。妄盡の時染用も亦息す。復彼が與に依止と爲らざるが故に、亦是れ所顯なり。彼我性を顯して、大涅槃眞實の我と爲るが故に。其第三門の無分別相は、是れ修の所依なり。無分別に依つて、一切分別の相を捨離するが故に。亦是れ所證なり。平等無緣の德を證成するが故に。第四の理相は是れ修の所依なり。非有無に依つて、一切の有無の見を捨離するが故に。又非有に依つて斷德を成就し、法の非無に依つて智德を成就す。又非有に依つて慧行を成就し、法の非無に依つて福行を成就す。又非有に依つて證行を成就し、法の非無に依つて敎行を成就す。亦是れ所證なり。法の非有を證して一切智を成ず。法の非有を證すれば果體淸淨なり。法の非無を證して果德圓備す。又法の非有を證すれば果體寂滅なり。法の非無を證すれば果用無盡なり。修相是の如し。此五門竟る。次に有盡無盡の義を論ず。相に隨つて麤分すれば、事妄の二識は一向に盡有り。實無と見るが故に。眞心は無盡なり。妄息むこと顯なるが故に。實を以て通論すれば、事、妄及び眞皆悉く盡有り。不盡の義有り。事妄の二心體滅

【次に等】以下、體相三分別の第二に眞妄の離合もて三種を明す中兩門分別あり。先づ立相門中亦五門分別あり、一に三門性の名を定め證を引き論を以て顯すを明す。

【攝大乘論】梁論第五。

すれば、盡有り、熏力眞に在り。故に不盡と曰ふ。故に『起信論』に說かく、「妄熏習に其二種有り。一には意識熏、二には意熏なり」と。義上に辨ずるが如し。眞心は體常なり。之を研すれば唯明なり。所以に不盡なり。妄滅の時、妄用に隨つて息す。故に亦盡有り。事、妄及び眞の三識是の如し。次に第二門に眞妄の離合、以て三種を說く。中に於て兩門あり。一には立相門、三性を立つることを明す。二には遣相門、三無性を明す。立相門の中五門分別す。一には名を定め證を引き、喩を借つて顯示す。二には體相を辨じ、三には一異を明し、四には修の有無を明し、五には盡不盡を明す。初門の中に就いて、先に其名を定め、次に文證を引き、後に喩を以て顯す。名字は如何。一には分別性、六には依他性、三には眞實性なり。亦名けて相と爲す。分別と言ふは、妄に就いて妄を論ず。妄心は情相を虛構、集起し、隨つて取捨す。故に分別と曰ふ。此は『楞伽經』及び『地持論』に、說いて妄想と爲す。所取眞ならず。故に名けて妄と爲す。妄心取捨す。故に說いて想と爲す。『攝大乘論』も亦說いて以て意言分別と爲す。覺觀の心の中に、色等有りと言ふを、名けて意言と爲す。自心所起の境界を分別するが故に、分別と曰ふ。分別の體なり。故に說いて性と爲す。分別の體狀之に因で相と爲す。依他性とは、妄に約して眞を辨ず。妄起して眞に託し、眞は妄に隨つて轉ず。故に依他と曰ふ。性相は前に同じ。眞實性とは、眞に就いて眞を論ず。眞體常寂にして、妄の隨ふべき無し。故に眞實と曰ふ。性相上の如し。名字是の如し。次に文證を引く。此三廣く說くこと『攝大乘論』の如し。彼論何に依つて此三を建立する。

【一切の經】楞伽金光明。

【地持經】十地經論第十一。

【次に等】二に三性の體相を辨ず。

論に、經に依ると說く。故に彼文に言はく、「一切の經の中に、但諸法は虛妄不實にして空寂不有なりと說くは、是れ分別性なり。若し諸法は幻の如く、夢の如く、水中の月の如し等と說かば、是れ依他性なり。若し諸法は是れ眞是れ實、本性淸淨なりと說かば、是れ眞實性なり」と。又「地持經」に說かく、「心行稠林句別に九有り。一には心の離相、六識心別なり。二には心の轉轉相、生住滅等なり。三には心無形相、心性空寂なり。四には無量相、無量虛僞の境界を順行す。此四は即ち是れ分別の中の義なり。五には自性不染、心性本淨なり。此一は即ち是れ眞實の中の義なり。六には心の染不染に隨つて煩惱を起す。七には心縛、相を解し、眞心、使に隨ふ。八には心幻起相、謂はく、諸菩薩願に隨つて受生す。九には心道に隨つて相を生ず。謂はく、諸の凡夫、業に隨つて受生す。此四は是れ其依他性の義なり」と。經說一に非ず。略して斯を擧ぐるのみ。文證是の如し。次に喩を以て顯す。分別は風の如く、眞實は水に似たり。依他は波の如し。又依他性は、繩の蛇と作るが如く、蛇は情に依つて作る。分別は情の如く、眞實は繩の如し。又論に宣說すらく、「依他は地の如く、又亦礦の如し。分別は礦中の沙石の如似し。燒融すれば則ち盡く。眞實は金の如し。融燒すれば則ち現ず」と。喩の相衆多なり。且く斯を擧ぐ。此一門竟る。次に體相を辨ず。分別性の中に、開合不定なり。或は總じて一と爲すは、唯一の分別なり。或は分つて二と爲す。一には妄識分別、眞に迷うて相を起す。二には事識分別、虛に迷うて實を立つ。亦四を分つことを得。一には無明地、是れ妄識の本なり。二には妄想の心、謂

【地持】第二。

はく、八妄想なり。是れ無明より起る。三には取性の心、是れ事識の本なり。四には見愛等なり。是れ取性より起る。復更に四有り。一には妄識の心、眞に迷つて情を起す。二には虚僞の相、情に依つて外の境界の相を起す。睡心より夢の境界を起すが如し。三には事識の心、前の妄境に迷つて心の起なるを知らず、取つて實有と爲す。四には所取の相、前の心事相の境界を取るに由つて、作實の相現じて己心に來り應ず。亦八を分つことを得。一には妄想心、眞に迷うて情を起す。二には妄心に依つて虚僞の境を起す。故に『地持』に云はく、「八の妄想に依つて妄緣の事を起す」と。此二は一對なり。三には前境の虚妄無法を知らず。之を取つて有と爲す。之が爲に名を施し、施名の心生ず。四には名、心生じ已つて、名字隨つて起る。此れ第二對なり。五には名字起り已つて、此名字に隨つて所名の法を取る。即ち是れ覺觀なり。六には覺觀に依つて言說を發起し、言說隨つて生ず。此れ第三對なり。七には言生じ已つて、復心想を起して所說の法を取る。是れ則ち言語なり。之を以て道と爲し、心は以て行と爲す。八には此心行に依つて、一切の違順、苦樂等の境紛然として心に應ず。此れ第四對なり。是に於て生死互に相熾燃として、增長して絕せず。分別是の如し。依他性の中、開合不定なり。之を總じて一と爲さば、唯一の依他なり。或は分つて二と爲す。謂はく、眞と妄と互に以て他と爲り、互に能依と爲る。亦三を分つことを得。一には是れ本識、如來の藏、無始惡習の爲に熏ぜられ、無明地を生じて、之と和合して共に本識と爲る。二には此本識に依つて、阿陀那執我の心を起す。此心恆に麤起の

【攝論】梁論第七

無明、我見、我愛と、及び我慢の四惑と相應す。何に因てか此を生ずる。無始の我習の所熏に由るが故に、此執を起す。此所生の體は然も是れ本識なり。本識變異して此執と爲るが故に。故に論に名けて似我識と爲すなり。夢中の身は體是れ睡心なるが如し。三には本識に依つて六種の根、塵及び識を生起す。何に因てか此を生ずる。無始の陰、界、入等の名字の所熏、及び善惡等の有分の所熏に由つての所以に之を生ず。論に說くこと是の如し。然るに此所生の體は是れ本識なり。本識變異して此事と爲るが故に。故に論に說いて、似根識、似塵識、似識識と爲す。夢中の事の體は是れ心なるが如きの故に。三相是の如し。亦六を分つことを得。本識の中に眞有り、妄有り。分つて以て二と爲す。阿陀那識は眞妄共に起る。亦二を分つことを得。六識も亦爾り。卽ち是れ六なり。別に隨つて細分せば、亦無量なるべし。世俗の諸法、識に非ざること無きが故に。依地是の如し。眞實性の中に、開合不定なり。總じて唯一眞なり。亦二を分つことを得。一には有垢如、染に在つて恆に淨し。二には無垢如、染を除いて始めて淨し。論に說くこと是の如し。復二種有り。一には如實空、性を離れ相を離る。二には如實不空、過無量恆沙の淨法を具す。並に上に辨ずるが如し。亦三を分つことを得。一には無垢如、本來常に淨く、垢として處すべき無し。二には有垢如、染に在つて汚れず。三には離垢如、障を除いて始めて淨し。亦四を分つことを得。『攝論』に說くが如し。一には垢如、染に在つて、常に淨し。二には無垢如、染を除いて始めて淨し。三には是れ淨相、眞德を修生す。四には是れ淨教、謂はく、

【涅槃】北本第二十七。

【寶性論】第三。

【十佛性】一體性、二因性、三果性、四業性、五相應性、六行性、七時差別性、八遍處性、九不變性、十無差別性。

【經】勝鬘經。

【次に等】三に三性の一異を明す。

【次に等】四に有修無修を明す。

十二部經なり。其清淨法界より流出す。又云はく、淨法身より流出す。故に名けて淨と爲す。『涅槃』に亦云はく、「如來の大智海の中より出づるが故に、眞と爲すことを得」と。亦五を分つことを得。謂はく、五佛性なり。一には因性、是れ涅槃の因なり。二には因因性、是れ菩提の因なり。三には果性、是れ菩提の果なり。四には果果性、是れ涅槃の果なり。五には非因果性、是れ理性なり。亦十と說くことを得。『寶性論』に十佛性を說くが如し。廣くは則ち無量なり。故に經に說いて過恆沙の法と爲す。體相是の如し。此二門竟る。次に三性一異の義を明す。此三は相望して一にあらず、異にあらず。末を分つて本に異れば、不一と言ふことを得。上に辨ずるが如し。妄に就いて妄を說くは、是れ分別性なり。妄に約して眞を論ずるは、是れ依他性なり。眞に就いて眞を說くは、是れ眞實性なり。本を以て末を攝すれば、不異と言ふことを得。是義如何。如來の藏は是れ眞實性なり。是性を本と爲す。惡習に熏ぜられて、無明等を生じて之と共に倶なるを、名けて依他と爲す。眞の外に更に、別の他の依るべき無し。彼依他變異分の中に就いて、虛妄に浪に取るを、說いて分別と爲す。依他の外に別の分別無し。又復一の依他性に緣攝するに、中に於て妄法を卽ち分別と名け、中に於て眞法を卽ち眞實と名く。故に別異無し。一異是の如し。此三門竟る。次に有修無修の義を明す。此三識の中皆悉く修有り。分別性の中の修に二種有り。一には事識の中の修、五陰は我我所に非ずと觀察し、幷に五陰は虛假無性なりと觀ず。諸法例して爾り。二には妄識の中の修、一切の法は妄想心より現じ、心の外に境無しと觀じ、幷

に妄心は依他の變爲にして別の妄の體無しと觀ず。依他性の中の修に、亦二有り。一には人空を觀じ、二には法空を觀ず。此二の中に於て、先に聞慧を起す。二無我を聞いて本識に熏ず。本識熏ぜられて、聞熏習を成ず。本識の中に於て、眞有り、妄有り。眞は淨熏を受け、妄は染熏を受く。眞は熏を受け已つて、轉じて無明に熏じ、無明をして薄からしむ。無明薄きが故に、無明の中に於て無始積習の我見の種子、隨つて漸く薄らぐ。此種薄らぎ已つて、阿陀那の我執を起すこと漸く輕し。此執輕くなり已つて、六識の我見を起すこと亦輕し。此見輕くなり已つて、聞を起すこと轉勝る。此轉聞を以て、還つて本識に熏ず。是の如く展轉して、末を以て本に熏じ、本還つて末に熏ず。思修も亦然り。末を以て本に熏ず。思修も亦然り。末を以て本に熏じ、本識の中の我見の種子を壞して、出世法身の種子を成就す。本を以て末に熏じ、起惑を遮斷して淨行を增長し、乃至究竟す。眞實の性、云何が修行る。釋して言はく、獨り眞のみ即ち修の義無し。而るに有りと言ふは、一切の所修眞妄共に起る。修を攝して妄に從ふは、悉く是れ妄修なり。修を攝して眞に從ふは、盡く是れ眞修なり。前の三性の如き眞妄和合を依他性と名く。依他の中に於て、妄の邊を分取して分別性と名け、眞の邊を分取して眞實性と名く。修も亦是の如し。修行るを以ての故に、妄盡の時眞獨り德を成ず。成德に二有り。一には眞識心、妄盡本に稱ひ證行を成就す。二には體より用を起す。教行を成就す。此二皆加行を用て因と爲し、作意修習するを名けて加行と爲す。證前の加行に共二種有り。一には諸法本來唯眞にして、妄の隨

【次の門に等】五に三性の盡無盡の義。

【相を遣ること等】次に遣相門を明して三無性を說く。【入論】梁攝大乘論第七。

ふべき無しと觀ず。能く妄心をして更に後を牽かず、後前を起さず、遂に灰盡を成じて眞心獨り顯はれしむ。二には心の外に別の如の理無く、如の理の外に亦別の心無しと觀ず。如の外に心無ければ、心は如に異らず。心の外に如無ければ、如は心に異らず。心、如に異らざれば、照にして常寂なり。如、心に異らざれば、寂にして常照なり。斯二觀に由つて、便ち證行を成ず。教前の加行に、亦二種有り。一には眞心の體は是れ一切功德の法門、能く諸行を生ずと觀ず。二には隨つて種種の善根を修起すと。斯二種に由つて、便ち教行を成ず。修の義是の如し。此四門竟る。次の門に、盡無盡の義有り。分別の性は一向に盡くすべし。無を推窮するが故に。依他の性は亦盡無盡なり。妄盡の時、妄用の息するに隨つて、之を名けて盡と爲す。本識の中に於て、成ずる所の行種は妄盡の體なり。依を轉じて本に會するを、名けて無盡と爲す。眞實の性は一向に無盡なり。常住なるを以ての故に。若し復通じて論ぜば、分別の體は盡なり。熏力眞に在るを名けて不盡と爲す。眞性の體寂なる之を名けて盡と爲す。妙用窮め難きを、名けて無盡と爲す。立相是の如し。相を遣ること云何。論に說くに三有り。一には無相の性、論に亦名けて無分別性と爲す。外境を觀察するに、唯心に從つて現ず。心外に境無きを無相性と名く。妄心を觀察するに、本識の變異なり。本の外に妄無し。故に復名けて無分別性と爲す。二には無生性、實に就いて眞を推すに、妄の隨つて起ること無きを無生性と名く。三には無性性、論に亦名けて無無性と爲す。如來藏の中の過恆沙の法は同體義分す。別を攝して總を成ずれば、諸法悉く有

【次に等】以下、體相三分別の第三に眞妄和合本末の三を分つ。中に四を分つ。初に共相を定む。

【攝論】第一。

【論】起信論。

【次に等】二に一異を辨ず。

なり。別を將て總を分つは、諸法悉く如なり。一法として別に自性を守ること有ること無きを無性性と名く。眞に就いて眞を論ずれば、眞諦常寂にして、前の二相の遣つて無と爲すべき無きを無無性と名く。又眞實有にして全無の法に非ざるを無無性と名く。第二門竟る。

次に第三門に、眞妄和合本末の三を分つ。中に於て曲く四門の分別有り。一には共相を定め、二には一異を辨じ、三には起修不起修の別を明し、四には有盡無盡の異を明す。初に共相を定むとは、『攝論』に說くが如し。一には是れ本識、二には阿陀那識、三には生起の六識なり。此三は猶前の依他性の中の差別なり。妄に眞を攝するに據つて、眞は妄に隨つて轉じて共に衆生を成ず。此共の中に於て、眞識の心は、彼無始惡習の爲に熏ぜられて無明地を生ず。所生の無明は眞心を離れず。共に神の本と爲し、名けて本識と爲す。此れ亦名けて阿梨耶識と爲す。故に論に說いて言はく、「如來の藏は不生滅の法と、生滅と合して阿梨耶と名く」と。此阿梨耶、彼無始我見の爲に熏ぜられて我の種子を成ず。此種力の故に、阿陀那執我の心を起す。此我相に依つて、我見、我慢、我愛を起す。何をか執して我と爲す。彼本識に依つて陰身を變起す。此れ無なりと知らず。之を執して我と爲す。又此本識、無始より來、六識根塵の名字の爲に熏ずるが故に、共種子を成ず。此種力の故に、六種生起の識及び六の根塵を變起す。睡心に依つて夢中の根塵及び識を起すが如し。相を定むること麤爾り。此一門竟る。次に一異を辨ず。末を分つて本に異すれば、是れ異と言ふことを得。末を攝して本に從へば、是れ一と言ふことを得。是一を以ての故に、一切諸法は皆

【次に等】三に起修不起修の別を明す。

【次に等】四に有無無盡の義を明す。

【或は分つて等】以下、識を分つて四となす中に四門の分別あり、第一門に妄を開し眞を合して四種とす。

【楞伽】第一。

一心の作なり。夢中の事は皆睡心の作なるが如し。一異是の如し。此二門竟る。次に起修不起修の別を明す。此分の中に於て、六識の心は善境界に於て、見聞覺知して正しく行修を起す。阿梨耶識は是れ修の所因、是れ修の所熏、是れ修の所轉なり。正修を起さず。無念を以ての故に。阿陀那識は是れ修の所轉なり。轉じて我執を離れ、正修を起さず。念を起して友に近より、法を聞きて思量し修するにあらざるを以ての故に。此三門竟る。次に有盡無盡の義を明す。此分の中に於て、三識は都て盡あり。無明滅するが故に、眞に所從無し。本識を成ぜざるが故に、本識盡く。故に論に說いて言はく、「四修滿ずる時、本識都て盡く」と。信心、般若、三昧、大悲は是れ四修なり。本識盡くるが故に、我執生ぜず。故に阿陀那は盡くと宣說することを得。本識無なるが故に、六識生ぜず。故に六識盡く。此三の中に於て、所有の妄體滅するが故に盡く。所依の眞は用息するが故に盡く。體還つて本に歸すれば、不盡と言ふことを得。三識是の如し。或は分つて四と爲す。四に四門有り。一には妄を開し眞を合して、以て四種と說く。妄の中に三を分つ。五識を二と爲し、妄識を三と爲す。故に、『楞伽』に云はく、「心を採集業と爲し、意を廣採集と爲す」と。諸識、識所識、現等の境を五と說く。第七の妄識集起の本なり。故に說いて心と爲す。此集起に依つて、一切の妄境隨つて分別するを、採集業と名く。第六の意識は遍く諸塵を司る。故に說いて意と爲す。通じて六塵を司るを廣採集と名く。五識の心隨つて境別に了するを、名けて諸識と爲し、現在の五塵を識所識と名く。唯現在五塵の境別を知つて、過未に通ぜず。故

【二に等】次第二に眞を開し妄を合して四と說く。

【經】　勝鬘經。

【三には等】以下第三に眞妄俱に開して四種を說く。

【阿摩羅】アマラ（Amala）

に現等の境五と云ふなり。妄に此三を分つ。此妄の所依は、即ち是れ眞識なり。通別して四と爲す。二に眞を開し妄を合して、以て四種と說く。眞の中に三を分つ。『起信論』に說くが如し。一には體大、謂はく、眞如の法、平等一味、不增不減なり。一切の凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、諸佛等しくして差別無く、前際後際の異有ること無し。二には相大、論に自ら釋して言はく、「如來の藏は、本より已來、無量の性功德法を具す。」妄心の中に一切諸の煩惱法を具足するが如し。三には用大、用に二種有り。一には染用、二には淨用なり。染用に二有り。一には依持の用、如來藏の法を妄の所依と爲し、能く妄を持す。若し此眞無くば、妄は則ち立たず。故に經に說いて言はく、「若し藏識無くば、七法住せず。苦を種ゑ、涅槃を樂求することを得ず」と。二には緣起の用、向に染に在りと雖も、而も染と作さず。今妄と合して緣集起染す。水の風に隨つて波浪を集起するが如し。是を以て『不增不減經』に言はく、「即ち此法界の五道に轉輪するを、名けて衆生と曰ふ」と。染用是の如し。淨用の中にも亦二種有り。一には隨緣の顯用、眞識の體本妄の爲に隱る。復妄染を息すれば、緣に隨つて始めて淨し。淨の中に、差別して說いて性淨無作の因果と爲す。二には隨緣の作用、本凡に在り。時に緣に隨つて六道生死を造作す。後に對治に隨つて、方便有作の因果を集生す。淨用是の如し。眞識の中に斯三義を具し、妄識を一と爲すを以ての故に、合して四有り。三には眞妄俱に開して、以て四種と說く。眞の中に二を分つ。一には阿摩羅識、此に無垢と云ひ、亦本淨と曰ふ。眞に就いて眞を論ずれば、眞體常に淨し。

【四には等】第四に體相不同なれば四種と說く。

【亦五を等】次に識を五に分別するを辨ず。

【亦六を等】次に識を六に分別するを辨ず。

【維摩】現衆生品

【成實】第二。

故に無垢と曰ふ。此れ猶是れ前の心眞如門なり。二には阿梨耶識、此に無沒と云ふ。即ち前の眞心、妄に隨つて流轉す。體に失壞無し。故に無沒と曰ふ。故に『起信論』に言はく、「如來の藏、不生滅の法生滅と合するを、名けて阿梨耶と爲す」と。妄の中に二を分つ。謂はく、妄と事となり。眞妄各二なるが故に、合して四有り。四には體相、同じからず四種を離分す。相狀は如何。上に說く所の如し。心眞如門は、是れ其心體なり。即ち以て一と爲す。心生滅門は、是れ其心相なり。中に於て三を分つ。一には是れ本識、眞と癡と合す。二には本識に依つて、阿陀那執我の識を起す。三には本識に依つて、六種生起の識を起す。此を以て前に通じて、合して說いて四と爲す。四相是の如し。亦五を分つことを得。上に辨ずる所の如し。眞性は一、分別性は二、依他性の中の義別は三重あり。謂ゆる、本識と阿陀那と及び生起識となり。是れ其五なり。亦六を分つことを得。前の五の中に於て、分別性を開し、之を以て二と爲す。謂はく、事と妄と即ち是れ六なり。又經に說くが如し。始め眼識より乃ち識に至るまで、亦是れ六種なり。本を攝して末に從ふ。此六の外に、更に餘識無し。故に『維摩』の中に說かく、「我人無きこと第七の情の如く、畢竟無法なり」と。情は猶識のごとし。六根の外に第七根無く、六塵の外に第七塵無きが故に、六識の外に第七識無く、尚第七無し。焉んぞ餘識有らん。問うて曰はく、「經に說く想受行等は、六識の中に於て何れの識の所收ぞ。」『成實』の如きに依らば、前後別に起る。皆是れ通じて意識の所攝と名くと。餘の經論に依らば、此想受等六識と倶なるは、是れ法塵の收なり。六識に

【亦七と等】次に識を七に分つを明す。

【亦八と等】次に識を八に分つを明す。

【亦九と等】次に識を九と分つを明す。

【亦十を等】次に識を十に分つを明す。

攝せず。作を攝して主に從はば、六識の所收なり。亦七と謂ふことを得。謂はく、七心界なり。前の六の上に於て意根界を加ふ。是れ其七なり。六識後を生ずるを、名けて意根と爲す。此れ亦本を攝し、末に從つて言ふのみ。亦八と說くことを得。『楞伽』に辨ずるが如し。中に於て兩門あり。一には事、妄及び眞、離分して八と爲す。事識に六有り。眞妄は各一なり。故に八種有り。二には眞妄和合して、共に八種と爲す。義は上に辨ずるが如し。本識を一と爲し、眞と癡と合す。阿陀那識を以て第二と爲す。眞妄、共に執我の心を起す。生起の六識を、復以て六と爲す。前に通じて八と爲す。眞妄、共に偏に妄に在らずと爲す。亦九と說くことを得。故に『楞伽經』總品の中に云はく、「八九の種識は、水中の波の如し」と。其狀は如何。分別するに二有り。一には眞妄分別して、以て九種を說く。妄の中に七を分つ。謂はく、六事識と妄識となり。眞の中に二を分つ。謂はく、阿摩羅と及び阿梨耶となり。義は上に辨ずるが如し。此を以て前に通ず。故に合して九有り。二には眞妄、離合して以て九種を說く。獨り眞を一と爲す。謂ゆる、本淨阿摩羅識なり。眞妄和合して、共に八種と爲す。義は上に辨ずるが如し。共に本識と爲し、阿陀那識と及び六識を起すと、前に通じて九なり。亦十を分つことを得。十に兩門有り。一には眞を開し妄を離して、以て十種を說く。妄の中に七を分つ。義は上に解するが如し。眞の中に三を分つ。謂ゆる、體大、相大、用大なり。亦上に解するが如し。二には眞妄、離分して以て十種を說く。離には則ち二を說く。一には眞實性、唯眞無妄なり。二には分別性、唯妄無

【亦開合して等】次に識を十一に分つを明す。
【妄識の六等】以下、妄識の六を明す。

眞なり。合には則ち八あり。謂はく、依他性なり。中に於て、本識を說いて一と爲し、執識を二と爲す。生起の六識前に通じて八と爲す。三識離合す。故に十種有り。亦開合して、以て十一と爲すことを得。眞實を一と爲す。妄識に六有り。事識に四有り。故に十一と爲す。妄識の六とは、『起信論』に說くが如し。一には無明心、二には業識、三には轉識、四には現識、五には智識、六には相續識、亦不斷と曰ふ。此六種は、麁細に異を分つ。無明心とは、謂ゆる、根本無明の住地なり。故に論に說いて言はく、「阿梨耶に依つて無明有りと說く」と。業識と言ふは、前の無明に依つて便ち妄念有り。不覺にして起る、之を說いて業と爲す。故に論に說いて言はく、「無明を以ての故に、不覺にして心動ず。動を名けて業と爲す」と。轉識と言ふは、前の業識に依つて心慮漸く麁に、外境を轉起し、隨つて取著するが故に、名けて轉と爲す。故に論に說いて言はく、「動心に依つて、轉じて外境を現ずるを、名けて轉識と爲す」と。現識と言ふは、前の轉識所起の境界に依つて、還つて自心を顯すを、名けて現識と爲す。故に論に說いて言はく、「現識能く一切の境界を現ず。明鏡中に衆の色像を現ずるが如し。故に現と云ふなり」と。又論に說くが如し。此現識の中に、其五塵に隨つて對至すれば即ち現ず。前後有ること無し。一切の時に任運にして、而も現じて常に前に在るを以ての故に、麁に就いて言ふことを爲し、且く五塵一時に俱に現ずと云ふ。理實には六塵皆悉く並び現ず。智識と言ふは、前の現識所了の法の中に於て、染淨違順の差別を分別するを、名けて智識と爲す。故に論に說いて言はく、「境界に

依つて心を起し、愛、不愛等を分別するを、名けて智と爲すなり」と。相續識と言ふは、前の智識に依つて、心相麤にして境界に轉じて心を牽く。心境界に隨つて、分別して斷ぜず。海の波浪の如し。故に相續と名く。故に論に說いて言はく、「智識に依つて苦樂の覺を起す。此起念と相應して斷ぜざるを相續と名くるなり」と。又復此心能く三世の善惡の因果を持して、失壞せざらしむるが故に、相續と名く。故に論に說いて言はく、「此相續識、過去無量世等の善惡の業を住持して、失壞せざらしめ、復能く現在、未來の苦樂の果報を成就して、差異無からしむるが故に、相續と名く」と。又論に說いて言はく、「此相續識、不斷力の故に、能く過去已經の事を忽然として念じ、未來の事を不覺に緣慮して、忽然として念知せしむ。是故に三界唯心の所依なり。夢の所見の如く、鏡中の像の如く、自體有ること無し。心を離るれば則ち六識の境界無し。心に從ふを以ての故に、心生ずれば法生じ、心滅すれば法滅す。諸法の生滅は皆心に隨ふ」と。論に說くこと是の如し。然るに此六種の相は別して分ち難し。宜く喩を以て顯すべし。譬へば世人報心に依つて、便ち昏睡に不覺の心を起し、睡中に於て微動の念を起すが如く、業識も是の如し。人の睡中微覺の心の後に、心想漸く麤にして、外境を轉起するが如く、轉識も是の如し。又夢中の境界成じ已つて、還つて自心に顯れ、色香味等一時に倶に現ずるが如く、現識も是の如し。又夢人、彼所現の夢境界の中に於て、染淨違順等の別を分別するが如く、智識も是の如し。又夢中の境界、心を牽き、心境界に隨つて、分別して斷ぜざるが如く、續識も是の如し。妄

【事識の四等】次に事識十四を說く

【若し事の等】次に識を十三乃至十八に分つを明す。

【經】　楞伽經等。

【又義別に隨へば等】以下、識を分つて六十とするを

識の中の麤細不同に、此六階有り。有人釋して言はく、「第二の業識は是れ其妄識なり。後の四重は是れ其六種の分別事識なりと。是義然らず。『起信論』に依るに、六識は此と分齊全く別なりと。彼文に宣說すらく、「第六相續不斷識の後、別に六種分別事識を起す」と。故に彼文に言はく、「卽ち此相は諸の凡夫の取著轉深きに依つて、我我所を計して種種に妄執し、事に隨つて攀緣し、六塵を分別するを、名けて意識と爲し、亦離識と名く。見愛に依つて起る」と。何ぞ妄識中の六階の差別を以て、眞に通じて七と爲るに關預せん。事識の四は、論の中に說くが如し。一には執取相、論に亦名けて執相應染と爲す。謂ゆる、根本性を取るに無明なり。二には計名字相、謂ゆる、十使叢起の煩惱、名に隨つて我、樂生等を計著し、諸結を集起す。是故に說いて計名字相と爲す。三には起業相、謂はく、煩惱に依つて種種業を造る。四には業繫苦相、業に依つて報を受く。此を以て前に通じて、合して十一と爲す。若し事の中に就いて、六識を開合すれば、前に通じて十三なり。若し眞の中に就いて、體相用の三大の差別を分たば、前に通じて十五なり。又義別に隨へば、亦識を分つて以て十八と爲すことを得。彼六識の中の事識に六有り。事識の本の妄識に六有り。妄識所依の眞識に六有り。故に十八有り。若し妄眞齊く六有らしめば、何が故に、經の中に但八識と說く。良に事相は差別の義顯るるを以て、根に隨つて六を分つ。眞妄顯ならざれば、根に隨つて別ならず。故に但八と言ふ。又義別に隨へば、亦識を分つて以て六十と爲すことを得。眼識に十有り。乃至意識も類して亦同じ。然るに眼識の十とは、眼

明す。

【三】以下、第三門に根塵の有無を料簡す。中に兩門の分別あり、第一に事妄眞の三識の中に約就して有無を料簡する中、更に二門あり、一に根塵の有無を料簡す、中に亦三、一に通別に分別す。

識の中に就いて、事識に一有り。當相知るべし。妄識に六有り。上に辨ずる所の如し。始め無明より乃ち相續に至る。眞識に三有り。亦上に說くが如し。謂はく、體相用なり。眼識の中に此十重有り。乃至意識も亦同じく爾り。故に六十有り。若し復廣く論ぜば、數別窮まり難し。此等の廣略は各一門に據る。體相是の如し。

(三)第三に根塵の有無を料簡す。中に於て兩門あり。第一に事妄及び眞の三種識の中に約就して有無を料簡し、二に眞妄共相の三識に約して有無を料簡す。初門の中に就いて、曲く更に二有り。第一に根塵の有無を料簡し、二に所依の麁細不同を明す。根塵の有無に三門の分別あり。一には通別に分別す。六識は別なるが故に、根有り、塵有り。七八は通ずるが故に、根塵を說かず。何が故に是の如くなる。六識は別なるが故に、彼此互に起る。互に起るを以ての故に、生ずるに必ず依有り。依に强弱有り。强き者は塵と爲るの故に、之有りと說く。問うて曰はく、『楞伽』に「六識境界倶に至つて、一時に並用す」と宣說す。云何が、說いて六識互に起つて根有り、塵有りと言ふ。『此れ上に辨ずるが如し。今更に之を論ぜば、『楞伽』の所說の、境界倶に至つて一時に並用すとは、『起信論』に准ずるに、是れ妄識の中の第四の現識なり。此識の中に於て、境界倶に至つて諸識並用す。事識に關せず。事の中の六識には、並用の義無し。』問うて曰はく、『何が故に、妄の中の六識は一時に並用し、事識は爾らざる。』釋して言はく、『彼妄識の中に於ては、一切の法は皆是れ心作たり、心外に境無しと說く。心所作の法は心と隔無し。辨了すべきこと易し。故に並照する

ことを得。事識の中に於て、心外に法有り。法は心造に非ず。非心作の法と心とは別體なり。辨了すべきこと難し。故に並知せず。並知せざるが故に、前後間起る。故に根塵を立つ。七八は常に體有り。互に起らざれば、則ち依託無し。依託無きが故に、説いて強き者は、根と爲り、弱き者は塵と爲ると言ふことを得ず。是を以て七八に根塵を説かず。此れ凡の時に就いて有無を料簡す。若し聖の時に就かば、七識、八識は法身無量の根塵を緣起す。問うて曰はく、『前の六は根に依つて塵を了す。名けて識と爲すべし。後の二は常に通じて、根に依つて諸塵を了別すと説かず。云何が、識と名くる。』釋して言はく、『後の二は事に隨つて了別するの用無しと雖も、而も是れ衆生の神知の性、了別の體なり。故に名けて識と爲す。』問うて曰はく、『神知了別の體は、之を名けて識と爲すとならば、體は是れ識なりや不や。』釋して言はく、『此二は心識の體なれば、體は即ち是れ識なり。』問うて曰はく、『若し心識の體ならしむるが故に、名けて識と爲すとならば、根と塵とも亦應に體有るべし。何の義を以ての故に根塵を説かざる。』釋して言はく、『良に根は體有つて、名けて根と爲すを得と雖も、而も塵に對して識を生ずるの用に非ず。塵は體有つて、名けて塵と爲すを得と雖も、而も根に對して識を生ずるの用に非ざるを以て、識は唯體有つて、名けて識と爲すを得。而るに根に依つて塵を了するの用には非ず。此識體は根の用に依らざるを以ての故に、根を説かず。塵の用を了せざるが故に、塵を説かず。』問うて曰はく、『向に根塵、體有りと説く。何者か是れ本なる。』『眞妄一心所作の根塵は能く事の本と爲る。是れ其

【二には等】二に眞妄に分別す。

【三には等】三には通に就いて分別す。

體なり。通別是の如し。二には眞妄に分別す。前七の妄識は、根有り、塵有り。第八の眞識は根塵を說かず。前六の事識は、根塵知るべし。第七の妄識は無常の法なるが故に、念念生滅す。生には依詑有り。故に根有りと說く。性は是れ分別攀緣の法なるが故に、之を說いて塵と爲す。眞識は常法の體にして起滅無し。起無きを以ての故に、依詑する所無し。故に根を說かず。性は分別攀緣の法に非ざるが故に、塵有りと說かず。三には通に就いて分別す。八俱に根有り。亦通じて塵有り。故に『楞伽』に云はく、「境及び根識に依るが故に、八識生ずること有り」と。相有ること如何。前の六は知るべし。第七識の中に、體有り、用有り。其體を論ずるや無常流注す。前に藉つて後の義生ず。說いて根と爲す。性は是れ無明、眞法を迷覆す。眞法は即ち是れ所迷の塵なり。其用を論ずるや眼等を根と爲し、色等を塵と爲す。是義は云何。即ち前の事識所依の根塵は理を以て之を窮むるに、皆是れ妄想自心の所現なり。其れ猶夢中所現の根塵のごとし。此妄の根塵、還つて妄想六識の所依と爲るを、七識の中に根塵を用すと名くるなり。第八識の中に、體有り、用有り、其體を論ずるや如來藏同體の法の中に就いて、義もて根塵を說く。彼如來藏は但是れ其心識の體なるのみに非ず、亦是れ根の體なり。故に經に說いて言はく、「衆生の身中に、如來眼、如來耳有り」等と。如來藏の中の恆沙の佛法は心の所照と爲すを、即ち名けて塵と爲す。故に馬鳴の言はく、「本より已來、遍く一切法界を照すの義なり」と。其用を論ずるや、還つて衆生の眼等を以て根と爲し、色等を塵と爲す。是義如何。即ち前の事識所詑の根塵

【次に等】初門の第二に所依の麤細の不同を明す。

【次に等】第二門に眞妄共相の三識に約就して有無を料簡す。

は、實を窮むるに皆是れ眞心の所作なり。人の夢中の根と塵とは、皆報心の作なるが如し。此眞の所作還つて眞の用、六識の所依と爲るを、眞識の中に根塵を集用すと名く。通じて有ること是の如し。問うて曰はく、『八識通じて根塵有らば、何が故に、經の中に、但事識に就いて根を說き、塵を說く。』『前の事識は體別にして、互に依託起るの義顯なり。故に根塵に約して、以て六識を別つ。後の二は體始終に通じて、常に依託有り。義微なるが所以に說かず。』有無是の如し。次に所依の麤細の不同を明す。中に於て、略して四句を以て分別す。一には麤を以て細に依る。謂はく、眞識に依つて妄識を起し、妄識に依つて六事識を起す。復六識の中、意識に依つて五識を起す。此れ皆名けて麤を以て細に依ると爲す。二には細を以て麤に依る。謂はく、色根に依つて五識心道の細法を生じ、五識に依つて意識を生ず。此等を名けて細を以て麤に依ると爲す。三には同類相依る。謂はく、意識の中、多念相續の義有ることを得、前後相望して、同類を依と說く。第七識の體生滅相起る。亦是同類を以て依と說くなり。四には同體相依る。第八識の體、還つて自體に依る。如實法界なり。事妄及び眞の三識、根塵の有無是の如し。此一門竟る、次に眞妄共相の三識に就いて、有無を料簡す。共の三と言ふは、眞と無明と共じて本識と爲す。本に依つて、共して阿陀那識を起し、本に依つて、共して六種の生識を起す。此三識の中、六種の起識に根有り、塵有り。根に二種有り。一には實依、本識に依つて生ず。二には似依、自心所作の六根に依るに似たり。人の夢中の眼等の六識は實に睡心に依り、眼等に依るに似て、而も實に依

〔四〕第四に八識の大小有無の義を明す。

らざるが如し。所有の塵は、唯是れ塵に似て、都て實事無し。人の夢中の所見の色等は、有に非ずして有に似たるが如し。阿陀那識も亦根塵有り。根に二種有り。一には實依、本識に依つて生ず。二には似依、同類相望するに、前の後を生ずるに似たり。人の夢中の執我の心は實に睡心に依り、同類相望して、後の前に依るに似たるが如し。所有の塵とは、唯是れ塵に似て、都て實事無し。人の睡る時に夢中の身を取つて、之を以て我と爲し、身の取るべき無きが如し。本識の一種は、所依無くして生ず。根無しと說くことを得、而して體生滅の、前に藉つて後を起すも亦根と說くことを得。本識は無緣にして、塵有りと說かず。迷眞の法なるに因つて、亦塵と說くことを得。根塵の有無之を辨ずること麤爾り。

〔四〕次に第四門に、其大小有無の義を明す。小乘法の中には但六識を說き、大乘法には八を說く。彼小乘の中には、未だ心性妄想の義を說かざるが故に七識無く、未だ心の體性眞實を說かざるが故に八識無し。問うて曰はく、『小乘も亦六識を說く。體は是れ取性闇惑の心なり。何の義を以ての故に妄識と名けざる。』釋して言はく、『復闇惑の名同じと雖も、所迷に異有り。彼小乘の中に說く所の取性闇惑の心は、心外の法の中に、妄に自性を取つて名用無性の義を知らず。大乘法の中に說く所の妄識は、眞性を迷覆して、己が自心所現の法の中に於て、妄に取つて有と爲す。是故に同じからず。』又問ふ、『小乘の中の羅漢、辟支、空觀の解と大乘中の緣智とは、何んが別なる。』釋して言はく、『彼小乘の中の空觀の解に同じからずとは、心外の法の中に、名用無性空の義を解知して、諸法は自心の所現にし

【五】第五門に八識依持の義を明す中に二、一に眞妄相對して說く。中に亦三、第一に眞妄相對して依持を說く。

【地持經】舊華嚴經第二十六。

て、妄想無法なりと知らず。大乘法の中に妄識智といふは、心外に畢竟じて法無く、但無性なるのみにあらず、乃至亦因縁の相無く、但是妄想闇惑の心現ずること、夢の所現の如しと解知す。斯異有るなり。』又問はく、『小乘の中に亦心體は諸法を集成すと說くは、大乘の中の眞識と、何んが別なる。』『然るに彼の說く所は、小乘の中に於ては、實に是れ道理眞實の心の名なり。大乘に對すれば、彼乃ち因縁の虛法共に相集成すと宣說す。故に眞識に非ず。』

(五)第五に、其依持の義を明す。中に於て二有り。一には眞妄相對して、以て依持を說く。二には眞妄共相の識中に就いて、本末相對して、以て依持を說く。前の中に三有り。一には眞妄相對して、以て依持を辨じ、二には唯妄に就き、三には唯眞に就く。眞妄相對の依持は如何。前の七、妄識は情に有つて體に無し。起ること必ず眞に託す。之を名けて依と爲す。故に『勝鬘』に云はく、「生死の二法は如來藏に依る」と。『地持經』にも亦云はく、「十二因縁は皆一心に依る」と。第八の眞心は相隱れて性實なり。能く妄の本と爲つて妄を住持するが故に、說いて持と爲す。故に『勝鬘』に云はく、「若し藏識無くんば、七法住せず、苦を種ゑ、涅槃を樂求することを得ざらん」と。此は是れ眞妄依持の義なり。妄の眞に依るは、波の水に依るが如く、眞の妄を持するは、水の波を持するが如し。故に『楞伽』に云はく、「譬へば巨海の浪の斯れ猛風に由つて洪波を起し、冥壑を鼓して斷絕の時有ること無きが如し」と。藏海は常に住なれども、境界の風に轉ぜられて、種種の諸識の浪、騰躍し

【經】楞伽經第一

【彼文】楞伽經第四。

【楞伽】第一。

て轉生す。無明の大海は風の爲に飄ふと雖も、水性移らず。性移らざるが故に、名けて常住と爲す。性は常住なりと雖も、彼水相風に隨つて波轉ず。彼眞識は妄想境界の風の爲に眞を動ずと雖も、性變ぜざるに喩ふ。性は變ぜずと雖も、而も彼眞相妄の境界に隨つて七識を起すこと、海の波浪の如し。『楞伽』の中には、境界を風と爲し、『起信論』の中には、無明を風と爲す。何が故に、是の如くなる。此等は皆飄動の義有るが故に。若し復論ぜば、無明と妄心と及與び妄境とは、皆風と爲すことを得。故に『起信論』に「無明と妄心と妄境とは皆熏習を爲す」と宣說す。眞心を熏動するは、卽ち是れ風の義なり。但彼論の中には、其根本に就いて無明の風を說く。『楞伽』の未だ境界の風を說かざるに據つて、皆傷むこと無きことを得。有人一向に彼海水を說いて第七識に喩へ、眞識に喩へず。此言大いに偏なり。彼經の中の如きは、如來藏を說いて以て藏識と爲し、第七の妄心を業相識と名く。經に自ら說いて言はく、「藏識は巨海の如く、業相は猶波浪のごとし」と。云何が乃ち水と言つて、七識に喩ふる。彼文に復云はく、「如來の藏は彼無始の惡習の爲に熏ぜらるるを、名けて藏識と爲す」と。無明住地を生じて七識と俱なること海の波浪の如し。云何が海水を眞識に喩へざる。良に世人は眞心を迷覆するを以て、妄に空の義を取つて、以て眞識と爲す。故に此論を爲す。眞妄相對の依持是の如し。問うて曰はく、『眞妄一なるが故に相依るや。異なるが故に相依るや。』『是義不定なり。若し全く一體なれば則ち依持無からん。若し全く別體なるも亦依持無からん。不一不異の故に依持を說く。』故に『楞伽』に云は

【次に等】第二に唯妄に就いて依持を論ず。

【彼】楞伽經のこと。

【次に等】第三に唯眞に就いて依持を辨ず。

【次に等】以下、第二に眞妄共相の識に就いて依持を明す。

く、「異に非ず、不異に非ず。心と倶に和合して生ず」と。此れ妄識と彼眞心と和合して生ずることを説くなり。次に妄の中に就いて、以て依持を辨ず。第七の妄識は、諸の虚僞の本なり。説いて能持と爲す。前の六事識は妄に依つて起るを、説いて能依と爲す。能持は水の如く、能依は波の如し。水在れば波生じ、水盡くれば波滅す。況ふる所是の如し。是故に「楞伽」に云はく「水大流れ盡きて、波浪則ち生ぜざるが如く、是の如く意識滅すれば、種種の識生ぜず」と。彼妄識を名けて、以て意識と爲し、六種の事識を種種識と爲す。良に妄識を六が本と爲すを以ての故に、妄想の意滅すれば、彼種種の六識をして生ぜざらしむ。妄の中の本末の依持是の如し。次には唯眞に就いて、以て依持を辨ず。眞に體用有り。本淨の眞心は、之を説いて體と爲し、緣に隨つて隱顯なるを、説いて以て用と爲す。用は必ず體に依る。之を名けて依と爲し、體能く用を持するを、説いて以て持と爲す。能持は水の如く、能依は波の如し。繩蛇等の喩へ、類して亦同じく爾り。眞妄相對の依持是の如し。此一門竟る。次に眞妄共相の識の中に就いて、本末相對して、以て依持を辨ず。眞と癡と合して共に本識と爲る。本に依つて共に阿陀那識を起し、本に依つて共に六種の生識を起す。此分の中に於て、本識を本と爲す、餘の二を末と爲す。末生ずること本に依れば、之を名けて依と爲し、本能く末を持し、流注して斷ぜざる、之を説いて持と爲す。能持は水の如く、能依は波の如し。問うて曰はく、『末の中の阿陀那識は、共に六識を起す。相依持する義有ることを得るや不や。』釋して言はく、『得ず。此分の中に於て、六識親しく本識に從つて起

【經】十地經論第八。

【六】以下、第六門に熏習の義を明す。中に二門分別あり。先づ眞妄別相の識の中に就いて論ずる中三あり一に熏習の法體を定む。

【地持論】第二。

り、本識變爲す。體は是れ本識なるが故に、本識に望めて依と說き、持と說く。阿陀那の變じて六識と爲るには非ず。六識の體は阿陀那識に非ず。故に陀那に望めて依持を說かず。人の夢中の見聞、覺知、睡心より生じて、夢中の執我心より起らざるが如し。若し緣由に就かば、依を說き、持を說くも、亦傷むこと無きことを得。是義云何。阿陀那執我の心に由るが故に、本識に熏じて法如を見ず。涅槃を證せず。六識及び六根塵を變起す。之を離るれば、則ち無し。故に經に說いて云はく、「我に著するを以ての故に、世間に身を受く。我を離るれば、則ち行無し」と。是義に從つて依持を說くことを得。依持是の如し。此二門竟る。

(六)次に第六門に、熏習の義を明す。中に於て二有り。一には眞妄別相の識の中に就いて、以て熏習を辨じ、二には眞妄共相の識の中に就いて、以て熏習を論ず。前の中に曲く三と爲す。一には熏習の法體を定め、二には總じて熏の義を釋し、三には廣く熏の相を顯す。熏習の法とは、『起信論』の中に、四種有りと說く。一には淨法熏習、謂ゆる、眞如なり。二には染因熏習、謂ゆる、無明なり。三には妄心熏習、謂ゆる、業識なり。第七識の中に、始め業識より乃し相續に至るを通じて業識と名く。四には妄境熏習、謂ゆる「妄想心より起す所の僞境なり。此四は猶是れ『地持論』の中に、是の如きの如實凡愚知らずして八妄想を起し。二種の事を生ずといふがごとし。眞如熏習は猶彼如實のごとく、無明は猶彼凡愚の知らざるがごとく、妄心は猶彼の八妄想を起すがごとく、妄境は、猶彼三事を生ずる中

【次に等】二に總じて熏習の義を釋す。

【次に等】三に熏習の相を釋す。中に二、先づ起染を明す中初に熏習の相生ずる次第を明す。

【次に等】次に熏習所起の不同を明す。

の、初の虚僞事なるがごとし。問うて曰はく、『事識及び事の根塵、何の義を以ての故に熏習を說かざるや。』『此條未だ熏習の所起ならざるを以ての故に、之を說かざるなり。』此一門竟る。次に第二門に、總じて熏習を顯す。論の中に說くが如し。熏習の義とは、衣の香無きは之を熏じて有らしむるが如し。心も亦是の如し。眞の中に染無く、妄熏じて有らしむ。妄の中に淨無く、眞熏じて有らしむ。故に彼妄の中に、方便對治の行起ること有ることを得。論釋是の如し。此二門竟る。次に廣く熏習の相を釋することを辨ず。先に染を起すことを明し、後に淨を起すことを明す。起染の中に就いて、義別に二有り。一には前の四法に就いて、其熏習の相生ずる次第を明し、二には別して、熏習所起の不同を明す。相生の義とは、論の中に說くが如し。第一の眞如法に依るを以ての故に、便ち第二の無明染因を起す。無明染法の因有るを以ての故に、眞如に熏習して便ち妄心を起す。人昏睡して報心を覆ふが故に、夢心を起すが如し。妄心の無明に熏習すること有るを以て、眞如寂滅平等を了せず。不覺にして念起り、便ち妄境を生ず。人の夢心動發して惛睡し、夢の境界を起すが如し。妄境有るを以て、妄心を熏動して、便ち念著を起し、種種の業を造り、種種の苦を受く。念は猶愛のごとく、著は猶見のごとくなり。此れ事識の中に、見愛、煩惱、造業、受苦することと皆妄に依つて生ず。相生是の如し。次の熏習所起の不同を明す。論の中に說くが如し。末に從つて本を尋ぬ。次第に之を辨ず。妄境熏習の所起に二有り。一には增長念念は猶愛のごとくなり。二には增長取、取は猶見のごとくなり。妄心熏習の所起にも亦二あり。

【次に等】二に起淨を明す。中に二先づ眞の妄に熏ずることを明す。又二あり。一、能熏を明す中初に眞體熏習を明す。

一には熏習して變易の果を起す。謂はく、聲聞、緣覺の變易、菩薩の細苦を受く。二には分段の果を起す。謂はく、凡夫分段の麤苦を受く。妄識の中の相續の力、諸業を任持するに由つて、彼果を得るが故に。無明熏習の所起にも亦二あり。一には無明、眞心を迷覆するを以て妄の熏習を受け、妄の種子を成じて、妄識を生ず。二には無明、眞心を迷覆するを以て善惡の熏を受け、事の種子を成じて事識を生ず。眞如熏習の所起にも亦二あり。一には無明を起し、二には妄心を起す。彼眞如は無分別なるを以ての故に、能く無明を起す。覺知の性なるが故に、惑の爲に覆はれて便ち妄心を生ず。人の執心は是れ知の性なるが故に、昏睡に覆はれて、便ち夢知を生ずるが如し。起染是の如し。次に起淨を明す。起淨に二有り。一には眞の妄に熏ずることを明し、二には妄、眞に熏す。眞の妄に熏ずる中、初に能熏を明し、後に所熏を明す。能熏に二有り。一には眞體熏習、二には眞用熏習なり。體熏習とは、論の中に說くが如し。無始より來、無漏法及び不思議作業の性を具す。妄心に熏習して、能く衆生をして生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求し、自ら己身に眞如法有りと信じて發心修行せしむと。法身の本體を無漏法と名け、報佛の本用を作業性と名く。是二は亦佛性義の中に、具に廣く分別するが如し。此二に由るが故に、能く妄に熏ずるなり。問うて曰はく、『若し眞能く妄に熏じて善行を起さしめば、一切衆生悉く眞如有り。何んが、等しく熏じ、齊しく發心して所行を起修し、涅槃に趣入せしめず、而も諸の衆生に信不信、優劣、前後、無量の差別有るや。』論に自ら釋して言はく、「眞如は本一にして、

【用熏習とは等】次に用熏習を辨ず

【所熏といふは等】二に所熏を明す。

而も諸〳〵の衆生の煩惱の厚薄差別不同なり」と。是故に前後優劣等しからず。』又佛法の中に、因有り、緣有り。是二具足して乃ち成辨することを得。木中に火性有りと雖も、人攢れば方に出で、若し人攢ること無ければ、自ら燒くこと能はざるが如し。衆生も是の如し。如の性有りて、以て正因と爲すと雖も、若し善友、諸佛、菩薩の起行の緣無ければ、眞法自ら煩惱を除き、自ら涅槃を成ずること能はず。用熏習とは、論に自ら釋して言はく、「即ち是れ衆生外緣の力なり」と。謂はく、佛、菩薩は如を證して用を起し、衆生を攝化して善法を修せしむ。中に於て二有り。一には差別緣、二には平等緣なり。差別緣といふは、論に自ら釋して言はく、「修行の者は佛、菩薩に依つて、初發心より乃ち成佛に至る其中間に於て、若は見、若は聞く。諸佛菩薩、或は眷屬と爲り、或は師長と爲り、或は知友と爲り、或は給使と爲り、或は怨家と爲る。諸佛菩薩、此衆生に於て、慈悲方便、四攝もて攝取して善行を增さしめ、正道に入らしむるを差別緣と名く。此差別の中に、近有り、遠有り。近とは速疾なり。遠とは久遠なり。此れ猶是れ其應身の化なり。平等緣とは、論に自ら釋して言はく、「諸佛菩薩、久しく大願を發し、誓つて一切を度す。此善根熏習力を以ての故に、自然に常に一切の衆生に隨ひ、隨應見聞して爲に示現す。謂はく、亦如來平等法身を示して、諸の衆生をして、三昧力に依り平等に見佛せしむ。此れ猶是れ其眞身の益なり。能熏是の如し。所熏と言ふは、論の中に說くが如し。所熏に二有り。一には未相應、謂はく、凡夫、聲聞、緣覺及び菩薩の中、初發心の者に熏じて、六識、七識の心中に於て、

【下文に等】次に起淨の中に、其妄心を熏じて眞に淨法を發生することを明す中に二あり、初に能熏。又二、一に總熏習。

【別熏習とは等】二に別熏習。

【所熏に等】次に所熏。

信順修行せしむ。未だ妄を捨てて、實と相應すること能はず。二には已相應、謂はく、出世法身の菩薩に熏習して、妄心を捨てて無明を除滅し、眞如を契證して佛如來の法身と相應し、分別有ること無く、唯法力に依つて自然に修行し、佛の智海に趣かしむ。上來の一門は、眞の妄に熏じて、淨法を集起することを明す。下次に、其妄心熏じて眞に淨法を發生することを明す。中に於て二有り。一には是れ能熏、二には是れ所熏なり。能熏の中に、總有り別有り。總じて熏習すとは、論に自ら釋して言はく、「妄心に生死を厭離し、涅槃を求むること有るを以ての故に、眞心に熏習して自ら己性を信ず」と。唯是れ眞如なり。如の外に法無し。但是れ妄心顚倒の所見なり。外境は所有無しと知るを以ての故に、種種方便して染を離れ、眞に趣くの行を修習す。所修有りと雖も、取らず、念ぜず。久修力の故に、無明則ち滅す。無明滅するが故に、妄心生ぜず。妄心生ぜざるが故に、妄境隨つて已む。心相倶に盡くるを、涅槃を得と名く。涅槃を得るが故に、自然に不思議の業用を成就して、法界に充つ。總相是の如し。別熏習とは、論に自ら釋するに二有り。一には事識熏、謂はく、凡夫二乘の人等、生死の苦を厭ひて涅槃に趣向す。此れ六識の中に方便修行して、眞を熏發するなり。二には意熏習、謂はく、諸の菩薩虛妄の法を見るに、貪取すべき無し。眞を知ること法の如く、寂靜安穩なり。發心勇猛にして大涅槃に趣く。此れ七識の中に方便修行して、眞を熏發するなり。良に以れば、妄識能く事識を生ず、事識を生ずる所依なるが故に、意と名く。事識の中の意根界には非ず。能熏是の如し。所熏に

【次に等】熏習の義を明す中、次第二に眞妄共相の識の中に就いて熏習を辨ず、中に三、一に熏の相を辨ず、中初に阿陀那の阿梨耶と共に相熏ずるを明す。

二有り。一には熏生、報佛の方便功德を熏生す。二には熏顯、法佛の性淨功德を熏顯す。眞妄別識の熏習是の如し。問うて曰はく、『眞妄前後に相熏じて、一時に在りと爲すや。』釋して言はく、『相熏ずること必ず同時に在り。』是義云何。染淨の諸法は眞妄共起す、單眞は生ぜず。唯妄は成ぜず。何が故に、是の如くなる。唯眞無妄は眞性常堪、無爲不變の故に起作無し。唯妄無眞は妄體不立の故に亦作無し。故に『勝鬘』に云はく、「若し藏識無くんば、七法住せず。苦を種うることを得ず。苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず。眞妄相依つて方に能く一切の諸法を造作す。共作を以ての故に、法を攝して情に從へば、皆是れ妄爲なり。法を攝して本に從へば、皆眞心の作なり。人の夢中に爲す所の諸事、事を攝して末に從へば、昏睡の所爲、事を攝して本に從へば、報心の所作なるが如し。亦世人の繩を見て蛇と爲すが如き、蛇を攝して情に從へば、妄情の所爲、蛇を攝して本に從へば、皆是れ繩作なり。諸法此に像る。眞能く作すと雖も、作すことは必ず情に隨ふ。繩の蛇と作すが如し。蛇は闇き情に由る。妄能く作すと雖も、作すことは必ず眞に託す。情の蛇と作す、蛇は必ず繩に依るが如し。眞の情に由ること無きを、妄眞に熏ずと名く。妄作の眞に由るを、眞、妄に熏ずと名く。此の如く相熏じて、義に先後無し。故に一時と說く。眞妄相熏ずる旨要ず斯に在り。宜しく記せざること無かれ。次に眞妄共相の識の中に就いて、以て熏習を辨ず。共相識といふは、佛性眞心と無明地と合して本識と爲すを、阿梨耶と名く。本に依つて阿陀那識執我の心を變起し、本に依つて眼等の六識、及び六根塵を變起す。義

【次に等】次に六識をもて本識に對して相熏發するを明す。

は上に辨ずるが如し。今此三に就いて、相熏習することを明す。『攝論』に說くが如し。中に於て曲く三門の分別有り。一には熏の相を辨じ、二には能熏の差別を明し、三には受熏不受熏の異を明す。熏の相は如何。今此に先に阿陀那識、阿梨耶と共に、相熏習する義を明す。彼阿陀那執我の心、本識に熏じて、我の種子を成ず。本識、彼陀那の熏を受け已つて、還つて能く彼心中の我の性を引いて阿陀那を生じ、是の如く相熏じて、往來無窮なり。是れ則ち陀那にして、本識に望めて互に因果と爲る。問うて曰はく、『此我は何に由りてか盡すべき。』六識の中に無我の教を聞いて無我の解を修し、本識に熏じて無我の種を成ずるに由つて、本の中の眞心、彼熏を受け已つて、本の中の無明に熏じて薄からしむ。無明薄きが故に、無明の中の我の種をして轉薄からしむ。我の種薄きが故に、陀那を轉生して執我も亦薄し。是の如く展轉して乃ち窮盡に至る。次に六識を將て、本識に對して相熏發することを明す。彼六識の中に染を起し、淨を起す。起す所の染過は本識に熏ず。彼本識の中の所有の闇性は、彼染熏を受けて、染の種子を成ず。種子成じ已れば、無明厚きが故に六識を引生して、六識の中に於て染過轉た增す。是の如く展轉して、積習無窮なり。六識の中に於て、修する所の善行は本識に熏ず。本識の中に於て、佛性眞心を名けて解性と爲す。解性は彼淨法の熏を受けて、淨の種子を成ず。淨種成じ已れば無明に熏じて、無明轉た薄し。無明薄きが故に、六識を轉起し、六識の中に於て、善を起すこと轉た勝なり。是の如く展轉して乃至究竟す。是れ則ち六識にして、本識に望めて互に因果と爲る。

【次に等】第二に能所熏の差別を明す、先づ能熏。

【所熏と等】次に所熏を明す。中に一に麁分を說く。

論に說くこと是の如し。此一門竟る。次に能熏所熏の差別を明す。論に能熏を說く。略して三種有り。一には言說の熏習、論に亦名けて名字熏と爲すなり。名に二種有り。一には聲名、曰はく、名言分別なり。二には心詮名、曰はく覺觀分別なり。諸の凡夫一切陰、界、入等の諸法の名字に隨逐して、分別取著するを以て、本識に熏じて陰、界等の諸法の種子を成ず。二には我見熏習、阿陀那及び六識の中の我見の心を以て、本識に熏じて我の種子を成ず。三には有分熏習、善惡の業は是れ三有の因なるを、名けて有分と爲し、善惡の業を以て本識に熏じ、善惡の種を成ずるを、有分熏と名く。能熏是の如し。所熏と言ふは、是れ其所起なり。論に事用と名く。麁分して四と爲す。細分すれば十一なり。麁分の四とは、一には引生と名く。本識、彼善惡等の熏と爲りて、種子を成じ已つて、彼種子を引いて未來の果を生ず。二には果報、本識、彼善惡等の熏と爲りて、一切の苦樂等の報に變爲す。三には緣相、本識、彼我見の熏と爲るが故に、我我所自他の別を起す。四には相貌、本識、彼言說の熏と爲るが故に、陰界入、有爲無爲、若は內、若は外、一切種の事を起す。又更に四を分つ。一には似我識、阿陀那及び六識の中に於て、取る所の我は有に非ずして、有に似たり。故に似我と曰ふ。夢中の身の如し。本識變爲の體、是れ本識なり。似我識と名く。二には似根識、眼等の六根は有に非ずして、有に似たるを、名けて似根と爲す。本識變爲の體、是れ本識なり。似根識と名く。三には似塵識、色等の六塵は有に非ずして、有に似たるを、名けて似塵と爲す。本識變爲の體、是れ本識なり。似塵識と名く。四には似

【細分の等】次に細分を明す。
【論】梁攝論第五

【次に等】第三に三識受熏の不同を明す、義別して三一に熏生。
【楞伽】第四。

識識、彼阿陀那及び六識の心は有に非ずして、有に似たり。謂はく、凡夫所計の有に似たるを、名けて似識と爲す。本識變爲の體、是れ本識なり。似識識と名く。塵分是の如し。細分の十一とは、論の中に說くが如し。一には身識、謂はく、五根身なり。本識變爲の體、是れ本識なり。二には身者識、謂はく、阿陀那執我の心なり。本識變爲の體、是れ本識なり。三には受者識、論に言はく、「謂はく、意なり。是れ意根界なり。遍く諸塵を司りて領納するを受と稱く」と。本識變爲の體、是れ本識なり。四には應受識、謂はく、六塵の境なり。應じて心受と爲すが故に、應受と曰ふ。本識變爲の體、是れ本識なり。五には正受識、謂はく、六識の心なり。正しく六塵を納めて領納するを受と名く。本識變爲の體、是れ本識なり。六には世識、謂はく、三世の時なり。本識變爲の體、是れ本識なり。七には數識、謂はく、百千等なり。識の義前の如し。八には處識、謂はく、國土處なり。識の義上の如し。九には言說識、一切の言說なり。識は前に解するが如し。此九は是れ前の言說熏起す。十には自他識、自他身の別なり。本識變爲の體、是れ本識なり。自他識と名く。此一は是れ前の我見熏起す。十一には名けて善道惡道生死の識と名く。六道の生死なり。本識變爲の體、是れ本識なり。此一は是れ前の有分熏起す。細分すれば無量なり。差別是の如し。此二門竟る。次に三識受熏の不同を明す。義別に三有り。一には熏生、二には熏體、三には熏成なり。熏生と言ふは、三識皆是れ心生滅門にして、皆相熏、相生の義有り。問うて曰はく、『本識若し熏生と爲せば、『楞伽』に說くが如し。「如來の藏、彼無始の惡習の爲

に熏ぜらるるを、名けて藏識と爲し、無明地を生じて、共に本識と爲す」と。故に名けて生と爲す。何者か惡習なる。分別するに三有り。一には本識の中の無明住地、前後に相起つて、前の無明を以て眞心に熏じて、後の無明を生ず。人の睡習の時至れば、則ち睡るが如し。二には阿陀那識執我の心、本識に熏じて、我の種子を成ず。此種、眞を汚して法の實を見ず。無明を生ず。三には六識の中の所起の煩惱、本識に熏じて染の種子を成ず。此種眞を汚して法の實を見ず。無明を生ず。阿陀那識の生相は云何。有人宣說すらく「唯我執のみを生じて、無我の解を生起することを得ず」と。何が故に、是の如くなる。我執無き處、復是れ其阿陀那の收にあらず。是れ一切無我の解を爲すは阿陀那に非ずとは、道理盡くさず。其義云何。凡夫は本來、數我を說くを聞いて、我想を生じて本識に熏じ、我の種子を成ず。此種力の故に執心を生じ、定めて我有りと計す。此人、後時に、無我を說くを聞き、無我の解を生じ本識に熏じて、無我の種を成ず。此種の力執心を生じて、定めて無我なりと計す。何んが不得と爲さん。爲し是れ一切の聲聞、緣覺、諸の小菩薩は、一切の時に於て、常に無我を計す。此我無我は皆熏より生ず。執我の心は、大乘の中に於ては煩惱障と名け、無我の執は、大乘の中に於ては、名けて智障と爲す。六識の心の生相は云何。本識の中の染の種子に由るが故に、六識を熏起して染過愈增す。本識の中の淨の種子に由るが故に、六識を熏生して起淨轉勝る。問うて曰はく、『陀那を六識に望めて、相熏相生の義有ることを得るや不や。』釋して言はく『亦阿陀那執我の心に由ることを得るが故

【熏轉と等】二に熏轉を明す。

に、本識に熏じて我の種子を成じ、六識を生起して見我轉增す。阿陀那の執無我に由るが故に、本識に熏じて無我の種を成ず。此種力の故に六識を生起し、六識の中に於て、我見漸く薄らぎ、無我の解增す。熏生是の如し。熏轉と言ふは、三識不定なり。中に於て悉く熏の義有り。本識の中に於て、熏轉すること如何。解するに二種有り。一には諸識の修善起惡、本識に熏ずるに由つて、本識の中の善惡の二種をして、遷轉して定まらず、或は增し、或は滅ぜしむ。二には眞觀を修習する力に由るが故に、無明を熏滅し、眞をして本に稱うて常寂不動ならしむ。法は本來唯眞にして妄無しと觀ずる、是れ眞觀なり。阿陀那識熏轉すること如何。分別するに二有り。一には六識の中に無我と說くを聞いて、聞思修を起し、本識に熏じて無我の種を成ず。此種力の故に阿陀那に熏じて、我執漸く微にして無我の解起る。二には六識の中に、佛性常住、眞我古今平等、如如一味なりと說くを聞いて、聞思修を起し、本識に熏じて無明地を壞す。無明壞するが故に、本識成ぜず。本成ぜざるが故に、種子立せず。種立せざるが故に、執識生ぜず。執生ぜざるが故に、無我の解滅す。前の我執を離るるを、經の中に名けて煩惱障を滅すと爲し、後の無我を離るるを、智障を除くと名く。六識の中に熏轉すること如何。分別するに三有り。一には六識の中の修善造惡、本識に熏じて善惡の種を成ず。此種成じ已りて、六識に熏生して善惡不定なり。惡種熏起して、惡增し善滅すること、斷善の人の如し。善種熏起して、善增し惡滅すること、生善の人の如し。二には六識の中に、空觀を修習す。生無我を觀じ、法無

【次に等】三に熏成を明す。
【此門の等】以下本識のみ受熏成種の義あるを解す。

我を觀ず。本識に熏じて解の種子を成ず。此種成じ已りて、本識の中の有見の種子を壞す。有の種壞するが故に、所生の六識、有の見を起さず。有の見息するが故に、分段漸く滅ず。三には六識の中に、眞觀を修習す。法は本來純眞にして妄無しと觀じて、能く妄法をして更に生ぜざらしむ。復本識に熏じて無明地を壞す。無明壞するが故に、本識成ぜず。本成ぜざるが故に、六識の種子存立する處無し。種立せざるが故に、分段の中の六識生ぜず。六生ぜざるが故に、空觀も亦滅す。空觀滅するが故に、變易轉盡く。變易盡くる處を、涅槃を得と名く。熏轉是の如し。次に熏成を辨ず。熏習して種を成ずるを、名けて成と爲すなり。此門の中に於て、唯本識のみ有りて熏を受け種を成ず。餘は悉く受けず。何が故に、是の如くなる。解するに七義有り。一には本識は緣起の本なるを以て、一切を能く集め、能く散じ、能く受く。諸法の熏ずる所、聚積して種を成ずるを名けて能聚と爲し、散じて諸法を生ずるを說いて能散と爲す。餘識は然らず。所以に受けず。二には本識、諸識の原と爲りて、諸識を變起するを以ての故に、諸識の中に於て善を興し、惡を造る。悉く是れ其功なり。一切を攝して本に歸するが故に、本識の中に諸法の熏を受け、積集して種を成ず。餘は是の如くならず。所以に受けず。三には本識の中に、具に明闇二種の法有り。眞心は是れ明、無明は是れ闇なり。闇は能く染を受け、生死を增長す。明は能く淨を受け、涅槃に趣向す。故に徧く熏を受く。餘識は爾らず。所以に受けず。四には本識の中、親しく眞體を含む。牢固にして壞し難し。力能く一切の業果を住持するが故に、一切染淨

【七】以下、第七門に八識の迷悟修捨の義を明す。先づ意に随つて明す【意に随つて】第六意識に随つての義。

等の熏を受け、聚めて以て種を成ず。之を用て果を受く。餘は是の如くならず。是が爲に受けず。五には本識微細にして、潜に諸法に通じ、一切の法と同生同滅す。相伴ふの義親し。故に能く遍く一切法の熏を受く。餘識は然らず。所以に受けず。六には本識、善惡等を緣ずること無く、別の記念無し。別念無きが故に。彼此の諸法相妨礙せざるが故に、通じて一切法の熏を受くることを得て、聚積して種を成ず。餘識は別念にして彼此相礙す。故に通じて一切法の熏を受けず。七には本識是れ心、神知の性なり。心は諸法の性に於て、性能く領記し、領別し、能く受く。記すれば則ち能く持す。故に本識の中に、通じて諸法を受け、持して失せざらしむ。餘は心法に非ず。是の如くなること能はず。故に熏を受けず。七の中の前の六は餘識を簡別し、後の一は非情の法に簡異す。熏成是の如し。熏習の義難し。麤況ること且く然り。

（七）第七門の中に、其迷悟修捨の義を明す。五識の中には、別に其迷悟修捨を明さず。中に於て迷悟修捨の義、意に随つて之を說く。意識の中に、迷有り、悟有り。謬つて執我の人は法の性相を取る。之を以て迷と爲す。空理を解會する、之を說いて悟と爲す。悟解不同なり。分つて三種と爲す。一には生空觀、五陰は我人無しと觀察するが故に。二には法空觀法は虛假にして自性無しと觀ずるが故に。三には如觀、諸法は有無に非ずと觀察するが故に。云何が法を觀ずることを、有無の一切法に非ずと知るや。猶幻化の如し。幻化の有は、無法を有と爲す。有は則ち有に非ず。幻化の無は、有法を無と爲す。無は則ち無に

【第七識の等】次に第七識に隨つて明す。

【第八識の等】次に第八識に隨つて說く。

非ず。然れば則ち此幻の有無を說いて、有無に非ずと爲す。亦非有非無の得べき無し。還つて即ち此非有非無を說いて、有無と爲るが故に、有無の相も亦得べからず。進退推求するに、法として取るべき無し。境界既に然り。心想も亦爾り。是故に心想自然に息滅す。此三は皆是れ心外の法の中に、理を求むるを以ての故に、通攝して以て意識觀と爲すなり。三の中の前の二は是れ其增相、後の一は息相なり。六識を息するなり。第七識の中にも亦迷悟有り。眞實を知らず。妄に自心所起の諸法を取る。之を說いて迷と爲す。妄を返して實に趣く。之を謂つて悟と爲す。悟解不同なり。亦三種有り。一には妄想依心の觀、三界虛僞の相は唯心より起る、夢の所見の如きを、心外に畢竟じて法の得べき無しと觀察す。二には妄想依眞實の觀、妄想の心虛構して自無し、眞に依つて立つこと波の水に依るが如く、迷は妄に依ると觀ず。三には眞實離妄想の觀、一切の法は唯是れ眞實にして緣起集成す、眞の外に畢竟じて、一法として妄想を起すべきもの有ること無しと觀ず。既に法として妄想を起すべきもの有ること無し。妄想の心の理にも亦之無し。三の中の前の二は是れ增相觀、後の一は捨相なり。七識を捨するなり。第八識の中にも亦迷悟有り。妄に隨つて染を成じ、自實を證せざる、之を名けて迷と爲す。妄を離して本に契ふ、之を說いて悟と爲す。悟解不同なり。互に以て相成じて、不離、不脫、不異なり。良に以れば諸法は同體にして緣集す。亦三種有り。一には息相觀、生死涅槃は本是れ眞識なり。妄に隨つて起る所なり。實を證して返つて望むるには、由來妄無し。妄想既に無し。焉んぞ妄に隨つて、

【經】維摩經。菩薩品。
【地持經】十地經論第九。
【維摩】佛道品。
【經】維摩經。問疾品。
【八】以下、第八に八識迷悟の分齊を明す、先づ六識の分齊に就いて。

生死涅槃法相の得べきもの有らん。故に息相と名く。二には實性觀、內に眞實を照せば、如來藏性は唯是れ法界恆沙の佛法にして、同體緣集す。互に以て相成じて、不離、不脫、不斷、不異なり。良に以れば諸法は同體にして緣集し、互に相成ず。故に一法として別に自性を守ること有ること無し。一性無しと雖も、而も性ならざること無く、一性有ること無きは即ち是れ如如一實の門、而して性ならざること無きは、即ち是れ眞實常樂淨等の法界門なり。體性常然にして古今不變なり。三には眞用觀、一切諸佛菩薩の化用の門を觀察す。是れ用門の中に、備に染淨三乘の諸法を含む。法既に圓具す。之に依つて德を成ず。德施さざること無し。是を以て大聖善く入りて、世間に隨順するが故に、能く一切煩惱等の事を現ず。故に經に說いて言はく、「八萬四千の諸煩惱門にして、諸の衆生は、之が爲に疲勞す。諸佛此を以て、佛事を作す」と。煩惱既に然り。業苦も亦爾り。又『地持經』の中に說く、「此等の門、煩惱等の事を發起殊勝の行と爲す」と。『維摩』に說いて、佛道に通達すと爲す。又復善く二乘の法門に入つて、能く一切二乘の事を現ず。故に經に說いて言はく、「聲聞辟支佛等を示現す。是れ菩薩の行なり」と。又復善く一切菩薩の作用門に入るが故に、涅槃を得と雖も、畢竟じて菩薩の所行を捨てず。乃至善く諸佛如來の作用門に入るが故に、能く八相を以て成正覺を示し、法界に充滿して窮盡無し。此は是れ第三の眞用觀なり。

(八)第八に其迷悟の分齊を明す。六識の分齊差別するに五有り。一には迷處、外凡に在りて

【註】十地論經。【二十五三昧】無垢、不退、心樂、歡喜、日光、月光、熱焔、如幻、不動、難伏、悅意、青色、黃色、赤色、白色、種種、雙、雷音、注雨、如虛空、照鏡、無礙、常、樂、我の二十五三昧、菩薩はこれ等の三昧によつて二十五有に沈倫する衆生を順次に救濟する【二十五有】衆生の論轉する生死界を二十五に分てるもの四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、五那含天、四禪天、四空處天のこと。【第七識の等】次に第七の分齊に就いて。【第八識の等】次に第八識の分齊に就いて。

常沒の流なり。二には習解處、亦凡に在りて善趣に隣る。三には正解處、亦外凡善趣の位中に在り。四には漸捨處、習種已上なり。五には終盡處、初地已上なり。次に初地已上は六識を離るるが故に、經の中に之を說いて出世間と爲す。又『楞伽』に云はく、「初地の菩薩は、二十五三昧を得て、二十五有を離る」と。是れ三界の身なり。彼を遠離するが故に、六識を捨すと名く。又『大智論』に宣說すらく、「初地に菩薩の家に入つて、肉身を捨離して法性身を得」と。此も亦是れ其六識を離るる義なり。若し殘習を論ぜば、十地にして乃ち盡く。第七識の中、分齊に五有り。一には迷處、外凡に在り。二には習解處、亦凡と十信との位中に在り。三には正解處、習種已上なり。四には漸捨處、初地已上なり。五には窮盡處、佛地に在り。是故に如來は究竟眞實なり。第八識の中、分齊に四有り。一には迷處、外凡と乃至十信とに在り。二には習解處、習種已上なり。三には正解處、初地已上なり。四には窮滿處、佛地に在り。問うて曰はく、『六識は盡すこと初地に在り。初地已上は便ち六識無し。云何が見聞覺知を得るや。』釋して曰はく、「事相の六識無しと雖も、猶七識緣照の無漏所得の法身、及び彼眞識緣起の法身の眼耳等の識有り。是故に之を用て見聞覺知す。」問うて曰はく、「若し緣照の法身を以て見聞覺知すると、前の六識と何の差別か有る。」釋して曰はく、『前の六は是れ其事識なり。事相を分別して、心外に法を取る。緣照の法身の見聞覺知する所、外に法無し。一切悉く是れ自心の所起なり。夢の所見の如し。自心の相に於て分別照知す。此異有るなり。』問うて曰はく、「眞實緣起の法身の見聞覺知と、彼七識の

【九】以下、第九に八識修捨の分齊を辨ず。中に三、第一に事識につく

【論】起信論義記

【成實論】第十四

【次に等】第二に妄識に就いて。

緣照と何んが別なる。『釋して言はく、『七識緣照の法身は、但妄想緣起の法の中に於て分別緣照す。又眞法に於て分別緣照して、緣を離るること能はず。眞法身とは、妄想を遠離して心淨照明なり。淸淨法界、自心の原を顯すを、名けて見聞と爲す。分別して知るには非ず。

(九)第九に、其修捨の分齊を明す。先に事識に就いて修の分齊を辨じ、次に妄識に就き、後に眞識に就く。事識に二有り。一には障相、二には治相なり。障相に二有り。一には執取相、論の中に亦執相應染と名く。此は是れ根本取性の無明なり。二には計名字相、衆生の名に隨つて、取つて我人を立つ。對治相とは、是れ意識の中の相應の慧なり。前の二障を治するを對治相と名く。『成實論』の中に、說いて空心と爲す。計名字は、小乘の法の中には、見道の時に斷じ、大乘の法の中には、十信の時に斷ず。執取相は、小乘の法の中には、無學を得る時、之を斷じて畢竟とし、大乘の法の中には、種性の時に盡す。故に彼『大乘起信論』に言はく、「執相應染は、二乘の解脫、信地の菩薩の斷除する所なり」と。彼種性を說いて信地と爲すなり。對治相といふは、小乘の法の中には、無餘涅槃に入る時に滅し、大乘の法の中には、初地の時に盡す。此一門竟る。次に妄識に就いて、以て修捨を辨ず。妄識の中にも亦二種有り。一には障相、二には治相なり。障相に六有り。『起信』に說くが如し。一には心不相應の無明住持なり。不相應といふは二乘に簡異す。二乘の斷ずる所は、是無明數と心と別體にして、心と共に相應す。無明地とは、即ち心の體を指して、以て無明と

【大乘起信論義記下本第三】

【具戒地】十地中の第二地、三聚戒具なるが故に。

【無相方便地】十地中の第七地、この地は無相觀を修するに就いて、加行方便の功用ある位の故。

爲す。是れ心の外に別に數法を立て、心と共に相應するに非ず。故に馬鳴の言はく、「卽心不覺にして、常に別異無し」と。不別と心と同じく知り、同じく緣ずるを、不相應と名く。二には無明地に依つて業識不相應の染を起す。愛著を染と名く。不相應の義は前の釋に異らず。三には業識に依りて轉識不相應の染を起す。不相應の義は亦前の釋に同じ。四には轉識に依りて現色不相應の染を起す。現色と言ふは、猶是れ現識なり。能く自心所起の色を現ずるが故に、現色染と名く。不相應といふは、亦前の釋に同じ。五には現識に依つて智識心相應の染を起す。相應と言ふは、心相轉た麤にして、染と心と別にして、心と共に相應するが故に、相應と云ふ。故に論に說いて言はく、「心と念と異にして、同じく知り同じく緣ず。故に相應と曰ふ」と。念は是れ貪數なり。六には智識に依りて不斷識相應の染を起す。不斷と言ふは、猶是れ續識なり。相應は前に同じ。馬鳴の論の中に、此六種を攝して、以て二障と爲す。前の一種を名けて智礙と爲す。猶是れ智障なり。後の五種を煩惱礙と名く。猶是れ煩惱障なり。障相是の如し。對治相といふは、猶是れ七識緣照の解もて、前の六種を治す。故に治相と名く。次に斷處を辨ず。彼『大乘起信論』に說くが如し。前の六障の中に、第六の不斷相應の染といふは、始め信地より漸く學して斷除し、淨心地の時に、之を斷ずること畢竟す。第五の智識相應の染とは、具戒地より漸次に斷除し、乃至無相方便地の時に、之を斷ずること畢竟す。具戒地とは、謂はく、第二地なり。無相方便は、是れ第七地なり。第四の現色不相應の染は、色自在地に之を斷ずること畢竟す。色自在と

【色自在地】第八地、此地は三種の世間の自在をえ、色性心に隨つて障礙なき位の故。
【心自在地】第九地、此位に入れば善く衆生の心行を知ること自在の故
【次に等】第三に眞識に就いて。
【地持】第一。

心は、是れ第八地なり。能く佛土を淨むるを、色自在と名く。第三の轉識不相應の染は、心自在地に之を斷ずること畢竟す。心自在とは、是れ第九地なり。善く物の心を知るを、心自在と名く。第二の業識不相應の染は、菩薩地に盡く之を斷ずるときに、畢竟じて如來地に入る。第一の根本無明住地は、馬鳴の論に言はく、「地前に學斷じ、初地に分に除き、佛地に窮盡す」と。故に『勝鬘』に云はく、「無明住地は佛菩提智の斷ずる所なり」と。障の分齊之を斷ずること是の如し。對治相といふは、初地に漸く捨て、佛に至つて乃ち盡く。若し復通じて論ずれば、種性已上も亦分に斷除す。此二門竟る。次に眞識に就いて、修の分齊を明す。眞識の中、緣に約するに三有り。一には染相と彼煩惱の闇惑と相應す。二には雜染相眞心と彼緣治と相應す。三には淨相妄を離れて、始めて顯る。若し染相を論ぜば、種性已上漸次に息除し、佛に至つて乃ち窮まる。若し復通論すれば、十信已上も亦捨の義有り。第二の雜相は、初地に漸く捨て、佛に至つて乃し盡す。若し復通論すれば、種性已上も亦捨の義有り。故に『地持』に云はく、「種性の菩薩は六入殊勝、無始法爾なり」と。第三の淨相は、八地に漸く捨て、佛に至つて乃し窮まる。故に八地の中に、法の無生、無滅、無出を觀じて、一切法畢竟平等にして染相有ること無く、亦淨相無しと知る。若し復通論すれば、初地已上も亦淨相を捨す。故に『大品』の中に宣說すらく、「初地に無生忍を得て、法本如を證す。先づ染にして後に息して淨と爲すを見ず。取無く、捨無く、如如平等なり」と。修捨是の如し。

【一〇】第十に邪執を對治して正義を顯示す。先づ事識に就いて中に邪執に八あり、一に定めて一なりと執す。

【一一には等】次に定めて異なりと執す。

（一〇）第十門の中に、邪執を對治して正義を顯示す。先に事識に就いて邪執を對治し、次に妄識に就き、後に眞識に就く。事識に就く中、邪執といふは八有り。一には定んで一なりと執す。有人宣說すらく「六識の心、根に隨つて別なりと雖も體性は是れ一なり。往來彼此は一の獼猴の六窓に倶に現るるが如く、六猴有るに非ず。心識も是の如く、六根の中に現ず。六心有るに非ず」と。此邪執に對して、心を說くこと一に非ず。識に別體無し。緣知を義と爲す。六識の心、所依の根は異なり。所緣も亦異なり。云何が定んで一なる。若し定んで是れ一ならば、常に一塵を了して轉異有ること無し。又復心法は往來の義無し。知處有るに隨つて、即ち彼處に生ず。說いて一にして往來すと言ふことを得ず。又彼引く所の獼猴を喩と爲して心一なりと證すといはば、是義然らず。凡夫愚人は謂はく、猴は定んで一なり、六窓の中に現ずと。然るに實に獼猴念念に生滅して此窓に現ずる者は、彼窓に至らず。心識是の如し。眼に依つて生ずる者は、餘の根に至らず。是の如く一切皆爾り。二には定んで異なりと執す。有人宣說すらく、「六識の心の體性は定んで異なり」。此邪執に對して、心は別ならずと說く。事の分齊に於て一慮を相續す。全く別體なるに非ず。一獼六窓に遊泆するは、六猴有るに非ざるが如し。若し六識各別に體有りと言はば、別體の法は相干預せず。眼識は、還つて應に眼識より生じ、乃至意識は、還つて意より生じて相起ることを得ざるべし。現見の五識は意識より生じ、意識は五識に從つて生ず。別體に非ざることを明す。又若し六識各別に體有らば、有體の法は相妨礙せず。相妨げざるが故に、

【三には等】次に定んで常なりと執す。

【四には等】次に定んで斷なりと執す。

【五には等】次に定んで有なりと執す。

六識の心は常に應に並んで有なるべし。若し常に並に有ならば、常に應に並んで用あるべし。常に並ばざるが故に、別體に非ざることを明す。三には定んで常なりと執す。有人三世の中に業果を斷ぜずと說くを聞いて、心は定んで常なりと謂ふ。生死往來は、常に是れ一なり。識用興廢すと雖も、心體變ぜず。此執を對治して、識は無常なりと說く。人中の心は異なり。天中も亦異なり。六道の心は各各別異なり。云何が是れ常ならん。又經に說くが如し。苦相應は異なり。樂相應は異なり。不苦不樂相應も亦異なり。是の如く、一切各各別異なり。云何が是れ常ならん。但諸の凡夫は心相を知らず。妄は是れ常なりと謂ふ。猶小兒の旋火輪を見て、斷絕せずと謂ふが如し。若し心常ならば、善は應に常に善なるべく、惡は應に恆に惡なるべく、變異有ること無からん。變異するを以ての故に、定んで無常なることを知る。四には定んで斷なりと執す。有人の心識は無常なりと說くを聞いて、便ち定んで斷ずと謂ふ。此執を對治して心は不斷なりと說く。現世の造業は後に必ず得果す。云何が定んで斷ならん。譬へば、乳酪轉變して異なりと雖も、毒を乳の中に置けば、酪則ち人を殺すが如し。心も亦是の如し。惡を造れば、中に於て必ず苦の報を受く。是れ斷に非ざることを明す。五には定んで有なりと執す。『毘曇』に說くが如し。十八界等各己れが性に住す。是れ有にして空にあらず。設し空と言はば、但陰の上に空ず。横に我人を計す。法體を空ぜず。法空ならざるが故に、心識定んで有なり。此邪執に對して、識は是れ空なりと說く。空相は云何、識といふは正に別知を以て義と爲す。一念の識の如

【經】般若經等。

【六には等】次に定んで無と執す。

【眞】眞諦の義。

【七には等】七に心識獨立して數無しと執す。

【涅槃】北本第三十四。

きは、則ち四相を具す。初生、次住、終異、後滅なり。此四の中に於て、何者か是れ初相爲ることを知り、中爲ること、後爲ることを知るや。若し初相を知らば、餘は應に知らざるべく、餘若し知らざれば、則ち識と名けず。若し餘相を知らば、初は應に知らざるべく、初若し知らざれば、初を識と名けず。若し四相各別に是れ知ると言はば、便ち是れ四念各別にして法を知る。何んが一念に四相を具足するに關らん。若し四相別に是れ知るに非ず、和合の中に方に知ること有りと言はば、知るに非ずして共合す。云何が知ること有らん。百盲の聚まるが如し。豈見る所有らんや。又復四相都て合の理無し。云何が合の理無き。生相現ずる時、餘相未だ有らず。誰と共にか合せん。乃至第四の滅現ずるの時、餘相已に謝す。復誰とか合せん。進退推求するに、都て合の義無し。云何が說いて、和合して知ること有りと言はん。知の義既に然り。焉んぞ定んで識有らん。是故に經の中に說かく、「色乃至受想行識は一切皆空なり」と。六には定んで無と執す。有人五陰空寂なりと說くを聞いて、便ち世諦因緣も亦無なりと謂ふ。此執を對治して、識は無に非ずと說く。若し心識無くんば、云何が見聞覺知することを得ん。現見の六識は各作用を具す。明かに知んぬ、無にあらざることを。又若し識無くんば、則ち善惡無からん。若し善惡無く、亦苦樂無くんば、則ち邪見、斷善根の中に入る。宜しく之を受くべからず。經に言はく、空とは、眞に就いて論を爲す。世諦の中に於て心識無きにあらずと。七には心識獨立して、數無しと執す。『成實』に說くが如しと。此執を對治して、同時心心數法有りと說く。故に『涅槃』に云はく、

【龍樹の等】　大智度論三十六。

【八には等】　次に心外に定んで別の心數ありと執す。

【涅槃】　北本第三十四。

【成實】　第五。

「諸の弟子我意を解せず。唱へて言はく、佛、定んで心數無しと說く」と。又『涅槃』に、十大地の中に心數の定を說く。數無きに非ざることを明す。又龍樹の云はく、「譬へば池水の珠在れば則ち清く、象入れば便ち濁るが如し」と。水は心王に喩へ、珠象は數に喩ふ。彼喩の中に於て、說いて水と珠と象と一なりと言ふべからず。心法も是の如し。寧ろ別數無からんや。八には心外に、定んで別の數有りと執す。『毘曇』に說くが如しと。此執を對治して、定んで別に非ざることを明す。故に『涅槃』に云はく、「我が諸の弟子、我意を解せず。唱へて言はく、佛定んで心數有りと說く」と。若し心外に、定んで別數有らしめば、心の事に預ること無し。無心の時、何んが別に起らざる。又若し心外に、定んで別數有らば、識は意より生ず。諸數も亦應に別に所依有るべし。若し別に依有らば、是義然らず。云何が然らざる。彼宗の中に於て、三性の心相應、各異なりと說く。欲界地の如き、善心起る時、二十二數相應して共に生ず。不善起る時、二十二數相應して共に生ず。無記の時、十二數有りて、相應して共に生ず。無記心より善を起すの時、十二の同數は所依有るべし。自餘の別數は、意を除いて何にか依る。若し依無くして生ぜば、是れ則ち心法にして次第緣無し。經論に許さず。若し別の依無しといはば、意に依つて生ずる者は、識と同じく依る。明けし、心外の道理に非ざることを。云何が、即ち彼心體同時に共に受想行等の諸義差別有る。『成實』の前後に建立するに同じからず。一の心體に就いて、義に隨つて別に分つ。『毘曇』には、異體に建立するに同じからず。兩義兼通す。故に諍論に非ず。一此

【次に等】第二に妄識に就いて、邪執に六ある中、一に定んで無なりと執す。
【有人等】維摩經等。
【楞伽】第四。
【經】維摩經衆生品。
【二には等】次に定んで有りと執す。
【經】勝鬘經。
【三には等】事識を執して妄識とす

門竟。次に妄識に就いて、邪執を對治す。邪執に六有り。一には定んで無なりと執す。有人但六識のみ有りて、第七情無しと說くを聞いて、便ち一向に第七識無しと言ふ。此執を對治す。七識有りと說く。『楞伽』の中に、八識の義を說くが如し。『勝鬘』にも亦云はく、「七法住せず」と。若し妄識無くんば、何をか說いて八と爲し、何をか說いて七と爲す。又六識の外に妄識無くんば、聲聞、緣覺、涅槃に入る時、事識都て滅す。即ち應に是れ佛なるべし。別に妄識心を明すこと無きが故に、涅槃に入る時、事識を滅すと雖も癡妄は猶在り。所有の癡妄識、何んが無しと言ふことを得ん。經の中に言ふ所の七情無しとは、事識の中に第七情無し。妄識無きに非ず。二には定んで有なりと執す。有人第七識有りと說くを聞いて、便ち七識別に體性有りと謂ふ。此邪執に對して、妄に體無しと明す。當に知るべし、如來は心法の中に就いて、虛妄分別の義を分取し、第七識と爲す。何んが中に於て別に體性を立つることを得ん。世人の繩を見て、蛇と爲すが如し。繩は是れ實事にして、彼眞識に喩ふ。蛇は是れ情にして、彼妄識に喩ふ。蛇は繩に依つて有り。蛇に別體無し。妄は眞に依つて立つ。云何が體有らん。迷夢等の喩は類して同じく然り。又經の中に說かく、「若し眞識無くんば、七法住せず」と。若し自ら體有らば、云何が住せざらん。又若し妄識自ら體性有らば、便ち是れ實有なり。何んが妄と言ふことを得ん。三には事識を執して、以て妄識と爲す。有人眞識を心と名け、妄識を意と名け、事を意識と名くと說くを聞いて、便ち小乘の七心界の中の意根界は、是れ第七識なりと言ふ。此執を對治して宣說す。妄識は

【執取相】前の相續相によつて苦樂等の境界を緣じて深き執を起すなり。

【業繫苦相】吾人が種種の業を造るにより、その業に繫縛せられて生死の苦を受くるをいふ。

【楞伽】第一。

【四には等】次に麤を執して細となす。

事識に同じからず。七心界の中の意根界は、即ち是れ六識より生ず。後の義邊を說いて意根と爲す。更に別の法無し。妄識と彼とは、分齊條異なり。云何が一と言はん。異相は如何。馬鳴の說くが如し。妄識に六有り。始め無明より乃ち相續に至る。廣く上に辨ずるが如し。事識に四有り。執取相より乃ち第四の業繫苦相に至る。亦上に辨ずるが如し。分齊各異なり。何んが說いて、意根界は是れ第七識なりと言ふことを得ん。又『楞伽』に云はく、「第七の妄識は、唯佛如來住地の菩薩の能く覺知する所なり」と。餘は皆覺せず。云何が說いて、意根界は是れ第七識なりと言はん。又若し妄識は是れ七心界ならば、聲聞、緣覺涅槃に入る時、七心界を滅すれば、妄識應に滅すべし。若し妄識を滅せば、即ち應に是れ佛なるべし。涅槃に入る時、七心界を滅するも、妄識猶在りて、未だ佛に同ずることを得ず。明かに知んぬ、全く別なりと。問うて曰はく、「妄識若し意根に非ざれば、何が故に、『楞伽』、馬鳴の論に、說いて意と爲すや。」釋して言はく、「彼乃ち名を借つて顯示す。即ち意根に非ず。『楞伽』の中に、第七識を說いて、之を以て心と爲し、馬鳴の論の中に、眞識を宣說して、之を以て心と爲すが如き、豈名同じく、便ち是れ一物なるべけんや。心の名同じと雖も、眞妄兩別なり。意の名一なりと雖も、何んが差別を妨げん。四には麤を執して細と爲す。有人宣說すらく、「眼に色を見る時、色空なることを知らず。即ち是れ七識迷惑の心なり。餘も亦是の如し。若し色空を解せば、即ち是れ七識明解の心なり。餘も亦是の如し」と。此執を對治して、須く其異を顯すべし。色を見る時、空を知らずと言ふは、

【五には第】次に不滅を執す。

【楞伽】第三。

【彼經】楞伽經第二。

【大智論】第三十二。

【經】楞伽經。

是れ六識の中の取性無明にして、第七識には非ず。此取性は、猶是れ向前の事識の初の執取相なり。問うて曰はく、「若し此は是れ六識の中の無明心なりといはば、七識の中の無明と何んが別なる。」と。此れ上に辨ずるが如し。心外の事相の法の中に於て、性を執して空に迷ふを以ての故に、妄識には非ず。又心外の事相の法の中に於て、無性を解知す。是れ事識の中の分別の解にして、七識の知に非ず。「五には不滅を執す。有人宣說すらく、「七識の心未だ理を見ざる時、生滅は無常なり。理を見れば、即ち常に究竟して滅せず」と。此執を對治して、妄終に滅すと說く。七識の妄心の體は唯癡闇、相は唯分別なり。聖を得て如に會し、其分別を捨して實を見ること明照にして、其癡闇を盡す。更に何の在ること有りて、不滅と言はん。道理是の如し。須く文證を以てすべし。『楞伽』に說くが如し。「七種の識を滅するを、出佛身血と名く」と。云何が滅せざらん。又彼經に言はく、「妄想は涅槃の識に爾し。此れ我涅槃を滅す」と。明かに知んぬ、妄滅すと。又『唯識』には、「諸佛如來所行の處、唯藏識のみ有つて更に餘識無し」と。云何が滅せざらん。又『大智論』に、如の義を解釋す。彼に云はく、「實相は水性の冷かなるが如く、觀智は大水の火に隨つて熱するが如し。若し火滅し已れば、水冷かなること本の如し。故に名けて如と爲す」と。是の如く、實相は觀に隨つて轉變す。是觀滅し已れば、實相本の如し。故に名けて如と爲す。明かに知んぬ、妄解し終れば、竟に滅盡することを。若し觀じて滅せざれば、水冷かなるの時、火應に滅せざるべし。有人說いて言はく、「經の中に滅を說くは、但智の中の無明闇障を滅

【六には等】次に定んで滅なりと執す。

す。智體を滅せず」と。是義然らず。『寶性論』の中に、自ら誠文有り。但闇を滅するのみにあらず。亦智解を滅す。故に彼論の中に說かく、「四障有りて如來の淨我樂常を得ず。一には緣相、謂はく、無明地、佛の眞淨を障ふ。彼を斷離するが故に、佛の眞淨を得。二には因相、謂はく、無漏業、佛の眞我を障ふ。彼を斷除するが故に、佛の眞我を得。三には生相、謂はく、意生身、佛の眞樂を障ふ。彼を斷除するが故に、佛の眞樂を得。四には壞相、謂はく、變易死、佛の眞常を障ふ。彼を斷除するが故に、佛の眞常を得」と。無明等の外に、別に無漏を說いて、之を以て障と爲す。別に斷除を說く。云何が無漏を滅せずと言はん。人の言ふ智體滅盡せずといはば、不滅の體は卽ち是れ眞心なり。第七識に非ず。問うて曰はく、『若し七識をして滅せしむといはば、誰か菩提を得、誰か涅槃を證せん。』『釋して言はく、「心相は滅盡すと雖も、心性猶在り。心性在りとは、卽ち是れ眞識なり。」是故に、之に就いて論を得と說く。』六には定んで滅なりと執す。有人の、妄心終に滅すと說くを聞いて、便ち定んで滅して、熏習の義無しと言ふ。何が故に、是の如くなる。眞識の中に於て、其に過恆沙の淨法滿足して、更に少くる所無し。何んが妄熏を用ひんと。此執を對治して、妄に熏有りと說く。『起信論』に、「妄眞に熏ず」と說くが如し。云何が熏ぜざらん。若し眞の中の淨法滿足するに、熏を假らずと言はば、法佛の性は本有の法體、滿足すと言ふべし。報佛の性は、本來但可生の義有り。未だ法體有らず。子の樹無きが如し。何んが滿と稱ふことを得ん。報佛は本より無し。修を假つて方に有り。何爲んぞ熏ぜざる。

【次に等】第三に眞識に就いて邪執を對治す。邪執に二あり、一に凡夫の人著我執、中に二初に有を執する中に四あり、一に實は神に同じと執す。

【二には等】次に眞の中に眞染を具足すと執す。

熏力眞に在り。故に定んで滅するに非ず。問うて曰はく、『眞妄は其性各別なり。云何が相熏ずる。』此れ上に辨ずるが如し。一切の所修眞妄共に起る。修を攝して妄に從はば、作は悉く是れ妄爲なり。修を攝して眞に從はば、皆是れ眞作なり。眞能く作すと雖も、作は必ず妄に隨ふ。妄能く爲すと雖も、爲は必ず眞に依る。眞に由りて妄作するを、眞妄に熏ずと名く。妄に由つて眞作するを、妄、眞に熏ずと名く。妄識の中、對治是の如し。此二門竟る。

次に眞識に就いて邪執を對治す。論の中の如きに依る。邪執に二有り。一には凡夫の人我執に著す。二には二乘の法我執に著す。問うて曰はく、『凡夫も亦諸法に著す。何が故に、偏に人著我執と名くる。』釋して言はく、『細分すれば亦諸法に著す。今は二乘に對して、凡夫の我に著し、及び我所に著するを、通じて人執と名く。諸法は皆是れ我所の攝なるが故に。凡執の中に就いて、義に隨つて具に論ずるに、略して二種有り。一には有を執し、二には無を執す。有を執するの中に、別して四種有り。一には實は神に同じと執す。有人、藏識は是れ我なりと說くを聞いて、外道の所取の神我に同じと謂ふ。此執を對治して、如來藏は我に非ず、衆生に非ず、命に非ず、人に非ずと說く。二には眞の中に眞染を具足すと執す。馬鳴の言ふが如し。有人、生死の二法は是れ如來藏なりと說くを聞いて、便ち眞の中に具に生死有りと謂ふ。此執を對治して、如來藏は自性清淨なり、本より已來、唯清淨恆沙の佛法有り、染汚有ること無し。若し眞の中に、實に生死有りて、而も證會して永く生死を離れしむと言はば、是處有ること無しと說く。若し緣起作用隨世の法門を修する

【三には等】次に淨相ありと執す。

【四には等】次に始終を執す。

【無を執す等】凡執の中の二に無を執すを明す。

【涅槃】第七如來性品。

こと有りと言はば、此義無きに非ず。三には淨相有りと執す。馬鳴の言ふが如し。有人、如來藏の中に備に一切の諸の功德法有りて、不增不減なりと說くを聞いて、即ち眞の中に、色心等の自相差別有りと謂ふ。此執を對治して、如來藏は諸法を具すと雖も、眞如に依つて彼此の相無く、自他の相無く、乃至亦自他の相を離るること無しと說く。染に翻對するが故に、彼眞の中に、一切の法を具すと說く。又彼眞の中の恆沙等の法、同體緣集して差別有ること無し。別に差別の相を取ることを得ず。四には始終を執す。馬鳴の說くが如し。有人聞說すらく、「如來藏に依つて、始めて生死を起す」と。又復聞說すらく、「如來の藏は生死を起すが故に、涅槃を得と雖も、還つて生死を起す。生死を起すが故に、涅槃に終有り」と。此執を對治して、如來藏は無始無終なりと說く。始無きを以ての故に、依つて生死を起すに、生死に始無し。是を以て論に言はく、「若し三界の外に、更に衆生有つて、初始めて起ると宣說すること有らば、是れ外道の說にして、正佛法に非ず」と。終無きを以ての故に、依つて涅槃を成ずるに、涅槃に終無し。有執是の如し。無を執すと言ふは、有人宣說すらく、「諸法空の義を、以て眞識と爲す」此執を對治して、眞は不空なりと說く。此識の中に於て、過恆沙の一切佛法を具す。云何が空と名けん。故に『勝鬘』の中に說いて、不空は如來藏なりと爲す。『涅槃』にも亦云はく、「如來藏有り。見るべからずと雖も、煩惱を破り已つて、定んで必ず之を得」と。彼文に復言はく、「若し無我空寂を說いて、如來藏と爲す有らば、當に知るべし、是人久しく生死に在つて、長く諸の苦を受け、

【次に等】眞識に就く中、第二に二乘の妄執を對治することを明す、中に二、一に有を執す。

【二には等】次に定んで無なりと執す。

解脫を得ず」と。而して『楞伽』の中に、「無我に依つて如來藏を說く」と言ふは、此藏の中に於て、妄の計する所無し。故に名けて空と爲す。眞法無きには非ず。故に『唯識論』に言はく、「外道の我我所に著するを破せんが爲の故に、色等の一切の法空なりと說く。言說を離れたる如實境の空には非ず。如實境とは、諸佛如來所行の處、唯識識のみ有つて更に餘識無し」と。凡夫の邪執を對治すること是の如し。次に二乘の妄執を對治することを明す。中に於て二有り。一には有を執す。二乘の人未だ法空を得ず。生死涅槃の相有りと見る。此見を以ての故に、深く生死を畏れて涅槃を趣求し、眞如を迷覆す。此執を對治して、如實空は一切相を離れて生死本寂なり、涅槃も亦如なりと說く。二には定んで無なりと執す。二乘の人、分に生空を見る。利根の者は、小しく法空を見る。便ち此空を取つて以て究竟と爲し、眞實を覆障す。此執を對治して、實不空は過恆沙の一切の佛法を具すと說く。八識是の如し。

大乘義章　卷第三之下

大乘義章 卷第四

遠法師撰す

義法聚の中、此卷に五門あり。十因の義。十一空の義。十二因縁の義。十八空の義。二十二根の義。

十因の義に七門分別す。名を列して相を解す一。十因の生法二。二因に對する分別三。六因に對する分別四。縁に對する分別五。果に對する分別六。人に對して異を辨ず七。

(一)第一門の中に、先に十名を列ね、後に其相を辨ず。十因の義は『地持論』に出づ。能生を因と曰ふ。因の義同じからず。一門に十を說く。十名とは是れ何ん。一には隨說因、二には以有因、三には種殖因、四には生因、五には攝因、六には長因、七には自種因、八には共事因、九には相違因、十には不相違因なり。名字是の如し。隨說因とは、是名不足なり。具には應に隨名隨想隨說因と言ふべきが若し。其義云何。名を廢し、想を息めて、其言說を去つて以て諸法を求むれば諸法の體は同じきこと猶し幻化の如し。因緣虛集して、有に非ず、無に非ず、一の定相として、以て自ら別つべき無し。名に賴り、想に藉つて言說を假り、彼法を設施す。法、名等に隨ふに方に種種有り。事相差別す。事相の隨ふ所の名相言說は、是れ則ち法の因なれば、隨說因と名く。故に諸論に說いて言はく、「一切法の名名け已つて想し、想し已つて說く。此諸法の名想言說するを隨說因と名く」と。此因

【一】義法聚第二十二段に十因の義を明す中、十門分別あり、先づ列名、解相。一に列名。

【隨說因とは等】二に解相を明す。

【論】地持第三。

最も寛し。諸法の差別は皆名に由るが故に。以有因とは、諸法相望めて迭相由藉す。此有るを以ての故に彼法有ることを得。以有因と名くる、中に於て二有り。一には相順以有、論の中に說くが如し。手有るを以ての故に、所作有る等なり。二には相違以有、論の中に說くが如し。飢渴有るを以て、飲食を求むる等なり。此因寛く長し。所生の果も亦寬く亦長し。一切處に遍じて有らざること無きが故に。種殖因とは、彼世間の種殖の事の如し。人功、水土、種子和合するを名けて種殖と爲す。此種殖は彼芽莖乃至菓實の與に、以て因と爲るを以ての故に、種殖因と名く。此因も亦寛し。時分最も促にして、所生極めて長し。此因の中に種子、人功、水土を具攝するを以ての故に、名けて寛と爲す。但一運和合の時を取り、說いて種植と爲す。故に攝して促と爲す。所生の果は始め芽莖より乃し成就するに至る。故に、名けて長と爲す。生因と言ふは、直に種子を取り、親しく能く芽を生ずるが故に、生因と名く、是因狹促なり。所生も亦促なり。此生因は局りて種子に在るを以て、水土に通ぜず。故に名けて狹と爲す。芽生已前を、說いて生因と爲す。後に通ぜざるが故に、稱して促と爲す。所生の果は、局りて芽に在り。所以に長ぜず。斯れ乃ち且く外事に就いて、言を爲す。若し染法に據らば、果に至つて長く後に通ず。當に之を辨ずべし。攝因と言ふは、水土潤澤にして、芽を攝生す。故に、攝因と名く。是因狹促なり。所生も亦促なり。偏に水土を取りて種子を收めず。故に名けて狹と爲す。局りて芽の前に在り、後に通ぜず。故に名けて促と爲す。所生の果は、局りて芽に在り。故に說いて短

と爲す。長因と言ふは、芽莖已後次第に增長す。是を長因と名く。是因狹長なり。所生も亦長なり。是因の中に水土を攝せざるを以ての故に、名けて狹と爲す。芽より已後乃し成熟するに至る。皆是れ長因なるが故に、名けて長と爲す。若し內法に就かば、因增して果に向ふも亦長の義有り。所生の果も亦始終を統ぶるが故に、名けて長と爲す。自種因とは、還つて種子を後の芽莖乃至成熟に望め、同類相起つて異類を簡別す。故に自種と名く。麥は麥を生じ、穀は穀の芽を生ずるが如し。是因狹促なること生因と同じ。所生は是れ長し。芽より熟に至るは、皆是れ自種所生の果なるが故に。共事因とは、論釋に言ふが如し。以有因より乃至自種までを共事因と名く。此等和合し、共して世間の因種事を成ず。故に名けて共事と爲す。前の隨說因は、何の義を以ての故に、共事と名けざる。彼言說を以ては但法を別つべく、生長すること能はず。故に共事に非ず。是因寬く長し。在らざる無きが故に、果は別の體無し。之を論ずべからず。相違因とは、有爲の法は成有り、壞有り。相違の法は前事を違害し、共をして生を障礙、滅壞せしむるを、相違因と名く。彼論に說くが如し。相違に六有り。此中唯相違の法を生ずるを取つて、相違因と爲す。不相違とは、相順の法、前事を助成するを、不相違と名く。何者か是なる。若し別して之を論ぜば、芽生じて已後の所依の水土は是れ不相違なり。通じて以て之を論ぜば、種殖已後の所依の水土を、皆不違と名く。此十因を、通じて諸法を統ぶ。今は且く彼因種の事に就いて、以て共相を顯す。

【三】第三に十因の生法を明す。先づ無記門を說く。

【染法因とは等】次に染法因を明す

〔三〕第三に、其十因の生法を明す。論の中に說くが如し。十因共に染淨無記の一切の諸法を生ず。先に無記を明す。無記の中に就いて、內有り、外有り。外は、謂はく非情、內は、謂はく衆生なり。外の中の十因の釋は前に異らず。內の中に四有り。一には是れ報生、二には是れ威儀、三には是れ工巧、四には是れ變化なり。報生の一門は染因より起り、染法を攝屬す。餘の三種は論の中に說かず。今宜く之を辨ずべし。能變化の心は、經論の中に、或は說いて善と爲し、或は無記と名く。今此に且く無記に就いて以て論ず。因相は如何。名相、言說、工巧、變化を辨宣するを隨說因と名く。以有、所須及び有所爲に此三事を起すを以有因と名く。方便の心は緣に對して初めて起り、能く後を生ずるを種殖因と名く。初心の方便能く後を生ずるを、名けて生因と爲す。外緣、攝因を生じ、次第に漸く增すを、名けて長因と爲す。當分に相起するを自種因と名け、以有因より乃至自種までを共事因と名く。此と相違するを相違因と名け、順起不乖なるを不相違因と名く。無記是の如し。此一門竟る。

染法因とは、論の中に說くが如し。十二因緣、言に隨つて異を分つを隨說因と名く。以有因とは、釋するに三義有り。一には通じて十二因緣に就いて相望して以て釋す。前支有るを以て、後支生ずることを得るを以有因と名く。二には因果の相對に就いて分別す。過因有るを以て、現果生ずることを得、今因有るを以て、來報起ることを得るを以有因と名く。三に受生强き者に就いて、以て三有の受生、皆愛に由ると說く。故に論に說いて言はく、「唯愛は能く諸有をして相續せしむ」と。愛有るを以ての故に、諸の有支生ずるを以

有因と名く。論は後の釋に依る。故に論に言はく、「顧念味著、諸の有支生ずるを、名けて以有と爲す」と。味は猶し愛のごとし。種殖因とは、釋に兩義有り。一には業煩惱、相對して分別せば、業を正種と爲し、煩惱は緣助なり。是二和合するを種殖因と名く。二には內外の相對に就いて分別せば、結業を種と爲し、惡友邪法六塵の境界を、之を以て緣と爲す。因緣和合して能く後を生ずるを、名けて種殖と爲す。論は後の釋に依る。故に論に說いて言はく、「無明等の法、現法の種子餘の生死を生ずるを種殖因と名く」と。攝因と言ふは、訓釋に二有り。一には業煩惱相對して分別せば、業を正種と爲し、煩惱は緣助なり。煩惱の緣、彼業種を潤し、後果を攝生するを名けて攝因と爲す。二には內外の相對に就いて分別せば、業と煩惱と合して正種と爲し、惡友邪法六塵の境界は、之を以て緣と爲す。無明行を攝して後果を生ぜしむるを、名けて攝因と爲す。論は後の釋に依る。故に論に說いて言はく、「現在世に於て善友に近かず、正法を聞かず、不正思を習ひ、無明等の生ずるを、名けて攝因と爲す」と。惡友邪法は水土の如似し。習近し聽受すれども、正思惟せず。人功の如似し。是力に由るが故に、無明行をして後の果報を生ぜしむ。是故に名けて、無明等生ずと爲す。此生は、皆惡友、邪法、不正思惟に由る。是故に名けて彼を以て攝因と爲す。生因果と言ふは、訓釋に二有り。一には業煩惱、相對して分別せば、業を正因と爲し、煩惱を因緣と爲す。業の正因能く後果を生ずるが故に生因と名く。二には內外相對して分別せば、煩惱と業因とを正因と爲し、惡友、邪法は之を以て緣と爲す。因能く果を生ずる

【次に等】三に淨因を明す。

が故に、生と名く。論は後の釋に依る。長因と言ふは、無明行等漸漸に増長して、未來世の生死の果報に至る、是を長因と名く。故に論に説いて言はく、「無明、有に至り、増進して相求めて餘の生死に至るを、名けて長因と爲す」と。前の世間の種殖の事に准じ、應に後を生じてより、増して老死に向ふを、以て長因と爲す。但今の論家は、因増して果に向ふも亦名けて長と爲す。何が故に是の如くなる。後は内心に據る。心に漸習趣果の義有り。増長の義顯るるが故に説いて長と爲す。彼前の外種は、是れ心法に非ざれば漸習向果の義有ること無し。増長顯れざるが故に、長と名けず。若し互に相從はば、皆傷無きを得。自種因とは六道の種子當分の果を生ずるを自種因と名く。故に論に説いて言はく、「各各種子無明等生ずるを、名けて自種と爲す」と。六道の因別なるが故に、各各と云ふ。彼彼因中に皆悉く無明行等より後の果報を生ず。是故に説いて無明等生ずと爲す。共事因とは、始め以有より乃至自種まで、共して一種因緣の事を成ずるが故に共事と云ふ。隨説因とは、但能別の法にして、生長すること能はず。故に共と説かず。相違因とは、無漏の道品能く染法に違するを、相違因と名く。不相違とは、猶是れ向前の以有等の事、相對するが故に來る。染因是の如し。此二門竟る。次に淨因を辨ず。論の中に説くが如し。始め種性より乃至涅槃までは説に隨ふが故に別に隨説因と名く、生死有りて淨法を樂求するを以て、以有因と名く。種殖因とは、種性地の中の所成の善法は種子の如く、善友正説は水土の如似し。解行の初は先の種子に依り、緣に對して始習、能く後を生ずるを、種殖因と名く。

【三】第三に二因に約對して分別す。初に外の無記因に就いて。

善知識に近き、正法を聽受し、能く攝して出世の道品を起すに堪ふるを、名けて攝因と爲す。地前の所修、能く出世無漏の道品を生ずるを以て生因と爲す。長因と言ふは、若し世間種殖の事に類せば初地已上、運運增長して菩提に趣順するを、名けて長因と爲す。若し染法に類せば種性已去乃至佛果まで漸次に增長するを、皆長因と名く。三乘の種子當分に果を生ずるを、自種因と名け、以有因より乃至自種までを、共事因と名く。共に一種修道の事を成ずるが故に、染法、淨に違するを相違因と名け、淨緣、淨に順ずるを不相違と名く。故に論に說いて言はく、「染法相違は是れ淨法因、淨法相違は是れ染法因なり」と。生法是の如し。

(三)第三に、二因に約對して分別す。二因と言ふは、『地持』に說くが如し。一には是れ生因、二には方便因なり。親にして體起るを名けて生因と爲し、疎にして助發するを方便因と名く。二因是の如し。今は十因に對して共相を辨明す。論の中に說くが如し。種子の芽に於けるは是を生因と名け、餘を方便と名く。然るに此は唯十の中の第四の生因を取り、以て生因と爲すと謂ふには非ず。十因の中に於て、但種子をして能く芽を生ぜしむるの義は、皆生因に屬し、餘を方便と名く。總相然りと雖も、別に猶解し難し。今宜く之を辨ずべし。外に就いて、無記の十因の中の生因の一種は、唯是れ生因なり。隨說因、攝因、長因、相違因、不相違因の此之五因は唯是れ方便なり。隨說因とは、別法は不生の法と言ふを以ての故に、是れ生因の攝に非ず、外緣に據るが故に、生因に非ず。『地持』に說くが如し。芽

【今次に等】 次に內に就いて。

莖已後を、方に名けて長と爲すが故に、生因に非ず。若し心法に就かば、此釋同じからず。相違因とは、但能く法を滅し、彼滅法の與に、以て方便と爲る。能生の法ならざるが故に、生因に非ず。不相違とは、攝因と同じきが故に、生因に非ず。自餘の四因は、義に兩兼有り。以有因の中、其緣正に通じ、種子有るを以て芽をして生ずることを得しむるは、是れ共生因なり。水土有るを以て芽をして生ずることを得しむるは、是れ方便因なり。種殖因の中、亦緣正に通じ、種子の芽に於けるは、是れ共生因なり。水土の芽に於けるは、是れ方便因なり。自種因の中、種子の芽に於けるは自種と說くを以て、判じて生因に屬し、種子を彼莖葉等の事に望めて、以て自種と爲すを、判じて方便に屬す。親生に非ざるが故に。共事因の中、亦共二因あり。生及び方便なり。相、以有乃至自種に同じ。彼等を總攝して、共事因と爲す。此一門竟る。今次に、彼內の無記の因に就いて攝して以て二と爲す。生因の一種は唯是れ生因なり。自分の生なるが故に。隨說因、攝因、相違因、不相違因の此四種は、是れ方便因なり。有因の中に具に二因有るを以てなり。以有は最初に起る。無記心能く後を生ずるを、判じて生因に屬す。以有の外境能く心を生ず。是れ方便因なり。種殖の中にも亦二因を具す。相以有に同じ。長因の中に、具に二因を攝す。最初の種子次第に增長して、初の威儀、工巧、變化を生ずる、是れ共生因なり。餘を方便と名く。自種因の中にも亦二因を具す。方便心を以て初の威儀、工巧、變化に望めて、以て自種と說く。是の如く自種は、即ち是れ生因なり。後の威儀、工巧、變化に望めて、以て自種を說くは、是れ方

【次に等】次に染因に就いて。

便因なり。親生に非ざるが故に。共事因の中にも亦二因を具す。前の以有乃至自種に同じく彼等を總攝して、共事と爲すが故に。此二門竟る。次に、染因を攝し、之を以て二と爲す。十因の中の生因と自種との此二因は唯是れ生因なり。問うて曰はく、『向前の無記法の中の自種因とは、亦是れ生因、亦方便因なり。今此は、何が故に、唯生因に就くや。』釋して言はく、『有以は、無記法の中の種子にして、芽に望むれば、亦是れ自種なり。餘の莖等に望むれば、唯是れ自種にして生因に非ず。故に兩義を兼ぬ。今此染の中の結業を生乃至老死に望むれば、皆是れ自種にして、悉く是れ生因なり。是故に自種は唯是れ生因なり。』何が故に是の如くなる。染法の力強ければ、一因能く親く多果を生ずるに堪ふるが故に、生死に望めて倶に是れ生因なり。無記の力弱ければ、一種能く親く多果を生ずること能はざるが故に、唯莖等に望めて、生因と名けず。若し便ち染の中、通じて老死に望めて、生因と爲さば、何が故に、論に、「種子の芽に於けるは是れ生因と名く」と言ふや。彼は乃ち且く無記に就いて言ふのみ。隨說と攝因と違と不違因との此四種は、唯是れ方便なり。義は前の釋に同じ。餘の四因は義に兩兼有り。四中の中に於て、正因は果を生ず。齊く是れ生因なり。緣因は報を起す。悉く是れ方便なり。以有の中に結業有るを以て、後果を生ずるを判じて生因に屬し、外緣有るを以て、後報を起すを判じて方便に屬するが如し。種殖因の中に、云何が二を具す。種殖因とは、內外和合を方に種殖と名く。種殖の中に就いて分取せば、結業の後果を生ずるを判じて生因に屬し、外緣の果を生ずるを判じて方便に

【次に等】次に淨因を明す。

屬す。長因の中、云何が二を具す。論の中に說くが如し。無明行より乃至老死まで漸次に增長する、是を長因と名く。此生果の長中に就いて、因增して果に至るを、判じて生因に屬し、因自ら果を增し、果自ら長ずるを、判じて方便に屬す。問うて曰はく、『何が故に、因增し、果に至るを生因爲ることを得。因は因自ら果を增し、果自ら長ずるを、說いて方便と爲すや。』釋して言はく、『有以は因に從つて果を生ず。因果は位別なり。因滅して果興る、生相顯現たり。故に生因と說く。因は還つて因に望め、果は還つて果に望む。是の如きの義無きが故に、生と名けず、但方便と名く。若し通じて生を說かば、理も亦傷無し。共事因の中、云何が二を具す。若し更に分別せば、以有乃至自種に異らず。總じて彼等を說かば、共事と爲すが故に。染法是の如し。此三門竟る。次に淨因を攝し、之を以て二と爲す。十因の中の生因一種は、唯是れ生因なり。隨說と攝因と違と不違因とは、唯是れ方便なり。隨說と攝因と及び不相違は、之を成ずれば方便なり。相違因は、之を退すれば方便なり。自餘の五因は、義に兩兼有り。以有因の中は其內外に通ず。以有は最初は道品の種子にして、後の道品を生ずるを、判じて生因に屬し、以有は外緣にして、能く道を生出するを、判じて方便に屬す。種殖も亦爾り。內外和合を種殖と爲す。中に於て道品を分取し、種子能く後を生ずるを、判じて生因と爲し、外緣を分取して、能く後を生ずるを、說いて方便と爲す。長因の中、道より道に向ひ、漸次に增長する、是れ共生因なり。增長して滅に向ふ、是れ方便因なり。問うて曰はく、『何が故に、染法の中に、因より果に向ふを

【四】第四に六因に對する分別。

名けて生因と爲し、淨法の果に向ふを乃ち方便と名くる。」釋して言はく、『有以は染法の果、謂ゆる生死なり。生死の有爲は可生の法なるが故に、長因彼に向ふは是れ共生因なり。淨法の果は、謂ゆる、涅槃なり。涅槃無爲は可生の法に非ず。是故に長因增長して彼に向ふを、但方便と名く。又問うて曰はく、『向前は染法の因なり。因の因相起るを、但方便と名く。何が故に、中道を淨め、道增長するを、說いて生因と爲すや。」釋して言はく、『染は麤にして因より果に向ひ、生相顯現たり。故に生因と名く。良に彼麤に對して生を顯すを以ての故に、因の因相起れども、生相顯れざれば生因と名けず。淨法は是れ細にして、道增して滅に向ひ、一向に生に非ず。良に彼非生の法に對するを以ての故に、道、相起るを說き、以て生因と爲す。自種因の中、道を以て道に望めて自種を宣說するは、是れ共生因なり。道を以て滅に望めて自種を宣說するは、是れ方便因なり。共事因の中にも亦二因を具す。若し更に分別せば、以有乃至自種に異らず。彼六に總攝して共事と爲すが故に。二因是の如し。

(四)第四門の中、六因に約對して共に相收攝す。六因の義は、『阿毘曇』『大智論』の中に亦具に分別するが如し。六名とは是れ何ん。一には所作因、謂はく、法起る時、諸法彼を障へざるを所作因と名く。『大智論』の中には、無障因と名く。二には共有因、諸法起る時、共有の法、生住滅等共に相助成するを共有因と名く。三には自分因、一切の諸法同類相生ずるを自分因と名く。『大智論』の中には自種因と名く。四には遍因、十一遍、一切染汚の法

【中に於て等】初に外の無記因に對す。

をして増長せしむる、之を遍因と名く。何者か十一なる。苦の下の五見、疑及び無明を以て七と爲し、集の下の二見の邪見と見取と疑及び無明を、即ち以て四と爲す。前に通じて十一なり。五には相應因、諸の心心法相應して境を造るを相應因と名く。前の共有因の相は體に依つて立し、此相應因の相は用有るに依る。六には報因、諸業の煩惱苦樂の報を得るを、名けて報因と爲す。此義廣く釋すること六因章の如し。今は十因に對して共に相取攝す。中に於て先づ外の無記因に對し、之を攝して六と爲す。此十の中に就いて、相違因を除く餘の九は、是れ共三因の所攝なり。餘の九の中に就いて、隨說と攝因と及び不相違との此二種は、是れ所作因なり。生因と、長因と、及び自種因との此三種は、是れ自分因なり。同類の法の自相起るが故に。以有因の中に具に三因有り。一には所作因、水土有るを以て牙莖等生ずるを、以有の中の所作因と名くるなり。二には共有因、謂はく、外色の中の生等の四相と、彼外色と相扶けて體立するを共有因と名く。三には自分因、前色有るを以て後色を生ずるが故に、自分因と名く。種殖因の中、具に二因有り。謂はく、自分因及び所作因なり。種子と彼水土と和合するを、名けて種殖と爲す。種を牙等に望むれば、是れ自分因なり。水土潤澤を彼牙等に望むれば、所作因と名く。共事因とは、具に三種有り。謂はく、所作因と自分因と共有因となり。若し更に分別せば、以有乃至自種に異らず。彼六に總攝して共事と爲すが故に。此一門竟る。次に、內法の無記の十因に就いて、具に相收攝す。相違因を除く自餘の九因は、四因の所攝なり。謂はく、所作因と共有因と自分

【次に等】 次に染因を明す。

因と相應因となり。相狀は如何。隨說と、攝因と、不相違因との此三種は、是れ所作因なり。生因の一種は是れ自分因なり。以有因の中に具に四因有り。六根及び外の境界有るを以て無記の心を起さば是れ所作因なり、同時に諸の心法等有るを以て互に相助成すれば是れ共有因なり。前を以て後を起さば是れ自分因なり。諸の心心の法相應して造緣すれば是れ相應因なり。種殖因の中に具に二因を攝す。種殖の中に就いて種子能く後を生ずるを分取せば是れ自分因なり。六根及び外の境界を分取せば、是れ所作因なり。長因の中に亦二因を具す。同類相起るは、是れ自分因なり。心心相次ぐは、是れ作所因なり。自種も亦爾り。共事因の中、具に四因有り。前の以有乃至自種に同じ。彼六を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼法を壞するに望めて、所作因と爲す。報法に非ざるが故に、共報因無く、染法に非ざるが故に、共遍因無し。此二門竟る。次に、染因に對して、相收攝することを明す。還つて相違を除く。餘の九は是れ共六因の所攝なり。隨說と攝因と及び不相違との此三種は、是れ所作因なり。生因と自種は、是れ共報因なり。以有因の中、具に六因有り。根塵有るを以て、業煩惱を生ずるを所作因と名け、心心法等相扶けて體立するを共有因と名く。業煩惱の苦の同類相起り、前を以て後を生ずるを自分因と名く。以有は遍く一切染汚の法をして增長せしむ。卽ち是れ遍因なり。以有同時に、心心數の法相應して造緣するを相應因と名く。業煩惱を以て彼當果を生ずるは、卽ち是れ報因なり。種殖因の中に具に二因を攝す。謂ゆる、報因及び所作因なり。謂はく、業煩惱、緣に對して現起し、能く

【次に等】次に淨因に就いて。

後果を生ずるを、名けて種殖と爲す。是種殖の中の業と煩惱とは當果を生ず。即ち是れ報因なり。外緣果を生ずるは、是れ所作因なり。長因の中に、具に三因有り。煩惱業苦當分に增長するは是れ自分因なり。煩惱增長して身口業を起すは是れ所作因なり。作業煩惱增長して苦を生ずるは是れ共報因なり。共事因とは具に六因を攝す。若し更に分別せば、以有乃至自種に異らず。彼等を總攝して共事と爲すが故に。此三門竟る。次に、淨因に對して、相收攝することを明す。還つて相違を除く餘の九は是れ共四因の所攝なり。隨說と攝因と及び不相違は、是れ所作因なり。以有因の中具に四因を攝す。謂はく、所作因と自分因と共有因と及び相應因となり。善友の正しき說法等に依つて道品を增長するは、是れ所作因なり。道品の法の中に前を以て後を生じ、同類相起るは是れ自分因なり。同時に具に定道無作有るは是れ共有因なり。無漏の心法相應して造緣すれば是れ相應因なり。種殖因の中、具に二因有り。謂はく、所作因及び自分因なり。種殖の中の最初の道品、緣に對して現起するを、名けて種殖と爲す。是種殖の中の最初の道品の同類、後を生ずるは、是れ自分因なり。異類相起るは是れ所作因なり。善友等の緣能く後を生ずるは亦是れ所作なり。生因は不定なり。小乘法の中には、淨法の種子は必ず是れ有漏なり。此種子は、出世無漏の道を生ずるを以て、異類相起るは是れ所作因なり。大乘法の中には、淨法の種子は必ず是れ無漏なり。此種子出道を生ずるを以て、同類相起るは是れ自分因なり。長因の中に就いて、若は有漏道、若は無漏道、當分に增長するは是れ自分因なり。若は有漏より增して無漏に向ひ、

【五】第五門に四緣に約して分別す

【中に就て等】先づ外の無記因に就いて。

道より滅に向ふは、是れ所作因なり。自種因の中、小乘の種子を出道に望め、及び涅槃に望め、以て自種を說き、異類相望むるは、是れ所作因なり。大乘の種子を出道に望め、以て自種を說き、同類相望むるは是れ自分因るなり。涅槃に望め以て自種を說くは、是れ所作因なり。共事因の中、備に四因を攝す。謂はく、所作因と自分と共有と及び相應因となり。若し具に分別せば、以有乃至自種に異らず。彼等を總攝して共事と爲すが故に。染法に非ざるが故に、共遍因無く、報法に非ざるが故に、共報因無し。

(五)第五に、四緣に約對して分別す。『地持』に說くが如し。何者か四緣なる。一には因緣、二には次第緣、三には緣緣、四には增上緣なり。六因の中の相應と共有と自分と遍因と及與び報因との此五種は、是れ共因緣なり。所作因の中、分つて三緣と作す。所作の中に就いて、六塵、心を生ずるは、是れ共緣緣なり。心法次第に前に藉つて後を生ずるは、是れ次第緣なり。自餘の一切の萬法障ふるは增上緣なり。此義廣く釋すること四緣章の如し。今は十因に對して共に相收攝す。中に於て、先づ外の無記因を攝して、以て四緣と爲す。十因の中に就いて、相違因を除く餘の九因は、二緣の所攝なり。謂ゆる、因緣及び增上緣なり。九の中の三因は、一向に是れ共增上緣の攝なり。謂はく、隨說因と攝因と不相違因との三因は一向に因緣の所攝なり。謂ゆる、生因と長因と及び自種因は、六因の中の自分の攝なるを以ての故に、自餘の三因は二緣の所攝なり。以有因の中、水土有るを以て、芽をして生ずることを得しむるは、是れ增上緣なり。種子有るを以て、芽をして生ぜしむ

【次に等】次に內の無記に就いて。

【次に等】次に染因を攝するに就いて。

るは、是れ共因緣なり。自分の攝なるが故なり。種殖因の中、種子を分取して彼芽、生ずるに望むれば是れ共因緣なり。自分の攝なるが故に。水土を分取して能く芽を生ずるは、是れ增上緣なり。共事因の中に亦二緣を具す。前の以有乃至自種に同じ。彼等を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上緣と爲す。此一門竟る。次に內法無記の十因を說いて、以て四緣と爲す。此十の中に就いて、相違因を除く餘の九因は、四緣の所攝なり。隨說因とは、是れ增上緣なり。以有因の中に、具に四緣を攝す。中に就いて分取せば、相應と共有と及び自分因とを、以て因緣と爲す。六根、心を生ずるは是れ增上緣なり。六塵、心を生ずるは是れ共緣緣なり。心法次第して前を以て後を生ずるは是れ次第緣なり。種殖因の中に、具に四緣を攝す。種子を分取せば、能く後を生ずる、是れ共因緣なり。自分の攝なるが故に。六根、心を生ずるは是れ增上緣なり。外緣、心を生ずるは是れ共緣緣なり。初め種殖より、次に後心を生ずるは、是れ次第緣なり。自種を生長して具に二緣を攝し、同類相起るは、是れ共因緣なり。次第に相起るは、是れ次第緣なり。攝因と不違は、各二緣を具す。謂ゆる、緣緣及び增上緣なり。六根、心を生ずるは是れ增上緣にして、六塵、心を生ずるは是れ共緣緣なり。共事因とは、具に四緣を攝す。前の以有乃至自種と同じ。彼等を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上緣と爲す。此二門竟る。次に、染因を攝して、以て四緣と爲す。染因の中に就いて、還つて相違を除く餘の九因を攝して、以て四緣に入る。隨說因とは、是れ增上緣なり。以有因

【次に等】次に淨因を攝するに就いて。

とは、四縁の所攝なり。結業有るを以て、能く後果を生ずるは、是れ共因縁なり。前心有るを以て後心を生ずるは、是れ次第縁なり。六塵有るを以て六識を生ずるは、是れ共縁縁なり。六根有るを以て六識を生ずるは、是れ增上縁なり。惡友の倒說法等有るを以て、結業を增長して後果を生ずるも亦是れ增上なり。種殖因とは、四縁の所攝なり。結業、果を生ずるは、是れ共因縁なり。心心相起るは、是れ次第縁なり。惡友に習近するは、是れ增上縁なり。邪法を聽受するは、是れ共縁縁なり。生因自種は二縁の所攝なり。報因、果を生ずるは、是れ共因縁なり。心心相起るは、是れ次第縁なり。攝因と及與び不相違因とは二縁の所攝なり。惡友に習近するは、是れ增上縁なり。邪法を聽受するは、是れ縁縁なり。長因の中、具に三縁有り。謂ゆる、因縁と次第と增上となり。無明、行より增長して果を生ずるは、是れ共因縁なり。報因の攝なるが故に。因より因を生じ、果より果を生ずるも亦是れ因縁なり。自分の攝なるが故に。無明より乃至生死まで心心相起るは、是れ次第縁なり。煩惱より善業を生ずるは、是れ增上縁なり。共事因の中に、具に四縁を攝す。若し更に分別せば、以有乃至自種に異らず。彼等を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上縁と爲す。此三門竟る。次に、淨因を攝して、以て四縁と爲す。相違因を除く餘の九因は、四縁の所攝なり。此九の中に就いて、隨說因は、增上縁なり。以有因の中に具に四縁を攝す。前の道有るを以て後の道を生ずるは是れ共因縁なり。自分の攝なるが故に。同時に心心數法有るを以て、亦是れ因縁なり。相應の攝なるが故に。前を以て

【論】地持。

【六】第六に果に對して分別す。初に五果を明す。

後を生ずるは、是れ次第縁なり。道法有るを以て、之を縁じて道を起すは、是れ其縁縁なり。善友の正說法等有るを以て、生を攝して道に從ふは、是れ増上縁なり。種殖因の中に、具に四縁を攝す。種殖の中に就いて、最初の無漏の道品を分取して、能く後を生ずるは、是れ其因縁なり。自分の攝なるが故に。境界、心を生ずるは是れ其因縁なり。六根に縁じて心を生ずるは、是れ増上縁なり。心心相起るは、是れ次第縁なり。生因と長因及び自種因は、三縁の所攝なり。同類相生ずるは、是れ其因縁なり。自分の攝なるが故に。異類起るは、是れ増上縁なり。此道の中に就いて、心心相起るは、是れ次第縁なり。攝因と不相違因は、二縁の所攝なり。謂はく、増上縁と及與び縁縁となり。友に近いて道を生ずるは、是れ増上縁なり。法を縁じて道を起すは、是れ其縁縁なり。共事因とは、具に四縁を攝す。上の以有乃至自種に同じ。彼等を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼法を壞するに望めて増上縁と爲す。四縁是の如し。問うて曰はく、『論の中に、彼十因を攝して、以て生因及び方便因と爲し、彼二因を攝して以て二縁と爲す。其れ生因とは、說いて因縁と爲す。方便因とは、是れ増上縁なり。今云何が十因の中に具に四縁を攝すと言ふや。「釋して言はく、『論家は無記因に就いて外法を生ずる者なるが故に、此判を爲す。若し内法に就かば、亦四縁を具す。故に彼論に言はく、「次第縁と縁縁は、是れ心法の攝なり」と。「四縁是の如し。

（六）第六門の中に、果に對して分別す。若し十因に對すれば還つて十果有り。云何が十果な

【中に於て等】今五果に對して因の所得を明す中、一に外の無記因に就いて。

る。向の因の中の隨分の所作の如き、卽ち是なり。十果の相顯なること知るべし。又彼論の中に、五果を宣說す。一には依果、二には報果、三には士夫果、四には增上果、五には解脫果なり。依果と言ふは、論の中に說くが如し。善を習うて善を增し、惡を習つて惡を增す、是の如く一切の同類相起るは、是を依果と名く。報果と言ふは、有漏の業所生の苦樂なり、是を報果と名く。士夫果とは、『雜心』の中に功用果と名く。士夫は是れ人なり。士夫の所作、一切の諸事に、各成辨有るを士夫果と名く。二十二根を、名けて增上と爲す。各果の生有るを增上果と名く。斯れ乃ち且く內法に就いて言を爲すのみ。外法の中の增上緣起るは、當に知るべし、亦增上果と名くるなり。無漏の道品、解脫の證を得るを、解脫果と名く。世俗に結を斷ずるは、畢竟盡に非ず、解脫の果に非ず。五果是の如し。今此果に對して、因の所得を明す。中に於て先づ外の無記因に就いて、以て得果を明す。十因の中に就いて、相違因を除く餘の九因は、能く三果を得。謂ゆる、依果、士夫果及び增上果なり。隨說と攝因と不相違因との此三因は、增上果を得、以有と種殖は能く三果を得、種子を分取して能く後を生ずるは其依果を得、水土を分取して能く後を生ずるは增上果を得。人功を分取して能く外事を成ずるを士夫果と名く。生因と長因及び自種因は、能く依果を得。同類の法迭に相起るが故に。共事因とは、能く三果を生ず。彼以有乃至自種に同じ。彼等を攝して共事と爲すを以ての故なり。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上果と爲す。然るに此無記は報因に非ず。故に其報果無し。若し業行に望むれば、說いて依報

【次に等】次に內の無記に就いて。

【次に等】次に樂因に就いて。

と爲す。後の染淨二因の中の如く、無漏に非ずと說くが故に、解脫の果に非ず。此一門竟る。次に、內法の無記十因に就いて、以て得果を明す。相違因を除く餘の九因は、能く三果を得。謂ゆる、依果と士夫果と增上果となり。隨說を攝因と不相違因は增上果を得、以有因は能く三果を得。六根及び外の境界有るを以て、無記の心を起すは、是れ增上果なり。人能く起すを以て、是れ士夫果なり。前を以て後を起すは、是れ共依果なり。種殖因とは、能く三果を得。相は以有、生因、長因及び自種因に同く、能く依果を得。同類起るが故に。共事因とは、亦三果を得。前の以有乃至自種と同じ。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上果と爲す。然るに此れ無記にして報因に非ざるが故に、共報無し。果は無漏に非ざるが故に、解脫果無し。此二門竟る。次に、染因に對して、以て五果を明す。染因の中、亦相違を除く餘の九因は、能く四果を得。解脫果を除く。隨說因とは、增上果を得、以有因とは、能く四果を生ず。無明行を得る等は、前後を起すを以て、共依果を得。結業有るを以て能く後の果報を生ずるが故に、報果有り。樂生、諸の業行を造り、所作成辨すること有るを以て、士夫果と名く。六根の六識等を生ずること有るを以て、增上果と名く。種殖因とは、能く三果を生ず。結業を分取して能く後報を生ずるが故に、報果を得。外緣を分取して生後の報を攝するを、增上果と名く。身、因を造るに由つて來報を受くるは是れ士夫果なり。又惡友に近き、業煩惱を起し、終に來報を得るは、即ち是れ惡友の士夫果なり。然るに種殖因は當果に望めて、以て種殖と說き、異類相生ずるが故に、依果無し。生因、自種は能

【次に等】次に淨因に就いて。

く報果を生ず。攝因の中に、共二果有り。彼外緣を以て生後の報を攝するは、是れ增上果なり。攝因の中に就いて、惡友に近くに由り、結業を攝起して能く後報を生ずるは、即ち是れ惡友の士夫果なり。長因の中に、共二果有り。因より增長して生果に至るは、是れ共報果なり。因因漸く增し、果果自ら長ず。是の如く長因能く依果を生ず。共事因とは、能く四果を生ず。以有乃至自種に異らず。相違因とは、彼法を壞するに望めて增上果と爲す。無漏に非ざるが故に、解脫果無し。此三門竟る。次に、淨因に對して、以て五果を明す。淨因の中に就いて、相違因を除く餘の九因は、能く五果を生ず。隨說因とは、增上果を得。以有因とは、能く五果を生ず。前後を起すを以て、能く依果を生ず。信等の諸根、各所生有るは、是れ增上果なり。人能く修起するは、是れ士夫果なり。能く涅槃を得るは、是れ解脫果なり。小乘法の中、煖等の四心は是れ小乘の性なり。性は是れ有漏なり。色界の報を得るを名けて報果と爲す。大乘法の中緣じて無漏を照し、變易の報を得るを、名けて報果と爲す。種植因とは亦五果を得。以有に說くが如し。生因一種は能く三果を得。同類相起は共依果を得。異類相起は增上果を得。小乘の種性は分段の報を得、大乘の無漏は變易の報を得。是れ共報果なり。攝因は二を得。友に近き法を聽く、是の如き等の緣は增上果を得。人修起に由つて士夫果を得。長因は四を得。同類相起は能く依果を得。信等の相起るは增上果を得。終に涅槃を得るを解脫果と名け、變易の報起るを報果を得と名く。自種因とは、亦四果を得。長因と同じ。共事因とは、能く五果を得。前の以有乃至自種に同じ。

【七】以下、第七に人に就いて異を辨ず。

【八】以下、義聚第二十三段に十一空を明す。

【涅槃經】北本第十六、南本第十五。

【大品】智論第七十。

【維摩】維摩詰經第三。

彼等を總攝して共事と爲すが故に。相違因とは、彼退道に望めて增上果と爲す。報因に非ざるが故に、其報果無し。

(七)第七門の中、人に就いて異を辨ず。人別に三有り。一には凡夫、二には聲聞、緣覺、三には是れ菩薩なり。人別既に殊にして、所知も亦異なり。凡夫は此に於て但共事のみを知り、餘義に達せず。二乘は此に於て但假名因緣のみを知りて、定性有ること無く、其實を窮めず。菩薩は此れ有に非ず、無に非ず、幻化の緣起にして定相有ること無しと知る。十因の義略して辨ずること是の如し。

十一空の義

(八)十一空の義は、「涅槃經」に出づ。言ふ所の空とは、理を顯するの目、理寂を空と名く。空は詮に隨つて廣略を辨ずること不定なり。或は總じて一と爲す。「大品」に說くが如し。名けて獨空と爲す。詮を廢して理を談ずれば、多門を分たず。故に名けて獨と爲す。非法は唯空なれば、說いて獨と爲すなり。或は分つて二と爲す。我空と法空となり。或は分つて三と爲す。空と無相と無願なり。或は分つて四と爲す。四に兩門有り。一には「維摩」に說くが如し。謂はく、空と無相と無作と無起となり。法に定性無き之を名けて空と爲す。因緣無きの相を名けて無相と爲す。無相なれば果として作すべき無きを名けて無作と爲す。故に彼經に言はく、「唯無作を行じて、現に身を受く」と。因に所起無きを、名けて無起と

【大品】智度論第四十六。
【大品】大智論第四十六。【涅槃】南本第二十三。
【地持】第七。

爲す。故に彼經に言はく、「無起を行ずと雖も、善行を起す」と。二には『大品』に說くが如し。謂はく、有法空と無法空と自法空と他法空となり。已に上に釋するが如し。或は說いて五と爲す。『無量壽經』に說くが如し。空と無相と無願と無作と無起とは、是れ其五なり。空と無相とは、義前の釋に同じ。彼妄相願求の心無きを、說いて無願と爲す。無作無起も亦上の釋の如し。或は分つて七と爲す。『大品』に說くが如し。此れ上の釋の如し。或は分つて九と爲す。『雜心』に說くが如し。或は十一を分つ。『涅槃』に說くが如し。或は十四を分つ。『大品』に說くが如し。或は十八と說く。『大品』に說くが如し。或は復說いて二十二空と爲し、或は復說いて二十五空と爲す。『涅槃』に說くが如し。廣くせば則ち無量なり。今は一門に據つて、且く十一を論ず。謂ゆる、內空乃至大空なり。此十一の中、前の十は相空にして法中に情起し破して以て空を明す。後の一は眞空なり。眞心の體中に性寂なるを空と名く。此れ云何が知る。前の十空は猶六地の中の十法平等なるがごとし。『地持』に名けて妄想の境界十法平等なりと爲す。故に知んぬ相空なりと。其大空とは、『地經』に名けて阿梨耶識觀と爲す。故に知んぬ眞空なりと。人復說いて言はく、「前の十は境空、後の一は智空なり」と。此も亦以有り。妄の分齊に於て、心外に法有り。之を破して無を顯すが故に、境空と曰ふ。眞の分齊に於て、心外に法無し。一切の諸法皆即ち心なりと說く。之に就いて、空を辨ずるを、名けて智空と爲す。復前の十の中、初の八空は無を將て有を破し、第九の一空は有を用て無を破し、第十の空空は非有無雙を以て有無を破す。『地

經の中の十平等と同じ。前の八空の中、初の七空は無性空を明して衆生及び法の自性を破去し、後の一は其無相の空を明して衆生及び法の相を破遣す。前の七空の中、初の六は衆生の性を破遣し、後の一は性空にして法性を破遣す。前の六空の中、初の五は約して現在に就いて空を觀じ、後の一は約して過去に就いて空を觀ず。前の五の中に就いて、初の三門は事に就いて空を觀じ、後の二は法に就く。內空と言ふは、衆生の五陰は是れ其內法なり。是內法の中、我人、衆生、壽命、常樂我淨有ること無きが故に、名けて空と爲す。未だ法體を空せず。外空と言ふは、非情の法を說いて、以て外と爲す。是外法の中にも亦我人、衆生、壽命、常樂我淨無きが故に、外空と名く。此二は別觀なり。內外空とは、總じて向前の內外の諸法を觀ず。我人等無きを、內外空と名く。何が故に、前は別にして後は總なるや。釋に兩義有り。一には觀の難易に隨ひ、分つて三種と爲す。始の時は內を觀じて、未だ其外に及ばず。第二には外を觀じて、其內に及ばず。故に先は別觀なり。第三の觀は熟して、方に能く合觀す。故に後は總なり。問うて曰はく、『諸法を總じて知ることは則ち易く、別して知ることは則ち難し。故に二乘の人但能く總相に苦等を知り、別知すること能はず。菩薩は方に能く差別の異を知る。方に何んが今此れ別を先にし、總を後にするや。』釋して言はく、『以有り。法に兩種有り。一には是れ同相、二には是れ別相なり。空無我等の諸法齊く通ずるを、名けて同相と爲し、色受想等の事相各異るを、名けて別相と爲す。此二の中に於て、若し同を尋ねて以て其別を知らんと欲せば、總は易く別は難し。

故に先づ總を觀じて、後に共別を觀ず。若し別を尋ねて以て共同を知らんと欲せば、別は易く總は難し。故に別觀を先にし、後に總觀を爲す。今は後門に依りて先別後總なり。[一]此一義は觀の難易に隨ふが故に三種を分つ。二には對患の不同に對するが故に三種を分つ。二人別に三有り。一には内に著して情多く、外に著して情少し。故に先づ内を觀ず。二には外に著して情多く、内に著して情少し。故に須く外を觀ずべし。三には内外、倶に著す。故に須く總觀すべし。此前の三種は、事に就いて空を觀じ、次後の兩門は、法に就いて空を明す。法に二種有り。一には有爲、二には無爲なり。苦無常等の生滅の法數は、是れ共有爲なり。三無爲等は、是れ共無爲なり。有無法の中には、我人等無きを有爲空と名け、無爲法の中には、我人等無きを無爲空と名く。問うて曰はく、[二]向前の内外等の中、離合して三と爲す。今此有爲無爲の法の中には、何ぞ是の如くならず、唯別あつて總無きや。[三]釋して言はく、[四]准じて理を量るも亦傷無し。但今は内外の二法同じきは、是れ有なることを明さんが爲の故なれば、合して觀ずること則ち難し。是故に第三の内外は、總じて有爲無爲を觀ず。有無の位別なれば、合して觀ずること則ち易し。故に第三の有無の總無きなり。此前の五種は現の境界に就いて、以て空義を明す。無始空とは、更に別義無し。但過去に就いて前の五空を觀ずるを、無始空と名く。此諸法は今始めて方に我人無きことを觀ずるに非ず、無始より已來常に自ら空なることを明すなり。問うて曰はく、[五]何が故に、唯過去に就いて無始空を說いて、未來に就いて無終空を說かざる。[六]准量せば、應に

【經】涅槃經。

【經】涅槃經。

得べし。但し今は過去の法は起患の根本にして、無始より已來所執著の處なるが故に、須らく之を觀ずべきことを明さん爲なり。過現既に空なり。類して當を知るべし。故に略して論ぜず。又三世の法、次第相生なれば、過は現の本と爲り、現は過の末爲り、現は當の本と爲り、當は現の末と爲る。現法觀じ易し。故に先づ之に就いて、以て空理を觀ず。現は過に由つて生ずるが故に後に本に就いて無始空を觀ず。本を以て末に類す、義は知り易きに在り。故に過現を觀じて未來を類知す。當に就いて無終空を觀ずることを假らず。「又問はく、「若し爾らば、六通の中にも亦應に是の如く但過現のみを知るべし。何ぞ天眼を用て未來を知るや。」釋して言はく、「六通の事を知るに類せず。三世の事異なるが故に、須らく別して知るべし。空の義は理同じ。以て類して知るべし。」故に別して論ぜず。此前の六種は是れ衆生空、第七は法空なり。性空と言ふは、法は虛假にして自性有ること無きを觀ずるを、名けて性空と爲す。前の七は性を破し、下の一は相を破し、衆生及び諸法の相を破遣す。因緣の相を見るも亦無所有空なり。是を以て經に言はく、「無所有とは、人に子無き、之を名けて空と爲すが如し」と、是子就いて無性空を明すに非ざるなり。又貧人に物無きを空と名くるが如きも、亦物に就いて無性空を明すに非ざるなり。人に子無きが如きは、衆生の相を遣り、貧に物無きが如きは、法の相を破遣す。此前の八空は、無を以て有を遣り、第一義空は、有を以て無を遣る。前の八空を名けて、第一義と爲す。彼第一義も亦皆空寂なり。是故に名けて第一義空と爲す。是を以て經に言はく、「云何が名けて第一義空と爲す。

【經】涅槃經。

是眼生ずる時、從來する所無く、及び其滅する時、去れども至る所無し。其實法を推して不可得なることを了するを、第一義と名く。云何が名けて第一義空と爲す。業有り報有るも、作者を得ざるが故に、名けて空と爲す」と。良に以れば、因緣の業報を宣說して第一義と爲す。故に因緣の外に別に彼第一義諦有ること無し。性不可得の故に、名けて空と爲す。此前の九の空は、別して有無を遣り、第十の空空は、有無雙べて遣る。是を以て經に言はく、「是有是無は是を空空と名け、是是非是は是を空空と名く」と。是有是無は是を空空と名くとは、詮に就いて理を彰し、是是非是は是を空空と名くとは、相を拂つて寂を顯す。是有と言ふは、前の第九の有を牒して無を遣るなり。是無と言ふは、前の第八の無を牒して有を遣るなり。是を空空と名く。詮に就いて理を彰すとは、謂はく、前に牒する所の有無の法性、卽ち是れ第十の空空の義なり。有無と言ふと雖も、是れ其空空の義。猶未だ顯さざるが故に、後に相を拂つて以て理寂を顯すなり。是れ有無の二相並び立つに非ず。說いて空空と爲す。蓋し乃ち有無の二相雙び捨するを、空空と名くるなり。義意是の如し。是是と言ふは、前の經の中に是有無の二種を牒する是なり。非是と言ふは、前の是有是無を遣る是なり。理は非有の故に、是有は是に非ず。理は非無の故に、是無は是に非ず。兩の是俱に非なるが故に、空空と號す。相狀は如何。因緣の法は、有無同體なり。同體なるを以ての故に、無法を有と爲し、有法を無と爲す。無を有と爲すが故に、有は則ち有に非ず。有を無と爲すが故に、無は則ち無に非ず。是を以て有無は皆自性に非ず。自性

【經】涅槃經。

【地經】第八十八

【九】以下、義聚第二十四段に因緣の義を明す中に八門分別あり、第一に釋名辨體。

に非ざるが故に、說いて空空と爲す。此前の十門は是れ其相空にして、情相を破遣し、以て空理を明す。第十一の空は、實に就いて空を辨じ、彼眞性緣起の行德に就いて、說いて空と爲すなり。是を以て經に言はく、「波若波羅蜜を名けて大空と爲す」と。波若の體は卽ち是れ眞實如來藏識なり。如來藏の中に、法界恆沙の佛法を統含す。恆沙の佛法は同一の體性にして、互に相緣集す。一法として、別に自性を守ること有ること無し。故に說いて空と爲す。法界皆空なり。空、寧ぞ大ならざる。是を以て、實に就いて、說いて大空と爲す。『地經』の中も亦此說に同じ。故に彼文の中に、「阿梨耶識を名けて大空と爲す」と。前の十は相空にして卽ち是なり。『地經』に第六地の中の十法は、平等にして一一の名數、相對せずと雖も、其義大同なり。後の一の眞空は、卽ち彼所顯の無生の法體なり。又彼六地所得の十空三昧の中の生空、法空は、第一義空卽ち是なり。此中、前の十は、相空大空なり。已後の餘の七空は、卽ち是れ此中の大空を攝せず。十一空の義、略して辨ずること是の如し。

（九）十二因緣の義に八門分別す。（名を釋し體を辨ず一。開合廣略二。時に約しての分別三。界地の分別四。三性の分別五。淺深の分齊六。人に就いての分別八。）

第一に、名を釋し、並に其體性を辨ず。十二因緣とは、謂はく、無明より乃ち老死に至る是れ其名なり。無明と言ふは、癡闇の心體なり。慧明無きが故に、無明と曰ふ。過去世の中の煩惱一に非ず。何の義を以ての故に、偏に無明と說く。釋に兩義有り。一には通を

【經】地持論經第八。

彰し、別を隱すが故に、無明と說く。過去世の中の一切の煩惱、皆闇惑迷理の義有り。斯通の義に就くが故に、無明と說く。二には強を擧げて弱を攝するが故に、無明と說く。無明煩惱は本際に迷ひ、生死を集起す。其力最も強し。強に從つて名くるを以ての故に、無明と說く。但無明と說くは當に知るべし、一切の餘結は皆隨ふことを。譬へば世間に王來り、王去り、餘衆皆主に隨つて其名を得るが如し。此も亦是の如し。名を釋すること既に然り。體相は云何。中に於て差別するに、乃ち四種有り。一には迷理の無明、謂ゆる、二諦の理に迷ふ。故に經に說いて言はく、「諸諦の第一義を知らざるが故に、名けて無明と爲す」と。是の如き等なり。二には發業の無明、謂ゆる、三根三道の煩惱なり。三根の煩惱は能く思業を發し、三道の煩惱は身口業を發す。三には覆業の無明、謂はく、造業已に重く、前境に於て貪瞋等を起して前業を覆助し、其をして增長せしむ。四には潤生の無明、亦受生と名く。謂はく、受生の時の諸の煩惱等なり。若し『毘曇』に依らば、九十八使の一切の煩惱、皆能く潤生す。斯れ則ち潤生と、受生と別無し。若し、『成實』に依らば、唯愛のみ能く潤し、餘は但遠助なり。若し斯義に據らば、潤生は則ち狹にして、局りて唯愛に在り。受生は則ち寬にして、餘結に通ず。『地經』も亦然り。故に經に言はく、「愛水は無明を潤し、我心の漑灌を覆弊するを爲す」と。是の如き等なり。言ふ所の行とは、諸業の集起する之を名けて行と爲す。集起に二有り。一には業體に就く。緣中に集起す。之を名けて行と爲す。二には功能に就く。後果を集起するが故に、名けて行と爲す。名義、是の

【地經】第八。

如し。體相は云何。中に於て具に七門を以て分別す。一には性に就いて分別す。行無量なりと雖も、要は唯善惡なり。善惡の二業能く報を得るが故に、無記は報無し。是故に說かず。二には具に就いて分別す。謂ゆる、一切の身口意業なり。三には果に約して分別す。「地經」に說くが如し。謂ゆる、罪福不動の業なり。三塗の惡業は、之を名けて罪と爲し、欲界地の中の人天の善業は、之を名けて福と爲し、上二界の中の八種の定業は、說いて不動と爲す。四には報に對して分別す。謂ゆる、苦樂不苦不樂、三受の業なり。五には處に就いて分別す。謂はく、三界の繫なり。六には時に就いて分別す。謂ゆる、現報、生報、後報、不定報の業なり。七には相に隨つて分別す。相別に四有り。一には黑、二には白、三には黑白の雜、四には不黑不白なり。四の中の前の三は、是れ共有漏分段の因なり。後の一は無漏變易の因なり。業行は無量なり。且く斯を論ずるのみ。此等は後の業聚の中に、具に廣く分別す。言ふ所の識とは、分別の義なり。中に於て分別するに、乃ち三種有り。一には種子心識、作行以後、受生已前の所有の心識を業と爲す。煩惱に熏ぜられて發るが故に、能く後果を生ずるを、說いて識支と爲す。若し復通じて論ずれば、無明行の中の所有の心識も亦是れ識支なり。二には求生心識、中陰に在り。三には受生心識、名けて識支と爲す。謂はく、受生の時、最初の一念染汚の心、彼父母の精血等の事の妄想に於て、華池等の愛を起す。婬愛を起すに非ず。名色と言ふは、心は詮目に從ふが故に、號して名と爲す。身形質礙は之を稱して色と爲す。良に以れば心法は冥漠にして彰し難く、詮に非

ず。辨ぜざるが故に、詮目に從ふを說いて以て名と爲す。故に『楞伽』に云はく、「名を以て宣說すれば、色の四陰無し」と。故に說いて名と爲す。色は相形、現は以て現見すべし。當相を色と爲す。十二因緣通じて之を論ぜば皆是れ名色なり。良に此支は色心始めて具するを以て、名色の相は分段なり。故に偏に支と名く。六入と言ふは、生識の處、之を名けて入と爲す。入別不同なり。六種を離分す。謂ゆる、眼、耳、鼻、舌、身、意なり。前色の增長するを今五入と爲す。前の增長と名くるは今意入と爲す。言ふ所の觸とは、塵境に觸對する、之を目けて觸と爲す。若し『成實』に依らば、後の受支に對して想を說いて觸と爲す。觸は假の初なるが故に、名けて觸と爲す。若し『毘曇』に依らば、心法の中の觸數を以て觸と爲す。此觸數は根を廻らし塵に就く。能く根塵をして共に相觸對せしむ。故に名けて觸と爲す。大乘法の中も亦此說に同じ。然るに觸に五有り。一には增語觸、謂はく、意地の觸にして、能く法を發すが故に。二には有對觸、謂はく、五識の中の相應の觸なり。現境に觸對するが故に、有對と名く。三には明觸、謂はく、無漏觸なり。四には無明觸、謂はく、諸の煩惱相應の觸なり。五には處中觸、謂はく、一切有漏の觸なり。故に『雜心』に云はく、「增語及び有對、明、無明、處中の五の中、前の二は根に約して以て分ち、後の三種は性に隨つて以て別つ」と。此五種は大小不同なり。小乘法の中には所說不定なり。若し報觸を取りて以て觸支と爲さば、增語有對及與び處中は、是れ其觸支なり。餘の二は則ち明無明を以てするに非ず。報法に非ざるが故に。若し一切有漏の觸を說いて、以て觸支と

【龍樹】智度論第三十六。

爲さば、其明觸を除く餘の四は、皆是れ明觸にして無漏なり。是故に取らず。大乘法の中にも所說不定なり。若し分段を說かば、小乘と同じ。若し變易の十二緣を說かば、五觸皆是れ觸支の所攝なり。言ふ所の受とは、領納を受と名く。中に於て分別するに、廣略不定なり。或は總じて二と爲し、或は分つて二と爲す。一には、是れ身受、二には、是れ心受なり。五識相應を、名けて身受と爲し、意識相應を、名けて心受と爲す。或は說いて三と爲す。謂ゆる、苦樂不苦不樂なり。或は五受と說く。謂ゆる、苦樂憂喜及び捨なり。或は六受と說く。謂はく、六根の中の所生の受なり。或は十八と說く。謂はく、六根の中に各苦樂不苦不樂の三種の受を分つが故なり。或は復、三十六受を宣說す。前の十八の中に染淨を分つが故に、或は百八と說く。龍樹の說の如し。前の三十六を三世に之を分つが故に、百八有り。言ふ所の愛とは、境を緣ずるを愛と名く。現在世の中の煩惱は一に非ず。何の義を以ての故に、偏に名けて愛と爲すや。未來の生死は、愛に由つて牽起す。愛の力の功、強きが故に、偏に之を說く。但愛を說くと雖も、餘結、皆從ふ。亦世間の王來り、王去れば、餘衆皆隨ふが如し。中に於て分別するに、略して二種有り。一には、己身を愛し、二には、所須を愛す。廣く分たば五有り。一には情に順じて未だ法を得ざる中に於て、欲を起し愛を得。二には情に順じて已に法を得たる中に於て、不失愛を起す。三には情に違して未だ法を得ざる中に於て、不得愛を起す。四には情に違して已に法を得たる中に於て、求捨愛を起す。五には非違非順の法の中に於て、處中の愛を起す。極めて情に

【成實】第十二。

【成實】第十二。

達するに非ず。厭を生ぜざるが故に。言ふ所の取とは、前の愛增上して境界に取著す。故に名けて取と爲す。若し具に分別せば、取に四種有り。一には是れ戒取、二には是れ見取、三には是れ欲取、四には是れ我取なり。此四種は諸論不同なり。若し『毘曇』に依らば、一切の三界の戒取の心を、說いて戒取と爲し、一切の三界の身見、邊見、邪見、見取を、通じて見取と名け、欲界の一切の諸の鈍煩惱を、通じて欲取と名く。上二界の中の諸の鈍煩惱の自身に緣じて起るを、通じて我取と名く。若し『成實』に依らば、身見の一使を我語取と名く。實に我體無し。但我名に著するが故に我語と云ふ。此身見に依つて邊見を起し、斷常に取著す。若は見斷の者は、則ち五欲に著するを、名けて欲取と爲す。後世無きを以て現樂を貪するが故に。若は見常の者は、利有り、鈍有り。若は鈍根の者は則ち持戒を取り、後世の樂を望むを名けて戒取と爲し、若は利根の者は神は是れ常、苦樂不變にして則ち罪福無しと計するが故に、邪見を起すを、說いて見取と爲す。若し『毘曇』に依らば、直に四取を說いて以て取支と爲す。則ち一切の煩惱を具攝するが爲なり。若し『成實』に依らば、四取は諸の鈍煩惱を攝せず。是れ則ち支を取り、四取及び餘の一切の諸の鈍煩惱を通攝す。言ふ所の有とは、現在の行業能く當果有るが故に、名けて有と爲す。此れ既に是業なり。何んが業と名けずして乃ち有と名くる。當果未だ有らず。業に由つて之有るが故に、功能に從ふを說いて有と爲すのみ。其體相を論ずれば行支と同じ。言ふ所の生とは、來報始めて起るを說いて、名けて生と爲す。生の體狀は識支の中の受生の識と同じ。

【二〇】第二に開合廣略。先づ一と說く。

【或は等】次に二

【或は等】次に三中に三門あり、先づ三世の分別。

老死と言ふは、衰變盡壞を名けて老死と爲す。前の名色六入等と同じ。此十二、迭に相因由し、互に相緣藉す。故に因緣と名く。四諦の中に因緣を論ずる者の如きは、業能く親く生ずるを、之を說いて因と爲し、煩惱踈に助くるを、之を說いて緣と爲す。今此には然らず。一切の煩惱業苦を問ふこと莫く前に從つて後を生ずるを、斯を因緣と名く。名義體相之を辨ずること麤爾り。

(二〇)第二門の中に、開合廣略して因緣の相を明す。因緣の法は廣略不定なり。『涅槃經』梵行品に說くが如し。或は說いて一と爲す。謂はく、十二因緣は唯一の有爲なり。或は說いて二と爲す。謂はく、十二因緣は唯因と果となり。過の無明行と現在の愛取有は是れ其因分なり。現在の識等と當來の生死は、是れ其果分なり。或は說いて三と爲す。中に於て乃ち三門の不同有り。一には三世の分別、無明と行とは、是れ過去と說く。識支は不定なり。若し因の中の種子心識を取つて以て識支と爲さば、是れ過去に屬す。若し最初の受生心識を取つて以て識支と爲さば、是れ現在に屬す。若し求生心識を說いて識と爲さば、義は則ち不定なり。其過因に望めては說いて現在と爲し、其現報に望めては說いて過去と爲す。名色、六入乃至觸、受は一向に現在なり。愛取有の三義は則ち不定なり。其體性を論ずれば、起ること今に在り。判じて現在に屬す。其功力を論ずれば、能く當果有り。因を以て果に從ふ。判じて未來に屬す。『地經』の中は斯說に據るなり。『若し是の如くんば、過去の因何ぞ果に從ふを、判じて現在と爲さざるや。』釋して言はく、『以有り、過因現果は之

【二には等】三道の分別。次に

を起すこと已に定るが故に、世の別に隨ふ。相從はざるを未來と說く。未だ行らざるも、因に由るが故に有り。是故に因に攝す。果に從ふを未と爲す。生死の二支は、定んで未來に屬す。此は是れ第一の三世の分別なり。二には三道の分別、『地經』に說くが如し。無明愛取は是れ煩惱道なり。行有の二支は、是れ共業道なり。識と名色六入觸受生死との七を分ち說いて苦道と爲す。無明愛取は並に是れ煩惱なり。何の義を以ての故に、過に無明を說き、現に愛取を彰す。是義應に齊かるべし。但今は分つて三世の別異と爲す。隱顯互に論じ、等く三世に分つこと、所以無きに非ず。釋に兩義有り。一には本末の分別、無明は是れ本なり。理先に在りて彰れ、過去に之を說く。愛取は是れ末なり。理後に在りて論ずるに現在の說なり。二には強、弱の分別、無明煩惱は其本際に迷ひ、生死を建集するに其力功強ければ過去に之を說く。愛及與び取は未來を牽生す。其力增上すれば、現在に之を說く。行有の二支は、同く皆是れ業なり。何が故に、過去に其行の名を彰し、現在に有と說く。理も亦應に齊かるべし。三世の差別を分たんが爲に名等を異にす。三世に分つこと所以無きに非ず。過去世の中に集起已に定まれば當相を行と名け、未來は未だ有らず。業に由つて之有るが故に。功能に就いて說いて有と爲すのみ。識等の五果と生死の二報は同じく皆是れ苦なり。何の義を以ての故に現に識等を彰して未だ生死を說かざる。理も亦應に齊かるべし。世別隱顯異名等を分たんが爲に三世に分つ。亦所以有り。現報は起し竟んぬ。故に報體に就いて、說いて識等と爲し、未來は未だ起らず。過に就いて以て名く。

【三には等】次に苦分別。
【地經】第八。
【或は等】次に四分別。
【或は等】次に五分別。
【或は等】次に六分別乃至十二分別を明す。
【說いて九等】涅槃經。

物をして厭を生ぜしむるが故に、生死を說く。此は是れ第二の三道の分別なり。三には苦の分別、『地經』に說くが如し。無明行識乃至六入を、名けて行苦と爲し、觸受の二支を、名けて苦苦と爲し、餘の因緣分を、名けて壞苦と爲す。三苦相通ず。何が故に是の如くなる。理實に齊く通ず。但今は觸受の二支を明さんが爲に、現に諸緣生ず。心性は是れ苦なり。彼苦の上に於て現の事惱を加へ、苦の上に苦を加ふるが故に、苦苦と云ふ。無明行等は今に起す。義顯なるが故に、說いて行と爲す。行の體は是れ苦なるが故に、行苦と名く。愛取有等は、未來に趣向し、生老死等は敗壞の果なるが故に、名けて壞と爲す。壞の體は是れ苦なるが故に、壞苦と名く。此は麁細隱顯に隨つて之を論ず。道理を盡すには非ず。此は是れ增數三門の分別なり。或は說いて四と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂はく、無明と行と生及び老死なり。愛之與び取は無明に攝入す。有は行に攝在し、識等の五果は生死に攝入す。故に四と說くなり。或は分つて五と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂はく、受と愛と取と有及び生なり。識等の五果は受の中に攝入し、無明は愛取の中に攝入し、行は有の中に入り、死は生の中に入る。故に五と說くなり。或は說いて六と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂ゆる、三世の因と以與び果となり。或は說いて七と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂はく、識、名色、六入、觸、受、愛及び取なり。餘は略して論ぜず。或は說いて八と爲す。『涅槃』に說くが如し。謂はく、識名色乃至有なり。無明を愛取の中に攝入し、行は有の中に入り、生死を識等の支の中に攝入す。故に但八と說く。或は說いて九と爲す。

「城喩經」に說くが如し。前の三支を除く餘の九を宣說す。或は十一と說く。薩遮尼乾子の爲に說くが如し。生の一法を除く餘の十一を說く。薩遮尼乾子の弟姉と共に生ず。佛、其意を護り、生支を說きたまはず、或時、具に十二因緣を說きたまふ。廣くは經に辨ずるが如し。此廣略は化に隨ふが故に爾り。

（二）第三門の中に、時に就いて分別す。中に於て六有り。一には五世の分別、二には三世に就いての分別、三には二世に就いての分別、四には一世の前後に就いての分別、五には同時別體に就いての分別、六には同時同體に就いての分別なり。五世と言ふは、「涅槃」に說くが如し。過去の過去に其二支を立つ。彼經に說くが如し。煩惱の因緣は煩惱を生ず、是れ其一なり。業、煩惱を生ずるは是れ其二なり。此れ過去を明す。過去世の中の煩惱及び業は、其次の過去世の中に於て無明支を生ず。其次の過去に二支を建立す。彼經に說くが如し。煩惱業を生ずるは是れ其一なり。謂はく、過の無明が行支を生ずるなり。業は苦を生ず、是れ其二なり。謂はく、過の行より現の五果を生じ、現に四支を立つ。彼經に說くが如く、苦は煩惱を生ず、是れ其一なり。現の五果より愛支を生ず。煩惱の煩惱を生ずるは是れ其二なり。愛より取を生ず。煩惱の有を生ずるは、是れ其三なり。取より有を起し、有緣は苦を生ずるは、是れ其四なり。現の有支より未來の苦を生じ、其次の未來に三支を建立す。彼經に說くが如く、業の緣は業を生ず、是れ其一なり。謂はく、未來世の業相生じて、意業より身口の業を發すが如し。業は煩惱を生ず、是れ其二なり。謂はく、未來

【或は十一等】涅槃經。

【經】涅槃經。

【二】以下、第三に時に就いて分別す。中に就いて六ある中、一に五世分別。

【次に等】二に三世に就いて分別す

の業は未來の受生の煩惱を起す。煩惱は苦を生ず、是れ其三なり。謂はく、未來受生の煩惱より未來未來の生支を生じ、未來未來は唯一支を立つ。彼經に說くが如く、苦の緣は苦を生ず、是れ其一なり。彼生支より老死等を起す。唯彼三世の十二因緣老死を生起するは、應に是れ二支なるべし。但彼は直に能生の因緣に就いて十二支を立てて、所生を取らざるが故に、生支より老死を起し、唯一支と名く。五世是の如し。此一門竟る。次に、三世に就いて以て分別すれば、因緣の法體は前後に通ず。今は三世の隱顯に據つて之を論ず。過去世の中、未だ業を造らざる前の一切の煩惱は、判じて無明と爲す。行支は不定なり。若し因中の種子心識を取つて以て識支と爲さば、行支は則ち短し。當造業の時を說いて行支と爲し、造業已後を判じて識支に屬す。若し求生及び受生の心を取つて以て識支と爲さば、行支は則ち長し。造業已後未死已前は、斯を行支に屬す。識支は不定なり。若し種子心識を說いて識と爲さば、過去の造業已後未死已前に在り。若し求生の心識を說いて識と爲さば、中陰に在り。望むる所不定なり。過去の因に望めて、說いて現在と爲し、現在の果に望めて、說いて過去と爲す。若し最初の受生の心識を說いて以て識支と爲さば定んで現在の行識二支に屬す。時分不定なり。若し因中の種子心識を取つて以て識支と爲さば、識支は則ち長く、行支は則ち短し。當造業の時を說いて行支と爲し、造業已後受生已前を、判じて識支に屬す。若し最初の受生心識を取つて以て識支と爲さば、行支は則ち長く、識支は則ち短し。造業已後受生已前を、判じて行支に屬し、最初の一念受生の心識を、判じて識支に屬

【經】北本涅槃經第二十七。

【涅槃】北本涅槃經第二十七。

【次に等】三に二世に就いて分別す。中に二、初に過を現に望むることに就いて明す。

す。故に論に說いて言はく、「生有及び死有は、當に知るべし、一刹那なり」と。名色支とは前後不定なり。若し種子及び求生の心を說いて以て識支と爲さば、現在世に於て初生以後は悉く是れ名色なり。若し初生を說いて以て識支と爲さば、第二念の後は方に是れ名色なり。向後長短は經に成判有り。入胎して五分四根の未だ具せざるを名色支と名く。五分と言ふは、『毘婆沙』に云はく、「胎中の五時を名けて五分と爲す」と。亦人一報を攝して十時と爲す。胎外に五有り、胎內に五有り。『涅槃』に說くが如し。胎內の五の中に、眼耳鼻舌の四根未だ具せざるを、判じて名色に屬し、四根具し已つて未だ出胎せざる來を、判じて六入に屬す。言ふ所の觸とは、經に成判有り。未だ苦樂を別たざるは、是れ名けて觸と爲す。出胎以後匍匐已前は、違順苦樂等の事を思量分別すること能はず、是故に名けて未別苦樂と爲す。觸の境方に覺すが故に、名けて觸と爲す。言ふ所の愛とは、經の中に說くが如し。染習の一愛是を名けて愛と爲す。愛に二種有り。一には食愛、二には是れ色愛なり。匍匐以後未だ色愛有らず。但食愛のみ有るを、習一愛と名く。斯より已來を、判じて愛支と爲す。二愛を具すれば、已に未だ境界を思想追求すること有らず。是時を愛と名く。已に前境を思想追求すること有るも、未だ境を造り、身に欲事を行ずること能はず。是時を取と名く。身に行ずる已後乃至未來に生を受くる已前は、之を判じて有と爲す。未來世の中の最初の一念受生の心識を、說いて生支と爲す。名色已後を判じて老死と爲す。此二門竟る。

次に、二世に就いて十二を分別す。中に於て二有り。一には過去を現に望むるに就

【何者か等】以下、現を後に望めて說くを明す。

【次に等】四に一世の前後に就いて說くを明す。

いて具を說く、二には現在を後に望むるに就いて具を說く。何者か過去を現に望めて具を說く。若し三世隱顯に就いて以て過去を論ずれば、唯無明と行と有り。現在は唯識等の五果有り。實に就いて通じて論ずれば過去は直に無明行有るのみに非ず。當に知るべし、亦愛取及び有を具す。現在は直に識等有るのみに非ず。當に知るべし、亦生及び老死有り。過去世の中に業を發す煩惱を說いて無明と爲し、業を潤す煩惱を、說いて愛取と爲す。故に『地經』に云はく、「先際の因を無明愛と謂ふ」と。過去世の中の所發の業は、之を名けて行と爲し、所潤の業は、之を名けて有と爲す。現在世の中の當の果報體あるを、名けて識等と爲す。過に就いて以て彰すは、即ち是れ生死なり。識は即ち是れ生、名色已後は即ち是れ老死なり。何者か、現在を後に望めて具に說く。若し三世の隱顯に就いて之を論ぜば、現因は唯愛取及び有有り。當に知るべし、當果は唯生と老死とのみ有ることを。實に據つて通じて論ずれば、現因は直愛取有有るのみに非ず。當に知るべし、亦無明及び行を具す。未來は但生老死有るのみに非ず。當に知るべし、亦識等の五果を具す。現在世の中の發業の煩惱を、說いて無明と爲し、潤業の煩惱を、說いて愛取と爲す。故に『地經』の中に、先際の因を無明愛と名く。後際も亦爾り。現在世の中の所發の業は、之を說いて行と爲し、所潤の業は、之を說いて有と爲す。未來世の中の所有の報體を、說いて識等と爲し、過去に就いて、說かば生老死と爲す。此三門竟る。次に、一世の前後に就いて具を明す。現を過去に望むれば、但彼識等の五果有るのみに非ず。當に知るべし、亦生死の二報有り。具有の義

【次に等】五に同時の別體に就いて說くを明す。

【次に等】六に同時同體の法に就いて明す。【經】十地經論第八。

は、備に前に辨ずるが如し。現を未來に望むれば、直其愛取有の因有るのみに非ず。當に知るべし。亦無明及び行を具す。具有の義も亦前に辨ずるが如し。此四門竟る。次に、同時の別體に就いて具を明す。『毘婆沙』に具に廣く分別するが如し。彼論に名けて刹那の因緣と爲す。此は奢摩達の建立する所なり。相狀は如何。彼文は且く貪心に就いて殺を起し、十二を具することを明す。餘は類して知るべし。貪、殺を起す時、貪愚に相應するを說いて無明と爲し、彼相應の思は、即ち名けて行と爲し、彼相應の心は、之を說いて識と爲す。起に作業有り。必ず色心に依るを、說いて名色と爲し、必ず六根に依るを、說いて六入と爲し、彼相應の觸を說いて觸支と爲し、彼相應の受を、說いて受支と爲す。貪を即ち愛と名け、貪相應の纏は、之を說いて取と爲す。何者か是なる。貪と相應する有は慚愧睡及び掉纏無し。通じては則ち俱に是なり。中に於て分別せば、睡纏の一種は境に於て睡著し、堪忍すること能はず。取執の義顯なり。之を說いて取と爲す。身口の作業能く當果有るを說いて、名けて有と爲す。無作も亦是なり。彼文に說かず。彼の前の諸法に生住滅有り。生を生支と爲し、變異を老と名け、滅壞を死と稱す。此れ同時なりと雖も、體性は各異なり。此五門竟る。次に、同時同體の法に就いて十二を具することを明す。十二因緣の根本は唯心なるが故に、經に說いて言はく、「十二因緣は唯一心の作なり」と。唯心作とは、謂はく妄心に依つて便ち一切の色の境界起ること有り。夢の心に依つて便ち一切の夢の境界生ずること有るが如し。即ち彼心中の闇惑の義を說いて無明と爲し、集起の義は、之を說い

【一三】第四に界地に約就して分別す

て行と爲し、了別の義は說いて以て識と爲す。心と色相とは說いて名色と爲す。是れ名色の中の隨別の不同なるを離して六入と爲す。心前の境に觸するを說いて觸支と爲し、心能く領納するを即ち說いて受と爲し、是心境を染するを即ち說いて愛と爲し、心取執有るを即ち名けて取と爲し、能く後を生ずる義は、之を說いて有と爲し、相起るを生と名け、虛無を滅と名け、滅を老死と名く。此十二の中、餘の十一に就いて、說いて無明と爲す。餘の十一の外に、別に無明の自性として得べきもの無し。乃至前の十一を宣說して、以て老死の前の十一の外にも亦老死の自性として得べきもの無しと爲す。十二緣は同一の體性なるを以て、互に相緣起す。故に十二緣は皆無自性なり。無自性の故に、悉く皆空寂なり。時分是の如し。

(一三)第四に、界地に約就して分別せば、界は謂はく、三界、地は謂はく、九地なり。先づ界に約して論せば、「毘婆沙」の中に、一論師の說に、欲界地の中に十二支を具し、色界に十一あり。名には色支を除く。何が故に、是の如くなる。色界の六根は一時に頓に生ず。生ずれば即ち六入の故に、名色無し。無色に十有り。名色支及び六入支無し。何が故に是の如くなる。彼處無色なるが故に名色無く、彼は五根無きが故に六入無し。若し彼說に就かば、應當に說いて言ふべし。「識は觸を緣ず」と。評者の言に曰はく、「三界の中に於て悉く十二を具す」と。欲界の具有の義在ることを知るべし。色界の中に於て、復六根一時に頓に生ずと雖も、初生の六根未だ猛利すること能はざるを、判じて名色と爲す。後轉じて猛

【次に等】二に地に約していふ。

利なるを說いて六入と爲すが故に、十二を具す。無色界の中には、色無くして名有り。五入無しと雖も、而も意入有るが故に、十二を具す。若は彼に就いて說かば、應當に說いて言ふべし。「識は名を緣じ、名は意を緣ず」と。一一に細論せば通局衆多なり。具に辨ずべきに非ず。界に約すること是の如し。此一門竟る。次に、地に約して論ぜば、「毘婆沙」に依るに、身は欲界に在つて未だ欲結を離れず。欲界の中に於て、愛を起し、取を起し、亦有を起す。未來世に於て生老死有り。此人は則ち是れ欲界地の中の一の愛取有と一の生老死あり。此人後時に欲愛を斷離し、初禪に未だ離れざれば、初禪地に於て愛取有を起し、未來に當に初禪の生死有るべし。此人現在に欲と初禪との二の愛取有、二の生老死を具す。此人更に初禪の愛を斷ずるも、二禪を未だ離れざれば、二禪地に於て愛取有を起し、未來に當に二禪の生死を受くべし。此人現に三の愛取有と三の生老死を具す。是の如く轉增して、乃至無所有の愛、非想の結を斷離し、非想地に在りて愛取有を起し、未來に當に非想の生死を受くべし。此人現に九地の中の九の愛取有、九の生老死を具す。此人命終して非想地に生じ、前の非想の愛取二支を用て過の無明と爲し、非想の有を用て過去の行と爲し、前の未來の非想の生死を用て現の五果と爲す。此人爾時に下八地の愛取及び有に於ては、過去の因に非ず。下八地の中の生老死の報は現在の果に非ず、亦未來に非ず。何が故に是の如くなる。論に自ら釋して言はく、因果成ずる處、則ち過去現在及與び未來を宣說すべしと。此人下に於ては因果成ぜざるが故に、過現未來の三世を因緣と名くるを得ず。此人後時に

【一三】第五に三性分別す。

退して識處を生ず。本所起の識處地中の愛取二支を用て、過の無明と爲し、本行支を用て、過去の行と爲し、本所有の識處地中の未來の生死を用て、現の五果と爲す。上に望め下に望むるに、一切の所有悉く過去、現在、未來に非ず。義は前の解に同じ。是の如く轉下して乃至欲界地の中に退生すれば、本欲界地の愛取二支を用て、過の無明と爲し、本行支を用て、過去の行と爲し、本欲界の未來の生死を用て現の五果と爲す。餘の一切地の所有の因果は、悉く過去、現在、未來に非ず。義は前の釋に同じ。身は欲地に在つて、因を起し果を受く。其義既に然り。上に在るも亦爾り。界地の分別、其狀是の如し。

【一三】第五門の中に、三性分別す。理に望めて以て十二因緣を論ずれば、理に違して生ず。斯は是れ不善なり。相に隨つて之を論ずれば、中に於て亦善惡無記の三性の差別有り。無明支とは、『毘曇』の如きに依らば、其二種有り。一には是れ不善、二には穢汚無記なり。欲界地の中の一切の煩惱は、身見、邊見を除く餘は悉く不善なり。無慚、無愧と俱なるを以ての故に、欲界地の中の身邊二見、及び上二界の一切の煩惱は皆是れ穢汚なり。無慚と無愧と俱ならざるが故に、說いて無記と爲す。若し『成實』に依らば、一切の煩惱は、斯は是れ不善なり。大乘法の中には、所說不定なり。若し果報に望むれば、『毘曇』の說に同じ。故に『地持』に云はく、「身見を起す人と所知を諍ぜざるは、此見に因らずして惡道に墮す」と。若し理に望むれば、『成實』の說に同じ。行支に二有り。一には善、二には惡なり。樂の因を善と名け、苦の因を惡と名く。識支に三有り。一には種子の識、行支と同じ。二に

【一四】以下第六に十二因緣の淺深の分齊を明す。

は求生心識、三には受生心識、無明と同じ。此二は必ず煩惱の心を用ての故なり。問うて曰はく、『若し受生心識をして、必ず煩惱に由らしめば、云何が報と名くる。』然るに彼識支は是れ穢汚なりと雖も、命根は是れ報なり。又復所緣の父母の精血を攬つて體と爲す者、亦是れ報法なり。此より判じて報無記と爲すのみ。名色六入乃至觸受は一向に無記なり。中に於て善惡の義無きに非ず。今は往因に對して、說いて報と爲す。故に斯を無記と名く。愛取の二支は無明の說に同じく、有は行の說に同じく、生は識の說に同じく、老死は前の名色等の說に同じ。此五門竟る。

（一四）第六に、其淺深の分齊を明す。中に於て增數の次第は之を辨ずるに、要ず攝すること唯二なり。一には眞、二には妄なり。十二因緣の所起は眞妄の所集なり。唯眞のみにして生ぜず、單に妄のみにして成ぜず。眞妄相依るが故に、因緣集起の義有り。妄に眞を攝するに據らば、皆妄心の作なり。眞に妄を攝するに就かば、皆眞心の作なり。心の麤細に隨はば分齊に三有り。一には事相因緣、二には妄相因緣、三には眞實因緣なり。一の因緣の法は義に隨つて三を分つ。言ふ所の事とは、六識分齊の所起の生死煩惱業苦なり。當に知るべし、卽ち是れ事相の因緣なり。妄想と言ふは、則ち前の事相なり。理を以て之を求むるに、唯是れ妄なり。妄想の虛構の集起なり、夢の所見の如く、心の外に畢竟じて事として得べきもの無し。卽ち是れ妄想因緣の義なり。眞實と言ふは、卽ち前の妄想因緣の體なり。其本性を窮むれば、唯是れ眞識緣起の所集にして、眞の外に畢竟じて妄として得べきもの

【地經】論經第八

【涅槃】北本第二十七。

【一五】第七に人に就いて分別す。先づ所有を明す。

無し。即ち是れ眞實因緣の理なり。故に『地經』に云はく、「十二因緣は皆一心の作なり」と。皆心作なりとは、謂はく、眞心の作なり。又『勝鬘』に云はく、「自性淨心は不染にして染す」と。即ち是れ生死の因緣集起す。又『不增不減經』に說くが如く、即ち此れ法界なり。五道を輪轉するを、名けて衆生と曰ふ。『楞伽』に亦云はく、「如來の藏は是れ共一切の善不善の因なり」と。能く遍く一切趣の生を興造するは猶伎兒の諸趣を變現するが如し。斯を以て驗求するに、生死の因緣は皆是れ眞作なり。夢の所見の如く、皆報心の作なり。波は水の作なるが如く、夜、繩を見、之を以て蛇と爲すも蛇は是れ繩の作なるが如く、是の如きの一切なり。眞作を以ての故に、因緣は即ち眞なり。故に『涅槃』に云はく、「十二因緣を名けて佛性と爲す。十二緣を見るを名けて佛を見ると爲し、亦法を見ると名け、亦僧を見ると名く」と。『勝鬘』にも亦云はく、「生死の二法は是れ如來藏なり」と。義に隨へば、淺深の分齊に五有り。一には事相因緣、『毘曇』に說くが如し。二には虛假因緣、假有無性なり、『成實』に說くが如し。三には妄想因緣、陽炎の水、揵闥婆城の如し。遠望するに、有に似たるも、近觀すれば本無し。但無性なるのみに非ず、相も亦得回し。四には妄想因緣、皆妄心の作なり。夢の所見の如く、心外に法無し。五には是れ眞實集用因緣、皆眞心の作なり。眞の外に法無し。五が中の初の二は、猶是れ三が中の事相因緣なり。中間の兩種は、猶前の三が中の妄想因緣なり。後の一種は、猶前の三が中の眞實因緣なり。分齊是の如し。

〔一五〕第七門の中に、人に就いて分別す。人とは、謂はく、凡夫、二乘、菩薩なり。今此等に

【經】十地經論第三。
【經】勝鬘經。
【經】涅槃第十四

就いて、以て因緣を辨ず。中に於て三有り。一には所有を明し、二には起滅を明し、三には所解を明す。所有と言ふは、因緣に二有り。一には是れ分段、二には是れ變易なり。若し分段を論ずれば、凡夫には具に善道惡道の二種の因緣有り。二乘の人の中には、惡道の因緣は盡く見諦に在り。故に須陀洹を名けて觝債と爲す。觝は三塗、債は善道の因緣、終に無學に至る。無學に猶生死の殘果有り。大乘の人の中には、惡道の因緣盡く初地に在り。故に經に說いて言はく、「初地の菩薩は惡道の畏を離る」と。問うて曰はく、『經に說かく、「種性已上の大力の菩薩は變易死と爲す。」惡道の因緣は是れ分段の故なり」と。今云何が、初地に始めて盡くと言ふや。『釋して言はく、『惡道の義を三階に別つ。一には惡業を因と爲し、四住を緣と爲す。惡趣の報を受くるは、外凡常沒の位の中に在り。二には惡業を因と爲し、四住を正緣とす。緣力微薄なれば、悲願もて佐助す。惡趣の身を受くるは、外凡善趣の位の中に在り。三には惡業を因と爲し、悲願を緣と爲す。惡趣の生を受くるは、種性、解行の位の中に在り。『勝鬘』は彼種性已上の前の二種を離るるを以て、離分段と名くるなり。第三無きに非ず。故に『地持』に言はく、「種性解行は或は惡道に墮す」と。善道の因緣は佛に至つて乃ち盡くるなり。是故に經の中に說く、「佛一人有頂種を斷ず」と。『問うて曰はく、『經に說かく、「初地の菩薩は二十五三昧を得、二十五有を破す」と。今云何が、佛に至つて乃ち盡くと言ふや。『釋して言はく、『善道にも亦三階有り。善業を因と爲し、四住を緣と爲し、人天の報を受くるは、種性の前に在り。二には善業を因と爲し、四住を正

【次に等】 二に起滅を明す。

緣とす。業力微薄なれば、悲願もて佐助す。人天の身を受くるは、種性の上に在り。三には善業を因と爲し、非願を緣と爲す。四住の殘氣隨つて佐助す。人天の報を受くるは、初地の上に在り。經に初地に前の二種を離るるを以ての故に、初地に二十五有を破すと說くも、第三無きに非ず。故に『地持』の中に宣說すらく、「解行は惡趣の報を轉じて歡喜地に入る」と。善を轉ずと言はず。又『大智論』に說かく、「初地の上に猶肉身有り」と。良に此に在り。彼初地の上に復之有りと雖も、但應化人天の身中に於て、微に淺氣有るも純ら受くる者無し。分段是の如し。變易の因緣は、凡夫に但一の無明支有り。無明住地先に成就するが故に、二乘の人は無明行有るも、未だ報を受けず。彼何の時にか受けん。不愚法の者は、此身滅し已つて淨土の中に生ず。卽便ち之を受く。愚法の人は、未來に無餘涅槃の後、心想生ずる時方に乃ち之を受く。大乘の人の中には、十住已上に無明行有り。種性已上に生死の果を受け、佛に至つて乃ち盡く。所有是の如し。此一門竟る。次に、起滅を明す。先に分段を論ず。凡夫は彼分段に於て、因緣集起して滅せず。二乘は滅を求め、起を學すること能はず。大乘の人も亦滅し、亦起す。自斷の故に滅し、化他の故に起す。故に經に說いて言はく、「亦畢竟じて有爲法を滅せず。衆生を化するが故に」と。次に變易を論ず。凡夫は彼變易に於て、因緣未だ起らず、未だ滅せず。二乘は起を學するも、未だ滅すること能はず。問うて曰はく、『二乘は亦能く智を滅して般涅槃に入るに、云何が滅せざる。』釋して言はく、『二乘は暫く智を滅すと雖も、後に必ず還つて生ず。是れ永盡に非ざるが故に、滅と

【次に等】 三に所解に約す。

【經】 十地經論第八。

【一一八】 第八門に智に約して分別す。中に五門分別あり一に三觀を定む。

名けず。大乘の人は亦起し、亦滅す。始學の故に起し、終盡の故に滅す。』此二門竟る。次に、所解に約して、以て因緣を辨ず。凡夫は彼因緣法の中に於て、我人有りと見、未だ流轉して十二緣を起さず。我有るを以ての故に、所起の因緣便ち繫屬有るを、名けて我所と爲す。二乘は無我無人と解知し、但諸の因緣共に相集起す。無我を以ての故に、因緣の法に繫屬せらるること無し。故に我所に非ず。大乘の人は、深く因緣の非有非無を解して二邊を離る。是義云何。分別するに三有り。一には法相に就いて非有無を明す。十二緣の法は緣集より生ず。本自性無し。是故に有に非ず。緣より集るが故に、無と言ふことを得ず。法の非有を見るは、是れ共逆觀なり。法の非無を見るは、是れ共順觀なり。二には相實相對して非有無を明す。妄情所起の十二緣の法は、之を名けて相と爲す。所依の眞諦を、說いて以て實と爲す。故に經に說いて言はく、「十二因緣は皆一心に依る」と。情に依つて相を起すを、名けて非無と爲し、實に據つて本寂なるを、說いて非有と爲す。實に非有と見るは、是れ眞諦觀なり。相を非無と解するは是れ世諦の觀なり。三には實の中の體用に就いて分別す。眞諦常寂にして、緣として得べきもの無きを、名けて非有と爲す。即ち是れ眞識なり。妄に隨つて、流轉して十二緣を起すを、說いて非無と爲す。又佛菩薩世に隨つて起用するを、亦非無と名く。法の非有を見るは、是れ實性觀なり。法の非無を知るは、是れ實相觀なり。人に就くこと是の如し。

(一一八)第八門の中、智に約して分別す。智門一に非ず。今は且く彼四十四智、七十七智に約し

【成實】第十。

【七方便とは等】次に七方便を明す

【次に等】次に四十四智の差別を辨ず。

て因縁の相を辨ず。中に於て、略して五門を以て分別す。一には先づ三觀を定め、二には七方便を明し、第三には彼七方便の義に約して四十四智の差別を辨明し、第四には前の三種觀の義及び七方便に約して七十七智の不同を辨明し、五には人に隨つて異を辨ず。三觀と言ふは、若し『毘曇』の說に依らば、陰界入を以て三觀と爲す。此觀は念處位の中に在り。若し『成實』の說に依らば、無常無我及び苦を觀ず。之を明して三と爲す。此觀は四現忍の中に在り。此一門竟る。七方便とは、先には色に就いて論じ、後には諸法に類す。七名とは是れ何ん。一には觀色、二には觀色集、三には觀色滅、四には觀色道、五には觀色味、六には觀過、七には觀色出なり。觀色と言ふは、色の果報を觀ず。苦諦觀なり。觀色集とは、色の因縁を觀ず。集諦觀なり。觀色滅とは、色の盡處、數滅無爲を觀ず。滅諦觀なり。觀色道とは、色の對治、無漏の道を觀ず。道諦觀なり。觀色味とは、前色の能生の愛味を觀察す。觀色過とは、前色の能生の苦過を觀察す。觀色出とは、色を觀じて滅を得、生死を出離す。何が故に、觀色生道を說かざる。釋して言はく、生道は、即ち是れ第八の第一義觀なり。是が爲に論ぜず。色の中既に然り。諸法も同じく爾り。此七は能く第一義觀の與の、方便と爲るが故に、名けて方便と爲す。此七種の位は、何の處にか在る。若し『毘曇』に依らば、前の四方便は四現忍及び見道の中に在り。後の三は修道の中に在り。『成實』の如きに依らば、此七門は聞思地の中に在り。此二門竟る。次に、四十四智の差別を辨ず。四十四智は『成實』に說くが如し。此は猶是れ前の七方便の中の初の四門觀なり。十二緣に就い

【次に等】以下、七十七智の差別を辨ず。

【成實】第二。

て此四觀を爲すが故に、四十四智の差別有り。十二因緣の次第相生、因果相屬に十一對有り。此十一に就いて、末より本を尋ぬ。逆を以て之を推すに、先づ老死を生に對するに就いて四と爲す。一には老死の苦を觀じ、二には老死の集を觀じ、三には老死の滅を觀じ、四には老死の道を觀ず。次第に逆推して乃ち行支に至る。前の無明に對して亦此四有り。謂ゆる、行の苦、行の集、行の滅、及び行の滅道を觀ず。無明は前に望めて、更に集因無し。所以に說かず。何が故に逆觀なる。果に據つて因を尋ぬるは、諦觀に順ずるが故なり。此三門竟る。次に、七十七智の差別を辨ず。七十七智は『成實』に說くが如し。論文には但「經の中に說くが如し」と言ふ。現在世の中の生は老死に緣じ、生を離れずして老死を緣ず。過未も亦然り。是れ法住智なり。滅相觀とは、是れ泥洹智なり。是の如く、次第して乃ち無明に至る、皆悉く同じく然り。廣く分別せず。是が爲に、論家に種種の異釋あり。其體相を窮むれば、此智は猶是れ七方便の中の第二の集觀、及び無常等の三觀の所攝なり。何の義を以ての故に、七方便の中に偏に集觀を爲す。十二緣の法は、因緣を宗と爲し、集は是れ緣の義なるが故に、偏に之を爲す。集觀の中に六十六有り。三觀の中に共十一有り。彼此合說すれば、七十七有り。前の六十六は因を觀じて果を生じ、住持して滅せず。法住智と名く。後の十一は苦無常空無我等を觀じて涅槃に趣向するを、泥洹智と名く。故に論に說いて言はく、「生死を增長するを法住智と名け、生死を損減するを泥洹智と名く」と。相狀は如何。現在世の中の十二因緣の次第相生し、因果相屬するに十一對有り。過未も亦

【成實】第二十。

然り。便ち三十三對の因緣有り。今は先づ彼三世の中の生は老死に緣ずるに就いて、其觀相を辨ず。餘類は知るべし。現在世の中の生は老死に緣ずるに、二の集觀有り。一には生老死を緣じ、二には生を離れずして老死を緣ず。此二何んが別なる。『毘婆沙』に云はく、「初は是れ正觀、後は是れ寂觀なり」と。何が故に須らく寂すべき。『成實』に釋して言はく、「諸の外道の人多く因緣に迷ひ、或は冥性を說いて衆生の因と爲し、或は梵天を說いて以て因等と爲す。佛、之を破せんが爲に因を彰し果を作る」と。是れ實にして不實不虛の故に。現在世の中の生を離れずして老死を緣ずと說くに、既に此二有り。過未同じく然り。即ち分つて六と爲す。此六集觀は聞思地に在り。四現忍の中、總じて三世の生の老死を緣ずるを觀ずるに、三種の觀を作す。謂はく、無常苦及び空無我なり。三觀殊ると雖も、同じく涅槃に趣く。總攝して一と爲し、泥洹智と名く。此を以て前に通じて、合して七智有り。問うて曰はく、何が故に、集觀の中には三世を六に分ち、泥洹智の中には三世を一と爲すや。釋して言はく、『集觀は因を觀じ果を生ず。果を生ずること不同なり。世別に之を分つ。泥洹智とは、生死の相を破して寂滅に趣向す。寂滅平等にして、三世合して一なり。三世の中の生老死を緣ずるに、既に此七有り。次第に逆推して乃至無明の行を緣ずるも亦然り。十一對の中に、皆七智有り。是故に合して七十七智有り。』問うて曰はく、何んが無明行乃至老死に從はずして、先づ老死に從ひ無明行に至るや。『因緣法の中に二の次第有り。一には順、二には逆なり。始より終に至る、是れ順の次第なり。

【地經】第八。

【人に等】次に人に約して辨ず。一本は人に約して菩薩の異を辨ずとあり。

終より始に至る、是れ逆の次第なり。觀法多途にして一定すべからず。復此は是れ聲聞の觀法なり。聲聞は鈍根にして、末より本を尋ぬ。其觀成じ易し。是故に然なり。』又問はく、「因緣相生ずること無窮なり。老死を後に望めて、何が故に、緣生の義を說かざる。』『老死を後に望むるに、更に所生無し。是故に說かざるなり。』若し爾らば、何が故に、『地經』の中に、「老死は後の與に因と作る」と宣說するや。』釋して言はく、『老死は轉じて未來に望むれば、實に因の義有り。菩薩能く見るが故に、彼に之を說く。七十七智の聲聞の觀法は老死を因と爲す。聲聞は見ざるが故に、此を論ぜず。又復聲聞も。亦老死緣生の後の義を知る。今は此れ、且く一分に據つて、言を爲すのみ。是故に說かざるなり。』此四門竟る

人に約して辨ず。通じて之を論ずれば、四十七智、七十七智は三乘同起す。別に隨つて、之を論ずれば、四十四智、七十七智は、並に是れ聲聞觀行の法なり。論文の如きに依らば、聲聞の人の中に、利有り、鈍有り。四十四智は、鈍人の觀行にして、七十七智は利人の觀行なり。何が故に、是の如くなる。前の四十四は果を觀じ因に由る。觀を爲すこと成じ易し。鈍人、能く作すが故に、言つて鈍と爲す。七十七智は因を觀じ果を生ず。觀を爲すこと熟し難し。利人は方に堪ふるが故に、說いて利と爲す。菩薩は此因緣法の中に於て、觀門無邊なり。廣くは『地經』の如し。共に辨ずべからず。因緣の義は、厥趣塵爾り。

【一七】義聚第二十五段に十八空の義を明すに三門の別あり。一には相を辨ず。先づ名字に就いて。

【大品經】論第三十一、月藏經第八

【大品】智論第七十問相品。

【大品】釋摩訶衍品智論第四十六。

十八空の義に三門の分別あり。相を辨ず一。修人の次第二。異同三。

（一七）第一に、相を辨ず。十八空の義は『大品經』に出づ。法性虚寂なり。故に名けて空と爲す。此空は乃ち是れ法界門の中の一門の義なり。門別にして異なりと雖も、妙旨虚融の義在らざること無し。在らざる無きが故に、法として空に非ざる無し。是を以て經の中に、或は色空と說き、乃至一切法空と宣說す。良に以れば、諸法は空ならざる無し。故に詮に隨つて異を辨ず。廣略定め難し。是を以て經の中に、或は一二乃至衆多と說く。言ふ所の一とは、詮を廢して空を論ず。空は一味の如し。一味の空は妙に衆相を絕す。故に名けて一と爲す。故に『大品』の中には、說いて獨空と爲す。獨とは、猶是れ不二の謂なり。經の中に、或は復空を說いて二と爲す。謂ゆる、生空と及與び法空となり。或は說いて三と爲す。謂はく、空と無相と及與び無作となり。問うて曰はく、『空門をば名けて空と爲すべし。無相無作を、云何が空と名く。』龍樹釋して言はく、『此三種の體は一なり。行に隨つて異を分つ。行とは、空を觀じ、相として取るべきもの無し。是時空門を轉無相と名く。無相を觀ずる中に、作起得叵し。是時無相を轉無作と名く。名變改すと雖も、其體殊らず。是故に此三は俱に皆是れ空なり。』一の智慧の如きは、或は念處と名け、或は正道と名け、或は覺支と名け、或は名けて力と爲し、或は無畏と名け、或は無礙と名く。此も亦是の如し。經の中に、或は復空を說いて四と爲す。『大品』に說くが如く、一には法相空、二には無法空、三には自法空、四には他法空なり。此義前の四空の章の中に、具に廣く分別する

【大品】論三十六
【論】第三十六。
【地經】第八。
【地論】第八。
【涅槃】北本第十六。
【大品】智論六十三。
【論】智論六十三
【大品】智論第八十一。

が如し。或は說いて五と爲す。謂はく、五陰空なり。或は分つて六と爲す。謂ゆる、五陰及び衆生空なり。又『大品』習應品の中の如く、空を說いて七と爲す。謂ゆる、性空、相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空なり。此七は猶是れ十八空の中の、後の七なり。何の義を以ての故に、偏に此七を說く。論に自ら釋して言はく、「廣くは、十八有り。略して七空と爲す」と。其れ猶道品のごとし。廣くすれば則ち具に三十七品有り。略すれば唯七覺なり。此も亦是の如し。此七種を以て多く衆生を利するが故に、偏に之を說く。其體相を論ずるに、十八の中の後の七と相似す。又『地經』に說くが如く、空を十と爲す。謂ゆる、住空、性空、第一義空、第一空、大空、合空、起空、如實不分別空、不捨空、離空、不離空なり。此れ『地論』に具に廣く分別するが如し。又六地に十平等を說く。亦是れ十空なり。『涅槃』の中の如きは、十一空を說く。此十一は前章の中に、具に廣く解釋するが如し。又『大品』嘆淨品の中の如く、十三空を說く。謂ゆる、內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、相空なり。然るに猶是れ十八空の中の初の十三空なり。若し更に解釋すれば、彼に異らず。問うて曰はく、『何が故に、十八空の中に、偏に此等を說いて餘の五を論ぜざる。』論に自ら釋して言はく、『此十三空は法を破して周く盡すが故に、偏に之を說く。餘は五空有り。總相に空を說く。更に別法無し。是故に論ぜざるなり。』又『大品』六度相攝品の中の如く、十四空を說く。前の十三空の上に、更に一種の一切法空を加ふ。卽ち是れ十四なり。此一切空に十八の中の

【論】 智論八十一

【然るに等】 次に相狀を辨ず。

【論】 智論三十一

【涅槃】 第二十三

【論】 智論三十一

後の五空を攝して、通じて一切と名く。問うて曰はく、『何が故に、此十四を說いて十八を說かざる』論に自ら釋して言はく、『十四空の中の一切法空は法を攝して周く盡す。設ひ餘空有るとも、皆其中に入る。是故に但此十四を說く。』經の中に、或は復但十八を說く。謂ゆる、內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空なり。名字是の如し。然るに此十八は、詮に隨つての差別なり。是れ觀入の淺深次第に非ず。內空と言ふは、論に釋して言ふが如し。「眼等の六入は之を名けて內と爲す」と。是內法の中に、我我所無く、及び眼等無きが故に、名けて空と爲す。外空と言ふは、論に釋して言ふが如し。「色等の六入は之を名けて外と爲す」と。是外法の中に、我我所無く、及び色等無きが故に、名けて空と爲す。內外空とは、總じて向前の十二入の法を觀じ、我我所無く、及び彼法無きを、內外空と名く。又內外等は『念處』に說くが如し。何が故に、前は別にして後は總なる。此義前の十一空に、具に廣く分別するが如し。空空と言ふは、論に釋して言ふが如し。「空を以て空を破するが故に、空空と言ふ」と。何等の空をか破する。論に辨ずるが如きに依らば、前の三空を破するが故に、空空と說く。『涅槃』の如くならず。有無雙び遣るを空空と爲すなり。又釋す、餘の十七空を破するが故に、名けて空空と爲すと。有相の法は須らく空すべし。破空は是れ理法なり。何ぞ須らく破すべきや。論に自ら釋して言はく、「人の服藥の如きは諸病を破せんが爲なり。是病破し已れば、藥も亦應に出づべし。若し藥去ら

【論】智論三十一

【論】智論三十一

【論】智論三十一

ざれば、藥も復是れ患なり。行者も是の如し。先づ空義を以て煩惱を對治す。若し復空に著せば、空も復是れ患なり」と。故に須らく之を破すべし。大空と言ふは、論に釋して言ふが如し。聲聞法の中に、法空を宣說して以て大空と爲す。摩訶衍の中には、十方空を說いて以て大空と爲す。十方界の廣多無邊なるを破す、之を名けて大と爲す。彼大方を破するが故に、大空と名く。問うて曰はく、「外道は有方を宣說するも、佛法は爾らず。今此れ云何が十方有りと說き、破して以て空と爲すや。」龍樹釋して言はく、「聲聞法の中には三千界の外に、更に十方無邊の世界有りと宣說せずと雖も、大乘法の中には世諦に隨順して、三千界の外に、更に十方無邊の世界有り、眞諦に就いて、破して以て空と爲す。」何者か是なる。謂はく、四大和合の中に因つて、彼此を分別するが故に、有方と說く。第一義の中には、四大本無し。何に依てか方を說かん。是故に空と名く。問うて曰はく、「若し第一義の中に、彼法無からしむるが故に、大空と名けば、第一義空を、應に大空と名くべし。」論に自ら釋して言はく、「第一義諦は、理實に是れ大なり。初に名を得るが故に、餘は大と名けず」と。問うて曰はく、「何が故に大空、諸方を破すと宣說するや。」論に言はく、「大邪見を破せんが爲の故に。諸の外道の如くんば、定んで方有り、實にして空ならずと計す。故に須らく空を說いて、彼定見を破すべし」と。「又彼有無の邊見を除かんが爲の故に、方空と說く。慈を修する者の如くんば、十方界を緣じて慈心を修す。彼は十方に於て、若は有盡と謂はば有邊の見に墮し、若は無盡と謂はば無邊の見に墮す。是二見を以て即ち慈心を失

【涅槃經】第十六
【十地經】第八。

す。故に方空と說く。彼二見を除いて、慈をして壞せざらしむるなり。問うて曰はく、『何が故に、『涅槃經』の中に、波若の空を說いて以て大空と爲し、『十地經』の中には、眞識の空を說いて以て大空と爲し、彼『大品』の中には、十方の空を說いて以て大空と爲すや。』釋して言はく、『涅槃』は、十一空の中に、相と實と俱に論ず。彼前の十空は是れ其相空、後の一大空は是れ其眞空なり。眞智の體の中に、備に法界を含む。法界は皆如なり。故に大空と名く。『十地經』も亦爾り。初に生空、法空、第一義空を說く。是れ其相空なり。梨耶識空は是れ其眞空なり。梨耶識の中に、法界を統含す。法界は皆如なり。故に名けて大と爲す。彼『大品』の中の十八空とは、並に是れ相空にして、是れ眞空に非ず。眞に非ざるを以ての故に、實に就いて、說いて大空と爲すことを得ず。但大方を破するを、名けて大空と爲す。良に以れば、十八は眞空に非ざるが故に。龍樹說いて、小智慧門と爲す。波若は寂滅にして、是れ眞空なるが故に、龍樹說いて、大智慧門と爲す。大智門とは、卽ち是れ『涅槃』所說の大空なり。十八空破相の理を以ての故に、名けて小と爲す。眞は、波若を照して實を契し、相を離するが故に、大と名くるなり。云何が名けて第一義空と爲す。論に釋して言ふが如し。「諸法實相は、是れ第一義なり」と。實相も亦空なれば、第一義空と名く。何者か實相なる。諸法の實は、謂ゆる、空理なり。空は、是れ一切諸法の實なり。實の寂滅なるが故に、實相と名く。實相は、既に是れ諸法の實なり。云何が空ずべき。論に自ら釋して言はく、「實は著すべからざるが故に、說いて空と爲す」と。諸法を說いて、實

【論】智論三十一

【論】智論三十一

相と爲すを以ての故に、諸法の外に、別に實相の自性として得べきもの無し。故に空と曰ふのみ。又涅槃を說いて、第一義と爲す。是涅槃空を第一義空と名く。有爲空とは、陰、界、諸入、十二緣等は、因緣集起なるが故に、有爲と曰ふ。言ふ所の空とは、論の釋に二有り。一には、有爲の中には我我所無く、及び常相を離るるが故に、名けて空と爲し、二には、有爲因緣の法相は、不可得なるが故に、之を名けて、空と爲す。初門の中に就いて我我所を離るるは、生空の所攝なり。常相を離るるとは、亦是れ生空、亦是れ法空なり。故に論に釋して言はく、「若は我は常と說き、是常を空ずる者は、則ち生空に入る。若は陰は常と說き、是常を空ずる者は則ち法空に入る」と。第二門の中には、因緣の相無し。一向に是れ共法空の所收なり。『涅槃』の彼有爲に就いて、唯生空を明すに同じからず。無爲空とは、法の實相を得て、生住滅を離れ、涅槃を契證するを、無爲法と名く。實相法の中にも亦無爲の自相の得べきこと無きを無爲空と名く。問うて曰はく、『若し無爲空を說く者と、邪見の人の涅槃無きを謗ずるとは、何の差別か有る。』論に自ら釋して言はく、「彼邪見の人は涅槃を信ぜず。然る後に心を生じて涅槃無きを謗ず。無爲空とは、唯涅槃の相を定取するを破するが故に、名けて空と爲す。邪見と同じからず」と。然るに此空とは法の體相を破す。涅槃の十一空の中に、無爲法に就いて、我人無きを說いて空と爲すことを明すに同じからず。畢竟空とは、論に釋して言ふが如し、「有爲空及び無爲空を以て破す。畢竟じて遺餘有ること無きを、畢竟空と名く」と。譬へば羅漢の永く諸漏を盡すを、畢竟淨と

【論】智論三十一

【論】智論三十一

【論】智論三十一

名くるが如し。此空も亦爾り。無始空とは、法の起る今に非ざるを、名けて無始と爲す。無始の法空なるを、無始空と名く。何が故に、有始空を說かざるや。論に自ら釋して言はく、「有始は大惑なり。有始を說くが故に、最初の身は則ち無因緣なり。是故に菩薩は先づ是過を捨して、法の無始を觀ず」と。無始を觀ずる時、有始已に捨す。是故に須らく有始空を說くべからず。但所觀の無始法の中に於て、取相未だ捨せざるが故に、今は無始の法空を宣說するなり。散空と言ふは、論に釋して言ふが如し。「散は別離と名く。五陰和合して人と爲すが如似し。若し五陰を分ち離張破散すれば、人不可得なり」と。故に名けて空と爲す。是の如きの一切なり。性空と言ふは、論に釋して言ふが如し。「一切の諸法の性は自ら空なるが故に、名けて性空と爲す。世間の水體に熱性無く、大熱を假りて暫時熱と爲ると雖も、停らば還冷かなるが如し。諸法は必ず是れ假に衆緣和合して有に似ると雖も、若し衆緣を離るれば、性不可得なり」と。故に知んぬ、諸法の體相は是れ空なり。問うて曰はく、「前に畢竟空と說くは、卽ち是れ性空なり。今此に何が故に、重ねて性空を說くや。」論に自ら釋して言はく、「今性空とは、諸法の性を破す。彼水中に其熱性無けれども、水相無きにあらざるが如し。畢竟空とは、諸法の相を破し、乃至因緣法の相も亦無なり。又性空は、菩薩の所行、畢竟空は、是れ佛の所行なり」と。自相空とは、諸相に二有り。一には同相、亦總相と名く。二には別相、亦異相と名く。苦無常等は是れ共同相、色香味等は是れ共別相なり。此二は皆空なれば、自相空と名く。性と相と何の別あつて二空を分

【註】 智論三十一

【明釋】 ヒーナ（Hīna）小と譯す、小髮のこと。

【論】 智論三十一

つや。論に言はく、「別無し。但名の異なるのみ」と。又性は體に據り、相は是れ外狀なり。比丘の如似し。禁戒を受持するは、是れ比丘の性なり。剃髮染衣は、是れ比丘の相なり。又梵志の如く、自ら己法を受し、之を以て性と爲す。頂に周羅有り、三岐杖を執り、之を以て相と爲す。亦火大の如し。熱を以て性と爲し、赤色を相と爲す。是の如きの一切なり。性相別なるが故に、分つて二空と爲す。問うて曰はく、『直に相空を說かば便ち足る。何ぞ自相空を宣說することを須ひんや。』「諸法の自體相空なりと明さんが爲の故に、自と說くのみ。』「諸法空とは、陰界入等を名けて諸法と爲す。是諸法の中の相は別なり。一切皆空なるを諸法空と名く。問うて曰はく、『若し諸法空を說くは、是義然らず。一切の諸法は各自相有り。云何が空と言ふや。』答へて曰はく、『諸法の自相不定なるが故に、說いて空と爲す。不可得空とは、生死涅槃なり。一切の諸法の性相は寂滅にして、求むるに不可得なり。故に名けて空と爲す。中に於て三有り。一には彼陰界入の中に於て、我を求むるに得叵し。之を名けて空と爲す。二には彼諸の因緣の中に於て、法の自性を求むるに不可得なるが故に、之を名けて空と爲す。五指の中に拳を求むるも得叵きが如し。三には法の因緣を求むるに、亦不可得なり。之を名けて空と爲す。問うて曰はく、『小智の爲の故に、法を求めて得ざるや。實無の爲の故に、法を求めて得ざるや。』論に自ら釋して言はく、「法は實に無なるが故に、求むるに不可得なり」と。然るに此空は、畢竟空及び自相空と、何の差別有つてか、復之を說くや。論に言はく、「有人上の空を說くを聞き、心に怖畏を生ず。是故

【論】智論三十一

【論】智論三十一

【八】第二に十八空を般若空に對して其異同を辨ず。

【論】智論三十一

に今說く、因緣の中に求むるに、不可得なるが故に、說いて空と爲す」と。無法空とは、論に釋して言ふが如し。「諸法滅し已るを、名けて無法と爲す。是れ自性無く、亦不可得なるが故に、名けて空と爲す」と。有法空とは、諸法但因緣に從つて有なり。有は即ち有に非ざるが故に、名けて空と爲す。無法有法空とは、有人、有無の二法を執取して、求むるに不可得なるが故に、無法有法空を說くなり。此前の二空は別して有無を破す。今は此れ總じて破す。又前の二空は所取の法を破す。今は此れ能取の情を破す。又論に釋するが如く有法空は法の生住を破し、無法空は法滅の時を破す。今此無法有法空とは、前後通じて破す。又論に釋するが如く、現在の法及び無爲法を觀じ、一切皆空なるを有法空と名け、過去未來の法空を觀ずるを無法空と名け、現無なるを以ての故に、三世の法及び無爲法を觀じ、一切皆空なるを、名けて無法有法空と爲すなり。若し廣く分別せば、數別無量なり。

〔八〕第二門の中に、十八空を以て波若空に對し、其同異を辨ず。論に自ら問うて言はく、「波若の空と十八空とは、同と爲すや、異と爲すや。若し異と言はば、十八空を離れて、更に復何を用てか波若空と爲す。若し同と言はば、云何が說いて、菩薩の十八空に住せんと欲する者は、當に波若を學すべしと言ふや」と。論に自ら釋して言はく、「亦同、亦異なり。言ふ所の異とは、波若の空は法の實相を見、一切の法の差別の相を滅す。十八種の觀は諸法の相を破し、諸法をして空ならしむるが故に、名けて異と爲す。此異を以ての故に、十八に住せんと欲せば、當に波若を學すべし」と。言ふ所の同とは、論に自ら釋して言はく、

【一九】次に其修入の次第を明す。
【二〇】智論三十一

「十八は是れ空にして、所有の相無し。波若も亦空にして所有の相無し。十八空の中、相を離れて著せず。波若も亦爾り。故に稱して同と爲す。其同を以ての故に、波若を修學すれば、則ち十八空を修學すと爲すなり」と。

（一九）第三に、其修入の次第を明す。論の中の如きに依らば、所修に二有り。一には小智慧門、謂はく、十八空なり。二には大智慧門、謂はく、波若空なり。彼十八空は破相の空なり。詮に隨つて局つて、別に之を名けて小と爲す。彼波若空は實を契して相を離る。之を名けて大と爲す。又緣觀の心、十八空を緣ずる、之を名けて小と爲す。滅觀の波若、諸法空を照す、之を名けて大と爲す。此二の中に於て、先づ小門を學し、後に大門を學す。所學の小門は、即ち涅槃の中の前の十空なり。所入の大門は、即ち涅槃の中の後の一大空なり。又小門を學するは、即ち是れ世間の因分の行德なり。證入の大門は、即ち是れ出世の果分の行德なり。若し通じて教を詮すれば、則ち三種有り。一には小智慧門、謂はく、『波若經』なり。二には中智慧門、謂はく、十八空なり。三には大智慧門、謂はく、波若空なり。此三の中に於て、先には小門を學し、次には中門を學し、後には大門に入る。云何が小を學す。『波若經』に依つて受持讀誦し、正念思惟し、說の如く修行す。云何が中を學す。前に小慧門を修習するに依るが故に、十八空を得。大海に入つて便ち寶物を得るが如し。云何が大を學す。前に十八空觀を修習し、相を破する力に依るが故に、便ち甚深波若眞空に入る。此空を得るが故に、心相寂滅すること猶し虛空の如し。畢竟平等にして、緣無く

【三】以下、義樂第二十六段に二十二根義を明す中、七門の分別あり、先づ釋名辨體、一に釋名。

【地持論】第三十

取無し。十八空の義之を略して爾云ふ。

二十二根の義に七門分別あり。名を釋し體を辨ず一。相を分つ二。治斷の差別三。得果の不同四。人に就いての分別五。得捨の成就六。因起の次第七。第一に、名を釋し、其體性を辨ず。能生を根と曰ふ。根の義不同にして、廣略定め難し。今は一門に據つて二十二を說く。名字是れ何ん。謂ゆる、眼、耳、鼻、舌、身、意を即ち以て六と爲し、男根、女根、及び命根を以て、前に通じて九と說く。苦、樂、憂、喜、捨を、前に通ずれば十四なり。信、進、念、定、慧を、前に通ずれば十九なり。未知根、知根及び無知根を前に通じて、合して二十二有るなり。初に六根とは、色に對して眼と名け、乃至第六に、法に對して意と名く。此六種は能く六識を生ず。故に名けて根と爲す。男女根とは、剛決を男と爲し、柔弱を女と爲す。身形の小分能く男女を別つ。其所別に從つて男女根と名く。根體は即ち是れ身根の小分なり。所生の識は、即ち是れ身識の少分なり。命根と言ふは、若し『成實』に依らば、現在時の中に色心相續する、之を名けて命と爲す。過去の業能く命を生ず。命を根と作すが與の故に、命根と曰ふ。若し『毘曇』に依らば、別に非色非心の命報有り。此命報能く色心を持す。相續して斷ぜざるが故に、名けて根と爲す。『地持論』の中も亦此說に同じ。故に彼文に言はく、「生理は壞せず。是れ其命根の增上果なり」と。苦根と言ふは、五識地の中、逼惱を苦と名く。能く瞋結を生ずるが故に、名けて根と爲す。樂根と言ふは、五識地の中の適悅を樂と名く。能く貪結を生ず

【成實】第十一。

るが故に、名けて根と爲す。憂根と言ふは、意識地の中の逼惱を憂と名く。憂能く瞋を生ずるが故に、名けて根と爲す。喜根と言ふは、意識地の中の慶悅を喜と名く。能く貪結を生ずるが故に、名けて根と爲す。捨根と言ふは、六識地の中の中容受心、前の四受を捨するが故に、名けて捨と爲す。能く癡結を生ず。之を目けて根と爲す。若し淨中に在らば、喜、樂及び捨は能く淨法を生ず。故に名けて根と爲す。信根と言ふは、境に於て決定す。之を名けて信と爲す。信能く道を生ずるが故に、信根と名く。精進根とは、心を法に練る。之を名けて精と爲す。精心上達する、之を目けて進と爲す。根は前の釋に同じ。念根と言ふは、境を守るを念と名く。根は前の釋に同じ。定根と言ふは、緣に住して亂れざる、之を名けて定と爲す。根は前の釋に同じ。慧根と言ふは、法に於て觀達す、之を目けて慧と爲す。根は前の釋に同じ。問うて曰はく、『善法の差別無量なり。何の義を以ての故に、偏に此五を說き、之を以て根と爲すや。』釋して言はく、『此五遍く諸善を生ず。其の力功強きが故に、偏に之を說く。』又是五種は大煩惱地の對治の故に、偏に說いて根と爲す。此義は後の道品の中に釋するが如し。未知根とは、『毘曇』の名なり。『成實』には、名けて未知欲知と爲す。此れ見道の中の無漏の慧なり。『毘曇』は何が故に、說いて未智と爲すや。釋に三義有り。一義の釋に云はく、見道十五心の中に在つては、解脫の智は知諦未だ遍せざるが故に、未知と名く。道比智は上界道を知ること無きが故に、未と云ふなり。第二義は見道十五心の中に在つては、未だ曾て知重知諦の理有らざるが故に、未知と名く。問うて

【註】毘曇。

曰はく、「若し未重知と言ふが故に、未知と名くれば、彼見道の中の一一の諦下に皆忍智有り。忍を初知と爲し、智を後知と爲す。云何が不重なる。「論に自ら釋して言はく、「忍は非智なるが故に、所以に過無し」と。「何が故に非智なる。「忍は觀諦なりと雖も、疑の與に倶に決了すること能はざるを得。是故に非知なり。故に論に說いて言はく、「諸忍は非智なり」と。良に以れば諸忍は是れ非智なるが故に、重知と名けず。問うて曰はく、『若し忍をして非智ならしめば、亦應に非見なるべし。「釋して言はく、『類見せざれば、是れ其推求の義なり。忍は心推求の故に、見と名くることを得。「智は是れ其決斷の義なり。忍は不決斷の故に、智と名けず。第三の義は、智を忍心に望めて重知と名くることを得。重知は未だ遍せざるが故に、未知と名く。上界の道諦は未だ重知せざるが故に。『毘曇』是の如し。彼「成實」の中には、名けて未知欲知根と爲すは、見道の位の中、未だ解脫智の知を豫すべきこと有らざるが故に、未知と名く。解脫道を簡去せんと欲するが爲の故に、說いて未と爲すなり。解脫道は修道の攝なるを以ての故に。欲知と言ふは、解脫中知の不遙を去るが故に、欲知と名く。此言は即ち是れ簡前の謂なり。見道已前は解脫中の知の玄隔を去れば、欲と名くることを得ず。今は彼を簡する爲の故に、欲と說くのみ。此見道の中の無漏の聖慧能く後を生ずるが故に、名けて根と爲す。知根と言ふは、是れ修道の中の無漏の慧なり。「毘曇」に准依すれば、釋に三義有り。第一の義は、修道門の中に解脫智を用て、知諦周遍するが故に、名けて知と爲す。第二の義は、修道門の中に彼諦理に於て、智重知有

るが故に、名けて知と爲す。第三の義は、彼見道の中の智を諸忍に望めて、名けて重と爲すことを得。重知未だ遍せざるが故に未知と名く。今修道の中の道比智は重知を起し、周遍するが故に、名けて知と爲す。若し『成實』に依らば、釋に兩義有り。一義の釋に云はく、「修道門の中に解脫智有りて、諦理を知るが故に、名けて知と爲す」と。此一義は、名けて當に初果とすべし。第二の義は、修道の智を以て、重ねて諦理を觀ずるが故に、名けて知と爲す。此一義は、名けて當に斯陀、那含果とすべきなり。此れ能く後を生ずるが故に、名けて根と爲す。無知根とは、『成實』に說いて已知根と爲すなり。若し『毘曇』に依らば、無學果の中に諦を觀じ已竟つて、更に知を求めざるが故に、無知と曰ふ。若し『成實』に依らば、先に已に知り竟んぬ。故に已知と曰ふ。無學果の慧能く後の善を生じ、同類相起るが故に、名けて根と爲す。問うて曰はく、『信進念定慧根及び三無漏所生の善法は、五果の中に於て、是れ何の果なるや。』『地持』には、是れ增上果なりと宣說す。二十二根を共所生に望めて、皆悉く名けて增上緣と爲すが故に。」此れ何の善に望めて、說いて增上と爲すや。謂はく、下善に望む。若し同類及與び上善に望めて能く生ずれば、名けて自分因と爲す。故に因緣の所收なり。所生の善法を、名けて依果と爲す。何者か是れ其三無漏の根所生の下善なる。謂はく、學の等見、無學の等見なり。聖人の順舊遊觀無漏之等見と名くるなり。問うて曰はく、『經に貪瞋癡等を說いて不善根と爲し、貪瞋等無きを三善根と爲す。二十二の中には、何が故に說かざるや。』釋して言はく、『略の故に、所以に論せず。更に餘

【轉狀は等】次に轉狀を明す。

【成實】第四。

【成實】第五。

義無し。六通の中に法智通、聖自在通無きが如し、此れ亦是の如し。名義は且く爾り。體狀は云何。初に眼根とは、『毘曇』の如きに依らば、彼四大造色を以て體と爲す。體は四大に異る。若し『成實』に依らば、大を攬つて眼を成ず。眼は卽ち四大なり。大を離れて之外に別に造色無し。以て眼の體と爲す。耳鼻舌身類して亦同じく爾り。意根の體は、『毘曇』の如きに依らば、心王を體と爲す。想受行等は皆意根に非ず。法入に收むるが故に。若し『成實』に依らば、別に心數無し。識、想、受、行は能く後を生ず。義は皆是れ意根なり。然るに『成實』の中、行末の心五識を生ずとは、意根と名けず。其所生は意識に非ざるを以ての故に、斯より以外の一切の心識は、悉く是れ意根なり。若し『毘曇』に依らば、一切の六識は迭互ひに相生ず。皆是れ意根なり。男女の二根と身根とは同じ。身根の少分を、此を二と爲すが故に。良に以れば此二は旣に心識を變ず。其力功強にして、別して人相顯なるが故に、身中に就いて此二を分出す。命根の體は、『毘曇』の如きに依らば、現在世の中に、別に非色非心の命法有り。命根の體と爲す。若し『成實』に依らば、過去世の中の善惡の業を命根の體と爲す。五受根とは、『毘曇』の如きに依らば、心數法の中の受數を體と爲す。若し『成實』に依らば、受心を體と爲す。更に別數無し。信等の五根論の說不同なり。若し『毘曇』に依らば、善大地の中の信數を信根の體と爲し、精進數を精進根の體と爲す。通大地の中には、念數を念根の體と爲し、定數を定根の體と爲し、慧數を慧根の體と爲す。若し『成實』に依らば、彼信心を用て信根の體と爲し、乃至慧心を慧心慧根の體と爲

【三二】次第二に共相を分別す。中に六、一に漏無漏の分別す。

【彼論】第八。

【次に等】二に三性に就いて分別す

し、別の數法無し。後の三根は、若し『毘曇』に依らば、是れ智慧の性なり。其の屬を論ずれば、是れ五陰の性なり。同時の心王を即ち識陰と爲し、同時の受數を即ち受陰と爲し、同時の想數を即ち想陰と爲し、自餘の數法を以て行陰と爲し、道共無作を即ち色陰と爲す。若し『成實』に依らば、慧心を體と爲し、更に餘法無し。體性是の如し。

（三二）第二門の中に、共相を分別す。中に於て六有り。一には漏無漏の分別、二には三性の分別、三には三乘の分別、四には三界の分別、五には因に據る分別、六には果に就いての分別なり。漏無漏とは、男女の二根、憂根、苦根は一向に有漏なり。三無漏根は一向に無漏なり。信等の五根及以び意根は通じて漏無漏なり。三無漏と相應する者を、名けて無漏と爲し、餘は有漏と名く。眼等の五根と及與び命根とは大小不同なり。小乘法の中には一向有漏にして、大乘は不定なり。法身の眼等は法身の命、是れ其無漏なり。餘は皆有漏なり。喜樂及び捨は諸論に不同なり。『毘曇』、大乘は信等と同じく漏無漏に通ず。成實法の中には、喜は唯有漏なり。何が故に是の如くなる。彼論に釋して言はく、「喜とは假名を取るに從つて生じ、我に著するが故に起る。故に唯有漏なり」と。樂、捨の二受は漏無漏に通じ、分別に從はず。生に取著するが故に。有漏の業果なれば、名けて有漏と爲し、無漏法に就いて之を義說すれば、名けて無漏と爲す。此義彼八禪義の中に、具に廣く分別するが如し。此一門竟る。次に、三性に就いて分別す。諸根の性は、謂ゆる、善惡無記なり。信等の五根、三無漏根は、一向に是れ善なり。男根、女根は一向に無記なり。意根の一種は、該て三性

【次に等】三に三聚に就いて諸根を分別す。

に通ず。眼等の五根は大小不同なり。小乘法の中には一向に無記にして、大乘には不定なり。法身の眼等は體性是れ善にして、餘は皆無記なり。命根の一種は、論の說不同なり。若し『毘曇』に依らば、命は是れ報法にして、一向に無記なり。若し『成實』に依らば、過去の業を說いて以て命根と爲す。唯善と惡とは無記に通ぜず。人天の命根は、是れ善にして、惡に非ず。三塗の命根は是れ惡にして、善に非ず。大乘には不定なり。法身の命の體性は是れ善にして、餘は皆無記なり。五受根とは、毘曇法の中には憂にして善惡に通じ、無記に通ぜず。論に自ら釋して言はく、「方便生の故に、報無記に非ず、習學法に非ず、是れ威儀、工巧、變化に非ず。餘は三性に通ず」と。成實法の中には、說く所は不定なり。受陰の中の一切の五受は、悉く是れ無記なり。行中の義の說は、該て三性に通ず。大乘法の中には、文に定判無し。義に隨つて以て推すに、五受の根並に三性に通ず。世事を憂慮するは損益に非ずとは是れ無記憂なり。餘は『毘曇』に同じ。此二門竟る。次に、三聚に就いて諸根を分別す。三聚と言ふは、謂ゆる、色、心、非色非心なり。眼等の五根と男女の二根と、此七は是れ色なり。意根と五受と信等の五根と、及び三無漏と、此十四は、是れ其心法なり。命根の一種は、諸論に不同なり。若し『毘曇』に依らば、是れ其非色非心の法なり。成實法の中には、是色是心及び非色心なり。彼には過業を說いて、以て命根と爲す。中に於て、通じて身口意の業を具す。三業の中に就いて、作無作に通ず。身口の作業は、之を說いて色と爲し、意地の作業は說いて以て心と爲す。三業の無作は是れ非色心なり。此三門竟る。

【次に等】四に三界に就いて分別す

【涅槃】第二。

【次に等】五に因の義に就いて分別す。

次に、三界に就いて諸根を分別す。界とは、謂ゆる、欲、色、無色なり。中に於て兩門あり。一には三界非三界の別に分ち、二には三界に就いて其通局を辨ず。言ふ所の三界非三界とは、二十二根の中の男根、女根、憂根、苦根は定んで三界の法なり。三無漏根は定んで非三界なり。信等の五根と、意樂捨の根との此八種と、三無漏と相應の者は、三界に屬せず。餘は皆三界なり。眼等の五根と、及與び命根とは大小不同なり。小乘法の中には定んで三界に屬し、大乘には不定なり。法身の眼等は、法身の命にして三界に屬せず。餘は皆三界なり。喜根は不定なり。成實法の中には、定んで三界に屬す。『毘曇』、大乘には、是有り、非有り。無漏相應は三界に屬せず。餘は皆三界なり。次に一向に三界に在るに就いて、其通局を辨ず。男根、女根は定んで欲界に屬し、憂根、苦根は、毘曇法の中には、定んで欲界に在り。『成實』、大乘には、麁は欲界に在り。其細を論ずれば、苦は四禪を極め、憂は非想に至る。故に經に說いて言はく、「苦樂は身に隨つて四禪に至り、憂喜は心に隨つて有頂に至るなり」と。喜根、樂根は、毘曇法の中には、欲色界に在り。『成實』、大乘は、麁には『毘曇』に同じ。其細を論ずれば、樂は欲、色に在り、喜は非想に至る。眼等の五根は、小乘法の中には、欲色界に在り。大乘法の中には、麁は小乘に同じく、細は三界に通ず。故に『涅槃』に云はく、「非想天の如き、亦色非色なり」と。彼に色有るが故に、亦眼等有り。意、命、捨の根と信等の五根とは、遍く三界に通ず。此四門竟る。次に、因の義に就いて諸根を分別す。眼等の五根と男女の二根は、是れ報法なり。故に一向に因に非ず。

【成實】第二。
【次に等】六に果報に就いて分別す。
【彼論】第六辨三受品。
【三】以下、第三に其治斷の差別を

命根の一種は、論說不同なり。若し『毘曇』に依らば、眼等と同じく、一向に因に非ず。若し『成實』に依らば、過去の業を說いて命根と爲す。故に一向に是れ因なり。三無漏根は大小不同なり。小乘法の中には、一向に因に非ず。生死を破すが故に。大乘法の中には、因非因有り。緣照の無漏の能く變易を招くは、一向に是れ因なり。眞證の無漏は生死を招かず。說いて非因と爲す。信等の五根は、是れ有漏なるは、一向に是れ因なり。是れ無漏なるは、三無漏に同じ。意根の一種は因と相應するを、之を說いて因と爲す。非因と相應するを、說いて非因と爲す。五受根とは、論說不同なり。若し『成實』に依らば、受陰の中の者は一向に非因なり。行の中を義說するに因非因有り。若し『毘曇』に依らば、諸の煩惱結業と俱なる者は、一向に是れ因にして、餘は皆非因なり。（此五門竟る。）次に、果報に就いて諸根を分別す。眼等の五根と男女の二根は、一向に是れ報なり。信等の五根及び三無漏根は、一向に報に非ず。意根の一種は、報非報に通ず。命根の一種は『毘曇』には是れ報、『成實』の中には非報なり。五受根とは『成實』には是れ報なり。彼論に說くが如し。乃至一切無漏の中の受も亦是れ報なり。若し『毘曇』に依らば、憂根を除却して餘の四種は、報非報に通ず。報心に俱なる者を、之を說いて報と爲し、非報に俱なる者は、名けて非報と爲す。憂根の一種は、一向に非報なり。何が故に是の如くなる。憂根は想分別より生ず。是故に非報なり。又復憂根は、欲を離るる時斷ず。報法は爾らず。是故に非報なり。

（三）第三に、其治斷の差別を明す。義に三種有り。一には見斷、二には修斷、三には無斷な

明す。

り。見道に除くをば、名けて見斷と爲し、修道に除くをば、名けて修斷と爲し、無漏不爲二輪の所除を、名けて無斷と爲す。此三義に約して諸根を分別す。『毘曇』の如きに依らば、眼等の五根と男女の二根と、及び命根と、此八は是れ報なり、唯是れ修斷なり。問うて曰はく、『報法は斷除すべからず。云何が斷と說く。』彼宗の如きに依らば、報體を斷ぜず。但報上の煩惱の繫縛を斷ずるが故に、名けて斷と爲す。問うて曰はく、『何が故に、唯修道斷は見斷に通ぜざる。』釋して曰はく、『因有り。此所起の貪瞋癡等を緣ずるは、皆是れ事惑の緣なり。事の惑は修道に除せらる。是故に此等は唯修道斷なり。』若し『成實』に依らば、此八種の中の命根は是れ業にして、餘の七は是れ報なり。此業と報とは亦見諦斷、亦修道斷なり。斷相は云何。彼『成實』の中には、煩惱を斷ずるが故に、彼業果をして畢竟じて起らざらしむ。之を名けて斷と爲す。見惑を斷ずるが故に、彼三途の業果をして生ぜざらしむるを、名けて見斷と爲す。修惑を斷ずるが故に、彼人天の業果をして起らざらしむるを、名けて修斷と爲す。故に『成實』に言はく、「見斷の法とは、謂はく、示相我慢と及び彼所起の諸餘の法なり。修斷の法とは、謂はく、不示相慢と及び彼所起の諸餘の法なり」と。示相我慢は、是れ諦惑なり。推求して生ずるが故に示相と云ふ。所起の餘法は、是れ共業果なり。不示相慢は、是れ修道の惑なり。推求の生に非ざるを不示相と名く。所起の餘は、是れ共業果なり。問うて曰はく、「『毘曇』は何んが是の如くならざる。」釋して言はく、「宗異れば一類にすべからず。彼『毘曇』の中には、煩惱の因を斷じ、共業果をして畢竟じて起

らざらしむ。是れ非數滅なり。是故に說かず。故に『雜心』に云はく、「見道に入る時、第八は後の一切の果報を生ず。皆非數滅なり」と。大乘法の中には、眼等の五根と及び命根とは、亦見諦斷、亦修道斷、亦是れ無斷なり。法身の眼等は常住の命なり、是れ無斷なり。男女の二根は實に據つて、以て論ぜば、唯見諦斷なり。淨心に入る時、淨法身を得。一切の男女の形を捨離するが故に、相別に隨つて分つ。女根の一種は唯見諦斷なり。故に『地持』に言はく、「菩薩は初阿僧祇の時に於て、已に女身を捨す」と。男根の一種は、見諦斷及び修道斷に通ず。男報は殊勝なり。後に在つて捨するが故に。意根の一種は、亦見諦斷、亦修道斷、亦是れ無斷なり。見惑と倶なるを、名けて見斷と爲し、修惑と倶なるを、名けて修斷と爲し、無漏と倶なるを、名けて無斷と爲す。憂根の一種は、『毘曇』の如きに依らば、亦は見諦斷、亦は修道斷なり。見惑と倶なるを、名けて修斷と爲す。苦根の一種は、毘曇法の中には、唯是れ修斷なり。若し『成實』に依らば、憂苦は是れ報なり。斷除の法は、眼等と同じ。喜樂捨根は、『毘曇』の如きに依らば、亦は見諦斷、亦は修道斷、亦は是れ無斷なり。意根と同じ。若し『成實』に依らば、喜は是れ有漏なり。唯見諦斷及び修道斷のみ無斷に通ぜず。斷除の相は眼等と同じ。樂捨の二受は漏無漏に通じ、有漏の者は亦は見諦斷、亦は修道斷にして、無漏の者は是れ共無斷なり。信等の五根は、『毘曇』の如きに依らば、是れ修道斷、及與び無斷なり。是有漏は說いて修道と爲し、但緣縛を斷じて善體を斷ぜず。是無漏は說いて無斷と爲す。若し『成實』に依らば、是有漏は亦は見諦斷、亦は修道

【二三】第四門に其得果の不同を明す

斷なり。是無漏は、說いて無漏斷と爲す。三無漏根は、小乘法の中には、一向に無斷なり。大乘法の中には、緣照の無漏は亦は見諦斷、亦は修道斷なり。眞證の無漏は一向に無斷なり。治斷是の如し。

（二三）第四に、其得果の不同を明す。得果と言ふは、謂はく、出世の四沙門果を得るなり。「雜心」に說くが如くんば、「九根は初果を得、或は二沙門を獲」と。說くに十一根有り。第四果を究竟す。言ふ所の九根初果を得とは、須陀洹果是れ其初果なり。信等の五根と意根と捨根と未知と知根と、此九根を用て彼初果を得。中に於て、信等は常に相隨逐す。是故に之有り。行は必ず心に依るが故に、意根有り。初果は必ず未來禪に依つて得。未來禪の中、唯捨根有り。更に餘受無し。是故に捨有つて而も餘受無し。未知は無礙、知根、解脫なるが故に九有るなり。實に剋して、同時に唯八根有り。若し因中に在らば、則ち知根無く、若し果中に在らば、未知根無し。因果通じて論ずるが故に、九根初果を得と說くなり。言ふ所の或は二沙門を獲とは、斯陀那含是れ其二果なり。此二果を得るに、或は九根を用てし、或は八根を用てす。多少不定なるが故に、或と言ふなり。何が故に不定なる。斯陀人の中に、其次第超越の異有り。次第は八を用てし、超越は九を用てす。是故に不定なり。云何が、次第なる。有人先に外凡地に在る時、彼欲界九品の惑の中に於て、全く未だ斷除せず。設ひ斷除有るも、未だ六品を盡さず。是人後時に見諦道に入り、第十六道比智に至る時、須陀果を證す。須陀果の上に、更に修道を起す。彼欲界の六品の惑を斷じ盡して斯

陀舍を證するを、名けて次第と爲す。云何が超越なる。有人先に外凡地に在る時、未來禪に依つて欲界の九品の惑の中に、或は六、或は七、乃至八品を斷除し、後見道に入つて第十六道比智に至る時、初果を證せず。超えて斯陀を證するが故に、超越と名く。彼超越の者は、上の九根を用て第二果を得。初果と同じ。彼次第の者は、但八根を用て第二果を得。未知根を除く。此次第の者、若し無漏を用て結を斷ずれば、果を證す。用ふる所の八根は、同じく是れ無漏なり。皆是れ向の體、亦是れ果體なり。若し等智を用て結を斷ずれば、果を證す。信等の五根と意根と捨根と、此七種は、漏無漏に通ず。現行の者は一向に有漏なり。治修の中に同じ。所成就の者は一向に無漏なり。云何が同なる。彼欲界の結を治す。未來禪の中に、世俗の淨智も亦能く斷治し、無漏の法智も亦能く斷除す。同く除くを以ての故に、無漏を修する時も亦等智を成じ、有漏を修する時も亦無漏を成ず。同治是の如し。彼有漏の者は是れ向體に非ず。亦果體に非ず。彼無漏の者は是れ向體にして、亦是れ果體なり。第八知根は一向に無漏なり。但成就すべくして、而も現行せず。然るに此知根は無漏を以ての故に、亦是れ向體、亦是れ果體なり。斯陀是の如し。那含人の中にも亦次第超越の異有り。次第は八を用てし、超越は九を用てす。故に或と云ふなり。云何が次第なる。次第に二有り。有人先に外凡地に在る時、欲界に於て、結全く未だ斷除せず。設ひ斷除せしむるも、未だ六品を盡さず。是人後時に見諦道に入り、第十六道比智に至る時、須陀洹を證す。須陀果の上に、更に修道を起し、六品を斷じ盡して斯陀舍を證す。斯陀果の上に、

更に修道を起し、後の三品を斷じて那含果を證す。此れ一の次第なり。或は復、有人先に外凡に在つて、世俗の智を用て欲界の九品の惑の中の或は六、或は七、乃至八品を斷除す。是人後時に見諦道に入り、第十六道比智に至る時、斯陀含果を證す。斯陀含果の上に、更に修道を起し、後に餘結を斷じて那含果を證す。此れ二の次第なり。云何が超越なる。有人先に外凡地の中に在つて、初禪乃至非想を修得す。後見道に入り、第十六道比智に至る時、前の二果を越して阿那含を證す。欲界の結を先づ斷盡するを以ての故に、彼超越の者は、上の九根を用て那含果を證す。此九根の中、信等の五根と意根と未知根と、及與び知根とは、一向に是れ定なり。餘の一は不定なり。或は喜、或は樂、或は復是れ捨なり。初二禪に依つて見諦道に入れば、即ち喜根有り。若し三禪に依つて見諦道に入れば、即ち樂根有り。若し四禪に依つて、未來中間に、見諦道に入れば、則ち捨根有り。超越是の如し。次第の人は但八根有り。信等の五根と意根と捨根と、及與び知根となり。此次第の人若し無漏を用て結を斷ずれば、八俱に無漏なり。皆是れ向體、亦是れ果體なり。若し等智を用て結を斷じ果を證すれば、前の七根は漏無漏に通ず。彼現行の者は一向に有漏なり。同治修の中に成就する所の者は、一向に無漏なり。故に彼有漏の者は、是れ向體に非ず、亦果體に非ず。彼無漏の者は、亦是れ向體、亦是れ果體なり。第八知根は一向に無漏なり。無漏を以ての故に、亦是れ向體、亦是れ果體なり。然るに此知根も亦但成就して、而も現行せず。十一根四果を得と言ふは、羅漢果、十一根の得なり。信等の五根と喜と樂と捨と意

と知根と無知根と、此十一根能く究竟の羅漢果を得るなり。中に於て、知根は是れ無礙道、無知根は是れ解脫道なり。問うて曰はく、『諸受は並起することを得ず。云何が喜樂捨根を具することを得る。』釋して言はく、『一往は羅漢を得し者は、三受を具せず。是の如きの人は、但九根を用て第四果を得。喜樂捨の中、何れにか隨つて現起せば餘の二は則ち無し。若し一退を逕し後重ねて得る者は其十根を具す。八根は上の如し。喜樂捨の中に、二有りて無し。一には若し二退を逕て後重ねて得る者は、十一を具することを得。三受の中に於て、前後に之を具す。謂はく、先づ未來中間及び第四禪に依つて、捨根は得果し、後還退失す。復三禪に依つて、樂根は得果し、後還退失す。復初禪二禪に依つて、喜根は羅漢果を得。故に三受有り。問うて曰はく、『羅漢曾て二退を逕、十一を具することを得。彼那含果は、何が故に然らざる。』釋して言はく、『那含を得ざる人の中に、次第の者有り、超越の者有り。彼次第の者は、一向に未來禪定を用て結を斷じ、果を得。未來禪の中に、唯捨根有りて、更に餘受無し。』何が故に是の如くなる。欲界の煩惱は唯未來禪の斷除する所なるが故に。是の如きの人は、設令退して欲界の煩惱を起し、那含果を失すとも、後重ねて得る時、必ず還未來禪の中の捨根に依つて得るが故に、餘受無し。彼超越の者は、或は初禪二禪の喜根に依つて、見諦道に入つて那含果を證し、或は三禪の樂根に依ること有りて、見諦道に入つて那含果を證し、或は復四禪の捨根に依つて、見諦道に入つて那含果を證す。所用に隨へば、終に退理無し。見諦道は唯是れ無漏にして、退すべからざるを以ての故に。

【二四】第五門に人に就いて分別す。

無退を以ての故に、退し已つて重ねて餘根を用ふることを得ず。是故に那含極めて多くして九根なり。羅漢に類せざること良に此に在り。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、三無漏根の體は、唯是れ慧なり。若し斯義に據らば、是れ則ち初果の三根の所得なり。謂はゆる、慧根と未知根と知根となり。未知は無礙にして、知根は解脫なり。其次の二果は三根の所得なり。謂ゆる、慧根と及以知根となり。第四果の三根の所得は、謂ゆる、慧根と知根と知已根となり。知根は無礙にして、知已は解脫なり。若し復義に隨つて、具に以て之を論ずれば、十根を說くことを得、初果には、信等の五根と意と樂と捨根と未知と知根とを得るなり。其次の二果の九根の所得は、未知根を除いて餘は皆上の如し。第四果の十根の所得は、謂はく、信等の五根と意と樂と捨根と知と、及び知已となり。中に於て、知根は是れ無礙道にして、知已は解脫なり。問うて曰はく、『何が故に、義に樂捨を說いて喜を說かざるや。『此れ前の釋の如し。無漏の法已に身中に在れば、義說して樂と爲し、調停を捨と名く。喜取は假生にして、我に著するが故に起る。是故に之無きなり。』

【二四】第五門の中に、人に就いて分別す。外凡の人の中に、極少の者は八根を成就す。謂はく、無色界の所有の凡夫は、命根と意根と捨根と信等の五根とを具有す。又闡提人の阿鼻に生ずる者も亦八根を具す。謂はく、身と意と命と、及び五受根となり。極多の者は十九根を具す。三無漏を除く。內凡夫の人は十八根を具す。三無漏を除く。男女根の中に、一有り、一無し。二形者なるを以て七方便を修起すること能はず。故に見諦道の中に十九根を具す。

【二九】第六に共得捨成就を明す。先づ得を明す。

知根と及び無知根とを除く。男女根の中に、一有り、一無し。二形の人なるを以て聖を得ること無し。故に須陀、斯陀の此二果の人は十九根を具す。未知根と及び無知根とを除く。男女根の中に、一有り一無し。那含の人は十八根を具す。未知根と及び無知根とを除く。男女根の中に、一有り一無し。幷に憂根を除く。彼憂根は唯欲界不善地に局るを以ての故に。羅漢の人も亦十八を具す。未知根と及與び知根とを除く。男女根の中に、一有り、一無し。幷に憂根を除く。人別是の如し。

(二九)第六に、共得捨成就を明す。先に共得を明し、次に共捨を明し、後に成就を明す。言ふ所の得とは、先無今有、之を名けて得と爲す。中に於て、且く報根に就いて以て說く。報は三界に通ず。欲界地の中に、四種の生有り。一には胎、二には卵、三には濕、四には化なり。是四生の中、胎卵濕生は生ずるに必ず漸を以てす。其諸根漸次に成就するを以ての故に。化生は必ず頓なり。其諸根頓に成就するを以ての故に。漸生の者は、最初の一念に頓に二根を得。謂ゆる、身根と及與び命根となり。爾時、亦意根、捨根を得。一切の受生は皆染心に依る。染心は報に非ず。所以に說かず。捨根も亦爾り。報法に非ざるが故に、所以に論ぜず。縱使ひ報に非ずとも、說いて何の傷をか得る。釋して言はく、以有り。染汚の法は先より來常有にして、今始めて得るに非ず。是故に說かず。若し今染と先染とをして、同じく新得に非ざらしむれば、今の所得の報と昔の報と同じ。何が故に得と說くや。釋して言はく、類せざるなり。報法は世斷、剎那斷の故に。今の所得とは、卽ち是れ

【次に等】　二に其捨を辨ず。

新得なり。染汚は爾らず。對治は方に斷じ、未有は未斷なり。所起に隨へば、皆是れ本法なり。新得とは名けず。問うて曰はく、『何が故に、受生の時唯染捨を用ひて餘受を用ひざる。』論に自ら釋して言はく、『受生は命終に唯捨に依るが故に、頓生の者は最初の一念に、或は六根、或は七、或は八を得。若は無形の者は、頓に六根を得。謂はく、眼等の五根と及與び命根となり。化生の者は眼等の五根必ず具足するを以ての故に。若は一形の者は、頓に七根を得。六根は前の如し。男女根の中、一有り、一無し。若は二形の者は、頓に八根を得。六種は上の如し。男女根を加ふ。欲界是の如し。色界生の者は、最初の一念に、最も頓に六根を得。眼等の五根と及與び命根となり。彼處には其男女の形無きが故に。無色生の者は最初の一念に唯命根を得。餘は新得に非ず。彼無色の故に。』此一門竟る。次に、其捨を辨ず。先有今失、之を名けて捨と爲す。中に於て、具に五門を以て分別す。一には時に就いて分別す。捨の時業なりと雖も、今は此れ且く命終に就いて以て說く。二には處に就いて分別す。處は、謂はく、三界なり。三には性に就いて、善惡無記の三性を分別す。心の中、皆命終を得、彼諸根を捨す。受生の唯不善、穢汚無記に在るに同じからず。四には漸頓の分別なり。一切の化生皆頓に命終す。其れ猶燈の滅するがごとし。胎卵濕生に、漸有り、頓有り。任報自死は、漸にして頓にあらず。橫緣にして死するには、頓の者有るべし。斷首等の如し。五には所捨の多少不同を明す。中に於て、先づ欲界に就いて以て論ず。欲界地の中に、若は無記心に漸に命終する者は、或は四根、或は五、或は六を捨す。

無形の人は、頓に四根を捨す。謂ゆる、身根と意根と命根と捨根となり。問うて曰はく、『何が故に、五根の中に、唯身根を捨して餘根を捨せざる。』『共身根最後に壞するを以ての故に。一形の人は頓に五根を捨す。四根は上の如し。男女根の中に、隨つて一根を捨す。二形の人は頓に六根を捨す。四根は上の如し。男女根を加ふ。若し欲界に死して上界に生ずれば、必ず五根を捨す。謂ゆる、身根と意と命と捨根と男女根との中に、隨つて何の根を捨す。『二形の人は上生せざるが故に下の餘門の中、此に類して應に知るべし。頓に命終する者の所捨は不定なり。或は四五六七八九を捨し、乃至十を捨す。相狀は如何。或は衆生有つて、色根の中に於て但二根有り。謂ゆる、身根と、餘は色根の中に、一有りて餘無し。是の如く、衆生は頓に五根を捨す。謂はく、身意命根餘の色根の中に有る者は、之を捨す。或は衆生有つて、色根の中に於て但四根有り。謂ゆる、身根と、餘の色根の中に、三有りて餘無し。是の如く、衆生は頓に七根を捨す。謂はく、身意命捨と、餘は色根の中に有る者は、之を捨す。或は衆生有つて、色根の中に於て五根を具足す。謂ゆる、眼耳鼻舌及び身なり。男女形は無し。是の如く、衆生は頓に八根を捨す。謂はく、眼等の五根と意と命と捨根となり。一形の人は頓に九根を捨す。八根は上の如し。男女根の中に、隨つて何の根を捨す。二形の人は頓に十根を捨す。八根は上の如し。男女根を加ふ。無記是の如し。若し不善心にして命終する者の捨根の多少は、前と相似たり。若し善心の中にして命終する者は上の無記の如し。一一の門の中に、皆悉く信等の五根を加ふ。問うて曰は

【次に等】三に成就を辨ず。

く、『捨惡と捨無記とは、何の差別か有る。』釋して言はく、『異有り。無記は力劣なるも、尙其世斷及び刹那斷有りと爲す。世斷と言ふは、世を隔すれば則ち滅し、成就することを得ず。刹那斷とは、念念に盡滅して、成就することを得ず。其世斷、刹那斷を以ての故に、命終の時即ち是れ斷捨す。不善の力強ければ、對治して方に斷ず。是れ世斷、刹那斷に非ざるが故に、命終の時現行せず。故に之を名けて捨と爲す。斷滅の捨には非ざるなり。』問うて曰はく、『捨善と捨不善無記と何の別かある。』『善は前の二に望むれば互に同異有り。若し欲界に死して上二界に生ずれば、無記と同じ。即ち是れ斷捨なり。若し欲界に死して還欲界に生ずれば、不善と同じ。但不行の故に、之を名けて捨と爲す。盡滅せしむるに非ず。欲界是の如し。色界の中、若し無記心にして命終する者は、頓に八根を捨す。眼等の五根と意と命と捨根となり。若し善心の中にして命終する者は、頓に十三を捨す。八根は上の如し。信等の根を加ふ。色界是の如し。無色界の中、若し無記心にして命終する者は、頓に三根を捨す。謂はく、意と命と捨となり。若し善心の中にして命終する者は、頓に八根を捨す。三根は上の如し。信等の根を加ふ。此二門竟る。次に、成就を辨ず。諸根の中に於て、決定して有なるは、其成就を說くなり。若し不定なれば、則ち之を說かず。二十二の中に、意と命と捨根との此三は遍通す。有るが一種に趣けば必ず餘の二を成ず。餘は則ち不定なり。云何が不定なる。若し無色に在らば眼等の根無く、四禪の上に在らば、則ち樂根無く、三禪の上に在らば、則ち喜根無く、初禪已上には男女の根、憂根、苦根無し。斷善根

の者は、卽ち信進念定慧根無く、凡夫は則ち三無漏根無し。若し身根有らば、必ず四根を成ず。謂ゆる、身根と意と命と捨根となり。餘は皆不定なり。若し根缺の者なれば、則ち眼耳鼻舌等の根無し。若し色界に在りて及び無形の者は男女根無く、四禪の上に在らば、則ち苦樂憂喜の四受無く、信等の根及び三無漏無し。義は前に解するが如し。若し眼根有らば、必ず五根を成ず。謂ゆる、眼と身と意と命と捨根となり。眼は必ず身に依るが故に、身根を成じ、餘の三は遍通す。所以に具に有り。餘は皆不定なり。前に准じて知るべし。耳鼻舌根は、有るが一種に趣けば、皆五根を成ず。眼に類して知るべし。若し樂根有らば、必ず四根を成ず。謂ゆる、樂根と意と命と捨根となり。餘は皆不定なり。云何が不定なる。聖人の生は無色界の中に在つて、下地の無漏樂根を成ずることを得。此樂の邊に於ては眼等の根無し。凡、三禪に在らば、則ち喜根無く、初禪の上に生ずれば、男女根、憂根、苦根無し。斷善根の人は信等の根無く、凡夫は則ち三無漏根無し。若し喜根有らば、必ず五根を成ず。謂ゆる、喜と樂と意と命と捨根となり。有喜の處は必ず定んで、樂有るが故に樂根有り。餘の三は遍通するが故に、所以に之有り。餘は皆不定なり。聖人の生は無色界の中に在つて、下地の無漏の喜根を成ずることを得。此喜の邊に於ては眼等の根無く、初禪の上に生ずれば、男女根、憂根、苦根無し。若し欲界に在つては、斷善根の者は信等の根無く、一切の凡夫は三無漏無し。是故に不定なり。若し苦根有らば、必ず七根を成ず。謂ゆる、苦根と喜と樂と捨根と身と意と命根となり。餘は皆不定なり。根缺の者は則ち眼

耳鼻舌等の根無く、無形の者は男女根無く、欲界地の中に、那含羅漢は則ち憂根無し。若し命根有らば、唯命根を成ず。餘は則ち不定なり。若し無色に在らば七色根無し。若し欲色に在りては、滅定に入る者は、則ち意根及び餘の心法無し。若し身根有らば、必ず二根を成ず。身根と命根となり。餘は皆不定なり。若し根缺の者は、則ち眼耳鼻舌等の根無し、若し色界に在り、及び無形の者は男女の根無く、若し滅定に入らば、則ち意根及び餘の心法無し。若し眼有らば、必ず三根を成ず。謂はく、眼と身と命となり。眼は必ず身に依るが故に身有り。命は是れ報生なるが故に、命根有り。餘は皆不定なり。若し根缺の者は耳鼻舌無し。若し色界に生じ、及び無形の者は、男女の根無く、滅定に入る者は則ち意根及び餘の心法無し。耳鼻舌根は但一有らしめば、皆三根を成ず。眼に類して知るべし。若し意根有らば、必ず三根を具す。謂はく、意と命と捨となり。餘は皆不定なり。無色界の中には眼等の根無し。凡夫の人、四禪の上に生ずれば、則ち樂根無く、三禪の上に生ずれば、則ち喜根無く、初禪の上に生ずれば、男女根、憂根、苦根無し。欲界地の中、斷善根の者は信等の根無く、三界の凡夫は三無漏無し。若し捨根有らば、必ず三根を成ず。意根と同じ。若し樂根有らば、必ず四根を成ず。謂ゆる、樂根と意と命と捨根となり。樂は必ず心に依るが故に意根有り。命は是れ報の主なるが故に命根有り。下に在るの時、必ず上法を成ずるが故に捨根有り。問うて曰はく、『下に在りて云何が必ず上の捨を成就することを得る。』釋に三義有り。一には下地に在りて、上地の中の未だ斷ぜられざる處に於て、一切

味定なり。皆悉く成就するが故に、之有ることを得。二には下地に在りて、上地の中の所修の淨定に於て皆成就することを得。第三には聖人の身は下地に在りて、上の淨定及び下の無漏を用て上の結を斷ずる時、同じく治修するが故に、上地の一切の淨定及び無漏定を成ずることを得。是故に樂有れば、必ず捨根を成ず。餘は皆不定なり。『云何が不定なる。』聖人の生は四空地の中に在り。爾時三禪地の中の無漏の樂根を成就す。無漏は上を生じ、下を失せざるが故に、彼樂根の邊に眼等の根無し。凡夫の生じて三禪以上に在らば、則ち喜根無し。有漏上に生ずれば、則ち下を失するが故に。凡夫初禪以上に在らば、男女根、憂根、苦根無し。若し欲界に在つて斷善根の者は、信等の根無く、一切の凡夫は三無漏無し。是故に不定なり。若し喜根有らば、必ず五根を成ず。謂はく、喜と樂と捨と意根と命根となり。意命捨有るは、義は樂の說に同じ。云何が喜有れば必ず樂根を成ずる。亦三義有り。一には下地に在りて、上地の未だ斷ぜられざる處に於て、一切味定なり。皆悉く成就するが故に樂根有り。二には下地に在りて、上地の中に於て、修する所淨定、皆悉く成就するが故に樂根有り。第三には聖人の身下地に在りて、上の淨定及び下の無漏を用て、上の結を斷ずる時、同じく治修するが故に、上地の世俗の淨定、及び無漏定を成ずることを得。故に樂根有り。是義を以て但喜根有れば、必ず樂根を成ず。餘は皆不定なり。云何が不定なる。聖人の生は、四空地の中に在り。爾時、喜有れば眼等の根無く、初禪の上に生ずれば、男女根、憂根、苦根無し。若し欲界に在つて、斷善根の者は、

信等の根無く、一切の凡夫は三無漏根無し。是故に不定なり。若し苦根有らば必ず七根を成ず。謂ゆる、苦根と喜と樂と捨根と身と意と命根となり。餘は皆不定なり。根缺の者は則ち眼耳鼻舌等の根無く、無形の者は男女の根無し。欲界地の中の那含、羅漢は、則ち憂根無し。問うて曰はく、『若し那含、羅漢に憂根無くんば、亦應に苦無かるべし。何の義を以ての故に、苦根有りて、而も憂根無きことを得るや。』釋して言はく、『憂とは、欲に著するが故に生ず。是故に那含、羅漢の人は、苦有りて憂無し。已に欲を捨するが故に、五欲の樂壞するを見るの時憂惱を生ぜず。苦は則ち爾らず。著欲に從はず。分別して生ず。是故に那含、羅漢の人は、苦有りて憂無し。斷善根の者は信等の根無く、凡夫の人は三無漏無し。是故に不定なり。若し憂根有らば、必ず八根を成ず。謂はく、五受根と身と意と命根となり。餘は皆不定なり。苦の中に說くが如し。若し男根有らば、必ず八根を成ず。謂ゆる、男根と身と意と命根と苦と樂と喜と捨となり。餘は皆不定なり。根缺の者は眼等の根無く、丈夫の一形は、則ち女根無し。那含、羅漢及び凡夫の中に、八禪を得れば、則ち憂根無し。斷善根の者は信等の根無く、凡夫の人は三無漏無し。若し女根有れば、且く八根を成ず。但男根無し。餘は皆前に同じ。若し信根有らば、且く八根を成ず。謂はく、信等の五根と意と命と捨根となり。餘は皆不定なり。無色に生ずる者は眼等の根無し。凡夫の人は、四禪の上に生ずれば、則ち樂根無く、三禪の上に生ずれば、則ち喜根無く、初禪の上に生ずれば、男女の根憂根苦根無し。一切の凡夫は三無漏精進念定乃至慧根無し。皆

【三六】第七に其次第を明す。

信根に同じ。若し知根有らば、必ず十一を成ず。謂ゆる、知根と信等の五根と喜と樂と捨根と意根と命根となり。餘は皆不定なり。』云何が不定なる。無色に生ずる者は眼等の根無く、初禪の上に生ずれば、男女根、憂根、苦根無し。修道に在るが故に、未知根及び無知根無し。問うて曰はく、『前に斯陀、那含は、九根の所得を說く。云何が今は必ず十一を成ずと言ふや。』釋して言はく、『以有り、前には現用に據り、喜樂捨等は並用するを得ざるが故に九根有り。今は成就を論ずるが故に十一有り。無知根有りて、且く十一を成ず。前の知根に同じ。但知根を除いて無知根を加ふ。未知根有らば、必ず十三を成ず。前の十一の上に、更に身根と及與び苦根とを加ふ。見諦道に入れば必ず欲界に在るが故に苦根有り。餘は皆不定なり。若し根缺の者は、則ち眼耳鼻舌の四根無し。男女の二根は人に隨つて不同なれば有無不定なり。若し初禪乃至四禪に依つて見諦道に入らば、則ち憂根無し。故に不定と曰ふ。

〔三六〕第七門の中に、其次第を明す。一切の受身は六根を體と爲すが故に、先に之を說く。既に六根有り。便ち男女の相異なるを分別すべし。故に次に其男女の二根を明す。諸根は相攝して絕せず。斷ぜず。故に次に命を說く。諸根は境に對して、能く覺心を生ず。故に次の五受あり。此れ前の染法なり。染には必ず治有り。治は、謂はく、淨法なり。一切の淨法は信等に因りて生ずるが故に、信等を明す。信等に由るが故に、聖道を出づ。聖に三位を分つ。是故に後に三無漏根を說く。二十二根、之を略して爾云ふ。

大乘義章 卷第四

【一】以下第三大段に染法聚を明す中に六十門、中染法聚煩惱義の中三十門ある中、第一段に二障の義を明す。中に二、先づ釋名。

大乘義章 卷第五 本

遠法師撰す

染法聚第三。此に六十門有り。染法聚煩惱義の中に三十門有り。此卷に二十三門有り。二障の義。三障の義。三根三道三毒煩惱の義。三使の義。三漏の義。四縛四流四扼の義。四取の義。四身結の義。五住の義。五蓋の義。五下分結の義。五上分結の義。五慳の義。五心捿の義。五心縛の義。六垢の義。七漏の義。七使の義。八慢の義。八種惡覺の義。八妄想の義。八倒の義。九結の義。

一二障の義に兩門の分別あり。釋名第一。體相第二。

（一）第一に名を釋す。言ふ所の障とは、義に隨つて同じからず。乃ち多種有り。或は煩惱と名け、或は名けて使と爲し、或は名けて結と爲し、或は名けて纒と爲し、或は名けて縛と爲し、或は名けて流と爲し、或は名けて扼と爲し、或は名けて取と爲し、或は名けて漏と爲し、或は名けて垢と爲し、或は說いて惑と爲し、或は說いて障と爲す。是の如く一に非ず。勞亂の義をば名けて煩惱と曰ふ。隨逐繫縛、之を稱して使と爲す。生死を結集す、之を目けて結と爲す。衆生を結集するを、亦名けて結と爲す。能く行人を纒す、之を目けて纒と爲す。又能く心を纒するを、亦名けて纒と爲す。行人を羈繫す、故に曰うて縛と爲す。行人を漂流す、之を說いて流と爲す。能く衆生をして苦の爲に扼せられしむ。故に名けて扼と爲す。境界を取執するをば、說いて以て取と爲す。流注して絕えざること、其れ猶瘡

【二】第二に體相中、先づ五住の相を明す。

【障を等】次に二障を分つことを明す。中に三ある中、一には四住の煩惱を煩惱障、無明住地を智障となす。中一に障相を定む。

【地持論】第一種性品。

漏のごとし。故に名けて漏と爲す。淨心を染汚するをば、說いて以て垢と爲す。能く所緣に惑ふ、故に稱して惑と爲す。能く聖道を礙ふるを、說いて以て障と爲す。是の如きの差別、無量無邊なり。今一義に隨うて、且く說いて障と爲す。名字麤爾り。

〔二〕第二には體の中の差別に二有り。第一に略して五住の相を明し、第二に之に就いて以て二障を明す。五住と言ふは、『勝鬘經』に說くが如し。「一には見一處住地、二には欲愛住地、三には色愛住地、四には有愛住地、五には無明住地なり」と。名字是の如し。體狀如何。三界の五見を見一處と名く。欲界所有の一切の煩惱の、無明を除く見を名けて欲愛と爲す。色界所有の一切の煩惱の、無明を除く見を、名けて色愛と爲す。無色界の中の一切の煩惱の、無明を除く見を、名けて有愛と爲す。三界の無明を無明地と名く。無名の中の義に復二有り。一には染汚、二には不染汚なり。迷理の無明を、名けて染汚と爲し、事中の無知を、不染汚と名く。此二を合して、無明住地と爲す。此義廣く辨ずること五住章の如し。障を別つと言ふは、障別に三有り。一に四住の煩惱を煩惱障と爲し、無明住地を、以て智障と爲す。二に五住の性結を煩惱障と爲し、事中の無知をば以て智障と爲す。三に五住の性結及び事の無知を同じく煩惱と名け、分別緣智をば以て智障と爲す。初番の中に就いて四門の分別あり。一には障相を定め、二には障の名を釋し、三には斷處を明し、四には、障に對して脫することを辨ず。相を定むと言ふは、云何が知ることを得る。四住の煩惱を煩惱障と爲し、無明住地をば以て智障と爲す。『勝鬘經』を以て『地持論』に對し、

【次に等】二に釋名。

【次に等】三に斷處を明す。中に二、先づ大小相對分別す。

【地持】第一種性品。

之を驗して知る。『勝鬘經』の中には、「二乘の人は但四住を斷じ、無明を斷ぜず」と說き、『地持論』の中には、「二乘の人は煩惱障淨なるも、智障淨に非ず」と說く。煩惱淨とは、猶『勝鬘』の中に斷ずる所の四住のごとし。智障淨に非ずとは、猶彼無明住地を斷ぜざるがごとし。之を定むること麤爾り。次に共名を釋す。五住の結、通じて能く勞亂す。齊く能く智を障ふ。何が故に四住、偏に煩惱と名け、無明住地獨り智障と名くる。理實に齊く通ず。但今は二障の差別を分たんが爲に隱顯名を異にす。等しく隱顯に就き、各功の強に隨つて、以て兩名を別つ。四住の煩惱は、現起の結は業を發し生を招く。勞亂の義強きをもて、偏に煩惱と名く。異心の惑は解と別體なり。疎にして遠く、知を翳障すること微なり。故に智障と名けず。無明の闇惑は正しく明解に違す。親しくして近く、智を翳障する義強し。故に智障と名く。性に任ずるの無知は、是れ現起に非ず。業を發し苦報を招集すること能はず。勞亂すること微なるが故に、煩惱と名けず。名義是の如し。次に斷處を明す。略して二階と爲す。第一に大小相對して分別す。二に大乘に就き、世間と出世間と相對して分別す。大小對の中の義に三門を分つ。一には隱顯互に論ず。二乘の人は但煩惱を除し、菩薩の人は唯知障を滅す。二乘は智障を分除せざるには非ず。所斷微小なり。細を隱して麤に從ふ。是故に說かず。菩薩は煩惱を除斷せざるには非ず。所斷の相微なり。麤を隱し細に從ふ。是故に說かず。二には優劣相形す。二乘は解劣にして但煩惱を斷じ、菩薩は治廣くして二障雙び除く。故に『地持』に云はく、「聲聞緣覺は煩惱障淨に

【大乘に等】次に大乘に就いて世出世相對して辨ず。

【涅槃】第六四依品。

【地持】第七。

して、智障淨に非ず。菩薩は種性に二淨を具定す」と。三に實に據り通じて論ずれば、二乘の人は、二障雙び除く。菩薩も亦爾り。此一門竟る。大乘に就いて、世間、出世間相對して辨ずと言ふは、解行已前を名けて世間と爲し、初地已上を名けて出世と爲す。中に於て分別するに、乃ち四門有り。一には麤を廢し細を論ず。地前の菩薩は、彼二障に於て一向に未だ斷ぜず。初地已上には二障並に除く。故に『涅槃』の中に宣說すらく「地前に煩惱の性を具す」と。良に此に在り。二には隱顯互に論ず。地前に世間は但煩惱を斷じ、初地已上には、唯智障を除く。地前は智障を分斷せざるには非ず。所斷微小なり。細を隱して麤に從ふ。是故に說かず。初地已上は亦煩惱を斷ず。麤を隱して細に從ふ。是を以て論ぜず。三には優劣相形す。地前は解劣にして唯煩惱を除き、地上は解勝にして二障雙び斷ず。四に實に據り、通じて論ず。世及び出世、二障雙び除す。相狀如何。煩惱障の中に共二種有り。一は是れ子結、二は是れ果縛なり。子結の煩惱は地前の所除、果縛の煩惱は地上の所斷なり。子結の中に、復二種有り。一には正使、意を作して生ず。二には餘習、性を任にして起る。正使煩惱は、聲聞、緣覺乃至習種之を斷ずること周く盡す。習起の結は、種性已上乃至初地に之を斷ずること畢竟す。故に『地持』に云はく「初阿僧祇に解行住を過ぎ歡喜地に入り、增上中の惡趣の煩惱を斷ず」と。不善の正使を名けて增上と爲し、習を名けて中と爲す。歡喜に入る時は習悉く斷ずるなり。果縛の中に亦二種有り。一には正使は、作意して現起す。二には是れ習氣は、任運にして生ず。正使の煩惱は、謂ゆる愛佛、愛菩

【地持】第七。

【地持】第七。

【地經】第十。

【涅槃】北本第二十七。

提等なり。始初地より次第に斷除し、不動地に至りて之を斷じて周く盡す。故に『地持』に云はく「第二僧祇に、第七住を過ぎて第八地に入り、微細の煩惱皆悉く斷滅す」と。八地以上には彼餘習を除す。故に『地持』に云はく「第三僧祇に、習氣を除して最上住に入る」と。智障の中に亦二種有り。一には相に迷ひ、二には實に迷ふ。情所起の法をば、之を名けて相と爲し、悟解して其本無を知ること能はざるをば、說きて以て迷と爲す。如來藏性をば、說いて以て實と爲し、窮達すること能はざるをば、說いて以て迷と爲す。迷相の無明は地前の所除、迷實の無明は地上の所斷なり。迷相の無明に復二種有り。一には相に迷うて性を立つ。二には性に迷うて相を立つ。迷相と言ふは、妄法虛集す。之を以て相と爲し、虛集と知らずして定相を建立す。迷性と言ふは、情所起の法、無性を性と爲す。此性に迷ふが故に、因緣の相を立す。迷相の無明は、聲聞、緣覺乃至習種に之を斷じて窮盡す。迷性の無明は、種性以上乃至初地に皆悉く斷除す。迷實の無明に亦二種有り。一には實相に迷ひ、二には實性に迷ふ。實性空寂無爲の法は、是れ其實相なり。其寂泊無爲を知ること能はず。故に迷相と名く。如來藏の中、恆沙の佛法眞實善有なるは、是れ其實性なり。窮證すること能はざるを、說いて迷性と爲す。此二の無明は、斷を說くこと不定なり。若し『地經』に依らば、初地已上乃至六地に其迷相を除く。是故に、證得を柔順忍と爲す。七地已上に實性に迷ふを斷ず。是故に無生忍の體を證得す。若し『涅槃』に依らば、九地已還に其迷相を斷ず。是故に、說いて佛性を聞見すと爲す。十地已上に迷實の

【第四に等】四に障に對して脫を辨ず。

【第二番の等】第二に五住の性結を煩惱障、事中の無知を智障となす中に四あり、一に障相を定む。

【涅槃經】北本第二十五。

性を斷ず。是故に、說いて眼に佛性を見ると爲す。此を以て驗し求むるに、煩惱障は、終始通じて斷ず。智障も亦然り。治斷麤爾り。第四に障に對して以て二脫を別つ。煩惱障を斷じて心解脫を得、智障を斷除して慧解脫を得。是義云何。分別に三有り。一には隱顯互に論ず。煩惱障を斷じて、諸佛菩薩の世諦の心脫す。智障を斷除して、眞諦の慧脫す。何が故に是の如くなる。煩惱は事に染す。故に煩惱を斷じて、世諦の心脫す。煩惱を斷ずる時、理實に隨つて一切の解脫有り。主に就きて名を爲し、偏に心脫と言ふ。無明は理を障ふ。故に無明を斷じて眞諦の慧脫す。無明を斷ずる時、理に卽して所成の一切解脫す。主に就きて名を作し、偏に慧脫と言ふ。第二に障の寬狹に對して分別す。煩惱を斷ずる時、唯事中の染愛の心を除するが故に、世諦の心脫す。智障を斷ずる時、無明地を除き、及び事中の麤の無明を斷ずるが故に、二諦の慧脫す。三に義に隨つて通じて論ず。煩惱障を斷じて二諦の心脫す。世諦の心脫する義は前に釋するが如し。眞心脫とは、彼愛結の微細の習氣と無明地と同一體性にして、眞心を縛するを以ての故に、煩惱を斷ずる時眞諦の心脫す。『涅槃』に說くが如し。「智障を斷除して二諦の慧脫す」と。備には前に釋するが如し。

此一門第二番の中に、亦四門有り。一には障の相を定め、二には障の名を釋し、三には斷處を明し、四には障に對して脫を辨ず。定相と言ふは、云何が知ることを得る。五住の性結を煩惱障と爲し、事中の無知をば、以て智障と爲す。『涅槃經』に說くが如し。「一切の貪瞋癡等を斷除して心解脫を得、一切の所知障礙無きが故に慧解脫を得」と。貪瞋癡とは、

【次に等】二に釋名。

【次に等】三に斷處を辨ず。先づ世出世相對して分別す。

【地經】地經第十二。

即ち是れ五住の性結の煩惱なり。一切の所知無礙を得とは、當に知るべし、即ち是れ事の無知を除くなりと。又『地經』の如きは、佛の無礙を以て慧解脫と爲す。當に知るべし、即ち是れ事の無知を除くなりと。癡染を遠離するを心解脫と爲す。當に知るべし、即ち是れ五住の性結を煩惱障と爲すと。又『雜心』に云はく「如來、二種の無知を斷除す。一には染汚を斷じ、二には不染を斷ず。染汚無知は、即ち是れ五住性結の煩惱なり。不染無知は、即ち是れ事中の無明の心なり」と。斯等に准驗するに、當に知るべし、彼五住の性結を以て煩惱障と爲し、事中の無知をば、以て智障と爲すことを。之を定むること麤爾り。

次に其名を釋す。何が故に、五住の性結の煩惱をば煩惱障と爲し、事中の無知をば、以て智障と爲すや。五住の性結は、能く分段、變易の生死を起し、行人を勞亂するをもて、煩惱障と名く。事中の闇惑は、能く如來の種智の明解を障ふ。是故に、之を說いて以て智障と爲す。名義是の如し。次に斷處を辨ず。處別に三有り。一には世、出世相對して分別す。二には功用を以て無功用に望め、相對して分別す。三には因果分別なり。初對の中に就いて義別に三有り。一に隱顯互に論ず。地前には五住の性結を斷除す。彼相を捨し如に趣順するを以ての故に。初地已上には智障を斷除す。彼地上に、法界に契合し諸法を了達して、障礙無きを以ての故に。故に『地經』に云はく「初地の中に於て、一切世間の文誦呪術、窮盡すべからず」と。二に優劣相形する地前の菩薩は唯煩惱を除き、初地以上は智行寛廣にして、二障雙び除く。三には實に就いて通じて論ず。地前、地上皆二障を除く。第二對

【第二對中等】次に功用を無功用に望めて分別す。

【第三對中等】次に因果分別。

【次に第】第三に障に對して脫を辨ず。

【第三番の第】第三に五住の性結と事無知とを煩惱障と分別緣智を智障とする別を明す中に四門あり、一に障相を定む。

中に、義亦三有り。一には隱顯互に論ず。七地已前は唯煩惱を除き、八地已上は智障を滅除す。八地の中の淨佛國土の如きは、一切の色中の無知を斷除し、九地の中には、物の心行を了して一切の心行の無知を滅除し、第十地の中には、諸法の中に於て、勝自在を得て一切の法の中の無知を斷除す。此等は皆是れ事の無知を除く。二には優劣相形す。七地已還には唯煩惱を斷じ、八地已上には二障雙び除く。三には實に就き通じて論ず。七地已還には雙べて二障を除く。八地已上も、類して亦同じく然り。第三對中に義別に亦三あり。一には隱顯互に論ず。金剛已還には煩惱障を斷ず。如來地の中には、種智現起して、一切差別の諸法を了達し、智障を斷除す。事無知は斷除し難きを以ての故に、佛に至りて乃ち盡す。二には優劣相形す。金剛已還には但煩惱を斷除し、如來の果位には二障雙べて斷ず。三には實に據りて通じて論ず。種性已上乃至如來に、二障雙び遣る。治處且く爾り。次に障に對して脫を辨ず。煩惱障を除いて心解脫を得、智障を滅除して慧解脫を得。心脫と言ふは、其れ二種有り。一には佛菩薩の行、世間心、二には佛菩薩の第一義心なり。四住を斷ずるが故に、世諦の心脫す。無明を除くが故に、第一義諦の心は解脫を得。慧脫と言ふは、謂はく、世間の一切種智を照し、解脫を得。此兩門竟る。第三番の中に、亦四門有り。一には其障相を定め、二には障の名を釋し、三には斷處を明し、四には障に對して脫を辨ず。定相と言ふは、云何が知ることを得る。五住の性結及び事の無知を煩惱障と爲し、分別の智をば、以て智障と爲す。『勝鬘』の中の如きは、五住及び起を同じく煩惱と名く。明に知ん

【寶性論】第三。
【地論】第八。
【楞伽】第二。
【龍樹】大智度論第十七。
【次に等】二に釋名。
【經】北本涅槃經第二十八。

ぬ、五住及び事の無知は、是れ煩惱障なることを。分別智を智障と爲すと言ふは、『寶性論』に說くが如し。「四種の障有りて、如來の淨、我、樂、常を得ず。一には緣相。謂はく、無明地なり。是障を以ての故に、如來究竟の眞淨を得ず。二には因相。謂はく、無漏業なり。是障を以ての故に、眞我を得ず。三には生相。謂はく、意生身なり。是障を以ての故に、眞樂を得ず。四には壞相。謂はく、變易死なり。是障を以ての故に眞常を得ず」と。彼既に無漏の業障、眞我を得ずと宣說す。是故に定んで知んぬ、分別の緣智は是れ其智障なりと。又『地論』八に、六地中に、「智障淨因の事は、謂はく、不分別空三昧なり」と說くが如し。不分別を以て智障淨と爲す。明に知んぬ、即ち分別の智を用て、以て智障と爲すことを。又『楞伽』に云はく、「妄想は爾炎の慧、彼滅すれば我涅槃なり」と。爾炎の慧を滅するを、方に涅槃と爲す。明に知んぬ、所滅の妄慧は是れ障なりと。又龍樹の說かく、彼覺觀の如きは、下に望めて善と爲し、第二禪に望めて即ち是れ罪過なり。乃至非想を下に望めて善と爲し、出世道に望めて即ち是れ罪過なり。是の如き慧觀を、世に望めて善と爲し、其實相に望めて、亦是れ罪過なり。既に罪過と言ふ。何んが障に非ずと爲さん。之を定むること麤爾り。次に其名を釋す。五住の性結及び事の無知は、體は是れ闇惑勞亂の法なるが故に、煩惱と名く。分別の智は能く眞諦の無分別慧を礙ふ。故に智障と名く。問うて曰はく、『此智能く眞德を顯す。何が故に障と言ふ。』釋して言はく、『此智能く闇惑を除き、分に能く眞を顯す。是故に、經の中に說いて了因と爲す。多塞眞を妨ぐ。故

【維摩】菩薩品彌勒章。

【次に等】三に斷處を明す。先づ地前地上相對して分別す。

に復障と名く。藥病を治し、若し藥を去らざれば藥復患を成すが如し。此も亦是の如し。』云何が眞を妨ぐる。『維摩』に說くが如し。『寂滅は是れ菩提なり。諸相を滅するが故に』と。此智は是れ相なり。所以に是れ障なり。『不觀は是れ菩提なり。諸緣を離るるが故に』と。此智は是れ緣なり。所以に是れ障なり。『不行は是れ菩提なり。憶念無きが故に』と。此智は憶念なり。所以に是れ障なり。『斷は是れ菩提なり。諸見を斷ずるが故に』と。此智は是れ見なり。所以に是れ障なり。『離は是れ菩提なり。妄想を離るるが故に』と。此智は是れ妄想なり。所以に是れ障なり。『障は是れ菩提なり。諸願を障ふるが故に』と。此智は是れ願なり。所以に是れ障なり。菩提は眞明、此智は性闇なり。所以に是れ障なり。世の樂受の性は是れ行苦なるが如し。是の如き等の過、具に陳ぶべからず。皆眞德に違す。故に說きて障と爲す。名義是の如し。次に斷處を辨ず。斷處に二有り。一には地前地上相對して分別し、二には直ちに地上に就きて、世間出世間相對して分別す。初の對の中に就いて、義復三有り。一には隱顯互に論ず。解行已前は、增相修の故に煩惱障を斷ず。初地已上は、捨相修の故に知障を斷ず。云何が增相能く煩惱を斷ずるや。煩惱は、正しく闇惑を以て患と爲す。初より以來、明解を修習して緣智轉增し、闇惑漸く捨つ。解行に至る時、明解增上し、惑障窮盡す。之を說いて斷と爲す。云何が捨相能く智障を斷ずるや。智障は、正しく分別を以て過と爲す。初地已上に、自實を窮證し緣修漸く捨て、分別の過滅するを智障を斷ずと名く。二には優劣相形す。地前の菩薩は、唯煩惱を斷ず。初地已上は、對治深廣

【地持】第一。
【次に等】次に地上に就いて世出世相對して分別す。
【地論】第一。

にして二障雙び除く。三には實に就き通じて論ず。地前地上並に二障を斷ず。煩惱通じて除くの義在ること知るべし。云何が地前に能く智障を滅する。事識の中の解は、漸く息滅するを以て、妄識の中の智は、漸く現前するが故に。『地持』に云ふが如し。「種性の菩薩は六入殊勝にして、展轉相續して、無始法爾なり」と。當に知るべし、即ち是れ眞實の行德なりと。既に實を證することを得。寧んぞ妄を捨てざらんや。故に知る、地前亦智障を斷ずることを。此れ初對竟んぬ。次に地上に就いて、世間出世間、相對して分別す。初二三地を名けて世間と爲し、四地以上を名けて出世と爲す。中に於て亦三門の分別有り。一には隱顯互に論ず。三地以還の世間の行は煩惱障を斷じ、四地已上出世の眞慧は、智障を斷除す。云何が世間、煩惱障を斷ずる。『地論』に說くが如し。「初地に凡夫の我障を斷除す」と。凡夫の我は是れ見一處住地なり。「第二地の中に、能起犯戒の煩惱を斷除す」と。犯戒の煩惱は、即ち是れ欲愛、色愛、有愛の三種の住地なり。「第三明地に、闇相の聞思修等の諸法の妄障を斷除す」と。闇相は即ち是れ無明住地なり。云何が出世間、能く智障を斷ずる。智障に三有り。一には是れ智障。謂ゆる、分別空有の心なり。二には是れ體障。謂ゆる、建立神智の體なり。相狀如何。謂はく、彼緣智は正しく諸法の非有、非無を觀じて、前の分別有無の礙を捨す。分別有無の礙を捨すと雖も、猶己を見て以て能觀と爲し、如を所觀と爲す。己を見るは能觀なれば、心と如と異り、如を所觀と爲さば、如と心と別なり。己心と如と別なるを見るに由るが故に、未だ神智の礙を泯捨すること能はざるを、說いて

【地論】第六。

體障と爲す。三には是れ治想なり。通じて之を論ずれば、向前の二種は俱に是れ治想なり。但此一門は、治中の究竟なるをもて、偏に治の名を與ふ。然るに此治想も、亦是れ緣智なり。前の神智の礙を對治し破して、實心、如に合す。復如に合すと雖も、其體性を論ずれば、猶是れ七識生滅の法にして、眞諦の無生滅の慧を障ふ。故に名けて障と爲す。障別此の如し。治斷は云何。始四地從り乃至七地に智障を斷じ、第八地に入りて體障を斷除し、八地已上如來地に至りて、治想を斷除す。云何が智を斷ずる。四五六地に空を觀じて有を破し、分別取有の智を捨離す。故に『地論』の中に廣く明さく、「四地に諸法の不生不滅を觀察して、分別解法の慢心を捨離す」と。「第五地の中に、三世の佛法の平等を觀察して、分別身淨の慢心を捨離す」と。「第六地の中に、法の平等を觀じて、分別染淨の慢心を捨離す」と。此れ皆空を觀じて、取有の心を破す。「第七地の中に諸法の如を觀じて、前の分別取空の心を捨す」と。是の如き等を離るるを、智障を斷ずと名く。云何が八地に體障を斷除する。前の七地の中に法の如を觀ずと雖も、猶已心を見て以て能觀と爲し、如を所觀と爲す。是見を以ての故に心と如と異にして、廣大に任運に不動なること能はず。第八地に入りて此智障を破して、如の外に由來心無く、心の外に如無しと觀察す。如の外に心無ければ、心の如に異る無く、心の外に如無ければ、如の心に異る無し。心の如に異る無ければ、能知を見ず。如の心に異る無ければ、所知を見ず。能所既に亡ずれば泯同一相にして、便ち分別功用の意を捨す。功用を捨するが故に行と如と等しく、廣大不動にして、八地に

【次に等】四に障に對して脫を辨ず

入ると名け、此德成ずる時を體障を斷ずと名く。云何が八地より如來地に至りて治想を斷除する。向前の八地に體障を斷除すれば、治想猶存す。故に八地に云はく、此第八地は障想無しと雖も、治想無きに非ずと。然るに此治想は、八地已上に漸次に斷除し、佛に至りて乃ち盡す。彼云何が斷ずる。分別息むが故に眞相現前す。法の唯眞を覺して、本來妄無し。此見眞無妄の力を以ての故に、能く妄治をして、前、後を生ぜず、後、前に報ぜず。是に於て滅盡して、至極微細ならしむ。復觀解を以て破遣すべからず。唯修力をして、任運に之を捨すべし。八地已上は薰修の力なるが故に、彼治想をして運運に自ら謝し、眞證の行德をして運運に自ら顯れ、如來地に至りて妄盡究竟し、眞德窮滿せしむるを治想を除くと名く。此は是れ第一隱顯互論なり。二に優劣相形す。初二三地は對治微劣にして、唯煩惱を斷ず。四地已上は對治深廣にして、二障雙び除く。三には實に就いて通じて論ず。始、初地從り乃ち佛地に至りて、當に知るべし、念念に二障並び斷ず。緣智漸く明にして、煩惱の障を斷じ、眞德漸く顯れて、智障を滅除すと。治斷是の如し。次に障に對して脫を辨ず。此門の中に就いて、煩惱を斷除して二脫倶に生じ、智障を息除して二脫倶に顯る。相狀如何。前に對治を修して煩惱を斷ずる時、能治の道は必ず眞に依りて起る。所依の眞は恆に妄に隨つて轉ず。故に妄修を以て眞心を薰發し、彼眞中の二脫の德をして生ぜしむ。眞德生ずと雖も、猶七識の緣智と和合し、彼が爲に隱覆せられて、眞德顯れず。彼智を息除して眞德方に顯る。其れ猶臘印の臘と泥と合して、彼泥上の文像をして隨つて生

【三】染法聚第二段に三障の義を明す中、二門分別あり、一には釋名。【地持】に第七。

ぜしめ、泥文生ずと雖も、臘印之を覆うて顯現することを得ず。臘印を動去して其文方に顯るるがごとし。彼も亦是の如し。二障の義、以て淵窮し難し。且く大綱に隨つて、略旨を標して況す。

三障の義に兩門の分別あり。釋名一。斷處二。

(三)三障と言ふは、謂はく、皮、膚、骨なり。其體性を論ずれば、唯一の無明なり。故に、『地持』の中に說いて智障と爲す。麤細不同を分ちて此三と爲す。相狀如何。所障の法身の事等は髓の如し。能障の無明の階降不同なるは皮、膚、骨の如し。麤品の無明は、浮淺なること皮の如し。故に喩名に就き、說いて皮障と爲す。中品の無明は、次深にして膚の如し。故に喩稱に從ひ、說きて膚障と爲す。細品の無明は、窮深にして骨の如し。喩に從ひて目を立て、說いて骨障と爲す。亦所障に從ひて名を爲すべし。所障の法身は階降に四有り。一には皮、二には膚、三には骨、四には髓なり。地前の菩薩の法身は皮の如し。初地已上七地の法身は膚の如し。八地已上第十地に至る法身は骨の如し。如來地の中の法身は髓の如し。能障の無明の差別に三有り。謂はく、麤、中、細なり。麤品の無明に兩種の義有り。說きて皮障と爲す。一に麤品の無明は、彼先に成ずる下品の法身と同じく一處に在り。世人の皮中の患の如似し。故に皮障と曰ふ。二に麤品の無明は、未起の下品の法身を障ふ。故に皮障と云ふ。中品の無明に亦兩義有り。說いて膚障と爲す。一に中品の無明は、

彼先に成ずる中品の法身と同じく一處に在り。世人の膚中の患の如似し。故に膚障と名く。二に中品の無明は、未起の中品の法身を障ふ。故に膚障と稱す。細品の無明に亦兩義有り。一に說いて骨障と爲す。一に微細の無明は、彼先に成ずる微細の法身と同じく一處に在り。世人の骨中の患の如似し。故に骨障と名く。二に微細の無明は、未起の微細の法身を障ふ。故に骨障と名く。法身の髓は、精窮にして累を出づ。故に障を說かず。義に隨つて細分するに、理亦之有り。故に『地論』の中に「如來地に微細の障有り」と說く。名義是の如し。

(四)次に斷處を辨ず。初に皮障とは、始め解行從り歡喜地に至つて、之を斷じて窮盡す。故に『地持』に云はく、「初阿僧祇に、解行住を過ぎて歡喜地に入り、皮障斷ず」と。第二に膚障は、始め初地從り第八地に至りて、之を斷じて究竟す。故に『地持』に云はく、「第二僧祇に、遠行住を過ぎて不動地に入り、膚障斷ず」と。第三に骨障は、始め八地從り如來地に至りて、究竟窮盡す。故に『地持』に云はく、「第三僧祇に、畢竟住を過ぎて如來地に入り、骨障斷ず」と。『相續解脫』も亦此說の如し。三障の義、略して辨ずること是の如し。

三根三道三毒の煩惱の義。

(五)第一に名を釋す。三根と言ふは、謂はく、貪、瞋、癡なり。境に染するを貪と名け、忿怒を瞋と曰ひ、闇惑を癡と名く。此三は乃ち是れ前の煩惱を思ひ、思業を發生す。故に名

【地論】第一。

【四】第三に斷處を明す。

【地持】第七。

【五】染法聚第三段に三根三道三毒の煩惱の義を明す中、四門の分別あり、一に釋名。

【成實】第九。

【六】以下、第二に十使に約對して料簡廢立す。初に三根。

けて根と爲す。三道と言ふは、謂ゆる、貪、瞋及與び邪見なり。貪、瞋は前に同じ。邪見と言ふは、謬習して理に乖くをば、之を目けて邪と爲す。邪心推求するをば、之を說いて見と爲す。何の義を以ての故に、前の三根の中には第三を癡と名け、此三道の中には說いて邪見と名くる。『成實』に釋して言はく、癡の中に、增上なるを說いて邪見と名く。暢思の煩惱は、必ず是れ增上なり。故に邪見と說く。此三は乃ち是れ思後の煩惱、前の思を通暢す。故に名けて道と爲す。三毒と言ふは、名三根に同じ。何の義を以ての故に、三道に同ぜずして乃ち三道に同ずるや。三根の中の癡は、名は是れ寬なるが故に、此れ之に同じ。三道の中の邪見は義狹し。故に此れ不同なり。然るに此三毒は、通じて三界の一切の煩惱を攝す。一切の煩惱能く衆生を害す。其れ猶毒蛇のごとし。亦毒龍の如し。是故に喩に就いて說き、名けて毒と爲す。名義是の如し。

【六】第二門の中、十使に約對して料簡廢立す。問うて曰はく『三根は十使の中に、具に幾くの使を攝するや。』『『毘曇』の如きに依れば、唯三使を攝す。謂はく、貪、瞋、癡なり。餘の七を攝せず。』何が故に是の如くなる。釋する者相傳す。五義を以ての故に、三根を建立す。一には、貪等は遍く六識に通ずと明す。故に說いて根と爲す。能く具に一切の惡を生ずるを以ての故に、慢等の唯意地に在るに同じからず。二には五行に通ず。謂はく、四諦に迷ひ、及び修道を障ふ。能く具に一切の惡業を生ずるを以ての故に、說いて根と爲す。見疑の局りて見諦に在るに同じからず。三には使性を具す。力强にして、能く一切の惡業

【成實】第十一。

【次に等】二に三道を辨ず。

を生ず。故に說いて根と爲す。纏垢慳嫉等に同じからず。四には善根を斷ずる時方便を爲す。是故に、之を說いて不善根と爲す。一切の無記の煩惱に同じからず。五には能く業を發す。過未の性成の結に同じからず。要ず現行の者能く業を發するが故に。又此三種は、能く衆生を惱す。故に偏に之を說いて、不善根と爲す。又此三種は衆生多く起し、乃至蟻等亦常に之を起す。是を以て偏に說いて不善根と爲す。若し『成實』に依らば、三不善根は具に十使を攝す。貪瞋の二使は、當相各一なり。餘の八使をば、總じて名けて癡と爲す。何が故に是の如くなる。三受及び三境に依るを以ての故に。三受と言ふは、謂はく、苦、樂、捨なり。苦に依りて瞋を生じ、樂に依りて貪を生じ、捨に依りて癡を生ず。三境と言ふは、謂はく、違、順、中なり。違に依りて瞋を生じ、順に依りて貪を生じ、中に依りて癡を生ず。餘の八使は、同じく捨受中容の境に依りて起る。故に通じて癡と名く。次に三道を辨ず。問うて曰はく、『三道は十種の中、具に幾くの使を攝するや。』若し『毘曇』に依らば、具に五使を攝す。謂ゆる、貪、瞋、邪見、戒取及與び見取なり。五の中の前の二は、當相各一なり。後の三は、合して邪見業道と爲す。此五種は、是れ其增上に能く惡業を暢べ、身口を發動するを以て、是故に偏に說いて惡業道と爲す。』何の義を以ての故に、餘の五を攝せざる。身邊の二見は是れ無記なるが故に、說いて不善業道と爲すことを得ず。疑、慢及び癡は增上に非ざるが故に、思を暢べ、身口を發動すること能はず。故に之を說かず。問うて曰はく、『『毘曇』に、「邪見等は迷理の煩惱、身口を動ぜず」と說く。

【次に等】三に三毒を辨ず。

【七】第三に相對して異を辨ず。先づ三根に就いて。

云何が說いて不善業道と爲す。』論に自釋して言はく、「迷理の煩惱は、復刹那等起と作り、身口業を動ぜずと雖も、而も能く遠く因等起と作るが故に、說いて業道と爲す」と。若し『成實』に依らば、具に七使を攝して三業道と爲す。貪、瞋の二使は當相各一なり。五見の心をば、通じて邪見と名く。彼宗に宣說す「五見の心は、同じく能く不善業を發起するが故に」と。』次に三毒を辨ず。問うて曰はく、『三毒は十使の中に、具に幾くの使を攝するや。』『當に知るべし、三毒を最も寬通と爲し、十使を具攝す。貪瞋は各一なり。餘の八使は、同じく名けて癡と爲す。同じく、捨、受、中容の境に依るが故に。』

(七)第三門の中に、三界の二輪煩惱に約就して、其三根、三道、三毒差別の相を辨ず。先に三根を辨ず。若し『毘曇』に依らば、三不善根は唯欲界に在り。上二界に非ず。上二界の中には不善無きが故に。欲界の中に就いて、通じて見、修二輪の煩惱を說いて、不善根と爲す。同じく能く不善の思を發起するが故に。若し『成實』に依らば、三不善根も亦欲界に在り。上二界に非ず。上二界の中には、設ひ不善を起すとも、欲界に繫屬す。是故に、偏に欲界に在りと說く。然るに『成實』の中には、上二界に在りて亦欲界の不善を寄起することを得。『毘曇』の一向に起さざるは、界地斷の故なるに同じからず。復欲界の中の見諦煩惱は、一向に定め說いて不善根と爲す。修惑は不定なり。若し殺等の根本業思に望むれば、修道の煩惱は不善根に非ず。何が故に是の如くなる。凡夫の時修道の煩惱は、但成就して現行せざるべし。現行せざるが故に、不善の業思を發起すること能はず。及び聖に

【次に等】次に三道に就いて。

【次に等】次に三毒。

【八】以下、第四に三相對して其優劣を辨ず。【雜心】論第三業品。

【九】染法聚第四段に三使を明す中三門分別あり、先づ釋名辨體。

在る時修業の煩惱は、復現行すと雖も、聖人は殺等の業思を起さず。是故に、修惑は不善根に非ず。若し打縛、是の如き等の思に望むれば、修惑も亦不善根と爲すことを得。聖人も亦打縛等を起すが故に。次に三道を明す。『毘曇』の如きに依らば、三道の煩惱も、亦欲界に在り。上二界の中には不善無し。故に欲界の中に就いて、亦二輪に通ず。中に於て、貪、瞋は見修に通じ、邪見の業道は正しく見惑に在り。何が故に是の如くなる。修道の惑の中に邪見無きが故に。若し『成實』に依らば三道の煩惱と『成實』の中の三根と同じ。但優劣あるべく、上下を異と爲す。次に三毒を明す。三毒の煩惱は、二輪齊等なり。通じて三界の一切の煩惱を攝す。斯を三毒と名く。

(八)第四門の中に、三門相對して其優劣を辨ず。煩惱に三有り。謂はく、上、中、下なり。三道の煩惱は、唯上品に在り。中下に通ぜず。故に『雜心』に云はく、「中に於て、增上を說いて業道と爲す」と。又『成實』に云はく、「暢思の煩惱は、必ず是れ增上なるが故に邪見と說く」と。若し三根を論ずれば、通じて中、上を取る。下品に通ぜず。微下の煩惱は業を發さず。故に三毒は則ち寛し。三品は倶に攝す。三根等の義、略して辨ずること是の如し。

三使の義に三門分別あり。名を釋し體を辨ず。斷處二。三障に約對して同異を辨ず三。

(九)三使の義、出でて『相續解脫經』の中に在り。煩惱の性は、隨つて繫縛す。之を名けて

【彼經】相續解脫經。

【一〇】第二に斷處を辨ず。

【一一】第三に同異を辨ず。

使と爲す。使の義、不同なり。一門に三を說く。一には害伴使、二には羸使、三には細使なり。其體性を論ずれば、乃ち是れ四住性成の結なり。麤細同じからざるをもて、分ちて此三と爲す。害伴と言ふは、四住使の中の麤品の使は、能く現起の諸煩惱結を生ず。所生の煩惱は、彼能生の麤使の與に伴と爲る。初めて五地に至つて彼使を斷除すれば、伴も亦同じく亡するを害伴使と名く。故に彼經に言はく「不倶生の惑は、彼倶生の煩惱の與に伴と爲る。初めて五地に至つて抑止を修習して、其をして行ぜざらしむるを害伴と名く」と。不倶生とは、猶是れ所生の現起の煩惱、緣に對して現生す。使性と報と倶起するに同じからざるを不倶生と名く。倶生と言ふは、猶是れ能生の麤品の結、久習して性成し、報と倶起すれば、名けて倶生と曰ふ。不倶の煩惱は、倶生の使の與に相隨ふを伴と名く。彼使地を斷ずれば、伴も亦隨つて傾く。故に害伴と說く。此害伴を擧げて其所伴の使の麤を彰す。羸使と言ふは、四住使の中の中品の使なり。前より微劣あり。現起の煩惱を發生すること能はず。故に名けて羸と爲す。細使と言ふは、四住使の中の下品の使なり。殘餘の習氣、前より微下なり。故に名けて細と爲す。名義是の如し。

〔一〇〕次に斷處を辨ず。經の中に說くが如し。初めて五地に至つて害伴を斷除し、六地、七地に羸使を斷捨し、八地已上に細使を斷除す。八地上所依の智障の無明薄少なるを以ての故に、四住の習氣をして行ぜざらしむ。斷處是の如し。

〔一一〕次に同異を辨ず。今此三使と、皮、膚、骨の三障と何の別かある。釋して言はく「三使

【三】染法聚第五段に三漏の義を明す。
【經】涅槃經第五
【雜心】第四。
【雜心】第四。

は是れ煩惱障、彼三障とは、是れ其智障なり。故に彼『相續解脫經』の中に、煩惱障に就いて三使を宣說し、智障の中に就いて三過を宣說す。三過は猶是れ『地持論』の中の皮、膚、骨等の智障所障なり。煩惱は卽ち是れ四住の惑なり。智障は卽ち是れ無明住地なり。三使の義、略して辨ずること是の如し。

三漏の義

【三】三漏と言ふは、一切の煩惱流注して絕えず。其れ猶瘡漏のごとし。故に名けて漏と爲す。故に經に說いて諸漏瘡疣と爲す。漏別同じからず。一門に三を說く。三名是れ何ん。謂ゆる、欲漏、有漏、無明漏なり。『雜心』に云ふが如し。「欲界地の中の一切煩惱は、唯無明を除いて、說いて有漏と爲す」と。外道の謂はく、「彼色、無色界は、是れ其結盡無漏涅槃なり」と。彼見を對除す。故に說いて有と爲し、三界の無明を無明漏と名く。問うて曰はく、『何が故に三界の無明を、合して一漏と爲す。』『彼無明は迷理の心なるを以て、理相平等にして別分すべからず。故に能く迷の心を、之に從へて一と說く。』又問ふ、「四流、四縛等の中、皆其見を說く。何が故に漏中に見漏と說かざる。」『雜心』に釋して言はく、「連注の義は是れ其漏の義なり。見心は捷疾なり。連注の義に於て相順はず。故に見漏を說かず」と。別說せずと雖も、當に知るべし、前の二漏の中に攝在す。然れども此三漏は、通じて二輪の一切煩惱を攝す。三漏の義、略して述すること此の如し。

【一】染法聚第六段に四縛四流四扼の義を明す。

四縛四流四扼の義

（一）四縛と言ふは、謂ゆる、欲縛、有縛、無明縛、見縛なり。名は四有りと雖も、體性は唯三なり。一に見、二に愛、三に是れ無明なり。取執の心を說いて、名けて見と爲し、染境の情を說いて以て愛と爲し、癡闇の意を說いて無明と爲す。問うて曰はく、「一切の疑、慢等の結は、何の中に攝在するや。」「當に知るべし、皆是れ愛分の所攝なり。」何の所謂有りて、偏に攝して愛に在りて餘の中に在らざる。本末利鈍を分たんが爲の故に爾り。無明は是れ本なり。理として別して一と爲す。餘は皆是れ末なり。中に入ることを得ず。復末の中に就いて、見は是れ利惑なり。理として復別つべし。自餘の鈍なる者は、中に在ることを得ず。是義の爲の故に、疑、慢等の結は癡見に入らず、愛の中に攝在す。愛の中に既に衆多の煩惱を攝す。何の義を以ての故に、偏に名けて愛と爲す。愛重きを以ての故に、偏に共名を標す。譬へば世間の王來り王去る。主として共名を得るが如し。彼亦是の如し。此三の中に就いて、愛を分ちて二と爲す。癡と見とは各一なり。故に四種有り。故に「雜心」に云はく、「欲界地の中の一切の煩惱、無明と見とを除いて、說いて欲縛と爲し、色、無色界の一切の煩惱を、無明と見とを除いて、說いて有縛と爲す」と。云何が有と名くる。諸の外道の人謂へらく、色、無色は、畢竟して愛無しと。彼見を破せんが爲の故に說いて有と爲し、三界の無明を無明縛と名け、三界の諸見を說いて見縛と爲す。何が故に愛を

分ちて、癡と見を合するや。此義廣く釋すること五住章の如し。然るに此四種は衆生を繋縛す。故に名けて縛と爲す。行人を漂流す。故に名けて流と爲す。能く衆生をして苦の爲に扼せられしむ。故に名けて扼と爲す。名義異なりと雖も、體性殊らず。四の中、初の一は止見諦に在り。見道の時斷ず。後の三は見修の二輪に通ず。上下通じて除く。四縛等の義、略して辨ずること是の如し。

【一四】染法聚第七段に四取の義を明す。

【成實論】第十二

四取の義

（一四）境に於て執著す。之を名けて取と爲す。取別不同に四種を離分するに、一には欲取と名け、二には我取と名く。『成實論』の中には我語取と名く。三には戒取と名け、四には見取と名く。名字是の如し。中に於て諸論の不同を辨釋す。若し『毘曇』に依らば、欲界の一切の諸の鈍煩惱は五欲を緣じて生ず。同じく欲取と名く。中に於て亦自身を取る者有れども、多に從つて名を立つ。故に欲取と說く。上二界の中の諸の鈍煩惱は、自身を縛して起れば同じく我取と名く。三界の中の戒取の心を說いて戒取と爲し、三界の中の餘の四見を、合して見取と爲す。問うて曰はく、『何が故に餘の四見を合して見取と爲し、獨一の戒取を戒取と爲すや。』『雜心』に釋して言はく、『等しく擔ふを以ての故に。』と。云何が等く擔ふ。謂はく、彼戒取は熾燃として業を集め、及び正道に違す。餘の四見と功力齊等なり。故に等しく擔ふと說く。云何が道に違する。諸の外道の如きは、不食等を取りて

【成實】第十一。

【五】染法聚第八段に四種身結の義を明す。【成實】第十二雜煩惱品。

以て正道と爲し、佛の諸の弟子は、糞掃衣を取り戒行を持する等を、以て正道と爲す。八正に乖違す。故に道に違すと名く。良に功力、餘の四見に等きを以ての故に、獨一と爲す。若し『成實』に依らば、身見を取る者を我語取と名く。我の實無きを以て、但我の名を取るが故に我語と云ふ。內報を緣ずるを我語と名くるに非ず。此我見に依りて邊見を起し、斷常を取著す。若し斷見の者には、則ち五欲を取るを名けて欲取と爲す。後世無きを以て現樂を貪するが故に。若し常見者には、利有り、鈍有り。若し利根の者には、神は是れ常なり、苦樂變ぜざれば、則ち罪福無しと說く。故に邪見を起すを說いて見取と爲す。若し鈍根の者の、則ち持戒を取つて後世の樂を望むを、說いて戒取と爲す。『成實』是の如し。論宗不同なり。各一義に隨ふ。是非を定め難し。問うて曰はく、『何が故に流、縛等の中には皆無明を說き、四取の中には無明を說かざる。』『雜心』に釋して云はく、『執取の義は是れ捷疾行なり。彼無明の心は捷疾に非ざるが故に、所以に說かず。』四取の義、之を略して爾云ふ。

四種身結の義

(一五)四種の身結とは、『成實』に說くが如くんば、彼世間に於て、自身、他身繫著して捨てず。故に身結と名く。結別不同に離分して四種あり。一に貪嫉身結、二に瞋恚身結、三に戒取身結、四に見取身結なり。此四は猶是れ貪、瞋、癡なり。初の一は是れ貪、次の一は

是れ瞋、後の二は是れ癡なり。相狀如何。『成實』に釋して言はく、「他の貪財に於て貪嫉の心を生ずるを、貪嫉結と名く。他人與らざれば則ち瞋怒を生じ、刀杖等を加ふるを瞋恚結と名く。此二は是れ、其在家の人鬪諍の根本なり。亦即ち名けて隨順樂邊と爲す。若し人、戒を持して、取つて清淨無漏の聖道と爲し、又烏、雞、鹿、狗の戒等を持して、以て眞淨と爲すを戒取結と名く。即ち所取をば以て眞實と爲し、餘は皆妄語なりと謂ふを見取結と名く。此二は是れ其出家の人の鬪諍の根本なり。亦即ち名けて隨順苦邊と爲す。此四の中に就いて、初の二は鈍使、後の二は是れ利なり。四種の身結、之を辨ずること爾り。

【二六】染法聚第九段に五住地を明す中八門分別あり、第一に釋名。

五住地の義に八門の分別あり。釋名一。辨體二。地起不同三。心の相應不相應四。即心異心五。見修の分別六。果に對して因を辨ず七。治斷の分齊八。

（二六）第一に名を釋す。五住の義は、『勝鬘』に說くが如し。一に見一處住地、二に欲愛住地、三に色愛住地、四に有愛住地、五に無明住地なり。見とは謂ゆる、五利の煩惱なり。推求を見と名け、見道に入る時一處に並に斷ずるを見一處と名く。本は末の依と爲る。之を名けて住と爲す。本は能く末を生ず。之を稱して地と爲す。欲愛と言ふは、欲界の煩惱、無明と見とを除きて外の五欲に著するを、名けて欲愛と爲す。欲界は已が色身を愛せざるに非ざれども、欲に著する情多きが故に欲愛と言ふ。又上に別せんが爲の故に、名けて欲愛と云ふ。住地は前に同じ。色愛と言ふは、色界の煩惱、無明と見とを除き、外の五欲を捨て

【一七】第二に體性を辨ず。

【成實】第十一。

己が色身に著するを、名けて色愛と爲す。色界に亦己が心を愛すべからざるに非ざれば、色に著するに情多きが故に色愛と言ふ。又上に別せんが爲の故に色愛と云ふ。住地は前に同じ。有愛と言ふは、無色界の中の所有の煩惱、無明と見とを除いて、色貪を捨離し、已心に愛著するを、說いて有愛と爲す。然るに此有愛、若し彼所愛に從つて名と爲すべくんば應に心愛と名くべし。若し下に背くに就いて、以て其名を立つれば、無色愛と名くべし。今は患を破するに就く。故に有愛と名く。何等の患をか破する。外道多く四無色定を取つて、以て涅槃と爲す。心愛を滅離し彼見を對破す。故に有愛と說く。住地は前に同じ。無明と言ふは、癡闇の心なり。體は慧明無きが故に無明と曰ふ。住地は上の如し。此五は皆能く行人を勞亂す。故に煩惱と曰ふ。名義是の如し。

(一七)第二門の中に、其體性を辨ず。體性は唯三。一に見、二に愛、三に是れ無明なり。五の中の初の二は是れ其見惑、中の三は是れ愛、後の一は無明なり。煩惱は無量なり。何の義を以ての故に、偏に此三を說く。此三重きが故に、所以に偏に說く。此三を說くと雖も、諸結皆隨ふ。譬へば世間の王來り王去れば、餘衆皆隨ふが如し。當に知るべし、一切の諸の煩惱の中、見、無明を除きて、自餘の諸結悉く愛の中に入ることを。若し愛の中に、偏に諸結を含せしむれば、何の義を以ての故に、偏に名けて愛と爲す。三界に受生するは、愛の力增强なり。强に從つて稱を立つ。故に偏に愛と名く。問うて曰はく、『成實』に、「貪瞋を除く自餘の煩惱は、皆癡使の攝なり」と說く。今此に、何の故に愛の中に攝入す

る。」釋して言はく、『法門各異なり。一類すべからず、彼『成實』の中には、三受及び三境界に約別して、以て三毒を別つ。貪は樂受順境に依りて生ず。瞋は苦受違境に依りて發す。癡は捨受中容の境に依りて起る。貪を除き、瞋を除きて、自餘の諸結は皆捨受中容の境に依りて起る。故に癡の中に攝す。今此には、本末利鈍の差別不同を分たんが爲に、是故に諸結悉く愛の中に入る。相狀如何。此義は、彼四縛章の中に具に廣く分別するが如し。無明は是れ本。理別して一と爲る。餘は皆是れ末なり。中に入ることを得ず。復末の中に就いて、見は是れ利使なり。理宜く須く分つべし。自餘は是れ鈍なり。中に入ることを得ず。是を以て瞋、慢、疑等の諸結は癡、見に入らず、愛の中に攝在す。愛を分つて三と爲す。癡、見は各一なり。故に五住有り。見は三界に通ず。何が故に一と爲る。釋に兩義有り。見は是れ迷心。斷除すべきこと易し。見道に入る時、一處に頓に盡す。故に治處に從つて、之を攝して一と爲す。是故に論の中に說かく「見惑を斷ずるは猶石を折くがごとし」と。二に見は理に迷うて生ず。理通じて別たず。故に所迷に從つて、之を合して一と爲す。何が故に、愛を分ちて以て三種と爲す。釋に兩義有り。一に愛の性、纏綿として斷除すべきこと難し。治處一に非ず。故に別して三と爲す。是故に論の中に、愛結を斷ずるは藕絲を絶つが如しと說く。二に愛は事を緣じて事を生ず。內、外、色、心の殊を別つ。故に所緣に隨ひて之を分つに三あり。三界の無明は、治、一處に非ず。何が故に一と爲る。良に無明は微細にして斷じ難きを以て、若し治處に從はば品別無量なり。局りて

三に在らず。是義を以ての故に、界別に隨つて說いて三と爲さざるのみ。然るに復無明は迷理の闇惑、事を緣じて生ずるにあらず。所迷の理は、平等一味なり。故に所迷に從ひて說いて以て一と爲す。斯れ乃ち且く一門の中に就いて、離合すること是の如し。若し餘門に入らば、癡と見とは亦多を分つことを得。故に彼九十八使門の中に、癡見の心を分ちて多と爲す。體性是の如し。

（一八三）第三に、其地と起との別を明す。四住の中、地と起と不同なり。汎く釋するに四有り。一に性と事と分別す。彼事識の中に、取性の煩惱をば、之を名けて性と爲し、之を說いて地と爲す。餘の見、愛等の一切の煩惱は、境に隨つて別して起る。之を說いて事と爲し、皆名けて起と爲す。彼取性とは、馬鳴の論の中に執取相と名け、亦執相應染と名く。餘の見、愛性を馬鳴の論の中には、計名字相と名く。名を尋ねて我を計し、及び諸結を生ずれば、計名字と名く。二に本末分別す。前の事の中に於て、十使は是れ地、十纏、六垢は是れ其所起なり。使、纏、垢等は、何の差別か有る。『毘曇』に說くが如し。「根本增上、之を說いて使と爲す。使に依りて生ずる所の津液の結を、說いて纏、垢と爲す」と。云何が津液なる。瓶に酥蜜を盛り、津液外に出づるが如し。津液結の中、急縛を纏と名け、輕繫を垢と稱す。三には成起分別す。一切の煩惱久習の性成する、之を說いて地と爲す。成ぜば何の處にか在る。成ぜば本識に在り。緣に對して現生するを、說いて以て起と爲す。四には前後分別す。一切の煩惱、前能く後を生ずるを、之を名けて地と爲し、後の起るこ

【一八三】第三に地と起との別を明す。先づ四住の中に四。一に事性分別。

【二に等】二に本末分別。

【三には等】三には成起分別。

【四には等】四に前後分別。

【無明の等】次に無明住地に就いて

【地持】第二。

と前に依るを、之を說いて起と爲す。無明の中に就いては、『勝鬘』に說くが如し。「無明を地と爲し、恆沙を起と爲す」と。此義云何。分別に二有り。一に癡の中に就きて、麤細分別す。妄識の中、任性の無知は是れ無明なり。地を緣じて了せざるは、是れ恆沙の惑なり。二に癡妄分別す。妄識の中に於て、癡闇の心は是れ無明地なり。妄想分別を說いて恆沙と爲す。『地持』に說くが如し。「是の如きの如實は凡愚知らず」と。當に知るべし。即ち是れ無明地なり。「是因緣を以て八妄識を起す」と。當に知るべし、即ち是れ恆沙の惑なりと。又復彼『起信論』に說くが如し。妄識の中、義六重を分つ。一には無明地、謂ゆる、根本不覺知の心なり。二には是れ業識、前の無明に依りて、不覺妄念忽然として動ず。三には是れ轉識、心想漸く麤にして外境を轉起す。四には是れ現識、妄心所起の虛浪の法、法應自心に現じて明鏡の中に衆色の像を現ずるが如し。五には是れ智識、前の妄心所現の法の中に於て、違、順、染、淨等の別を分別す。六には不斷識、亦相續識と名く。妄境心を牽き、心妄境に隨ひ相續して斷ぜず。海の浪の如し。六の中の初の一は、是れ無明地、後の五は妄知、是れ恆沙の惑なり。問うて曰はく、「若し此は是れ、恆沙ならば、二障の中に、應に智障に收むべし。何が故に論の中に、初の一種を說いて以て智礙と爲し、後の五種を同じく煩惱礙と名くる。」釋して言はく、「二障は階降不定なり。五住相望すれば、四住及び起を同じく煩惱と爲し、無明及び起を齊く智障と爲す。故に『地持』の中に、無明の八妄を同じく智障と爲す。無明の中に就いて、義に隨つて更に論ずれば、所起の恆沙を復煩惱と

【一九】第四に共相應不相應の義を明す。中に二、一に心識に對して明す

爲し、無明住地を獨り智障と爲す。故に此說を爲す。』問うて曰はく、「彼事識の中に於て、取性の無明は是れ何の地の收ぞ。妄識の中の所有の愛見は、是れ何の地の攝ぞ。」釋して言はく、「不定なり。略して二義有り。一に隱顯互に論ず。彼事識の中の取性の無明は本を以て末に從へば、攝して四住と爲す。彼妄識の中の所有の愛見は末を以て本に從へば、收めて無明と爲す。二に義に隨ひ通じて論ず。妄識の中の所有の愛見は、皆四住の收なり。事識の中の所有の無明は、亦無明の攝なり。」地起是の如し。

(一九)第四門の中に、共相應、不相應の義を明す。中に於て二有り。一に心識に對して、共相應、不相應の義を明し、二に惑體に就いて、共相應、不相應の義を明す。心に對すと言ふは、心に三種有り。一に事識心、謂ゆる六識なり。二に妄識心、謂はく、第七識なり。三に眞識心、謂はく、第八識なり。彼事識の中の所有の煩惱に、共相應、不相應の義有り。現起の者は心と相應す。是義云何。煩惱の數は心と別體なれども、心と共に同じく緣ず。故に相應と曰ふ。想、受等の如し。故に馬鳴の言はく、「心と念と異るも、同知同緣の故に相應と號す」と。性成の者は、是れ不相應なり。即ち心體を說いて煩惱性と爲し、別に數有りて、彼心王と共に相應するにあらず。故に彼妄識の中の一切の煩惱にも、亦相應、不相應の義有り。是義云何。馬鳴の說くが如くんば、妄識の中の義に六重を別つ。廣くは上に辨ずるが如し。此六種の中に、根本の四重を不相應染と名け、末後の兩重を心相應染と名く。相應の義釋は前に異らず。不相應とは、即ち妄心の體性是れ煩惱なり。是れ心外

【地經】第十一。
【次に等】二に惑體に就いて明す。

に別に煩惱有りて、心と共に相應するに非ざれば、不相應と名く。故に論に說いて言はく、「即心不覺にして常に別異無きを、不相應と名く」と。問うて曰はく、『何が故に、麤なる者相應する。』釋して言はく、『麤なる者は時有りて作意し、別想して起る。故に心と別にして、心と共に相應す。細なる者は性成して、別に起るに非ず。故に心と一體なれば不相應と名く。』一切の煩惱を彼眞心に望めて、亦相應、不相應の義有り。眞妄和合を相應と名け、眞妄別なるを不相應と名く。故に『地經』に言はく「心は相應、不相應相」と。論家釋して言はく「不相應の者は永く脫することを得ず」と。此一門竟る。次に惑體に就いて、其相應、不相應の義を明す。惑體に四有り。一に無明地、二に無明起、三に四住地、四に四住起なり。此四重の中に、無明住地は定んで不相應なり。故に『勝鬘』に言はく、「心相應せざるは、無始の無明なり」と。妄識の心は、體は是れ無明なり。故に不相應なり。無明の所起を、經に相應と說く。故に『勝鬘』に云はく「此起煩惱に於て刹那相應す」と。義に隨つて細論するに、中に於て亦不相應の義有り。此れ云何が知る。馬鳴の說くが如し、「業、轉、現識は是れ不相應染なり。智識、續識は是れ相應染なり」と。此五は皆是れ無明の所起なり。故に知る、亦不相應の義有るを。若し爾らば、『勝鬘』何が故に一向に說いて相應と爲す。無明に別たんが爲の故に、偏に言ふのみ。四住地とは、總相麤論すれば、唯心相應なり。義に隨つて細分すれば、亦相應、不相應の義有り。現行の者は、心と共に相應す。性成の者は心と同體なれば、不相應と名く。此義有るを以ての故に、『雜心』の中に、一

【二〇】第五に其即心異心の義を辨ず

家の使は定んで心相應なりと說き、一家の使は定んで不相應義なりと說く。旣に兩兼あり。偏に取るべからず。四住の所起は、一向に相應す。彼麤起と心と別なるを以ての故に。故に『勝鬘』に云はく『四住起とは、刹那相應なり』と。

（二〇）第五門の中に、其即心異心の義を辨ず。此れ解心に約して、其即異を明す。相に隨ひて別分すれば、四住の惑は一向に異心なり。一切の解心と俱ならざるが故に。無明は即心なり、細闇は麤解と俱なることを得るが故に。問うて曰はく『若し四住の惑、解と俱ならざるをもて異心と名くと言はば、見解起る時、修惑未だ斷ぜず。是時修惑、豈見解と俱ならざるべけんや。』釋して言はく『解惑と俱ならず。兩心並起せざるが故に。』『若し並起せずんば、彼見諦の解は、應に修惑を治すべきや。』釋して言はく『治するに非ず。心並緣せざるが故に並起せず。並起せずと雖も、修道の惑は見解と俱なるを得。故に治と名けず。』問うて曰はく『若し心並緣せざれば、修惑、見解俱起せず。俱起とは無明と解と亦應に是の如くなるべし。何に緣りて並ぶことを得る。』釋して言はく、『類せざればなり。修道の惑は、是れ起にして煩惱なり。故に起の解と俱生することを得ず。無明は是れ其任性の無知なれば、作意の起に非ず。故に彼起の解と同體なることを得。』分相是の如し。義に隨つて通じて論ずれば、四住の無明、皆即心異心の義有り。彼四住の中に、麤有り、細有り。麤なる者は、緣に對して作意して現生すれば、一向に解心と同體ならず。細なる者は、彼無明と同體にして任性成就すれば、麤解と同體の義を得。無明の中に、亦麤細有り。異

【三二】第六に見修に約對して分別す

相の無明、之を說いて盡と爲し、自性無明をば、說いて以て細と爲す。諸法の中に於て、迷うて了せず、明に解に相返すれば、名けて異相と爲す。妄識心の體は是れ無知なり。設ひ諸法に於て緣照分明なれども猶是れ闇惑なるを、性の無明と名く。人の夢中に了する所有りと雖も、性は是れ昏睡闇昧の心なるが如し。亦樂受の性は行苦なるが如し。此も亦是くの如し。此二無明は、皆卽心、異心の義有り。異相の無明を前品の治に望むれば、一向に卽心なり。前の治起る時、後の無明猶心に在るが故に。自品の治及び上品の治に望むれば、一向に異心なり。彼治起る時、前品の無明已に斷滅するが故に。自性の無明を、前品の治及び自品の治に望むれば、一向に卽心なり。此治起る時、自性の無明未だ斷滅せざるが故に。上品の治に望むれば、一向に異心なり。後の治起る時、前念の無明已に斷滅するが故に。問うて曰はく、「若し自性無明と自品の治と同體なることを得と言はば、云何が能く斷ぜん。」釋して言はく、「此斷は是れ、解生じ、惑滅するを斷と名くるに非ず。同體の智、眞に順ずる力に由るが故に、其卽體の自性の無明をして、更に後を牽かざらしむ。故に說いて斷と爲す。」此義、後の斷結章の中に、具に廣く分別するが如し。

(三二)第六門の中、見修に約對して五住を分別す。中に於て、分別に凡そ三種有り。一に隱顯互に論ず。初一住地は、唯見諦を障ふ。後の四住地は、唯修道を障ふ。見道の中、亦後の四住地を斷ぜざるに非ず。鈍を隱して利に從ふ。故に偏に見を說く。修道の中に亦初の見住地を斷ぜざるに非ず。利を隱して鈍に從ふ。故に之を說かず。二に難易分別す。初の一

【地論】第五。

【地經】第六。

【三】第七に生死に約對して其因を分つ。

【經】勝鬘經。

住地は、偏に見諦を障ふ。後の四住地は、通じて見修を障ふ。何が故に是の如くなる。見惑は除き易ければ、見道に入る時、一處に並び斷ず。是故に偏に、初の見住地は見道を障ふと說く。故に『地論』に言はく、「諸の見縛とは、見道の時斷ず」と。後の四は斷じ難ければ、一處に制せず、始終に方に遣る。故に後の四は通じて見修を障ふ。三には實に就いて論を爲す。五住の煩惱は、並に見修を障ふ。後の四住地は通じて障ふこと解すべし。初の見住地、云何が修を障ふる。釋して言はく「見惑は則ち是れ二種の著我の心なり。無我の理は頓に見るべからず。諸地に漸く證す。明かに知んぬ、我心は頓に遣るべからず、諸地に漸く斷ずることを。故に『地經』の中に宣說すらく「四地に身見を斷除するを護煩惱と爲し、第六地の中に二我を斷除するを、離障勝と爲す」と。明に知んぬ、見惑も亦修道を障ふることを。若し見惑通じて修見を障ふと言はば、云何が一處住地と名くることを得る。一處と言ふは、蓋し乃ち前の二門に從つて言を爲す。實に就いて通じて論ずれば、斯れ乃ち直に名けて見住地と爲し、一處と名けず。見修是の如し。

〔三〕第七門の中に、生死に約對して、以て其因を別つ。生死に二有り。一には分段、二には變易なり。三有の生死を、名けて分段と爲し、三乘の聖人の生滅の法身を、名けて變易と爲す。五住の中の前の四住は、地能く分段生死の與に因と爲る。故に經に說いて言はく、「又取を緣とし、有漏業を因として、而も三有を生ずるが如し」と。取緣とは、猶是れ四住地のごとし。問うて曰はく、「四住云何が因と作る。」『解に兩義有り。一に四住に依りて

【地經】第八。
【經】勝鬘經。

業を造り、生を牽くが故に、說いて因と爲す。二に四住に由りて業を潤し生を受く。故に名けて因と爲す。『毘曇』の如きに依らば、一切の煩惱同じく皆能く潤すと。若し『成實』に依らば、愛結能く潤す。餘惑は佐助すと。『地經』も亦爾り。無明能く變易の與に因と爲る。故に經に說いて言はく、「無明を緣と爲し、無漏業を因として阿羅漢、辟支、菩薩三種の生身を生ず」と。問うて曰はく、「無明云何が能く變易の與に因と作る。」「解に亦二に有り。一には無明に由つて無漏業を起し、變易の果を生ず。故に說いて因と爲す。二には無明に依つて變易の報を起す。故に說いて因と爲す。」問うて曰はく「無明云何が能く無漏業を起す。」「解に兩義有り。一には前は後の因と爲り、前の無明に由りて後の治を修起す。二には同時の因、無明は即ち是れ七識の心體なり。此心體に依つて無漏業を起す。睡心に依りて夢知を起すが如し。故に『勝鬘』に云はく、「無漏業生ずることは、無明地に依る」と。」又問ふ「無明云何が能く變易の報を生ずる。」「解に亦二有り。一には、前は後の因と爲る。前の無明は眞如を了せざるに由り、後の生滅をして變易の報を起さしむ。二には同時の因。無明は即ち是れ七識心の體なり。此は心體に依つて變易の果を起す。睡心に依つて夢中の身を起すが如し。故に說いて因と爲す。理實に凡の時の無明住地も亦分段を起す。妄想心に依つて生死を起すが故に、睡心に依つて夢の身を起すが如し。故に『涅槃』に云はく、「身と煩惱と一時にして有り」と。倶に一時なりと雖も、要ず煩惱に因りて身有ることを得。終に身に因つて煩惱を起すにあらず。燈は炷に因り、炷は燈に因るに非ざるが如

【二三】第八に治斷の分齊を明す。中に二、一に大小相對に就いて分別す

【地持】第一種性品。

【第二に等】次に直に大乘の中に就いての世出世相對分別。

し。此は無明に望めて以て同時を說く、四住に望むるに非ず。四住亦變易の果を起す。愛佛の煩惱能く變易法身の果を得るが故に、微なるが故に說かず。

(二三)第八に其治斷の分齊を明す。治斷の義は、二障の中に具に廣く分別するが如し。今略して之を顯す。中に於て二有り。一に大小相對に就いて分別す。二に直に大乘に就いて、世出世間相對して分別す。初對の中に就いて義別に三有り。一には隱顯互に論ず。小乘の中には唯四住を斷じ、大乘法の中には、唯無明を滅す。故に『勝鬘』に云はく「聲聞、緣覺は四住を斷除して、無明を斷ぜず。無明住地は唯佛の所斷なり」と。小乘法の中、亦分に無明を斷ずること有らざるに非ず。所斷微小なり。細を隱し麤に從ふ。故に斷ずと說かず。設ひ無明有るも、四住の所攝なり。大乘法の中、亦分に四住を斷ずること有らざるに非ず。所斷の相微なり。麤を隱し細に從ふ。是故に說かず。二には優劣相形す。小乘は解劣なり。唯四住を斷ず。大乘は治廣し、通じて五住を滅す。故に『地持』に云はく「聲聞種性は煩惱障淨にして、智障淨に非ず。菩薩種性は二淨を具足す」と。聲聞の人の煩惱障淨は、當に知るべし、即ち是れ四住斷なりと。菩薩の二淨は、當に知るべし、即ち是れ五住斷なりと。三には實に就き通じて論ず。小乘法の中、分に五住を斷ず。大乘も亦然り。小乘法の中、愛を除き見を除けば、即ち是れ四住なり。所斷の無明は、即ち是れ第五の無明の氣分なり。此初對竟んぬ。第二に、直に大乘の中に就いて、世、出世間相對分別す。解行已前を名けて世間と爲し、初地已上を名けて出世と爲す。中に於て分別するに乃ち四種

【涅槃】第六如來性品。

【二四】染法聚第十段に五蓋の義を明す中、五門分別あり、第一に釋名。

有り。一に麤を廢して細を論ず。地前の菩薩は、五住の煩惱一向に未だ斷ぜず。初地已上は、五住の結一切皆除く。故に『涅槃』に云はく「地前の菩薩は煩惱性を具す」とは、良に斯に在り。然るに初地上は理實に念念に齊く五住を斷ず。相に隨ひ別して分つに、先後無きに非ず。先後如何。初地の見道に初住地を斷じ、二地已上乃至七地に愛結を除滅して、彼欲愛、色愛、有愛の三種の住地を斷じ、八地已上に無明を斷除す。先後是の如し。二に隱顯互に論ず。地前の世間には唯四住を斷じ、初地已上には唯無明を滅す。地前に分に無明を斷ぜざるに非ず。所斷微少なれば細を隱し麤に從ふ。是故に但四住を斷除すと說く。初地已上は、亦四住を斷ずる義有らざるには非ず。所斷の相微なれば、麤を隱し細に從ふ。是故に但無明を斷除すと說く。明文無しと雖も、義亦應に爾るべし。彼證教に准じて、之を類して知るべし。三に優劣相形す。地前は解劣にして、唯四住を斷ず。地上は解勝にして、五住皆斷ず。四に實に就いて、通じて論ずれば、地前、地上並に五住を斷ず。始種性從り五住を斷除して、二障清淨なり。乃至佛地皆亦是の如し。五住の義、以て具に論じ難し。且く麤相に隨ひ、之を略して爾云ふ。

五蓋の義に五門分別あり。釋名一。體性二。離合三。次第四。行に對し蓋を辨ず五。

(二四)第一に名を釋す。五蓋と言ふは、一には貪欲、二には瞋恚、三には睡眠、四には掉悔、五には疑なり。外の五欲に於て染愛するを貪と名け、忿怒を瞋と曰ふ。睡眠と言ふは、論

【成實】第十一。

釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、一切の煩惱、境界に睡著して堪忍すること能はず。之を名けて睡と爲す。身心昏昧にして、境界を略緣し、之を說いて眠と爲す。五識、用無きを身昏昧と名け、意識沈沒するを心昏昧と名く。昏心少くして、能く廣く一切の境界を緣ずることを知らず。故に略緣と曰ふ。若し『成實』に依らば、心重くして眠らんと欲す。之を說きて睡と爲す。心を攝して覺を離る。之を目けて眠と爲す。掉悔と言ふは、躁動を掉と名け、所作の事に於て追變するを悔と稱す。法に於て猶豫するを、說いて以て疑と爲す。此五何が故に之を說いて蓋と爲す。論の解に四有り。一には是れ障の義、二には破壞の義、三には是れ墮の義、四には是れ臥の義なり。障の義と言ふは、論に自ら喩を爲す。譬へば、小樹、大樹に覆はれて、華果を生ぜざるが如し。衆生も是の如し。欲界の心樹、煩惱の爲に覆はれて、覺意の花及び沙門果を生ずること能はず。故に名けて障と爲す。破壞と言ふは、此五能く世及び出世一切の善法を破す。故に破壞と曰ふ。言ふ所の墮とは、此五は人をして三塗に顚墮し、生死に墮落せしむ。故に名けて墮と爲す。言ふ所の臥とは、此五は人をして三趣に轉廻し、長く生死に寢ねしむ。故に名けて臥と爲す。四の中の初の障は、正しく是れ蓋の義なり。破等の三種は、傍に其過を論ず。問うて曰はく、『蓋と覆と異なりと爲すや。』『通じて釋すれば、是れ一なり。其れ猶眼目のごとし。中に於て別分するに、義に左右有り。『毘婆沙』の如きは、四句に之を辨ず。一には蓋にして覆に非ず。謂はゆる過去未來の五蓋なり。『是義云何。蓋は是れ障の義。處有りて道無し。斯を名けて障

【二五】第二に體相を辨ず。中に六、一に多少分別。

【次に等】二に使纏分別。

と爲す。過未の煩惱成就の處には、必ず聖道無し。故に蓋と名くることを得。其覆を論ずれば、現起の煩惱は、人心を覆蔽して惺悟せざらしむ。故に覆と名くることを得。過未の煩惱は成じて行ぜず。現起の心の處には、此覆蔽無く、善を念じ淨法を樂求することを妨げず。故に覆と名けず。二には是れ覆にして、名けて蓋と爲さず。五蓋を除いて外に、諸餘の煩惱の現行する者是なり。謂はく、欲界の中の見、慢、無明及び上二界の一切の煩惱の現行するなり。此等は蓋に非ず。後に在りて別解す。三には亦は蓋亦は覆なり。五蓋煩惱の現行する者是なり。四に蓋に非ず覆に非ず。謂はく、欲界の中の見、慢、無明及び上二界の一切の煩惱の者の過未の者是なり。五蓋の收に非ず。故に蓋と名けず。現心を覆はず。故に覆と名けず。名義是の如し。

（二五）次に第二門に其體相を辨ず。中に於て、曲く六門の分別有り。一に多少分別、二に使纏分別、三に六識分別、四に三界分別、五に三性分別、六に時に約して分別す。多少と言ふは、『毘婆沙』に云はく、此五蓋は名に五、體に七、種別に三十あり。名の五は上の如し。體の七と言ふは、貪、瞋、疑の三と睡、眠、掉、悔と合して七と爲す。種の三十とは、貪欲、瞋恚、睡、眠及び悼は、見修通じて斷ず。彼四諦に約し及び修道に望めて、各別に五と爲す。此れ則ち別して二十五と爲す。疑は唯見斷なり、諦に約して門を分つ。悔は唯修斷なり、修に約して一と爲す。前に通じて合して三十種と爲す。多少是の如し。此一門竟る。

次に使、纏に約して分別を爲す。使は、謂はく、十使なり。五見及び疑、貪、瞋、癡、慢、

【瞿沙】ゴーシヤ（Ghosa）妙音と譯す。婆沙四評家の一。

是れ其十なり。纏は、謂はく、十纏なり。無慚、無愧、睡、悔、慳、嫉、掉、昏、忿及び覆、是れ其十なり。義は後に解するが如し。蓋體の七の中の貪、瞋及び疑は、是れ使の煩惱なり。餘の四は是れ纏なり。問うて曰はく「何が故に使纏の中に、偏に此七を說いて以て五蓋と爲し、餘の五を論ぜざる。」『毘婆沙』の中に一論師の云はく「此は是れ世尊有餘の說なり。受化の者の爲の故に此論を作す」と。瞿沙釋して云はく、「此五能く衆生の聖道及び道の方便を障ふ。是が爲に偏に說く。又此五種は、因果倶に障ふ。是が爲に偏に說く」と。因の時障ふとは、此五煩惱一一に現ずる時は、則ち有漏の善心及び不隱沒の無記の心を生ずることを得ず。何に況んや、聖道及び道の方便をや。果の時障ふとは、五蓋の果、惡趣の中に生ずれば、則ち一切の諸善の功德を障ふ。此過重を以て、是故に偏に說く。又『成實』に云はく、「此五種は、定を障ふる力強し。是が爲に偏に說く」と。貪、瞋の二種は、染汚の故に障なり。睡と眠とは、昏沈の故に障なり。掉と悔とは、動亂の故に障なり。疑は心猶豫して、善を敗り行を妨ぐ。所以に是れ障なり。問うて曰はく「使の中、五見の煩惱は何が故に蓋に非ざる。」『毘婆沙』に云はく「蓋は能く慧を滅す」と。五見は是れ慧なり。慧を以て還慧を滅すべからず。是が爲に說かず。又見は妄執なり。聖慧に翻違す。事緣の動ずるに非ず。定を障ふる力微なり。是が爲に說かず。何が故に慢使と、說いて蓋と爲さざる。『毘婆沙』に云はく「言ふ所の蓋とは心を覆沒す。慢は心をして高からしめ、覆沒して顯さず」と。是が爲に說かず。又復慢使は、已が長ずる所を恃みて、物を欺

【次に等】三に六識に約して五蓋を分別す。

き陵ぐ。慢心有る者は勝たんと爲ることを妨げずして、善法を求めて行ず。此義有るが故に、蓋と說かず。何が故に、癡使を說いて蓋と爲さざる。『毘婆沙』に云はく「覆は是れ蓋の義なり」と。貪瞋等の五は覆障の用等し。是が爲に宣說す。無明覆障の勢用は、偏に多し。五の伴類に非ず。故に五が中に於て無明を說かず。又復無明は、最も深重と爲す。五の流類に非ず。是が爲に說かず。謗法罪の五逆に入らざるが如し。又復無明は性、分別少し。定を障ふる義微なり。是が爲に說かず。又復無明は、微細にして覺り難し。聖慧方に遣る。定中に常に行じて、定の所治に非ず。是が爲に說かず。問うて曰はく「纏の中、無慚、無愧は、何の義を以ての故に、說いて是れ蓋と爲さざる。」「此は過麤に現ず。戒を修して防ぐ所なり。定の親しく斷ずるに非ず。是が爲に說かず。又無慚、無愧は是れ不善地の中に通じて有り。別の所治に非ず。是を以て說かず。」「慳と嫉とは、何んが蓋と說かざる。」彼利他に違し、自善を防せず。所以に說かず。忿と覆とは、何が故に蓋に非ざる。忿は義瞋に從ひ、覆は義貪に從ふ。故に別に說かず。此二門竟る。次に六識に約して五蓋を分別す。「成實」の如きに依らば、一切の諸蓋、皆意識に在りて後行心の中に起る。彼宗の意識は、義三性に通ず。五蓋は不善なり。故に意地に在り。彼宗の五識は、一向に無記なり。五蓋は不善なり。故に中に在らず。『毘曇』は六識皆三性に通ず。五蓋は不善なり。六識倶に總相有り。然りと雖も中に於て分別するに、通有り、局有り。是義云何。貪、瞋、睡、掉は、遍く六識に通ず。眠、悔及び疑は、唯意地に在り。良に五識は寤する時用ふる所なるを以

【次に等】四に三界分別。

【成實】第十二雜煩惱品。

【次に等】五に三性に約して分別す

【次に等】六に起時に約して分別す

て、境を取ること分明なり。焉んぞ眠返つて有らん。是が爲に眠無し。五識は一念なり。思量の性無く、得失を辨ぜず。是が爲に悔無し。若くは是、若くは非を分別すること能はず。是が爲に疑無し。此三門竟る。次に三界に約して、五蓋を分別す。通じて五蓋を論ずれば、悉く欲界に在り。中に於て細辨すれば、義に通局有り。瞋、眠及び悔は、唯欲界に在り。貪、疑、睡、掉は、遍く三界に通ず。此れ遍く通ずと雖も、中に於て分取すれば、欲界に在る者を說いて五蓋と爲す。上二界に非ず。何が故に是の如くなる。『毘婆沙』に云はく、「上二界には不善無きを以ての故に」と。『成實』に釋して云はく、「欲界の者は一向に定を障ふ。上二界の者は全く障ふるに非ざるを以ての故に」と。此四門竟る。次に三性に約して諸蓋を分別す。善、惡、無記は是れ三性なり。通じて論ずれば、五蓋悉く是れ不善なり。中に於て分別すれば、義に通局有り。瞋は唯不善なり。無慚、無愧と倶なるを以ての故に。貪、疑、睡、掉は、『成實』の如きに依らば一向に不善なり。若し『毘曇』に依らば、惡、無記に通ず。欲界に在る者を名けて不善と爲し、上二界に在るをば之を說いて隱沒無記と爲す。義兩兼なりと雖も、今は唯不善を分取して蓋と爲す。眠、悔の二種は體三性に通ず。今は唯不善の眠悔を分取して、以て五蓋と爲し、餘は說かず。問うて曰はく、「何が故に唯不善を說いて、以て五蓋と爲す。」「『毘婆沙』に云はく、「善法に對するが故に說く」と。」何等か是れ善法聚なる。謂はく四念處なり。何等か不善なる。謂ゆる、五蓋なり。麤重の過に就いて、五蓋を宣說す。故に唯不善なり。此五門竟る。次に起時に約して、以て多少を辨ず。

【三六】第三に離合を料簡す。

【成實】第十四。

寤する時貪を起すは、三蓋並び生ず。謂はく、貪、睡、掉なり。眠の中に貪を起すは、四蓋並び生ず。前の三の上に於て更に一の眠を加ふ。瞋、疑及び悔の類皆同じく爾り。貪と共に相似たり。寤する時睡を起すは、二蓋並び生ず。謂はく、睡と掉なり。眠の中に睡を起すは、三蓋並び生ず。前の二の上に於て、更に一の眠を加ふ。體相是の如し。

（三六）次に第三門に離合を料簡す。何の義を以ての故に、貪、瞋及び疑は獨り立ちて蓋と爲し、餘の二合するや。解に三義有り。一に使纒の強弱に約して分別す。貪、瞋及び疑は、是れ其使の性覆障する力強し。故に獨り蓋と立つ。餘は是れ纒の性覆障する力微なり。故に合して蓋と爲す。二には生緣に約して、以て離合を辨ず。此生ずる因緣は『成實』に云ふ所なり。『毘婆沙』の中に之を說いて食と爲す。煩惱の因緣、煩惱を資生す。故に食と曰ふ。其狀如何。貪、瞋及び疑は、生ずる因緣の別なり。故に立てて蓋と爲す。何者か別緣なる。『毘婆沙』に云はく、貪は淨想を用て、之を以て食と爲す。謂はく、色は是れ淨なれば便ち貪染を生ず。瞋は害想を用て、之を以て食と爲す。衆生に於て怨害の想を生ずるを以ての故に、瞋恚を生ず。疑は世法猶豫の想を用て、之を以て食と爲す。世事に於て猶豫して了らざるを以ての故に、疑心を生ず。睡と眠とは、生ずる因緣同じ。故に合して蓋と立つ。何者か生緣なる。緣別に五有り。『成實』に說くが如くんば、一には單致利。謂ゆる、睡眠を好樂する病なり。『毘婆沙』の中には、說いて睡夢と爲す。二には愁憂心。善樂ならず。『毘婆沙』の中には、說きて愁憒と爲す。三には頻申。『毘婆沙』の中には、

【二七】第四に其次第を辨ず。【成實】第十二雜揵信品。

說いて欠呿と爲す。四には飮食不調。『毘婆沙』の中には、食不消と名く。五には心退沒。爲す所廢息す。『毘婆沙』の中には、名けて心悶と爲す。掉と悔とは、生ずる因緣同じ。故に合して蓋と立つ。何者か生緣なる。緣別に四有り。一には親里覺。『毘婆沙』の中には、念親屬と名く。二には國土覺、『毘婆沙』の中には、念國土と名く。三には不死覺。『毘婆沙』の中には、念不死と名く。四に所更の喜樂の事を念ふ。緣に約すること是の如し。三に對治に約して、以て離合を辨ず。『毘婆沙』に說くが如くんば、貪、瞋及び疑は、對治各別なり。故に別して蓋と立つ。貪は不淨觀を用て對治と爲し、瞋は慈觀を用て對治と爲し、癡は因緣觀もて對治す。睡と眠とは對治同じきが故に、合して一蓋と爲す。謂ゆる、智慧なり。掉と悔とは對治同じきが故に、合して一蓋と爲す。謂ゆる、禪定なり。離合是の如し。

(二七)次に第四門に其次第を辨ず。『成實』に說くが如し。一切の凡夫、多く貪欲を起す。故に先づ貪を明す。欲に著するを以ての故に、他侵すときは則ち忿る。故に次に瞋恚を明す。經に言へらく、「愛從り瞋、嫉妬等を生ず」と。是れ人貪瞋に勞亂せらるるが故に、則ち睡眠を欲す。故に次に之を明す。睡眠小息すれば貪瞋還成して其心を嬈動す。故に次に掉を明す。掉動を以ての故に善利を具せず。所修の善に於て便ち憂悔を生ず。故に次に悔を明す。掉悔を以ての故に、出離の法に於て正しく信ずること能はず。便ち是念を作す。解脫有りと爲さんや。解脫無しと爲さんや。故に次に疑を明す。煩惱起ることは未だ必ずしも

【三八】第五に行に對して蓋を辨ず。

【龍樹等】智論第十七。

【地論】第五。

一定ならず。蓋し且く言ふのみ。次第是の如し。

〔三八〕次に第五門に、行に對して蓋を辨ず。義に通別有り。三門に之を顯す。其一義とは、別して三學に約して以て五蓋を辨ず。『毘婆沙』及び『成實』に說くが如し。貪、瞋の二蓋は能く惡業を發す。戒を障ふる義强し。偏に戒品を覆ふ。掉悔は動亂す。定障の義强し。偏に定品を覆ふ。睡眠、昏沈、慧を障ふる義强し。偏に慧品を覆ふ。疑心は善を敗り、正行を妨ぐ。通じて三品を覆ふ。其第二門は、別して止觀に約して以て五蓋を別つ。彼『深密解脫經』に說くが如し。掉悔動亂す。定を障ふる義强し。偏に止行を覆ふ、睡、眠及び疑は、心決了無し。慧を障ふる義强し。偏に觀行を覆ふ。貪、瞋は穢濁通じて止觀を覆ふ。其第三門は、通じて諸行に望めて以て其蓋を辨ず。此五の煩惱は通じて諸行を障ふ。障通するを以ての故に。『毘婆沙』に云はく、「此蓋有る者は、尙有漏の善法を生ずること能はず」何に況んや聖道及び道の方便をや。龍樹宣說す。「五蓋を斷除して初禪等を得」と。『地論』に宣說すらく、「五蓋を斷除して四無量を得」と。五蓋是の如し。

大乘義章卷五 本

【一】染法聚第十一段に五下分結を明す。

【成實】第十二雜煩惱品。

大乘義章 卷第五 末

遠法師撰す

五下分結の義

（一）五下分結とは、一には貪欲と名け、二には瞋恚と名け、三には身見と名け、四には戒取と名け、五には名けて疑と爲す。欲界の愛は外の五欲を貪す。故に貪欲と名く。亦貪心は前境を悕欲すべし。故に貪欲と名く。境に違して忿怒するを説いて、名けて瞋と爲す。身に於て我を見るを、名けて身見と曰ふ。戒を取つて道と爲すが故に戒取と名く。理實には亦施等を取つて道と爲す。但彼世人多く戒を取るが故に、偏に戒取と説く。實に據らば、應に戒等を取と名くべし。故に『雜心』に云はく「是中に等を除きて但戒取と云ふ」と。理に於て猶豫す。故に名けて疑と爲す。然るに此五種は『成實』の如きに依らば、四下結を具す。故に五下と名く。一には界下、二には果下、三には人下、四には所障下なり。界下と言ふは、貪欲、瞋恚は唯欲界に在り。上二界に非ず。稱して界下と曰ふ。故に『成實』に言はく「貪欲、瞋恚は欲界を出でず」と。果下と言ふは、貪、瞋、戒取は能く三塗下薇の果を得。故に果下と名く。故に『成實』に言はく「貪欲、瞋恚を生惡道と名く。戒取亦然り。牛戒を持するが如き、成ずれば則ち牛と爲る。若し持、成ぜざれば、則ち邪見を起

【成實】第十二。

【成實】第十二。【涅槃經】第三十六迦葉菩薩品。

し、因果無しと謗じて地獄の中に生ず。烏、鷄、狗の戒の類も亦是の如し」と。人下と言ふは、謂ゆる、身見、戒取及び疑は、唯凡夫起す。聖人に在らざるが故に人下と名く。故に『成實』に言はく、「此身見、戒取及び疑は、凡夫を出でず」と。所障下とは、即ち此身見、戒取及び疑なり。能く初果を障ふれば所障下と名く。問うて曰はく、「十使皆初果を障ふ。何の義を以ての故に、偏に此三、初果を障ふと說くや。」『涅槃經』に云はく、「此三重きが故に、所以に偏に說く。譬へば世間の王來り王去りて、主其名を得るが如し。彼も亦是の如し」と。又十使の中の見及び疑、此六使は、唯見諦を障ふ。見道に入るの時、名體倶に盡す。貪、瞋、癡、慢は、通じて見修を障ふ。通障を以ての故に見道に入るの時、分に除斷すと雖も盡さざるを以ての故に、斷の名を與へず。前の所斷の六使の中に就き、三使は是れ本、餘は則ち皆隨、身見は是れ本、邊見は是れ隨なり。身見に依りて斷常を取るを以ての故に、戒取は是れ本、見取は是れ隨なり。戒取に依り、彼見取を起して勝と爲すを以ての故に、疑は復是れ本、邪見は是れ隨なり。疑心從り邪見を起すを以ての故に、但今は本に就いて、偏に身見、戒取及び疑は能く初果を障ふと說く。餘は則ち皆隨なり。是故に論ぜず。彼三本は三隨を攝するを以ての故に、別に邊、邪の二見及與び見取を、下結と爲すと說くことを須ひざるなり。問うて曰はく、「何が故に癡慢を說きて、以て下結と爲さざる。」「彼上來の四種無きが故に、」『成實』是の如し。若し『毘曇』に依らば、正しく二下を具するを名けて下結と爲す。一には是れ界下、貪欲、瞋恚は唯欲界に在り。二には

是れ人下。謂ゆる、身見、戒取及び疑は、唯凡夫の起すなり。』論文正しく爾り。其果下とは、論に說かずと雖も、唯『成實』に依るに、理亦傷くること無し。所障下とは、一向に不同なり。何が故に然るや。成實法の中に、身見、戒取及び疑は定んで初果を障ふと宣說す。是故に須く所障の下を立つべし。毘曇法の中には、此三結は所障不定なり。戒、初果を障ふるは、次第の人所斷の如き者是なり。戒、二果を障ふるは、超越の斯陀所斷の者是なり。戒、三果を障ふるは、超越の那含所斷の者是なり。是義を以ての故に、所障下無し。五下分結、略標すること是の如し。

【二】染法聚第十二段に五上分結を明す。

【成實】第十二。

五上分結の義

（二）五上分結とは、經の中に說くが如し。一には是れ無明、二には是れ憍慢、三には是れ掉戯、四には是れ色染、五には無色染なり。癡闇の心を名けて無明と曰ひ、自ら物を擧して陵ぐを、稱して憍慢と曰ひ、躁動の意を名けて掉戯と爲し、色界の貪愛、己が色身を愛するを名けて色染と爲し、無色界の中の貪愛の煩惱、己が心を愛著するを無色染と名く。然るに此五の中に、三種の上を具するを名けて、上結と爲す。一には界上、二には人上、三には所障上なり。界上と言ふは、此五種、同じく皆、上二界に在りて起すが故に界上と名く。故に『成實』に言はく、「有人の謂はく、彼色、無色界を解脫と爲す。故に說いて上結と爲す」と。人上と言ふは、此五種は、斯れ皆是れ其學人の所起なるが故に、人上と名

【成實】第十二。

く。故に『成實』に言はく、「此五は、皆學人の行なるが故に、名けて上結と爲す」と。所障上とは、此五種、通じて能く無學の上果を障ふるが故に、上結と名く。若し之を別分すれば、色、無色染及び彼掉戲は、上界の所起なるが故に、上結と名く。問うて曰はく、『掉戲は欲界に亦起す。何の義を以ての故に、偏に上界を說いて以て結と爲すや。』『成實』に釋して言はく、『上二界中には麤煩惱無し。掉戲明了なり。故に偏に之を說く。無明、憍慢、此二種は學人の所起なり。人上なるを以ての故に、名けて上結と爲す。』と。問うて曰はく、『癡慢は、凡聖通じて起す。何が故に偏に學人の起と說くや。』『釋して言はく、『理實には凡聖通じて起す。但今は、學人の起する者を分取して上結と爲す。』』「若し爾らば、貪、瞋亦凡聖通じて起す。何んが聖人の所起を分取して、以て上結と爲さざる。』『經の中に、乃ち貪欲、瞋恚を說いて以て下結と爲す。齊く類するに、應に然るべし。但今は、貪瞋下界に繫屬する相狀分明なり。故に下界に從つて、判じて下結と爲す。』已に下結と判ず。宜く復聖人の起す者を說いて、上結と爲すべからず。若し障果を論ずれば、前釋に異ならず。此五種は、通じて能く無學の上果を障ふ。故に上結と名く。問うて曰はく、「下結は能く下果を障ふ。五上分結は能く上果を障ふ。中間の二果は誰か障と爲すや。」釋して言はく、「彼五下結の中に就いて、貪、瞋の二結は、下界に起すを以て、說いて下結と爲す。若し障果を論ずれば、通じて能く彼中間の二果を障ふ。五上分結、之を略して爾云ふ。

【三】染法聚第十三段に五慳の義を明す。【成實】第十二雜煩惱品。

五慳の義

(三)五慳の義は、『成實』に說くが如し。堅著して捨てず。之を目けて慳と爲す。慳は境別に隨ひ、離分して五と爲す。一には住處慳、二には家慳、三には施慳、四には稱讚慳、五には法慳なり。住處慳とは、人有り、己が住處に於て慳を生じて是の如きの念を作さく、「我獨り此に住す。餘人を用ひず。我をして自在ならしめん」と。是慳の過患に凡そ五種有り。一には未來の諸の善比丘に於て、來らしめんことを欲せず。二には已來の諸の善比丘に於て、瞋恚して喜ばず。三には去らしめんと欲す。四には僧物を藏して之を與ふることを欲せず。五には僧の施物に於て我所の心を生じ、計して恩德と爲す。此は是れ五過なり。是人彼共有法の中に於て、當に捨つること能はざるべし。何に況んや、自身所有の諸餘をや。是過を以ての故に、解脫の中に於て、終に分有ること無し。家慳と言ふは、人有り、彼俗家に往還するに於て慳悋の心を生じて、是の如きの念を作さく、「我此家に於て、常に獨り出入して、餘人を用ひず。設ひ餘人有れども、我をして最勝ならしめん」と。是慳の過患に亦五種有り。一には白衣に不吉の事有れば、之と同じく憂ふ。二には白衣に利益の事有れば、之と同じく喜ぶ。三には白衣爲す所の勝福を斷ず。四には受者を斷じて、施を得ざらしむ。五には其家に生じ、厠中の鬼及び諸惡處と爲る。施慳と言ふは、人有り、彼施物の中に於て、慳悋の心を生じて是の如きの念を作さく、「我此に於て獨り施物を得、餘者に得ざらしめん。設ひ之に與へしむるとも、我に過ぎしむること勿けん」と。是慳の過

【四】染法聚第十四段に五心栽の義を明す。

患に、亦五種有り。一には常に資生に乏し。二には施者をして、福を爲すことを得ざらしむ。三には受者をして、財利を得ざらしむ。四には善人を毀呰す。五には心に常に憂惱す。此過を以ての故に、是人未來に地獄の中に生ず。設ひ人と爲ることを得れども、常に貧窮に在りて資財有ること無し。稱讚慳とは、人有り、他の稱讚の中に於て、慳悋の心を生じて是の如きの念を作さく「獨り我を讚じて餘人を讚すること莫く、我に勝れしむること莫からしめん」と。稱讚慳と名く。是慳の過患に亦五種有り。一には餘人を讚することを聞いて、心常に擾動す。二には善人を毀呰す。三には自ら高しとして他を卑しむ。四には常に惡名を被る。五には未來百千世中に於て、常に淨心無し。法慳と言ふは、人有り、法に於て慳悋の心を生じて、便ち是念を作さく「我をして獨り十二部經を知らしめ、他をして知らしむること莫けん。設ひ他をして知らしむるも、我に勝らしむること勿けん」と。又自ら知れる義を祕して說かず。是過の差別に乃ち七種有り。一には所生常に盲ふ。二には常に愚癡を爲す。三には多怨の中に生じて、自在を得ず。四には聖胎を退失す。五には諸佛の怨賊なり。六には善人に遠離す。七には惡として造らざる無し。五慳の義、之を辨ずること略爾り。

五心栽の義

(四)五心栽の義とは、『成實』に說くが如し。栽とは、謂はく、栽蘖なり。疑謗の罪、心中に

【大師】富蘭那等の外道論師を指す
【外道の所說】四韋陀等。
【五】染法聚第十五段に五心縛の義を明す。
【成實】第十二雜煩惱品。

發生するは、世の毒種所生の栽蘖の如し。故に心栽と曰ふ。栽別に五有り。一には佛を疑ふ。二には法を疑ふ。三には戒を疑ふ。四には教化の法を疑ふ。五には善人を譏刺す。佛を疑ふと言ふは、人有りて、佛に於て心に正しく信ぜず、是の如きの念を作さく、「佛を大邪なりと爲さんや。大師を大なりと爲さんや」と。法を疑ふと言ふは、人有りて、法に於て心に正しく信ぜず。是の如きの念を作さく、「佛所說の經法は是邪なりと爲さんや、當に外道の所說是邪なるべしと爲さんや」と。戒を疑ふと言ふは、人有りて、戒に於て正しく信ぜず。是の如きの念を爲さく、「佛所說の戒法是れ勝れりとや爲さん。外道の說ける牛戒等勝れりとや爲さん」と。教化を疑ふとは、人有りて、彼五度門等に於て、心に正しく信ぜず。是の如きの念を作さく、「此五度等は、實に能く人をして涅槃を得せしめんや。當に得ざるべしと爲さんや」と。譏刺と言ふは、人有りて、彼善比丘の所に於て、横に譏刺を爲して、人をして輕薄せしむ。五の中、初の一は敬佛に違す。中門の三門は敬法に違す。後の一門は敬僧に違す。五心栽の義、之を略して爾云ふ。

五心縛の義

(五)五心縛とは、『成實』に說くが如し。「煩惱、惡法、心に纏りて捨てず。故に心縛と名く」と。心縛不同なり。略して五種を論ず。一には己身を貪す。二には外の五欲を貪す。三には樂みて在家、出家衆と合す。四には聖語に於て心に喜び樂はず。五には善法に於て小を

【六】染法聚第十六段に六垢義を明す、中七門分別あり、第一に列名辨釋。

【次に等】第二に使纏に對して共差別を彰す。

【雜心】第四十九

【次に等】第三に十使に對して共依の別を彰す。

得て足れりと爲す。五縛是の如し。

六垢の義に七門の分別あり。名を列ねて辨釋す一。使纏に約對して共差別を彰す二。十使に約對して共依の別を彰す三。識に就いて分別す四。界に就いて分別す五。性に就いて分別す六。道に就いて分別す七。

(六)第一に名を列ねて其相を辨釋す。六垢の義は『毘曇』に說くが如し。謂ゆる害、恨、誑、高、諂、惱なり。諸の衆生に於て、殘害するの意、之を名けて害と爲す。嫌怨捨てざる、之を名けて恨と爲す。欺詐を誑と名く。自擧を高と曰ふ。邪曲を諂と稱す。憔憂を惱と曰ふ。此六は、皆能く淨心を汚穢す。之を名けて垢と爲す。此一門竟る。次に使纏に對して共差別を彰す。『雜心』に說くが如く、煩惱の中の根本增上、之を說いて使と爲し、所生の津液の結を說いて纏垢と爲す。故に彼喩に言はく「瓶に蘇を盛るに、津液流出するが如し」と。盛る所の蘇は使の煩惱に喩へ、出づる所の津液は纏垢に喩ふ。此所生の津液結の中に就いて、忿縛の義を說いて、以て纏と爲し、輕繫の義をば、之を說いて垢と爲す。『雜心』の中の如きは、注釋是の如し。此二門竟る。次に十使に對して共依の別を彰す。『雜心』に說くが如し。「害、恨の二垢は、瞋恚に依りて生ず」と。瞋使に由るが故に、彼を殘害せんと欲す。亦瞋を以ての故に、恨を結びて捨てず。誑、高の二垢は、貪欲より生ず。貪使に由るが故に。前人を欺誑して其財利を取る。又貪を以ての故に。利を得て自ら高くするも、亦貪を以ての故に、自身に愛著して便ち自ら高心す。諂垢は五見に依りて生ず。聰利の人に非ざれば、

【次に等】第四に識に就いて分別す

【次に等】第五に界に就いて分別す

【黑齒比丘】阿濕婆恃即ち馬勝比丘のこと、五比丘の一。

【次に等】第六に性に就いて分別す

【次に等】第七に道に約して分別す

諂ふこと能はざるが故に。惱垢は見取に依るに於て生ず。見取の人は小を取つて、乃ち勝とするを以て、勝を求めて得ざれば、乃ち惱を生ずるが故に。故に『雜心』に言はく、「害、恨は瞋恚に依り、誑、高は貪欲に依る。謂ゆる五邪見は諂の依なり。是に由りて生ず」と。見取に依る果は是れ惱なりと說くこと、應當に知るべし。此三門竟る。次に識に就いて分別す。識は、謂はく、六識なり。此六垢は、起ること意地に在り。五識に通ぜず。『毘曇』、『成實』一例して此說に同じ。此四門竟る。次に界に就いて分別す。界は、謂はく、三界なり。六垢の中の害、恨及び惱は、是れ瞋恚の性、唯欲界に在り。諂と誑とは、上初禪を極めて共諂有るが故に、初禪の梵王は梵衆を誑諂す。言はく、「我最勝なり。佛所に至ること莫れ」と。又諂を以ての故に、黑齒比丘彼に往きて難詰す。默然として對へず。黑齒の手を執りて、地に屏れて之を求む。高は三禪に至る。若し『成實』に依らば、上界に起すと雖も、欲界に繫屬す。彼宗の煩惱は、寄起することを得るが故に。此四門竟る。次に性に就いて分別す。性は、謂はく、三性なり。此六垢の中の害、恨及び惱は一向に不善、餘の三は不定なり。欲界に在る者は一向に不善、上界に在る者は論宗不同なり。若し『成實』に依らば、亦是れ不善、『阿毘曇』に依らば、上界の所有は悉く是れ無記なり。此六門竟る。次に道に約して分別す。道は、謂はく、見修なり。此六種は、是れ修道の惑なり。修道の所斷は事に緣じて生ずるが故に、見諦に通せず。六垢の義、略して辨ずること是の如し。

【七】染法聚第十七段に七漏の義を明す。

【涅槃經】北本第二十二。

【經】涅槃經第二十二。

【涅槃】第三十。

七漏の義

（七）七漏の義は、『涅槃經』の中に具に廣く分別す。『成實』に云ふが如し。七漏の義は、『七漏經』の如しと。當に彼『涅槃經』に應ずべし。一切の煩惱、流注して絶えざること、其れ猶創漏のごとし、故に名けて漏と爲す。漏別不同なり。一門に七を說く。七の名是れ何ん。一には是れ見漏。二には是れ修漏。三には根漏と名く、四には惡漏と名く。五には親近漏。六には受漏と名く。七には念漏と名く。見漏と言ふは、蓋し乃ち所障に從つて名と爲す。見疑の煩惱、能く見道を障ふ。故に見漏と名く。修漏と言ふは、亦乃ち所障に從つて名と爲す。三漏の煩惱、能く修道を障ふ。故に修漏と名く。根漏と言ふは、經の中に說くが如し。「眼耳鼻等、能生を根と曰ふ。根に依りて漏を生ず。故に根漏と名く」と。惡漏と言ふは、謂ゆる一切の惡象、惡王、惡國、惡知識等、能く人を損害す。之を說いて惡と爲す。惡能く漏を生ず。故に惡漏と名く。親近漏とは、衣服、飲食、房舍、醫藥、此四事に於て、近きて漏を生ずるを親近漏と名く。受漏と言ふは、意覺を受けて、能く諸漏を生ず。故に受漏と名く。三惡覺とは『涅槃』に說くが如し。「欲、瞋及び惱は是れ三覺なり」と。念漏と言ふは、邪念を念と名く。念能く漏を生ず。故に念漏と名く。名義是の如し。七の中の前の二は、是れ其漏體、後の五は、是れ其漏を生ずる因緣なり。體は、謂はく、一切諸結の煩惱なり。道の不同に約す。故に二種を分つ。見諦を障ふる者を說いて見漏と爲し、修道を障ふる者を說いて修漏と爲す。後の五種の漏因緣中に就いて、根、惡、親近は、是れ

【八】染法聚第十八段に七使の義を明す。

共漏の緣、受と念とは、是れ共漏の因なり。彼緣の中に就いて、內有り、外有り。根漏は是れ內、餘の二は是れ外なり。外に違順有り。惡漏は是れ違、親近は是れ順なり。此三同じく能く遠く漏を助生す。故に說いて緣と爲す。彼因の中に就いて、受の三覺に因つて漏を生ず。故に受を說いて因と爲す。邪念に因つて漏を起す。故に念を說いて因と爲す。問うて曰はく、『經に說かく「受、想、觸、欲は、同じく是れ漏の因なり」と。今是れ何が故に、說いて因と爲さざる。』釋して言はく、『皆是れ、直是れ聖教隱顯して言ふのみ。』七の義、略して辨ずること是の如し。

七使の義

(八)七使の義は、『雜心』に說くが如し。隨逐繫縛、之を名けて使と爲す。使別不同なり。一門に七を說く。七名是れ何ん。一には貪欲使、二には有愛使、三には是れ瞋使、四には是れ癡使、五には是れ慢使、六には是れ見使、七には是れ疑使なり。然るに此七種は猶是れ十使のごとし。貪を分つて二と爲す。五見は合して一なり。故に七有るなり。貪欲使とは、欲界の貪心、五欲を貪求するを貪欲使と名く。有愛使とは、上二界の中の貪愛の心を有愛使と名く。外道は、彼色、無色界をば、以て涅槃と爲し、貪愛有ること無しと謂ふ。彼見を破せんが爲の故に、有と說くのみ。忿怒を瞋と名け、愚闇を癡と曰ひ、自擧を慢と名け、邪求を見と稱し、猶豫を疑と曰ふ。此義廣く釋すること十使章の如し。問うて曰はく、『何

が故に、貪愛の心は界に隨つて二を分ち、餘は是の如くならざる。』釋して言はく、『貪心は事に染して生ず。事に內外、上下の殊を別つ。故に所染に隨つて、上下二を分つ。又復貪愛は、上下に受生する繫力增强なり。故に分つて二と爲す。餘は是の如くならず。故に合して一と爲す。』相狀如何。彼瞋使の如きは、正しく欲界に在り。上界には瞋無し。故に說いて一と爲す。癡見及び疑は迷理の惑。理は同じく一味なり。故に所迷に隨つて、通じて以て一と爲し、界別に隨つて二と爲さず。慢使は復事を緣じて生ずと雖も、自ら擧して他を卑す。上下相同じ。多の異狀無し。故に合して一と爲す。貪使の、欲界の外を貪し、上界の內を貪するに同じからず。又復慢使は、上下界に於て、繫力微薄なり。是故に分たず。蓋し乃ち且く總相に就いて言ふ。若し九十八使の門の中に入れば、亦界別に隨ひて、之を分ちて多と爲す。七使の義、之を辨ずること略爾り。

八慢の義

（九）八慢の義は『涅槃經』に出づ、『成實論』の中に、具に廣く解釋す。自擧陵他、之を名けて慢と爲す。慢別不同なり。離分して八と爲す。一には直に慢と名く。二には大慢と名く。三には慢慢と名く。四には不如慢と名く。五には憍慢と名け、亦傲慢と名く。六には我慢と名く。七には增上慢。八には邪慢と名く。八の中前の五は、人に對して以て分つ。後の三は、其所持に就いて以て分つ。前の五の中に就いて、初の一慢は、下の境界及び等處に

【九】染法聚第十九段に八慢の義を明す。
【涅槃經】北本第十一。
【成實論】第十憍慢品。

於て生ず。次に一慢有り。唯等處に生ず。後の三種は、上の境處に生ず。初に慢と言ふは、下に方りて自ら高うし、等に於て等と計す。此過輕きが故に、直に名けて慢と爲す。此は陵る所無し。何が故に慢と名くる。『成實』に釋して言はく、「是中に其我相を執する過有り。故に說いて慢と爲す」と。大慢と言ふは、等に於て自ら大とするを名けて大慢と爲す。慢慢と言ふは、上境の處に於て、己、彼に勝ると謂ふ。彼此の過最も重し。名けて慢慢と爲す。不如慢とは、他實に己に過ぎ、玄に絕ちて仲に非るに己れ少しく劣なりと謂ふを不如慢と名く。他を陵ること多邊なるが故に、慢と說く。傲慢と言ふは、人有りて、彼父母師長に於て、能く恭敬せざるを、名けて傲慢と爲す。此前の五種は、人に對して辨ず。後の三は、其所恃に就いて以て別つ。我慢と言ふは、人有りて、陰に於て橫に我有りと計す。我を執して自らを高うす。故に我慢と名く。此諸慢の中の我を執する心なり。然るに、此我慢は凡聖に通ず。凡に在るを、名けて示相我慢と爲し、學心の中に在るを、不示相と名く。見諦に迷ふが故に、示相慢と說き、見諦に迷はざるを不示相と名く。增上慢とは、實に聖を得ざるに、而も已得たりと謂ふを、增上慢と名く。其聖法は、是れ增上なるを以ての故に。邪慢と言ふは、德無くして自ら高うし、惡を恃みて人を陵るを名けて邪慢と爲す。此八の中に就いて、我慢は是れ通、餘は是れ別なり。八慢の義、之を辨ずること麤爾り。

【一〇】染法聚第二十段に八惡覺の義を明す。【地持論】第四。

【一一】染法聚第二十一段に八妄想の義を明す中、三門分別あり、第一に釋名、【地持論】第二眞實義品。

八種惡覺の義

(一〇)八惡覺の義は、『地持論』に出づ。邪心思想する、之を名けて覺と爲す。覺は正理に違す。故に稱して惡と爲す。惡覺の不同、離分するに八有り。八の名是れ何ん。一には是れ欲覺、二には是れ瞋覺、三には害覺と名け。四には親里覺、五には國土覺、六には不死覺、七には族姓覺、八には輕侮覺なり。世間可貪の事を思量して欲心を起すを、名けて欲覺と爲す。世間怨憎の事を思量して瞋心を起すを、名けて瞋覺と爲し、亦恚覺と名く。打罵乃至奪命を念知するを、名けて害覺と爲し、亦惱覺と名く。親戚を追憶するを親里覺と名く。世の安危を念ずるを國土覺と名く。身不死を謂うて、爲に樂具を積むを不死覺と名く。又樂具を積みて身を資けて活らしむるを、亦不死覺と名く。氏族の若は高、若は下を思念するを、族姓覺と名く。他人を陵がんと念ずるを、輕侮覺と名く。侮は猶慢のごとし。此八は猶是れ修道の四使なり。欲、親、國土は貪分の攝、瞋、害の二覺は是れ瞋分の攝、不死覺は是れ癡分の攝、族姓、輕侮は是れ慢分の攝なり。八覺是の如し。

八妄想の義に三門分別あり。釋名一。因起二。五住に約對して共に相收攝す三。

(一一)第一に名を釋す。八妄想の義は『地持論』に出づ。不眞を謬執す。之を名けて妄と爲す。妄心相を取る。之を目けて想と爲す。心法一に非ず。何の義を以ての故に、偏に妄想と言つて、妄受及び餘の心法を說かざる。分別取相は、是れ共想の義なり。故に偏に之を說く。

【二】第二に因起を明す中四あり、一に八妄三事を生ずるを說く。
【論】地持論第二

復想を說くと雖も、餘も亦皆隨ふ。妄想の不同なる、分ちて八種と爲す。始自性從り乃ち俱相違に至る。自性と言ふは、法の自體を取るを名けて自性と爲す。法實に性無し。妄に之有りと謂ふ。故に妄想と云ふ。差別と言ふは、自性の處に於て諸法の相を取り、相に彼此を別つ。故に差別と云ふ。攝受積聚とは、前の自性差別の法の中に於て、共和合業用の相を取り、此業用の中に多法を攝受す。故に攝受と云ふ。此攝受の中に多法を積聚す。故に積聚と曰ふ。此を取るの心を名けて、攝受積聚妄想と爲す。我我所とは、彼攝受積聚法中に於て、內有り、外有り。內法の中に於て、妄に人有りと謂ふを、我妄想と名く。外法の中に於て、我所有りと謂ふを、我所妄想と名く。念妄想とは、前の所取の我所法の中に於て、違、順、中の三種の境を取る。順境界を取りて順情と爲し、愛すべく念ずべきを念妄想と名く。不念と言ふは、違境界を取つて以て違情と爲し、愛念すべからざるを、名けて不念と爲す。不緣を說いて不念と爲すと謂ふには非ず。蓋し乃ち貪心に對して以て名く。貪心の爲に愛念せられざるが故に、名けて不念と爲す。若し瞋心違境に對すれば、是れ其瞋心の所念も、亦名けて念と爲す。俱違と言ふは、中容の境界に、彼前の二に返ずるを、名けて俱違と曰ふ。俱違有るを取るを、名けて妄想と爲す。名義是の如し。

【二】第二門の中、差別に四有り。一に八妄、三事を生ずるを明す。二に單に八妄に就き、相因起するを明す。三に唯三事に就き、相因地するを明す。四に八妄三事、一切の煩惱業苦に辨對して、相因起するを明す。初に八妄、三事を生ずと言ふは、論の中に說くが如し。三事と言ふは、一には虛僞事。謂はく、心所起の妄想の境界なり。是境眞ならざるが故に虛僞と曰

【四次に第】二に八妄に就いて相の因起を明す。

ふ。二には見我慢事。顚倒の心、身に於て我を計し、我を執して明白なる、之を名けて見と爲す。此我見の中の境の上の重結は、八の中の我妄想に同じからず。我を執して物を陵るを、名けて我慢と爲す。三には貪恚癡事。境に順じて染愛する、之を名けて貪と爲し、境に違して忿怒する、之を說いて恚と爲し、中の境に了ならざる、之を目けて癡と爲す。三事是の如し。云何が八妄此三事を生ずる。論の中に說くが如し。初の三妄想は、虛僞の事を生ず。故に論に說いて言はく、「自性、差別、攝受積聚、此三妄想は是れ虛僞處なり」と。虛僞緣事は、此に由りて生ず。夢の心は、夢の境界に依りて生ずるが如し。次の二妄想は、見慢事を生ず。輕微の我我所の心に依りて、重き身見及び我慢を起す。後の三妄想は、貪恚癡を起す。念妄は貪を生じ不念は恚を生じ、倶違は癡を生ず。此一門竟る。次に八妄に就いて、相因起することを明す。此八の中に就いて、略攝して三と爲し、廣分して五と爲す。言ふ所の三とは、前の三を一と爲し、次の二を一と爲し、後の三を一と爲す。前の三は是れ本なり。此三妄に依つて我我所を起し、我我所に依つて後の三を起す。言ふ所の五とは、初の三は各一なり。次の二を一と爲し、後の三を一と爲す。此五の中に就いて、自性の妄性は是れ其根本なり。此に依つて差別の妄想を起す。謂はく、所取の自性の法の中に於て、差別の相を取る。故に論に說いて言はく、「自性の處に於て差別の妄想を起し、此差別に依つて攝受積聚妄想を起す」と。謂はく、所取の差別の法の中に於て、其積聚和合の用を取るなり。此積聚和合の用に依つて、我我所を起し、我我所に依つて、念、不念、

【次に等】三に三事に就いて相因起することを明す。

【次に等】四に八妄三事に就いて一切の煩惱業苦に對して相因起を明す

【論】地持論第二

【論】地持論第二

倶相違等を起す。我を以て所に對して、便ち違、順、中容の境別有り。故に念等の三種の妄を起す。此二門竟る。次に三事に就いて、相因起することを明す。論の中に說くが如し。「虛僞事に依つて見慢事を起す」と。良に虛僞の境界に迷ふを以ての故に、見慢を起し、見我慢に依つて貪恚癡を生ず。見我を以ての故に、順には則ち貪を生じ、違には則ち瞋を生じ、中の境には了せず。便ち無明を生ず。故に見慢從り貪恚癡を生ず。此三門竟る。次に八妄及び三種の事に就いて、並に一切の煩惱業苦に對して、相因起することを明す。中に於て、開合廣略一に非ず。或は說いて二と爲し、或は分つて四と爲す。或は離して七と爲し、或は別して九と爲す。言ふ所の二とは、論の中に說くが如し。一には是れ妄想、二には妄想緣事なり。內心を想と名け、境を緣事と爲す。過の妄想より現在の妄想緣事を起すは、無明行の、現の五果を起するが如し。現在の妄想緣事を知らずして、現在の緣事妄想を起すは、五果從り愛、取等を生ずるが如し。現在の緣事妄想を知らずして、復未來の妄想緣事を起すは、愛等從り後の生死を起すが如し。緣事生じ已つて、亦復彼緣事妄想を生ず。是の如く、心境互に相因起して、一切の生死、流轉して息まず。二想是の如し。言ふ所の四とは、一には是れ根本迷理の無明、二には是れ八妄、三には是れ三事、四には是れ一切生死の果報なり。彼根本の迷理の無明に依つて八妄想を起し、八妄想に依つて彼三事を起す。起の義は前の如し。彼三事に依つて、一切の生死の果報を起す。故に論に說いて言はく、「是の如きの如實は、凡愚は知らずして、八妄想を起し、三事を生じ、一切衆生の器世間

増す」と。凡愚知らざるは、即ち是れ第一の迷理の無明なり。八妄想を起すは、即ち是れ第二なり。三種の事を生ずるは、即ち是れ第三なり。世間増すとは、即ち是れ第四なり。言ふ所の七とは、根本の無明を以て第一と爲し、八妄想中の前の三妄想を合して第二と爲し、次の二妄想を合して第三と爲し、後の三妄想を合して第四と爲し、貪恚癡等を以て第五と爲し、業を第六と爲し、苦を第七と爲す。此七門、次第に相生じて、根本迷理の無明に於て、自性等の三種の妄想を起し、自性等に依つて我我所を起し、我我所に依つて念、不念、倶相違等を起し、彼念等に依つて貪恚癡を起し、貪恚癡に依つて諸の業行を起し、業行に依つて生死の苦を起す。七相是の如し。言ふ所の九とは、根本無明を、以て第一と爲し、八妄想の中の、前の三妄想を以て第二と爲し、三種の事の中の、虚僞の事を以て第三と爲し、八妄想の中の、我我所想を以て第四と爲し、三種の事の中の、見我慢事を以て第五と爲す。八妄想の中の、念、不念等を以て第六と爲し、三種の事の、貪恚癡事を以て第七と爲し、業行を八と爲し、生死を九と爲す。此九種の、次第相生は、初の無明に依つて自性等の三種の妄想を起し、此三妄に依つて虚僞事を起す。起の義は前の如し。虚僞事に依つて我我所を起し、我我所に依つて見慢事を起し、見慢事に依つて念、不念、倶相違等を起す。見我を以ての故に、之に對して、便ち違順等の生ずること有り。念等に依つて貪瞋癡を起し、貪瞋癡に依つて業行を起し、業に依つて、便ち生死の果報を受く。因起是の如し。

【一三】第三に五住に約して共に相收攝す。

【論】地持論第二

（一三）第三門の中に、五住に約對して、共に相收攝す。五住と言ふは、一には見一處住地、二には欲愛住地、三には色愛住地、四には有愛住地、五には無明住地なり。此義廣く釋すること五住章の如し。此八、通じて論ずれば、皆是れ無明なり。智障は淨智の遠離する所なるが故に、末を尋ねて本を取れば五住の所攝なり。八の中の初の三は、是れ無明地なり。但無明の中に、地有り、起有り。任性無知、之を説いて地と爲し、作意分別を説いて以て起と爲す。此前の三妄は作意して起るが故に、是れ起にして地に非ず。地に論に説いて言はく、「是の如きの如實は凡愚知らずして、八妄想を起す」と。凡愚知らざるは是れ無明地なり。所起の妄想は是れ無明の起なり。次の二妄想は、是れ五住の中の見一處地なり。但見の中に就いて、地有り、起有り。輕微の想は、我人有り、及び我所有りと謂ふ、之を説いて地と爲す。重心窮徹し執して我人を定むるを、説いて以て起と爲す。我及び我所、此二妄想は輕微の見、重計執に非ず。故に説いて地と爲す。所生の見慢は是れ共起なり。後の三妄想は、是れ欲愛、色愛、有愛の三種の住地なり。但愛の中に就いて、亦地、起有り。輕微の想、外の境界に於て、違、中、順の三種の境別を取る、之を説いて地と爲す。此に依つて貪瞋癡等を生ずるを、説いて以て起と爲す。後の三妄想は、乃ち是れ輕微の取相の心なり。故に説いて地と爲す。所生の貪等は、是れ共起なり。無明の中に就いて、細を隱し、麁を彰す。見愛の中には、細を彰し、麁を隱す。義の左右なり。八妄想の義、之を略して爾云ふ。

【一四】染法聚第二十二段に八倒の義を釋する中に九門の別あり、第一に釋名辨相。

【經】維摩經弟子品。

八倒の義に九門分別あり。名を釋し相を辨ず一。敎に約して分定す二。人に就いて辨定す三。倒起の所因四。三倒に約對して共同異を辨ず五。二著我に對して共に相收攝す六。十支に約對して共に相收攝す七。境に對して分別す八。治斷の差別九。

（一四）第一門の中に名を釋し、相を辨ず。言ふ所の倒とは、邪執。境を翻じて之を名けて倒と爲す。倒は境に隨つて別なり。以て算を限り難し。今一門に據りて、且く八種を論ず。八の名是れ何ん。謂はく、常、樂、我、淨、無常、無樂、無我、無淨は是れ共名なり。八が中前の四は生死有爲の法に迷するをもて、有爲倒と名く。若し所立に從はば、無爲倒と名く。後の四は涅槃無爲に迷するをもて、無爲倒と名く。若し所立に從はば、有爲倒と名く。前の四は如何。生死は無常なり。妄に是れ常と謂ふ。生死は實に苦なり。妄に是れ樂と謂ふ。生死は我無し。妄に我有りと謂ふ。生死は不淨なり。妄に是れ淨と謂ふ。是を顚倒と名く。問うて曰はく、「生死、實には是れ無常、苦、無我等ならば、衆生何が故に、計して常、樂、我、淨の法と爲すや。」「論の中に說くが如し。「有爲は相似相續して覆ふが故に、無常と知らず、橫に計して常と爲す。威儀覆ふが故に實に苦と知らず、妄に計して樂と爲す。作業覆ふが故に非我と知らず、妄に取りて我と爲す。薄皮覆ふが故に不淨と見ず、謬執して淨と爲す」と。」又問ふ、「經の中に生死法を說くに、具に五義有り。無常、苦、空、無我、不淨なり。今此に何が故に、唯四種を說いて、翻じて四倒と爲すや。」「此離合は、『優檀那』の中に、已に廣く分別す。若し生死無我法の中に就いて二無我を分たば、則ち

【成實】第十九。
【維摩】菩薩品。
【彼經】維摩經光嚴童子章。
【經】十地經。
【經】涅槃經第三十二。

五義有り。「成實」に說くが如し。「衆生空をば、之を名けて空と爲し、法體空をば、說いて無我と爲す」と。「維摩」の中の如きは、衆生空をば、名けて無我と爲し、法體の空をば、之を名けて空と爲す。故に彼經に言はく「衆生は是れ道場、無我と知るが故に。一切の法は是れ道場、諸法空と知るが故に」と。此二を分つに由つて五義有り。此五に翻對すれば、倒も亦應に然るべし。今此には合するが故に、但四と云ふのみ。』又問ふ『無我の理は染、淨に通ず。今此に何が故に、偏に生死を說いて無我と爲すや。』『然るに、我、無我通塞の義は、『優檀那』の中に、已に具に分別す。今重ねて之を顯さば、我と無我との義別、相對して凡そ四種有り。第一には直に解、惑の二情に就いて、相對して分別す。生死は有我、涅槃は無我なり。著我を以ての故に、世間に生を受く。故に有我と說く。是を以て經に言はく「世間の受生は、皆著我を以てなり。若し著我を離るれば、則ち受生無し」と。斯文顯なり。二には法相に就いて、虛實相對す。生死は無我、涅槃は有我なり。生死の法は、虛誑にして實ならず、又自在ならず。故に無我と名く。涅槃は眞實なり。八自在を具す。故に有我と名く。是を以て經に言はく「生死は無常無我樂常。涅槃は是れ常是れ我樂常」と。三には如理に據り以て諸法に通じて、生死、涅槃の二、倶に無我なり。故に經に說いて言はく「凡夫我空、乃至諸佛の生死法空、乃至涅槃」と。四には假用及以び實性に就き、以て諸法を貫く。生死、涅槃の二、倶に有我なり。生死我とは、其二種有り。一には世諦假名の我。謂ゆる五陰和合して人と爲る。故に經に說いて言はく「衆生の佛性は六法を離

れず」と。六とは、謂ゆる五陰及び我なり。故に知んぬ假用は有我、無にあらずと。二には實性の我。我は、謂はく、佛性なり。故に經に說いて言はく、「二十五有、我有りや不や」佛の言はく、「我有り」と。我とは、謂ゆる如來藏性なり。生死の中に斯の兩義を具す。故に有我と名く。涅槃も亦爾り。諸法和合して、假に名けて佛と爲す。是れ其假我なり。佛性、法身の體を顯成す。是れ其實我なり。我、無我の義、通局是の如し。今第一に據る。故に生死は一向に無我、涅槃は有我と說く。生死を說いて無我と爲すを以ての故に、之に對して倒と說く。局りて有爲に在り。無爲の四とは、涅槃は實に是れ常、樂、我、常なり。妄に無と謂ふが故に顚倒と名く。問うて曰はく、「涅槃は、實に是れ常、樂、我、常の法なり。衆生何に緣つてか此四倒を起す。」釋して言はく、「如來は世間を化するに隨つて、有爲に示同す。衆生は解せず。應を執して眞に迷ふ。故に此倒を起す。」問うて曰はく、「涅槃は備に多義を含む。何の義を以ての故に、偏に此四を說いて、翻じて四倒と爲す。」釋して言はく、「涅槃は多義を含むと雖も、今一門に據りて此四種を論ず。經論の中に、凡そ五義有り。所以に建立す。涅槃章に具に廣く分別するが如し。一には四患を離れ、二には四倒を翻じ、三には四障を除き、四には四過を斷じ、五には四因に翻す。四患を離るとは、生死の無常、無我、樂、淨、彼に翻離す。故に涅槃の常、樂、我、淨を宣說す。四倒に翻ずとは、前に說く所の無爲の四倒の如し。彼に翻對するが故に、是四義を說く。四障を除くとは、一寶性論に說くが如し。一には緣相。謂はく無明地は佛の眞淨を障ふ。彼に翻對する

【一五】第二に教に約して辨定す。

が故に、佛の眞淨を說く。二には因相。謂はく無漏業は佛の眞我を障ふ。彼に翻對するが故に、佛の眞我を說く。三には生相。謂はく意生身。此意生は苦陰身なるを以ての故に、佛の眞樂を障ふ。彼に翻對するが故に、佛の眞樂を說く。四には壞相。謂はく、變易死は佛の眞常を障ふ。彼に翻對するが故に、佛の眞常を說く」と。四過を斷ずとは、『寶性論』に說くが如し。一には闡提の謗法。彼を斷離するが故に、佛の眞淨を得。二には外道の著我。彼を斷離するが故に、佛の眞我を得。三には聲聞の畏苦。彼を斷離するが故に、佛の眞樂を得。四には辟支の捨心、諸の衆生を捨す。彼を斷離するが故に、佛の眞常を得」と。四因に酬すとは、『寶性論』に說くが如し。一には信心。前の謗法を除くが故に、淨果を得。二には般若。前の著我を除いて、佛の眞我を得。三には三昧。前の畏苦を除いて、佛の眞樂を得。四には大悲。常に衆生に隨ひて、前の捨心を除いて佛の眞常を得」と。斯左義を以ての故に、涅槃に就いて四德を建立す。彼に翻對するが故に、說いて四倒と爲す。倒相是の如し。

(一五)第二門の中に、教に約して辨定す。教に大小を別ち、所說亦異なり。中に於て分別するに、凡そ三種有り。一には隱顯互に論ず。小乘法の中には、唯常、樂、我、淨の四倒を說く。衆生をして、有爲の法は無常苦なりと知らしめんが爲の故に。然るに彼小の中に、如來は苦、無常等と見ると雖も、乃ち是れ正見なり。顚倒と名けず。佛、有爲法に示同するを以ての故に。是を以て無爲の四倒を說かず。大乘法の中には、唯無常、無我、苦等の無

爲の四倒を說く。衆生をして、無爲法の常、樂、我、淨にして、大涅槃に趣くことを知らしめんが爲の故に、斯倒を說く。有爲の四倒は、小の中に已に說く。故に更に論ぜず。設使之を說けども、小乘と同じ。異る無きを以ての故に、猶名けて說かざるがごとし。二には大を簡びて小に異す。小乘法の中には、唯常等の有爲の四倒を說く。大乘法の中には、具に八倒を說く。小乘には、無爲の四倒を說かず。義は前に釋するが如し。大乘法の中には、衆生をして、生死の過を知らしめんと欲す。故に須く有爲の四倒を宣說すべし。衆生をして、大涅槃、常、樂、淨の法に趣かしめんが爲に、故に須く無爲の四倒を宣說すべし。三には義に隨つて具に論ず。小乘法の中には、具に七倒を說き、大乘法の中には具に八倒を說く。小乘の七とは、八倒の中に無我倒を除いて、餘の七種を說く。彼說かく、「凡夫は有爲の中に於て、具に四倒を起し、小涅槃に於て三倒を起す。常を無常と見、樂をば見て苦と爲し、淨を不淨と見る」と。何の因緣の故に、常を無常と見る。外道の人は無想天を取つて、以て涅槃と爲し、彼報盡き已りて、便ち一切涅槃無常なりと謂ふ。復何の因緣あつてか、樂をば見て苦と爲すや。外道心に念ず。現に世人を見るに、或は一耳を小き、或は一目を小き、便ち以て苦と爲す。況や復都て盡るは、寧んぞ大苦に非ざらんや。故に苦倒を起す。是を以て經に言はく、「凡夫は寧ろ癡野干の身を受るとも、泥洹を求めず。怖畏なるを以ての故に」と。又復何に因つてか、計して不淨と爲す。外道念言すらく、「現に世間を見るに、刀をもて死尸を害すれば、刀是れ不淨なり。道を以て結を除かば、道も亦

不淨なり。不淨の道を以て得る所の涅槃は、當に知るべし、涅槃も亦是れ不淨なり」と。又有人の說かく「欲界の身は卽ち是れ泥洹なり」と。又此身の不淨穢惡を見て、眞の泥洹も亦是れ不淨なりと謂ふ。是故に涅槃不淨なりと宣說す。何が故に、無我倒を起さゞるや。小乘の中には、涅槃を說いて以て我と爲さざるが故に、彼に翻じて無我倒を說くことを得ず。問うて曰はく『若し小乘の涅槃、是れ常、樂、淨をして、翻じて倒と爲さしめば、何が故に經に、小乘の涅槃は唯樂、淨有りて、常、我有ること無しと言ふや。』釋して言はく、「以有り。大乘法の中には、小乘の人は無餘に入ると雖も、未來に心想當に必ず更生すべしと說く。故に小乘の涅槃は無常なりと說く。小乘法の中には但其滅を說いて、生を隱して說かず。故に小乘の人は、小涅槃を取つて、之を以て常と爲す。又大乘の中には、小涅槃は是れ滿足にあらず、終に須く遷轉して、大乘に趣向すべしと說く。故に無常と名く。小乘教の中には更に去と云はず。故に說いて常と爲す。』『問うて曰はく、「未來に心想生ずる時、何に因りてか生ずることを得る。』『本所修の無漏業因は、無明を緣と爲すを以て、是故に生ずることを得。此生は、卽ち是れ變易生なり。』又問ふ、「無餘滅し去りて、心想後に還生ずれば、有餘涅槃滅し去りて、煩惱後に還生ずるや不や。』釋して言はく、「生ぜず。』何が故に然るや。煩惱は原理を見るに由りて滅す。故に永く生ぜず。所滅の智は、本但息滅なり。理を見て斷ずるに非ず。是に由つて更に生ず。又問ふ、「若し大乘法の中に小涅槃を說いて、更に須く遷轉して無常と名くべからしめば、須く遷轉すべきが故に、應に

【二六】第三に人に就いて辨定す。

【涅槃】第二。

樂、淨に非ざるべし。釋して言はく、「齊く理に類するに、亦應に同じかるべし。但遷轉は是れ無常の義なるを以ての故に、常と名けず。其所得の寂滅離法に隨ふ。故に樂、淨と云ふ。小乘是の如し。大乘法の中には、具に八倒を說く。義上に辨ずるが如し。教別義爾り。

〔二六〕第三門の中に、人に就いて辨定す。人とは謂ゆる凡夫二乘なり。中に於て分別するに、三種有りと爲す。一には隱顯互に論ず。凡夫は唯常等の四倒を起す。生死の無常等を知らざるが故に、佛も已に同じく常、樂、我、淨なりと謂ふ。是故に、無爲の四倒を起さず。二乘は唯無爲の四倒有り。有爲の四倒は、先に已に捨離す。所以に起さず。佛も已に同じく無常、無樂、無我、不淨なりと謂ふ。是故に倒を起す。二には終を簡びて始に異す。凡夫は是れ始は唯常等の有爲の四倒有り。無爲の四倒は、凡夫未だ起さず。義は上に辨ずるが如し。二乘の人は、具に八倒を起す。良に二乘は、有爲の中に於て習倒未だ捨てず。是故に猶有爲の四倒を起す。又二乘の人は、未だ法空を得ず。未だ諸法の自性無常を知らず。故に常倒有り。未だ諸法の自性壞苦を知らず。故に樂倒有り。未だ諸法の虛集無我を知らず。故に我倒有り。究竟淨法體空を得ず。故に淨倒有り。故に『涅槃』に云はく、「汝諸の比丘、苦法の事の中に於て、妄に計して樂と爲し、乃至不淨を計して淨と爲す」と。斯文顯なり。二乘の人無爲法に於て、正に四倒を起すは、理知り易きに在り。問うて曰はく、「二乘、自の涅槃に於ては、猶倒を起して無常等と說かず。何が故に、如來の涅槃を無常

【涅槃】第二。

【一七】第四に其倒起の所因を明す。

【涅槃】第二。

等と爲し、顚倒を起すと宣說するや。』釋して言はく『以有り。小乘の法の中には、唯數滅を說いて、以て涅槃と爲す。故に涅槃に於て、無常、不淨、苦等を說かず。但無我を說く。佛所得の數滅涅槃に於ても、亦此見に同じ。但二乘の人は、已が身智の苦、無常等を見て、佛も同じく然りと謂ふ。故に四倒を起す。三には義に隨うて共に論ず。凡夫、二乘並に八倒を起す。凡夫は彼有爲法の中に於て、四顚倒を起す、理知り易きに在り。何に因つてか、彼無爲の四倒を起す。凡夫の人、亦如來も世の有爲に同じく、苦、無常等なりと聞く。故に無爲に於て四顚倒を起す。故に『涅槃』の中に於て、凡夫八倒の邪曲を宣說す。二乘、具に起す義は、上に辨ずるが如し。人に就くは是の如し。

(一七)第四に、其倒起の所因を明す。此八倒は、何に因つて生じ、何に緣つて起るや。何に因つて生ずとは、八倒は三倒に因つて生ず。『涅槃』に說くが如し。三に因つて八を起すは、後門の中に、別に當に廣く論ずべし。問うて曰はく『已に三に因つて八を起すことを知らば、直に八の中に於て、相起すことを得るや否や。』釋して言はく、『亦得。』有爲倒の中に、我、淨は是れ本なり。之に依つて常、樂二倒を集起す。我に依つて常を起し、淨に由つて樂を計す。故に『地經』に言はく『我淨の二倒を名けて惡心と爲す。專念の行に非ず。常、樂の二倒を名けて惡意と爲す。是れ專念の行なり』と。根本の集起は、是れ其心の義、因緣の現起は、是れ其意の義なり。我、淨は是れ本にして、能く常、樂を集む。故に名けて心と爲す。久習性成して、作心して起すに非ざれば、非專念と名く。常、樂は是れ末

【涅槃】第十八。

【涅槃】第八。

【寐語】ねごと。

【經】涅槃經第八

にして、因緣現起す。故に名けて意と爲す。作意にして發するを、專念の行と名く。皆是れ理に違す。故に通じて惡と名く。無爲の四倒は、有爲の本末に翻對して知るべし。無我、不淨は、還つて是れ根本、餘の二は是れ末なり。所因是の如し。無我を計するに由つて、便ち無常と謂ひ、不淨を計するを以て、便ち實に苦と謂ふ。所緣は云何、八倒皆聖教に緣つて生ず。教今古を別てば所立も亦異なり。有爲の四倒は昔の教に緣つて生ず。無爲の四倒は今の教に依つて起る。云何が有爲、昔の教に緣つて生ず。『涅槃』に說かく、「過去の諸佛、涅槃の常、樂、我、淨を宣說す。彼佛の滅後に諸の外道等、佛の經を抄掠し、已曲に安置して便ち常、樂、我、淨の四種の名字有るを聞くことを得。其名を聞くと雖も、其義に達せず。便ち己身に於て妄想建立して、常等有りと說く」と。又『涅槃』に云はく、「如來、過去に菩薩爲りし時、現世を化するに隨つて、諸の衆生の爲に、佛性の常、樂、我、淨を宣說す。菩薩後時に他土に遷化す。衆生本、昔菩薩に從ひ、常、樂、我、淨の名字有るを聞き、其義有るを解せずして、便ち己身の常、樂、我、淨を說く。是に因つて、衆生迭に相承習す。乃至今日、猶己身の常、樂、我、淨を說く。人夢中に刀刀と寐語するが如し」と。故に經に說いて言はく、「一切の凡夫の所說の我とは、皆是れ佛說なり」と。若し佛說を離れては、世間に我の名字有ること無し。常、樂も亦然り。云何が無爲、今の教に依りて起る。經の中に說くが如し。「如來、諸の衆生を化せんが爲の故に、亦有爲に同ず。衆生をして有爲の過を知らしめんと欲するが故に、己身の無常、苦等を說いて、物をして同

【一八】第五に三倒に約對して其同異を辨ず、先づ三倒を明す。

【毘婆闍婆提】ギバージャ、ヴーデイン(Vibhajya-Vadin)分別說部のこと。

【達摩多羅】ダルマトラータ(Dharmatrāta)法救のこと。婆娑四大論師の一。

じく知らしむ。衆生聞已つて、便ち如來實に有爲の無常、苦等に同じと謂ふ」と。無爲の四倒、茲に因りて起る。倒起の所因、之を略して爾云ふ。

(一八)第五門の中に、三倒に約對して其同異を辨ず。先に三倒を明し、後に同異を辨ず。三倒と言ふは、謂はく、心想見なり。此三義を釋するに、諸宗不同なり。乃ち四別有り。一には毘婆闍婆提の說に依る。心心數の法は、體同時なりと雖も、用前後を別つ。故に三種を分つ。彼說、云何が先に想、次の心、後に見倒を起す。初に微想を起して、常等有りと謂ふを、名けて想倒と爲す。次に重ねて心を起して前の所想を緣じ、取りて定有と爲すを、名けて心倒と爲す。後見成就して、所取の中に於て執見分明なるを、說いて見倒と爲す。『大智論』隨喜品の中の如き亦此說に同じ。故に彼文に言はく「先に想倒を起し、次に心、後に見」と。然るに彼文の中に、小乘所斷の三倒を宣說し、大乘を說かず。大乘の所斷は、此說に同じからず。二に達摩多羅の所說に依らば、直に同時心心數法に就いて、義に三倒を分つ。心は是れ心王、想は是れ想數、見は是れ慧數なり。此三の中に、見は是れ倒の體なり。心、想は倒に非ず。見と相應して見の爲に亂さるるを、通じ名けて倒と爲す。見能く一切の心法を濁亂す。何が故に、唯亂心亂想と言ふ。心は是れ其主なり。故に偏に心を說く。想は能く相を取る。見を助くる中に強なり。故に偏に想を說く。又『雜心』に云はく「心と想とは、世人多く說く。故に偏に之を說く」と。『三に『成實』に準じ四心に約就して、以て三種と爲す、彼宗の中には、識、想、受、行の四心前後せり。此四の中に

就き、前の三心を說いて、以て三倒と爲す。識を心倒と爲し、想を想倒と爲し、受を見倒と爲す。良に受心、境を覺すること分明なるを以ての故に、說いて見と爲す。此心、想、見は、體是れ倒に非ず。能く行中の四顚倒見を生ず。因を以て果に從ふを、通じ名けて倒と爲す。又此三の中に、皆取の性有り。故に顚倒と名く。問うて曰はく、『此宗は、六識の中に皆四心有り。何れの識か、三心を說いて三倒と爲す。』『唯前の義に依らば、唯意識に在り。所成の四倒は唯意に在るが故に。若し後の義に依らば、一切皆是なり。四に大乘に依らば、七識心に就いて、義三倒を分つ。七識は妄心。性是れ理に乖く。顚倒の法なれば、名けて心倒と爲す。是に依るが故に、便ち一切の妄境界起ること有り。夢の心に依りて、便ち一切の夢の境界生ずること有るが如し。此心境に於て妄に取りて分別するを、說いて想倒と爲す。所取の法に於て、定實を建立して執見分明なるを、說いて見倒と爲す。故に『華嚴經』十藏品の中には先に心倒を說き、次に想、後に見なり。又諸法に於て、初に微想を起し、之を計して有と爲すを、說いて想倒と爲し、重ねて心を起して緣ずるを、名けて心倒と爲し、執見分明なるを、名けて見倒と爲す。又復前の見倒の中に就いて、義に隨つて分別するに、亦三と說くことを得。諸法の中に於て法體を建立するを名けて心倒と爲す。此倒は、猶是れ自性妄想のごとし。次に所取の自性法の中に就き、差別想を取つて、此は是れ色、此色に非ず等と謂ふを、名けて想倒と爲す。此倒は、猶是れ差別妄想のごとし。後に自性差別の法の中に於て、共和合の業用の相を取るを、名けて見倒と爲す。猶是

【次に第】次に同異を辨ず。

は攝受積聚妄想のごとし。三倒是の如し。次に同異を辨ず。先に有爲の四倒の心に對して、其同異を辨ず。毘婆闍婆提の說くが如きに依らば、有爲の四倒は、即ち是れ三倒なり。想の中に四を具す。心見も亦然り、唯始終有りて、增微を異と爲す。是の如きの說は、十二倒を立つ。若し達摩多羅の所說に依らば、有爲の四倒は、即ち是れ見倒なり。心想は倒に非ず。倒と相應すれば、相從して倒と名く。『成實』の如きに依らば、四倒、三倒一向に差別す。三倒は是れ因なり。前の三心に在り。四倒は是れ果なり。行の中に在り。大乘法の中の四倒、三倒も亦一向に別なり。三倒は是れ因なり。四倒は是れ果なり。三倒は是れ其迷理の倒なり。故に說いて因と爲す。四倒は是れ其迷法相の倒なり。故に名けて果と爲す。有爲是の如し。次に無爲を辨ず。若し毘婆闍婆提の說に依らば、無爲の三倒と、心、想、見の三倒とは體一なり。想中に三を具す。心、見も亦然り、若し達摩多羅の所說に依らば、無爲の法の中の無常、無樂、不淨の三倒は、體は是れ見倒、心に非ず、想に非ず。『成實』の如きに依らば、心、想、見等の三倒は是れ因なり。前の三心に在り。無爲法の中の三倒は是れ果なり。行心に在り。大乘法の中には、無爲の四倒と心、想、見とは、一向に差別す。心、想、見等は、是れ迷理の倒なり。無爲の四倒は、迷法相の倒なり。是故に不同なり。問うて曰はく、『向に說く、大乘法の中の心、想、見等は、是れ迷理の倒なり。之を說いて因と爲す。八倒は是れ其迷法相の倒なり。之を說いて果と爲す』と。相狀如何。先に三倒、如の理に迷ふを以て、生死涅槃の法相を取立す。相を立て如に迷ふを、說いて三倒

【一九】第六に二種著我に約して共に相收攝す。

と爲す。彼所立の生死法の中に於て、實の如く知らず、妄に常等を計す。有爲の四倒、茲に因つて生ず。復所立の涅槃法の中に於て、實の如く知らず、横に無常、苦、無我等を計す。無爲の四倒、茲に因つて起る。是故に、三倒は親しく理に迷ふ。之を說いて因と爲す。八倒は樂、淨の法相に迷ふ。之を名けて果と爲す。三倒、八倒の同異是の如し。

(一九)第六に、二種の著我に約對して、共に相收攝す。何者か二我なる。一には衆生著我。彼諸陰集用の中に於て、謬つて我人を計す。二には法著我。陰法の中に於て妄に定性を取る。二我是の如し。今此二を以て、倒に約して分別するに、先には有爲の四倒に對して、以て論ず。名に依つて以て定むれば、二種の著我は、是れ四倒の中の我倒の所攝なり。義に隨つて通じて論ずれば、二種の我の中に、各四倒を具す。若し五陰集用の中に於て我人を建立すれば、是れ衆生我なり。即ち此我を計して、常、樂、淨と爲す。此常、樂等は、我見に非ずと雖も、相從して、判じて衆生著我に屬す。故に龍樹の言はく「若し神常なりと計するは、是れ衆生我なり。樂、淨も亦然り」と。若し陰法に於て定性を建立するは、是れ法著我なり。即ち此我を取つて、常、樂、淨と爲す。此常、樂は、我見に非ずと雖も、相從して、判じて法著我の中に屬す。故に龍樹言はく「若し法常なりと計するは、是れ法著我なり。樂、淨も亦然り」と。問うて曰はく「是の如き法著我と彼三倒の所取とは、何の別かある。」「通じて釋すれば、三倒も亦是れ法我なり。中に於て別して分たば、三倒の心は、性に迷うて相を立つ。此法著我は、相に迷うて性を立つ。相狀如何。情相の

【二〇】第七に十使に約して諸倒を分別す。先づ十使を說く。

【今は等】次に正しく十使に約して分別する中、一に有爲倒に對して分別す。

諸法は、無を以て性と爲す。三倒の心は、此無性に迷うて因緣の相を立つ。我倒の中の法著我は、向の所立の因緣の相に迷うて、立てて定相と爲す。斯別有るのみ。有爲麤爾り。此次に無爲を辨ず。無爲の倒とは、眞法を迷覆して、横に無我、無常、樂、淨を計す。此は是れ邪見にして、二我の攝に非ず。

〔二〇〕第七門の中に、十使に約對して諸倒を分別す。十使と言ふは、一には是れ身見、二には是れ邊見、三には是れ邪見、四には是れ戒取、五には是れ見取、六には疑、七には貪、八には瞋、九には癡、十には名けて慢と爲す。身に於て我を見るを、名けて身見と爲し、斷を取り常を立つるを、名けて邊見と爲し、因果の一切の諸法無しと謗るを、名けて邪見と爲し、眞の對治に非ざるを妄に能淨と謂ふを、名けて戒取と爲し、劣を取つて勝と爲すを、名けて見取と爲し、道に於て猶豫するを、之を稱して疑と爲し、境に染するを貪と名け、忿怒を瞋と名け、愚闇を癡と曰ひ、自ら高くして物を凌るを、之を名けて慢と爲す。十使の中に前の五は是れ共利使なり。後の五は是れ鈍なり。此義、廣く釋すること、十使章の如し。今は此十に對して、諸倒を分別す。中に於て、先づ有爲の四倒に對して共相を分辨す。經論同じからず。明す所亦異なり。彼毘婆闍婆提の說の如くんば、常等の四倒は、是れ十使の中の三使の小分にして、三使を盡さず。我見の中に就いて、我見を分取して以て我倒と爲し、我所見をば說いて倒と爲さず。邊見の中、常見を分取して以て常倒と爲し、斷見を取らず。見取の中に就いて、樂、淨二種の見取を分取して樂淨倒と爲し、自餘の一

【次に等】二に無爲倒に對して分別を辨ず。

切の劣を取りて勝と爲すは、皆悉く取らず。此は重きを以ての故に、偏に說いて倒と爲し、我所見等は輕きが故に說かず。又達摩多羅の所說に依らば、四倒をして十使の中に於て、全く二使及び一の小分を攝せしめんと欲す。我倒の中には全く我見を攝し、樂、淨の二倒は全く見取を攝し、常倒は上の如く、邊見の中に於て但一邊を攝す。『雜心』の論主は後釋に存依す。『成實』も亦然り。問うて曰はく、『何が故に、唯此等を說いて四倒と爲すや。』『雜心』に釋して言はく、『三義を具するが故に、此を說いて倒と爲す。一には使斷。執取の義なり。二には妄置。自ら建立有り。三には一向倒。全く正道に違す。使斷と言ふは、五鈍を簡別す。妄置と言ふは、斷見を簡別す。邪見は所立無きが故に。一向倒と言ふは、戒取に簡異す。戒取の人は、猶果報の爲に禁戒を持するを以ての故に。有爲の四倒、之を辨ずること麤爾り。次に無爲を辨ず。無爲倒の中、常を無常と見、我を無我と見、樂を無樂と見、淨を無淨と見るは、是れ邪見の攝なり。常を生滅と爲し、樂を見て苦と爲し、淨を計して穢と爲す。是等は皆是れ妄置の心、是れ謗無に非ず。『毘婆沙』の中には名けて邪智と爲す。是れ邪見に非ず。若し通じて之を攝すれば、亦是れ邪見なり。更に餘義無し。問うて曰はく、『斷、常の二種相對して、俱に邊見と名く。無常を常と見、常を無常と見る。此二亦對す。何の義を以ての故に、俱に邊と名けずして、常法に於て計して無常と爲すは、是れ邪見なるや。』『通じて釋すれば應に齊しかるべし。但今は一法の異見は是れ邊見なりと明すが爲に、異法異見を邊見と名けず。一法の異見を爲に之を邊と名けて彼一法に對す

【二】第八に境に約して倒を辨ず。先づ有爲倒を明す

【次に第】二に無爲を辨ず。

れば、邊を彰すこと顯なるが故に、無常を常と見、常を無常と見るは異法異見なり。一法に對するにあらざれば、邊を彰すこと顯ならざるが故に、邊と名けず。』若し是の如くならば、無常を常と見るも、亦應に邊に非ざるべし。何が故に、偏に常見を說いて邊と爲す。彼常見は斷に對するを以ての故に邊なり。無常に對するに非ず。使を攝すること是の如し。

(二二)第八門の中に、境に約して倒を辨ず。境別無量なり。今且く四諦、五陰に約就して、二門に分別す。今先に境に約して有爲倒を明し、後に無爲倒を辨ず。有爲を辨ずる中、先には諦に約して論じ、後には陰に對して說く。諦に約すること如何。『毘曇』に說くが如し。「唯苦諦に迷ひ苦を見て斷ずるが故に」と。故に『雜心』に言はく「四倒は遠く尋ねて根に至ること能はず。故に集を緣ぜず。滅、道は妄言を集すれば、是れ苦の本なり。故に名けて根と爲す。若し尋ねて根に至れば、便ち自身の苦、無常等を知つて、自然に有爲の四倒を起さず。故に之を緣ぜず。成實法の中には、淨倒の一種は偏に苦、集に迷ふ。苦、集の二諦は是れ不淨なるが故に。常、樂の二倒は苦、集、道に迷ふ。此三は皆是れ無常及び苦なり。故に此三に迷うて常を計し樂を計するを、悉く顚倒と名く。我倒の一種は、通じて四諦に迷ふ。彼宗は四諦悉く無我なるが故に。大乘も亦爾り。次に陰に對して說く。義に通別有り。別して之を論ずれば、色に迷うて淨を計し、受に迷うて樂を計し、識に迷うて常を計し、想に迷ひ行に迷うて我を計す。通じて之を論ずれば、五陰に迷うて、通じて常、樂、我、淨の四倒を起す。有爲是の如し。次に無爲を辨ず。中に於て、先に四諦に

【三】第九に其治斷の別を明す。先づ有爲の四倒に就いて。

約して以て論じ、後には陰に對して論ず。小乘法の中には、無常、苦倒は唯滅諦に迷ふ。不淨倒は通じて滅道に迷ふ。滅、道の二諦は皆是れ淨なるが故に。其道に迷ふは、唯名けて不淨の倒と爲すことを得て、名けて無爲の倒と爲すことを得ず。所迷の道諦は無爲に非ざるが故に。小乘には無我を說いて倒と爲さず。故に廢して論ぜず。大乘法の中には、無爲の四倒、通じて滅、道に迷ふ。眞實の滅、道は皆是れ常、樂、我、淨なるが故に。陰に對すと言ふは、小乘法の中には、無常、無樂は滅に迷ふが故に、陰を緣じて生ぜず。不淨倒の中、滅諦に迷ふは、陰を緣じて生ぜず。道諦に迷ふは、五陰を緣じて起る。無漏の五陰の法に迷ふが故に。此陰を緣ずる者も、亦稱して無爲倒と爲すことを得ず。所緣の陰法は無爲に非ざるが故に。大乘法の中には、無常等の四、通じて如來の五陰の法を緣じて起る。中に於て通別あり。前の有爲に對して相顯す。知るべし。

(三)第九に其治斷の差別を明す。有爲の四倒は、毘曇法の中には、伏有り、永有り、見道已前は一向に伏斷す。見道已上は一向に永斷す。伏斷の中に就いて通有り、別有り。別相念處は、別して四倒を伏す。色は不淨なりと觀じて、淨倒を伏除し、受は是れ苦なりと觀じて、樂倒を伏除し、心は無常なりと觀じて、常倒を伏除し、法は無我なりと觀じて、我倒を伏除す。總念已去、乃至世間第一法より來は、總じて五陰を緣じ、通じて四倒を伏す。永斷の中に就いて、論說不同なり。上の十二倒を建立する家の如きは、見の中の四倒は、一向に盡すこと見諦道の中に在り。心想倒の中の常倒、我倒は、此れ亦盡すこと見諦道の

【具論】第五。

【次に等】次に無爲の四倒を辨ず。

中に在り。心想倒の中の樂淨倒は、見、修に通じて斷ず。見道の中に、樂、淨二倒を斷除し盡さざるを以て、學人猶欲事を習行すること有り。『大智論』隨喜品の中の如きは、亦此說に同じ。彼達摩多羅の所說の如きは、有爲の四倒は、盡く見道に在り。修の中に至らず。若爾らば、學人何が故に欲を行ずる。釋して言はく、「聖人は四倒無しと雖も、煩惱に牽かるるが故に、猶欲事を行ず。人飢うること急にして、不淨を吞食するが如し」と。若し『成實』に依り、大位以て分たば、見道已前は一向に伏斷し、見道の中には一向に永斷す。實に就いて通じて論ずれば、四現忍の中に、亦分に永斷す。彼宗の所說は、四現忍の中に、現に空を見るが故に。大乘法の中には、大位以て分たば、世間は伏斷し、初地は永斷す。實に就いて通じて論ずれば、種性已上は分に永斷有り、究竟永盡は初地に在り。故に『地論』に言はく、「諸見縛とは初地の時斷ず」と。問うて曰はく、「若し有爲の四倒をして、盡すこと初地に在らしめば、何が故に『地經』に、「四地の中に於て、方に身、見、我、慢を遠離す」と說く。」「彼四地の中に遠離する所は、是れ三倒の中の我見心なり。三地の中に猶假我を見るを以て、是れ四地に之を離るること無きにあらざること有り。亦此れ地相に據つて言を爲すべし。三地已還は凡夫に相同じ。是故に著我を遠離すと說かず。四地は出世なれば、方に之を離ると說く。有爲の法の中の四倒是の如し。次に無爲を辨ず。毘曇法の中には、四現忍心學、四諦を觀じて、彼倒を伏除し、見道に永斷す。『成實論』の中には是倒を說かず。理實には之有り。治斷如何。聞思地の中、別して四諦を緣じ、漸次に之を

〔三三〕染法聚第二十三段に九結の義を明す。初に名字を明す。

〔相狀等〕次に體相を明す。

伏して、四現忍より去は、次第に永斷す。大乘法の中には、治斷の處所、有爲と同じ。十信位の中に、大菩提に於て眞信成就して、正しく能く伏除す。種性已上は、分に隨つて永斷じ、初地に窮盡す。八倒の義、略して辨ずること是の如し。

九結の義

〔三三〕九結と言ふは、煩惱、闇惑は行人を結縛す。故に名けて結と爲す。又能く心を縛す。亦名けて結と爲す。亦能く一切の生死を結集す。故に稱して結と爲す。結の義是の如し。然るに此結の義は、別に隨つて異論すれば、以て限算し難し。今一門に據つて、且く九種を論ず。『九の名、是れ何ん。』『一には愛結と名け、二には瞋結と名け、三には癡結と名け、四には慢結と名け、五には疑結と名け、六には見結と名け、七には取結と名け、八には慳結と名け、九には嫉結と名く。名字是の如し。』九の中、前の七は猶是れ十使のごとし。五見の心は、之を合して二と爲し、餘の五は各一なり。故に七種有り。加ふるに慳嫉を以てす。合して九と爲す。相狀如何。愛結と言ふは、順境界に於て貪染するを愛と名く。此猶貪使なり。瞋結と言ふは、違境界に於て忿怒するを瞋と名く。此猶瞋使なり。癡結と言ふは、中の境界に於て、緣じて了せず。故に名けて癡と爲す。此猶癡使なり。總相は同じと雖も、寬狹異有り。癡使は則ち寬ぐ、癡結は則ち狹し。癡使の中に二の無明有り。一には不共、二には相應なり。不共と言ふは、理に於て、事に於て、緣じて了せず。一切の

煩惱と俱起せず。故に不共と名く。相應と言ふは、前の不共を除いて、一切の諸煩惱中に、闇障の心を名けて相應と爲すのみ。此は唯不共無明を取りて、以て癡結を收む。何が故に是の如くなる。九結の中、要ず作意獨立の者を取つて、之を以て結と爲す。獨立の者は、力堅强なるを以ての故に。故に『雜心』に云はく「獨立煩惱は九結の中に入る」と。慢結と言ふは、他に方へて自ら高ぶる、之を名けて慢と爲す。此猶慢使なり。疑結と言ふは、正道の中に於て、猶預して決せず。故に名けて疑と爲す。此れ猶疑使のごとし。見結と言ふは、身、邊、邪見、此三種、顚倒推求するが故に、名けて見と爲す。此即ち、是れ共身見、邊見、邪見使なり。取結と言ふは、戒、見二取、境界を取執す。故に取結と名く。此猶戒取、見取使のごとし。問うて曰はく「何が故に、身、邊、邪見を合して見結と爲し、戒、見二取を合して取結と爲す。」『雜心』に釋して言はく「名等しきを以ての故に、及び事等しきが故に。」と。名等しと言ふは、『雜心』に釋して言はく「身、邊、邪見は是れ共女名、戒、見の二取は是れ共男名。男女相對するが故に名等しと云ふ」と。何が故に、三見、之を說いて女と爲す。女は是れ内人なり。身、邊、邪見親しく理に迷ふ。義内に在り。故に所迷に從つて、喩に就いて女と名く。何が故に、二取、之を說いて男と爲す。男は是れ外人なり。戒、見の二取は、他に隨つて從起す。親しく理に迷ふ。義外に在り。故に喩に就いて目けて之を說いて男と爲す。名義是の如し。事等しと言ふは、彼此各是れ十八使性なり。故に事等しと云ふ。何者か十八なる。見結の中の三界、各六なり。故に十八有り。

【成實】第十二。

欲界の六とは、欲界の邪見は、通じて四諦に迷ふ。卽ち以て四と爲す。身、邊二見は、局りて苦諦に迷ふ。卽ち以て二と爲す。前に通じて六と說く。欲界既に六なり。色、無色界も、類して亦同じく然り。故に十八有り。取結の中、三界各六あり。亦十八有り。欲界の六とは、欲界の見取は通じて四諦に迷ふ。卽ち以て四と爲す。戒取は苦、道の二諦に迷ふ。卽ち以て二と爲す。前に通じて六と說く。欲界既に然り。色、無色界類して亦同じく爾り。故に十八有り。事等しとは是の如し。斯兩義を具して、三見を一と爲し、二見を一と爲す。若し『成實』に依らば、則ち是の如くならず。彼說かく、十使俱に四諦に迷ふを說いて名等し、事等しと爲すべからず。但二取の過患重きを以ての故に、別して取結と爲す。云何が過重き。彼『成實』の九結品に說くが如し。戒取の過は、捨離すべき難し。世間の人多く取りて道と爲し、其過を見ず。內道の人、糞掃衣を取りて以て道と爲す等、諸の外道の人、彼苦行を取りて以て道と爲す等の如し。又此戒取は八正に乖違す。此有るを以ての故に、所行有りと雖も、空しくして所得無し。又能く人をして二世の苦を得せしむ。牛戒を持し、鷄戒等の種種の苦行を爲すが如き、現世の苦を受け、當に惡道に墮して後世の苦を受くべし。戒取是の如し。見取の過とは、一切の虛妄の法を執著して、眞實を得ず。當に知るべし、皆是れ見取の力なりと。過狀是の如し。此過有るを以て、說いて取結と爲す、名等しきに由るにあらず。慳結と言ふは、己身の財に於て、慳著して捨てず。故に名けて慳と爲す。嫉結と言ふは、他の己に勝るを忌む。故に名けて嫉と爲す。此二は猶是れ

十纏の中の慳嫉纏なり。何が故に纏の中、唯此二を說いて以て結と爲すや。論に自ら釋して言はく「慳嫉は獨立して二を離るるが故に、九結の中に入る。自力孤り起ちて他と合せず。故に獨立と云ふ」と。問うて曰はく『一切の諸の煩惱の中に、皆無明及び睡、悼等有り。云何か獨と言ふ。』釋して言はく『以有り。無明、睡、悼は、一切處に有り。彼此齊く通ず。今は廢して論ぜず。此を除く已外は、一切の諸使と共に起らず。故に獨立と言ふ。此慳と嫉とは、唯不善と言ふ。善無記に非ず。故に二を離ると云ふ。何が故に、唯獨立を取りて結と爲す。此は上に釋するが如し。獨立の煩惱は共力堅强にして、結縛牢固なり。故に說いて結と爲す。又前の七結は、並に是れ獨立なり。今彼に同ぜんが爲に、唯獨立を取る。何が故に、唯二を離るる煩惱を取り、之を以て結と爲す。不善の煩惱は、共力强盛にして、結縛牢固なり。所以に偏に取る。若し是の如くならば、前の七結の中の身、邊二見は、唯是れ無記なり。上二界の中の一切の煩惱も、亦是れ無記なり。不善性に非ず。何が故に結と名くる。』釋して言はく「前の七は、是れ其使の性なり。使性は堅强なり。假令無記なるも、亦能く結縛す。故に說いて結と爲す。餘は使の性に非ず。勢力輕微なり。要ず不善の者、方に能く結縛す。前の七に類せざること、既に此間に在り。曰はく、睡、掉、何が故に結に非ざる。論に自ら釋して言はく「睡、掉二纏は諸結俱起すれば、獨立と名けず。又不善、穢汚無記に通ずれば、二を離ると名けず。之が爲に取らず」と。又問ふ、『眠纏、何が故に結に非ざる。』論に自ら釋して言はく、『眠は一切の諸使と相應す。故に

【地持論】第五。

【成實】第十二。

獨立に非ず。眠は三性に通ず。故に二を離るるに非ず。是を以て取らず」と。無慚、無愧、何が故に結に非ざる。論に自ら釋して言はく「無慚、無愧は復二を離ると雖も、而も獨立にあらず。是故に結に非ず。此無慚愧は、唯欲界の不善と俱なり。故に名けて二を離ると爲す」と。何が故に、悔纏を說いて結と爲さざる。論に自ら釋して言はく「悔は獨立すと雖も、而も二を離れず。所以に結に非ず。善、不善の中、皆悔有るが故に」と。忿、覆の二纏、何が故に結に非ざる。論に自ら釋して言はく「忿、覆は獨立して、復二を離ると雖も、有人是使の性ならしめんと欲するが故に、所以に忿は是れ瞋の性、覆は是れ貪の性と說かず」と。是の如く說かば、但八纏を立つ。『地持論』の中も、亦此說に同じ。』問うて曰はく「六垢何が故に結に非ざる。」』論に自ら釋して言はく、「急縛の煩惱、之を說いて縛と爲し、輕繫の煩惱を說いて以て垢と爲す。急縛の中、稍微なる者すら猶尚取らず。何に況んや輕繫をや」と。是故に說かず。若し『成實』に依らば、則ち是の如くならず。彼說云何。慳、嫉の二纏は、是れ弊煩惱なり。故に說いて結と爲す。更に異義無し。云何が是れ弊なる。彼論に釋して云はく「慳有るを以ての故に身財を慳著して、貧苦を見ると雖も、心に濟拔すること無し。嫉有るを以ての故に、他の利を得るを忌む」と。又復貪瞋は最も罪過多し。惡道に顚墮すること、多くは貪瞋に由る。是過を以ての故に、貪の中、慳を出し、瞋の中、嫉を分つ。又慳と嫉とは、多く天人を惱ます。故に偏に之を說く。餘は是の如くならざれば、廢して說かず。九結、是の如し。問うて曰はく「頗る見相應の法、愛結

の爲に繋せられて見結繋を非す。而も名けて見使の使と爲すことを得る有りや不や。』『雜心』に言はく、「有り。」謂はく、見道の中の集智已に生じ、滅智未だ生ぜず。爾時、彼滅、道諦の下に於て、戒、見の二取は相應なり。心法及び非心法の生、住、滅等は、滅、道の下の愛結の爲に繋せらる。愛は有漏を緣じて生ずるを以ての故に、而も見結に非ず。滅、道諦の下の所有の邪見は、親く理を緣じて生じ、有漏を緣ぜず。是故に此法を結縛すること能はず。苦、集諦の下の十一遍使は、已に斷除するが故に、復此を繋せず。是故に見結の所繋と名けず。而も同時の戒、見二取の爲に使縛せらるるが故に、見使と名く。良に二取は九結の中、見結に非ざるを以ての故に、見結と名けず。十使の中には是れ見使なれば、見使と名く。九結、之を辨ずること麤爾り。

大乘義章卷第五　末

【一】染法聚第二十四段に十使の義を明す中、十門分別あり、第一に釋名辨相、中に先づ釋名。
【地論】第十一。
【成實】第十二。
【雜心】第四。
【次に等】二に其相を辨ず。

大乘義章　卷第六

遠法師撰す

染法聚煩惱の義の中、此卷に七門有り。十使の義。十纏の義。十障の義。十四難の義。十六神我の義。六十二見の義。八萬四千煩惱の義。

十使の義に十門分別あり。釋名辨相一。三相分別二。利鈍見修分別三。相應の不同四。境に約し界に隨って分別す五。九十八使等の分別六。緣縛の不同七。成の義の差別八。發潤生九。因起の次第十。

〔一〕第一門の中、先に總じて名を釋し、後に其相を辨ず。言ふ所の使とは、『地論』に說くが如くんば、隨逐縛の義、之を名けて使と爲す。蓋し乃ち喩に就いて、以て煩惱に名く。世の公使の罪人に隨逐して、便ち繫縛することを得るが如し。煩惱亦爾り。久しく行人に隨ひ、繫縛して、三有を出離せしめず。故に名けて使と爲す。『毘曇』、『成實』、亦此說に同じ。故に『雜心』に云はく、「使の隨逐することは、空行の影、水に行き隨ふが如し」と。『成實』に說いて言はく、「使の隨逐することは、母の子に隨ふが如く、亦瘧病の鼠毒未だ發せざるが如く、熱鐵の黑相の如く、種中の牙の如く、債の未だ還さざるが如し」と。此等は皆是れ隨逐の義なり。有人釋して言はく、「驅役を使と名くるは、義に於て爽ふなし。但經論のみに非ず」と。名義是の如し。次に其相を辨ず。使の義は、開合廣略不定なり。今一門に就き、且く十種を論ず。謂ゆる身見、邊見、邪見、戒取、見取、貪、瞋、癡、慢、

【雜心】第四。

及び疑なり。身見と言ふは、亦我見と名く。五陰を身と名く。身中に我を見て、取執分明す。其所迷に從ふ。故に身見と名く。故に『雜心』に云はく、「五陰の中に於て、審爾に計著するを身見と名く。我を見るを以ての故に、其所立に從ひて、亦我見と名く」と。相狀如何。身見に二有り。一には衆生著我、二には法著我なり。五陰の中に於て我人を建立するを、衆生著我と名け、陰、界、入に於て性を取り相を執るを、法著我と名く。此二は前の無我章の中に、廣く具に分別するが如し。邊見と言ふは、斷常中に乖く。故に邊見と名く。相狀如何。若し『毘曇』に依らば、唯苦の中に於て斷を計し、常を取るを、名けて邊見と爲す。若し『成實』に依らば、一切の法の中に、斷を取り常を計するを、皆邊見と名く。故に彼『成實』の邊見品に云はく、「一切法常、是を常見と名け、一切法斷、是を斷見と名く。一切法有、是を常見と名け、一切法無、是を斷見と名く。身と神と異にして、身は滅すれども神は在り、是を常見と名け、身と神と一にして、身滅すれば神亡す、是を斷見と名く。地、水、火、風、苦、樂、壽命の七分是れ常なる、之を常見と名け、七分斷滅す、是を斷見と名く。死後更に作す、是を常見と名け、死後に作さず、是を斷見と名く。是の如きの一切は皆邊見と名く」と。問うて曰はく、『無常を横に計して常と爲すを、說いて邊見と爲さば、常の無常を計するは、何が故に邊見に非ざる。』『此義は前の八倒章の中に、具に廣く分別するが如し。邪見と言ふは、謬執して正に乖く。故に邪見と名く。』相狀如何。經の中に說くが如し。因果、一切の諸法を謗無する、是れ其相なり。問うて曰はく、『五見

【成實】第十一。

【雜心】第四。

は、斯れ皆邪なり。何が故に、謗無を偏に邪見と名くる。』『成實』に釋して云はく、『此見重きが故に、偏に名けて邪と爲す。』と。戒取と言ふは、有漏法に於て、取つて能淨と爲す。故に戒取と云ふ。相狀如何。戒取に二有り。一には獨頭、二には足上なり。諸見に依らず、直に苦行を取りて、烏雞戒等をば、以て聖道と爲すを、說いて能淨と爲し、名けて獨頭と爲す。諸見に依つて起すを、名けて足上と爲す。諸見は是れ其戒取の本、戒取は脚足なり。此諸見を取り、以て能淨と爲すを足上と名く。問うて曰はく、『戒取は所取一に非ず。或は苦行を取りて以て能淨と爲し、或は持戒を取り、或は布施を取り、或は禮拜、糞掃衣等を取り、或は諸見を取りて以て能淨と爲す。是の如き一に非ず。何が故に經の中に、但戒取を云うて、施取、苦行取等を說かざる。』『雜心』に釋して言はく、『是れ中略なるが故に、且く戒取と云ふ。若し具には應に戒等取と言ふべし。』と。問うて曰はく、『等を略するに、何の義を以ての故に、偏に戒の名に就いて、餘の者に就かざる。』釋して言はく、『戒行は取執の者多きが故に、偏に言ふのみ。』取は云何が取ること多き。諸の內道の人は、多く持戒を取りて、之を以て道と爲し、諸の外道の人は、多く烏、雞、鹿、狗戒等を取りて、之を以て道と爲す。是故に多と名く。自餘の一切の苦行等の事は、唯外道の取にして佛弟子に非ず。是故に少と名く。多に從つて稱を立つ。故に戒取と名く。見取と言ふは、諸見等を取りて、以て第一と爲す。故に見取と云ふ。相狀如何。見取に二有り。一には獨頭、二には足上なり。獨頭と言ふは、諸見に依らず、直に有漏下劣の法を取りて、以て第一と爲す。

故に獨頭と名く。不淨の中に妄に計して淨と爲し、苦を計して樂と爲し、無想の天の報を涅槃と謂ふ等の如し。足上と言ふは、諸見に依つて起る。故に足上と名く。諸見は是れ其見取の本、見取は脚足なり。此足上に依り取りて第一と爲すを、足上と名く。問うて曰はく、『見取の所取、一に非ず。何が故に經の中に但見取と云ひ、餘の者を說かざる。』『雜心』に釋して言はく、『是中略するが故に、但見取と名く。若し具には應に見等取と言ふべし。』と。『又問ふ、『等く略す。何が故に、見に就いて以て取の名を彰して、餘の者に就かざる。』『多に從ふを以ての故に。一切の世人、多く己が見を取りて、以て第一と爲す。故に偏に之を說く。』又見を取る者は、心則ち堅强にして、執固にして捨て難し。故に偏に見を說く。』

言ふ所の貪とは、境に於て深く愛す。之を名けて貪と爲す。貪相如何。中に於て、廣略開合、一に非ず。或は分ちて二と爲す。一に己が身を愛し、二に所須を愛す。或は分ちて三と爲す。前の二は上の如し。妻色を愛するを加ふ。或は分ちて四と爲す。前の三上の如し。親戚を愛するを加ふ。或は分ちて五と爲す。前の四は上の如し。名稱を愛するを加ふ。或は分ちて六と爲す。前の五は上の如し。豪貴、勢力、自在を愛するを加ふ。或は分ちて七と爲す。前の六は上の如し。死滅を愛するを加ふ。論の中の如きは、無有愛等を說く。或は分ちて八と爲す。前の七は上の如し。己見を愛するを加ふ。或は分ちて九と爲す。前の八は上の如し。善法を愛するを加ふ。佛を愛し、菩提を愛す等と說くが如し。若し廣く分別すれば、貪に無量有り。若し大乘に依らば、此等の一切皆是れ貪使なり。若し小乘

【成實】第十。

【成實】第十。

に依らば、善貪は使に非ず。又小乘の中、『毘曇』の如きに依らば、唯貪は是れ使なり。慳等は使に非ず。若し『成實』に依らば、多欲、惡欲、慳著、憍逸、是の如き一切は皆是れ貪使なり。言ふ所の瞋とは、境に違して忿怒す。故に名けて瞋と爲す。『毘曇』の如きに依らば、唯瞋は是れ使、自餘の忿恚、惱恨、嫉害、是の如き一切、斯を使と名けず。若し『成實』に依らば、忿恚、惱恨、嫉妬、殺害、狼戾、專執、不忍、不悅、不調等の事は、悉く是れ瞋使なり。大乘も亦爾り。無明と言ふは、『毘曇』の如きに依らば、癡闇の心體は慧明無し。故に無明と曰ふ。若し『成實』に依らば、邪心分別は正慧の明無し。故に無明と曰ふ。何が故に是の如くなる。『毘曇』には闇惑を過と爲す。『成實』には、唯取執を以て患と爲す。故に說不同なり。大乘法の中には、癡闇、取執並に是れ過、患兩義兼取す。名義是の如し。體相云何。宗別不同、所說亦異なり。一論師有り。無法を宣說して無明使と爲す。彼人の所說は、智慧無き處、即ち是れ無明なり。更に別法無し。人の語らざるを正しく無語と名くるが如き、是中更に不語の法生ずることなし。『成實論』の中、此義を破するに非ず。經に無明は生死の因と爲ると說く。若し是れ無法ならば、云何が因と爲らん。若し『毘曇』に依らば、二の分別有り。一に諸使に對して以て無明を別つ。無明に二有り。一には不共、二には相應なり。不共と言ふは、彼諦理及以び色、聲、香、味、觸等に於て、緣じて了せず。一切の諸使と和合せざるを名けて不共と爲す。相應と言ふは、前の不共を除いて、自餘の一切の諸煩惱中の無智の心と、諸使と合するを名けて相應と爲す。二に境に約して

分別す。無明に二有り。一には迷理。四眞諦に於て、闇惑にして了せず。二には迷事。陰、界、入、色、香、味等に於て正しく解すること能はず、諸の業行を起す。此等は皆是れ無明使なり。『成實』の如きに依らば、無明も亦二なり。一には取性、二には現起なり。取性と言ふは、一切の凡夫、執性の心なり。此取性は、一切の善、惡、無記の三性の心の中に通ず。故に彼『成實』の無明品に云はく、「一切の凡夫、未だ空に入らざる者、常に邪見有るを名けて無明と爲す」と。彼文に復言はく、「貪中に瞋無く、瞋中に貪無し。無明は爾らず。一切處に有り」と。明に知んぬ是れ通ずることを。此取性は、是れ無明の中の根本正使なり。有人釋して言はく、「此取性とは是れ十使地たり。無明使に非ず」と。彼人何が故に、是の如きの說を作す。言はく、此れ微細にして、生死に駈役往來すること能はず。故に使と名けず。此語然らず。何の文證に依りて、使に非ずと知ることを得る。『成實』の中に解するが如し。無明使の正說此に於てす。云何が非と言はん。若し此は是れ十使地の故に無明使に非ずと言はば、十の與に使と爲る。何んが其無明使なることを妨げん。又若し取性は是れ十使地にして、說いて無明使と爲すことを得ざれば、三苦の中の即行、即苦なり。是三苦の體も、亦應に是三苦の中の行苦の所攝に非ず。然るに彼は是れ三苦の體なりと雖も、而も行、苦の中に攝在することを得。此も亦應に然るべし。若し取性は駈役すること能はざれば、使に非ざらしむと言はば、三有の受生は、皆取性に由る。若し取性を離るれば、諸業有りと雖も、果を牽くこと能はず。是れ則ち取性は駈役最も強し。何んが使

【論】成實第十二及び第十。

に非ずと爲さん。又復論の中に、隨逐をもて使を解し、駈役を以て使の義を解釋せず。駈役の言は、自ら人口より出づ。經論に關らず。何んが此を用て是非を辨定することを爲さん。然るに彼論の中に、隨逐をもて使を解す。隨逐の中、取性に過ぐるは無し。何んが使に非ずと爲さん。斯を以て微窮するに、取性は是れ使なり。非と言ふことを得ず。現起と言ふは、作意して生ず。止不善に在りて、餘心に通ぜず。何者か是なる。論文不定なれば、人釋種種なり。有人釋して言はく、「貪、瞋、癡、慢及び諸見の中、各九品有り。前の八品を分ちて無明使と爲し、第九の一品を餘の九使と爲す」と。此言定んで非なり。十使の中に、皆九品有り。云何が說いて、貪、瞋等の中に前の八品無く、無明使の中に第九品無しと言はん。是れ大いに解し難し。又論に說くが如くんば欲界の中の貪、瞋、癡、慢に於て、各九品有り。前の六品を斷じて斯陀含を成じ、後の三微を斷じて阿那含を成ず。若し貪、瞋等に前の六品無くんば、竟に何の斷ずる所あらん。無明使の中に後の三有ること無くんば、何の除く所あらん。此を以て推研するに、此言依り叵し。又人復言はく、鈍使を簡去し、直に五見に就いて、義に隨つて以て分つ。五見の中の前の八品は、見心未だ明ならざれば、見と名くることを得ず。但之を說いて、無明使と爲すべしと。此れ前の破に同じ。又「成實」の中には、闇障を以て無明使と爲さず。何んが須く不了の心を分取して、無明使と爲すべき。又「成實」に邪明を說く中に、正慧の明無きを名けて無明と爲す。若し五見の中、前の八品は見未だ成ぜず、故に見使に非ずといはば、前の八品は、邪明未だ成

【八】成實論無明品

ぜざるも、亦應に說いて無明と爲すことを得ざるべし。又『成實』に、邪見未だ成ぜず。之を說いて疑と爲すと言ふ。今云何が邪見未成を、說いて無明と爲すと言ふ。此を以て推窮するに、定んで知んぬ、見前の八品を以て無明使と爲さざることを。若し爾らば、何を用て以て無明と爲す。當に知るべし。無明は諸使の上に就き、義に隨つて以て分つ。別の心體無きことを。云何が義をもて分つ。解釋するに三有り。一には餘の九使に就いて、義に隨つて以て分つ。餘の九使の中に、闇障の義有り。斯は是れ無明なり。故に因緣の中の無明支は、過去の煩惱を悉く無明と名く。又論に說いて言はく、「一切の煩惱、人心を迷覆して、皆盲冥ならしむ」と。盲冥は、猶是れ無明の義のごとし。二には三毒分別。貪を除き、瞋を除き、自餘の一切、悉く是れ無明なり。故に論に說いて言はく、「貪を除き、瞋を除きて、餘の八使は捨に從つて生ずるが故に、斯を癡と名く」と。三には邪見に就いて正慧の明無きを、說いて無明と爲す。此は五見に就いて、義に隨つて以て分つ。五見の中に就いて邪心推求する、斯を邪見と名く。即ち此五見の正慧の明無きは、盡く是れ無明なり。故に論に說いて言はく、「邪見の心、正慧の明無きを無明と名く」と。若し別體無くんば、應に十使無かるべし。釋して言はく、義別なるが故に、之有ることを得。三解有りと雖も、論文に准依するに、後釋は應に是れ無明使の體なるべし。『成實』是の如し。大乘法の中、無明に二有り。一に事中の無知。世法を解せず。二に性結の無明。理實に迷ふ。中に於て三有り。謂はく、麤、中、細なり。麤とは、彼四住と相應す。小乘の說の如し。

【涅槃】南本涅槃第十。

【二】第二に三性分別す。

【成實】第十二。

中とは、謂ゆる恆沙無明なり。細とは、謂ゆる無明住地なり。此等は皆是れ無明使なり。問うて曰はく、『何が故に小乘法の中には、不染無明は無明使に非ず。大乘は是れ使なる。』『小乘法の中には、但染汚煩惱を斷除して、滅を得るが爲に、便ち說くことを用ひず。如來の一切種智を求めず。故に使と說かず。大乘法の中には、佛の種智を求む。不染無明は佛の種智を障ふ。故に說いて使と爲す。慢使と言ふは、物を陵るを慢と名く。『慢相云何。』『涅槃』に說くが如し。慢に八種有り。八の名是れ何ん。一に直に慢と名け、二に大慢と名け、三に慢慢と名け、四に不如慢と名け、五に憍慢と名け、又傲慢と名け、六に我慢と名け、七に增上慢と名け、八に邪慢と名く。此義廣釋すること八慢章の如し。言ふ所の疑とは、境に於て決せずして猶預するを疑と曰ふ。疑に二種有り。一には事を疑ふ。夜樹を觀て、是れ人と爲さんや、非人と爲さんやと疑ふ等の如し。二には理を疑ふ。諸の諦を疑ふ等なり。小乘法の中には、唯理を疑ふを取り、說いて疑使と爲す。大乘には通じて取り、皆須く斷ずべし。故に十使の名相、之を辨ずること麤爾り。

(二)第二門の中、三性分別す。三性と言ふは、謂ゆる善、惡、無記の法なり。若し『毘曇』に依らば、欲界地の中の身、邊兩見は、一向に無記、不記なり。是見に因つて惡道に墮せざるが故に。『地論』の中も、亦此說に同じ。餘の八使は、一向に不善なり。上二界の中の一切の諸使は、悉く是れ無記なり。若し『成實』に依らば、三界、上下一切の十使、悉く是れ不善なり。故に彼『成實』の雜問品に云はく、「身、邊の二見は、是れ諸見の本なり」と。云

何が無記ならん。問うて曰はく、『十使若し倶に不善ならば、善、無記の中、取性の無明は是れ不善なりや不や。』釋して言はく、『善、無記の中の取性の無明は、是れ善、無記なり。是れ不善には非ず。』と。此義然らず。凡そ不善と言ふは、理に違するを義と爲す。此れ既に理に違す。何んが説いて不善と爲すを得ずと爲す。若し是れ不善ならば、云何が善、無記の中に在ることを得る。釋して言はく、性惡は、相善及び無記の中に在るも、竟に何の咎有らん。若し性惡をして、善、無記の中に在ることを得ざらしめば、生、滅の行苦も、亦應に、樂、捨、受の中に在らざるべし。此を以て彼を類するに、其義、相似たり。問うて曰はく、『若し善中の取性をして、是れ不善ならしめば、善と取性と一と爲さんや、異と爲さんや。若し當に是れ一ならば、取性は不善なれば、善も亦不善なるべし。善は是れ善なるが故に、取性も亦善なるべし。取性を斷ずる時、善も亦應に斷ずべし。若し當に是れ異ならば、取性は便ち相善の體に非ざるべし。取性は有漏なれば、善は應に無漏なるべし。』釋して言はく、『不定なり。善は其相に據り、取性は體に據る。體、相、別なるが故に、定んで一なるを得ず。定んで一ならざるが故に、善は樂受を感じ、性は行苦を招く。善は出世を資け、取性は道を障ふ。出世を得る時取性を斷除し、善の資は亡せず。定んで異ならざるが故に、善業の果を受くる、必ず取性に依る。取性は是れ漏なり。善を有漏と名く。善中の取性、一異是の如し。無記も亦然り。問うて曰はく、『上界所有の十使、若し是れ不善ならば、是不善は上界に繫すと爲すや。下地に繫すと爲すや。』『此義不定なり。上界所

【三】第三に利鈍見修分別。先づ利鈍に就いて。【成實】第十無明品。

【次に等】見修を分つ。

有の善、無記の中の取性無明性は不善なりと雖も、不善を起すに非ざれば上界に繫屬す。若し現起を論ずれば、十使の不善は欲界に繫屬す。彼『成實』の中、欲界の不善は寄起することを得といふが故に。『問うて曰はく、『若し爾らば、上界に起る使は欲界に繫屬す。是れ則ち上界に、應に煩惱無かるべし。若し煩惱無くんば、應に是れ無漏なるべし。應に是れ出世なるべし。』釋して言はく、『上界に現起する不善は、唯欲界に屬して上界と合す。故に無漏に非ず。又彼善中に取性有り。故に無漏と名けず。無漏に非ざるが故に、出世と名けず。大乘法の中には、義に兩兼有り。若し果報に望むれば、阿毘曇に同じ。故に『大品』に云はく、「上界の十使は、是れ其無記なり」と。理に對して義を辨ずれば、『成實』に同じ。一切の十使、皆是れ不善なり。

(三)第三に利鈍、見修分別す。先に利鈍を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、前の五は是れ利なり。推求の性なるが故に。後の五は是れ鈍なり。推求に非ざるが故に。若し『成實』に依らば、總相兼分す。相は『毘曇』に同じ。實を以て細論すれば、前の五は唯利、後の五種の中、貪、瞋、慢、疑は一向に是れ鈍なり。無明は不定なり。若し五見に就いて、以て無明を說かば、無明は是れ利なり。彼は邪明を說いて、無明と爲すが故に。餘に就いて說かば、無明は是れ鈍なり。大乘法の中には、倶に此相有り。若し復通じて論ずれば、十使の中、倶に利鈍有り。數起を利と名け、不數を鈍と名く。此一門竟る。次に見修を分つ。『毘曇』の中の如きは、苦忍已去十五心より來を、名けて見道と爲し、須陀已上、終り無學に至るを、名

けて修道と爲す。若し『成實』に依らば、總相に諦を觀ず。說いて苦忍已去と言ふことを得ず。但說いて無相位の中を、名けて見道と爲すと言ふことを得。修道は前の如し。大乘法の中には、初地は見道、二地已上を名けて修道と爲す。見修是の如し。十使の中に就いて、五見及び疑は唯見諦を障ふをもて、名けて見惑と爲す。貪、瞋、慢、癡は、通じて見、修を障ふ。見諦を障ふる者を判じて見惑と爲し、修道を障ふる者を判じて修惑と爲す。毘曇法の中には、見に依りて起す所の貪、瞋、癡、慢は能く見諦を障ふ。事を緣じて生ずる者は能く修道を障ふ。成實法の中には、貪、瞋、癡、慢、皆取性を帶す。取性重き者は能く見諦を障へ、取性微なる者は能く修道を障ふ。大乘の所說は、一切の煩惱、理に迷はずといふこと無し。中に於て、麤なる者を判じて見惑と爲し、細なるを修惑と爲す。問うて曰はく、『此二、起すこと何れの處に在る。』『若し『毘曇』に依らば、見道已前は二輪竝に起す。須陀已上は、單に修惑を起す。成實法の中には、文に定判無し。義に准じて以て分たば、見道已前は單に見惑を起し、修惑は成就して現行せず。須陀已上は單に修惑を起す。』問うて曰はく、『何が故に毘曇法の中には、見諦已前は二輪竝べ起し、『成實』には、見の前に單に見惑を起す。』釋して言はく、『毘曇』は境に約して惑を分ち、理に迷うて生ずる者を、判じて見惑と爲し、事を緣じて生ずる者を、判じて修惑と爲す。凡夫は本來常に此二を具す。是故に竝べ起す。成實法の中には、一切の十使は斯れ取性を帶し、同じく皆理に迷ふ。但輕重に約して、以て二惑を分つ。凡夫所起の一切の煩惱は、取性の心重し。見道に入る時、

【成實】第二十。

【四】第四に使の相應の不同を明す中に二、一に六識に約す。

重く取り永く亡ず。故に凡ての所起を、悉く見惑と名く。聖人の煩惱の取性は輕薄なり。凡夫の起惑は、是の如くなる能はず。是故に、凡夫は修惑を起さず、但成就すべし。『問うて曰はく、『修惑は、由來未だ起さず。云何が成就する。』『釋して言はく、『見惑は是れ修惑の因なり。見因有るを以て、修果定んで起る。故に成就すと曰ふ。』『問うて曰はく、『『成實』に、毘曇家の欲界の欲を離れて、初禪に未だ現ぜざるに已に成就することを得といふを破す。彼文に破して曰はく、「云何が未だ入らざるに、已に成就することを得ん。人の一字を識らずして、自ら書を解せりと言ふが如し。是れ應ぜざる所なり」と。彼に准じて惑を類するに、未だ起さざるに已に成就するを得といふは應ぜざるところなり。』『釋して言はく、『惑心と善心と異なり。相類することを得ず。惑は則ち久習堅强にして斷じ難し。復未だ起らずと雖も、尅して必ず當に生ずべし。故に成就すと說く。善法は生じ難し。前の因有りと雖も、未だ必ずしも當に起すべからず。故に未だ起さざる者は、成就すと名けず。類せざること斯に在り。大乘法の中には見、修の二惑は、凡の時竝び起す。無明住地は先より常に行ず。故に見諦已上は、唯修惑を起す。見、修是の如し。

(四)第四に、使の相應の不同を明す。中に於て二有り。一に六識に約して、以て諸使の相應の不同を明す。『毘曇』の如きに依らば、貪、瞋の二使及び相應無明は、皆六識に通ず。無明及び餘の七使に共せず。唯意地に在るのみ。若し『成實』に依らば、取性無明は遍く六識に通ず。自餘の一切は、唯意地に在るのみ。『大智論』の中には、『毘曇』の說に同じ。

【二には第】次に五受に對して分別す。

二には五受に對して、以て諸使相應の差別を明す。五受と言ふは、謂ゆる苦、樂、憂、喜及び捨なり。五識地の中の逼惱を苦と名け、適悅を樂と名く。意識地の中の愁惱を憂と名け、慶悅を喜と名く。捨は六識に通ず。五受是の如し。相應は云何。『毘曇』の如きに依らば、使は五受と同時に相應す。彼に說かく、「欲界には具に五受有り。此地の中に就いて無明を共せず。唯捨と相應す。疑使は彼憂、捨と相應す。疑惱を以ての故に憂と相應し、息する時捨に在るが故に捨と相應す」と。論に言はく、「欲界は、喜は麤、疑は細なり。是故に喜受と相應せず。意地に在るが故に、苦、樂の二受と相應せず。身、邊の兩見、戒、見の二取及び慢使は、喜、捨と相應す。異見は心を暢べ、高慢は意を擧るが故に、喜と相應す。息すれば捨と俱なり。故に捨と相應す。憂感の行に非ず。是故に憂、苦と相應せず。意地に在るが故に、樂と相應するに非ず。邪見の一使は、憂、喜及び捨の三受と相應す。彼邪見の人は、因果有りと聞いて則ち憂惱を生ず。故に憂と相應す。無しと聞いて則ち喜ぶが故に喜と相應す。息すれば捨と合す。故に捨と相應す。意地に在るが故に、苦と樂の二受と相應せず。貪は喜、樂、捨受と相應す。六識に通じて、染著の行なるを以ての故に、喜、樂と相應す。息すれば捨に在り。故に捨受と相應す。違惱の行に非ず。是故に憂苦と相應せず。瞋は憂、苦、捨受と相應すること、貪に對して知るべし。相應無明は、五受と相應す。常遍するを以ての故に。彼に說かく、初禪には憂無く、苦無く、餘の三受有り。眼、耳、身の三識は、身中に猶樂受有り。定內に喜有り、定外に捨有り。此地の中に就い

【五】第五に境に約し界に随つて分別す。先づ境に對して論ず。

て、不共無明は唯捨と相應す。五見、疑、慢、喜、捨と相應す。意地に在るが故に。「問うて曰はく、『欲界の疑は喜と倶ならず。何が故に、初禪の疑は喜と相應する。』「論に言はく、是中に餘の根性無し。故に與に相應す。彼は定內に餘の根性無きを說いて、定外を論ぜず。』問うて曰はく、『疑心は決せず。惱に應ず。云何が喜受と相應することを得る。』「釋して言はく、『此喜は、理を辯するの喜に非ず。故に相應することを得。與に相應すと雖も、但喜の體有りて喜の用無し。餘禪も亦爾り。貪使及與び相應無明は、喜、樂及び捨の三受と相應す。彼には瞋使無し。所以に說かず。二禪地の中には、唯喜、捨有るのみ。此地の中に於て、不共無明は唯捨と相應す。自餘の一切は、喜、捨と相應す。三禪地の中には、唯樂、捨有るのみ。此地の中に於て、不共無明は唯捨と相應す。自餘の一切は、樂、捨と相應す。四禪已上は、唯捨受有るのみ。一切の煩惱、皆捨と相應す。若し『成實』に依らば、前後に相應して同時に在らず。前の受心より、後の十使を生じ、相應して捨てず。故に相應と名く。彼に說かく、欲界乃至四禪は皆五受を具す。中に於て、貪使は喜、樂と相應し、瞋使は彼憂、苦と相應し、自餘の八使は、捨受と相應し、取性無明は五受と相應す。空處已上には苦、樂有ること無く、餘の三受有り。中に於て、貪使は唯喜と相應し、瞋使は唯憂受と相應し、自餘の八使は、唯捨と相應し、取性は遍く通ず。識に約し受に就いて、之を辨ずること畧爾り。

(五)第五に、境に約し界に随つて分別す。先に境に對して論ず。境とは、謂はく、理、事な

【論】 毘曇。

り。理とは、謂はく、四諦、事とは、謂はく、一切の陰、界、入等なり。『毘曇』の如きに依らば、身、邊二見は、唯苦諦に迷ふ。果の處に起るが故に。戒取は次に寛し。苦及び道に迷うて、集、滅に迷はず。何が故に是の如くなる。世間の人、多く苦行は能く往業を盡すと謂ふ。故に苦に迷ふと說く。須跋等の如し。或は復人有り。諸見及び施戒等に取著して、眞の道法に非ざるをば、以て眞道と爲し、說いて能淨と爲し、眞道を迷覆す。故に道に迷ふと說く。是故に論に言はく、「內迷の者は、苦を見て則ち斷ず。外迷の者は、道を見て方に除く」と。何者か內外にして、而も復說いて、內に迷ひ、外に迷ふと言ふや。『釋して言はく、戒取は有漏を緣じて生ず。苦諦は是れ其有漏法の中の理性なるが故に、說いて名けて內と爲す。道諦は、是れ其有漏法の外の理性なるが故に、之を說いて外と爲す。若し人直に、現に苦果を受け、其往因に酬いて脫を得と謂はば、名けて內迷と爲す。良に障を壞して、解脫を得ること能はざるを以ての故に、取りて能壞と爲し、取りて能脫と爲す。故に說いて迷と爲す。若し人彼持戒等の行を取りて、以て眞道と爲し、說いて能淨と爲さば、眞道を迷覆す。故に說いて外迷と爲す。彼內迷の者は、苦を見るの時、苦は障を壞し、脫を得る能はずと知りて、彼見方に斷ず。外迷の者は、眞道を見る時、方に戒等は眞道に非ずと知る。故に彼見方に斷ず。是故に說いて道、非道、淨と爲す。世間には人の集の能淨を取ること無し。故に集に迷はず。戒取の人は滅果を求むるが爲に、終に滅を取りて能淨の因と爲さず。故に滅に迷はず。又說かく、「滅諦は過を離れ淸淨にして顚倒の見に非

ず。故に滅に迷はず」と。問うて曰はく、『世人は、苦の能淨を取るを苦に迷ふと名けば、彼戒取の人は、戒を取り、施を取り、諸見等を取りて以て能淨と爲す。彼戒、施等は、體は正しく是れ集なり。何が故に、說いて迷集と爲すことを得ざる。』釋して言はく、『義有り。外道は即ち苦を取りて能淨と爲す。故に迷苦と名く。戒、施、諸見の體は是れ集なりと雖も、外道の人は、是集をば、取りて能淨と爲すと謂はず。之を轉じて道と爲し、方に能淨と說く。是故に但說いて迷道と爲すことを得、迷集と名けず。』何が故に是の如くなる。戒取の心は、多く教を傍して生ず。聖教の中に、勤苦能く生死を出づと宣說す。是故に、即ち苦を取りて能淨と爲す。佛教の中には、集因、是れ能淨と說かず。但修道を說いて、以て能淨と爲す。是故に外道は、取りて集と爲し、說いて能淨と爲さず。之を轉じて道と爲して方に能淨と說く。類せざること斯に在り。問うて曰はく、『外道は戒等を取り、之を以て道と爲すと雖も、本道を緣ぜず。云何が道諦に迷ふと名くることを得る。』『此を執して彼に乖く。故に說いて迷と爲す。』問うて曰はく、『『毘曇』に理の苦、集を說いて苦集諦と爲し、其事を論ぜず。滅道も亦然り。而るに彼外道の所取の苦行を能淨と爲すは、乃ち是れ事苦なり。持戒等を取り、之を以て道と爲すは、乃ち事の道に迷うて、理に迷はず。云何が苦道諦に迷ふと名くることを得る。』釋して言はく、『義有り。彼事に迷ふと雖も、事を以て理に類す。故に說いて苦道諦に迷ふと爲すことを得。』『云何が類する。』事苦は、既に能く往業を治す。理も亦應に然るべし。故に理に迷ふと說く。道の中も亦爾り。佛の所說の對

治の事道は、眞の道に非ず。故に理も亦應に非なるべし。故に理に迷ふと說く。何者か是れ其事苦、事道なる。何者か是れ其理苦、理道にして、事に迷ふを理に迷ふに類すと言ふや。彼過去の業の煩惱の因に從つて、六趣の報を得るを、名けて事苦と爲す。有爲の法は、念念生滅して、前能く後を生ずるを、義說して集と爲す。後前に從ひて起るを、義說して苦と爲す。此は是れ理苦なり。六道の報別なるを、名けて事苦と爲す。一切有爲有漏の法は、但前に從つて生ず。遠近を問ふこと莫し。斯を名けて果と爲す。此果の上に於て、苦、無常等の四義寬通するを、說いて理苦と爲す。彼道中の三十七品に就いて、戒、定、慧等を名けて事道と爲す。卽ち彼事中の道、如、迹、乘の四義寬通するを、說いて理道と爲す。故に事に迷ふを說いて理に迷ふに類す。戒取是の如し。邪見、見取及與び疑使は、四諦に迷ふ。邪見の心は四諦を謗無す。故に通迷と名く。見、邪取の心は、果の五陰に於て、取りて第一と爲すを名けて迷苦と爲す。因の五陰に於て、取りて第一と爲すを名けて、迷集と爲す。梵天等、無想天等を取りて、以て涅槃と爲すを、名けて迷滅と爲す。彼戒取所立の道に於て、取りて第一と爲すを、名けて迷道と爲す。又復彼四諦の下の邪見等の心を取りて以て第一と爲すを、其所取に從つて、亦卽ち名けて、四眞諦に迷ふと爲す。問うて曰はく、『若し四諦の下の諸見を取つて勝と爲すを、便ち所取に從つて四諦に迷ふと名けしめば、戒取にも亦四諦の下の見を取りて、以て能淨と爲す。何が故に、四諦に迷ふと言はざる。』釋して言はく、『彼見取に類せざる者は、卽ち諸見を取りて以て第一と爲し、轉じて道

【成實】第十二。

【次に等】二に界に就いて論ず。

と爲さずして、方に第一と說く。故に所取に隨つて、四諦に迷ふと名く。戒取は爾らず。之を轉じて道と爲して、方に能淨と爲す。故に所立に隨つて、道諦に迷ふと名く。『問うて曰はく、『論の中に三見三隨轉有りと宣說す。身見には邊見隨ふ。疑には邪見有りて隨ふ。戒取には見取隨ふと。云何が戒取は唯苦道に迷ひ、見取は四に通ずる。』『彼に隨ふと言ふは、小分の言のみ。苦道の下に於ては、見取は戒取に隨つて生ずと言ふことを得ず。集、滅諦の下には、但邪見に隨ふ。若し疑使を論ずれば、通じて四諦を疑ふ。自餘の一切の貪、瞋、癡、慢は、通じて四諦に迷ひ、及び修道を障ふ。若し『成實』に依らば、十使の煩惱は、通じて四諦に迷ふ。故に彼『成實』雜問品に云はく、「一切の諸結は、滅を見る時斷ず」と。滅とは、是れ其四諦の理なり。故に通じて諦に迷ふ。』『彼說如何。彼身見の如きは、果處に於て起る。卽ち是れ苦に迷ふなり。我は是れ常なり、因緣に從うて生ずるにあらずと見るは、卽ち是れ集に迷ふなり。我は滅せずと言ふは、卽ち是れ滅に迷ふなり。我は常なりと計するを以て、道の能く除く無きは、卽ち是れ道に迷ふなり。邊見も亦爾り。戒取の中に、苦は能治なりと謂ふは、卽ち是れ苦に迷ふなり。邪行は是れ苦の因緣なりと知らざるは、卽ち是れ集に迷ふなり。妄に邪行を取りて、以て能淨と爲すは、卽ち是れ道に迷ふなり。邪行を說いて正道と爲すを以ての故に、心に斷除して滅諦に趣向すること無きは、卽ち是れ滅に迷ふなり。餘使は上の如し。邪見、見取、及與び疑心は四諦に迷ふ。貪、瞋、癡、慢は、通じて見修に迷ふ。大乘も亦爾り。此一門竟る。次に界に就いて論ず。界は、謂はく、三

【雜心】第四。

【五六】第六に前十使に就いて九十八使等の義を辨ず、中に五あり、一に十使を分つて九十八使となす。

界は、『毘曇』の如きに依らば、十使の中、瞋は唯欲界、餘使は皆通ず。何が故に是の如くなる。『雜心』に說くが如し。上界には、其無慚、無愧、慳、嫉、憂、苦の六惱性無し。故に又禪定を得て、寂止に身を養ふ。故に瞋恚無し。又慈悲成ずるが故に瞋恚無し。若し『成實』に依らば、十使皆通ず。故に彼『成實』「雜問品」に云はく、「上界にも亦妬嫉等有り」と。故に其瞋恚有り。云何が有ることを知る。彼梵王、諸の梵衆に語げて、「汝但此に住して之足りぬ。能く汝をして老死の邊を盡さしめん。瞿曇に詣ること莫れ」といふが如きは、即ち是れ嫉妬なり。嫉妬は即ち是れ瞋使の所收なり。餘は通ずること知るべし。大乘法の中には文證無しと雖も、理亦應に通ずべし。

(五六)第六門の中に、前の十使に就いて、九十八使等の義を辨明す。中に於て五有り。一には十使を分つて、九十八使と爲す。二には九十八使に就いて、十一遍を明す。三には九十八使に就いて、九上縁を明す。四には九十八に就いて、十八無漏縁使を明す。五には九十八に就いて、百八諸煩惱の義を辨明す。初に十を分ちて九十八と爲すと言ふは、『毘曇』の如きに依らば、彼前の十使の界行種別を九十八と爲す。界は、謂はく、三界、行は、謂はく、五行なり。四諦、修道を名けて五と爲す。種は、謂はく、十種なり。彼十使を將りて、行に隨うて分別すれば、三十六有り。苦の下に十有り。集の下に七有り。謂ゆる邪見、見取、及び疑、貪、瞋、癡、慢なり。滅の下に七有り。集と相似せり。道の下に八有り。謂はく、前の七の上に、一の戒取を加ふ。修道に四有り。貪、瞋、癡、慢なり。此等の增減は、廣

【次に等】二に九十八使に就いて十一遍を明す。

く上に釋するが如し。此三十六を界に隨うて分別すれば、九十八と爲る。欲界地の中に三十六を具す。色界地の中に三十一有り。謂はく、五行の中に、各一の瞋を除き、餘は具に有り。無色も亦爾り。三十一有り。是故に、通合して九十八有り。『毘曇』是の如し。『成實論』の中には、但十使を言うて九十八と爲し、名字を列せず。然れども彼宗の中には、十使の煩惱倶に四諦に迷ひ、並に三界に通ず。知らず、若爲が九十八と作る。人家の相傳の釋に兩種有り。一には言はく、十使九地に在り。始め欲界從り乃至非想までに、即ち九十と爲す。修道の四使已に起ると、未だ起らざると、之を離して八と爲し、前に通じて、合して九十八使有り。何が故に、修惑は地に隨つて別たざる。業を發し生を招くの惑に非ざるを以ての故に。第二説は十使の煩惱、四諦に迷ひ、即ち四十と爲す。修道の中の四使の煩惱に通じて四十四有り。各已起、未起の別有りて八十八と爲し、本の十使に通じて九十八と爲す。既に經論に非ず。輒く依信し難し。相を辨ずること是の如し。此一門竟る。次に諸使に就いて十一遍を明す。『毘曇』に説くが如し。苦、集諦の下の見、疑、無明を説いて遍使と爲す。遍使の不同、十一を離分す。相状如何。苦の下に七有り。謂はゆる五見、疑、及び無明なり。此無明とは、唯不共及與び疑等の相應無を取り、貪等の相應無明を取らず。集の下に四有り。邪見、見取、疑及び無明なり。無明の差別の義は、前に判ずるが如し。此十一遍は、能く自地の中の五行の煩惱を縁縛す。故に遍使と名く。問うて曰はく、「何が故に、唯此等を説いて以て遍使と爲す。」二種の義有り。一に眞を縁じて起る。苦、集の

【成實】第十二。

【次に等】三に九十八使に就いて九上緣を明す。

下の貪、瞋、及び慢を簡ぶ。然るに十一遍は、親く諦を緣じて苦を生ず。集諦の下の貪、瞋、慢等は諸見の後に起り、親く諦を緣ぜず。故に遍を說かず。『問うて曰はく、『縱使親く諦を緣ぜざるも、遍を說くに何んが傷けん。』釋して言はく、以有り。苦、集の理は通ず。貪、瞋、慢等は親く緣ぜざるが故に、緣縛遍からず。是故に論ぜず。苦、集の性は、滅、道の下の諸使の煩惱を簡ぶ。』問うて曰はく、『何が故に滅、道の下の諸煩惱を簡ぶや。』彼は滅道を緣じて、五行の煩惱を遍縛すること能はず。是れ遍使に非ず。所以に之を簡ぶ。若し『成實』に依らば、四諦の下の一切の十使、斯を名けて遍と爲す。』問うて曰はく、『遍使と遍緣と遍因と、何の差別か有る。』釋して言はく、『緣と使の二種相望すれば、互に寬狹有り。緣は則ち諸の心心法に通ずるが故に、名けて寬と爲す。但外境を緣じて、相應共有の法を緣ぜず。故に名けて狹と爲す。使は則ち通じて一切の外境を緣じ、及び相應共有の法を縛す。故に名けて寬と爲す。局りて見、疑、無明煩惱に在りて、諸餘の心心數法に通ぜず。故に名けて狹と爲す。若し緣と使とを以て、彼遍因に望めて、互に寬狹を爲さば、使と緣とは、三世一切の有漏を縛するが故に、名けて寬と爲す。局りて心法に在り、非色、非心の法に通ぜざるが故に、名けて狹と爲す。設し遍因を論ずれば、通じて一切の諸の心心法、及び生住等の非心の法を攝す。故に名けて寬と爲す。三世の中に於て、前を後に望めて、之を名けて因と爲す。同時の因なるに非ざれば、後は前の因に非ず。故に名けて狹と爲す。遍因是の如し。此二門竟る。次に諸使に就いて、上緣に分別す。『毘曇』の如きに依ら

【次に等】四に九十八使に就いて十八無漏緣使を明す

ば、十一遍の中に、身、邊見を除いて、諸餘の九使は、能く上地を緣ず。欲界に在る者は、上の八地を緣じ、初禪に在る者は、上の七地を緣じ、乃至無所有地に在るは、上の一地を緣ず。非想地中には上地無きが故に、上緣の使無し。此等の諸使は上地を緣ずと雖も、而も繫縛せず。其微細にして、緣及ばざるを以てなり。一切の上使は、皆下緣せず。是れ所厭なるが故に。問うて曰はく、『身見及與び邊見は、何が故に之を除く。』自地の果處に於て起るを以ての故に。若し『成實』に依らば、一切の十使、皆上を緣じて生じ、亦下を緣じて起る。其所緣に隨うて、亦は緣じ亦は縛す。故に彼『成實』雜問品に云はく、「人の貪心の如きは上地を貪し、瞋恚の心は上地を憎惡す」と。亦彼法を以て自ら高擧にして、彼に我有りと計し、取りて斷常と爲す。故に知んぬ、上を緣ずることを。彼文に復言はく、「色、無色界も、亦能く欲界の境界を緣ず」と。明に知んぬ、下を緣ずることを。宗別不同なれば、各一義に隨ふ。此三門竟る。次に諸使に就いて、其十八無漏緣使を明す。『毘曇』に說くが如し。九十八の中に十八使有りて、無漏を緣じて生ずるを、無漏緣と名く。何者か是なる。滅、道諦の下に、各三種有り。邪見及び疑、不共無明なり。即ち以て六と爲す。三界に各六有り。故に十八有り。問うて曰はく、『何が故に、唯此等を說いて無漏緣と爲す。』釋に四義有り。一に眞を緣じて起る。親く滅、道を緣じ、滅、道の下の貪、瞋、慢等の有漏の緣を簡ぶ。二に盡道性。盡とは滅に名く。苦集の下の一切煩惱を簡ぶ。三に不滿と名く。道諦の下の戒取の煩惱を簡ぶ。戒取の所迷は、四諦に通ぜず。故に不滿と名く。四に獨作

【次に等】五に百八煩惱の相を辨ず

【七】第七に緣縛の不同を明す。中に三、一に諸使の相を緣ずるの多少を明す。

頭。見取を簡去す。見取使は他に隨つて生ずるを以ての故に。故に『雜心』に云はく、「貪緣は應に責むべからず。不饒益を爲すに非ず。寂靜第一淨なり。彼は無漏緣に非ず」と。貪緣は應に責むべからずとは、滅、道を貪るは是れ功德法なり。貪使に非ず。故に應に呵責すべからず。不饒益を爲すに非ずとは、滅、道は是れ違損の法に非ず。故に瞋使を生ぜず。寂靜と言ふは、寂靜なるを以ての故に、慢使を生ぜず。第一と言ふは、滅、道は是れ其身の第一の法なるが故に、取りて第一と爲すも、而も見取に非ず。言ふ所の淨とは、滅、道は淨なるが故に、之を取りて淨と爲すも、而も戒取に非ず。是故に唯邪見、無明、及與び疑使を說いて無漏緣と爲す。此等は緣ずと雖も、而も繫縛せず。無漏は微細にして緣ずれども得ざるが故に。若し『成實』に依らば、十使の煩惱は通じて滅道を緣ず。一切皆是れ無漏の緣の使なるが故に。彼『成實』雜問品に云はく、「人有りて滅を貪し泥洹を憎惡し、以て自ら高り、便ち慢心を生ず」と。道を緣ずるも亦爾り。明に知んぬ、貪等も亦無漏緣にして、獨り邪見、疑、無明等のみにあらざることを覚る。此門 次に百八煩惱の相を辨ず。『毘曇』に說くが如し。彼九十八使の上に、加ふるに十纏を以てすと。即ち是れ百八諸煩惱なり。

第七に、次に緣縛の不同を明す。中に於て三有り。一には諸使の相緣ずるの多少を明し、二には諸使の縛義の不同を明し、三に諸使の縛境の差別を明す。多少と言ふは、欲界の中の苦の下の十使の如きは、一一に皆十四使の爲に緣ぜらる。彼身見の如きは、起り已りて

謝往し、後十四を起して皆之を縁ずることを得。同品なるを以ての故に。集の下の四使、邪見、見取、疑、及び無明も、亦之を縁ずることを得。此遍使は、遍く一切の有漏の法を縁ずるを以ての故に。餘は皆縁ぜず。自品に非ず、遍縁に非ざるを以ての故に。身見既に然り。苦の下の餘の九類も亦齊く爾り。上界は瞋を除いて、十三使縁ず。集の下の七使も、一一に亦十四使の爲に縁ぜらる。彼集の下の邪見の煩惱の如きは、起り已りて謝往し、後七使を起して皆之を縁ずることを得。同品なるを以ての故に。苦の下の七も、遍く亦之を縁ずることを得。廣縁するを以ての故に。餘は皆縁ぜず。自品に非ず、遍縁に非ざるを以ての故に。邪見既に然り。餘の六も皆爾り。上界は瞋を除いて、十三使縁ず。滅の下の七使は、一一に皆十五使の爲に縁ぜらる。自品の四使は、謂はく、貪、瞋、慢、及與び見取なり。此自品は、有漏の縁なるを以ての故に。苦、集諦の下の十一遍使も、亦之を縁ずることを得。廣縁するを以ての故に。自品の中の三無漏縁は、滅諦を縁じて生ずるが故に、縁使にあらず。餘は自品に非ず、遍使に非ざるが故に、一切縁せず。上界は瞋を除いて、十四使縁ず。欲界の道の下の八使の煩惱は、一一に皆十六使の爲に縁ぜらる。自品の五使は、謂はく、貪、瞋、慢、戒取、見取なり。此自品は、有漏の縁なるを以ての故に。並に十一遍は廣縁するを以ての故に。自品の中の三は、無漏縁、道諦を縁じて生ずるが故に、縁使にあらず。餘は自品に非ず、遍使に非ざるが故に、一切縁ぜず。上界は瞋を除いて、十五使縁ず。欲界の中の修道の四使は、一一に皆十五使の爲に縁ぜらる。自品の四使、及

【次に等】二に諸使の縛義の不同を明す。

び十一遍なり。餘は皆緣せず。自品に非ず、遍使に非ざるを以ての故に、上界は瞋を除いて、十四使緣ず。此一門竟る。次に諸使の縛義の不同を明す。縛に二種有り。一には緣縛、二には相應縛なり。兩義の分別あり。一には非使に對して、以て二縛を辨ず。十使の煩惱は、外の六塵を緣ず。緣じて繫縛するを、名けて緣縛と爲す。同時の中に、想、受等の諸の心數法を縛するを、相應縛と名く。二には諸使相望して、以て二縛を辨ず。中に於て、略して四句を以て分別す。一には、緣縛にして相應縛に非ず。二には、相應縛にして緣縛に非ず。三には、緣縛にして亦相應縛。四には、非緣縛にして亦非相應縛なり。初に緣縛にして相應に非ずと言ふは、彼有漏緣使の中に就いて、其自品の相應無明を除いて、自餘の一切、更に互に相望して相緣することを得。故に名けて緣縛と爲す。同時ならざるが故に、相應縛に非ず。有漏緣使を無漏の緣に望むるも、亦是れ緣縛なり。彼を緣ずることを得。故に相應縛に非ず。同時ならざるが故に。相應縛にして緣縛に非ずと言ふは、無漏緣の中の邪見及び疑を、其自品の相應無明に望むれば、是れ相應縛なり。同時なるを以ての故に、是れ緣縛に非ず。無漏緣は、使を緣ぜざるを以ての故に。言ふ所の緣縛にして亦相應とは、彼有漏緣使の中に就いて、不共無明を除いて、自餘の一切を其自品の相應無明に望むれば、亦是れ緣縛にして亦相應縛なり。彼身見前に起り已りて滅し、後之を起す者の如きは、前の身見相應の無明を緣ずるを、名けて緣縛と爲す。後に身見相應の無明を起して、前の身見を緣ずるも、亦是れ緣縛なり。問うて曰はく、『後に起す相應無明は、別に法を緣ぜず。

【次に等】三に諸使に就いて縛する境を差別す。中に三。先づ諸使の縛する境の總別を明す。

云何か能く前の身見を緣ずることを得ん。『後の身見と相應して生ずるが故に、身見と無明と同時に起る者を、相應縛と名く。諸使齊く爾り。不共無明を相應無明に望むるに、相應の義無し。是故に之を除く。二の無明一時に並ぶこと無きが故に。又不共無明を餘使に望むるに、亦相應の義無し。是故に之を除く。無漏の緣使は有漏を緣ぜず。是を以て說かず。非緣縛にして非相應と言ふは、無漏緣の中の不共無明は、相應無明に望め、及び餘使に望むれば、是れ緣縛に非ず。無漏を緣ずるが故に、相應縛に非ず。同時ならざるが故に。無漏緣の中に邪見及び疑を、相應無明を除いて餘使に望むれば、亦緣縛に非ず。無漏に緣ずるが故に相應縛に非ず。同時ならざるが故に。』此二門竟る。次に諸使に就いて、縛する境を差別す。中に於て三有り。一に諸使の縛する境の總別を明し、二に三世に約して縛の不同を明し、三に六識に隨つて縛に異有るを明す。總別と言ふは、『毘曇』の如きに依らば、貪、瞋、及び慢は、是れ自相使なり、餘の七種は、是れ共相使なり。云何が自相なる。論に自ら釋して言はく、貪、瞋、及び慢は、別して事を緣じて生じ、總じて一切法を緣じて起ること能はず。故に自相と名く。彼貪心の如きは、要ず所見、所聞の境界に於て貪心を起し、彼不見、不聞、不思惟の處に於て貪心を起すこと能はず。貪心既に爾り。瞋、慢も亦然り。云何が共相なる。見、疑、無明は、總じて一切の境界の法を緣じて起るが故に、共相と云ふ。『成實』の雜問品の中の如きに依らば、應に此義を非すべし。彼は十使に皆總緣、別緣の義有りと說き、總を皆共と名け、別を皆自と名け、偏に說くことを得ず。貪使を以て、

【彼論】成實論第十二。

【次に等】次に三世に約して縛の不同を明す。

或時は總じて四天下を緣じて起るといふが如くんば、云何が定んで別ならん。又彼論の中に『長爪經』を引き、貪、瞋等は是れ總の煩惱なるを證す。我見の人の如きは、一切有なりと聞いて皆忍心を生ず。忍は卽ち是れ貪なり。一切無なりと聞いて心皆忍せず。不忍は是れ瞋なり。我を執りて自ら高るを、則ち名けて慢と爲す。又邪見の人は、一切無なりと聞いて心則ち貪喜し、一切有なりと聞いて心則ち瞋惱す。此を恃みて自ら高るは、卽ち是れ其慢なり。云何が別と名けん。『見、疑、無明は、當に知るべし、亦別緣の義有りと。云何が定んで總ならん。是故に、十使皆總別有り。『成實』是の如し。理實に、十使皆總別有り。『毘曇』の所說は、多に從つて言ふのみ。次に三世に約して、縛の不同を明す。『毘曇』に說くが如くんば、貪、瞋、慢使若し過去ならば、彼三世の有漏法の中に於て、唯彼使所緣の境界を縛す。緣ぜざる者は、則ち縛の義無し。所緣定まれるが故に。若し現在ならば、亦三世の有漏法の中に於て、唯彼使所緣の境界を縛して、緣せざる所の者は、使則ち縛せず。所緣定まるが故に。未來に在る者は、生不生有り。若し不生の者ならば、三世の一切の有漏を緣縛す。未だ起らざるを以ての故に、三世の有漏の一切、皆縛すべきの義有り。若し生ずる者を論ずれば、緣に隨つて別して縛す。譬へば人有りて遙に多人を射んに、若し未だ箭を放たざれば、多人皆射らるべきの義有り。若し已に放ち竟らば、所著の者に隨つて則ち射らると名け、餘の著せざる者は、射らると名けず。貪等も亦然り。未起の者は、通じて一切を縛し、當起の者は、緣に隨つて別して縛す。自餘の七使は、過去、現在、未

【次に六等】次に六識に隨つて相縛するに異あるを明す。

【成實】第十二。

【八】第八に共成義の差別を明す。

【婆蹉部】犢子部のこと。

【譬喩者】經部のこと。

來に在るに隨つて、皆三世の一切の有漏を縛す。彼見等は共に縛使なるを以ての故に此を總相と言ふ。是れ別相に非ず。差別の相は後門に說くが如し。若し『成實』に依らば、三世の十使は、一一に皆三世の有漏を縛す。次に六識に隨うて相縛するに異有り。論の中に說くが如し。五識の中の貪、瞋の煩惱、過去の者の若きは、唯五塵の境界を縛す。現在の者の若きは、唯現在を縛す。未來の者の若きは則ち二種有り。一には生法、二には不生の法なり。生法の者の若きは、緣に隨つて別して縛す。不生の者の如きは、通じて三世の色等の五塵を縛す。若し意地に在りては、十使の煩惱は三世の中に於て、何の世に隨うて起るも、皆三世の有漏の諸法を縛す。無漏法の如きは、緣じて縛せず。總相是の如し。中に於て分別すれば、貪、瞋、及び慢は、三世の法に於て別緣別縛す。見、疑、無明は、總緣別縛なり。若し『成實』に依らば、十使の煩惱は唯意地に在りて、一一に皆能く三世を總縛し、亦別縛するを得。縛の不同、之を辨ずること麤爾り。

(八)第八に、共成の義の差別を明す。婆蹉部に依らば、三種の成有り。一には人成。彼宗の中に人有りと說くが故に。二には結成。煩惱定まるが故に。三には事成。境界定まるが故に。若し『毘曇』に依らば、二種の成有り。一には結定。煩惱定まるが故に。二には事成。境界定まるが故に。毘曇法の中には人有りと說かず。故に人成無し。譬喩者の說は、唯結成有りて、人事は成ぜず。彼宗の中には人有りと說かず。故に人成無し。境界不定の故に事成無し。一の境界の如き、或時は貪を生じ、或時は瞋を生じ、或時は癡を生じ、或は復

【九】第九に其發業潤生の差別の相を明す。先づ發業を明す。

【雜心】第三。

慢を生じ、或は復善を生ず。是故に不定なり。不定なるを以ての故に、名けて不成と爲す。『毘曇』の如きに依らば、當分に生ずる時を、卽ち事成と名く。成の義是の如し。

(九)第九に、其發業潤生の差別の相を明す。先に發業を明し、後に潤生を辨ず。發業の中、宗別不同なり。『毘曇』の如きに依らば、修道の煩惱は、親く能く身、口の二業を發起す。事を縁じて起るが故に。見諦の煩惱は、親しく身、口の二業を發する能はず。迷理の惑なるが故に。故に『雜心』に云はく、「修道の煩惱は、刹那等起として身、口の業を起し、見道の煩惱は、因等起と作りて身、口の業を起す」と。云何が名けて刹那等起と爲す。前念は是れ其修道の煩惱、後念は卽ち身、口の二業を起すを、刹那起と名く。見諦の煩惱は、但能く遠く生ずれば、因等起と名く。親しく生ずること能はざるが故に、刹那に非ず。問うて曰はく、『若し事を縁ずる煩惱をして身、口を動ぜしむれば、見諦の所斷の貪、瞋、慢等は、四諦の下の諸見を縁じて生ず。亦是れ事を縁ず。何が故に、親しく身口を動すること能はざる。』釋して言はく、『以有り。彼四諦の下の貪、瞋、慢等は唯諸見を縁じて、色、聲、香、味、觸等を縁ぜず。是故に卽ち身、口の業を起さず。但能く遠く起す。身、口是の如し。『意』業は云何。彼宗の中に、思を意業と爲す。思は是れ通數。皆一切の煩惱と相應すれば、二輪の煩惱、皆能く之を起す。若し『成實』に依らば、見諦の煩惱は、具に能く善、惡の二業を發起す。修道の煩惱は、一向に不善業を起すこと能はず。何が故に是の如くなる。凡夫に在る時は、修道の煩惱は、但成就すべくして現行せず。是故に發さず。聖を得

【次に等】二に十使の潤生の別を辨ず。

【二〇】第十に共相生の次第を明す。先づ直に十使に就いて相因起するを明す。

るの時は、修道の煩惱は復現行すと雖も、輕微なるを以ての故に、惡業を發さず。善業は云何。釋者不同なり。有人釋して言はく、「三果の聖人は、但凡時の有漏の善業を潤す。人天に生を受くるは、新業を造りて、之を以て受生するに非ず」と。此義然らず。『成實』に說くが如し。「三果の聖人は、一切地の中の所有の煩惱、所斷の處に隨つて則ち業を造せず」と。此を以て準驗するに、定んで知る、修惑未斷の處に善業を發することを。又復現に諸の學人等を見るに、聖道を得已つて八禪を修起し、之を用て上生す。云何が造せざらん。彼聖人、善を造して生ずるを以ての故に、修道の煩惱は善業を發すことを得。此一門竟る。次に十使の潤生の差別を辨ず。若し『毘曇』に依らば、三界の中に於て、一切の十使皆能く潤生す。若し『成實』に依らば、唯愛能く潤す。故に『成實論』雜問品に云はく、「唯愛能く諸有をして相續せしむ。邪見等の中には、是の如き事無し」と。『地經論』の中も亦此說に同じ。故に彼文に言はく、「愛水、潤を爲す」と。若し受生を言はば、癡見も亦能く起す。彼文に言はく、「無明覆蔽し、我心溉灌す」と。

(二〇)第十に、共相生の次第を明す。中に於て兩門あり。一に直に十使に就いて、相因起することを明す。二に地に約して以て論ず。十使の中の因起如何。無明を本と爲す。無明に依るが故に、便ち疑使を起す。彼疑に依りて、後に或は邪見を生じ、或は我見を起す。我見に依つて、便ち斷常を起すを、說いて邊見と爲す。常見に由るが故に、我の爲に、未來に更に勝處を求む。禁戒を受持するが故に戒取を起す。彼戒取所取の法の中に於て、計して

【次に等】二に地別に就いて因起を論ず。

第一と爲し、便ち見取を起す。見取に由るが故に、順ずれば則ち貪を生ず、違すれば則ち瞋を生ず。此を恃みて自ら高ぶれば、便ち慢使を生ず。一の義是の如し。又更に分別すれば、無明を本と爲し、之に因つて疑を起し、疑の後に決定して、便ち二の中に入る。一に有の中に入れば、便ち身見を起す。身見を以ての故に、身死して後或時は如去、或時は不如去と說く。若し如去と說かば、則ち是れ常見、不如去と說かば、卽ち是れ斷見なり。若し常と見る者は、神が爲に善を修し、戒を持し苦行して、便ち戒取を起す。若し斷を見る者は、後世無きを以て現に五欲を起し、便ち貪心を生ず。貪心を以ての故に、他侵せば惱を生じ、便ち瞋心を起す。二に無の中に入れば邪見を起す。邪見を以ての故に、邪を取りて正と爲して、便ち見取を生ず。見取を以ての故に、已が所見を恃みて他人を欺陵し、便ち慢心を起す。因起是の如し。一切且く然り。未だ必ずしも皆爾らず。此一門竟る。次に地別に就いて、以て因起を論ず。地とは、謂はく、欲界乃至非想なり。『毘曇』の如きに依らば、同地の中には、十使相望して皆相生ずることを得。若し他地に望むれば、上は下を生ずることを得、下は上を生ぜず。上地に命終して、下結を起すことを得。故に下を生ずと言ふ。要ず下結を斷じて上禪定を得。禪定を得已りて、方に上結を起す。故に上を生ぜず。十使の義、略して云ふこと是の如し。

十纏の義に七門分別あり。釋名辨相一。使垢に對して同異を料簡す二。纏依差別三。見修分別四。六識分別五。界に就いて分別す六。位に就いて分別す七。

【一二】染法聚第二十五段に十纏の義を明す中に七門の別あり、第一に釋名辨相、先づ釋名

【成實】第十一。

【此十等】次に辨相。

【一三】第二に使垢に對して同異を料簡す。

【一三】第三に十使に對して依の不同を明す。

（一二）第一門の中に、先に共名を釋し、後に共相を辨ず。言ふ所の纏とは、煩惱、心を纏するを名けて纏と爲す。又行人を縛するを、亦名けて纏と爲す。實を以て通じて論ずれば、一切の煩惱是れ纏に非ざること無し。今一門に據りて且く十種を論ず。十の名是れ何ん。『雜心』に說くが如し。「無慚と無愧と、睡、悔、慳、嫉、掉、眠、忿と、及與び覆と是なり。上の煩惱纏して、内に羞恥無きが故に無慚と名け、外に赧懼無きを、說いて無愧と爲す。眠と睡とは論釋不同なり。若し『成實』に依らば、心重くして眠らんと欲するを、之を名けて睡と爲し、心を攝して覺を離るるを、說いて以て眠と爲す。若し『毘曇』に依らば、身心昏昧にして一切の煩惱、境界に睡著して堪忍すること能はざるを、之を說いて睡と爲し、略境界を緣ずるを、之を目けて眠と爲す。五識を身と名け、意識を心と名く。是二昏昧なるを以て、名けて眠と爲す。善事を作すに於て追變するを悔と名け、己身の財に於て堅著するを慳と名け、他の勝事に於て妬忌するを嫉と名け、躁動を掉と名け、憤惱を忿と曰ひ、過を隱すを覆と名く。名義是の如し。此十の中に就いて、無慚、無愧は是れ不善地、慳、嫉、忿、覆は是れ小煩惱地、睡、眠、掉、悔は是れ別心數なり。此十種に急縛の義有るを以ての故に、說いて纏と爲す。此一門竟る。

（一三）次に使垢に對して、同異を料簡す。此一義は、廣く釋すること前の六垢章の中の如し。此二門竟る。

（一三）次に十使に對して、依の不同を明す。『毘曇』に說くが如し。「無愧と睡と眠と、此三は無

【成實】第十二。

【四】第四に見修に就いて分別す。

明に依る。掉、慳、及び無慚は是れ貪欲從り生ず。覆纏は二使に依る。悔は即ち猶豫に因る。忿、嫉は瞋恚に依る」と。明に知んぬ。所説の論文是の如し。癡、心を覆ふを以て羞恥を知らず、悪を作して愧づること無し。又癡を以ての故に、煩惱起る時自ら開曉せず、境界に睡著して堪忍すること能はず。之を説いて睡と爲す。復癡を以ての故に、昏障、心を覆うて覺知する所無きを、説いて以て眠と爲す。是故に此三、同じく無明に依る。貪有るを以ての故に、五欲を追求して止息すること能はず。之を説いて掉と爲す。貪有るを以ての故に。己が物を慳惜して捨離すること能はざるを、説いて以て慳と爲す。貪有るを以ての故に、追求する中に於て羞恥有ること無きを、説いて無慚と爲す。是故に此三は、同じく貪欲に依る。愚癡、貪欲の心有るを以ての故に、悪を作し覆藏して發露することを知らず。之を説いて覆と爲す。故に説く。「覆纏は二使に依る」と。謂ゆる貪欲、無明に依る。疑有るを以ての故に善を作して追變す。之を説いて悔と爲す。故に悔心は猶豫に因ると説く。瞋有るを以ての故に、他に於て忿惱す。之を説いて忿と爲す。他の己に勝るを忌む。之を説いて嫉と爲す。故に忿、嫉は瞋恚に依ると説く。若し『成實』に依らば、覆、慳の二纏は是れ其貪使なり、忿、嫉の二纏は是れ其瞋使なり。餘は悉く使に非ず。此三門竟る。

〔四〕次に見修に就いて、十纏を分別す。十纏の中、無慚、無愧、睡と掉と、此四種は、通じて見修を障ふ。餘の六種は唯修道を障ふ。若し『成實』に依らば、十纏の煩惱は、通じて見修を障ふ。此四門竟る。

【一五】第五に六識に就いて分別す。

【一六】第六に三界に就いて通局を明す。

【一七】第七に位に就いて辨ず。

（一五）次に六識に就いて諸纏を分別す。若し『毘曇』に依らば、無慚、無愧、睡、掉、及び悔は六識に通じ、餘の五は意に在り。若し『成實』に依らば、一切意に在り、五識の中には想從り生ずること無し。此五門竟る。

（一六）次に三界に就いて其通局を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、睡、掉の二纏は、遍く三界に通ず。彼に說かく、「煩惱、境界に睡著するを名けて睡と爲す。故に上界に之有り。自餘の八纏は、唯欲界に在り」と。『成實論』の中には文說無しと雖も、義に准じて以て求むれば、上界は但睡、眠、及び慳無く、餘の七有ることを得。彼宗には、上界に不善有るが故に、無慚愧有り。彼に疑有るが故に、亦悔有ることを得。瞋使有るが故に、忿、嫉有ることを得。貪使有るが故に、覆纏有ることを得。不善、心を亂す。故に掉有ることを得。此六門竟る。

（一七）次に位に就いて辨ず。『毘曇』の如きに依らば、凡夫乃至斯陀の人は十纏を具足す。那含の人は、但睡、掉有りて餘の八種無し。羅漢は全く無し。若し『成實』に依らば、斯陀已前は相『毘曇』に同じ。那含の人は欲結を斷ず。故に慳、睡、眠無く、餘の七種有り。羅漢は全く無し。問うて曰はく、『羅漢若し眠無くんば、何が故に、經の中に、羅漢の眠を說く。』『龍樹釋して言はく、眠に二種有り。一に夢有りて眠るは、神、渾濁に應じて種種に異見す。二に夢無くして眠るは、靜息するのみ。彼阿羅漢已に夢の眠を捨して、夢無きの眠有り。』何が故に此れ有る。論に釋して言はく、「四大の身は、法として飲食、眠息を須ちて將養す。是故に之有り。安穩著樂の爲の故に眠するにあらず」と。論に復釋して言はく、

「羅漢に二有り。一には慧解脫、二には俱解脫なり。俱解脫の者は具に八禪を得。禪を得るを以ての故に、色界地の微妙の四大を得來りて身中に在り。身則ち安樂なり。是故に眠無し。慧解脫の者は上禪を得ず。禪を得ざるが故に、上界の勝妙の四大を得來りて身中に入るを得ず。是故に眠有り」と。羅漢是の如し、佛は復云何。龍樹釋して言はく、「佛は永く眠無し。衆生を化せんが爲に、示現して之有り」と。十釋の義、略して辨ずること是の如し。

十障の義に四門の分別有り。釋名第一。辨相第二。立障の所依第三。治斷の處所第四。

(一八)第一に名を釋す。十障の義は『十地論』に出づ。名字是れ何ん。一に凡夫我相障。二に邪行、衆生の身等に於ける障。三に闇相、聞、思、修等の諸法に於て忘る障。四に解法慢障。五に身淨我慢障。六に微煩惱習障。七に細相習障。八に無相に於て有の行をなす障。九に善く衆生を利益すること能はざる障。十に諸法の中に於て自在を得ざる障なり。初に凡夫我相障と言ふは、此は初地の無我眞解に對して、我を以て障と爲す。我に二種有り。一には自在を我と名く。謂はく、八自在。此は用に就くなり。二には自實を我と名く。此は體に依るなり。實に二種有り。一には理實。謂ゆる佛性なり。是故に經に言はく、「我とは、謂ゆる如來の藏なり」と。二には情實。謂ゆる凡夫の妄情所立の生法の自性なり。其理實を論ずれば、之を得ること聖に在り。妄情の所立は、之を起すこと凡に在り。眞我

【一八】十五段に十障の義を明す。
【十地論】第一。
【經】北本涅槃經第七如來性品。

を分たんが爲に、人に就いて以て分つ。故に凡夫を擧す。凡とは、謂はく、生死凡鄙の法、夫とは、謂はく、士夫なり。凡法、夫を成ず。故に凡夫と曰ふ。此れ猶我人の別名なり。實を執るを我と名け、我の體狀を取りて、之を目けて相と爲す。聖を礙ふるを障と名く。邪行、衆生の身等に於ける障とは、此は二地の持戒、淨行に對して、彼惡業を說いて以て障と爲すなり。惡業、正に乖く。之を目けて邪と爲す。集、起るを行と名く。行起ること緣に在り。集は必ず具に依る。生を言へば、卽ち是れ緣なり。身等と言ふは、卽ち是れ具なり。身を擧して口、意の二業を統攝す。故に名けて等と爲す。彼戒行を礙ふ。故に名けて障と爲す。闇相、聞等の諸法に於て忘るとは、此は三地聞法の解に對して、闇を說いて障と爲す。心に慧明無し。故に稱して闇と爲す。闇の狀を相と名く。此は是れ障體なり。闇心、境に迷ふ。境とは、謂はく、聞等の三慧の法なり。此法の中に於て、照了明記して心に在ること能はず。故に名けて忘と爲す。解法慢とは、此は四地の出世の眞證に對して、三地の中の解心を說いて障と爲す。此解は當地に能く法を解すと雖も、取相して知るを解法慢と名く。慢の故に是れ障なり。前の三地の中には、我、邪行、闇忘を以て障と爲す。今此には、何が故に解を說いて障と爲す。彼前の三地は世間の行なるが故に、福を以て罪を捨す。四地已上は、出世の行なるが故に、智を以て相を捨す。是故に類せず。身淨慢とは、此は五地の十平等心に對して、彼四地の淨を取るを以て障と爲す。前の四地の中には、淨法身を得て、身の淨相を取るを名けて我慢と爲す。慢の故に是れ障なり。微煩惱習とは、

此は六地の十法平等に對して說く。五地の中の染、淨法を取るを分別する慢心、之を以て障と爲す。然るに慢に三有り。謂はく、上、中、下なり。前の解法慢、之を以て上と爲す。四地の下忍の心を障ふ。身淨を中と爲す。五地の中忍の解を障ふ。染、淨を取るの慢は慢の中の最下なり。六地中の上忍の智を障ふ。六地に除する所は、前の中、上に對す。故に說いて微と爲す。性は是れ取慢、惑障の法なり。過に就いて惱と說く。微煩惱に據りて前の中、上を顯すも、類して亦同じく然り。倶に是れ煩惱なり。何が故に前の二を說いて慢と爲す。出世を障ふるが爲の所除の障は、道に隨つて取執し、過を爲すこと輕微なり。前の三性の相倶に違するに同じからず。故に所取に約して、以て其障を別ち、說いて慢と爲す。初の障の慢に就いて後に類するに皆爾り。然るに此微は、是れ其麤が家の殘氣なり。故に名けて習と爲す。細相習とは、此は七地に對して勝行を發起するに、六地の中、空を樂ふを說いて障と爲す。六地の中に、法平等を得て、空に於て樂住するを以て、空に卽して勝行を發起すること能はず。所以に障と爲す。有を取つて麤と爲し、空に著するを細と爲す。細の狀を相と名く。麤家の殘氣、之を目けて習と爲す。然るに其所取は空、有を別つと雖も、執性同じきが故に、猶說いて麤家の習と爲すことを得。無相に於て有の行をなす障と言ふは、此は八地の無功用行に對して、七地中の功用を說いて障と爲す。第八地の中に、報行純熟して功用捨離するを、名けて無相と曰ふ。無相に望めて功用修と名く。有の行を爲すを以て無相を礙ふ。故に目けて障と爲す。善く衆生を益すること能はざ

【一九】第二に共立障の所依を明す。

る障とは、此は九地の無礙說法に對して、彼八地の不能を以て障と爲す。前の八地の中に、能く土を淨めて衆生を敎化すと雖も、無礙辨才に堪へず、物を益するに名けて不能と爲す。不能を以ての故に、之を說いて障と爲す。諸法に於て自在ならずと言ふは、此は十地の自在の智に對して、九地の中の無智を說いて障と爲す。前の九地の中に、復無礙辨才にして法を說くと雖も、未だ佛の所知の深法に於て、無礙なることを照用する能はざるを自在ならずと名く。又復佛、如來の雲雨の說法を受けて、法雨を降し注いで、惡を滅し善を生ずること能はざるを、自在ならずと名く。自在ならざるを以ての故に、說いて障と爲す。

（一九）第二に、共立障の所依を明す。論主、何に依りて此十障を立つる。斯れ乃ち『相續解脫』の二十二愚に依つて、此十障及び第十一の微細の智障を立つ。二十二とは、初地に二有り。乃至佛地に、各二種有り。是故に通合して二十二有り。初地の二とは、一に衆生著我、法著我愚は是れ利煩惱なり。二に增上中、惡趣煩惱愚は、謂はく、貪、瞋等の諸の鈍煩惱なり。煩惱に三有り。謂はく、下、中、上なり。中、上の煩惱は、能く惡業を發し、惡趣報を受く。果に對し因に名けて、增上中惡趣煩惱と名く。論主、初に就いて說いて凡夫我相障と爲す。第二地の中の二種の愚とは、一には微細犯戒の行の愚。是れ彼二地の律儀戒の障なり。二は種種の業趣の行愚。是は彼二地の攝善、攝生の二種の行障なり。種種の善惡業を知らず。故に善を攝する能はず。生を攝する能はず。論主、初に就き、說いて邪行身等障と爲す。第三地の中の二種の愚とは、一に聞持滿足愚は、彼三地の聞法の解

心を障ふ。二に欲愛愚は、彼三地の八禪定等を障ふ。論主、初に就き、說いて闇相の聞等に於ける障と爲す。四地の二とは、一に法愛愚は、三地の中の聞法解心を愛す。二に正受愛愚は、三地の中の禪定行等を愛す。論主、初に就き、說いて第四の解法慢障と爲す。五地の二とは、一に背生死向涅槃愚は、謂はく、四地の中の取淨の慢なり。彼五地の十平等心を障へ、及び彼地の大慈悲等の利樂生行を障ふ。二には、一向に涅槃に背き世間に向ふ愚なり。彼五地の諦觀等の行を障ふ。論主、初に就き、說いて第五身淨慢障と爲す。六地の二とは、一に多行相愚。謂はく、五地の中の染淨等を取りて分別する慢相なり。六地の中の十法平等を障ふ。二に觀察する能はざる多行生愚は、六地中の因緣の行觀を障ふ。論主、初に就き、說いて第六の微煩惱障と爲す。七地の二とは、一には微細相行愚。謂はく、六地の中の樂空の心なり。七地の中の十方便慧の、勝行を發起するを障ふ。二には無相思惟方便行愚。七地の中の修無功用を障ふ。論主、初に就き、說いて第七細相習障と爲す。八地の二とは、一には無相無開發愚。謂はく、七地の中の功用行心は、八地の中の無功用行を障ふ。二に自在愚は、八地の中の淨佛國土の三自在行、及び十自在を障ふ。論主、初に就き、說いて第八の有行障と爲す。九地の二とは、一に諸法及び法の名字に於て總持自在なる能はざる愚は、九地の中の智成就行を障ふ。二に樂說法自在愚障は、九地の中の說成就等を障ふ。論主、後に就き、說いて第九の善く衆生を益すること能はずと爲す。十地の二とは、一には大神通愚。謂はく、十地の神通、無上、有上行等を障ふ。

【二〇】第三に辨相を明す。

二には微細祕密行愚。謂はく、十地の七種智等を障ふ。論主、後に就き、說いて法に於て自在ならざる障と爲す。十地を佛に望めて、亦二愚有り。一には一切爾炎微細正受愚。謂はく、無明地は彼如來の一切智德を障ふ。二に障礙愚は、謂はく、事中の無知は、彼如來の一切の種智を障ふ。『地論』に說いて言はく「第十地の中に智障有り」と。當に知るべし、是れ彼障礙愚なりと。立障の所依、之を辨ずること麤爾り。

（二〇）第三門の中に、相を辨ずと言ふは、開合不定なり。或は一二と云ひ、乃至衆多なり。言ふ所の一とは、一切の煩惱を總じて一障と爲す。或は分ちて二と爲す。謂ゆる、見、修なり。十の中の初の一は見諦の惑、餘の九種は是れ修道の惑なり。業、煩惱に就いて、亦二を分つことを得。第二、第八は是れ其業障なり。餘は是れ煩惱なり。或は說いて三と爲す。謂ゆる見、愛、及與び無明なり。初の一は是れ見、第二は能く犯戒を起す煩惱、即ち是れ其愛なり。後の八は無明なり。或は說いて六と爲す。世間に三有り。出世も亦然り。三地已還を名けて世間と爲し、四地已上を名けて出世と爲す。世中の三とは、一には是れ解障。謂はく、執我の心は無我の解を障ふ。二には是れ行障。謂ゆる邪行は戒行を障ふ。三には是れ其智用の障。謂ゆる闇障は彼三地の明淨の知を障ふ。出世の三とは、始め解法從り乃ち細相に至る。是れ其解障なり。有無を分別して、彼非有、非無の解を障ふ。二には行障。謂はく、無相に於ての有行障なり。彼八地の無功用の行を障ふ。餘の二種は是れ智用の障なり。生を利すること能はず。法を知らざるが故に。或は說いて十と爲す。始め我相

【三】第四に共除斷の處所を明す。中に五、一に異說を序す。
【涅槃經】第六。
【地論】第五。
【經】勝鬘經。
【次に等】二に邪執を破す。

從り乃ち法に於て自在を得ざるに至る。或は二十と說く。謂はく、二十愚は、廣くは上に辨ずるが如し。若し廣く分別すれば、數別窮め難し。障相是の如し。

(三)第四に共除斷の處所を明す。中に於て五有り。一に異說を序し、二に邪執を破し、三に正義を立て、四に正義を難し、五に釋通す。異說と言ふは、有人說いて言はく、「此十障の中に初地を障ふる者は、初地の始心の無礙に正しく斷ず。乃至彼第十地を障ふる者は、十地の始心の無礙に正しく斷ず」と。何が故に知ることを得る。『涅槃經』に說かく、「初依の菩薩、以て凡夫と爲りて、煩惱性を具す」と。故に知る地前は一向に斷ぜざることを。又『仁王』の中に地前を宣說し、以て伏忍と爲す。故に知る斷ぜざることを。又『地論』の如きは、三地の中に說く、諸の見縛は、初地の時斷ずと。明に知んぬ、初障は初地に始めて除くことを。又小乘の中には見諦を障ふる惑は、苦忍已去、無礙に正しく斷ず。修道を障ふる惑は斯陀行の後、無礙に正しく治す。小を以て大に類するに其義相似たり。唯佛地の障は、十地の終心、無礙に正しく斷ず。如來地の中、解脫に證して除す。佛は無學の果外の淨なるを以ての故に。此は是れ一の說なり。又復人の言はく、初地を障ふる障は、初地の始心、無礙に正しく斷ず。乃至彼佛地を障ふる障は、佛智の初起に、無礙に正しく斷ず。故に經に說いて言はく、「無明住地は佛、菩提斷ず」と。此は是れ兩の論なり。異說是の如し。此一門、次に邪執を破す。若し初障は初地の始心、無礙に正しく斷ず。乃至第十は十地の始心、無礙に斷ずと言はば是義然らず。云何が然らざる。『地論』の中の如きは、十一障

【經】涅槃經第六

【大涅槃】第二十一。

に對して十一地を說く。初障を遠離するに初地を宣說し、乃至第十一障を遠離するに如來地を說く。又『相續解脫經』の中の如きは、彼二十二種の愚に對するが故に、十一淨を說く。二十二愚は、備には前に列するが如し。初の二愚に對して初地の淨を說き、乃至彼最後の二愚に對して佛地の淨を說く。若し十地に、無礙道を作し正しく十障を斷ずと言はば、彼如來地も、亦應に是の如くなるべし。而るに如來地を彼微障に望むれば、『解脫』に證除して、無礙に非ずといふ。十地も亦爾り。何ぞ勞しく疑を致さん。若し佛地は是れ無學なり。故に累外に證除す。全く十地に異なりと言はば、十地を前に望むれば、分に隨つて處を成じ、更に進習せず。亦是れ無學なり。佛と何の別あらん。又若し佛地は是れ無學の故に出處に地を說き、菩薩は學中なれば斷處に地を說かば、則ち佛地は是れ無學の故に出處に解脫し、菩薩は學に在れば、應當に斷ずべき處に、說いて解脫と爲すべし。因果殊なりと雖も、同じく出處を以て解脫道と爲す。因果異なりと雖も、何爲ぞ同じく出處に就いて、說いて地と爲すことを得ざらんや。若し經に、初依の菩薩は煩惱性を具し、地前をして全く斷ぜざらしむと說くと言はば、即ち『涅槃』の中に宣說す。「地前は未だ初不動地に階はずと雖も、而も能く一切の生死を壞す。是故に名けて不可思議と爲す」と。云何が斷ぜざらん。又『大涅槃』に不到、到を解す。不到と言ふは、謂はく、大涅槃なり。言ふ所の到とは、菩薩、貪欲瞋癡を永斷す。是故に能く到る。身、口、意淨にして、四重五逆を犯さざる者なるが故に能く到る。方等を謗ぜず、闡提を求めず。是故に能く到る。何れの

【華嚴】 晉譯第八

處にして、菩薩、貪等を永斷して大涅槃に到る。種性已上なり。此れ云何が知る。即ち彼文に言はく「須陀洹の人は八萬劫に到る。乃至辟支は十千劫に到る」と。此に到ると言ふは、前の菩薩所到の涅槃に到るなり。然るに彼須陀は八萬劫に到り、乃至辟支は十千劫に到るは、種性地に到るを涅槃に到ると名く。故に知んぬ、菩薩は永く貪等を破して涅槃に到るとは、種姓已上に、貪等を永斷して涅槃に到ることを。云何が斷ぜざらん。又『華嚴』の中に、十住の義を辨じて云はく「菩薩、最初の發心に便ち正覺を成じ、法の實相を見、慧身を具足して諸の如來に等しと言ふ」と。云何が斷ぜざらん。又『華嚴』の中に、地前に其永斷有りと宣說す。何が故に依らざらん。彼文は如何。『華嚴經』の中に十住の義を辨ず。十住の位分は習種に在り。彼偈に說いて言はく「第四に生貴の眞佛子は、諸賢聖の正法從り生ず。有無の二邊悉く著せず。永く生死を離れて三界を出づ」と。云何が永にあらざらん。又『地持』の中に宣說す。種性の二障、清淨」と。云何が斷ぜざらん。若し地前を名けて伏忍と爲し、不斷を證すと言はば、即ち『仁王』の中に「金剛に至りて、悉く名けて伏と爲し、唯佛一人、方に能く永く斷ず」と說く。應に十地還悉く永く斷ぜざるべし。經に伏と說くと雖も、前の義を立つる家は、地上を永と名く。彼は地前を伏と爲すと宣說すと雖も、何んが中に於て、全く永斷無きを得ん。又若し地前を伏と爲すと宣說して、中に於て永無くんば、『仁王』に宣說して初、二、三地を以て信忍と爲すも、應當に證無かるべし。彼は信忍と名く。中に於て證有り。彼伏と說くと雖も、何ぞ永有るを妨げ

【經】勝鬘經。

【地持】第七。

ん。又若し地前を宣說して伏と爲し、中に於て永無しといはば、『地經』に宣說す。「三地已還は悉く是れ世間なり。但厭うて斷ぜず」と。三地も還亦永斷無かるべし。彼は說いて厭と爲し、中に於て永有り。地前を伏と名くるも、何ぞ永無しと爲さん。又若し地前は唯伏にして永にあらずんば、則ち無漏無からん。若し無漏無くんば、大力菩薩、何を用て變易の生死を受けん。此一を以て驗するに、其理定むるに足れり。若し『地論』に諸の見縛は初地の時に斷ずと說いて地前に非ざるを證すと言はば、經の中に亦「無明住地は唯佛の所斷なり。乃至後身猶覆障を被る」と。十地已還に應に斷の義無かるべきも、彼は佛斷ずと言へば、十地已還に、實に斷除有り。『地論』に、見縛は初地の時に在りて斷ずと說くと雖も、地前の菩薩、何んが不斷と爲さん。又『地持』に云はく、「先に解行住に是の如き法を見、是の如き縛斷ず」と。見縛は猶是れ凡夫我障のごとしと。彼論に既に解行の中に斷ずと說く。云何が初地已去は無礙に正に除すと言はん。又『地持』の中に說かく、「煩惱障に三處の過有り。一に增上中惡趣煩惱の過は解行住を過ぎて歡喜地に入る。二に微細煩惱の過は遠行住を過ぎて不動地に入る。三に微細習氣行の過は、無礙住を過ぎて第十地に入る」と。彼增上中惡趣煩惱は、猶是れ初地二種の愚の中の第二種の愚のごとし。彼我相と同じく初地を障ふ。惡趣煩惱は初地に出過す。始めて斷ずるに非ず。故に凡夫我相も、亦應に是の如くなるべし。云何が說いて初地に初めて斷ずと言ふ。若し初地は斷處を過と名く。出處を以て名けて過と爲すに非ずと言はば、是れ則ち第二の微細煩惱は、二地已上

に漸次に斷除して、八地の時盡す。應に二地、之を以て過と爲し、八地に至らずと說くべし。第三の習氣は、八地已去に漸次に斷除して、十地に窮盡す。應に八地、之を以て過と爲し、十地に至らずと說くべし。然るに彼斷處を名けて過と爲さずして、出處に至りて方に過と名く。故に明に知んぬ、第一の惡趣煩惱は初地に出過す。是れ始めて斷ずるに非ずと。又『地持』の中に說かく「解行住は世俗禪に依つて一切の菩提分法を修習し、諸の大願を發し、惡趣の報を斷じて歡喜地に入る」と。然るに彼所斷は、猶是れ初地の二種の愚の中の、第二の惡趣煩惱の果のごとし。彼果は既に是れ解行の中に、彼因を斷ず。何爲んぞ解行に除せざらん。又『地持』の中に「解行住に、五畏等の初地の障有り」と說く。彼に說かく「解行は上忍を行ずる時、此過相を斷じて歡喜地に入る。歡喜を得るが故に是の諸の過相、悉く復有ること無し」と。若し初地の障、解行に斷ぜずんば、云何が說いて、解行の上忍に此過相を斷じて、歡喜地に入ると言はん。若し初地上に、方に始めて漸く斷ずれば、云何が說いて、歡喜を得る時、諸過悉く無しと言はん。又『地持』に云はく、「解行の菩薩は、軟中上方便には、展轉淨解脫有り、無罪清淨に非ず。歡喜住の中には、出障解脫、無罪清淨なり」と。若し初地の障、解行に斷ぜずんば、云何が、展轉清淨と名くることを得ん。若し初地上に、方に始て斷ずれば、云何が出障解脫、無罪清淨と名くることを得て、無礙と名けざる。又七卷の『金光明經』の三身品に說くが如し。「地前の菩薩は聞法思惟し、修行精進して懶惰障を破し、次に罪障を破し、次に不

【地論】第二。

尊重障を破し、後に掉悔心障を破す。四障を破し已りて歡喜地に入る。歡喜地に依り利益障を拔き已つて、第二地に入る。第二地に依り逼惱障を破し已りて、第三地に入る。乃至最後に第十地に依り、一切の所知の障を破し、一切の根本心障を拔除して如來地に入る」と。斯を以て准驗するに、定んで知る、初障は是れ初地に、無礙に正斷するに非ざることを。若し小乘は見諦を障ふ。惑は苦忍已去、方に始めて斷除す。大も亦同じからしむと言はば、此れ後に釋するが如し。又若し初地の無礙の道の十三住を分判して初地に屬して、解行に在らず。彼小乘の中の須陀の人、進んで欲界の六品の修惑を斷ず。彼無礙道の四果を別分するに、應に斯陀に屬して、初果に屬せざるべし。斯陀進んで欲界の修惑の七、八、九品を斷ず。彼無礙道は、四果別分するに、應に那含に屬して、斯陀に屬せざるべし。那含進んで上二界の結を斷ずるに、彼無礙道は、應に羅漢に屬して、那含に屬せざるべし。然るに彼進んで上結を斷ずる無礙は、四果分別するに、悉く下地に屬す。初地の無礙、何爲れぞ判じて解行に屬することを得ずして、乃ち後に屬せしめて、初地に斷ずと說かん。又若し初障は初地に斷ずとは、彼無礙道は、聞、思、修、證の四種の心中に、何れの心の所攝ぞ。若し證を以て斷ずれば、便ち是れ證除なり。無礙と名けず。若し修を以て斷ずれば、修は世間とや爲ん、是れ出世とや爲ん。若し是れ出世ならば、『地論』に宣說すらく、「聞、思、修等は、但是智の因なり。能く出世を生ず。而も體は出世間を滿すこと能はず」と。云何が判じて出世と爲すことを得ん。又『地論』に言はく、「三界の心心數法分別の修習を

【次に等】三に正義を立す。

【地持】第七。

名けて世間修道の智と爲すことを示顯す」と。云何が出世ならん。既に出世に非ず。何んが之を判じて初地に屬することを得ん。若し是れ世間ならば便ち解行に屬す。何んが初地に正に斷ずと宣說することを得ん。初障既に初地の正斷に非ず。乃至最後の微障も亦然り。此は是れ一の非なり。若し初地乃至佛地、皆無礙に依りて正しく諸障を斷ずと言はば、是義然らず。菩薩無礙は、備に前に破するが如し。若し當に佛地の無礙に斷ずべくんば、便ち佛智を名けて、以て金剛と爲す。何が故に十地の終心を宣說して金剛と爲さんや。又『大品』に云はく、「無礙道の中を名けて菩薩と爲す。解脫道の中を之を名けて佛と爲す」と。云何が說いて、佛は無礙に正しく無明を斷ずと爲すと言はん。經の中に說いて、「無明住地は菩薩斷ず」と言ふは、彼は證除を說く。何んが無礙に關せん。此二門竟る。次に正義を立す。障に總別あり。言ふ所の總とは、凡夫我障をば以て一品と爲し、乃至佛を障ふる微細智障を各一品と爲す。言ふ所の別とは、直に凡夫我相障の中に就いて品別百千あり、乃至第十の品別例して然り。唯第十一の微細智障は、品定んで一と爲す。別して多と爲さず。窮終を以ての故に。障相是の如し。若し總障に對して以て斷處を明さば、初地家の障は、解行地に滿ずる所修の諸行を無礙道と爲して、正しく彼結を斷ず。故に『地持』に云はく、「諸の見結は解行の時斷ず」と。彼文に復言はく、「解行住の中に下忍を行ずる時に、五怖畏等の諸過の相增す。中忍の時は中、上忍の時は下なり。上忍を行ずる時、此過相を斷じて歡喜地に入る」と。又彼に復言はく、「解行住の中に、歡中上方便に展轉淨解脫有り」と。故

【四次に等】四に正義を難ず。

に知んぬ、解行は無礙に正斷するを。初地の心起りて解脫證除す。故に『地持』に云はく、「五怖畏等の一切の過相は、歡喜を得る時悉く復行ること無し」と。彼文に復言はく、「歡喜住は出障解脫無罪淸淨にして種種の煩惱上纒を解脫す」と。故に知んぬ、初地は果外に證除することを。凡夫我障の斷處是の如し。乃至最後の微細智障は、十地の終心に無礙に正斷し、佛地に證除す。然るに彼最初の無礙道は、義說不定なり。若し當に因を分ちて以て其果に別つべくんば、判じて解行に屬す。若し當に因を攝して以て果に從ふべくんば、此道と彼初地とに方便と爲すと言ふことを得。故に判じて初地に屬す。諸地の無礙も類して皆同じく爾り。若し別障に對して以て斷を明さば、彼凡夫我障の中に就いて、品別無量なり。彼初品は、解行の終心無礙に正斷し、初地の始心解脫に證除す。第二品は、卽ち前の證邊に復緣照對治の心有りて起るを無礙道と爲し、彼結を斷除す。無礙謝し已りて、第二念の中に眞證の心現ずるを解脫道と爲し、彼結を證除す。第三品は、卽ち彼第二の證心起る時、復緣照對治の心有りて生ずるを無礙道と爲し、第三品を治す。彼心謝し已りて、第四念の中に眞證の心起り、解脫に證除す。是の如く次第に乃至十地の治斷齊く然り。是故に十地を名けて漸淨と爲す。佛地の頓に淸淨を得るに同じからず。然るに第十一微智障は唯一品に局りて、金剛心起りて無礙に正しく斷じ、種智の初に起りて解脫に證除す。更に異品無し。故に『地持』に云はく、「如來住は頓に淸淨を得。餘住の漸次淸淨なるが如くならず」と。正義是の如し。此三門竟る。次に正義を難ず。若し初障を解行の終心に無

【經】涅槃經第六

【次に等】邪難を解して正義を會通す。

礙に斷ずと言はば、何が故に地前を見道と名けず、出世と名けず、歡喜と名けざる。又若し地前の無礙永斷ならば、何が故に『仁王』に地前を宣說して、以て伏忍と爲すや。又若し地前の無礙永斷ならば、何が故に經に「初依の菩薩煩惱を具するを名けて凡夫と爲し、名けて聖と爲さず」と說くや。又若し解行に初障を斷ぜば、何が故に『地論』に、「諸の見縛、初地の時に滅す」と說く。又若し初障は解行の終心に無礙に斷ぜば、彼小乘の中の見諦を障ふる惑も、亦應に彼世第一法を以て無礙道と爲し、正しく彼結を斷ずべし。然るに小乘の中の見諦を障ふる惑は、要ず苦忍等の見道の心に斷ず。大乘も亦爾り。何ぞ異解を得ん。此四門竟る。次に邪難を解して以て正義を通ず。何が故に地前に正しく見惑を斷ずれども、而も名けて見道と爲すことを得ざるとならば、大乘法の中に、見に二種有り。一には解見。諦理を緣觀して煩惱を斷ず。二には證見。緣觀の心滅して眞諦現前す。若し通じて之を論ずれば、解行の終心に諦理を緣觀して見惑を斷除するを、亦見と名くることを得。故に『地持』の中に、「諸の見縛、解行の時に斷ず」と說く。但大乘の中には、滅觀の眞見、方に是れ出世なり。出世分の中に見道を宣說す。故に解行の中に能く緣見すと雖も、其名を與へず。七地中に無功用を修すれども、而も無功用と名くるを得ざるが如し。何が故に名けて出世と爲さずとならば、良に彼滅觀眞德に對して出世と爲すを以ての故に、地前に緣見の三界の心心數法を體と爲す。故に出世に非ず。何が故に名けて歡喜と爲さざるとならば、正しく惑に對して未だ出離の心を得ず、安泰なること無し。故に喜と名けず。未

來禪に欲結を斷ずと雖も、未出を以ての故に共喜支無きが如し。此も亦同じく爾り。已に能く永斷す。何が故に『仁王』に說いて伏忍と爲すとならば、釋して言はく、地前に具に三義有り。一に斷の義有り。謂はく、四住の增上及び中並に麤の無明に於て、漸次に斷除して歡喜に趣入す。故に『地持』の中に說かく「種性地に二障淸淨なり。解行住の中に、諸過相を斷じて歡喜地に入る」と。二に伏の義有り。細の四住及び中の無明に於て、但能く遮伏して、未だ永斷する能はず。故に『仁王』の中に說いて伏忍と爲す。三に未斷未伏の義有り。彼四住の微細の習氣及び善煩惱及び細の無明に於て、未だ斷伏すること能はず。故に彼『相續解脫經』に說かく「地前の菩薩は煩惱も亦行じ、善法も亦行ず」と。是故に上波羅蜜と名けず。彼『仁王』の中には、五忍を別たんが爲に、後に對して劣を彰す。故に伏の邊に就いて、說いて伏忍と爲す。此を執して定んで不斷と言ふべからず。若し『仁王』に說いて伏忍と爲すを以て、卽ち中に於て全く斷無からしめば、『仁王』亦金剛已還を皆名けて伏と爲すと說いて、唯佛一人方に能く永斷ず。十地已還、悉く應に斷ぜざるべし。彼說いて伏と爲す。中に於て斷有り。地前も亦爾り。何ぞ疑を致すことを勞せん。又若し『仁王』に地前を宣說して伏忍と爲し、卽ち中に於て全く永斷無からしめば、『仁王』に初二三地を宣說して、名けて信忍と爲す。豈中に於て唯信じて證無かるべけんや。彼に信を說く處、中に於て證有り。彼に伏を說く處、何んが斷無しと爲さん。何が故に經に、初依の菩薩煩惱性を具するを凡夫と名くとならば、地前の菩薩五住を斷ずと雖も、一住の

【論】地論第五。

中に遍く漏盡の處無きを、煩惱性を具すと名く。全く斷無きに非ず。小乘の中の貪、瞋、癡、慢の如き、見諦道中に分除の義ありと雖も、斷の不盡に由りて斷の名を與へず。此も亦是の如し。又復地前に六道分段生死を除くと雖も、殘氣猶六道の中に在り、漏盡の處無し。故に凡夫と名く。聖德無きに非ず。論に見縛初地に斷ずと言ふは、彼は證除を說く。無礙に關らず。無明は佛菩提斷ずと說くが如き、豈是れ無礙ならんや。此も亦同じく爾り。若し小乘を以て大乘に類同せば、是れ應ぜざる所なり。小乘を大に望むるに三の不同有り。相類することを得ず。言ふ所の三とは、一に小乘の中には、見道已前に全く無漏無く、大乘には之有り。小乘に無きが故に煩惱を斷ぜず。大乘には有るが故に、能く無礙と爲して正しく初障を斷ず。二に小乘の中には、唯一種の緣照無漏有り、更に眞諦無し。是故に所有の斷結の無漏を、判じて出世に屬す。大乘の中には二無漏有り。一には是れ緣觀、斷結の無漏の體は是れ世間なり。二には是れ滅觀。無結の無漏體は是れ出世なり。彼世間に緣治有るを以ての故に、能く無礙と爲し、正しく見惑を斷ず。滅觀の眞德は、體は是れ出世なり。故に初地解脫に證除すと說く。三に小乘の中には、智解微淺なり。微淺を以ての故に、未見、未斷を名けて世間と爲し、有見有斷を即ち出世と名く。大乘は智深し。有見、有斷を判じて世間と爲し、息見、息斷、無見、爲見、無斷、爲斷を方に出世と爲す。此三別を以て、是故に大小相類することを得ず。彼初地に望めて治を說くこと既に然り。乃至佛地に望めて治を說くこと齊く爾り。十障の義、略して辨ずること是の如し。

【三】染法聚第二十七段に十四難の義を明す。
【涅槃經】第三十九。
【大品經】智論第七十。
【常無常の等】十四難の中先づ常無常の四種の見を明す。中に先づ神に就いて分別す。
【仙尼の等】此文涅槃經第三十九憍陳如品に出づ。

十四難の義

（三）十四難の義は『涅槃經』に出づ。彼『大品經』佛母品の中に、亦具に分別せり。言ふ所の難とは、邪を執して正を徴む。之を目けて難と爲す。亦邪執は聖道を礙げて、能く出世の與に留難を爲すべし。故に之を名けて難と爲す。難別不同なり。十四を宣說す。十四の中に就き、常、無常の見に其四種有り、邊、無邊の見に亦四種有り。如去、不如去に復四種有り。身神一異に其二種有り。是故に合して十四難有り。常、無常の中の四種の見とは、一には神及び世間の二、倶に是れ常、二には神及び世間の二、倶に無常、三には神及び世間、亦常亦無常、四には神及び世間、非常、非無常なり。今先づ神に就いて其相を分別し、後に世間に就く。言ふ所の神とは、謂はく、諸の凡夫顚倒憶想して、横に我人を計す。之を名けて神と爲す。神常と言ふは、諸の外道有りて、神是れ常なりと說く。中に於て二有り。一に鈍、二に利なり。鈍根の者は、是神の爲の故に所行を修持して、未來に報を受く。又苦行を爲して、神をして得脫せしむ。利根の人は、神は定んで常なり。苦樂變ぜざれば則ち罪福無しと說き、多く邪見を起す。無常と言ふは、諸の外道有つて神は無常なりと說く。無常を計するが故に、今世の樂の爲に多く放逸を起す。言ふ所の亦常無常とは、諸の外道有つて、神を說くに二有り。一には細、二には麤なり。細とは是れ常なり。身は死し神は在り。麤とは無常なり。身死して神滅す。仙尼の說くが如し、「言ふ所の非常

【次に等】次に世間に就いて分別す

【論說】大智論第七十。

【論】大智論第七十。

非無常とは、人有りて彼常と無常との二俱に過有りと見る」と。云何が過有る。「若し神は是れ常ならば、則ち罪福苦樂等の報無し。猶虛空の風雨に變ぜざるが如し。若し神無常ならば、便ち苦樂の爲に變改せらる。猶牛皮の風雨の中に在れば、則便ち爛壞するが如し。是の過を以ての故に、神は非常、亦非無常と說く」と。復常無常に非ずと宣說すと雖も、我心を以ての故に、必ず神有りと說く。神に就くこと是の如し。次に世間に就いて常無常を明す。世間と言ふは、論說に三有り。一に衆生世間、二に五陰世間、三に國土世間なり。此の三の中に於て、人に隨つて取別するに、亦常等の四種の異見有り。世常と言ふは、有人の說かく「彼三種の世間は自然にして有り。因從り起るにあらず。之を名けて常と爲す」と。無常と言ふは、有人の宣說すらく「一切の世間は終に斷滅に歸す。更に後の續く無し。故に無常と曰ふ」と。言ふ所の亦常亦無常とは、人有りて說いて言はく、世間の中、麤なる者は無常、微塵は是れ常なり。是故に名けて亦常亦無常と爲す」と。言ふ所の非常非無常とは、人有りて彼常と無常との二俱に過有りと見る。是故に常無常に非ずと宣說す。此等の四種をば執定して捨てず。故に名けて邪と爲す。問うて曰はく『神は本來無法なり。中に於て妄に取るを名けて邪と爲すべし。世間は是れ有なり。設令之を取るも、云何が邪と名けん。』『論に自ら釋して言はく、但世間定執の常等を破し世間を破せず。人、蛇を見て妄に瓔珞と謂ひ、明眼の者有りて、語げて是れ蛇にして是れ瓔珞に非ずと言ふが如し。佛も亦是の如し。』と。彼常等を破して世間を破せず。現に世間を見るに無常生滅す。云何が

【邊無邊の等】二に邊無邊中の四種の見に就いて明す中に先づ神に就いて分別す。

【次に等】次に世間に就いて邊無邊を明す。中一に衆生の五陰に就いて邊無邊を明す。

定んで常ならん。業の報失はず、云何が說いて、定んで是れ無常と言はん。前の二既に非なり。寧んぞ定んで非常無常と說くことを得ん。故に常等の四種、皆悉く是れ邪なり。

此一門、邊無邊中の四種の見とは、一に神及び世間の二俱に有邊、二に神及び世間の二俱に無邊、三に神及び世間亦有邊亦無邊、四に神及び世間非有邊非無邊なり。今先づ神に就いて四種を分別し、後に世間に就く。神の有邊とは、人有つて宣說すらく「衆生の神我は猶微塵の如し。或は芥子、麻、麥、黍、豆の如し。或は葉等の寸燈、尺蛇、蛛母中の縷の如し」と。或は說いて言ふこと有り「小人の神は小なり、大人の神は大なり」と。或ひと云はく、「一に等し」と。是の如き一切を名けて有邊と爲す。神の無邊とは、人有りて說いて言はく「神は虛空に遍し。處として有らずといふこと無し。身は所至の處に能く苦樂を覺す。若し身無き處には則ち覺すること能はず。覺は遍からずと雖も、神は實に周普し」と。神は有邊亦無邊と言ふは、有人の說かく「神に麤有り、細有り、麤は作身なり、細は常身なり。作身は有邊、常身は無邊なり」と。非有邊非無邊と言ふは、人有りて、彼邊と無邊との二、俱に過有りと見る。故に非邊非無邊と說く。復邊無邊に非ずと宣說すと雖も、而も神を離れず。神に就くこと是の如し。次に世間に就いて邊無邊を明す。中に於て、先づ衆生の五陰に就いて邊無邊を明す。有邊と言ふは說に種種有り。人有り、想を以て分別思惟す。衆生の陰身は其根本を求むるに、其始を得ず、便ち是念を作す。若し原始無くんば亦中後無し。初中後無くんば便ち世間無し。是故に世間は應當に始有るべし。始有るを以て

【復宣說する等】百論疏上の中。
【僧佉經】百論疏上の中所引。
【迦毘羅仙】カピラ(Kapila)黃頭と譯す。數論外道の祖。
【涅槃經】北本第三十八。

の故に、名けて有邊と爲す。此は是れ一論なり。復宣說する有り。八萬劫の外、冥性を始と爲す。始は是れ其邊なり。此義云何。『僧佉經』に說くが如し、「迦毘羅仙、世俗禪を得、宿命通を發し、能く宿命を知りて、過去世八萬劫の事を見る。是を過ぎて已前は、復能く見ず。便ち是念を作さく、八萬劫の外、應に法無くんばあるべからず。應に冥性有るべし。冥性は微細にして、五情知らず。彼冥性より初めて覺心を生ず」と。『涅槃經』の中に、之を名けて大と爲す。謂ゆる最初中陰の心識は、彼覺心從り我心を生ず。『涅槃經』の中に、之を名けて慢と爲す。此我心從り二種の法を生ず。一には色、二には心なり。色法の中に就いて、初は我心從り五微塵を生ず。謂ゆる色、聲、香、味、及び觸なり。彼五塵從り五大を生ず。謂ゆる地、水、火、風、及び空なり。聲の一塵從り空大を生じ、聲、觸の二塵より風大を生じ、色、聲、觸塵より火大を生じ、色、聲、觸、味より水大を生じ、色、聲、香、味、觸塵從り地大を生ず。地大は多塵從り生ずるが故に、最も能く一切の萬物を生成す。次に五大從り五根を生ず。火從り眼を生じ、空從り耳を生じ、地從り鼻を生じ、水從り舌を生じ、風從り身を生ず。復更に五作業根を生ず。一に手、二に脚、三に口聲、四に男根、五に女根なり。復一種の平等根有り。謂ゆる完心なり。諸大合成す。故に平等と云ふ。色法是の如し。心法の中に就いて、其三種有り。謂はく、染、麤、黑なり。染とは是れ貪、麤とは是れ瞋、黑とは是れ癡なり。是の如く次第に細從り麤を生じ、後に還麤從り以て細に至る。微塵の中に其瓶瓮諸器の性有り。故に微塵從り彼瓶等を出し、瓶

等壞する時還微塵と作るが如し。世性是の如し。此性は是れ常なり。從來之有り。是故に、之を說いて衆生の邊と爲す。此は是れ二の論なり。復人有り、言はく、「自然の性は是れ世間の邊なり。貧賤富貴、皆是れ自然にして往因に由らず」と。此は是れ三の論なり。復人有りて說く「微塵は是れ其世間の邊なり。微塵は是れ常なり。破壞すべからず。燒斫すべからず。微細なるを以ての故に。但罪福に由る。故に離合有り。罪福の業、塵を集むれば身を合成す。罪福の業盡くれば、塵還離散す。是故に微塵は是れ世間の邊なり」と。此は是れ四の論なり。復人有りて說かく「自在天王は是れ世間の邊なり。彼に由りて一切の人民を出生す。故に說いて邊と爲す」と。此は是れ前邊なり。此は是れ五の論なり。復人有りて說く「一切の衆生苦樂を受け、盡くれば自然に邊に至る。譬へば山頂より縷丸を轉じ、縷盡くれば自ら止るが如し。止る處は是れ邊なり」と。此は是れ後邊なり。此は是れ六の論なり。無邊と言ふは、人有りて宣說すらく「衆生の五陰は廣多無量なり。故に無邊と曰ふ」と。復宣說すること有り「衆生の五陰、前に原始無く、後に盡くる時無し。故に無邊と曰ふ」と。問うて曰はく「此說は佛法と同じ。何の過か之有る。」「其衆生の相を定執するを以ての故に。」亦有邊、亦無邊と言ふは、人有り宣說すらく「衆生の五陰、前後は有邊、十方は無邊なり」と。或は宣說する有り「十方は有邊、前後は無邊なり」と。非有邊非無邊と言ふは、人有りて、彼有邊無邊、皆悉く過有りと見る。故に非有邊非無邊と說く。復非有非無を宣說すと雖も、衆生の五陰を定執するを以ての所以に是れ過なり。次

【次に等】二に國土に就いて邊無邊を明す。

【次に等】三門に如去不如去に就いて明す。

に國土に就いて邊無邊を明すとは、有邊と言ふは、人有りて宣說すらく「微塵は是れ其世間の邊なり。微塵聚集して世間便ち成ず。微塵散ずるが故に、世間便ち壞す。是故に微塵は世間の邊なり」と。此は是れ一の論なり。復人有りて說かく「自在天王は是れ世界の主、天地一切の萬物を造作す。萬物滅する時、天還攝取す。是の如き天主は、是れ世間の邊なり」と。此は是れ二の論なり。復人有りて說かく「自然の性は是れ世間の邊なり。國土世界は自然にして有り」と。無邊と言ふは、人有りて宣說すらく「國土世間は、前後十方、皆悉く無邊」と。亦有邊亦無邊と言ふは、人有りて宣說すらく「國土世間の前後は有邊、十方は無邊なり。十方は有邊、前後は無邊」と。或は宣說する有り「上下は有邊、八方は無邊」と。或は宣說する有り「八方は有邊、上下は無邊」と。非有邊非無邊と言ふは、人有りて、彼有邊無邊の二、倶に過有りと見る。便ち非有非無邊に著す。其定執を以ての所以に是れ過あり。上來、廣く邊無邊等の四見の差別を辨ず。此二門竟る。次に如去不如去等を辨ず。中に於て四有り。一には如去、二には不如去、三には亦如去亦不如去、四には非不如去なり。如去と言ふは、前世より來りて此間に生ずるが如し。去つて後世に向ふも、亦復是の如し。故に如去と云ふ。不如去とは、人有り、說いて言はく「前世從り來りて此間に生ずるが如き、死後斷滅して前の如くならざるを不如去と名く」と。亦如去不如去と言ふは、人有り、說いて言はく「身と神と合して、以て人と爲る。前より來るが如し。死後に神は去り、身は去るが如くならず」と。非如去非不如去と言ふは、人有りて、彼去と不如

【次に等】四門に身神一異の義を明す。

【三】染法聚第二十八段に十六神我の義を明す。【大品經】大智論第三十五。

去と斯れ皆過有りと見る。故に非去及び非不去と說く。唯不去及び非不去と說くと雖も、神を捨つること能はず。此三門竟る。次に身神一異の義を辨ず。中に於て二有り。一には身と神と一なり、二には身と神と異なり。言ふ所の一とは、人有り、說いて言はく「身は卽ち是れ神なり。所以は何ん。此身を分析して、更に別に神を求むるに得べからざるが故に。又苦樂を受くるは、皆是れ其身なり。是故に、身は卽ち神なりと知ることを得」と。言ふ所の異とは、人有り、說いて言はく「身と神とは異なり。身相は麤現なり。神は卽ち微細なり。五情得ざる散心の凡夫は、見ることを得る能はず。淸淨禪定を攝するの人は、乃ち能く之を見る。故に知んぬ是れ異なり」と。若し異ならずといはば、身死する時、神も卽ち隨つて滅す。其異なるを以ての故に、身は滅すれども神は在り。十四難の義、之を略して爾云ふ。

十六神我の義

(三)十六神我は『大品經』に出づ。神は、謂はく神主、我は、謂はく、我人なり。神我不同なり。略して十六を說く。名字是れ何ん。一には名けて我と爲し、二には衆生と名け、三には壽者と名け、四には命者と名け、五には生者と名け、六には養育と名け、七には衆數と名け、八には名けて人と爲し、九には作者と名け、十には使作者、十一には起者、十二には使起者、十三には受者、十四には使受者、十五には知者、十六には見者なり。此等は皆

【論】智度論第三十五。

是れ我の別名なり。初に我と言ふは、論に自ら釋して言はく、五陰の中に於て、我我所を起す。故に名けて我と爲す。何者か是れ我、何者か我所なる。『是義不定なり。若し五陰に異して、別に我有りと計せば、五陰を名けて以て我所と爲す。若し五陰を取つて以て我人と爲さば、五陰の中に於て、隨つて何の陰を取つても、之を以て我と爲すを、即ち名けて我と爲し、餘陰を所と爲す。衆生と言ふは、我人有るは五陰和合に依つて生ずと計す。故に衆生と名く。問うて曰はく、『佛法も亦五陰集りて衆生を成ずと說く。彼と何の異なある。』釋して言はく、『佛法は生を說くは假名にして、其體實無し。彼は體有りと說く。是故に不同なり。』言ふ所の壽者とは、我人有つて、命根成就し、住すること分限有りと計す。故に壽者と名く。言ふ所の命者とは、即ち向に我衆生と說くが如し。壽等の命根成就す。故に命者と名く。言ふ所の生者とは、我人有りて能く衆事を起すこと、父母の子を生ずるが如しと計す。故に生者と名く。養育と言ふは、我人有りて、衣食を假藉して增長することを得と計す。故に養育と名く。衆數と言ふは、彼我人に從つて、陰界等の衆法の數有り。故に衆數と名く。又我人を取りて、陰界等の諸法の數と爲す。諸陰を說いて以て我所と爲すが如し。言ふ所の人とは、諸有の神主能く人法を行ず。故に名けて人と爲す。言ふ所の作者とは、我人有りて、手足等を用ひて能く衆事を作すと計す。故に作者と名く。使作者と言ふは、我人有りて、能く他を使役すると計するを、使作者と名く。言ふ所の起者とは、我人有りて能く罪福を起すと計す。故に起者と名く。使起と言ふは、我人有りて能く他を

【三四】染法聚第二十九段に六十二見を明す、先づ釋名

【彼經に等】相狀を明す中、一に本劫見の十八を明す。先づ常論の四を說く。

使役し、罪福の業を起すと計するを、使起者と名く。言ふ所の受者とは、我人有りて、後身に報を受くと計す。故に受者と名く。使受者と言ふは、我人有りて、能く他人をして苦樂の果を受けしむと計するを、使受者と名く。言ふ所の見者とは、我人有りて、眼を用て色を見ると計す。故に見者と名く。言ふ所の知者とは、我人有りて、餘の五情を用て餘の五塵を知ると計す。故に知者と名く。問うて曰はく、『神我は局りて唯十六なるや。更に有りと爲すや。』論に自ら釋して言はく、『略して十六を說く。廣すれば無量なり。』と。十六神我、之を略して爾云ふ。

六十二見の義

（三四）六十二見は『長阿含梵動經』の中に出づ。彼經に說く所の本劫、本見に、十八見有り。未劫、未見に四十四有り。是故に通合して六十二有り。本劫と言ふは、過去の時なり。本見と言ふは、彼過去に於て常見を起すなり。未劫と言ふは、未來の時なり。未見と言ふは、未來世に於て斷見を起す。相狀如何。彼經に說くが如し、本、劫見の中、常論に四有り。常無常論に四有り。邊無邊論に四有り。種種論に四有り。無因而有論に二有り。是故に通合して十八見有り。常論の四とは、人有り、入定して過去二十劫の事を憶識して、便ち是念を作さく、『我入定して、意もて過去世二十劫に中の成劫、壞劫を見るに、其中の衆生、不增不滅にして常に聚りて散ぜず。故に知んぬ、是れ常なり。』唯此を實と爲す。餘は皆妄

【言ふ所の等】次に亦常無常論を説く。

語なり」と。是を初の見と爲す。或は復人有りて、三昧定に、意もて過去四十劫の事を憶識して、便ち是言を爲さく、「我入定して、意もて過去四十劫の中の成劫、壞劫を見るに、其中の衆生、常に聚りて散ぜず。故に知んぬ是れ常なり。唯此を實と爲す。餘は皆妄語なり」と。是を二の見と爲す。或は復人有りて、三昧定に、意もて過去八十劫の事を憶識して、便ち是念を作さく、「我定意を以て過去世八十劫の中の成劫、壞劫を見るに、其中の衆生、常に聚りて散ぜず、故に知んぬ、是れ常なり。唯此を實と爲す。餘は皆妄語なり」と。是を三の見と爲す。或は復人有り、捷疾智を以て善能く觀察して是説を作す、言はく「我及び世間、皆悉く是れ常なり」と。是を四見と爲す。問うて曰はく「此四、常を攝し盡すや不や。」答へて曰はく『盡さず。今此に且く二十劫、四十、八十を見るを言ふ。實を以て之を論ずれば、或は衆生有りて、一切乃至八萬を見る。今は略して論ぜず。』此四門言ふ覧る。所の亦常亦無常とは、經の中に説くが如し、「諸の沙門、婆羅門等有りて、是の如きの論を起す。我及び世間、半は常、半は無常なり。四見の中に入り、齊く見て過ぎず」と。何者か四見なる。此の如き世界の劫初に成ずる時、大梵已還は空にして衆生無し。彼光音天に一天子有り。光音天の中の福命、將に盡きんとし、初禪の大梵天の中に生ず。彼天に生れ已りて、便ち是處に於て愛著の心を生じ、是念を作す。言はく、「願くは餘の衆生、我と共に此に生ぜん」と。時に光音天に諸の天子有り。福命將に盡きんとし、此天の中に生ず。彼先に生ずる者、便ち是念を作さく、「我此處に於て最尊最貴なり。衆生の父爲り。自

【邊無邊の等】次に邊無邊の中の四種の見を明す。

然にして有り、我を造する者無し。我福は是れ常なり。餘も皆我作なり。我化生する所は、皆是れ無常なり」と。後に生ずる諸の梵も、亦此心を生ず。是諸の梵の中に命終する者有つて、人間に來生し、後定意を修し往事を憶識して、便ち是言を作さく「彼大梵王は自然にして有り、造作する者無し。一向に是れ常なり。後に諸梵を生じて他の爲に造作するは、一向に無常なり。是故に世間は亦常無常なり。此れ實なり。餘は虛なり」と。是を初の見と爲す。第二見とは、向の如く後に生ずる諸梵の中、或は戲笑、放逸、懈怠有り。戲笑を以ての故に身體疲極して、便ち定意を失す。意を失するを以ての故に、命終して下生し、後定意を修し往事を憶識して、便ち是言を作さく「彼不戲の者は彼天に住して、永く遷變無し。彼は是れ其常なり。我等は戲するが故に、此無常を致す。是故に定んで知る、我及び世間は、亦常無常なり」と。是を二の見と爲す。第三見とは、向の如く後に生ずる諸梵衆の中に、或は著相の者は欲染の心を生じて、便ち定意を失す。意を失するを以ての故に、命終して下生し、後定意を修し往事を憶識して、便ち是念を作さく「彼梵衆の中、相著せざる者は、常に彼天に住す。我等は相著して此無常を致し、生死に流轉す。是故に定んで知る、我及び世間は、亦常無常なり」と。是を三の見と爲す。第四見とは、或は衆生有りて、捷疾智を以て分別思量して、我及び世間は亦常無常なり。此は實、餘は虛なりと。是を四の見と爲す。此二門竟る。邊無邊の中の四種の見とは、一には有邊見、二には無邊見、三には亦有邊亦無邊見、四には非有邊非無邊見なり。有邊と言ふは、人有り、定に入りて

【種種論の等】次に種種論の四種の見を明す。

世間を觀察し、己が所見に齊しうて有邊の想を生じ、便ち言はく、「世間は一向に有邊なり」と。是を初見と爲す。無邊と言ふは、人有り、定に入りて世間を觀察し、無邊の想を生じ、便ち是言を作さく、「世間は無邊なり」と。是を二の見と爲す。亦有邊亦無邊と言ふは、人有り、定に入りて、世間の上下は有邊、四方は無邊なり。四方は有邊、上下は無邊なりと觀察して、便ち言はく、「世間は亦有邊亦無邊なり」と。是を三の見と爲す。非有邊非無邊と言ふは、或は復人有り、捷疾智を以て世間を觀察して、非有邊及び無邊と爲し、便ち言はく、「世間は邊無邊に非ず」と。此義は前の十四難の中に具に廣く分別するが如し。是を四の見と爲す。此三門竟る。種種論の中の四種の見とは、人有りて念言すらく、「我善惡の業報の中に於て不知不見なり。若し聰明多智の人有りて、來りて我に問はば、我答ふる能はず。彼に羞愧す。彼に羞づるを以ての故に、其善惡の業果の中に於て、我意に隨つて解す。彼若し問はば、當に是の如く答ふべし。此事は是の如し。此事は是れ實。此事は不實。此事は是れ異。此事は不異。此事は非異非不異等なり」と。是を初の論と爲す。或は復人有り、是の如きの見を作さく、「我實に知らず。他世有りと爲さんや。他世無しと爲さんや。若し沙門、婆羅門等有りて、實に天眼及び他心智有らば、能く遠事を知り、彼來りて我に問はん。我若し之を答ふれば、則ち妄語と爲さん。妄語を恐る。故に即ち彼人の所知の者を用て、以て歸依と爲す。彼設し問はば、彼所見を取りて、當に是の如く答ふべし。此事は是の如し。此は是の如くならず。是事は是れ異、此事は不異、此事は非異非不異等なり」と。

【無因見の等】次に無因見の中の二種の見を明す。

【末劫末見等】二に末劫末見の四十四を明す。先づ有想論の十六見。

是を二の論と爲す。或は復人有りて是の如きの論を作さく、「我實に知らず、何者か是れ善、何者か不善なりと。我若し此法は是れ善、此法は是れ不善なりと宣說せば、則ち愛する所有り。若し愛する所有れば、則ち恚る所有り。若し愛恚有れば、則ち受生有らん。受生を畏る。故に此非善非不善の義を用て、以て所歸と爲す。彼若し問はば、此非善非惡を用て之に答へん。此事は是の如し。此事は是れ實、此事は是れ異、此事は不異なり」と。是を三の論と爲す。「此事異とは、善惡の異なり。此不異とは、彼虛空と相似して異ならず。或は復人有り、愚癡闇鈍にして、一切の法の中に自ら知る所無し。他に問ふ者有らば、他の言に隨つて答ふること、他の世人の所立の諸見を取りて、用て以て之に答ふ。此事是の如し。此は是の如くならず。此は異、不異なり」と。是を四の論と爲す。（此四門竟る。）無因見の中の二種の見とは、人有り、先に無想天の中に生じ、後人間に生じて、禪定を修習し、往事を憶識して、便ち無因にして世間有りと言ふ。是を初の見と爲す。或は復人有り、捷疾智を以て分別觀察して說いて言はく、「世間は無因にして有り」と。是を二の見と爲す。上來の十八は、本劫の中に於て常見を起す。（此本見竟る。）末劫末見の四十四とは、有想の論に十六見有り、無想の論の中に其八見有り、非有想非無想の論に亦八見有り、斷滅論の中に其七見有り、現在泥洹に其五見有り。是故に、通合して四十四有り。有想論の中の十六種とは、想を以て色に對して其四句有り、邊無邊に對して復四句有り、苦に對し樂に對して亦四句有り、多少相對に復四句有り。色に對する四とは、我此に終りて後に有色有想なり。是を

【無想の等】無想の八を明す。次に

【非有想等】次に非有想非無想の中の八を明す。

初の見と爲す。無色有想、是を二の見と爲す。亦有色亦無色有想、是を三の見と爲す。非有色非無色有想、是を四の見と爲す。邊中の四とは、我此に終りて後に、有邊有想なり。是を初の見と爲す。無邊有想、是を二の見と爲す。亦有邊、亦無邊有想、是を三の見と爲す。非有邊非無邊有想、是を四の見と爲す。苦樂等の中の四種の見とは、我此に終りて後に、有苦有想なり。是を初の見と爲す。有樂有想、是を二の見と爲す。有苦有樂有想、是を三の見と爲す。非有苦非有樂有想、是を四の見と爲す。多少の四とは、我此に終つて後に、共一の想有り。是を初の見と爲す。若干の想有り。是を二の見と爲す。衆多にして一に非ず。故に若干と名く。共小想有り。是を三の見と爲す。境を緣ずることと狹きが故に、之を稱して小と爲す。無量想有り。是を四の見と爲す。境を緣ずること寬なるが故に、說いて無量と爲す。此一門竟る。無想の八とは、色に對して四有り。邊無邊に對して復四種有り。故に八有り。色に對する四とは、我此に終りて後、有色無想なり。是を初の見と爲す。無色無想、是を二の見と爲す。亦有色無色無想、是を三の見と爲す。非有色非無色無想、是を四の見と爲す。邊に對する四とは、我此に終りて後に、有邊無想なり。是を初の見と爲す。無邊無想、是を二の見と爲す。亦有邊亦無邊無想、是を三の見と爲す。非有邊非無邊無想、是を四の見と爲す。無想を以ての故に、說いて苦樂等の四と爲すべからず。苦樂等の四は、心法に在るが故に又無想なり。故に說いて一と若干と、小と無量と爲すべからず。此二門竟る。非有想非無想の中の八とは、色に對して四有り、邊無邊に對して復四種有り。

【斷滅の等】次に斷滅の七を說く。

故に八有り。色中の四とは、我此に終りて後、有色非有想非無想なり。是を初の見と爲す。無色非有想非無想、是を二の見と爲す。亦有色亦無色非有想非無想、是を三の見と爲す。非有色非無色非有想非無想、是を四の見と爲す。邊中の四とは、我此に終りて後、有邊非有想非無想なり。是を初の見と爲す。無邊非有想非無想、是を二の見と爲す。亦有邊亦無邊非有想非無想、是を三の見と爲す。非有邊非有想非無想、是を四の見と爲す。其非有想非無想を以ての故に、說いて苦樂等の四と爲すべからず。又其非有非無想を以ての故に、說いて一と若干と小と無量と爲すべからず。問うて曰はく「何が故に亦有亦無想を說かざる。」『時實に應に有るべし。若し更に之を說かば、前の二に異ならず。所以に說かず。若し亦有を說かば、初の門に異ならず。若し亦無を說かば、第二に異ならず。是故に論ぜず。』竟る。此三門斷滅の七とは、人有りて說いて言はく、我今此身の四大、六入は、父母の所生、乳餔の所養、衣食の所成、摩捫擁護す。然るに是は無常にして、終に斷滅に歸す。是を初の見と爲す。復人有りて言はく「我今此身は、滅盡を得ず。欲界天に至つて斷滅し、餘無し」と。是を二の見と爲す。復人有りて言はく「欲界天の身は、滅盡を得ず。色界地の身は、諸根具足す。彼報盡竟りて、斷滅して餘無し」と。是を三の見と爲す。復人有りて言はく「色界地の中には滅盡を得ず。空處の報盡きて、斷滅して餘無し」と。是を四の見と爲す。復人有りて言はく「空處地の中には滅盡を得ず。識處の報盡きて、斷滅して餘無し」と。是を五の見と爲す。復人有りて言はく「識處地の中には斷滅を得ず。無處有盡きて、（

【現在泥洹等】次に現在泥洹の五種を明す。

斷滅して餘無し」と。是を六の見と爲す。復人有りて言はく「無所有處に滅盡を得ず。非想の報盡きて、斷滅して餘無し」と。是れを七の見と爲す。此四門竟る。現在泥洹の五種見とは、人有り、說いて言はく「我今の此身、即ち是れ泥洹なり。所以は何ん。我現在の五欲に於いて、自ら恣に快樂を受く。是故に此身即ち是れ泥洹なり。是を過ぎて更に無し」と。是を初の見と爲す。復人有りて言はく「此現在の身は、是れ泥洹に非ず。更に泥洹有り。微妙第一にして、我獨り之を知る。餘人は達せず。我の如きは欲界の不善を斷滅し、覺有り、觀有り、喜樂を離生して初禪行に入る。是を齊うして、名けて現在の泥洹と爲す。是を過ぎて更に無し」と。是を二の見と爲す。復人有りて言はく「更に泥洹有り。微妙第一にして、我獨り之を知る。餘人は達せず。我の如きは、現在覺觀を滅離して、內淨一心にして覺無く、觀無く、定んで喜樂を生じて二禪行に入る。是を齊うして、名けて現在の泥洹と爲す。是を過ぎて更に無し」と。是を三の見と爲す。復人有りて言はく「更に泥洹有り。微妙第一なり。唯我獨り知れり。餘人は達せず。我の如きは、喜行を除いて憶念を捨し、安慧受樂して三禪行に入る。是を齊うして、名けて現在の泥洹と爲す。是を過ぎて更に無し」と。是を四の見と爲す。復人有りて言はく「更に泥洹有り。第一微妙なり。唯我獨知る。餘人は達せず。我の如きは、現在に苦を斷じ樂を斷じ、先づ憂喜を滅し、不苦不樂、捨念清淨にして第四禪に入る。是を齊うして、名けて現在の泥洹と爲す。是を過ぎて更に無し」と。是を五の見と爲す。問うて曰はく「何が故に四空を說いて以て泥洹と爲さざ

【二五】染法聚第三十段に八萬四千煩惱の義を明す。

る。』『理亦應に說くべし。略して之を論ぜす。』六十二見、辨ずること麤爾り。

八萬四千煩惱の義

(二五)八萬四千の諸煩惱とは、經に但數有りて、其名を列せず。何に由りて識るべき。當に應に彼八萬四千の諸度の法門を翻じて、卽ち八萬四千煩惱と爲すべし。其れ猶六弊の六度に翻對して、卽ち六弊と爲すがごとし。此も亦是の如し。所對の八萬四千の度門は、後に當に別して論ずべし。煩惱門竟る。

大乘義章卷第六（だいじようぎしやうまきのだいろく）

昭和六年一月五日印刷
昭和六年一月十日發行

昭和新纂國譯大藏經宗典部第十九卷

不許複製

編纂者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市神田區一ッ橋通二番地
株式會社東方書院
代表者　三井晶史

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同　興舍
代表者　井波康三郎

發行所　東京市神田區一ッ橋通二
株式會社東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一一

印刷所　西村由太郎　・　製本所　眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3357